HITACHI
Inspire the Next

JP1 Version 8

JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)

手引・操作書

3020-3-L37-A0

マニュアルの購入方法

このマニュアル，および関連するマニュアルをご購入の際は，巻末の「ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内」をご参照ください。

■対象製品

P-2642-1184 JP1/NETM/DM Manager 08-52 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP Professional，Windows 2000）
P-2642-1384 JP1/NETM/DM Client 08-52 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，Windows 98）
P-2642-2384 JP1/NETM/DM Client - Base 08-52 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，Windows 98）
P-F2642-23841 JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature 08-52 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，Windows 98）
P-F2642-23842 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature 08-50 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，Windows 98）
P-F2642-23843 JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature 08-51 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，Windows 98）
P-2642-3384 JP1/NETM/DM Client 08-50 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP）
P-2A42-1184 JP1/NETM/DM Manager 08-52 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-2C42-1384 JP1/NETM/DM Client 08-52 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-2C42-2384 JP1/NETM/DM Client - Base 08-52 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-F2C42-23841 JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature 08-52 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-F2C42-23842 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature 08-50 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-F2C42-23843 JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature 08-51 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-2C42-3384 JP1/NETM/DM Client 08-50 （適用 OS：Windows Server 2008，Windows Vista）
P-1B42-2J71 JP1/NETM/DM NNM 連携機能 07-00 （適用 OS：HP-UX）
P-2642-1C74 JP1/NETM/DM Internet Gateway 07-00 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP Professional，Windows 2000，Windows NT Server 4.0）
P-2642-1D74 JP1/NETM/DM HTTP Gateway 07-00 （適用 OS：Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，Windows 98）
P-2842-1384 JP1/NETM/DM Client 08-00 （適用 OS：Windows Server 2003 (IPF)）
P-9T42-1371 JP1/NETM/DM Client 07-00 （適用 OS：Windows CE .NET 4.1）

■輸出時の注意

本製品を輸出される場合には，外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上，必要な手続きをお取りください。
なお，ご不明な場合は，弊社担当営業にお問い合わせください。

■商標類

Acrobat は，Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社) の商標です。
Active Directory は，米国 Microsoft Corporation の，米国およびその他の国における登録商標または商標です。
Adobe は，Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社) の商標です。

AIX は，米国における米国 International Business Machines Corp. の登録商標です。
HP-UX は，米国 Hewlett-Packard Company のオペレーティングシステムの名称です。
HP Tru64 UNIX は，ヒューレット・パッカード社の商標です。
InstallShield は，Macrovision Corporation の米国および / または他の国における登録商標または商標です。
Intel および Itanium は，アメリカ合衆国およびその他の国におけるインテルコーポレーションまたはその子会社の商標または登録商標です。
Internet Explorer は，米国 Microsoft Corporation の米国及びその他の国における登録商標または商標です。
Linux は，Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。
Microsoft は，米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。
Microsoft Internet Information Server は，米国 Microsoft Corp. の商品名称です。
Microsoft Internet Information Services は，米国 Microsoft Corp. の商品名称です。
Microsoft Office は，米国 Microsoft Corp. の商品名称です。
Microsoft SQL Server は，米国 Microsoft Corp. の商品名称です。
MS-DOS は，米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。
Net8 は，米国 Oracle Corporation の商標です。
NetInsight は，日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社の商標です。
ODBC は，米国 Microsoft Corp. が提唱するデータベースアクセス機構です。
OpenView は，ヒューレット・パッカード社の商標です。
Oracle は，米国 Oracle Corporation 及びその子会社，関連会社の登録商標です。
Oracle8 は，米国 Oracle Corporation の商標です。
Oracle8i は，米国 Oracle Corporation の商標です。
Oracle9i は，米国 Oracle Corporation の商標です。
Pentium は，Intel Corporation のアメリカ合衆国及びその他の国における登録商標です。
Solaris は，米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
Sun，Sun Microsystems，Java は，米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
UNIX は，X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。
VERITAS および VERITAS ロゴは，米国 Symantec Corporation の登録商標です。
Visual Test は，米国 Rational Software Corporation の商品名称です。
Windows は，米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。
Windows NT は，米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。
Windows Server は，米国 Microsoft Corporation の米国及びその他の国における登録商標です。
Windows Vista は，米国 Microsoft Corporation の米国及びその他の国における登録商標です。
秘文は，日立ソフトウェアエンジニアリング (株) の登録商標です。

■発行

2006 年 6 月 (第 1 版)　3020-3-L37
2008 年 9 月 (第 6 版)　3020-3-L37-A0

■著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, 2008, Hitachi, Ltd.

(C) 1998-2004 Trend Micro Incorporated. All rights reserved.

変更内容

変更内容（3020-3-L36-A0，3020-3-L37-A0，3020-3-L38-A0，3020-3-L39-A0） JP1/NETM/DM 08-52

追加・変更内容	変更個所
次に示すインベントリ情報を取得できるようにした。 • ハードディスクの電源を切る（AC） • ハードディスクの電源を切る（DC） • システムスタンバイ / スリープ（AC） • システムスタンバイ / スリープ（DC） • システム休止状態（AC） • システム休止状態（DC） また，省電力設定にしていないクライアントを対策する運用例と，クライアントをシャットダウンさせる運用例を追加した。	**導入**：1.2，1.2.2，2.2.1(1)，4.1，4.9，4.10，付録 C.22 **運用 1**：4.2.3(6) **運用 2**：4.25.14(2)，付録 C.4(3)
オフラインマシンに対して，媒体を利用して稼働監視機能を使えるようにした。	**導入**：1.2.2(3)，1.2.4，2.1.7，2.2.6，2.5.9，付録 D.1(2)，付録 F **構築**：8.1.5，付録 G **運用 1**：2，3，6.10，7，7.7，付録 A.1 ～ 付録 A.7，付録 F **運用 2**：1.2.3，付録 B.3(2)，付録 I
ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。	**導入**：2.2.2(1)
中継システムで管理するジョブ数が増えた場合でも，ジョブ処理のスループットの低下を回避できるように，中継システムのセットアップで管理ファイルのキャッシュ上限サイズを指定できるようにした。	**導入**：5.3.2(2) **構築**：5.2.4
64 ビットバージョン JP1/NETM/DM Client の名称を 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client に変更した。	**導入**：付録 E(6)，付録 E(9)，付録 F **構築**：付録 F(6)，付録 F(9)，付録 G **運用 1**：付録 E(6)，付録 E(9)，付録 F **運用 2**：付録 B，付録 H(6)，付録 H(9)，付録 I AIT：1.3
JP1/NETM/DM Client のインストールに失敗した場合，自動的に再インストールするようにした。また，再インストールに失敗した場合に実行する InstallShield 環境削除ツールの格納場所を掲載した。	**導入**：付録 F **構築**：3.1.17，3.3，付録 G **運用 1**：付録 F **運用 2**：付録 I
クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールおよび再インストールする場合の手順を追加した。	**構築**：1.2.2，付録 C.5
中継システムで ID ジョブがデフォルトで再実行できるように，中継システムのセットアップの「ID ジョブのクライアントの実行結果を記録する」チェックボックスの状態に関係なく，ジョブの実行結果を記録するようにした。	**構築**：5.2.4 **運用 1**：8.5.2(1)
JP1/NETM/DM Manager のデータベースに Embedded RDB を使用する場合，作業表領域のサイズを自動で増やせるようにした。	**構築**：7.4.1，7.4.3，付録 C.2 **運用 2**：5.3.2(8)

追加・変更内容	変更個所
Embedded RDB を使用して「Asset Information Manager Limited」のデータベースを作成する際，データベースのサイズを自動拡張できるようにした。	**構築**：10.3.1(1)，10.3.7(3)
jamdbexport.bat を実行することで，「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップを CSV 形式で取得できるようにした。	**構築**：10.3.3，10.3.3(2)
Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルを取得する，jamemb_backup.bat の説明を追加した。	**構築**：10.3.5，10.3.5(2)
Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースの再編成を実行する，jamemb_reorganization.bat の説明を追加した。	**構築**：10.3.7，10.3.7(2)
リモートインストールマネージャでソフトウェア情報の表示名が短縮されるホットフィックスに，次の種類を追加した。 • Windows XP Application Compatibility Update • Internet Explorer 7 ホットフィックス • Internet Explorer 7 セキュリティ更新 • Step by Step Interactive Training	**運用 1**：3.2.6(1)
検索パターンを使用して操作ログを全件出力する jamTakeOperationLog.bat について，オプションで，「部署」，「ユーザ名」および「設置場所」の情報を CSV 形式ファイルに出力できるようにした。	**運用 1**：6.6.2(6)
次に示すイベント ID のイベントログメッセージを追加した。 • 8060 • 8061 • 8064 • 8065 • 8066 • 8067 • 8068 • 8069	**運用 2**：5.10.2(3)

（凡例）

導入：マニュアル「JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)」
構築：マニュアル「JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)」
運用 1：マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)」
運用 2：マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)」
AIT：マニュアル「JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)」

変更内容　JP1/NETM/DM 08-51

追加・変更内容	変更個所
JP1/NETM/DM Manager の一部のコンポーネントを，Windows Vista で利用できるようにした。	**導入**：1.3.6 **構築**：1.1.1，1.1.2(1)

追加・変更内容	変更個所
次に示すインベントリ情報を取得できるようにした。 • モニタの電源を切る（AC） • モニタの電源を切る（DC） • プロセッサ調整（AC） • プロセッサ調整（DC）	**導入**：2.2.1(1)，付録 C.22 **運用 1**：4.2.3(6) **運用 2**：4.25.14(2)，付録 C.4(3)
ディレクトリ情報から取得する情報の詳細および取得する際の引き当て方法を明記した。	**構築**：10.7.6
「Asset Information Manager Limited」のカレンダーで，前月および翌月の月をボタンから表示できるようにした。	**運用 1**：10.1.2
コマンドのパラメタファイルで使用する JOB_DESTINATION_ID タグで，ジョブの実行対象となる ID 管理中継を指定できるようにした。	**運用 2**：4.25.10(2)，4.25.10(3)

（凡例）

導入：マニュアル「JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)」

構築：マニュアル「JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)」

運用 1：マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)」

運用 2：マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)」

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは，プログラムプロダクト JP1/NETM/DM のシステム構築方法について説明したものです。
このマニュアルでは，インストール・セットアップの手順，リレーショナルデータベースの構築方法，システム構成の管理方法などについて説明しています。

なお，このマニュアルを含め，Windows 版 JP1/NETM/DM のマニュアルには次の 7 冊があります。各マニュアルの目的を次に示しますので，必要に応じてお読みください。

JP1 Version 8 JP1/NETM/DM **導入・設計ガイド** (Windows(R) **用**)
: 最初にお読みいただくマニュアルです。
JP1/NETM/DM の概要や機能，代表的な構築例および使用例を紹介しています。また，JP1/NETM/DM を導入するための手順や，あらかじめ検討しておく必要があることについても説明しています。

JP1 Version 8 JP1/NETM/DM **構築ガイド** (Windows(R) **用**)
: JP1/NETM/DM のインストール・セットアップの手順，データベースの構築，およびシステム構成の管理方法について説明しています。

JP1 Version 8 JP1/NETM/DM **運用ガイド** 1(Windows(R) **用**)
: ソフトウェアの配布，インベントリ情報の取得および管理，ファイルの収集など，配布管理システムの各機能の詳細と操作方法を説明しています。また，クライアントの操作方法についても説明しています。

JP1 Version 8 JP1/NETM/DM **運用ガイド** 2(Windows(R) **用**)
: 他の製品と JP1/NETM/DM との連携，およびトラブルが発生したときの対処方法について説明しています。また，Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client，64 ビット版 JP1/NETM/DM Client，および Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client の機能についても説明しています。

JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool **ガイド** (Windows(R) **用**)
: 他社ソフトウェアをパッケージングするときに使用する AIT ファイルやレコーダファイルの作成方法を説明しています。

JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Administrator Kit
: JP1/NETM/DM Client を自動的にインストールするために使用する JP1/NETM/DM Administrator Kit について説明しています。

JP1 Version 8 JP1/NETM/Remote Control
: JP1/NETM/Remote Control および JP1/NETM/DM のリモートコントロール機能について説明しています。

■対象読者

このマニュアルは，次の方にお読みいただくことを前提に説明しています。

- JP1/NETM/DM を利用してソフトウェアの配布や資産情報を収集・管理する管理者の方
- JP1/NETM/DM システムを構築するシステム管理者の方
- Microsoft Windows の操作に関する基本的な知識をお持ちの方
- ネットワークに関する基本的な知識をお持ちの方
- リレーショナルデータベースに関する基本的な知識をお持ちの方
- Microsoft SQL Server または Oracle に関する基本的な知識をお持ちの方（Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合）

■マニュアルの構成

このマニュアルは，次に示す章と付録から構成されています。

第 1 章　JP1/NETM/DM のインストールの概要

JP1/NETM/DM の各プログラム，および各コンポーネントのインストールやアンインストールの概要について説明しています。

第 2 章　JP1/NETM/DM Manager をインストールする

JP1/NETM/DM Manager をマネージャまたは中継マネージャとして使用する場合のインストール方法について説明しています。また，各コンポーネントのインストール方法についても説明しています。

第 3 章　JP1/NETM/DM Client をインストールする

JP1/NETM/DM Client を中継システムまたはクライアントとして使用する場合のインストール方法について説明しています。また，各コンポーネントのインストール方法についても説明しています。

第 4 章　JP1/NETM/DM Manager をセットアップする

JP1/NETM/DM Manager のセットアップ方法について説明しています。

第 5 章　JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする

JP1/NETM/DM Client を中継システムとして使用する場合のセットアップ方法について説明しています。

第 6 章　JP1/NETM/DM Client（クライアント）をセットアップする

JP1/NETM/DM Client をクライアントとして使用する場合のセットアップ方法について説明しています。

第 7 章　リレーショナルデータベースを設定する

リレーショナルデータベースを利用した JP1/NETM/DM システムの，システム構成や注意事項について説明しています。また，リレーショナルデータベースの作成方法やメンテナンス方法についても説明しています。

第 8 章　システム構成情報とあて先のグループを作成する

システム構成情報の作成方法と，ジョブの配布先をグルーピングして管理する方法について説明しています。

第 9 章　システム構成情報とあて先のグループをメンテナンスする

システム構成情報と，あて先グループのメンテナンス方法について説明しています。
また，JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する方法についても説明しています。

第 10 章　Asset Information Manager Limited を使用するための設定

「Asset Information Manager Limited」でインベントリ情報および操作ログを集計するために必要な設定方法について説明しています。

付録 A　JP1/NETM/DM のバージョンアップと移行方法

JP1/NETM/DM をバージョンアップする方法や，PC リプレース時の移行方法などについて説明しています。

付録 B　ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用

ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用方法について説明しています。また，ターミナルサービス環境のローカルコンソールで JP1/NETM/DM Client を運用する場合の，機能の制限およびソフトウェアのリモートインストール方法についても説明しています。

付録 C　JP1/NETM/DM のクラスタシステムの構築

JP1/NETM/DM のクラスタシステムを構築する場合の環境構築手順，注意事項などについて説明しています。

付録 D　HP-UX JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストールとセットアップ

HP-UX JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストールとセットアップ方法について説明しています。

付録 E　インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入

インターネットを介したネットワーク環境への JP1/NETM/DM の導入を容易にするための機能，「インターネットオプション」について説明しています。インターネットオプションは，JP1/NETM/DM Internet Gateway と JP1/NETM/DM HTTP Gateway で構成される機能の名称です。

付録 F　各バージョンの変更内容

JP1/NETM/DM マニュアルの変更内容について説明しています。

付録 G　用語解説

JP1/NETM/DM で使用する用語の意味について説明しています。

■関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)（3020-3-L36）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)（3020-3-L38）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)（3020-3-L39）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)（3020-3-L40）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Administrator Kit（3020-3-L41）

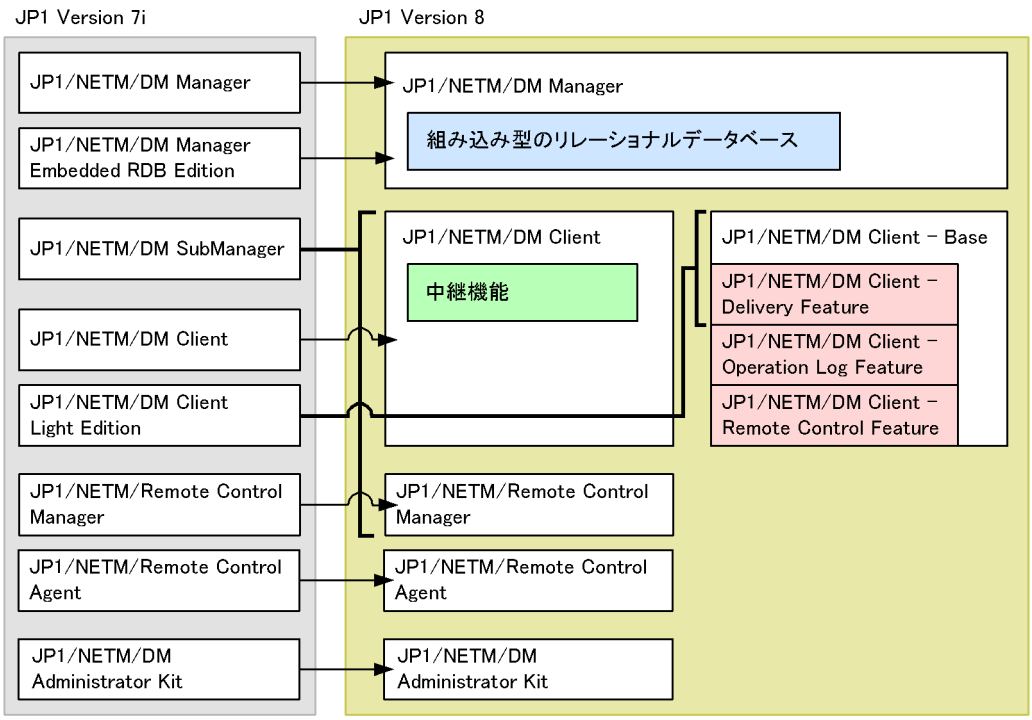
- JP1 Version 8 JP1/NETM/Remote Control（3020-3-L45）
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager（3000-3-841）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM SubManager(UNIX(R) 用)（3020-3-L42）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Client(UNIX(R) 用)（3020-3-L43）
- JP1 Version 5 統合ネットワーク管理システム / ソフトウェア配布管理支援 / ワークステーション JP1/NETM/DM/W（3000-3-817）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/Asset Information Manager 導入ガイド（3020-3-L33）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/Asset Information Manager 設計・構築ガイド（3020-3-L34）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/Asset Information Manager 運用ガイド（3020-3-L35）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/Client Security Control（3020-3-L31）
- JP1 Version 8 JP1/NETM/Audit（3020-3-L50）
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 解説（3020-3-K21）
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 設計・運用ガイド（3020-3-K22）
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 操作ガイド（3020-3-K24）
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 コマンドリファレンス（3020-3-K25）
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 連携ガイド（3020-3-K27）
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 メッセージ（3020-3-K28）
- JP1 Version 8 JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド（3020-3-K01）
- JP1 Version 8 JP1/Base 運用ガイド（3020-3-K06）
- JP1 Version 8 JP1/Base メッセージ（3020-3-K07）
- JP1 Version 8 JP1/Base 機能拡張（3020-3-K08）
- JP1 Version 8 JP1/Cm2/Network Node Manager ネットワーク管理ガイド（3020-3-L01）
- JP1 Version 8 JP1/NetInsight II -PortDiscovery Advance（3020-3-L47）
- JP1 Version 8 JP1/ 秘文セットアップガイド（管理者用）（3020-3-L62）
- HiRDB Version 8 メッセージ（3020-6-358）

■ JP1 Version 8 での製品体系の変更について

- JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition を廃止し，組み込み型のリレーショナルデータベースを JP1/NETM/DM Manager に統合しました。
- JP1/NETM/DM SubManager を廃止し，中継機能を JP1/NETM/DM Client に統合しました。また，リモートコントロールする側の機能は，JP1/NETM/Remote Control Manager で提供します。
- 中継システムまたはクライアントとして使用できる JP1/NETM/DM Client - Base と，三つのオプション製品を追加しました。JP1/NETM/DM Client - Base は，三つのオプション製品をインストールすることで，JP1/NETM/DM Client と同等の機能を使用できます。オプション製品は，使用したい機能によって選択できます。
- JP1/NETM/DM Client Light Edition を廃止しました。JP1/NETM/DM Client Light Edition の機能は，JP1/NETM/DM Client - Base および JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature で

提供します。

JP1 Version 8 での製品体系の変更について，次の図に示します。



■ JP1 Version 8 でのマニュアル体系の変更について

JP1 Version 8 では，JP1/NETM/DM シリーズのマニュアル体系を変更しました。体系変更後の各マニュアルの記載内容を次の表に示しますので，目的に応じてご利用ください。

マニュアル名		記載内容の概略
JP1 Version 7i	JP1 Version 8	
JP1/NETM/DM システム構築 (Windows(R) 用)	JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)	• 製品概要 • 機能概要 • 代表的な構築例と運用例 • 導入から運用開始までの作業の流れ • システム構成の設計 • リレーショナルデータベースの構造 • 機能差異
	JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)	• インストールの手順 • セットアップの内容 • リレーショナルデータベースの設定 • システム構成の管理

マニュアル名		記載内容の概略
JP1 Version 7i	JP1 Version 8	
JP1/NETM/DM システム運用 1(Windows(R) 用)	JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)	• 配布管理システムの操作 • クライアントの操作 • メニュー一覧
JP1/NETM/DM システム運用 2(Windows(R) 用)	JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)	• 他プログラムとの連携 • コマンドの文法 • トラブルシューティング
JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)	JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)	Automatic Installation Tool の使用方法
JP1/NETM/DM Administrator Kit	JP1/NETM/DM Administrator Kit	JP1/NETM/DM Administrator Kit の使用方法
JP1/NETM/Remote Control	JP1/NETM/Remote Control	リモートコントロール機能の使用方法

■このマニュアルでの表記

このマニュアルでは，JP1/NETM/DM 関連製品の製品名称を次のように表記します。

表記	製品名称	
64 ビット版 JP1/NETM/DM Client	Windows Server 2003 (IPF) 対応 JP1/NETM/DM Client	
	Windows Server 2003 (IPF) 対応 JP1/NETM/DM Client Light Edition	
64 ビット版 JP1/NETM/Remote Control Agent	Windows Server 2003 (IPF) 対応 JP1/NETM/Remote Control Agent	
HTTP Gateway	JP1/NETM/DM HTTP Gateway	
Internet Gateway	JP1/NETM/DM Internet Gateway	
JP1/NETM/Client Security Control または JP1/NETM/CSC	JP1/NETM/Client Security Control - Agent	
	JP1/NETM/Client Security Control - Manager	
JP1/NETM/DM	JP1/NETM/DM Client	JP1/NETM/DM Client
		JP1/NETM/DM Client - Base
	JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature	
	JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature	
	JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature	
	JP1/NETM/DM Manager	
JP1/NETM/Remote Control	JP1/NETM/Remote Control Agent	
	JP1/NETM/Remote Control Manager	

表記	製品名称
JP1/Remote Control	JP1/Remote Control Agent
	JP1/Remote Control Manager

そのほかの製品名称，および名称について次のように表記します。

表記		製品名称および名称
AMT		Intel(R) Active Management Technology
EUR		EUR Print Service
		EUR Professional Edition
		EUR Viewer
hp OpenView nnm または HP OpenView nnm		hp OpenView network node manager
		hp OpenView network node manager Starter Edition
InstallShield		InstallShield(R)
Itanium 2		Intel(R) Itanium(R) 2 プロセッサ
JP1/AJS2		JP1/Automatic Job Management System 2
JP1/Cm2/SSO	JP1/Cm2/SSO	JP1/Cm2/SNMP System Observer
	JP1/PFM/SSO	JP1/Performance Management/SNMP System Observer
	JP1/SSO	JP1/Server System Observer
JP1/Cm2 または JP1/Cm2/NNM	JP1/Cm2/NNM 250	JP1/Cm2/Network Node Manager 250
		JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition 250
	JP1/Cm2/NNM Enterprise	JP1/Cm2/Network Node Manager Enterprise
		JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition Enterprise
JP1/IM	JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager
	JP1/IM - View	JP1/Integrated Management - View
JP1/秘文	JP1/秘文 CG Pro	JP1/秘文 Advanced Edition CopyGuard Professional
	JP1/秘文 IC	JP1/秘文 Advanced Edition Information Cypher
	JP1/秘文 IF	JP1/秘文 Advanced Edition Information Fortress
	JP1/秘文 IF Mail Option	JP1/秘文 Advanced Edition Information Fortress Mail Option
	JP1/秘文 IS	JP1/秘文 Advanced Edition Information Share

表記				製品名称および名称
JP1/秘文 LogManager				JP1/秘文 Advanced Edition LogManager
Linux				Linux(R)
MBSA				Microsoft(R) Baseline Security Analyzer
Microsoft Internet Explorer				Microsoft(R) Internet Explorer(R)
				Windows(R) Internet Explorer(R)
Microsoft Internet Information Services				Microsoft(R) Internet Information Services 6.0
				Microsoft(R) Internet Information Services 7.0
Microsoft Internet Information Services 5.0				Microsoft(R) Internet Information Services 5.0
Microsoft SQL Server				Microsoft(R) SQL Server 2000
				Microsoft(R) SQL Server 2005
				Microsoft(R) SQL Server 7.0
Oracle				Oracle8i
				Oracle9i
Pentium				Intel(R) Pentium(R)
Sun ONE Web Proxy Server				Sun(TM) ONE Web Proxy Server
Visual Test				Visual Test 4.0
				Visual Test 6.0
Windows	Windows 98			Microsoft(R) Windows(R) 98 Operating System
	Windows Me			Microsoft(R) Windows(R) Millennium Edition Operating System
	Windows NT	Windows 2000	Windows 2000 Advanced Server	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Advanced Server Operating System
			Windows 2000 Datacenter Server	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Datacenter Server Operating System
			Windows 2000 Professional	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Professional Operating System
			Windows 2000 Server	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Server Operating System
		Windows NT 4.0	Windows NT Server 4.0	Microsoft(R) Windows NT(R) Server Network Operating System Version4.0

表記				製品名称および名称
			Windows NT Workstation 4.0	Microsoft(R) Windows NT(R) Workstation Operating System Version4.0
		Windows Server 2003	Windows Server 2003	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Datacenter Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Datacenter Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard Edition
			Windows Server 2003 (IPF)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Datacenter Edition for Itanium-based Systems
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition for Itanium-based Systems
			Windows Server 2003 (x64)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Datacenter x64 Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise x64 Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard x64 Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Datacenter x64 Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise x64 Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard x64 Edition
		Windows Server 2008		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard
		Windows Vista		Microsoft(R) Windows Vista(R) Business
				Microsoft(R) Windows Vista(R) Enterprise
				Microsoft(R) Windows Vista(R) Ultimate

表記				製品名称および名称
		Windows XP	Windows XP Home Edition	Microsoft(R) Windows(R) XP Home Edition Operating System
			Windows XP Professional	Microsoft(R) Windows(R) XP Professional Operating System
Windows 95				Microsoft(R) Windows(R) 95 Operating System
Windows CE				Microsoft(R) Windows(R) CE Operating System
WSUS		WSUS 2.0		Microsoft(R) Windows Server(R) Update Services 2.0
		WSUS 3.0		Microsoft(R) Windows Server(R) Update Services 3.0
WUA				Windows Update Agent 2.0
				Windows Update Agent 3.0
秘文		秘文 IC		秘文 Advanced Edition Information Cypher
		秘文 IF		秘文 Advanced Edition Information Fortress
		秘文 IF Mail Option		秘文 Advanced Edition Information Fortress Mail Option
		秘文 IS		秘文 Advanced Edition Information Share

■このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する主な英略語を次に示します。

英略語	正式名称
AIF	Application Information File
API	Application Programming Interface
ASP	Active Server Pages
BIOS	Basic Input Output System
CD-R	Compact Disc Recordable
CD-ROM	Compact Disc Read Only Memory
CF	CompactFlash
CGI	Common Gateway Interface
CPU	Central Processing Unit
CSV	Comma Separated Value
DB	Database
DBA	Database Administrator
DBMS	Database Management System

英略語	正式名称
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DLL	Dynamic Linking Library
DNS	Domain Name System
DoS	Denial of Service
DVD	Digital Versatile Disk
FD	Floppy Disk
FTP	File Transfer Protocol
GUI	Graphical User Interface
HTML	Hypertext Markup Language
HTTP	Hypertext Transfer Protocol
HTTPS	Hypertext Transfer Protocol Security
ICMP	Internet Control Message Protocol
ID	Identifier
IP	Internet Protocol
IPF	Itanium Processor Family
ISAPI	Internet Server Application Programming Interface
LAN	Local Area Network
MAC	Media Access Control
MIB	Management Information Base
MO	Magneto-Optical disk
MS-DOS	Microsoft Disk Operating System
NAT	Network Address Translation
NIC	Network Interface Card
ODBC	Open Database Connectivity
OS	Operating System
PC	Personal Computer
PDA	Personal Digital Assistant
PME	Power Management Event
PPP	Point to Point Protocol
RDBMS	Relational Database Management System
RWU	Remote-Wake-UP
SCSI	Small Computer System Interface
SD	Secure Digital
SID	System Identifier
SMBIOS	System Management Basic Input Output System

英略語	正式名称
SNMP	Simple Network Management Protocol
SQL	Structured Query Language
SSL	Secure Sockets Layer
TCP	Transmission Control Protocol
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
UDP	User Datagram Protocol
UNC	Universal Naming Convention
URI	Uniform Resource Identifier
USB	Universal Serial Bus
UTC	Coordinated Universal Time
UUID	Universally Unique Identifier
VPN	Virtual Private Network
WAN	Wide Area Network
WINS	Windows Internet Name Service
WMI	Windows Management Instrumentation
WS	Workstation
WWW	World Wide Web
XML	Extensible Markup Language

■マニュアル間の参照指示について

マニュアル「JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)」,「JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)」,「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)」,「JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)」または「JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)」間で，相互にマニュアルを参照していただく場合，次の形式で参照指示しています。

『AA については，マニュアル「BBB」の「n.n.n　XXXXX」を参照してください。』

AA

参照していただく項目です。

BBB

参照先マニュアルの略称です。マニュアル名称の共通部分（「JP1/NETM/DM」および「(Windows(R) 用)」の部分）を省略しています。省略されている部分を補ってお読みください。

n.n.n

参照先の章・節・項番号です。(1) や (a) などの括弧付き項番が付く場合もあります。

XXXXX

参照先の標題（見出し）です。

■マニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を次のように定義します。

記号	意味
［ ］	ウィンドウ，ダイアログボックス，タブ，パネル，メニュー，ボタン，アイコン，グループ，フォルダ，およびキーの名称を示す。
「 」	画面上の文字列，記号，およびジョブの名称を示す。
［A］－［B］	メニューを連続して選択することを示す。 （例）［ファイル］－［新規作成］ 上記の例では，［ファイル］メニューを選択して，プルダウンメニューから［新規作成］を選択することを示す。
［X］＋［Y］	キーを同時に押すことを示す。 （例）［Ctrl］＋［C］キー 上記の例では，［Ctrl］キーと［C］キーを同時に押すことを示す。
斜体文字	可変の値を示す。 （例） 日付は *YYYYMMDD* の形式で指定する。

■図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を，次のように定義します。

●PCまたはWS



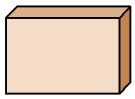
●ノート型PC



●サーバ



●プログラム



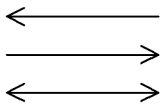
●ファイル



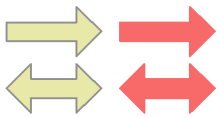
●リレーショナルデータベース



●制御の流れ



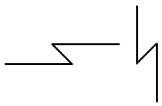
●データの流れ



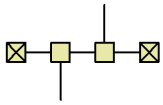
●入出力の動作



●通信回線



●ネットワーク LAN



●ネットワーク WAN



●モデム



●CD-ROM



●トラブル



■マニュアルの使用方法

- このマニュアルでは，特に記載がない場合，接続先の JP1/NETM/DM 製品のバージョンを，Windows 版は 08-52，UNIX 版 JP1/NETM/DM Manager は 06-75，UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager は 08-50 と仮定しています。接続先システムが上記より前のバージョンの JP1/NETM/DM 製品を使用している場合，そのバージョンがサポートする機能だけを実現できます。
- UNIX 版 JP1/NETM/DM との用語差異および機能差異については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「付録 D.3　UNIX 版 JP1/NETM/DM との差異」を参照してください。
- Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client との機能差異については，マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 A　Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client の機能」を参照してください。
- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client との機能差異については，マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 B　64 ビット版 JP1/NETM/DM Client の機能」を参照してください。
- Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client との機能差異については，マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 C　Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client の機能」を参照してください。

■ HTML ヘルプについて

JP1/NETM/DM では，次に示す HTML ヘルプを提供しています。

JP1/NETM/DM **のヘルプ**（JP1/NETM/DM Manager，JP1/NETM/DM Client（中継システム），および JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）用）

JP1/NETM/DM のヘルプの内容は，次のマニュアルを統合したものです。

・JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)
・JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)
・JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)
・JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)
・JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)

JP1/NETM/DM Client **のヘルプ**（JP1/NETM/DM Client（クライアント）および JP1/NETM/DM Client - Base（クライアント）用）

JP1/NETM/DM Client のヘルプの内容は，上記のマニュアルからクライアントの説明を抜粋したものです。

これらの HTML ヘルプでは，検索したい項目を HTML ヘルプの全文から検索できます。
JP1/NETM/DM の各ウィンドウの［ヘルプ］メニューや各ダイアログボックスの［ヘルプ］ボタンから，HTML ヘルプを起動できます。HTML ヘルプは，Microsoft Internet Explorer 5.01 以降がインストールされている PC で参照してください。

■常用漢字以外の漢字の使用について

このマニュアルでは，常用漢字を使用することを基本としていますが，次に示す用語については，常用漢字以外の漢字を使用しています。
個所（かしょ）

貼り付け（はりつけ）
汎用（はんよう）
必須（ひっす）

■ KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト），1MB（メガバイト），1GB（ギガバイト），1TB（テラバイト）はそれぞれ1,024 バイト，$1{,}024^2$ バイト，$1{,}024^3$ バイト，$1{,}024^4$ バイトです。

目次

1 JP1/NETM/DM のインストールの概要 1

1.1 プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成 2

1.1.1 適用 OS 2

1.1.2 コンポーネントの構成 4

1.2 JP1/NETM/DM をインストールする 9

1.2.1 JP1/NETM/DM を新規にインストールする場合の手順 9

1.2.2 JP1/NETM/DM の上書きインストールについて 10

1.2.3 プレインストール機能を使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法 11

1.2.4 インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法 13

1.2.5 リモートインストール機能を使用して JP1/NETM/DM を配布する場合の注意事項 15

1.3 インストール内容を変更する 19

1.4 JP1/NETM/DM をアンインストールする 21

1.4.1 アンインストール手順 21

1.4.2 アンインストール時の注意事項 21

2 JP1/NETM/DM Manager をインストールする 23

2.1 JP1/NETM/DM Manager のインストール手順 24

2.1.1 ログオン 26

2.1.2 インストーラの起動 26

2.1.3 ユーザ登録 27

2.1.4 インストールディレクトリの設定 28

2.1.5 種別の選択 29

2.1.6 データベースの選択 29

2.1.7 コンポーネントの選択 30

2.1.8 プログラムフォルダの選択 31

2.1.9 ワークディレクトリの設定 32

2.1.10 データベースの設定 35

2.1.11 パッケージの格納先の設定 37

2.1.12 ソフトウェア操作履歴格納ディレクトリの設定 40

2.1.13 ネットワーク接続情報の設定 41

2.1.14 サービスの設定 42

2.1.15 運用キーの設定 42

2.1.16 同時接続下位システム数の設定 44
2.1.17 ユーザ管理の設定 45
2.1.18 接続先の設定（リモートインストールマネージャ） 45
2.1.19 AMT 連携機能の設定 46
2.1.20 Asset Information Manager Limited の仮想ディレクトリの設定 47
2.1.21 WSUS 連携機能の設定 48
2.1.22 接続先の設定（パッケージャ） 49
2.1.23 JP1/Cm2 連携機能の設定 50
2.1.24 JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバの設定 52
2.1.25 リモートコントロールエージェントの注意事項の確認 53
2.1.26 インストール内容の確認 53
2.1.27 インストールの終了 54
2.2 リモートインストールマネージャをインストールする 56
2.3 Asset Information Manager Limited をインストールする 58
2.4 WSUS サーバへ JP1/NETM/DM をインストールする 61
2.5 JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ JP1/NETM/DM をインストールする 62

3 JP1/NETM/DM Client をインストールする 65
3.1 JP1/NETM/DM Client のインストール手順 66
3.1.1 ログオン 68
3.1.2 インストーラの起動 68
3.1.3 ユーザ登録 69
3.1.4 インストールディレクトリの設定 69
3.1.5 種別の選択 70
3.1.6 コンポーネントの選択 71
3.1.7 プログラムフォルダの選択 73
3.1.8 ワークディレクトリの設定 75
3.1.9 接続先の設定 77
3.1.10 運用キーの設定 79
3.1.11 ネットワークの設定 80
3.1.12 ダイヤルアップの設定 81
3.1.13 オプションの設定 81
3.1.14 AMT 連携機能の設定 83
3.1.15 接続先の設定（パッケージャ） 84
3.1.16 リモートコントロールエージェントの注意事項の確認 85

3.1.17 インストール内容の確認 86
3.1.18 インストールの終了 87
3.2 JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする 89
3.2.1 オプション製品の前提コンポーネント 89
3.2.2 オプション製品のインストール手順 89
3.2.3 JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature のインストール 90
3.2.4 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature のインストール 93
3.2.5 JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のインストール 96
3.2.6 インストール内容の変更 99
3.3 JP1/NETM/DM Client のインストールに失敗したときの対処 101

4 JP1/NETM/DM Manager をセットアップする 103
4.1 JP1/NETM/DM Manager のセットアップの流れ 104
4.2 サーバをセットアップする 105
4.2.1 [データベース環境] パネル 107
4.2.2 [通信関連] パネル 111
4.2.3 [ダイヤルアップ] パネル 112
4.2.4 [サーバカスタマイズオプション] パネル 113
4.2.5 [マルチキャスト配布] パネル 117
4.2.6 [結果記録オプション] パネル 119
4.2.7 [システム構成関連] パネル 122
4.2.8 [運用キー] パネル 123
4.2.9 [クラスタ設定] パネル 127
4.2.10 [JP1/Cm2 連携] パネル 127
4.2.11 [イベントサービス] パネル 128
4.2.12 [障害関連] パネル 130
4.2.13 [クライアントアラート] パネル 131
4.2.14 [稼働監視] パネル 133
4.2.15 [ネットワーク接続] パネル 135
4.2.16 [JP1/NETM/CSC 連携] パネル 136
4.2.17 [WSUS 連携] パネル 137
4.2.18 [Directory 連携] パネル 139
4.2.19 [AIM 関連] パネル 140
4.2.20 [AMT 連携] パネル 142
4.2.21 [監査ログ] パネル 143
4.3 中継マネージャの基本設定をセットアップする 145

4.3.1 ［接続先］パネル 145
4.3.2 ［上位通知］パネル 146
4.4 中継マネージャの詳細設定をセットアップする 151
4.5 JP1/Cm2 連携機能をセットアップする 154
4.5.1 ［接続する JP1/NETM/DM Manager］パネル 154
4.5.2 ［ポート番号］パネル 154

5 JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする 157
5.1 JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップの流れ 158
5.2 中継システムの基本設定をセットアップする 159
5.2.1 ［接続先］パネル 160
5.2.2 ［通信関連］パネル 162
5.2.3 ［ダイヤルアップ］パネル 164
5.2.4 ［中継システムカスタマイズオプション］パネル 165
5.2.5 ［上位通知］パネル 167
5.2.6 ［マルチキャスト配布］パネル 168
5.2.7 ［システム構成関連］パネル 170
5.2.8 ［運用キー］パネル 171
5.2.9 ［イベントサービス］パネル 173
5.2.10 ［リモートインストールマネージャ］パネル 174
5.2.11 ［クライアントアラート］パネル 175
5.2.12 ［AMT 連携］パネル 177
5.3 中継システムの詳細設定をセットアップする 178

6 JP1/NETM/DM Client（クライアント）をセットアップする 181
6.1 JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップの流れ 182
6.2 クライアントをセットアップする 183
6.2.1 ［接続先］パネル 185
6.2.2 ［処理中ダイアログ］パネル 188
6.2.3 ［通知ダイアログ］パネル 192
6.2.4 ［クライアント常駐・ポーリング］パネル 193
6.2.5 ［ダイヤルアップ］パネル 198
6.2.6 ［通信関連］パネル 199
6.2.7 ［通信リトライ］パネル 203
6.2.8 ［障害関連］パネル 206

6.2.9 ［システム監視］パネル 208
6.2.10 ［ジョブオプション］パネル 210
6.2.11 ［インストールオプション］パネル 216
6.2.12 ［リモートコレクトオプション］パネル 220
6.2.13 ［マルチキャスト配布］パネル 221
6.2.14 ［スタートアップ関連］パネル 223
6.2.15 ［セットアップの保護］パネル 225
6.2.16 ［権限］パネル（Windows NT の場合） 227

7 リレーショナルデータベースを設定する 229
7.1 必要なプログラムとシステム構成 230
7.1.1 必要なプログラム 230
7.1.2 システム構成 230
7.2 リレーショナルデータベース使用時の注意事項 234
7.3 リレーショナルデータベースの環境設定 235
7.3.1 Embedded RDB の環境設定 235
7.3.2 Microsoft SQL Server の環境設定 236
7.3.3 Oracle の環境設定 240
7.4 データベースマネージャの操作方法（Embedded RDB の場合） 243
7.4.1 データベースを新規作成する 245
7.4.2 ファイルシステム上の管理ファイルを移行する 253
7.4.3 データベースをアップグレードする 255
7.4.4 データベースをバックアップする 261
7.4.5 データベースをバックアップから復元する 265
7.4.6 データベースを再編成する 267
7.4.7 データベースのパスワードを変更する 272
7.4.8 データベース上の不要なインベントリ情報を削除する 274
7.5 データベースマネージャの操作方法（Microsoft SQL Server または Oracle の場合） 277
7.5.1 データベースを新規作成する 279
7.5.2 ファイルシステム上の管理ファイルを移行する 288
7.5.3 データベース上の資源をファイルシステムに移行する（Microsoft SQL Server） 289
7.5.4 データベースをアップグレードする 291
7.5.5 データベースを回復する（Microsoft SQL Server） 294
7.5.6 データベース上の不要なインベントリ情報を削除する 296

8 システム構成情報とあて先のグループを作成する 299
8.1 システム構成情報を作成する 300
8.1.1 システム構成情報の作成方法の種類 300
8.1.2 JP1/NETM/DM でのホスト名の付け方 302
8.1.3 システム構成情報を自動的に作成する 303
8.1.4 システム構成情報をファイルから作成する 307
8.1.5 システム構成情報を［システム構成］ウィンドウで作成する 310
8.1.6 中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する 311
8.1.7 システム構成情報を変更する 314
8.1.8 システム構成情報を作成するときの注意事項 318
8.2 あて先グループを作成する 320
8.2.1 あて先グループの作成方法の種類 320
8.2.2 グループ名の付け方 320
8.2.3 あて先グループをファイルから作成する 321
8.2.4 あて先グループを［あて先］ウィンドウで作成する 323
8.2.5 あて先グループを変更する 325
8.2.6 あて先グループの作成例 326
8.3 ID を作成する 329
8.3.1 ID の運用方法 329
8.3.2 ID の作成 334
8.3.3 クライアントの登録方法 336
8.3.4 ID の編集 340
8.3.5 ID を使用する場合の注意事項 342
8.4 システム構成情報と ID を連携させる運用 344
8.4.1 システム構成情報と ID を連携させるには 344
8.4.2 システム構成情報と ID の連携例 344
8.4.3 システム構成情報と ID の連携時の注意事項 350

9 システム構成情報とあて先のグループをメンテナンスする 353
9.1 システム構成情報の手動メンテナンス 354
9.1.1 名称によるホストの検索方法 354
9.1.2 日付によるホストの検索方法 356
9.1.3 重複しているホストの検索方法 359
9.1.4 検索したホストを［あて先］ウィンドウにコピーする 360
9.1.5 検索したホストをシステム構成情報から削除する 361

9.1.6 システム構成情報の手動メンテナンスの例 362
9.2 システム構成情報の自動メンテナンス 369
9.2.1 更新がないクライアントを自動的に削除する 369
9.2.2 重複しているクライアントを自動的に削除する 371
9.2.3 システム構成情報の自動メンテナンスのログファイル 372
9.2.4 システム構成情報の自動メンテナンス運用時の注意事項 372
9.3 あて先グループの自動メンテナンス 374
9.3.1 あて先グループのポリシーを設定する 374
9.3.2 あて先グループにポリシーを一括反映する 385
9.3.3 ユーザインベントリ項目によるグルーピング例 387
9.4 ID の自動メンテナンス 390
9.4.1 ID のポリシーを設定する 390
9.4.2 ID の自動メンテナンス運用時の注意事項 395
9.5 ポリシーをファイルから作成する 397
9.5.1 自動メンテナンスポリシーファイルの入出力方法 397
9.5.2 自動メンテナンスポリシーファイルの編集方法 398
9.5.3 ポリシーの作成例 406
9.6 システム構成情報の削除履歴を管理する 407
9.6.1 削除履歴の表示 407
9.6.2 削除履歴の CSV 形式ファイルへの出力 408
9.6.3 削除したホストのシステム構成情報への復元 409
9.6.4 削除履歴の削除 409
9.7 JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する 410
9.7.1 JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出される条件 410
9.7.2 JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出方法 411
9.7.3 [JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出] ダイアログボックスの操作 412
9.7.4 JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出 415
9.7.5 検出結果の更新 424
9.7.6 ホストを検出対象外にする方法 426
9.7.7 検出結果の CSV 形式ファイルへの出力 428
9.7.8 ネットワーク構成情報ファイルの作成 429

10 Asset Information Manager Limited を使用するための設定 437
10.1 Asset Information Manager Limited をセットアップする 438
10.2 Asset Information Manager Limited のサーバをセットアップする 442
10.2.1 データベース情報の設定 443

10.2.2 セッション情報の設定 446
10.2.3 基本情報の設定 446
10.2.4 JP1/NETM/DM 連携の設定 451
10.2.5 JP1/ 秘文連携の設定 457
10.2.6 インベントリ情報の引き当て方法の設定 458
10.3 Asset Information Manager Limited のデータベースをセットアップする 465
10.3.1 データベースを新規作成する 467
10.3.2 データベースをアップグレードする 479
10.3.3 データベースを CSV 形式ファイルでバックアップする 481
10.3.4 データベースを CSV 形式ファイルからリストアする 484
10.3.5 Embedded RDB 環境でデータベースをバックアップする 485
10.3.6 Embedded RDB 環境でデータベースをリストアする 489
10.3.7 Embedded RDB 環境でデータベースを再編成する 490
10.3.8 データソースまたはネット・サービスを作成する 494
10.4 仮想ディレクトリを設定する 502
10.5 Asset Information Manager Limited で使用するサービスの設定 505
10.6 Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用する場合の設定 506
10.6.1 WWW サーバの設定（Microsoft Internet Information Services 6.0 の場合） 506
10.6.2 WWW サーバの設定（Microsoft Internet Information Services 7.0 の場合） 507
10.7 タスクスケジューラに登録されるタスクの設定 514
10.7.1 タスクの種類 514
10.7.2 タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定 515
10.7.3 削除する履歴情報の種類と履歴情報を削除するタイミングの指定 517
10.7.4 すべてのインベントリ情報の取得 518
10.7.5 タスクの設定手順 519
10.7.6 ディレクトリ情報の取得 521
10.8 部署単位で操作ログを集計するための設定 523
10.8.1 IP アドレスを利用する 523
10.8.2 ユーザインベントリ情報を利用する 524
10.8.3 機器に部署名を設定する 524
10.9 Asset Information Manager Limited で表示できるインベントリ情報 526
10.9.1 資産情報として取得できるインベントリ情報 527
10.9.2 ハードウェア資産情報として取得できるインベントリ情報 530
10.9.3 ネットワーク情報として取得できるインベントリ情報 533
10.9.4 インストールソフトウェア情報として取得できるインベントリ情報 534
10.9.5 インストールソフトウェアリストとして取得できるインベントリ情報 535
10.9.6 コンポーネント情報として取得できるインベントリ情報 536

10.9.7 パッチ情報として取得できるインベントリ情報 537
10.9.8 パッチリストとして取得できるインベントリ情報 537
10.9.9 ウィルス定義情報として取得できるインベントリ情報 538
10.9.10 部署情報として取得できるインベントリ情報 539
10.9.11 設置場所情報として取得できるインベントリ情報 539

付録 541
付録 A JP1/NETM/DM のバージョンアップと移行方法 542
付録 A.1 JP1/NETM/DM のバージョンアップ 542
付録 A.2 データベースの種類の変更 545
付録 A.3 OS バージョンアップ時のデータ移行 546
付録 A.4 PC リプレース時のデータ移行 547
付録 B ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用 555
付録 B.1 ローカルコンソールで JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合の制限 555
付録 B.2 ローカルコンソールで使用している JP1/NETM/DM Client（クライアント）にソフトウェアをリモートインストールする方法 556
付録 C JP1/NETM/DM のクラスタシステムの構築 559
付録 C.1 クラスタシステムに必要なプログラム 559
付録 C.2 JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の環境構築 559
付録 C.3 JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合の環境構築 570
付録 C.4 クラスタシステムを使用する場合の注意事項 571
付録 C.5 クラスタシステム環境を再構築する場合の手順 573
付録 D HP-UX JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストールとセットアップ 575
付録 D.1 JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストール 575
付録 D.2 JP1/NETM/DM NNM 連携機能のアンインストール 575
付録 D.3 JP1/NETM/DM NNM 連携機能のセットアップ 576
付録 E インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入 578
付録 E.1 インターネットオプションの機能 578
付録 E.2 インターネットオプションを介したジョブの流れ 580
付録 E.3 運用上の注意事項 581
付録 E.4 システム構成 582
付録 E.5 Internet Gateway の設定 586
付録 E.6 HTTP Gateway の設定 591
付録 E.7 Internet Gateway と HTTP Gateway の停止方法 606
付録 F 各バージョンの変更内容 608

付録 G　用語解説 619

索引 633

1 JP1/NETM/DM のインストールの概要

この章では，JP1/NETM/DM の各プログラム，および各コンポーネントのインストール方法について説明します。

1.1 プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成

1.2 JP1/NETM/DM をインストールする

1.3 インストール内容を変更する

1.4 JP1/NETM/DM をアンインストールする

1.1 プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成

JP1/NETM/DM には，JP1/NETM/DM Manager，JP1/NETM/DM Client，および JP1/NETM/DM Client - Base の三つのプログラムがあります。

また，JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品として，JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature，JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature および JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature の三つのプログラムがあります。

それぞれのプログラムは，**コンポーネント**と呼ばれる幾つかの機能の単位から成っています。JP1/NETM/DM の各プログラムをインストールするときは，目的のコンポーネントを選択してインストールを進めます。

ここでは，各プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成について説明します。

1.1.1 適用 OS

各プログラムの適用 OS を次の表に示します。

なお，JP1/NETM/DM Client および JP1/NETM/DM Client - Base は，中継システムとして使用するかクライアントとして使用するかによって，適用 OS が異なります。

表 1-1 JP1/NETM/DM の適用 OS

プログラム	適用 OS
JP1/NETM/DM Manager	• Windows Server 2008（Standard，Enterprise） • Windows Vista • Windows Server 2003（Standard Edition，Enterprise Edition） • Windows Server 2003 (x64) • Windows XP（Professional） • Windows 2000（Professional，Server，Advanced Server）
• JP1/NETM/DM Client（中継システム） • JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）	• Windows Server 2008（Standard，Enterprise） • Windows Vista • Windows Server 2003（Standard Edition，Enterprise Edition） • Windows Server 2003 (x64) • Windows XP（Professional） • Windows 2000（Professional，Server，Advanced Server） • Windows NT 4.0

プログラム	適用 OS
• JP1/NETM/DM Client（クライアント） • JP1/NETM/DM Client - Base（クライアント）	• Windows Server 2008（Standard，Enterprise） • Windows Vista • Windows Server 2003 • Windows Server 2003 (x64) • Windows XP • Windows 2000 • Windows NT 4.0 • Windows Me • Windows 98
JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature	• Windows Server 2008（Standard，Enterprise） • Windows Vista • Windows Server 2003 • Windows Server 2003 (x64) • Windows XP • Windows 2000 • Windows NT 4.0 • Windows Me • Windows 98

JP1/NETM/DM を使用する OS の注意事項を次に示します。

● Windows Server 2008 の Server Core オプションには対応していません。

● Windows Server 2008 および Windows Server 2003 のリモートデスクトップ機能を利用して，JP1/NETM/DM をインストールおよび操作できます。
ただし，ターミナルサーバが稼働している場合は，使用できる機能に制限があります。制限される機能については，「付録 B　ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用」を参照してください。
リモートデスクトップ機能を利用する場合は，コンソールセッションで接続してください。コンソールセッションで接続するには，次のように /console を指定して，コマンドラインからリモートデスクトップ機能を実行します。

```
mstsc.exe /console
```

なお，コンソールセッションでは，同時に一人のユーザだけが接続できます。

● Windows XP のリモートデスクトップ機能およびユーザの簡易切り替え機能には対応していません。

● Windows 2000 のターミナルサービスを利用した操作には対応していません。ただし，ターミナルサービスと同居している環境で，JP1/NETM/DM を使用することはできます。この場合，ローカルコンソールで操作してください。なお，ローカルコンソールで操作する場合，使用できる機能に制限があります。制限される機能については，「付録 B　ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用」を参照してください。

1.1.2 コンポーネントの構成

ここでは，各プログラムに含まれるコンポーネントの機能の概要について説明します。

なお，JP1/NETM/DM Client および JP1/NETM/DM Client - Base は，中継システムとしてインストールする場合と，クライアントとしてインストールする場合で，インストールできるコンポーネントが異なります。

（1） JP1/NETM/DM Manager のコンポーネント

JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントを次の表に示します。

なお，一部のコンポーネントは，使用している OS によってインストールできない場合があります。

表 1-2 JP1/NETM/DM Manager のコンポーネント

コンポーネント	機能概要
サーバ	配布管理システムの機能を提供します。次のサブコンポーネントに分類できます。 • **サーバ本体機能**※1 配布管理システムの中心となる機能を提供します。中継マネージャとしてインストールする場合は，クライアントの機能も提供します。 • **リモートインストールマネージャ** 配布管理システムの GUI の機能を提供します。通常は「サーバ」と同じ PC にインストールしてください。この機能は，サーバとは別の PC にインストールできます。別の PC にインストールするときは，「サーバ」と「リモートインストールマネージャ」のバージョンを同じにしてください。 • **データベースマネージャ**※1 リレーショナルデータベースの作成やメンテナンス機能を提供します。 • **AMT 連携機能** AMT を利用して，クライアントを制御する機能を提供します。
Asset Information Manager Limited※1※2	インベントリ情報を集計・参照する GUI と，ソフトウェアの稼働状況を管理する GUI の機能を提供します。 この機能を使用する場合，JP1/NETM/DM Manager のインストール時に，「Asset Information Manager Limited」用のリレーショナルデータベースを作成する必要があります。 PC の負荷を分散させるために，通常は「サーバ」と別の PC にインストールしてください。なお，「サーバ」と別の PC にインストールするときは，「リモートインストールマネージャ」を合わせてインストールする必要があります。
WSUS 連携機能※1	JP1/NETM/DM から WSUS を管理する機能です。WSUS サーバにインストールしてください。
JP1/Cm2 連携機能※3	JP1/Cm2 または HP OpenView から JP1/NETM/DM を管理する機能です。JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm がインストールされている PC にインストールしてください。
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ※3	JP1/Cm2 または HP OpenView から，Manager の管理情報にアクセスするときのゲートウェイ機能を提供します。「サーバ」コンポーネントの「サーバ本体機能」をインストールする PC にインストールしてください。

コンポーネント	機能概要
パッケージャ※4	リモートインストールするソフトウェアをパッケージングする機能を提供します。
Automatic Installation Tool※4	ソフトウェアを自動インストールするためのスクリプトを作成するツールです。「Automatic Installation Tool」だけを専用の PC にインストールすることもできます。
リモートコントロールマネージャ	リモートコントロールでの，コントローラの機能を提供します。 **チャット** リモートコントロールマネージャ，またはリモートコントロールエージェントとのチャット機能を提供します。
リモートコントロールエージェント※4	リモートコントロールでの，エージェントの機能を提供します。

注※ 1

OS が Windows Vista の場合はインストールできないコンポーネントです。

注※ 2

「Asset Information Manager Limited」コンポーネントをインストールする場合，Microsoft Internet Information Services がインストールされている必要があります。

注※ 3

OS が Windows Server 2008, Windows Vista または Windows Server 2003 (x64) の場合はインストールできないコンポーネントです。

注※ 4

中継マネージャでだけインストールできるコンポーネントです。ただし，リモートコントロールエージェントは，すでにリモートコントロール機能を持つ他製品がインストールされている PC では使用できません。このような PC にリモートコントロールエージェントをインストールした場合は，先にリモートコントロールエージェントをアンインストールしてください。

（2） JP1/NETM/DM Client（中継システム）および JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）のコンポーネント

JP1/NETM/DM Client（中継システム）および JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）のコンポーネントを次の表に示します。

表 1-3 JP1/NETM/DM Client（中継システム）および JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）のコンポーネント

コンポーネント	機能概要
中継システム	中継システムの機能を提供します。直下のクライアントに対する配布管理システムの機能，および上位システムに対するクライアントの機能も提供します。 中継システムは，次のサブコンポーネントがあります。 • **中継システム本体機能** 中継システムのインストーラの機能です。 • **リモートインストールマネージャ** 中継システム上で配布管理を実行するための GUI 機能です。 • AMT **連携機能** AMT を利用して，クライアントを制御する機能を提供します。
パッケージャ	リモートインストールするソフトウェアをパッケージングする機能を提供します。
Automatic Installation Tool	ソフトウェアを自動インストールするためのスクリプトを作成するツールです。「Automatic Installation Tool」だけを専用の PC にインストールすることもできます。
リモートコントロールエージェント※	リモートコントロールでの，エージェントの機能を提供します。 **チャット** リモートコントロールマネージャ，またはリモートコントロールエージェントとのチャット機能を提供します。

注※

すでにリモートコントロール機能を持つ他製品がインストールされている PC では使用できません。このような PC にリモートコントロールエージェントをインストールした場合は，先にリモートコントロールエージェントをアンインストールしてください。

この機能は，JP1/NETM/DM Client - Base では未サポートの機能です。JP1/NETM/DM Client - Base でこの機能を使用するためには，JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature をインストールしてください。

（3）JP1/NETM/DM Client（クライアント）および JP1/NETM/DM Client - Base（クライアント）のコンポーネント

JP1/NETM/DM Client（クライアント）および JP1/NETM/DM Client - Base（クライアント）のコンポーネントを次の表に示します。

なお，一部のコンポーネントは，使用している OS によってインストールできない場合があります。

表 1-4 JP1/NETM/DM Client（クライアント）および JP1/NETM/DM Client - Base（クライアント）のコンポーネント

コンポーネント	機能概要
クライアント	クライアントの機能を提供します。クライアントには次のサブコンポーネントがあります。 • **パッケージセットアップマネージャ** 配布管理システムから配布されたソフトウェアを，クライアント側からの指示でリモートインストールする機能です。 • **付加機能** ユーザが作成したプログラムを使ってクライアントを操作するための機能です。通常はインストールする必要はありません。 • Visual Test 6.0 **による配布機能**※1 Visual Test 6.0 を使って他社ソフトウェアを配布する機能です。 • AMT **連携機能**※2 AMT を利用して，クライアントを制御する機能を提供します。
パッケージャ	リモートインストールするソフトウェアをパッケージングする機能を提供します。
Automatic Installation Tool	ソフトウェアを自動インストールするためのスクリプトを作成するツールです。「Automatic Installation Tool」だけを専用の PC にインストールすることもできます。
スタートアップキット機能支援ツール※3	JP1/NETM/DM Administrator Kit が提供するスタートアップキットを使用して，インストールセットを作成するときに必要なプログラムです。このコンポーネントをインストールするには，JP1/NETM/DM Administrator Kit がインストールされている必要があります。
リモートコントロールエージェント※4	リモートコントロールでの，エージェントの機能を提供します。 **チャット** リモートコントロールマネージャ，またはリモートコントロールエージェントとのチャット機能を提供します。
オンラインヘルプ	クライアント用のオンラインヘルプを提供します。

注※ 1

OS が Windows Server 2008，Windows Vista，または Windows Server 2003 (x64) の場合はインストールできません。

この機能は，JP1/NETM/DM Client - Base の場合，未サポートの機能のため表示されません。JP1/NETM/DM Client - Base でこの機能を使用するためには，JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールする必要があります。

注※ 2

OS が Windows Server 2008，Windows Vista，Windows Server 2003（Service Pack なし，または Service Pack 1）または Windows XP Professional（Service Pack 1 以降）の場合だけインストールできます。

注※ 3

OS が Windows Server 2003, Datacenter Edition，Windows 2000 Datacenter Server, Windows Me，または Windows 98 の場合はインストールできません。

注※ 4

すでにリモートコントロール機能を持つ他製品がインストールされている PC では使用できません。このような PC にリモートコントロールエージェントをインストールした場合は，先にリモートコントロールエージェントをアンインストールしてください。

この機能は，JP1/NETM/DM Client - Base では未サポートの機能です。JP1/NETM/DM Client - Base でこの機能を使用するためには，JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature をインストールしてください。

（4）JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品のコンポーネント

JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature および JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のコンポーネントを，表 1-5 と表 1-6 に示します。なお，JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature にはコンポーネントはありません。

表 1-5　JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature のコンポーネント

コンポーネント	機能概要
JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature	ソフトウェアをリモートインストールする機能，およびファイルを収集する機能です。 **Visual Test 6.0 による配布機能** Visual Test 6.0 を使って他社ソフトウェアを配布する機能です。OS が Windows Server 2008，Windows Vista，または Windows Server 2003 (x64) の場合はインストールできません。

注

JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）にインストールする場合は，自動的にすべてのコンポーネントがインストールされます。インストールするコンポーネントは選択できません。

表 1-6　JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のコンポーネント

コンポーネント	機能概要
リモートコントロールエージェント	リモートコントロールでの，エージェントの機能を提供します。 **チャット** リモートコントロールマネージャ，またはリモートコントロールエージェントとのチャット機能を提供します。

注

すでにリモートコントロール機能を持つ他製品がインストールされている PC では使用できません。このような PC にリモートコントロールエージェントをインストールした場合は，先にリモートコントロールエージェントをアンインストールしてください。

1.2　JP1/NETM/DM をインストールする

JP1/NETM/DM を新規にインストールする方法について説明します。また，上書きインストールについても説明します。

さらに，プレインストール機能を使って JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールする手順や，JP1/NETM/DM のリモートインストール機能を使用して JP1/NETM/DM Client をバージョンアップする場合の注意事項についても説明します。

なお，JP1/NETM/DM をバージョンアップする方法については，「付録 A　JP1/NETM/DM のバージョンアップと移行方法」を参照してください。

1.2.1　JP1/NETM/DM を新規にインストールする場合の手順

JP1/NETM/DM を新規にインストールする場合は，次の手順で，上位システムのプログラムから順にインストールしてください。

1. JP1/NETM/DM Manager **をインストールする。**
   配布管理システムの PC に JP1/NETM/DM Manager をインストールします。
2. **リレーショナルデータベースを作成する。**
   データベースマネージャを使用して JP1/NETM/DM 用のリレーショナルデータベースを作成します。リレーショナルデータベースの作成方法については，「7.　リレーショナルデータベースを設定する」を参照してください。
3. JP1/NETM/DM Client**（中継システム）をインストールする。**
   中継システムの PC に JP1/NETM/DM Client（中継システム）をインストールします。
4. JP1/NETM/DM Client**（クライアント）をインストールする。**
   クライアントの PC に JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールします。
   媒体を使用してインストールしてもかまいませんが，クライアントの台数が多い場合は，JP1/NETM/DM Administrator Kit で作成した**インストールセット**を使用してインストールすると便利です。インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法については，「1.2.4　インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法」を参照してください。

なお，中継システムまたはクライアントの PC に JP1/NETM/DM Client - Base および JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする場合は，JP1/NETM/DM Client - Base をインストールしたあとに，オプション製品をインストールしてください。

1.2.2 JP1/NETM/DM の上書きインストールについて

インストールしたあとの JP1/NETM/DM のプログラムは，同一バージョンまたはそれより新しいバージョンで上書きインストールできます。同一バージョンで上書きインストールすると，インストール内容を変更したり，同じ設定で修復インストールしたりできます。同一バージョンでの上書きインストールによるインストール内容の変更や修正は，メンテナンスウィザードから行います。詳細は，「1.3　インストール内容を変更する」を参照してください。

なお，インストール先のシステムによって，上書きインストールできるプログラムが異なります。上書きインストールできるプログラムとシステムの関係を次の表に示します。

表 1-7　上書きインストールできるプログラムとシステムの関係

インストールするプログラム		インストール先のシステム			
		マネージャ	中継マネージャ	中継システム	クライアント
JP1/NETM/ DM Manager	マネージャ	○	×	×	○※
	中継マネージャ	○	○	×	×
JP1/NETM/ DM Client および JP1/NETM/ DM Client - Base	中継システム	×	×	○	○
	クライアント	○※	×	×	○

（凡例）○：インストールできる　×：インストールできない

注※

上書きインストールはされません。二つのプログラムがインストールされている状態になります。

上書きインストール時の注意事項を次に示します。バージョンアップ時の注意事項については，「付録 A.1　JP1/NETM/DM のバージョンアップ」を参照してください。

- 上書きインストールした場合，バージョンアップ前の既存の設定内容が引き継がれます。インストール時の各ダイアログボックスには既存の設定内容が表示されますので，変更したい場合だけ設定し直してください。
- JP1/NETM/DM Client に JP1/NETM/DM Client - Base を上書きインストールした場合，インストールしたあとに使用できる機能は，JP1/NETM/DM Client - Base の機能の範囲になります。
- JP1/NETM/DM Client または JP1/NETM/DM Client - Base を，バンドル版の JP1/NETM/DM Client に上書きインストールしないでください。上書きインストールした場合，動作は保障されません。
- 「Asset Information Manager Limited」を上書きインストールする場合は，「WWW

Publishing Service」および「Asset Information Synchronous Service」のサービス，およびタスクをすべて停止してください。

- 「Asset Information Manager Limited」を上書きインストールすると，サービス「Asset Information Synchronous Service」の「スタートアップの種類」は，「手動」に設定されます。必要に応じて「自動」に変更してください。
- クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールする手順については，「付録 C.5　クラスタシステム環境を再構築する場合の手順」を参照してください。

注意事項

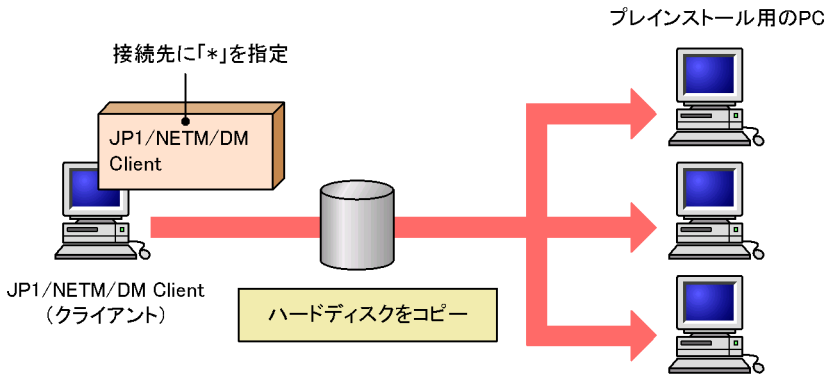
インストール済みの JP1/NETM/DM のバージョンよりも，古いバージョンでの上書きインストールはできません。特に，JP1/NETM/DM 06-72 以降をインストールしたあとには，JP1/NETM/DM 06-71 以前を上書きインストールしないでください。アンインストールが正常にできなくなります。

1.2.3　プレインストール機能を使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法

JP1/NETM/DM Client（クライアント）のプレインストール機能は，JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールしたときに生成されるそのクライアント固有の情報や一時ファイルなどを作成しない状態で，JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールできる機能です。したがって，事前にインストールした PC を配布したり，PC を配布する前にテストをしたりする場合に，便利な機能です。例えば，プレインストール機能を使って JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールした PC 環境を 1 台作成し，その PC のハードディスクをコピーするだけで，1 台ずつインストールするより効率的に JP1/NETM/DM Client をインストールできます。

プレインストール機能を使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストールの概要を次の図に示します。

図 1-1　プレインストール機能を使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール



プレインストール機能を使って JP1/NETM/DM Client（クライアント）を配布する場合のコピー元になる PC 環境の作成手順を次に示します。

1. **JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールする。**
   「3.1　JP1/NETM/DM Client のインストール手順」に従って JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールします。
2. **「接続先の設定」で接続先のホスト名または IP アドレスに「*」を指定する。**
   接続先に「*」を指定すると，インストールしたディレクトリにそのクライアント固有の情報は作成されません。
3. **JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール完了。**
   プレインストール機能を使って JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールした PC 環境が生成されました。この状態でほかの PC へハードディスクをコピーしてください。

なお，一度動作確認テストを実施してからほかの PC へコピーしたい場合は，次に示す手順に従ってインストールしてください。

1. **JP1/NETM/DM Client をインストールする。**
   「3.1　JP1/NETM/DM Client のインストール手順」に従って JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールします。この時に「接続先の設定」で接続先にはテスト環境で使用する接続先のホスト名または IP アドレスを指定してください。
2. **動作確認テストを実施する。**
   テスト環境で動作確認テストを実施してください。
3. **［スタート］メニューから［セットアップ］を選択し，クライアントセットアップを起動する。**
4. **［接続先］パネルで接続先をテスト環境のホスト名または IP アドレスから「*」に変更して［OK］ボタンをクリックする。**

JP1/NETM/DM Client のセットアップで，接続先をテスト環境の接続先から「*」に変更することで，テストで使用したそのクライアント固有の情報や接続先との一時ファイルを削除し初期化します。

5. JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール完了。
プレインストール機能を使って JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールした PC 環境が生成されました。この状態でほかの PC へハードディスクをコピーしてください。

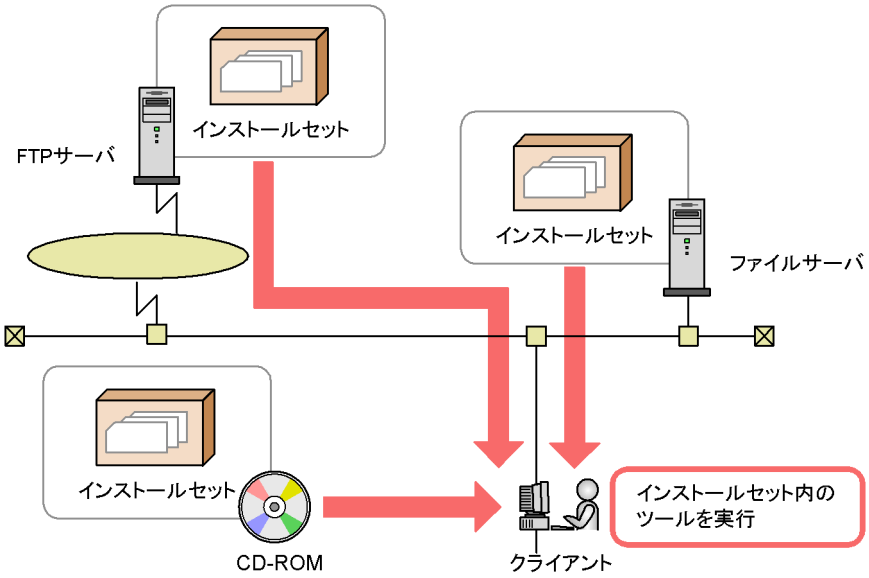
1.2.4 インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法

ここでは，インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法の概要を説明します。インストールセットの作成方法，およびインストールセットからのインストール方法の詳細については，マニュアル「JP1/NETM/DM Administrator Kit」を参照してください。

JP1/NETM/DM Client（クライアント）の「スタートアップキット機能支援ツール」と JP1/NETM/DM Administrator Kit を同じ PC にインストールすると，JP1/NETM/DM Client を自動インストールするための**インストールセット**を作成できます。インストールセットは，JP1/NETM/DM Client（クライアント）のプログラムとセットアップ情報を含んでいます。クライアントユーザは，CD-ROM，ファイルサーバ，または FTP サーバに格納されたインストールセットを使用して，JP1/NETM/DM Client（クライアント）を自動インストールできます。

インストールセットを使用した自動インストールの概要を次の図に示します。

図 1-2　インストールセットを使用した自動インストール



インストールセットを使用して JP1/NETM/DM Client（クライアント）を自動インストールする場合，次のような運用ができます。

● ネットワーク環境に応じてインストールセットを使い分ける

同一のセットアップ情報を設定したインストールセットを CD-ROM，ファイルサーバ，および FTP サーバに格納しておくと，どのようなネットワーク環境でも JP1/NETM/DM Client（クライアント）の自動インストールができます。ファイルサーバや FTP サーバには，JP1/NETM/DM 製品がインストールされていなくてもかまいません。

● クライアントの IP アドレスによって異なる接続先を設定する

インストールセットでは，クライアントの IP アドレスの範囲ごとに，それぞれ対応する接続先を設定できます。自動インストール時には，各クライアントの IP アドレスに対応する接続先が自動的に選択されます。そのため，クライアントの接続先が複数存在する場合も，1 種類のインストールセットですべてのクライアントに自動インストールできます。

● インストールと同時に ID への登録やユーザ情報設定ダイアログボックスの表示をする

インストールセットには，セットアップ項目以外の情報も設定できます。例えば，クライアントの登録先の ID や取得するユーザインベントリ項目をインストールセットに設定しておくと，インストールと同時にそのクライアントを ID へ登録したり，インストール直後にユーザ情報の入力を促すダイアログボックスを表示したりできます。

● 自動インストール機能を利用して中継システムを設置する

中継システムを新規に設置する場合，目的の PC に，まずクライアントをインストー

ルするという方法があります。インストールセットを使用してクライアントをインストールし，次に，そのクライアントに JP1/NETM/DM Client（中継システム）をリモートインストールすることで，遠隔地にも容易に中継システムを設置できます。

1.2.5　リモートインストール機能を使用して JP1/NETM/DM を配布する場合の注意事項

JP1/NETM/DM Client の中継システムまたはクライアントをバージョンアップする場合は，JP1/NETM/DM を利用してリモートインストールできます。また，JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする場合も，リモートインストール機能を利用できます。リモートインストールの方法は，その他の日立プログラムプロダクトと同じです。

なお，リモートインストールした JP1/NETM/DM Client および JP1/NETM/DM Client - Base の設定は，クライアントでのインストール前の設定が引き継がれます。

リモートインストール機能を使用して JP1/NETM/DM Client を配布する場合の注意事項を次に示します。

（1）プログラムおよびコンポーネントに関する注意事項

● それぞれのプログラムでリモートインストールできるコンポーネントは次のとおりです。JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールする場合は，リモートインストールするコンポーネントを選択できます。

JP1/NETM/DM Client（中継システム）をインストールする場合

- 中継システム
- リモートコントロールエージェント※
- パッケージャ

JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールする場合

- クライアント
- リモートコントロールエージェント※
- パッケージャ
- オンラインヘルプ

注※　JP1/NETM/DM Client - Base の場合，コンポーネントを選択できません。

● JP1/NETM/DM Client - Base とオプション製品をリモートインストールする場合の注意事項を次に示します。

- プログラムごとにパッケージを作成してください。
- パッケージごとにジョブを作成してください。
- JP1/NETM/DM Client - Base がオプション製品より先にインストールされるように，リモートインストールしてください。オプション製品は任意の順序でインストールできます。

● バージョンが 08-00 以前の中継システムに，「AMT 連携機能」をリモートインストールするには，次の手順で実行してください。
なお，中継システムには，あらかじめ Microsoft .NET Framework 1.1，2.0 または 3.0 がインストールされている必要があります。

1. **上位の** JP1/NETM/DM Manager **のバージョンを** 08-02 **以降にバージョンアップする。**
バージョンアップ時に，「AMT 連携機能」をインストールしてください。
2. JP1/NETM/DM Manager **のインストールディレクトリ** ¥DMAMT **をパッケージングする。**
パッケージング時のインストール先ディレクトリは，次のように設定してください。
ドライブ：なし
ディレクトリ：%NETMDMP%
3. **パッケージを中継システムに配布する。**
4. **バージョンが** 08-02 **以降の中継システムをリモートインストールする。**
「AMT 連携機能」がインストールされます。

●「スタートアップキット機能支援ツール」，または JP1 Version 7i 以前のコンポーネント「クライアント Web インストール」がインストールされた PC に対して，JP1/NETM/DM Client（クライアント）はリモートインストールできません。また，「Automatic Installation Tool」がインストールされた PC に対して，JP1/NETM/DM Client（クライアント）はリモートインストールできますが，「Automatic Installation Tool」は上書きインストールされません。「スタートアップキット機能支援ツール」および「Automatic Installation Tool」は，手動でインストールしてください。

●「Automatic Installation Tool」または JP1 Version 7i 以前のコンポーネント「クライアント Web インストール」がインストールされた PC に対しては，JP1/NETM/DM Client（中継システム）をリモートインストールできません。

(2) リモートインストールに関する注意事項

● リモートインストール先のディスクには，リモートインストールする JP1/NETM/DM Client の約 3 倍の空き容量が必要です。

● ほかのパッケージと一緒にリモートインストールしないでください。

● リモートインストールを実行して JP1/NETM/DM Client を配布する場合，JP1/NETM/DM Client と同じバージョンのパッケージャを使用してください。

● パッケージングまたはリモートインストールのジョブ作成時に，［外部プログラム］パネルの「外部プログラム起動」で，インストール直後，およびインストールエラー時に起動する外部プログラムは指定できません。

● パッケージングまたはリモートインストールのジョブ作成時に，［インストール方法］パネルの「日立 PP のインストール」で「更新インストール」を指定すると，インス

トール済みのコンポーネントと同じコンポーネントがインストールされます。「新規インストール」を選択すると，インストール済みのコンポーネントと同じコンポーネントに加え，次のコンポーネントがインストールされます。

JP1/NETM/DM Client（中継システムまたはクライアント）をインストールした場合

- リモートコントロールエージェント

JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールした場合

- Visual Test 6.0 による配布機能

● インストール処理中にコンピュータを再起動するか JP1/NETM/DM Client のメニューを操作すると，インストールが失敗します。
また，インストールの状況を示すダイアログで［キャンセル］ボタンをクリックするとインストールは中断されます。

● インストール中のダイアログを表示させない場合，JP1/NETM/DM Client のインストールが完了したあとに再起動が必要なときでもメッセージは表示されません。

● JP1/NETM/DM Client のインストールを正しく完了させるためには，リモートインストールが完了したあと，他製品をインストールする前に手動でコンピュータを再起動してください。

● バージョンが 08-01 以前のクライアントにバージョンが 08-02 以降の JP1/NETM/DM Client をリモートインストールする場合，インストール中のダイアログ表示の設定は，インストールされる側のクライアントのセットアップでの設定に依存します。
なお，バージョンが 08-01 以前の JP1/NETM/DM Client をリモートインストールする場合は，インストール中のダイアログ表示の設定は無効となります。インストール中のダイアログは必ず表示されます。

● JP1/NETM/DM Administrator Kit で作成したインストールセットは，JP1/NETM/DM のリモートインストール機能からはインストールを実行できません。ただし，リモートインストール機能を利用して，インストールセットをクライアントマシンへ配布することはできます。配布したインストールセットは，クライアントマシンから手動で実行する必要があります。

● リモートインストールの実行結果は次の方法で確認できます。

JP1/NETM/DM Client（中継システム）をインストールした場合

配布管理システムの［ジョブ実行状況］ウィンドウで確認できます。［ジョブ実行状況］ウィンドウから表示される［詳細情報］ダイアログボックスの「保守コード」が実行結果のリターンコードです。

JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールした場合

クライアントで，JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール中であることを示すメッセージボックスが表示されます。インストールが終了すると，終了を通知するメッセージボックスにリターンコードが表示されます。
なお，インストール中のダイアログを表示しない設定にしている場合は，終了を通知するメッセージボックスは表示されません。インストールが成功したかどう

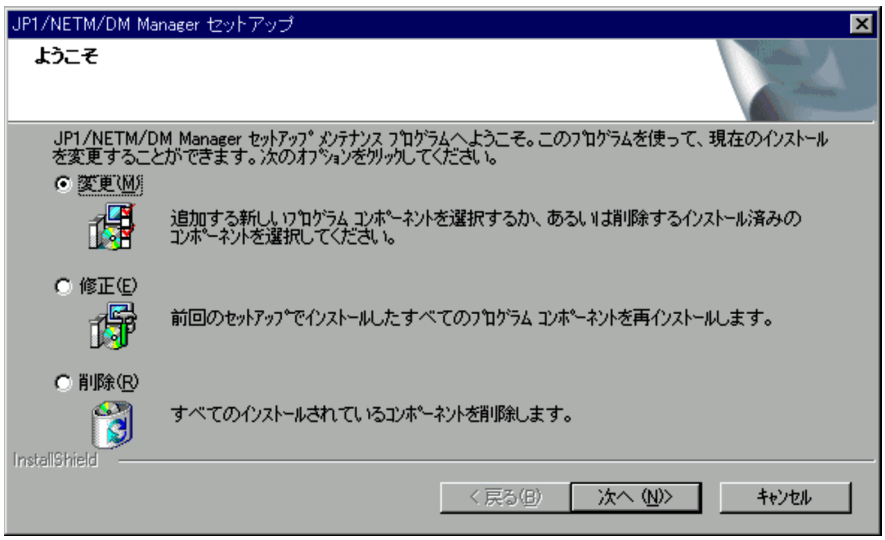
かは，上位システムでジョブの実行結果を確認してください。
リターンコードの意味については，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.2.3　保守コード一覧」を参照してください。

1.3　インストール内容を変更する

一度インストールしたコンポーネントを追加または削除するには，**メンテナンスウィザード**を使用します。メンテナンスウィザードを使用すると，前回インストールした設定での再インストールや，製品のアンインストールもできます。

メンテナンスウィザードを起動するには，インストール済みの製品の CD-ROM からインストーラを起動してください。同一バージョンのインストーラで上書きインストールしようとすると，メンテナンスウィザードが起動し，［ようこそ］ダイアログボックスが表示されます。

図 1-3　［ようこそ］ダイアログボックス



［ようこそ］ダイアログボックスの内容は，JP1/NETM/DM Manager，JP1/NETM/DM Client のどちらでも同じです。「変更」，「修正」，または「削除」から，希望する操作を選択してください。

変更

新しいコンポーネントを追加したい場合や，インストール済みコンポーネントの一部を削除したい場合に選択します。

「変更」を選択して［次へ］ボタンをクリックすると，JP1/NETM/DM Manager の場合は［種別の選択］ダイアログボックスが，JP1/NETM/DM Client の場合は［コンポーネントの選択］ダイアログボックスが表示されます。以降のダイアログボックスで，種別の変更やインストールコンポーネントの変更をし，新規インストールの場合と同様にインストールを進めてください。インストールが終了すると，［メンテナンスの完了］ダイアログボックスが表示されます。

修正

前回インストールしたすべてのコンポーネントを再インストールしたい場合に選択

します。
「修正」を選択して［次へ］ボタンをクリックすると，処理状況を示すダイアログボックスが表示されます。再インストールが完了すると，［メンテナンスの完了］ダイアログボックスが表示されます。

削除

すべてのコンポーネントを削除し，製品をアンインストールしたい場合に選択します。
「削除」を選択して［次へ］ボタンをクリックすると，アンインストールが開始されます。アンインストール時に表示される確認ダイアログボックスについては，「1.4 JP1/NETM/DM をアンインストールする」を参照してください。アンインストールが完了すると，［メンテナンスの完了］ダイアログボックスが表示されます。

なお，次に示すプログラムの場合，コンポーネントを選択できないため，メンテナンスウィザードは表示されないでプログラムの上書きインストールが実行されます。

- JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature
- JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature（中継システムにインストールされている場合）

1.4　JP1/NETM/DM をアンインストールする

JP1/NETM/DM をアンインストールする方法について説明します。

1.4.1　アンインストール手順

JP1/NETM/DM をアンインストールするには次の二つの方法があります。

- ［コントロールパネル］の［アプリケーションの追加と削除］，［プログラムの追加と削除］または［プログラムと機能］からアンインストールする。
- メンテナンスウィザードの「削除」を選択してアンインストールする。

どちらの場合も，アンインストール中に次のことを確認するダイアログボックスが表示されます。

- **選択したアプリケーション，およびすべてのコンポーネントを完全に削除しますか？**
  必ず表示されます。［OK］ボタンをクリックすると，アンインストールが開始されます。
- **JP1/Cm2/NNM に登録されたシンボルを削除します**
  「JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ」が削除された場合に表示されます。「はい」または「いいえ」を選択します。
- **上位システムが管理するシステム構成情報から，このホストの情報を削除します**
  中継マネージャの「サーバ本体機能」，「中継システム」，または「クライアント」が削除された場合に表示されます。「はい」または「いいえ」を選択します。
  「いいえ」を選択した場合，または「はい」を選択したが上位システムへの通知に失敗した場合は，上位の配布管理システムで，アンインストールしたホストを削除してください。配布管理システムでのホストの削除方法については，「9.1　システム構成情報の手動メンテナンス」を参照してください。

アンインストールが終了すると，［メンテナンスの完了］ダイアログボックスが表示されます。

1.4.2　アンインストール時の注意事項

JP1/NETM/DM をアンインストールするときの注意事項を次に示します。

- Windows NT でアンインストールする場合，Administrator 権限，またはアンインストールするプログラムをインストールした管理者ユーザ名でログオンしてください。
- JP1/NETM/DM のプログラムを終了させてから，アンインストールを実行してください。JP1/NETM/DM のアイコングループから起動する JP1/NETM/DM のプログラム実行時にアンインストールをすると，異常終了する場合があります。
- 「Asset Information Manager Limited」がインストールされている場合，IIS Admin Services サービスを停止してからアンインストールを実行してください。

- クライアントがインストールされた Windows NT で，1 台の PC に複数のユーザがおのおののユーザ ID でログオンしている場合，セットアップで「NETM_DM_P スタートアップフォルダを作成する」チェックボックスを選択すると，各人の［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダが作成されます。クライアントをアンインストールしたときは，アンインストールを実行したユーザの［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダだけが削除されます。その他のユーザは各自で［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダを削除してください。
- JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Manager，または JP1/NETM/DM Client の中継システムとクライアントがインストールされている PC では，アンインストールを実行したプログラムの環境だけがアンインストールされます。もう一方のプログラムの環境は削除されません。
- JP1/NETM/DM Client - Base をアンインストールすると，JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品も同時にアンインストールされます。
- JP1/NETM/DM Encryption Option には，アンインストーラがありません。前提プログラムである JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ），または JP1/NETM/DM Client をアンインストールすると JP1/NETM/DM Encryption Option もアンインストールされます。
- 「Asset Information Manager Limited」を使用している場合，アンインストールしても，インストールフォルダやファイル，Microsoft Internet Information Services の仮想ディレクトリが削除されないで残ることがあります。再インストールする場合は，残ったフォルダを削除してください。
- アンインストール時に，「上位システムが管理するシステム構成情報から，このホストの情報を削除します」に対して「はい」を選択した場合，そのホストのホスト識別子管理ファイルが削除されるため，ホスト識別子が無効になります。
- 「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースが Microsoft SQL Server または Oracle の場合，アンインストールしてもデータベース内のテーブルは削除されません。削除するときは，DBMS の機能を使用して削除してください。Embedded RDB を使用する場合は，アンインストールするとデータベース内のテーブルも削除されます。アンインストールしたあとに使用する場合は，あらかじめバックアップを取得しておいてください。

2 JP1/NETM/DM Managerをインストールする

この章では，JP1/NETM/DM Manager およびコンポーネントのインストール方法について説明します。

2.1 JP1/NETM/DM Manager のインストール手順

2.2 リモートインストールマネージャをインストールする

2.3 Asset Information Manager Limited をインストールする

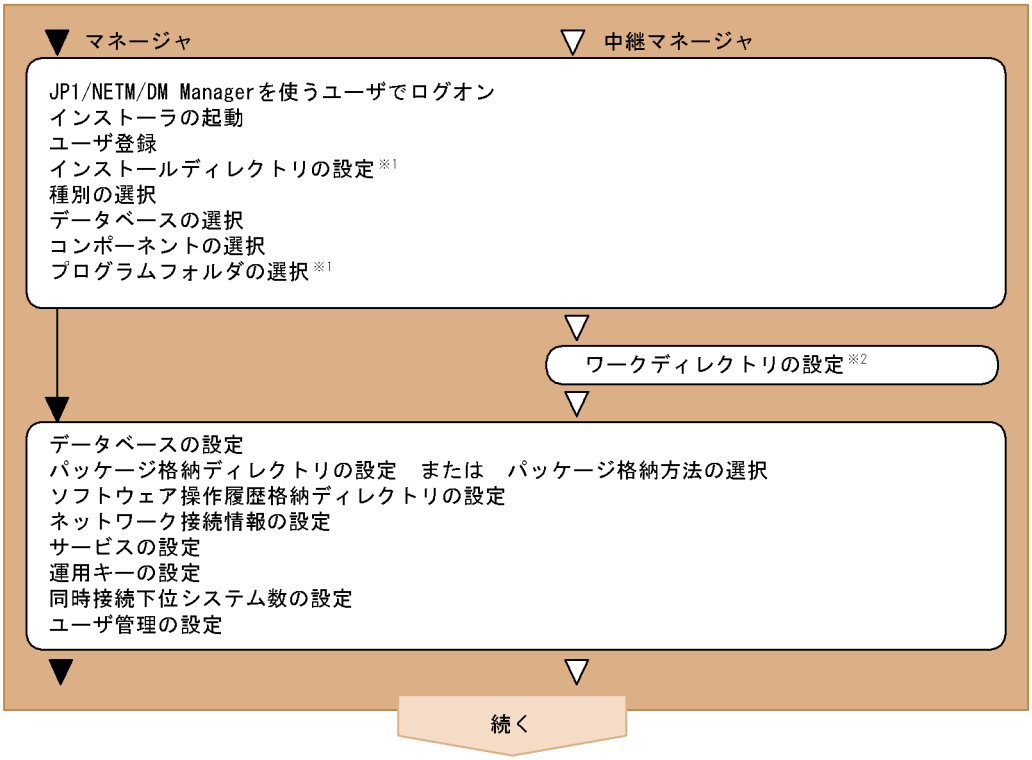
2.4 WSUS サーバへ JP1/NETM/DM をインストールする

2.5 JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ JP1/NETM/DM をインストールする

2.1　JP1/NETM/DM Manager のインストール手順

JP1/NETM/DM Manager をマネージャまたは中継マネージャとしてインストールする手順を図 2-1 および図 2-2 に示します。

図 2-1　JP1/NETM/DM Manager のインストール手順（1/2）

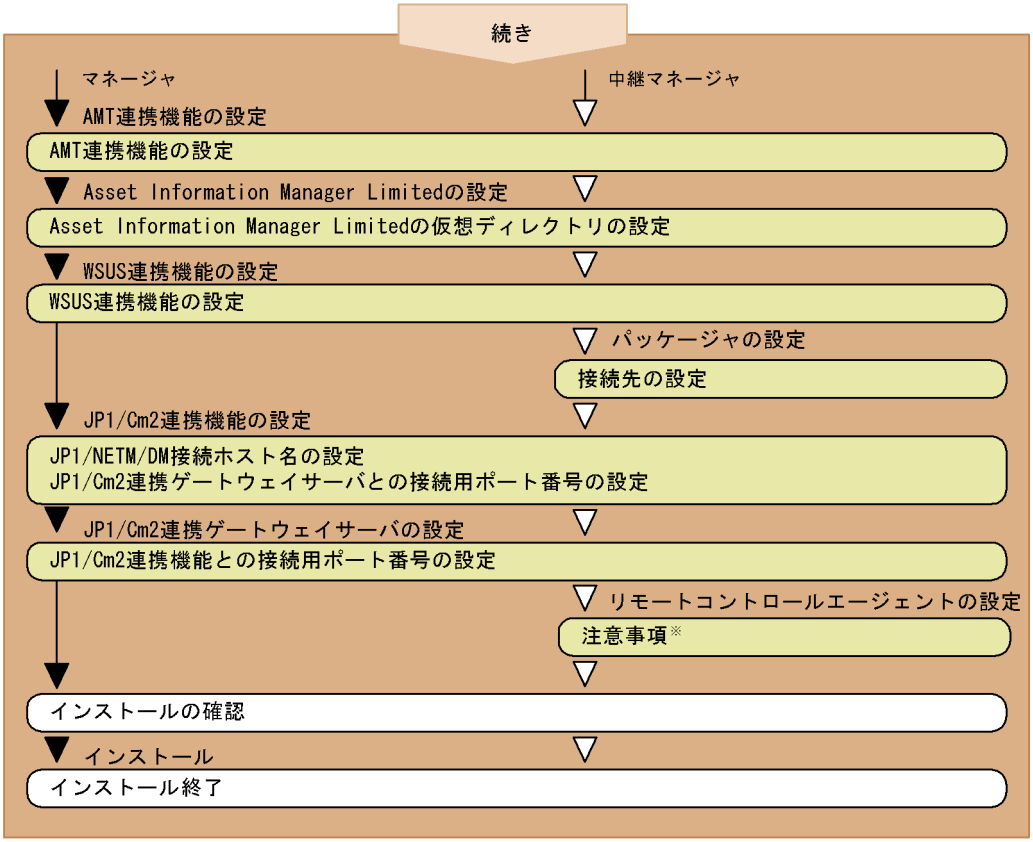


（凡例）

：「サーバ」コンポーネントのインストール手順

注※1　JP1/NETM/DM Managerのプログラムフォルダが作成されていないときだけ表示されます。
注※2　「サーバ」の「サーバ本体機能」を選択した場合だけ表示されます。

図 2-2　JP1/NETM/DM Manager のインストール手順（2/2）



（凡例）

：「サーバ」コンポーネントのインストール手順

：オプションのコンポーネントをインストールする場合に必要な設定

注※　JP1/NETM/DM Managerのプログラムフォルダが作成されていないときだけ表示されます。

インストールコンポーネントとして，「サーバ」のほかに「Asset Information Manager Limited」，「WSUS 連携機能」，「パッケージャ」，「JP1/Cm2 連携機能」，「JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ」，または「リモートコントロールエージェント」を選択した場合は，これらの設定もインストール時に行います。

「サーバ」の「リモートインストールマネージャ」は，「サーバ」とは別のマシンにインストールできます。この場合，「サーバ本体機能」はインストールしません。「リモートインストールマネージャ」のインストール手順については，「2.2　リモートインストールマネージャをインストールする」を参照してください。

「Asset Information Manager Limited」は，「サーバ本体機能」とは別のマシンにインストールできます。ただし，前提コンポーネントとしてリモートインストールマネージャ

が必要です。

「Asset Information Manager Limited」をインストールする場合の注意事項と，「Asset Information Manager Limited」を JP1/NETM/DM とは別のマシンにインストールする手順については，「2.3　Asset Information Manager Limited をインストールする」を参照してください。

「WSUS 連携機能」は WSUS サーバに，「JP1/Cm2 連携機能」は JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャにインストールします。JP1/NETM/DM Manager のインストール媒体からこれらのコンポーネントだけインストールする手順については，「2.4　WSUS サーバへ JP1/NETM/DM をインストールする」，または「2.5　JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ JP1/NETM/DM をインストールする」を参照してください。

また，「JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ」は，「サーバ」の「サーバ本体機能」と同じ PC にインストールしてください。

2.1.1　ログオン

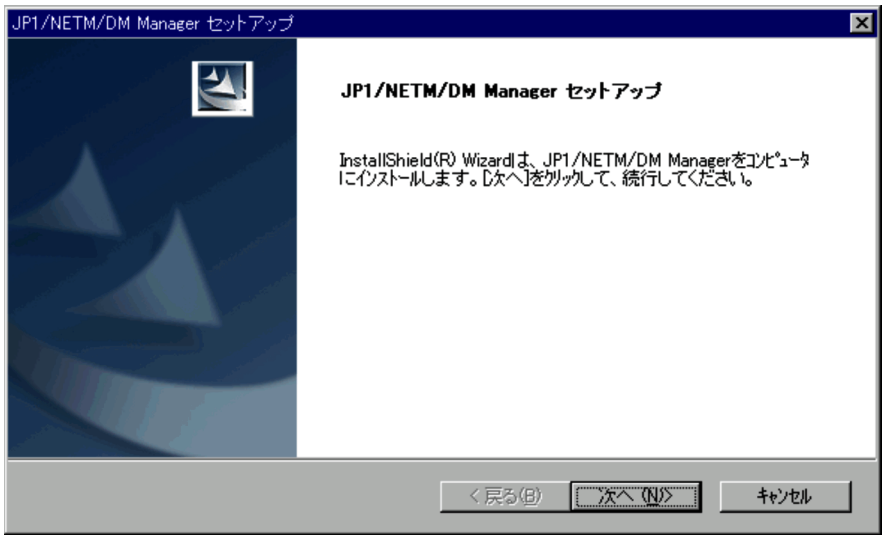
Administrator 権限を持ったユーザの名前でログオンしてください。このユーザが JP1/NETM/DM Manager を操作するユーザになります。

2.1.2　インストーラの起動

提供媒体を CD-ROM ドライブに入れ，起動したインストーラの指示に従ってインストールを進めます。

インストーラを起動すると，JP1/NETM/DM Manager のインストールプログラムが起動し，［JP1/NETM/DM Manager セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 2-3 ［JP1/NETM/DM Manager セットアップ］ダイアログボックス

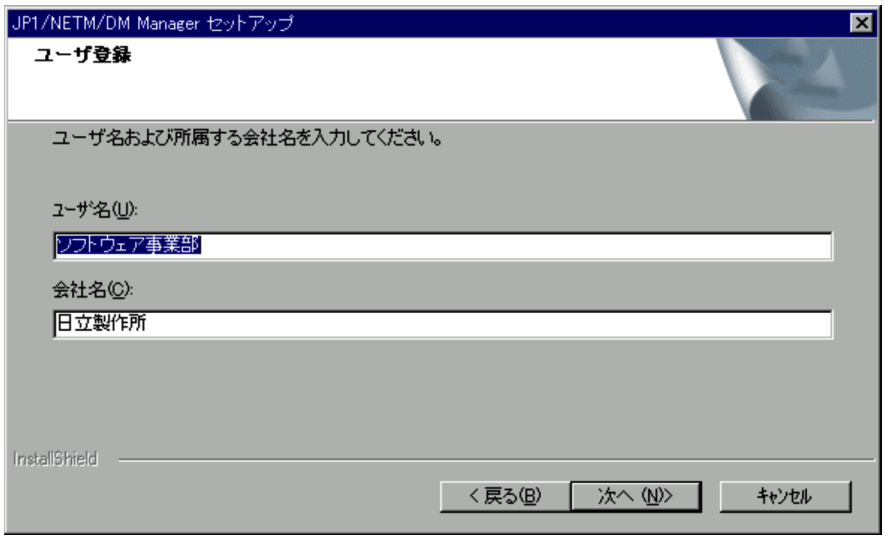


［次へ］ボタンをクリックすると，インストールを続行します。インストールを中止するときは［キャンセル］ボタンをクリックします。また，以降のダイアログボックスで［戻る］ボタンをクリックすると，一つ前のダイアログボックスに戻ります。

2.1.3 ユーザ登録

ユーザの名前と所属する会社名を［ユーザ登録］ダイアログボックスで登録します。

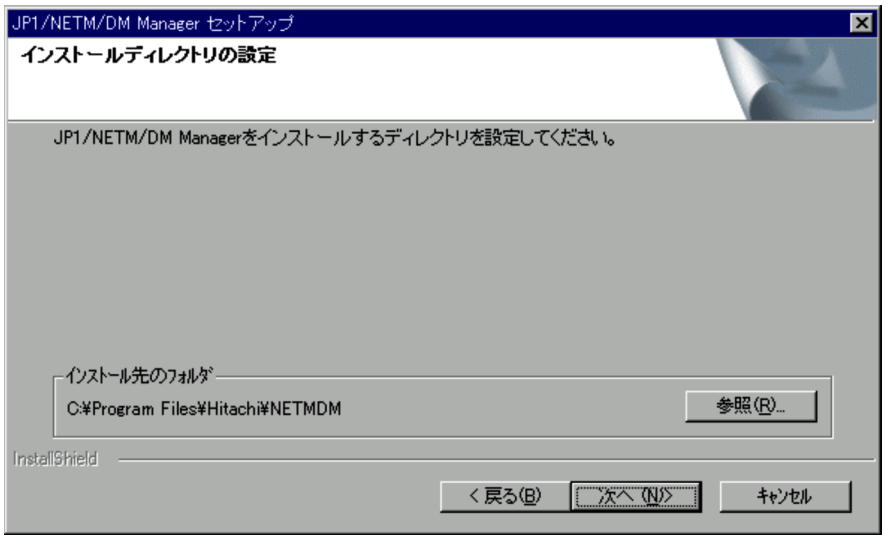
図 2-4 ［ユーザ登録］ダイアログボックス



2.1.4 インストールディレクトリの設定

JP1/NETM/DM Manager をインストールするディレクトリを設定します。このダイアログボックスは，新規インストール時だけ表示されます。バージョンアップ時は，既存のインストールディレクトリに自動的にインストールされます。

図 2-5 ［インストールディレクトリの設定］ダイアログボックス



デフォルトのインストール先は，C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM です（C: は OS がインストールされているドライブ名）。ただし，OS が 64 ビット版の Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) のコンピュータにインストールする場合，デフォルトのインストール先は C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥NETMDM になります。この場合は，マニュアル中の「Program Files」を「Program Files (x86)」に置き換えてお読みください。

デフォルトのインストール先ディレクトリを変更するときは，［参照］ボタンをクリックしてディレクトリを設定します。インストール先ディレクトリを変更するときの注意事項を次に示します。

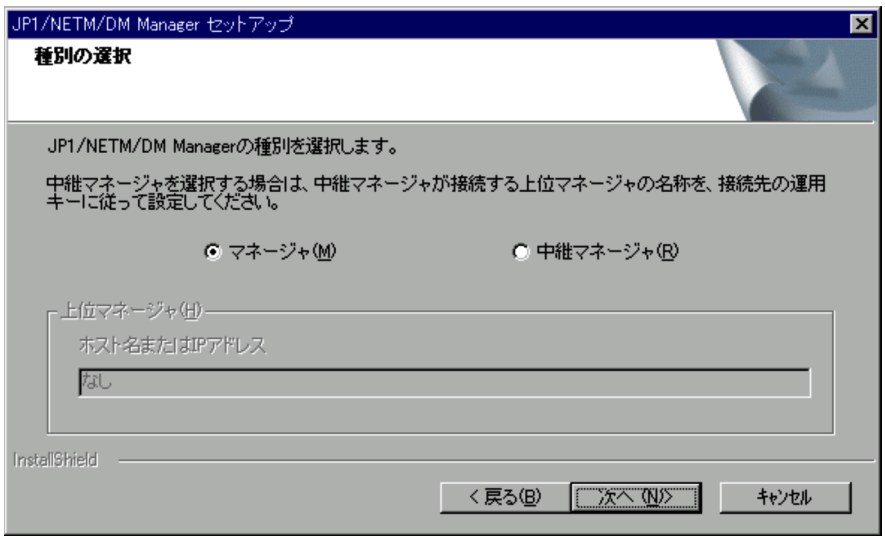
- インストール先ディレクトリは，半角英数字，半角スペース，および次に示す半角記号で指定してください。
  「_」「¥」「.」「:」「(」「)」
- インストール先ディレクトリの最後に，「¥」を付けないでください。例えば，「C:¥NETMDM¥」のようには指定しないでください。
- インストール先ディレクトリにドライブ名だけを指定しないでください。例えば，「C:」のようには指定しないでください。
- レジストリキー「HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Control¥FileSystem」の「NtfsDisable8dot3NameCreation」の値が「1」である PC に JP1/Cm2 連携機能

をインストールする場合は，インストール先ディレクトリにスペースを含めないでください。スペースを含めると，JP1/Cm2 連携機能を使用できません。

2.1.5　種別の選択

JP1/NETM/DM Manager の種別を選択します。マネージャとして使用する場合は，「マネージャ」，中継マネージャとして使用する場合は「中継マネージャ」を選択してください。中継マネージャを選択した場合は，上位マネージャのホスト名または IP アドレスを接続先の運用キーに従って設定してください。デフォルトは「マネージャ」です。

図 2-6　［種別の選択］ダイアログボックス



なお，バージョンアップ時の注意事項を次に示します。

- JP1/NETM/DM Manager が「中継マネージャ」としてインストールされていた場合，「マネージャ」は選択できません。
- JP1/NETM/DM Client がインストールされていた場合，「中継マネージャ」は選択できません。

2.1.6　データベースの選択

JP1/NETM/DM Manager の管理データベースとして使用するデータベースの種類を選択します。このダイアログボックスは，「サーバ」，「Asset Information Manager Limited」，「JP1/Cm2 連携機能」のどれかを初めてインストールする場合に表示されます。

選択できるデータベースの種類は次のとおりです。

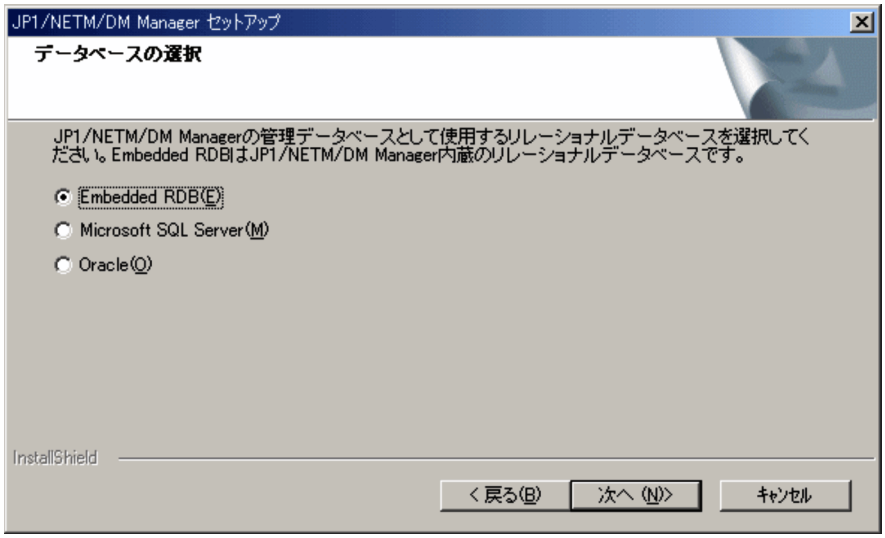
● Embedded RDB

● Microsoft SQL Server

● Oracle ※

注※　OS が Windows Server 2008 の場合は表示されません。

図 2-7　［データベースの選択］ダイアログボックス



デフォルトは Embedded RDB です。Embedded RDB は，JP1/NETM/DM Manager にあらかじめ組み込まれたデータベースです。

なお，JP1/NETM/DM Manager のインストールパスに半角かたかな，または全角文字が含まれる場合，「Embedded RDB」は選択できません。

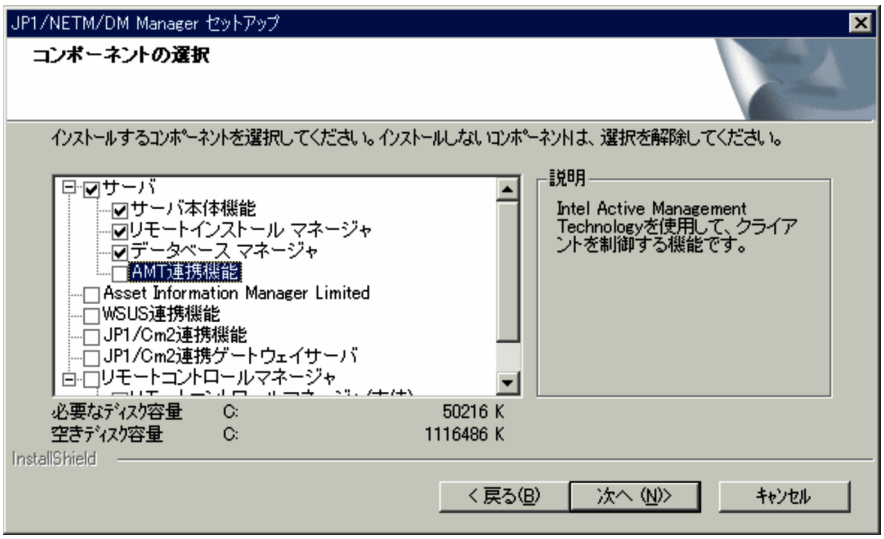
また，データベースに Embedded RDB を選択した場合，「Asset Information Manager Limited」をインストールするときは，「Asset Information Manager Limited」のインストール先のドライブの直下に「tmp」フォルダが作成されます。「tmp」フォルダは，Embedded RDB を使用する場合に必要ですので，削除しないでください。

簡易データベースを使用した JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM Manager から上書きインストールする場合に，「Embedded RDB」を選択できないときは，「付録 A.2 データベースの種類の変更」の手順に従って JP1/NETM/DM Manager をインストールしてください。

2.1.7　コンポーネントの選択

インストールするコンポーネントおよびサブコンポーネントを選択します。バージョンアップ時は，コンポーネントやサブコンポーネントの追加はできますが，すでにインストールされているものは削除できません。

図 2-8 ［コンポーネントの選択］ダイアログボックス



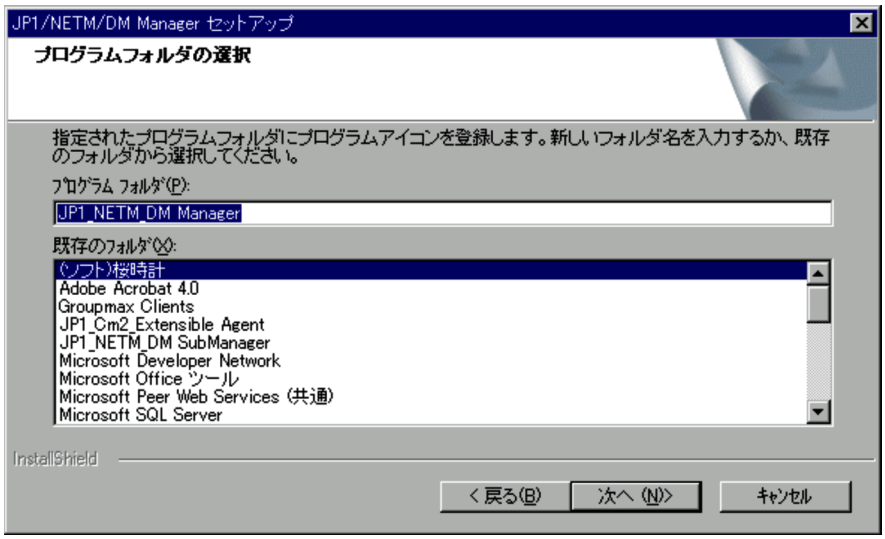
サーバの種別として「マネージャ」と「中継マネージャ」のどちらを選択したかで，表示されるコンポーネントは異なります。マネージャの場合および中継マネージャの場合の，それぞれにインストールできるコンポーネントについては，「1.1　プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成」を参照してください。

サブコンポーネントは，コンポーネント名の下にツリー形式で表示されます。

2.1.8　プログラムフォルダの選択

JP1/NETM/DM Manager のアイコンの登録先となるプログラムフォルダを選択します。このダイアログボックスは，新規インストール時だけ表示されます。バージョンアップ時は，既存のプログラムフォルダが自動的に使用されます。

図 2-9 ［プログラムフォルダの選択］ダイアログボックス



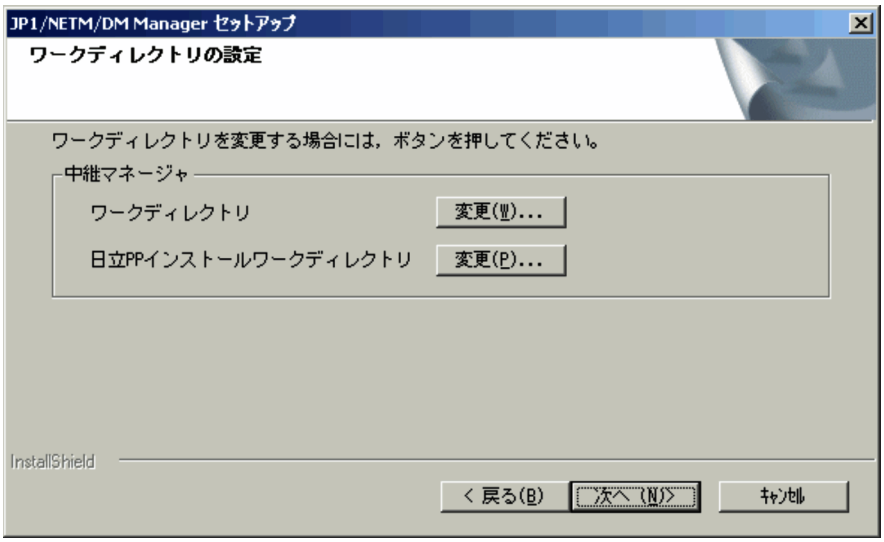
デフォルトでは，［JP1_NETM_DM Manager］グループにアイコンが登録されます。既存のプログラムフォルダから選択したり，新しいプログラムフォルダを作成したりできます。ただし，プログラムフォルダには「¥」を使用したフォルダ名を指定しないでください。

［次へ］ボタンをクリックするとインストールを続行します。

2.1.9 ワークディレクトリの設定

中継マネージャを選択して，「サーバ」の「サーバ本体機能」をインストールする場合に表示されます。各項目の右側の［変更］ボタンをクリックすると，それぞれのワークディレクトリを変更できます。

図 2-10　［ワークディレクトリの設定］ダイアログボックス



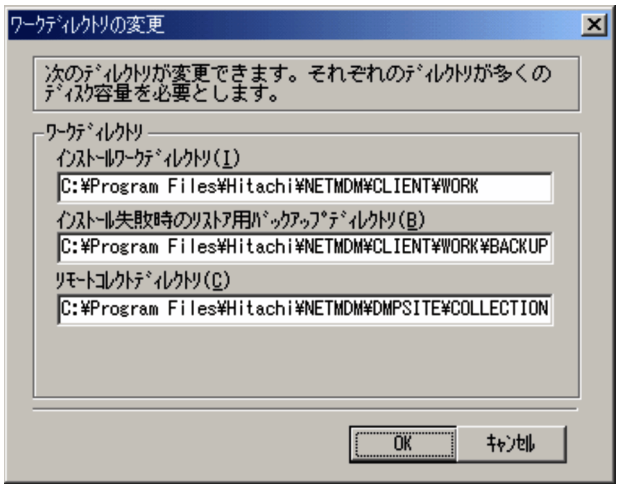
（1）ワークディレクトリの変更

中継マネージャがリモートインストールまたはリモートコレクト時に使用するための，各デフォルトワークディレクトリを変更できます。ワークディレクトリは，半角英数字，半角かたかな，半角スペース，および次に示す半角記号で指定してください。

「_」「¥」「.」「:」「(」「)」

変更後，［OK］ボタンをクリックすると［ワークディレクトリの設定］ダイアログボックスに戻ります。

図 2-11　［ワークディレクトリの変更］ダイアログボックス



インストールワークディレクトリ

中継マネージャのクライアント機能が，パッケージをインストールするときに使用します。インストールするパッケージと同じ容量が必要です。通常，空き容量が 50 メガバイト以上のドライブを指定することをお勧めします。

インストール失敗時のリストア用バックアップディレクトリ

中継マネージャのクライアント機能が，リモートインストールするソフトウェアのバックアップを保存するときに使用します。

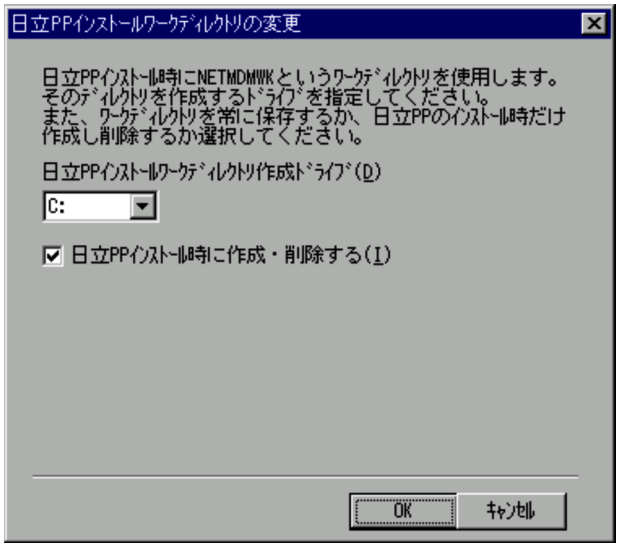
リモートコレクトディレクトリ

中継マネージャがリモートコレクトしたファイルを一時的に保管するときに使用します。

(2) 日立 PP インストールワークディレクトリの変更

日立プログラムプロダクトのインストールワークディレクトリ（NETMDMWK ディレクトリ）のドライブを変更できます。設定したあとに［OK］ボタンをクリックすると［ワークディレクトリの設定］ダイアログボックスに戻ります。

図 2-12 ［日立 PP インストールワークディレクトリの変更］ダイアログボックス



日立 PP インストールワークディレクトリ作成ドライブ

日立プログラムプロダクトのインストールに使用するワークディレクトリを作成するドライブを選択してください。なお，ネットワークドライブは指定しないでください。ネットワークドライブを指定した場合，動作は保証されません。

日立 PP インストール時に作成・削除する

日立プログラムプロダクトをインストールしたあと，ワークディレクトリを削除するかどうかを選択できます。ワークディレクトリを削除する場合は，「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにします。デフォルトはオ

ンです。
「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにした場合の注意事項を次に示します。

- Windows NT で，「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにする場合，作成したドライブの「読み取り」，「書き込み」，および「削除」のアクセス権が必要です。これらのアクセス権が設定されていないと日立プログラムプロダクトのインストールが失敗します。
- 「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにした場合でも，インストールしたあとに NETMDMWK ディレクトリが残るときがあります。その場合，PC の再起動時，またはポーリング時に削除されます。

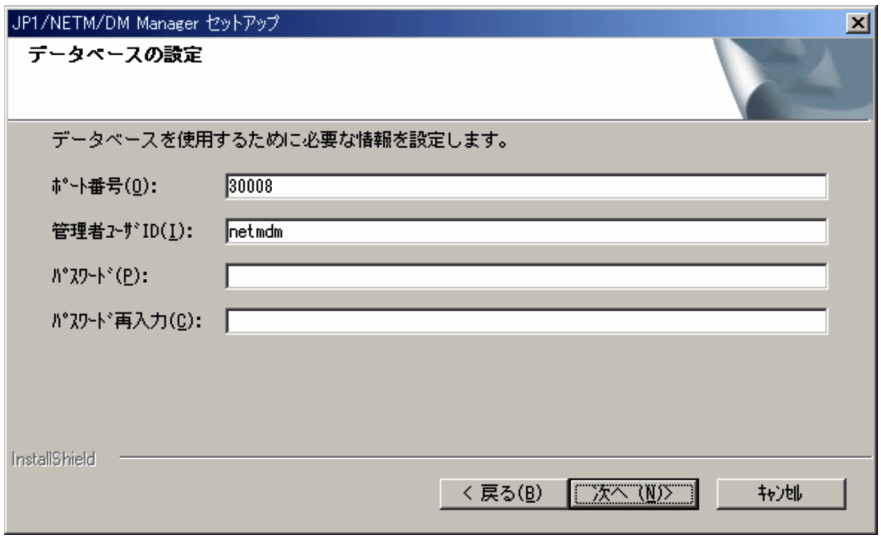
2.1.10　データベースの設定

JP1/NETM/DM が管理する情報を記録するデータベースを選択し，データベースを使用するために必要な情報を設定します。このダイアログボックスは，「サーバ」，「Asset Information Manager Limited」，または「JP1/Cm2 連携機能」のどれかを初めてインストールする場合に表示されます。使用するデータベースによって，表示されるダイアログボックスは異なります。

（1）Embedded RDB の場合

［データベースの選択］ダイアログボックスで「Embedded RDB」を選択した場合は，次の画面が表示されます。

図 2-13　［データベースの設定］ダイアログボックス（Embedded RDB の場合）



ポート番号

Embedded RDB へ接続するためのポート番号を指定します。デフォルトは 30008

です。

管理者ユーザ ID

Embedded RDB へ接続するためのログイン ID を指定します。先頭が英字の 8 文字以内の半角英数字で指定します。デフォルトは「netmdm」です。

パスワード

Embedded RDB へ接続するためのパスワードを入力します。先頭が英字の 30 文字以内の半角英数字で入力します。なお，スペースは使用できません。

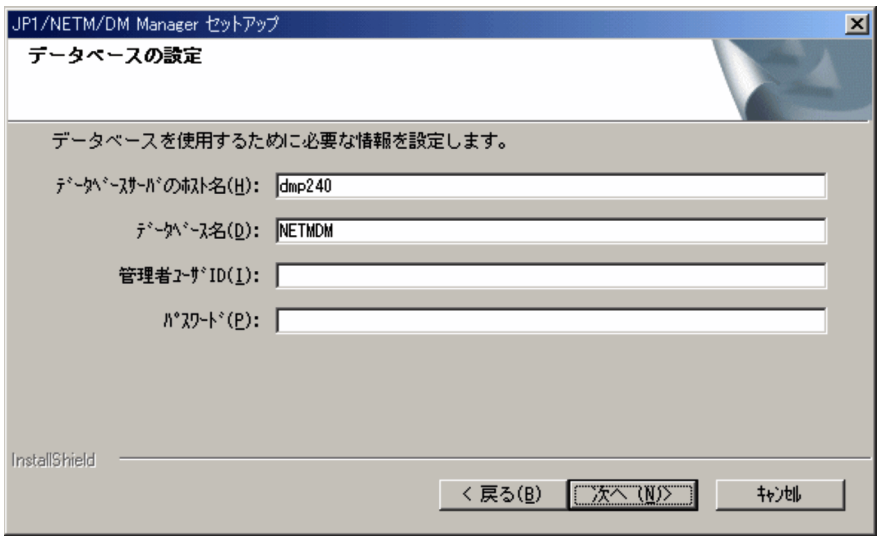
パスワード再入力

「パスワード」で入力した内容を，もう一度入力します。

（2） Microsoft SQL Server の場合

［データベースの選択］ダイアログボックスで「Microsoft SQL Server」を選択した場合は，次の画面が表示されます。

図 2-14 ［データベースの設定］ダイアログボックス（Microsoft SQL Server の場合）



データベースサーバのホスト名

Microsoft SQL Server のホスト名を指定します。デフォルトは自ホスト名です。
名前付きインスタンスを使用する場合は，次の形式でホスト名を指定してください。
入力できるホスト名の長さは，インスタンス名も含めて半角で 64 文字以内です。
データベースサーバのホスト名¥インスタンス名

データベース名

データベースの名称を指定します。デフォルトは「NETMDM」です。

管理者ユーザ ID

Microsoft SQL Server へ接続するためのログイン ID を指定します。

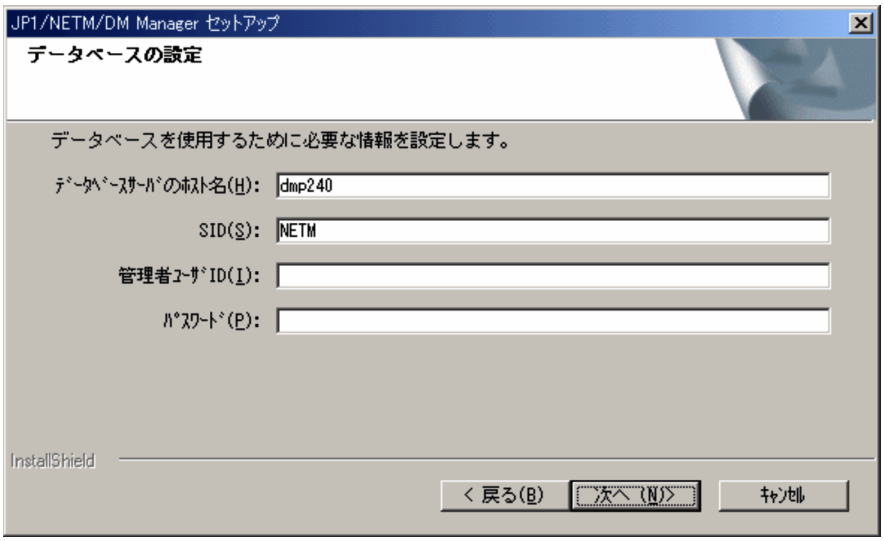
パスワード

Microsoft SQL Server へ接続するためのパスワードを入力します。入力できる長さは，半角で 30 文字以内です。

（3） Oracle の場合

［データベースの選択］ダイアログボックスで「Oracle」を選択した場合は，次の画面が表示されます。

図 2-15 ［データベースの設定］ダイアログボックス（Oracle の場合）



データベースサーバのホスト名

Oracle Database Server のホスト名を指定します。デフォルトは自ホスト名です。

SID

Oracle SID を指定します。デフォルトは「NETM」です。

管理者ユーザ ID

Oracle へ接続するためのログイン ID を指定します。

パスワード

Oracle へ接続するためのパスワードを入力します。入力できる長さは，半角で 30 文字以内です。

2.1.11 パッケージの格納先の設定

サーバをインストールする場合，パッケージを格納するデータベースや格納先ディレクトリを設定します。JP1/NETM/DM の管理情報の記録に使用するデータベースの種類に

よって，表示されるダイアログボックスは異なります。

（1） Embedded RDB または Oracle の場合

［データベースの選択］ダイアログボックスで「Embedded RDB」または「Oracle」を選択し，「サーバ」の「サーバ本体機能」をインストールする場合，［パッケージ格納ディレクトリの設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 2-16 ［パッケージ格納ディレクトリの設定］ダイアログボックス

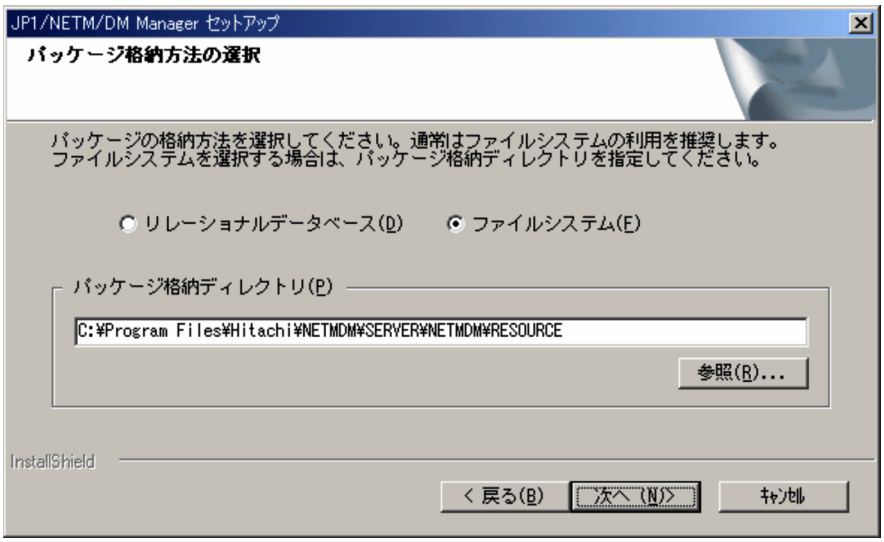


ここでは，パッケージを保管するディレクトリを設定します。デフォルトのパッケージ格納ディレクトリを変更するときは，［参照］ボタンをクリックして，パッケージ格納ディレクトリを設定します。

（2） Microsoft SQL Server の場合

［データベースの選択］ダイアログボックスで「Microsoft SQL Server」を選択し，「サーバ」の「サーバ本体機能」をインストールする場合，［パッケージ格納方法の選択］ダイアログボックスが表示されます。

図 2-17　［パッケージ格納方法の選択］ダイアログボックス



JP1/NETM/DM の管理情報の記録に Microsoft SQL Server を使用する場合は，パッケージの格納先をリレーショナルデータベース（Microsoft SQL Server）にするか，またはファイルシステムにするか選択できます。ファイルシステムの使用を推奨しますが，Microsoft SQL Server をパッケージ格納データベースに使用してもかまいません。デフォルトは「ファイルシステム」です。

「ファイルシステム」を選択した場合は，パッケージの格納ディレクトリを指定してください。

パッケージ格納ディレクトリ

デフォルトのパッケージ格納ディレクトリを変更するときは，［参照］ボタンをクリックして，パッケージ格納ディレクトリを設定します。

（3）パッケージの格納先設定時の注意事項

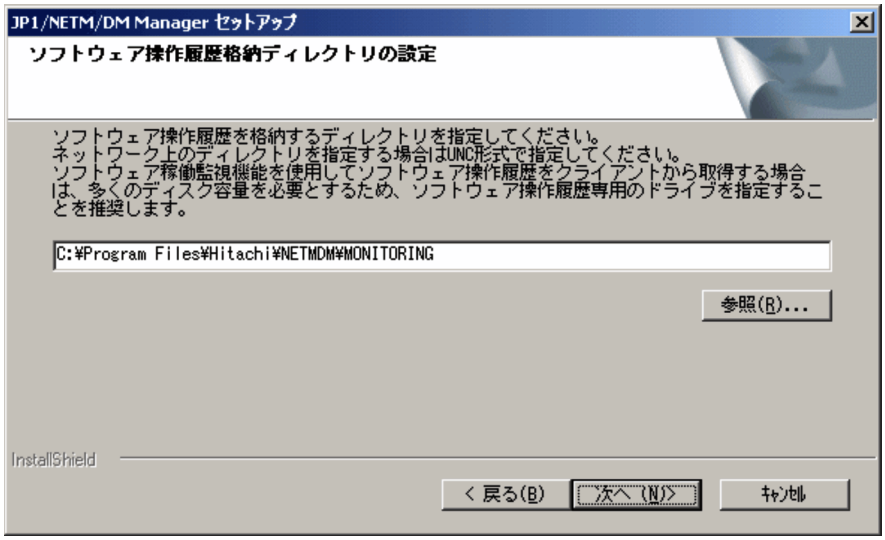
バージョンアップ時やインストール内容の変更時にパッケージの格納先を変更する場合は，次の点に注意してください。

- 変更前のパッケージ格納ディレクトリに格納されているパッケージデータは，変更後のパッケージ格納ディレクトリへ移動する必要があります。
  パッケージを移動しない場合，以前に作成したリモートインストールのジョブなどがエラーになります。
- パッケージの格納先をリレーショナルデータベースからファイルシステムに変更した場合，インストールが完了したあとに，データベースマネージャから「データベース上の資源をファイルシステムに移行する」を実行してください。データベースマネージャでの操作方法については，「7.5.3　データベース上の資源をファイルシステムに移行する（Microsoft SQL Server）」を参照してください。

2.1.12　ソフトウェア操作履歴格納ディレクトリの設定

ソフトウェアの稼働状況を監視して操作履歴を取得する場合に，クライアントごとの操作履歴を格納するディレクトリを設定します。このダイアログボックスは，「サーバ」の「サーバ本体機能」をインストールする場合に表示されます。

図 2-18　［ソフトウェア操作履歴格納ディレクトリの設定］ダイアログボックス



操作履歴を格納するには多くのディスク容量が必要です。そのため，操作履歴格納用のドライブを用意することをお勧めします。

操作履歴格納ディレクトリに，「D:¥」のようなドライブ直下は設定できません。デフォルトの操作履歴格納ディレクトリを変更する場合は，［参照］ボタンをクリックして，操作履歴格納ディレクトリを設定します。

操作履歴格納ディレクトリにネットワークドライブを指定する場合，UNC 形式（¥¥ネットワークドライブ名 ¥ 共有名）で指定してください。例えば，G:¥NETM¥MONITORING のようなドライブ文字が割り当てられている形式は指定できません。また，ネットワークドライブは半角で 127 文字（全角で 63 文字）以内で指定してください。半角記号は「-」，「_」，「¥」，「.」，「:」，「(」，および「)」を指定できます。なお，操作履歴格納ディレクトリには実在するディレクトリを指定してください。

インストールしたあとに操作履歴格納ディレクトリを変更したい場合は，再度インストーラを起動して設定し直してください。なお，操作履歴格納ディレクトリを変更する場合は，操作履歴を移行する必要があります。操作履歴の移行については，マニュアル「運用ガイド 1」の「6.10　ソフトウェアの稼働監視時の注意事項」を参照してください。

操作履歴は，このパネルで設定したディレクトリの下に作成される OPERATION ディレクトリ下に，クライアントごとに格納されます。クライアント 1 台当たりの操作履歴の容量は，操作内容によって異なります。ファイル操作の履歴を取得する場合は，1 日に約

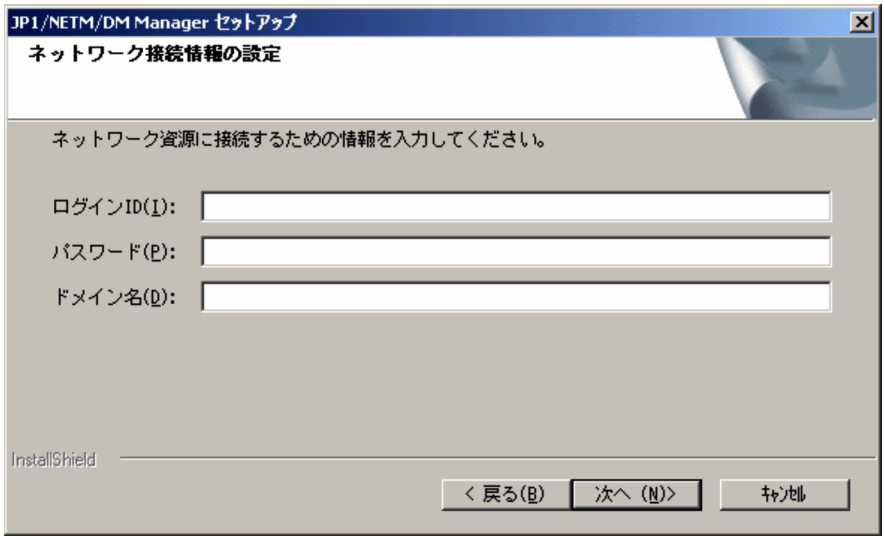
4 メガバイト，取得しない場合は約 1 メガバイトです。

2.1.13　ネットワーク接続情報の設定

操作履歴格納ディレクトリまたは操作履歴退避ディレクトリにネットワークドライブを使用する場合に，ネットワークドライブに接続するための認証情報を設定します。操作履歴格納ディレクトリにローカルドライブを指定した場合は，設定不要です。設定する認証情報の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「2.5.3　操作履歴の取得」を参照してください。

なお，ここで設定した認証情報は，セットアップの［ネットワーク接続］パネルで変更できます。

図 2-19　［ネットワーク接続情報の設定］ダイアログボックス



ログイン ID

ネットワークドライブに接続するためのログイン ID を，半角で 30 文字以内の英数字および記号で指定します。ただし，次に示す半角記号は使用できません。

「¥」，「/」，「*」，「:」，「;」，「,」，「+」，「<」，「=」，「>」，「?」，「|」，「[」，「]」

なお，操作履歴格納ディレクトリおよび操作履歴退避ディレクトリにネットワークドライブを指定する場合は，パスワードおよびドメイン名も必ず指定してください。

パスワード

ネットワークドライブに接続するためのパスワードを，半角で 30 文字以内の英数字および記号で指定します。なお，スペースは使用できません。

ドメイン名

ネットワークドライブに接続するためのドメイン名を，半角で 127 文字以内の英数字および記号で指定します。ただし，次に示す半角記号は使用できません。

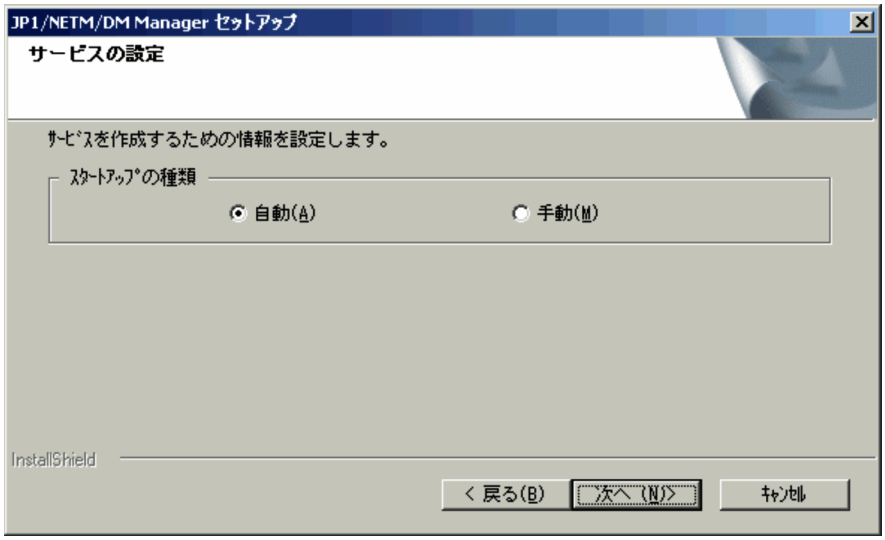
「¥」,「/」,「*」,「:」,「;」,「,」,「+」,「<」,「=」,「>」,「?」,「|」,「[」,「]」

2.1.14　サービスの設定

サービスのスタートアップの種類を設定します。ここでの設定内容は,［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で Remote Install Server のプロパティを表示したときの内容と同じです。

このダイアログボックスは,「サーバ」の「サーバ本体機能」を初めてインストールする場合に表示されます。すでに Remote Install Server サービスが存在する場合，このダイアログボックスは表示されません。

図 2-20　［サービスの設定］ダイアログボックス



スタートアップの種類

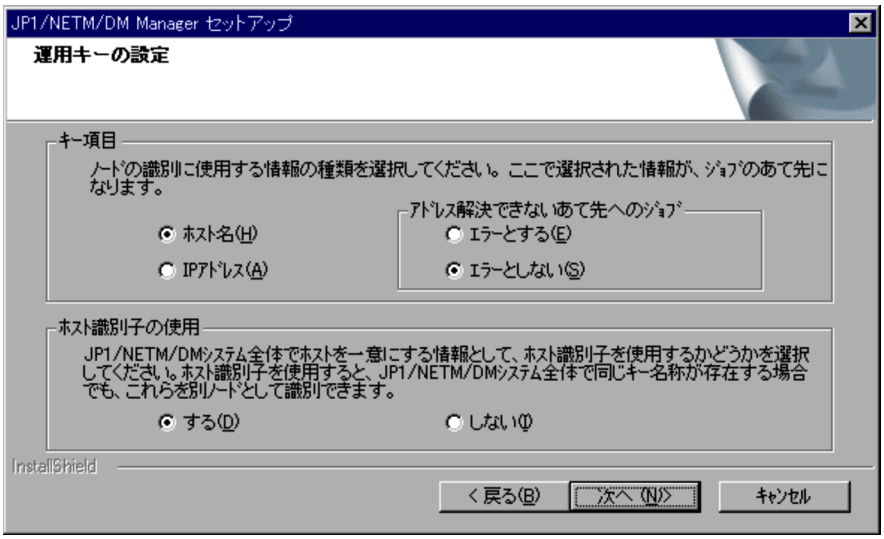
「自動」または「手動」を選択します。デフォルトは「自動」です。

2.1.15　運用キーの設定

ネットワーク上でホストを管理したり，あて先を識別したりするためのキー（**運用キー**）を設定します。このダイアログボックスは,「サーバ」の「サーバ本体機能」，または「Asset Information Manager Limited」をインストールする場合に表示されます。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 2-21　［運用キーの設定］ダイアログボックス



運用キーには，ノード識別キーとホスト識別子があります。「キー項目」では，ノード識別キーを選択します。「ホスト識別子の使用」では，ホスト識別子の使用の有無を設定します。

キー項目

ホスト間で通信するときに，通信する相手先ホストを決定する情報の種類を「ホスト名」または「IP アドレス」で指定します。相手先ホストの運用キーの設定に合わせて「ホスト名」または「IP アドレス」のどちらかを指定してください。デフォルトは「ホスト名」です。ホスト名を選択した場合は，「アドレス解決できないあて先へのジョブ」を設定してください。

なお，JP1 Version 7i の簡易データベースを使用している環境から，JP1 Version 8 へ移行する場合に，運用キーを変更するときは，あらかじめ幾つかの情報を削除しておく必要があります。削除する情報については，「4.2.8(2)　キー項目を変更する場合の注意事項」を参照してください。

アドレス解決できないあて先へのジョブ

ジョブ実行時にあて先のアドレス解決ができなかった場合に，そのジョブをエラーとするかどうかを選択します。デフォルトは「エラーとしない」です。「エラーとしない」を選択した場合，アドレス解決ができないジョブの実行状態は「実行待ち」となります。実在しないあて先へのジョブの実行状態も「実行待ち」のまま変化しません。

WINS サーバを使用している環境では，ジョブ実行時にクライアント PC の電源が OFF の場合，あて先のアドレス解決ができません。したがって「エラーとする」設定では，休日や夜間にジョブを実行してシステム起動時ポーリングでインストールする運用ができなくなります。このような場合は，「エラーとしない」を設定してください。

なお，「エラーとしない」を選択した場合，実行したジョブにアドレス解決でき

ないあて先が含まれていると，リモートインストールマネージャの動作が遅くなるなどの影響があります。

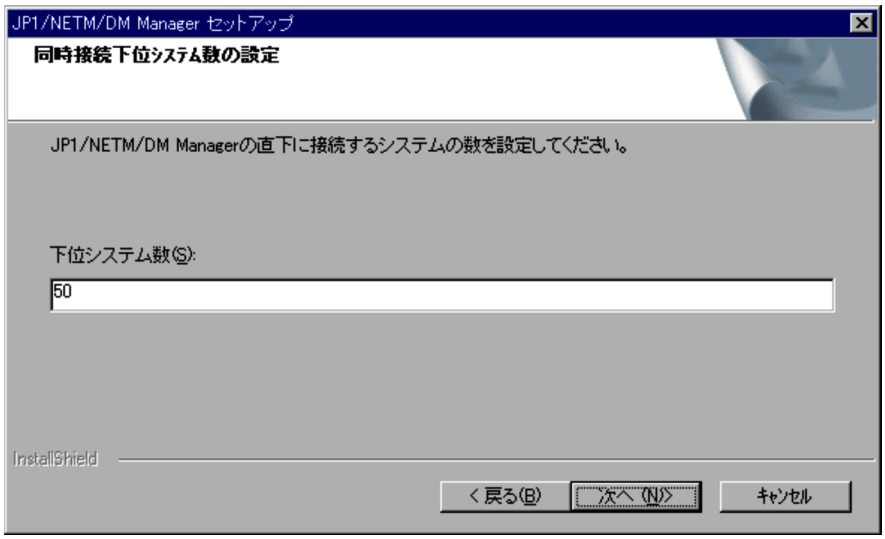
ホスト識別子の使用

JP1/NETM/DM のシステム全体で，ホストを一意に管理する情報としてホスト識別子を使用するかどうかを選択します。デフォルトは「する」です。

2.1.16 同時接続下位システム数の設定

JP1/NETM/DM Manager の直下に接続するシステムの数を設定します。このダイアログボックスは，「サーバ」の「サーバ本体機能」をインストールする場合に表示されます。

図 2-22 ［同時接続下位システム数の設定］ダイアログボックス



設定する値は，次の計算式に従って算出してください。

同時接続下位システム数＝
　直接接続するシステム数＋接続するパッケージャ数× 2

なお，選択したデータベースの種類によって，指定できる同時接続下位システム数の範囲が異なります。

データベース	最小値	最大値	デフォルト
Embedded RDB	4	100	30
Microsoft SQL Server または Oracle	4	256	50

この設定によって，同時に接続する下位システムの数を絞り込むことができます。指定した値を超えた下位システムからの接続は拒否されます。設定した値は，具体的には socket コネクションの数となります。socket コネクションの確立から解放までの間，カ

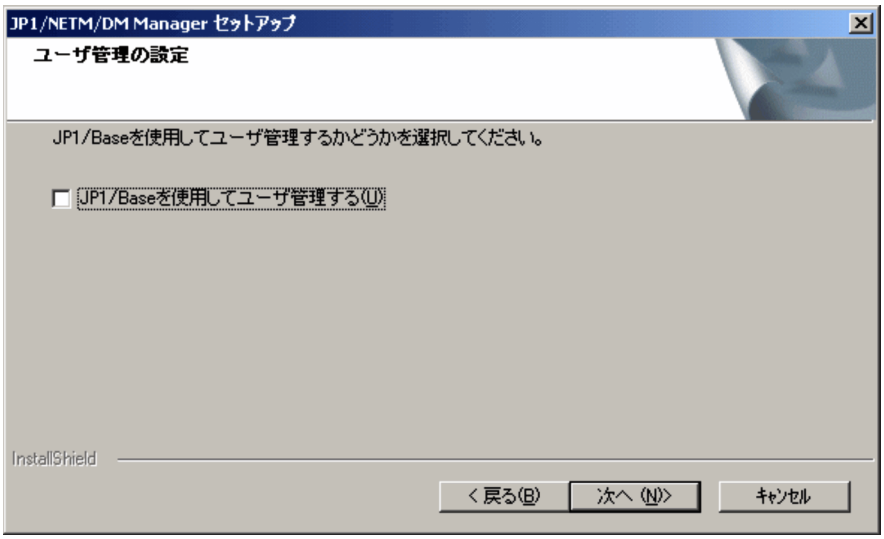
ウントアップされています。

ここで設定した値は，セットアップ時に変更できます。ネットワークのトラフィックが高くなり，パケットの衝突が多いときには，この指定値を小さくして下位システムの同時接続数を減らすことで，トラフィックを下げることができます。

2.1.17　ユーザ管理の設定

JP1/Base と連携して JP1/NETM/DM のユーザを管理するかどうかを選択します。このダイアログボックスは，「サーバ」の「サーバ本体機能」をインストールする場合に表示されます。

図 2-23　［ユーザ管理の設定］ダイアログボックス

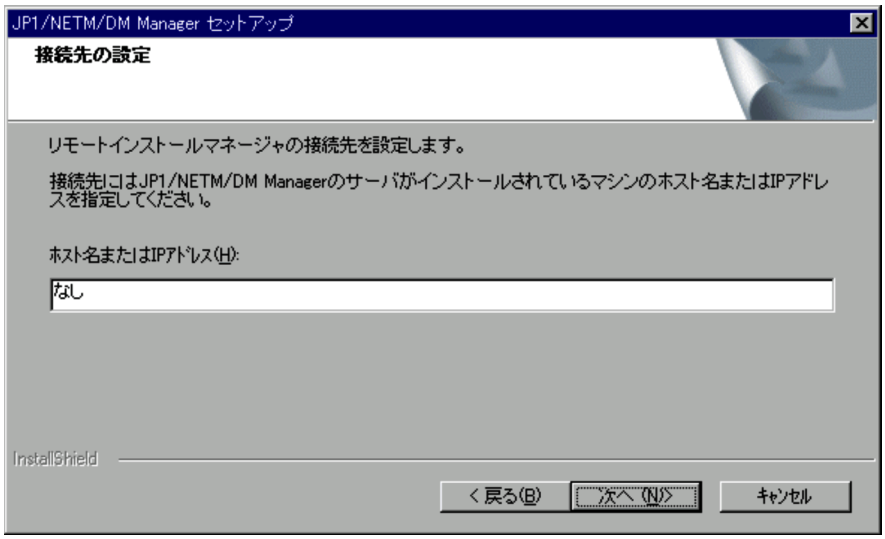


JP1/Base と連携して JP1/NETM/DM のユーザを管理する場合は，チェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

2.1.18　接続先の設定（リモートインストールマネージャ）

サーバとは別の PC に「サーバ」のリモートインストールマネージャ機能だけをインストールする場合は，接続先サーバを設定するための［接続先の設定］ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスで，リモートインストールマネージャから接続するサーバを設定します。接続するサーバには，リモートインストールマネージャと同じバージョンのサーバを設定してください。接続先は，リモートインストールマネージャの起動時に変更できます。

図 2-24 ［接続先の設定］ダイアログボックス



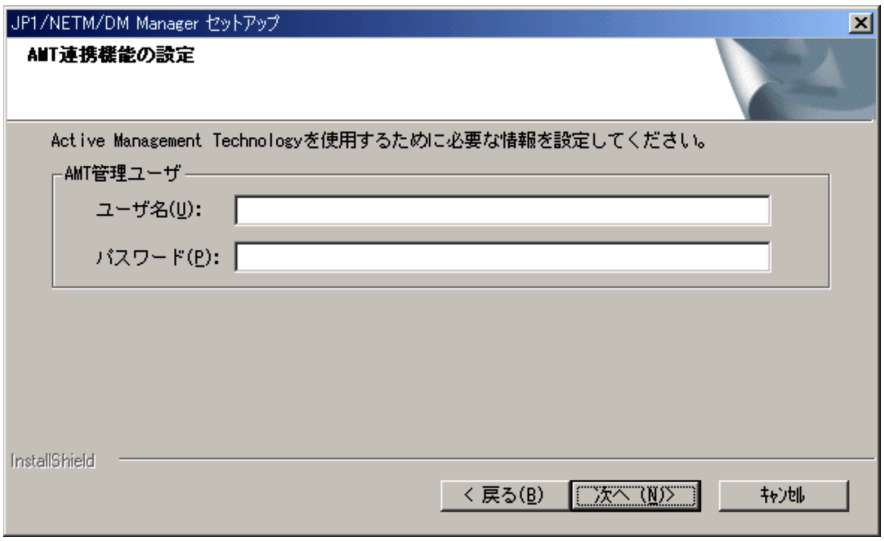
接続先には，「サーバ」の「サーバ本体機能」がインストールされている PC のホスト名または IP アドレスを指定してください。デフォルトは「なし」です。

なお，リモートインストールマネージャだけをインストールした PC では，セットアップの［データベース環境］パネルの設定は無効です。接続先の PC での設定が有効になります。

2.1.19 AMT 連携機能の設定

「AMT 連携機能」を使用して，クライアントを制御するために必要な情報を設定します。

図 2-25　［AMT 連携機能の設定］ダイアログボックス



AMT 管理ユーザ

クライアントの AMT にアクセスするための情報を設定します。ユーザ名とパスワードは，クライアントでの設定と合わせる必要があります。

ユーザ名

クライアントの AMT にアクセスするためのユーザ名を，半角 60 文字以内で指定します。

パスワード

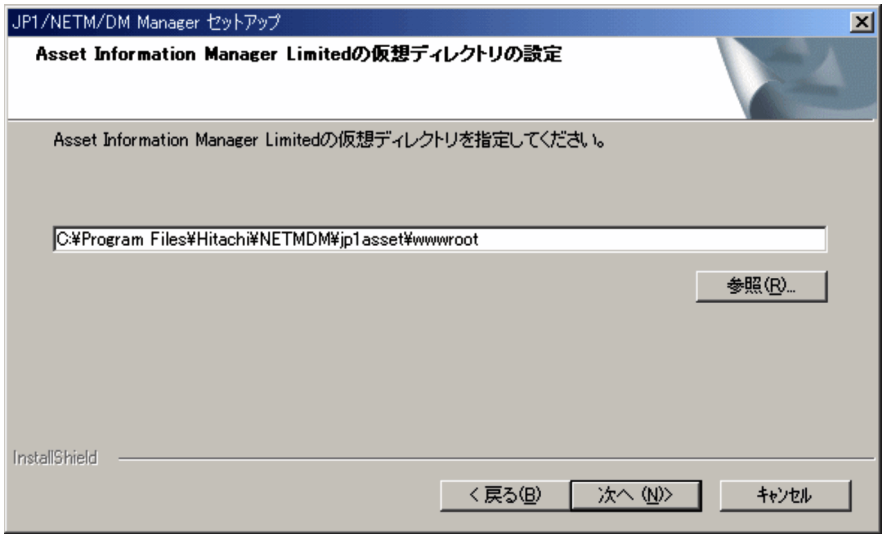
クライアントの AMT にアクセスするためのパスワードを，半角 60 文字以内で指定します。

2.1.20　Asset Information Manager Limited の仮想ディレクトリの設定

「Asset Information Manager Limited」を初めてインストールする場合，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリの設定画面が表示されます。

ここでは，「Asset Information Manager Limited」の実行時に必要なデータや，ログファイルなどが格納される，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリを設定します。

図 2-26　［Asset Information Manager Limited の仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックス



「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリに設定するディレクトリを絶対パスで指定します。デフォルトのパスを変更する場合は，［参照］ボタンをクリックしてパスを設定します。

インストールが完了すると，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリは，「既定の Web サイト」に作成されます。仮想ディレクトリの名称は「jp1asset」となります。

なお，「既定の Web サイト」以外の Web サイトに「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリを設定したい場合は，インストールしたあとに「Asset Information Manager Limited」のセットアップから変更します。「Asset Information Manager Limited」のセットアップについては，「10.1　Asset Information Manager Limited をセットアップする」を参照してください。

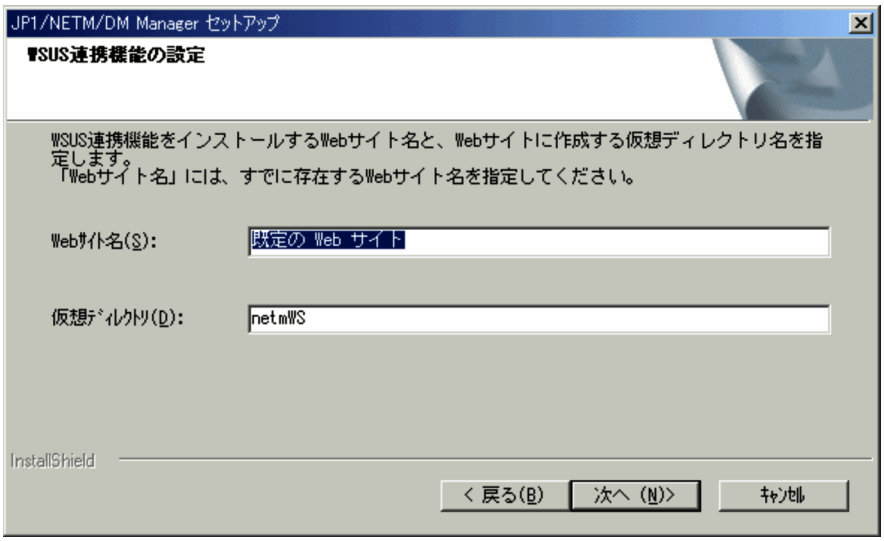
「Asset Information Manager Limited」のインストール方法の詳細については，「2.3 Asset Information Manager Limited をインストールする」を参照してください。

2.1.21　WSUS 連携機能の設定

WSUS サーバに「WSUS 連携機能」をインストールする場合にこのダイアログボックスが表示されます。「WSUS 連携機能」のインストール方法の詳細については，「2.4 WSUS サーバへ JP1/NETM/DM をインストールする」を参照してください。

ここでは，WSUS サーバの Microsoft Internet Information Services に JP1/NETM/DM が連携するための Web サイトと仮想ディレクトリを設定します。

図 2-27　［WSUS 連携機能の設定］ダイアログボックス



Web サイト名

すでに存在する Web サイト名を指定してください。デフォルトは「既定の Web サイト」です。

仮想ディレクトリ

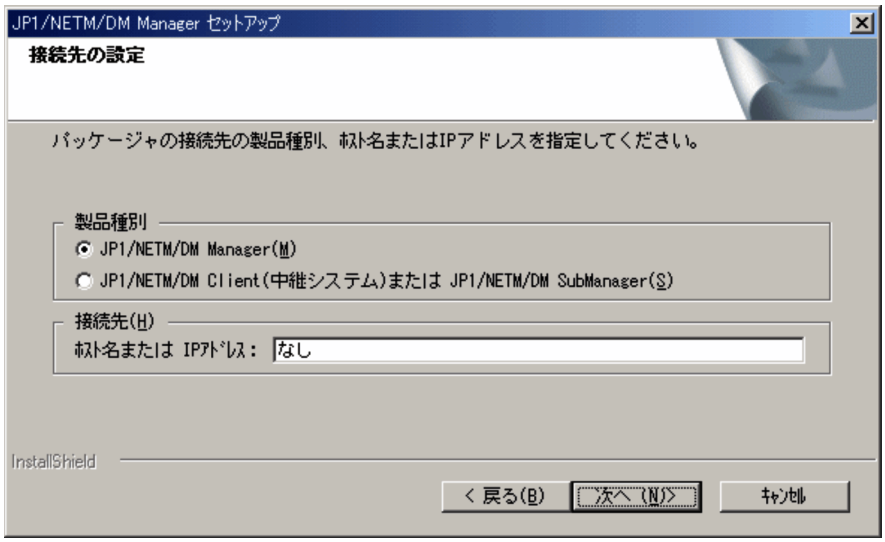
新規に作成する仮想ディレクトリ名を指定してください。デフォルトは「netmWS」です。

2.1.22　接続先の設定（パッケージャ）

パッケージャの接続先の設定をします。このダイアログボックスは，「パッケージャ」をインストールする場合に表示されます。

なお，接続先はパッケージャの起動時に変更できます。

図 2-28　［接続先の設定］ダイアログボックス



製品種別

「JP1/NETM/DM Manager」または「JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager」のどちらかを選択します。デフォルトは「JP1/NETM/DM Manager」です。

接続先

パッケージャの接続先のホスト名または IP アドレスを指定してください。デフォルトは「なし」です。

2.1.23　JP1/Cm2 連携機能の設定

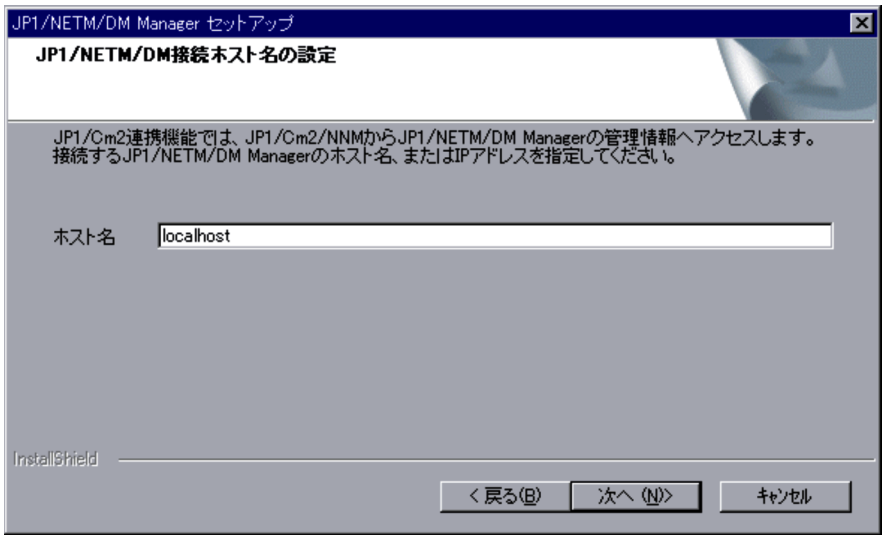
「JP1/Cm2 連携機能」をインストールする場合，JP1/Cm2 連携機能の設定画面が表示されます。設定内容を次に説明します。「JP1/Cm2 連携機能」のインストール手順については，「2.5　JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ JP1/NETM/DM をインストールする」を参照してください。

（1）JP1/NETM/DM 接続ホスト名の設定

JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm が接続する JP1/NETM/DM Manager のホスト名または IP アドレスを指定します。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 2-29　［JP1/NETM/DM 接続ホスト名の設定］ダイアログボックス



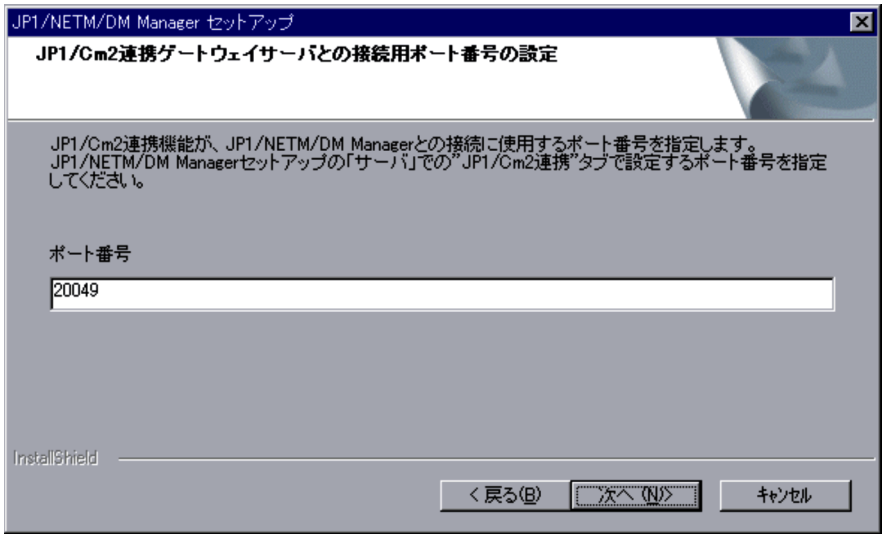
JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm は，設定した JP1/NETM/DM Manager の管理情報へアクセスします。接続先の JP1/NETM/DM Manager には，「JP1/Cm2 連携ゲートウェイ」がインストールされている必要があります。

（2） JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの接続用ポート番号の設定

JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm が JP1/NETM/DM Manager との接続に使用するポート番号を指定します。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 2-30　［JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの接続用ポート番号の設定］ダイアログボックス



「ポート番号」には，JP1/NETM/DM Manager セットアップの［サーバセットアップ］ダイアログボックスの，［JP1/Cm2 連携］タブに設定したポート番号と同じ値を設定してください。JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm から JP1/NETM/DM Manager の管理情報へアクセスする場合に使用します。デフォルトは 20049 です。

2.1.24　JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバの設定

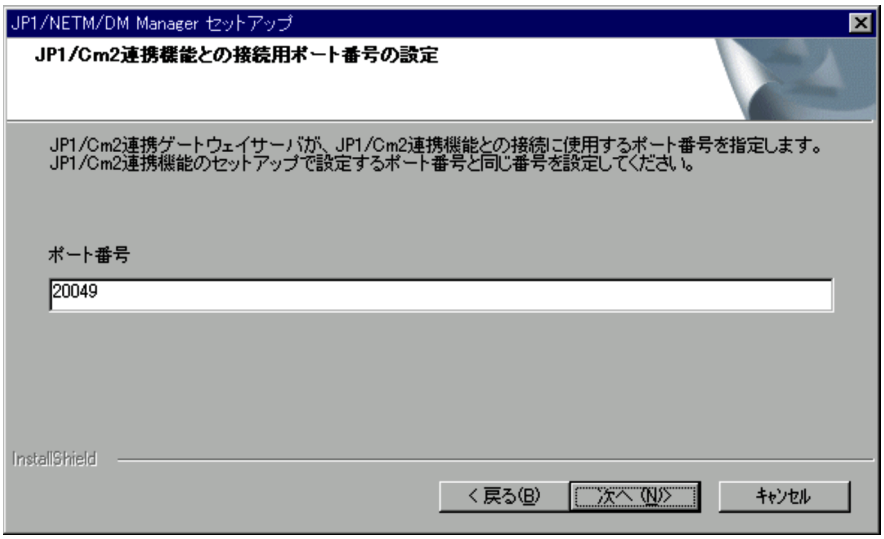
JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm から，JP1/Cm2 連携機能によって JP1/NETM/DM Manager に接続する場合，JP1/NETM/DM Manager 側に「JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ」をインストールする必要があります。「JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ」のインストール時の設定について説明します。

（1） JP1/Cm2 連携機能との接続用ポート番号の設定

JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバが，JP1/Cm2 連携機能との接続に使用するポート番号を指定します。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 2-31　［JP1/Cm2 連携機能との接続用ポート番号の設定］ダイアログボックス



「ポート番号」には，JP1/Cm2 連携機能のインストール時に［JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの接続用ポート番号の設定］ダイアログボックスで設定するポート番号と同じ値を設定してください。デフォルトは 20049 です。

2.1.25　リモートコントロールエージェントの注意事項の確認

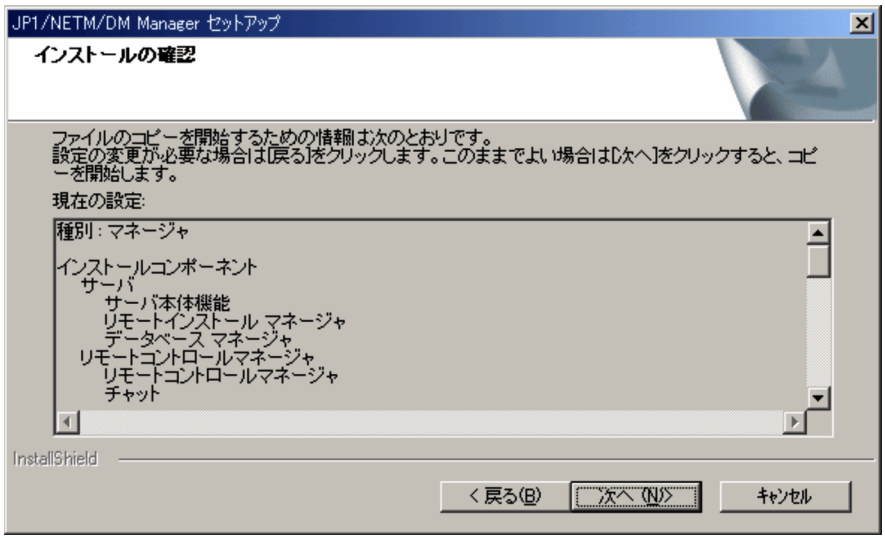
新規に「リモートコントロールエージェント」をインストールする場合，［注意事項］ダイアログボックスが表示されます。［注意事項］ダイアログボックスの内容は，Windows Server 2008，Windows Vista，Windows Server 2003，Windows XP，または Windows 2000 にインストールする場合と，Windows NT 4.0，Windows Me，または Windows 98 にインストールする場合とで異なります。

表示されるダイアログボックスについては，「3.1.16　リモートコントロールエージェントの注意事項の確認」を参照してください。注意事項の詳細は，マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

2.1.26　インストール内容の確認

設定したコンポーネントの内容が［インストールの確認］ダイアログボックスに表示されるので，確認します。

図 2-32 ［インストールの確認］ダイアログボックス



設定内容に変更が必要な場合は，［戻る］ボタンをクリックして，該当するダイアログボックスを表示し，変更してください。

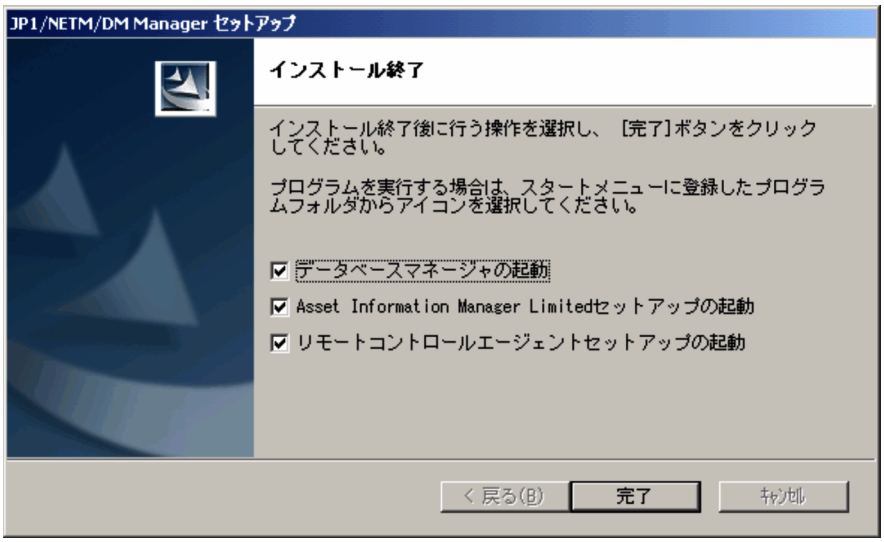
表示された設定内容でよい場合は，［次へ］ボタンをクリックしてください。インストールが開始されます。

2.1.27 インストールの終了

インストールが終了すると，［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。［インストール終了］ダイアログボックスには次の 2 種類があり，インストール状態によって適切な方が表示されます。

● 通常の場合

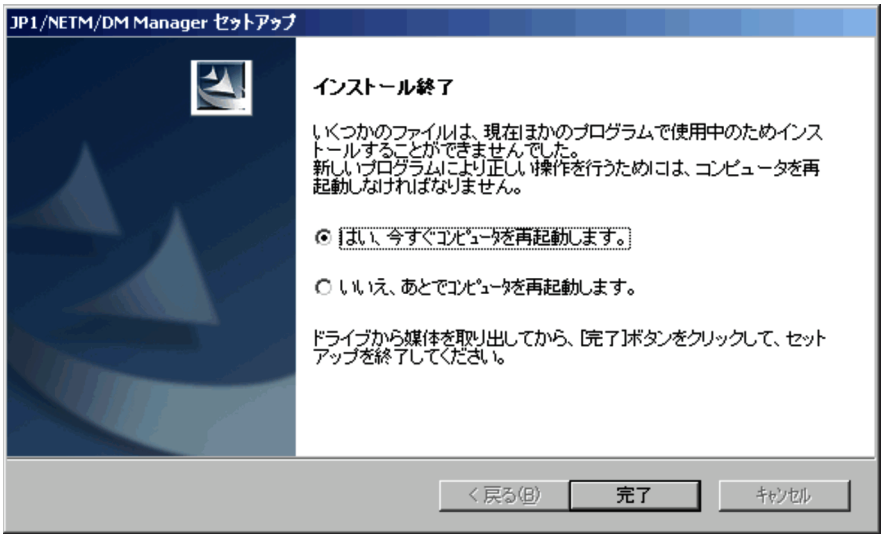
図 2-33　［インストール終了］ダイアログボックス（通常の場合）



「データベースマネージャの起動」，「Asset Information Manager Limited セットアップの起動」，および「リモートコントロールエージェントセットアップの起動」のうち，インストールが終了したあとに行いたい操作のチェックボックスをオンにし，［完了］ボタンをクリックしてください。

● 再起動が必要な場合

図 2-34　［インストール終了］ダイアログボックス（再起動が必要な場合）

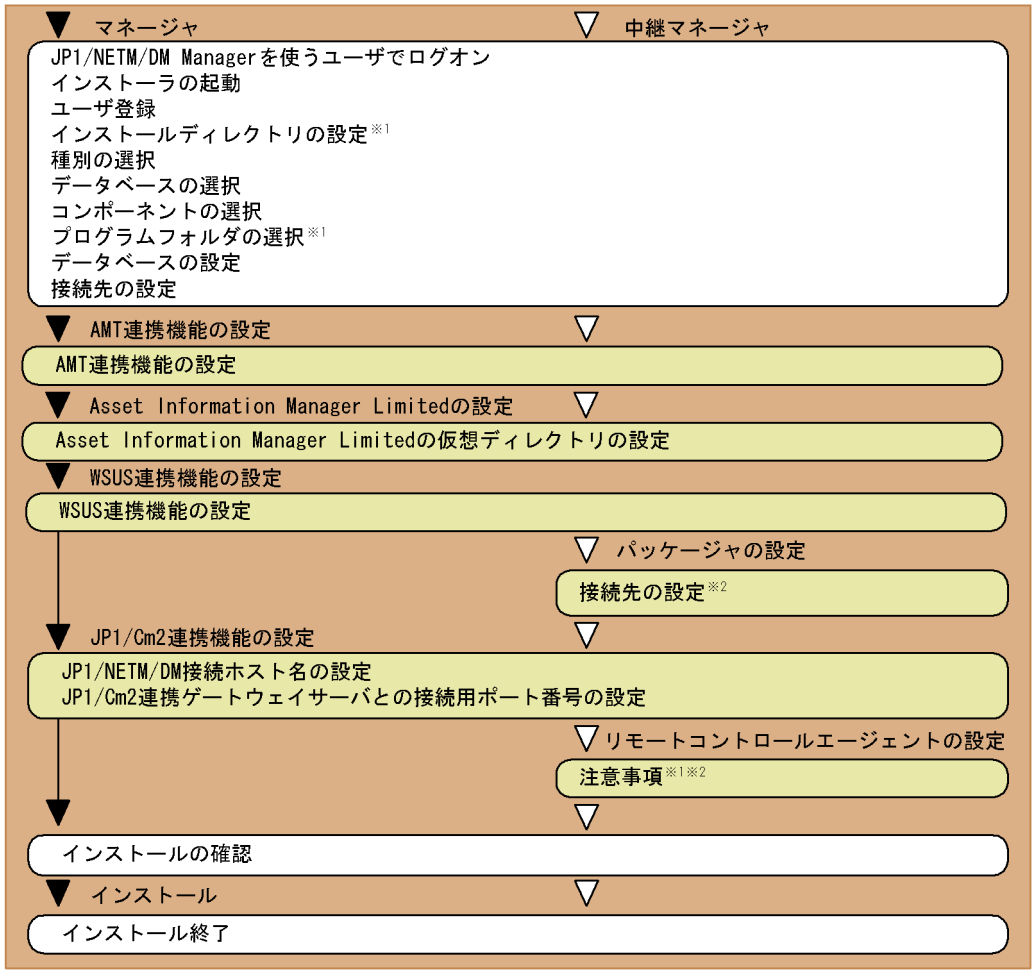


インストールしたあとに再起動が必要な場合は，このダイアログボックスが表示されます。すぐ再起動するかあとで再起動するかを選択し，CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出して［完了］ボタンをクリックしてください。

2.2 リモートインストールマネージャをインストールする

「サーバ」のリモートインストールマネージャ機能だけを，サーバとは別の PC にインストールする場合の手順を次の図に示します。この場合，「サーバ」の「サーバ本体機能」はインストールしません。接続するサーバには，リモートインストールマネージャと同じバージョンのサーバを設定してください。

図 2-35　リモートインストールマネージャ機能のインストール手順



（凡例）

：「サーバ」のリモートインストールマネージャ機能のインストール手順

：オプションのコンポーネントをインストールする場合に必要な設定

注※1　JP1/NETM/DM Managerのプログラムフォルダが作成されていないときだけ表示されます。
注※2　「パッケージャ」または「リモートコントロールエージェント」を選択した場合だけ表示されます。

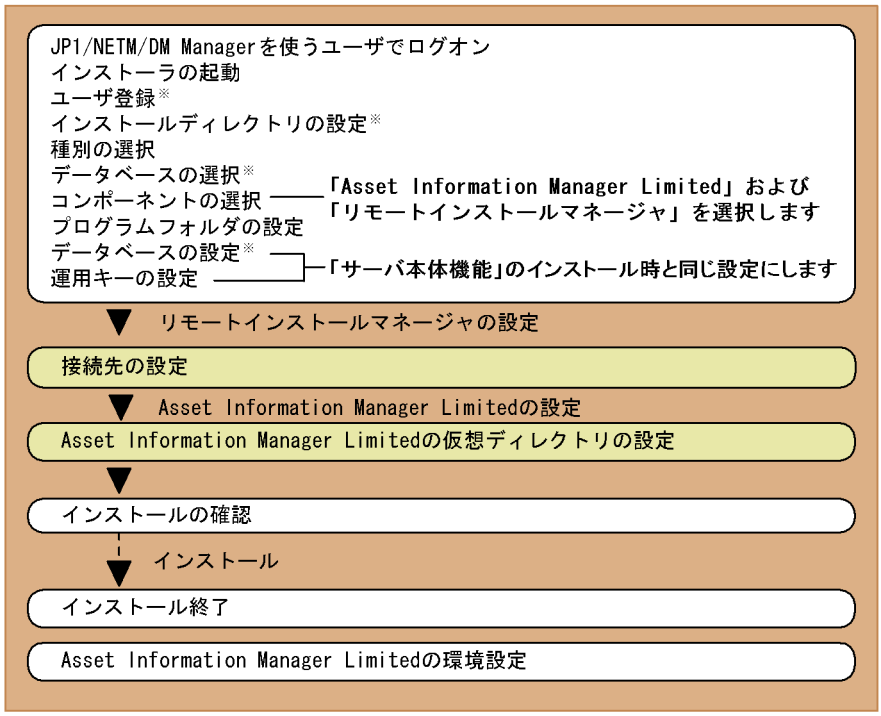
インストールコンポーネントとして，「サーバ」のほかに「パッケージャ」または「リモートコントロールエージェント」も選択した場合は，これらの設定もインストール時に行います。

各手順の詳細については，「2.1　JP1/NETM/DM Manager のインストール手順」を参照してください。

2.3　Asset Information Manager Limited をインストールする

「Asset Information Manager Limited」を，「サーバ」とは別の PC にインストールする場合の手順を次の図に示します。

図 2-36　「Asset Information Manager Limited」のインストール手順



「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリの設定については，「2.1.20　Asset Information Manager Limited の仮想ディレクトリの設定」を参照してください。

JP1/NETM/Asset Information Manager がインストールされているコンピュータには，「Asset Information Manager Limited」はインストールできません。

(1) インストール前の作業

「Asset Information Manager Limited」をインストールする前に，次の作業を実施してください。

- 「リモートインストールマネージャ」も合わせてインストールする。
  「Asset Information Manager Limited」を，「サーバ」とは別の PC にインストールする場合に必要です。
- Microsoft Internet Information Services をインストールする。
- サービス「Task Scheduler」を起動する。
- 「Asset Information Manager Limited」のサービス，コマンドおよびタスクを停止する。
  「Asset Information Manager Limited」のサービスは，新規インストールの場合，World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing を停止してください。
  上書きインストールの場合は次に示す順で停止してください。
  1. World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing
  2. Asset Information Synchronous Service
  3. JP1/NETM/Client Security Control - Manager（JP1/NETM/CSC と連携している場合）

  また，操作を実行したあとに「Asset Information Manager Limited」を使用するときは，停止時と逆の順でサービスを起動してください。
- 32 ビットのアプリケーションを動作させるための設定をする。
  64 ビット版の Windows Server 2008 および Windows Server 2003 (x64) に「Asset Information Manager Limited」をインストールする場合は，32 ビットのアプリケーションを動作させるための設定が必要です。
  コマンドプロンプトで，カレントディレクトリを `%windir%¥Inetpub¥AdminScripts` に移動したあと，次のコマンドを実行してください。
  ```
  cscript.exe adsutil.vbs set W3SVC/AppPools/Enable32BitAppOnWin64 "true"
  ```
  64 ビット版の Windows Server 2008 の場合は，管理者権限でコマンドプロンプトを起動してください。
- Microsoft Internet Information Services 7.0 を使用する場合，仮想ディレクトリが自動作成されるよう，「Asset Information Manager Limited」をインストールする前に必要な役割サービスをインストールしておくことをお勧めします。「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとで必要な役割サービスをインストールしても，仮想ディレクトリが自動作成されないので注意してください。役割サービスのインストール方法については，「10.6.2(1) 役割サービスのインストール」を参照してください。

（2） Asset Information Manager Limited の環境設定

「Asset Information Manager Limited」を使用してソフトウェアの稼働状況を管理するには，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとに，「Asset Information Manager Limited」の環境設定が必要です。

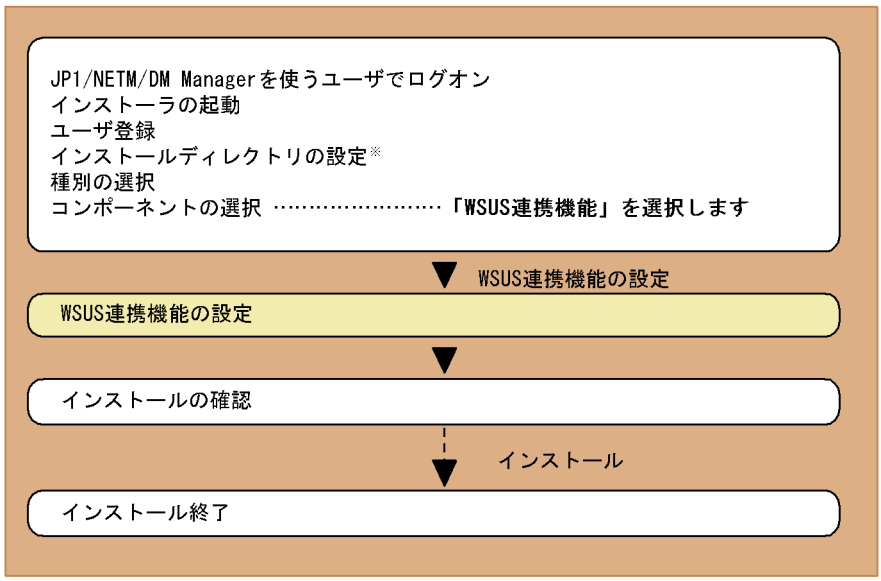
「Asset Information Manager Limited」の環境設定については，「10.1　Asset Information Manager Limited をセットアップする」を参照してください。

2.4　WSUS サーバへ JP1/NETM/DM をインストールする

ここでは，WSUS サーバに「WSUS 連携機能」をインストールする方法について説明します。

JP1/NETM/DM のインストール媒体から「WSUS 連携機能」をインストールする手順を次の図に示します。この図では，［コンポーネントの選択］ダイアログボックスで「WSUS 連携機能」だけ選択した場合の流れを示しています。

図 2-37　WSUS 連携機能のインストール手順



注※　新規インストールのときだけ表示されます。

WSUS 連携機能の設定の詳細については，「2.1.21　WSUS 連携機能の設定」を参照してください。

なお，JP1/NETM/DM の「WSUS 連携機能」は，JP1/NETM/Asset Information Manager と共通するコンポーネントです。すでに WSUS サーバに JP1/NETM/Asset Information Manager のコンポーネント「WSUS 連携」がインストールされている場合は，インストール不要です。

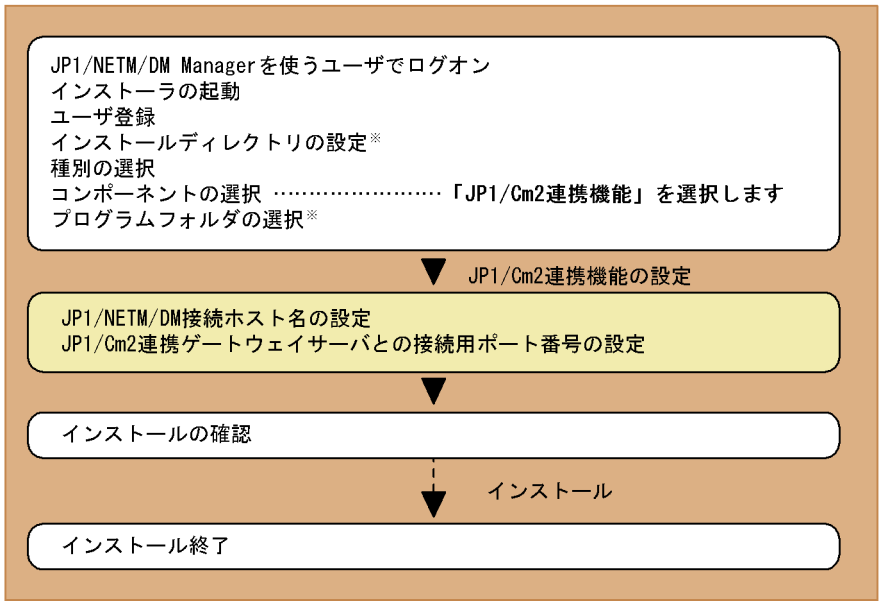
2.5　JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ JP1/NETM/DM をインストールする

ここでは，JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ「JP1/Cm2 連携機能」をインストールする方法について説明します。

インストールは，必ず JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm のサービスを起動したあとに実行してください。

JP1/NETM/DM Manager のインストール媒体から「JP1/Cm2 連携機能」をインストールする手順を次の図に示します。この図では，［コンポーネントの選択］ダイアログボックスで「JP1/Cm2 連携機能」だけ選択した場合の流れを示しています。

図 2-38　JP1/Cm2 連携機能のインストール手順



（凡例）

：　共通のインストール手順

：「JP1/Cm2連携機能」コンポーネントの設定

注※　新規インストールのときだけ表示されます。

レジストリキー「HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Control¥FileSystem」の「NtfsDisable8dot3NameCreation」の値が「1」である PC に JP1/Cm2 連携機能をインストールする場合は，インストール先ディレクトリにスペースを含めないでください。スペースを含めると，JP1/Cm2 連携機能を使用できません。

JP1/Cm2 連携機能の設定の詳細については,「2.1.23　JP1/Cm2 連携機能の設定」を参照してください。

3 JP1/NETM/DM Client をインストールする

この章では，JP1/NETM/DM Client を中継システムまたはクライアントとしてインストールする方法について説明します。また，JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする方法についても説明します。

3.1 JP1/NETM/DM Client のインストール手順

3.2 JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする

3.3 JP1/NETM/DM Client のインストールに失敗したときの対処

3.1　JP1/NETM/DM Client のインストール手順

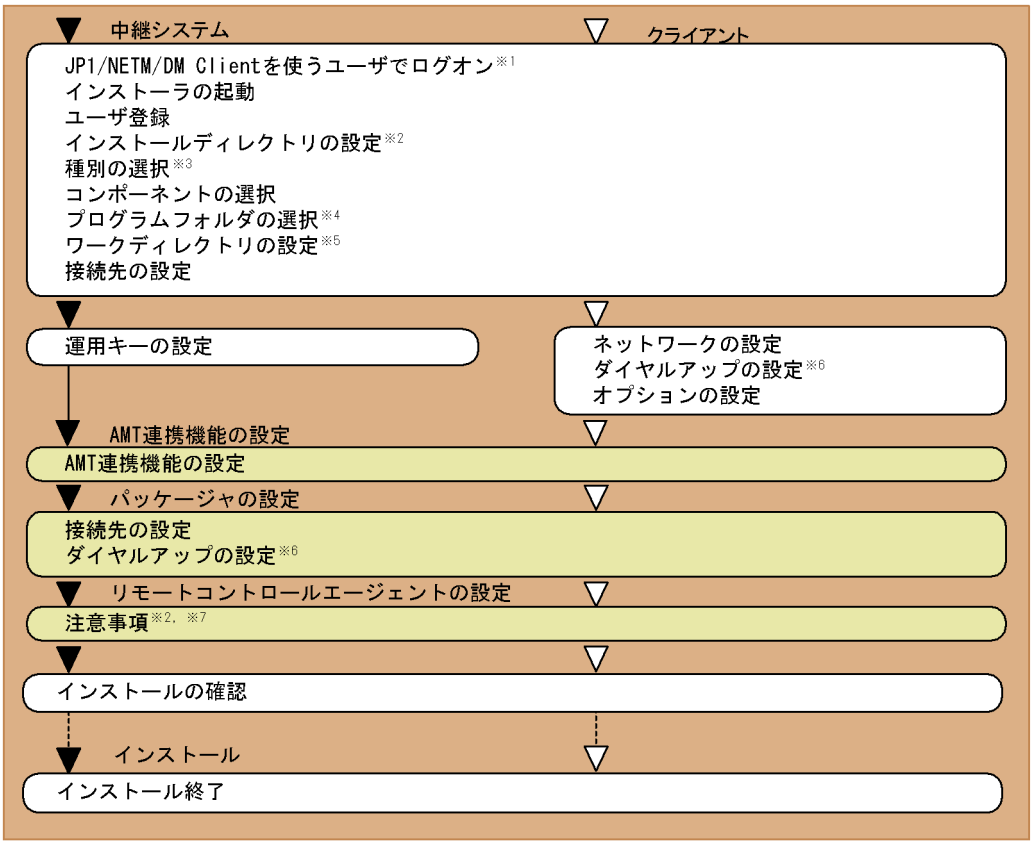
JP1/NETM/DM Client は，インストール時に中継システムとして使用するか，クライアントとして使用するかを選択します。

JP1/NETM/DM Client - Base も JP1/NETM/DM Client と同じ手順でインストールします。ここでは，JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base を特に区別する必要がない場合，総称して JP1/NETM/DM Client と呼びます。

なお，JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品のインストール方法については，「3.2　JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする」を参照してください。

JP1/NETM/DM Client を中継システムまたはクライアントとしてインストールする手順を次の図に示します。

図 3-1　JP1/NETM/DM Client のインストール手順



（凡例）

：「中継システム」および「クライアント」コンポーネントのインストール手順

：オプションのコンポーネントをインストールする場合に必要な設定

注※1　Windows NTの場合，「一般ユーザ権限でのインストール機能」を使用すれば，インストールしたユーザ以外でもJP1/NETM/DM Clientを使用できます。なお，Windows Me，およびWindows98の場合，ユーザ権限による使用制限はありません。
注※2　新規インストールのときだけ表示されます。
注※3　Windows Me，およびWindows 98の場合は「中継システム」をインストールできません。
注※4　新規インストールのとき，またはプログラムフォルダを作成していない環境への上書きインストールのときだけ表示されます。
注※5　「中継システム」または「クライアント」を選択した場合だけ表示されます。
注※6　直前のダイアログボックスで「ダイヤルアップ接続」を選択した場合だけ表示されます。
注※7　JP1/NETM/DM Client - Baseの場合は表示されません。

インストールコンポーネントとして，「中継システム」および「クライアント」のほかに「パッケージャ」または「リモートコントロールエージェント」を選択した場合は，これらの設定もインストール時に行います。

JP1/NETM/DM Client のプレインストール機能を使うと，1 台の PC でクライアント環境を作成し，そのハードディスクをコピーするだけでインストールを完了できます。

JP1/NETM/DM Client のプレインストール機能を使ったインストール方法については，「1.2.3　プレインストール機能を使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法」を参照してください。

次に，各手順を説明します。

3.1.1　ログオン

Windows NT の場合，Administrator 権限を持ったユーザの名前でログオンしてください。このユーザが JP1/NETM/DM Client を操作するユーザになります。ただし，インストールしたあとにセットアップで「一般ユーザ権限で使用する」の設定を有効にした場合は，インストールしたユーザ以外のユーザでも JP1/NETM/DM Client を使用できます。

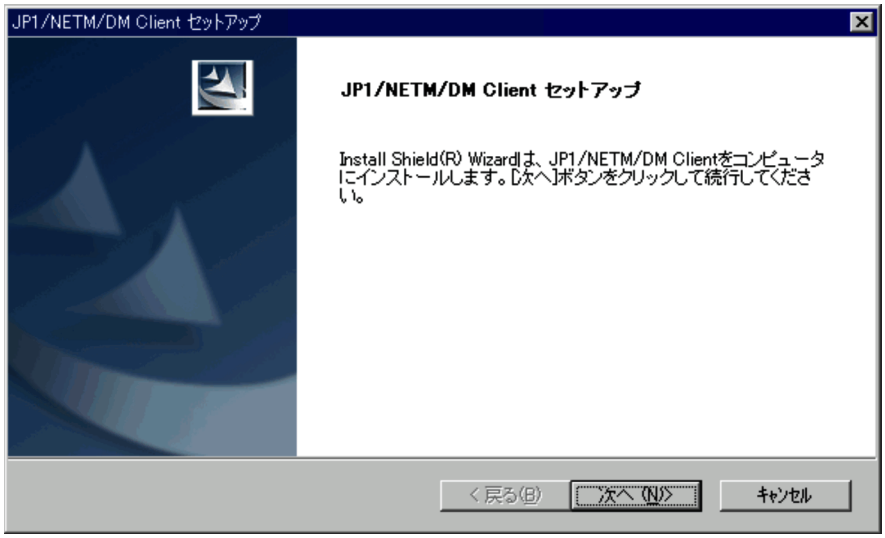
Windows Me または Windows 98 の場合は，どのユーザとしてログオンしてインストールしてもかまいません。また，インストールしたユーザ以外でも JP1/NETM/DM Client を使用できます。

3.1.2　インストーラの起動

提供媒体を CD-ROM ドライブに入れ，起動したインストーラの指示に従ってインストールを進めます。

インストーラを起動すると，JP1/NETM/DM Client のインストールプログラムが起動し，［JP1/NETM/DM Client セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 3-2　［JP1/NETM/DM Client セットアップ］ダイアログボックス



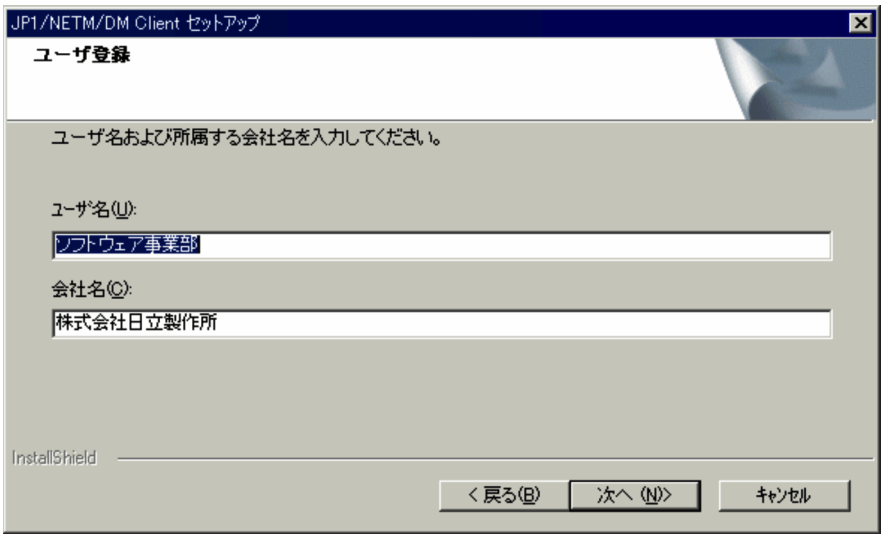
［次へ］ボタンをクリックし，インストールを続行します。インストールを中止するとき

は［キャンセル］ボタンをクリックします。また，以降で説明するダイアログボックスで［戻る］ボタンをクリックすると，一つ前のダイアログボックスに戻ります。

3.1.3　ユーザ登録

ユーザの名前と所属する会社名を［ユーザ登録］ダイアログボックスで登録します。

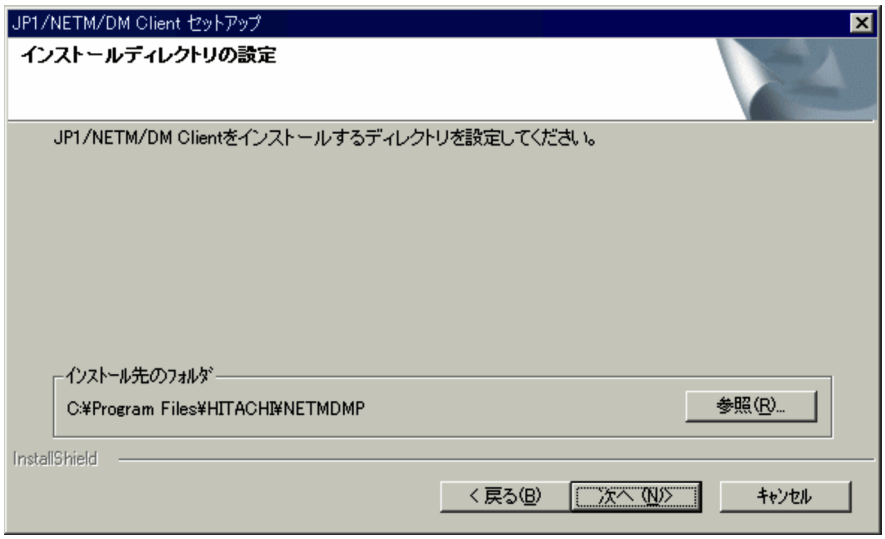
図 3-3　［ユーザ登録］ダイアログボックス



3.1.4　インストールディレクトリの設定

JP1/NETM/DM Client をインストールするディレクトリを設定します。このダイアログボックスは，新規インストール時だけ表示されます。バージョンアップ時は，既存のインストールディレクトリに自動的にインストールされます。

図 3-4 ［インストールディレクトリの設定］ダイアログボックス



デフォルトのインストール先は，C:¥Program Files¥HITACHI¥NETMDMP です（C: は OS がインストールされているドライブ名）。ただし，OS が 64 ビット版の Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) のコンピュータにインストールする場合，デフォルトのインストール先は C:¥Program Files (x86)¥HITACHI¥NETMDMP になります。この場合は，マニュアル中の「Program Files」を「Program Files (x86)」に置き換えてお読みください。

デフォルトのインストール先ディレクトリを変更するときは，［参照］ボタンをクリックして，インストール先ディレクトリを設定します。インストール先ディレクトリを変更するときの注意事項を次に示します。

- インストール先ディレクトリにネットワークドライブを指定しないでください。ネットワークドライブを指定すると，JP1/NETM/DM Client の動作は保証されません。
- インストール先ディレクトリは，半角英数字，半角かたかな，半角スペース，および次に示す半角記号で指定してください。
  「_」「¥」「.」「:」「(」「)」
- インストール先ディレクトリの最後に，「¥」を付けないでください。例えば，「C:¥NETMDM¥」のようには指定しないでください。
- インストール先ディレクトリにドライブ名だけを指定しないでください。例えば，「C:」のようには指定しないでください。

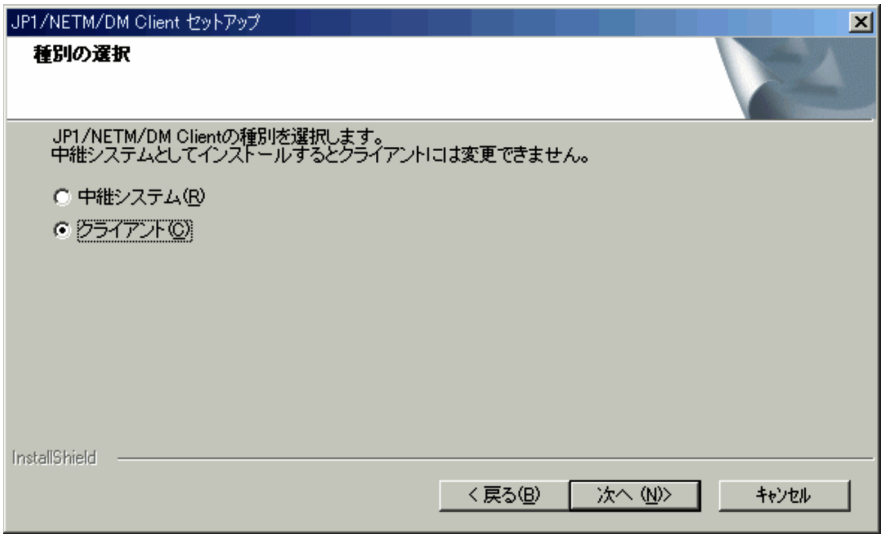
3.1.5 種別の選択

JP1/NETM/DM Client の種別を選択します。中継システムとして使用する場合は「中継システム」，クライアントとして使用する場合は「クライアント」を選択してください。

なお，OS が Windows Me または Windows 98 の場合は「中継システム」をインストー

ルできません。「クライアント」だけインストールされるため，このダイアログボックスは表示されません。

図 3-5　［種別の選択］ダイアログボックス



3.1.6　コンポーネントの選択

インストールするコンポーネントおよびサブコンポーネントを選択します。バージョンアップ時は，コンポーネントやサブコンポーネントの追加はできますが，すでにインストールされているものは削除できません。なお，「中継システム」と「クライアント」で，表示されるコンポーネントが異なります。

(1)「中継システム」の場合に表示されるコンポーネント

図 3-6 ［コンポーネントの選択］ダイアログボックス（中継システムの場合）



サブコンポーネントは，コンポーネント名の下にツリー形式で表示されます。

コンポーネント選択時の注意事項を次に示します。

- 「中継システム本体機能」を選択すると，「クライアント」が無条件にインストールされます。
- 「中継システム」の「リモートインストールマネージャ」を選択するには，「中継システム」を選択する必要があります。
- JP1/NETM/DM Client - Base の場合，次のコンポーネントは表示されません。
  - 「リモートコントロールエージェント」
    この機能を使用する場合は，JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature をインストールしてください。

(2)「クライアント」の場合に表示されるコンポーネント

図 3-7　［コンポーネントの選択］ダイアログボックス（クライアントの場合）



サブコンポーネントは，コンポーネント名の下にツリー形式で表示されます。

コンポーネント選択時の注意事項を次に示します。

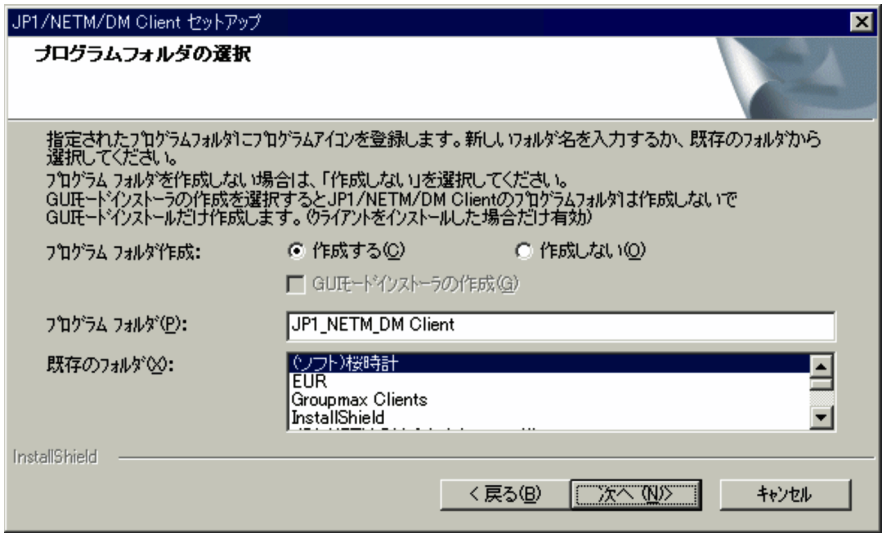
- 「クライアント」のサブコンポーネントを選択するには，「クライアント」を選択する必要があります。
- オンラインヘルプだけのインストールはできません。
- JP1/NETM/Remote Control Agent または JP1/Remote Control Agent がインストールされている PC に対しては，JP1/NETM/DM Client のリモートコントロールエージェントをインストールできません。JP1/NETM/Remote Control Agent または JP1/Remote Control Agent をアンインストールしてからインストールしてください。
- JP1/NETM/DM Client - Base の場合，次のコンポーネントは表示されません。
  - 「クライアント」の「Visual Test 6.0 による配布機能」
    この機能を使用する場合は，JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールしてください。
  - 「リモートコントロールエージェント」
    この機能を使用する場合は，JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature をインストールしてください。

3.1.7　プログラムフォルダの選択

JP1/NETM/DM Client のアイコンの登録先となるプログラムフォルダを選択します。このダイアログボックスは，新規インストールのとき，またはプログラムフォルダを作成

していない環境への上書きインストールのときだけ表示されます。プログラムフォルダが作成済みの環境へ上書きインストールする場合は，既存のプログラムフォルダが自動的に使用されます。

図 3-8　［プログラムフォルダの選択］ダイアログボックス



デフォルトでは，「作成する」が選択され，［JP1_NETM_DM Client］グループにアイコンが登録されます。既存のプログラムフォルダから選択したり，新しいプログラムフォルダを作成したりできます。ただし，プログラムフォルダには「¥」を使用したフォルダ名を指定しないでください。

「クライアント」をインストールする場合，「作成しない」を選択すると，GUI インストールモードのパッケージはインストールできなくなります。プログラムフォルダを作成しないで GUI インストールモードのパッケージをインストールするには，次のどちらかで対処してください。

- **「GUI モードインストーラの作成」チェックボックスをオンにする**

  この項目を選択すると，GUI インストールモードが使用できるようになります。ただし，「GUI モードインストーラの作成」を選択できるのは，「クライアント」をインストールする場合だけです。「中継システム」をインストールする場合，このチェックボックスは表示されません。

  なお，「GUI モードインストーラの作成」を選択した場合，プログラムフォルダは作成されませんが，［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダが作成される場合があります。［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダの作成については，「3.1.13　オプションの設定」を参照してください。

- **インストール終了後に，JP1/NETM/DM Client のインストール先ディレクトリ ¥BIN 下の dmpsetup.exe を起動する**

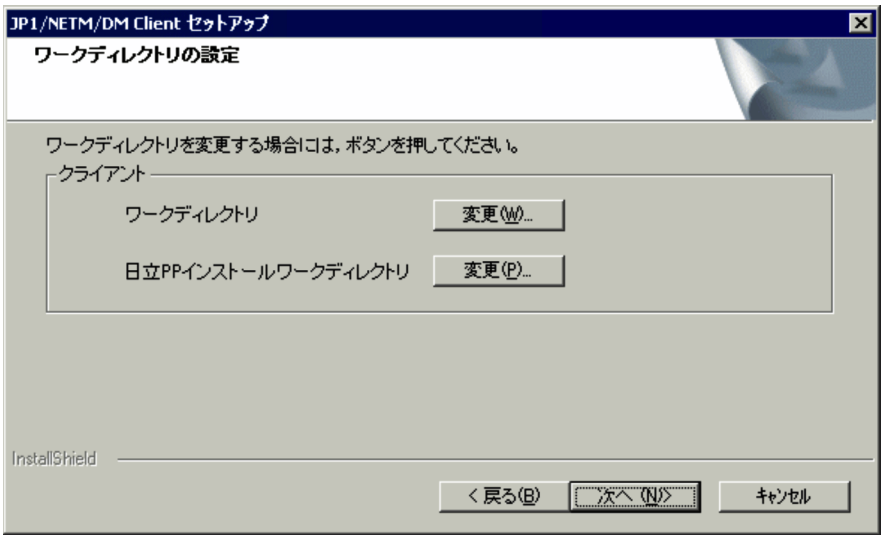
3.1.8　ワークディレクトリの設定

このダイアログボックスは，「中継システム」または「クライアント」をインストールする場合に表示されます。インストールするコンポーネントによって「中継システム」または「クライアント」が項目名に表示されます。

各項目の右側の［変更］ボタンをクリックすると，それぞれのワークディレクトリを変更できます。ワークディレクトリは，半角英数字，半角かたかな，半角スペース，および次に示す半角記号で指定してください。

「_」「¥」「.」「:」「(」「)」

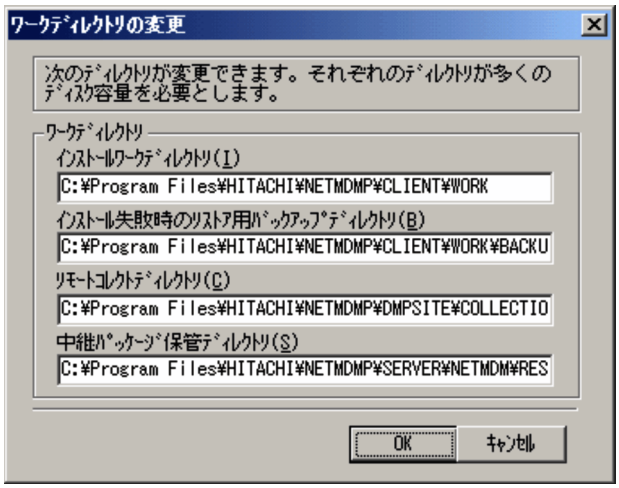
図 3-9　［ワークディレクトリの設定］ダイアログボックス



(1) ワークディレクトリの変更

中継システムまたはクライアントをリモートインストールするときに使用する，各デフォルトワークディレクトリが表示されます。ディレクトリを変更したい場合は，ディレクトリを変更したあと，［OK］ボタンをクリックすると［ワークディレクトリの設定］ダイアログボックスに戻ります。

図 3-10 ［ワークディレクトリの変更］ダイアログボックス



インストールワークディレクトリ

中継システムまたはクライアントがパッケージをインストールするときに使用します。インストールするパッケージと同じ容量が必要です。通常，空き容量が 50 メガバイト以上のドライブを指定することをお勧めします。

インストール失敗時のリストア用バックアップディレクトリ

中継システムまたはクライアントがリモートインストールするソフトウェアのバックアップを保存するときに使用します。

リモートコレクトディレクトリ

中継システムがリモートコレクトしたファイルを一時的に保管するときに使用します。クライアントの場合は表示されません。

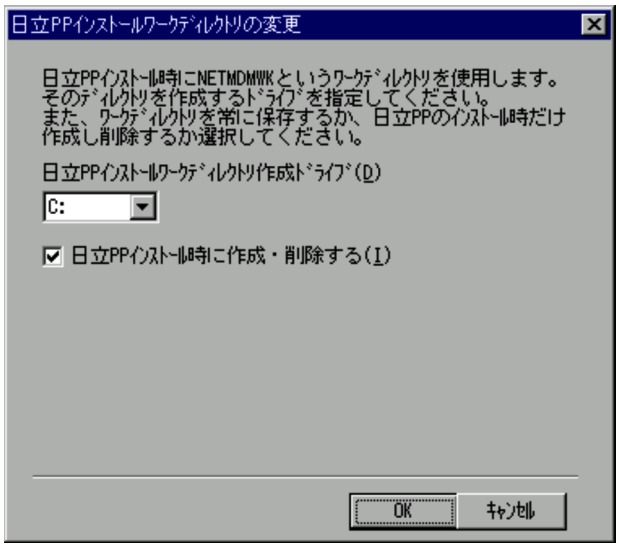
中継パッケージ保管ディレクトリ

中継システムがパッケージの中継時に一時的に保管するときに使用します。クライアントの場合は表示されません。

(2) 日立 PP インストールワークディレクトリの変更

日立プログラムプロダクトのインストールワークディレクトリ（NETMDMWK ディレクトリ）のドライブを変更できます。設定したあとに［OK］ボタンをクリックすると［ワークディレクトリの設定］ダイアログボックスに戻ります。

図 3-11　［日立 PP インストールワークディレクトリの変更］ダイアログボックス



日立 PP インストールワークディレクトリ作成ドライブ

日立プログラムプロダクトのインストールに使用するワークディレクトリを作成するドライブを選択してください。ここで選択したドライブの直下に NETMDMWK ディレクトリが作成されます。なお，ネットワークドライブは指定しないでください。ネットワークドライブを指定した場合，動作は保証されません。

日立 PP インストール時に作成・削除する

日立プログラムプロダクトをインストールしたあと，そのディレクトリを削除するかどうかを選択できます。ディレクトリを削除する場合は，「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにします。デフォルトはオンです。「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにした場合の注意事項を次に示します。

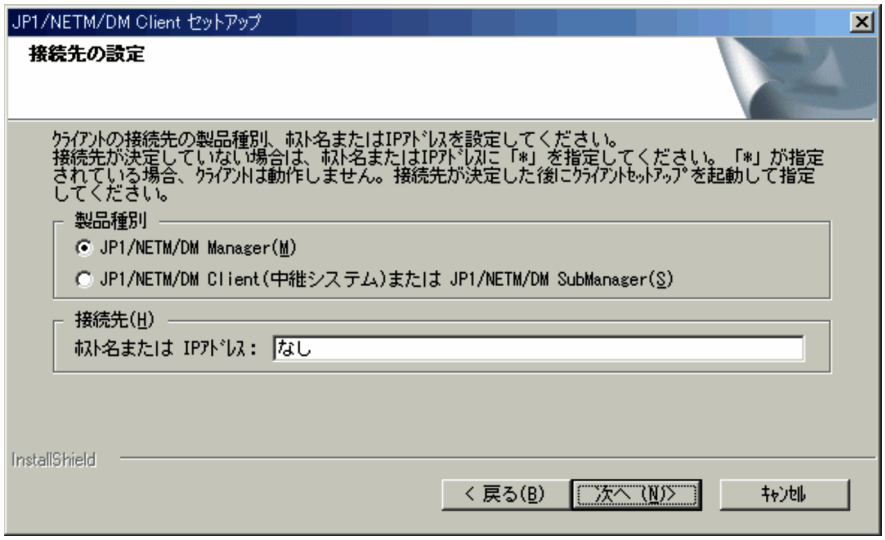
- Windows NT で「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにする場合，作成したドライブの「読み取り」，「書き込み」，および「削除」のアクセス権が必要です。これらのアクセス権が設定されていないと日立プログラムプロダクトのインストールが失敗します。
- 「日立 PP インストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにした場合でも，インストールしたあとに NETMDMWK ディレクトリが残る場合があります。その場合，PC の再起動時，またはポーリング時に削除されます。

3.1.9　接続先の設定

中継システムまたはクライアントが接続する上位システムを設定します。このダイアログボックスは，「中継システム」または「クライアント」をインストールする場合に表示されます。

なお，接続先はセットアップ時に変更できます。

図 3-12 ［接続先の設定］ダイアログボックス



製品種別

中継システムまたはクライアントが接続する上位システムの製品種別を，「JP1/NETM/DM Manager」と「JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager」から選択します。デフォルトは「JP1/NETM/DM Manager」です。

接続先 z

中継システムとクライアントで設定できる内容が異なります。

中継システムの場合

中継システムが接続する上位システムの名称を，上位システムが使用するノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で指定します。デフォルトは「なし」です。接続先にローカルホストの名称は指定できません。

クライアントの場合

クライアントの接続先のホスト名または IP アドレスを指定します。デフォルトは「なし」です。接続先が未定の場合や，クライアントをオフラインマシンとしてインベントリ管理する場合は，「?」を設定してください。「?」を設定したクライアントでは，ローカルシステムビューアとシステム監視機能だけが使用できます。ほかの機能は，上位システムへの接続が必要なため使用できません。また，プレインストール機能による JP1/NETM/DM Client のインストールで，ハードディスクのコピー元となる PC 環境を作成する場合は，接続先に「*」を指定してください。接続先に「*」を指定すると，クライアントは動作しません。

接続先に「*」以外を指定，かつホスト識別子を使用する運用の場合，システム

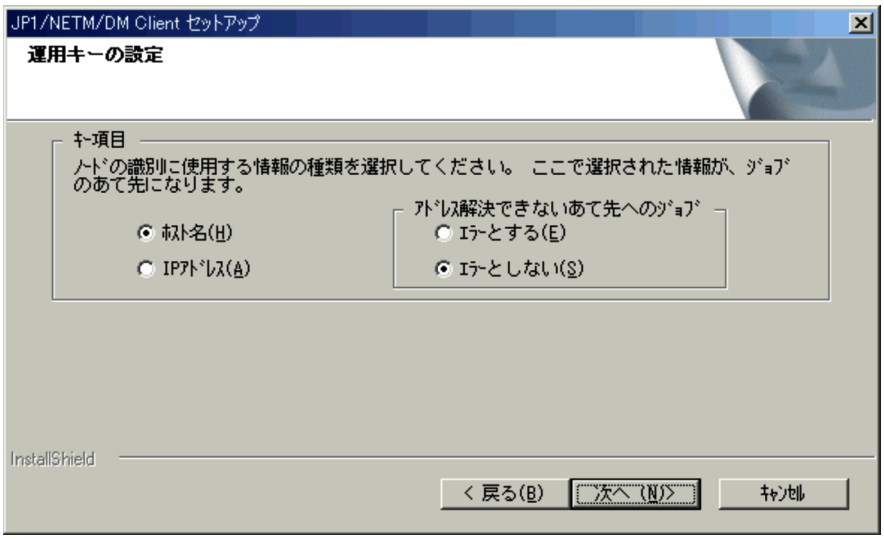
構成の自動登録で認識されるのは最後の 1 台だけです。ほかのクライアントは認識されません。
一度接続先を設定してから上書きインストールをする場合，「?」は設定できますが「*」は設定できません。「*」を設定したい場合は，一度アンインストールするか，セットアップで接続先を「*」に変更してからインストールし直してください。

3.1.10　運用キーの設定

ネットワーク上でホストを管理したり，あて先を識別したりするためのキー（**運用キー**）を設定します。このダイアログボックスは，「中継システム」をインストールする場合に表示されます。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 3-13　［運用キーの設定］ダイアログボックス



運用キーには，ノード識別キーとホスト識別子があります。「キー項目」では，ノード識別キーを選択します。

キー項目

ホスト間で通信するときに，通信する相手先ホストを決定する情報の種類を「ホスト名」または「IP アドレス」で指定します。相手先ホストの運用キーの設定に合わせて「ホスト名」または「IP アドレス」のどちらかを指定してください。デフォルトは「ホスト名」です。ホスト名を選択した場合は，「アドレス解決できないあて先へのジョブ」を設定してください。

アドレス解決できないあて先へのジョブ

ジョブ実行時にあて先のアドレス解決ができなかった場合に，そのジョブをエラーとするかどうかを選択します。デフォルトは「エラーとしない」です。「エ

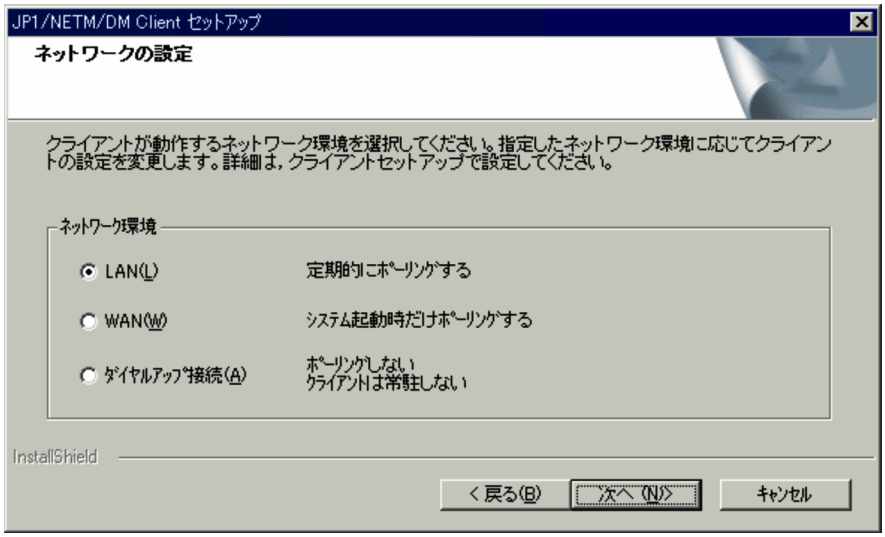
ラーとしない」を選択した場合，アドレス解決ができないジョブの実行状態は「実行待ち」となります。実在しないあて先へのジョブの実行状態も「実行待ち」のまま変化しません。
WINS サーバを使用している環境では，ジョブ実行時にクライアント PC の電源が OFF の場合，あて先のアドレス解決ができません。したがって「エラーとする」の設定では，休日や夜間にジョブを実行してシステム起動時ポーリングでインストールする運用ができなくなります。このような場合は，「エラーとしない」を設定してください。
なお，「エラーとしない」を選択した場合，実行したジョブにアドレス解決できないあて先が含まれていると，リモートインストールマネージャの動作が遅くなるなどの影響があります。

3.1.11 ネットワークの設定

クライアントが動作するネットワーク環境を選択します。選択したネットワーク環境に応じて，上位システムへのポーリングのタイミングが設定されます。このダイアログボックスは，「クライアント」をインストールする場合に表示されます。

なお，ポーリングのタイミングの設定はセットアップ時に変更できます。

図 3-14 ［ネットワークの設定］ダイアログボックス



LAN

30 分ごとにポーリングするように設定されます。

WAN

クライアント起動時だけポーリングするように設定されます。

ダイヤルアップ接続

ポーリングしないように設定されます。

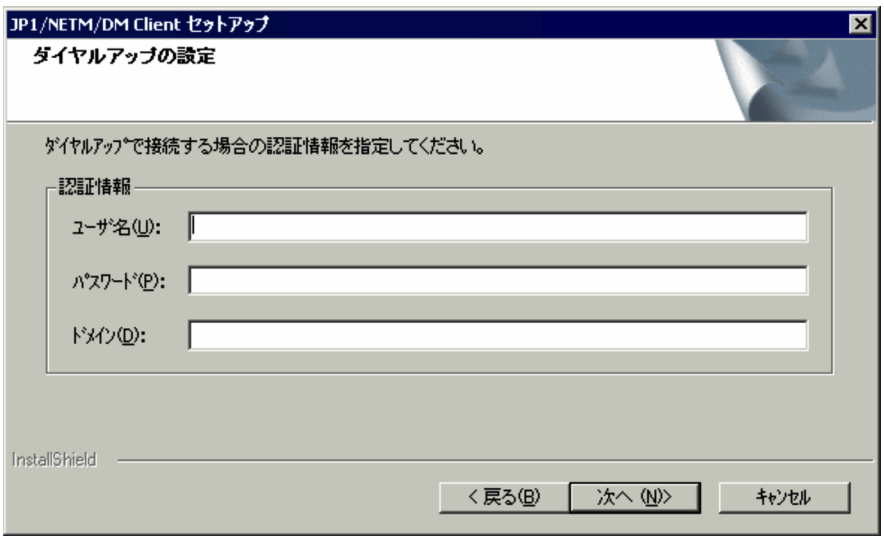
［次へ］ボタンをクリックすると，「ダイヤルアップ接続」を選択した場合だけ［ダイヤルアップ接続の設定］ダイアログボックスに進みます。「LAN」または「WAN」を選択した場合は，［オプションの設定］ダイアログボックスに進みます。

3.1.12　ダイヤルアップの設定

クライアントがダイヤルアップ接続する場合に使用する認証情報を設定します。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 3-15　［ダイヤルアップの設定］ダイアログボックス



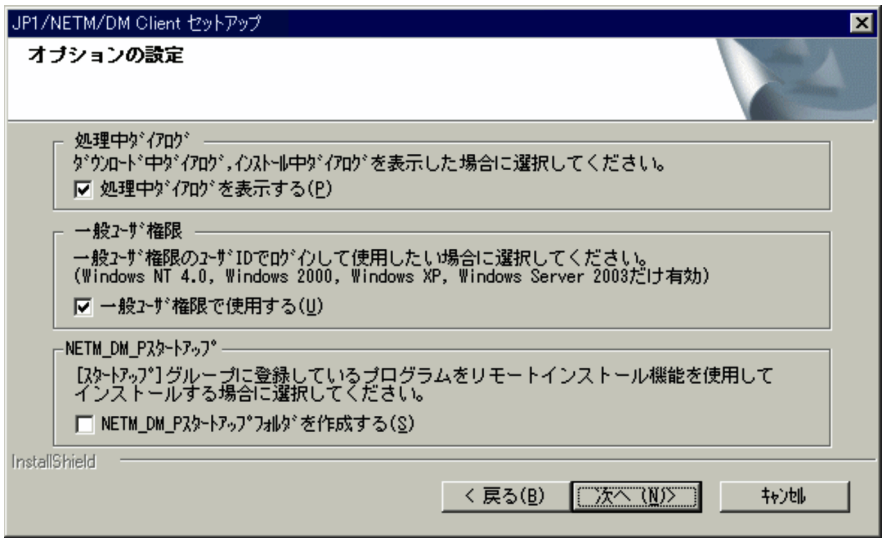
「ユーザ名」，「パスワード」，および「ドメイン」を設定してください。

3.1.13　オプションの設定

処理中ダイアログの表示，および一般ユーザ権限でのクライアント使用の可否について設定します。このダイアログボックスは，「クライアント」をインストールする場合に表示されます。

なお，この設定はセットアップ時に変更できます。

図 3-16　［オプションの設定］ダイアログボックス



処理中ダイアログ

クライアントでの，ダウンロード，インストールなどの処理の実行中に，処理中であることを示すダイアログボックスを表示するかどうか選択します。デフォルトは「処理中ダイアログを表示する」チェックボックスがオンです。

一般ユーザ権限

Windows NT のクライアントの場合，クライアントをインストールしたユーザ以外でもパッケージをインストールできるように設定できます。

「一般ユーザ権限で使用する」チェックボックスをオンにすると，クライアントをインストールしたユーザ以外がログオンした状態でも，GUI インストールモードのパッケージのインストールができます。そのため，Administrator 権限を持たないユーザ（一般ユーザ）でも，パッケージのインストールができます。デフォルトは，「一般ユーザ権限で使用する」チェックボックスがオンです。

一般ユーザ権限でのインストールの詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.2.3　Windows NT の一般ユーザ権限でのインストール」を参照してください。

なお，Windows Me または Windows 98 のクライアントの場合，この設定は非活性です。これらのクライアントでは，ログオンしたユーザの権限に関係なくクライアントを使用できます。

NETM_DM_P スタートアップ

［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダを作成するかどうかを選択します。

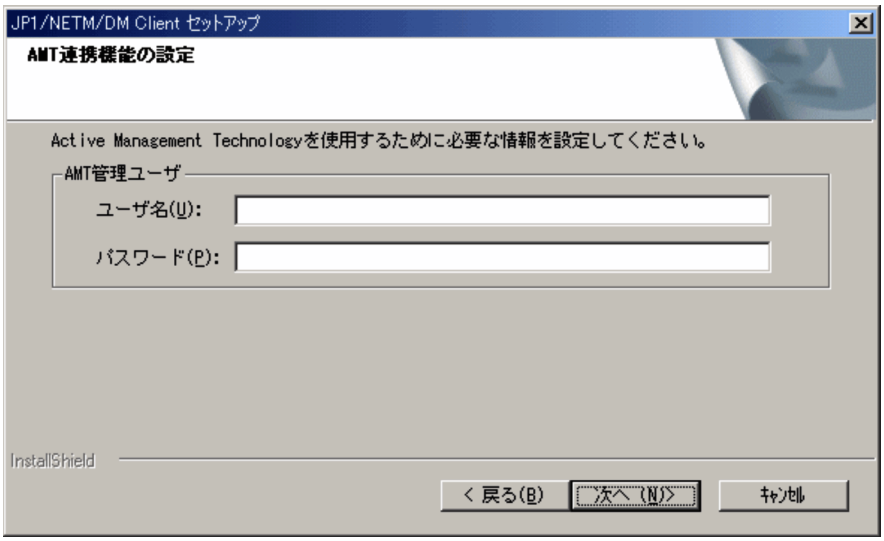
［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダには，Windows の［スタートアップ］グループに登録されたプログラムを移動できます。そのため，Windows の起動時に，［スタートアップ］グループに登録されたプログラムの起動と，JP1/NETM/DM によるシステム起動時インストールが重複し，リモートインストールに失敗すること

を避けられます。
［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダを作成する場合は，「NETM_DM_P スタートアップフォルダを作成する」チェックボックスをオンにしてください。デフォルトはオフです。
スタートアッププログラムの移動の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.2.2　システム起動時インストールのための準備」を参照してください。
なお，［プログラムフォルダの選択］ダイアログボックスでプログラムフォルダの作成について「作成しない」を選択し，かつ，「GUI モードインストーラの作成」を選択しなかった場合，［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダは作成できません。

3.1.14　AMT 連携機能の設定

「AMT 連携機能」を使用して，クライアントを制御するために必要な情報を設定します。

図 3-17　［AMT 連携機能の設定］ダイアログボックス



AMT 管理ユーザ

クライアントの AMT にアクセスするための情報を設定します。ユーザ名とパスワードは，配布管理システムでの設定と合わせる必要があります。

ユーザ名

クライアントの AMT にアクセスするためのユーザ名を，半角 60 文字以内で指定します。

パスワード

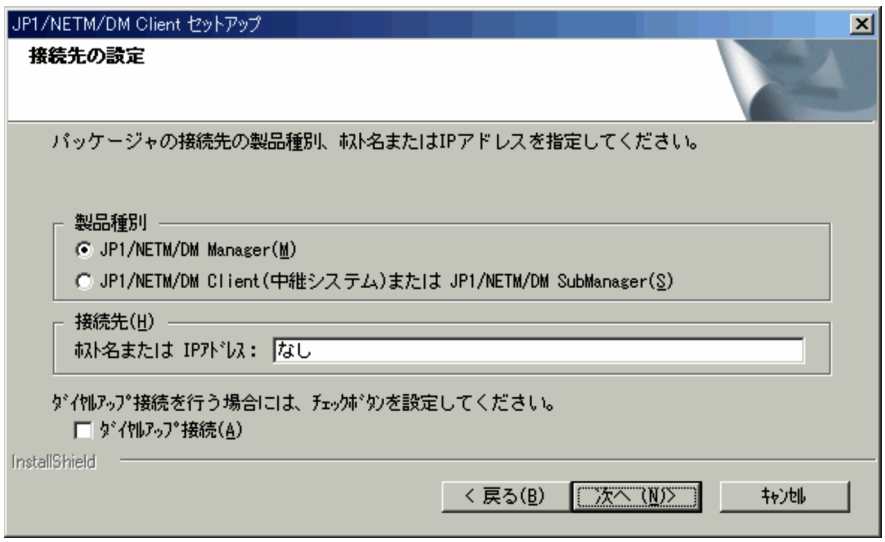
クライアントの AMT にアクセスするためのパスワードを，半角 60 文字以内で指定します。

3.1.15　接続先の設定（パッケージャ）

パッケージャの接続先の設定をします。このダイアログボックスは，「パッケージャ」をインストールする場合に表示されます。

なお，この設定は，［JP1/NETM/DM パッケージャ］ウィンドウの［JP1/NETM/DM ログオン］ダイアログボックスで変更できます。

図 3-18　［接続先の設定］ダイアログボックス



製品種別

パッケージャの接続先の製品種別を，「JP1/NETM/DM Manager」と「JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager」から選択します。デフォルトは「JP1/NETM/DM Manager」です。

接続先

パッケージャの接続先のホスト名または IP アドレスを指定してください。デフォルトは「なし」です。

ダイヤルアップ接続

パッケージャがダイヤルアップ接続を使用して上位システムに接続する場合は，チェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

なお，このチェックボックスはクライアントの場合だけ表示されます。中継システムの場合は表示されません。

［次へ］ボタンをクリックすると，インストールを続行します。ただし，「ダイヤルアップ接続」を選択した場合だけ，次の設定に進む前に［ダイヤルアップ接続の設定］ダイアログボックスが表示されます。内容は，「クライアント」がダイヤルアップ接続する場合の設定画面と同じです。詳細は「3.1.12　ダイヤルアップの設定」を参照してくださ

い。なお，クライアントのダイヤルアップ接続とパッケージャのダイヤルアップ接続は別々に設定します。どちらかだけをダイヤルアップ接続にしてもかまいません。

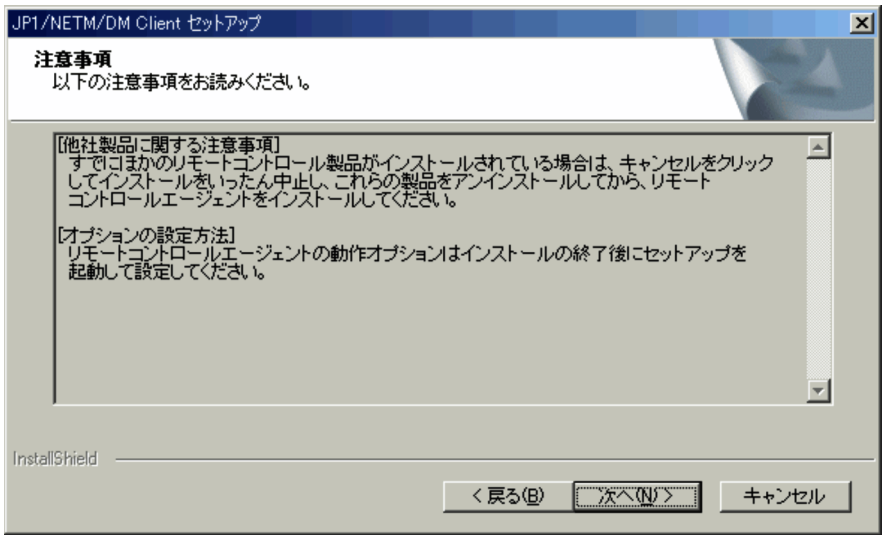
3.1.16　リモートコントロールエージェントの注意事項の確認

新規に「リモートコントロールエージェント」をインストールする場合，［注意事項］ダイアログボックスが表示されます。JP1/NETM/DM Client - Base の場合，このダイアログボックスは表示されません。

［注意事項］ダイアログボックスの内容は，Windows Server 2008，Windows Vista，Windows Server 2003，Windows XP，または Windows 2000 にインストールする場合と，Windows NT 4.0，Windows Me，または Windows 98 にインストールする場合とで異なります。

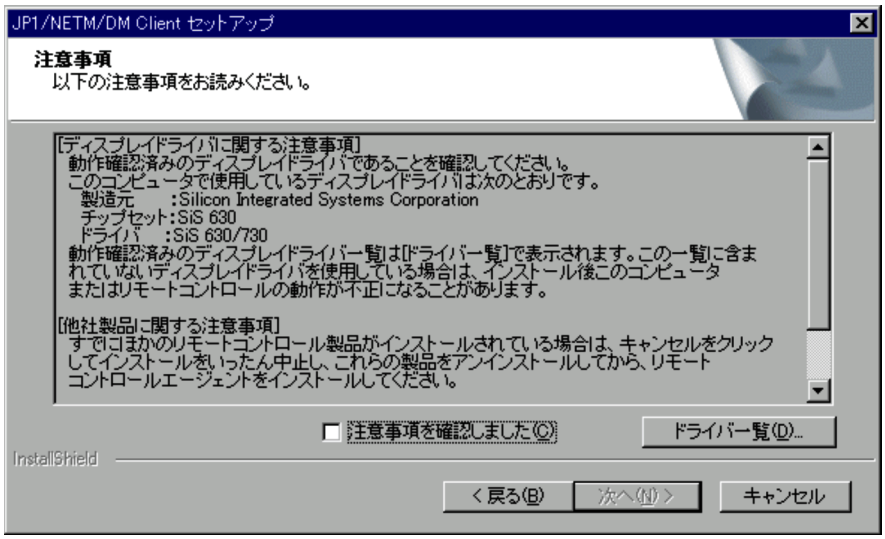
● **Windows Server 2008，Windows Vista，Windows Server 2003，Windows XP，または Windows 2000 にインストールする場合**

図 3-19　［注意事項］ダイアログボックス（Windows Server 2008，Windows Vista，Windows Server 2003，Windows XP，または Windows 2000 にインストールする場合）



● **Windows NT 4.0，Windows Me，または Windows 98 にインストールする場合**

図 3-20　［注意事項］ダイアログボックス（Windows NT 4.0，Windows Me，または Windows 98 にインストールする場合）



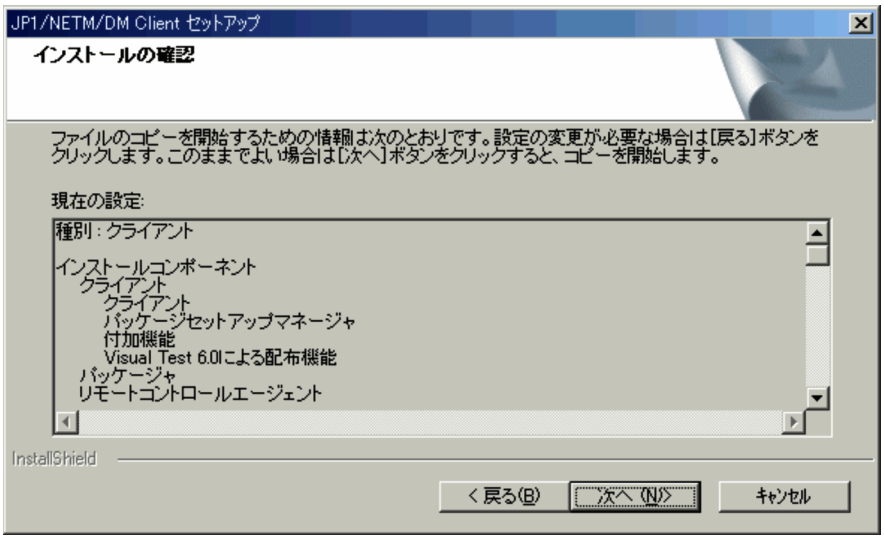
注意事項の詳細は，マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

Windows NT 4.0，Windows Me，または Windows 98 の場合，注意事項を確認したら「注意事項を確認しました」チェックボックスをオンにします。

3.1.17　インストール内容の確認

設定したコンポーネントの内容が，［インストールの確認］ダイアログボックスに表示されるので，確認します。

図 3-21　［インストールの確認］ダイアログボックス



設定内容に変更が必要な場合は，［戻る］ボタンをクリックして，該当するダイアログボックスを表示し，変更してください。

表示された設定内容でよい場合は，［次へ］ボタンをクリックしてください。インストールが開始されます。

なお，インストールに失敗すると，自動的に再インストールが実行されます。［JP1/NETM/DM Client セットアップ］ダイアログボックスが表示されたら，「3.1.3　ユーザ登録」から入力し直してください。それでもインストールに失敗する場合は，InstallShield 環境削除ツールを実行してから再インストールしてください。

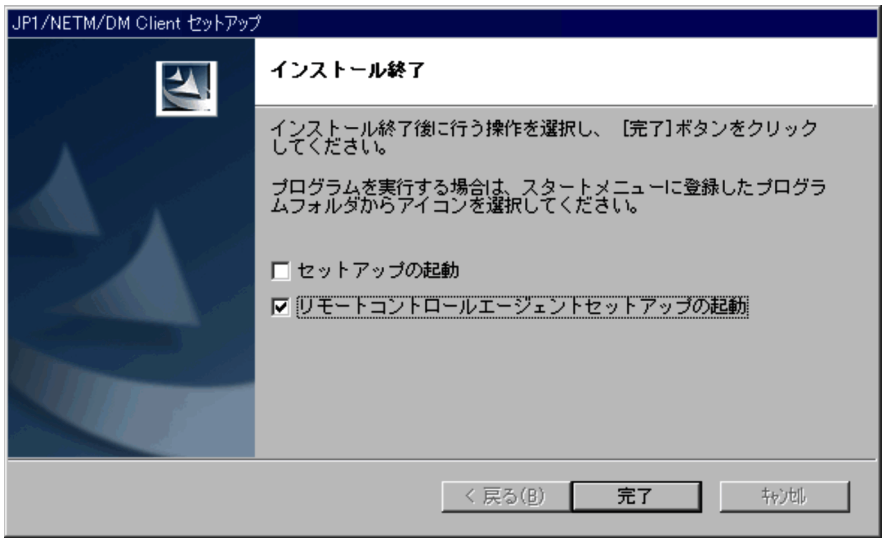
JP1/NETM/DM Client を再インストールする方法については，「3.3　JP1/NETM/DM Client のインストールに失敗したときの対処」を参照してください。

3.1.18　インストールの終了

インストールが終了すると，［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。［インストール終了］ダイアログボックスには次の 2 種類があり，インストール状態によって適切な方が表示されます。

● 通常の場合

図 3-22 ［インストール終了］ダイアログボックス（通常の場合）



「セットアップの起動」および「リモートコントロールエージェントセットアップの起動」のうち，インストールが終了したあとに行いたい操作のチェックボックスをオンにし，［完了］ボタンをクリックしてください。

● 再起動が必要な場合

インストールしたあとに再起動が必要な場合，すぐに再起動するかあとで再起動するかを選択するダイアログボックスが表示されます。内容は，JP1/NETM/DM Manager の場合と同様です。どちらかを選択し，CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出して［完了］ボタンをクリックしてください。

3.2　JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする

JP1/NETM/DM Client - Base には，次のオプション製品があります。

- JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature
- JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature
- JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature

使用する機能に応じてオプション製品をインストールします。

なお，オプション製品をインストールする前に，JP1/NETM/DM Client - Base をインストールしておく必要があります。JP1/NETM/DM Client - Base のインストール方法については，「3.1　JP1/NETM/DM Client のインストール手順」を参照してください。

ここでは，各オプション製品の前提コンポーネントやインストール手順について説明します。

3.2.1　オプション製品の前提コンポーネント

JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする場合，JP1/NETM/DM Client - Base の次のコンポーネントをインストールしておきます。

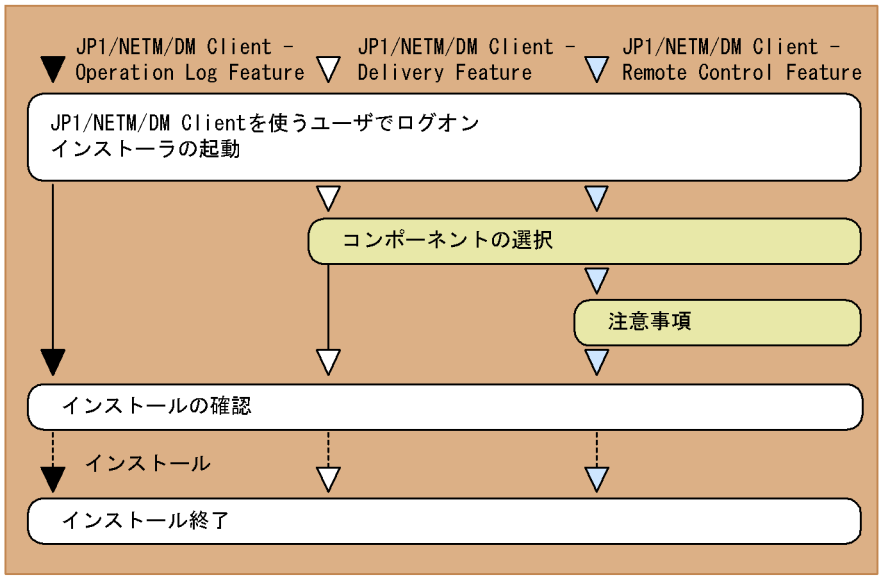
オプション製品	JP1/NETM/DM Client - Base のコンポーネント
JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature	「中継システム」または「クライアント」コンポーネントがインストール済み
JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature	
JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature	コンポーネントのどれか一つがインストール済み

JP1/NETM/DM Client - Base および各オプション製品のコンポーネントについては，「1.1.2　コンポーネントの構成」を参照してください。

3.2.2　オプション製品のインストール手順

JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする手順を次の図に示します。

図 3-23　JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品のインストール手順



（凡例）

：　共通のインストール手順

：　JP1/NETM/DM Client - Delivery Featureまたは
JP1/NETM/DM Client - Remote Control Featureの設定

インストール手順は，新規インストールの場合と上書きインストールの場合で共通です。

次に，オプション製品ごとのインストール手順を説明します。

3.2.3　JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature のインストール

JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature のインストール手順を説明します。なお，JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature には，コンポーネントの選択はありません。

(1) ログオン

Windows NT の場合，Administrator 権限を持ったユーザの名前でログオンしてください。

Windows Me または Windows 98 の場合は，どのユーザとしてログオンしてインストールしてもかまいません。

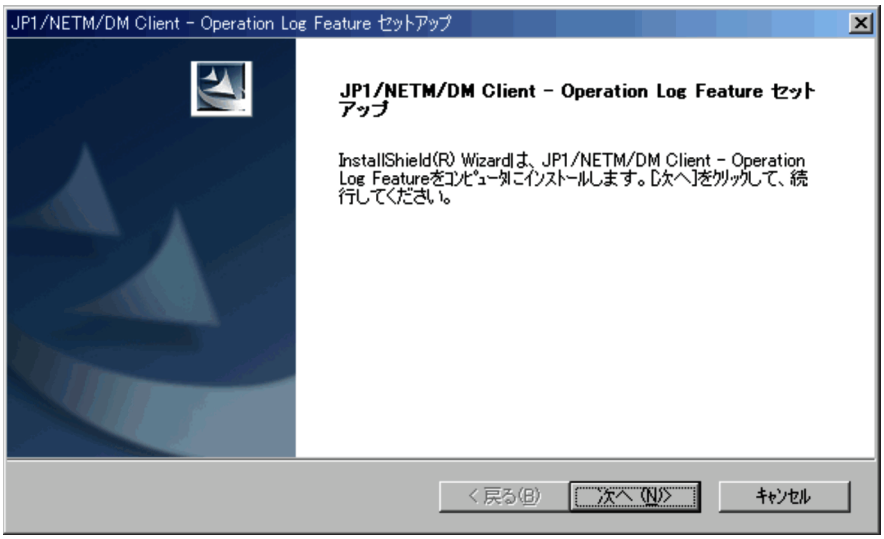
(2) インストーラの起動

提供媒体を CD-ROM ドライブに入れ，起動したインストーラの指示に従ってインストー

ルを進めます。

インストーラを起動すると，JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature のインストールプログラムが起動し，［JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 3-24　［JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature セットアップ］ダイアログボックス

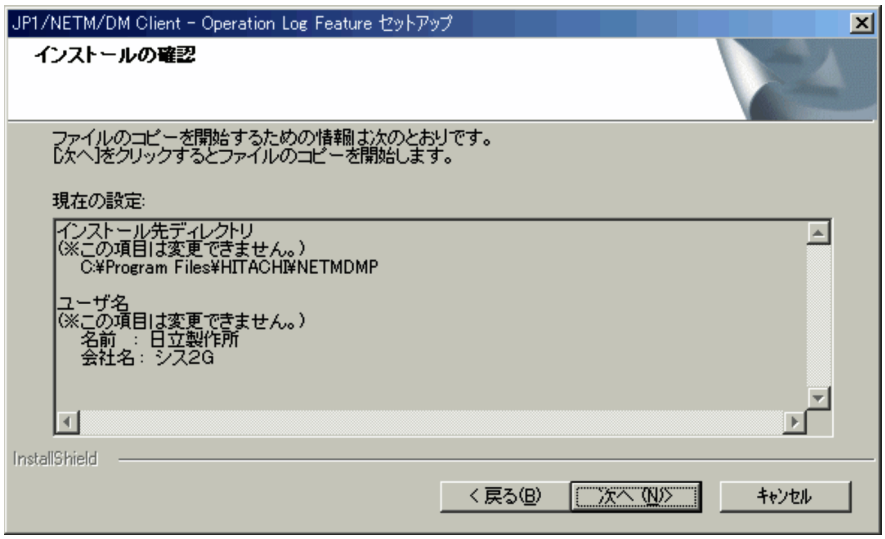


［次へ］ボタンをクリックし，インストールを続行します。インストールを中止するときは［キャンセル］ボタンをクリックします。また，以降で説明するダイアログボックスで［戻る］ボタンをクリックすると，一つ前のダイアログボックスに戻ります。

（3）インストール内容の確認

インストール先ディレクトリとユーザ名が，［インストールの確認］ダイアログボックスに表示されるので，確認します。

図 3-25 ［インストールの確認］ダイアログボックス

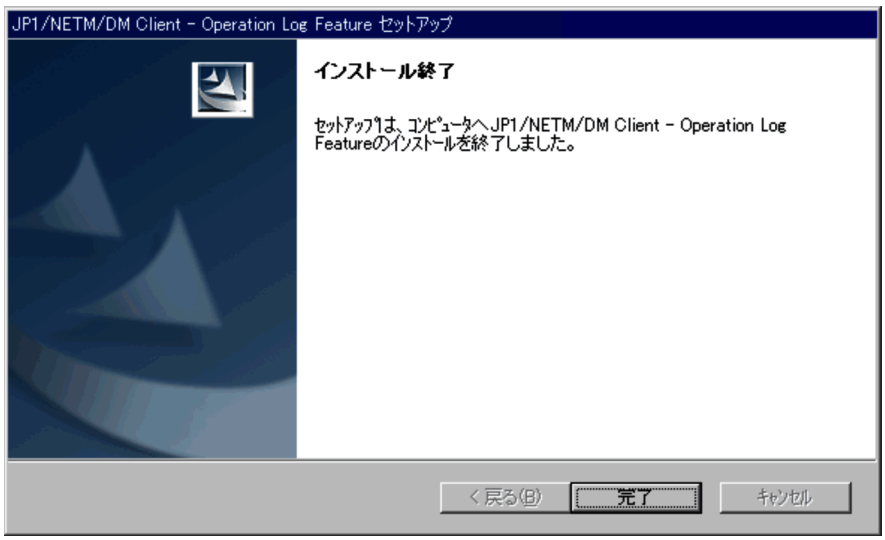


［次へ］ボタンをクリックすると，インストールが開始されます。

(4) インストールの終了

インストールが終了すると，［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。

図 3-26 ［インストール終了］ダイアログボックス



［完了］ボタンをクリックして，インストールを完了してください。

3.2.4　JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature のインストール

JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature のインストール手順を説明します。

（1）ログオン

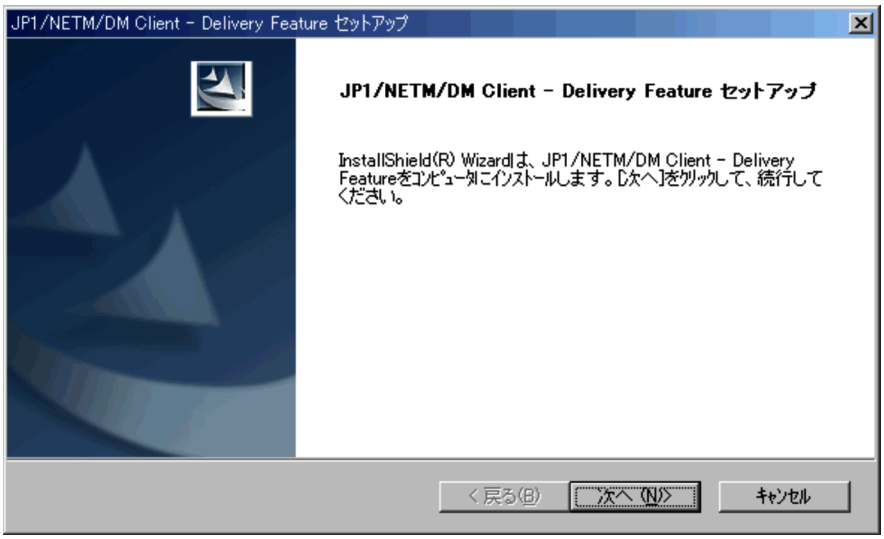
Windows NT の場合，Administrator 権限を持ったユーザの名前でログオンしてください。Windows Me または Windows 98 の場合は，どのユーザとしてログオンしてインストールしてもかまいません。

（2）インストーラの起動

提供媒体を CD-ROM ドライブに入れ，起動したインストーラの指示に従ってインストールを進めます。

インストーラを起動すると，JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature のインストールプログラムが起動し，［JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 3-27　［JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature セットアップ］ダイアログボックス



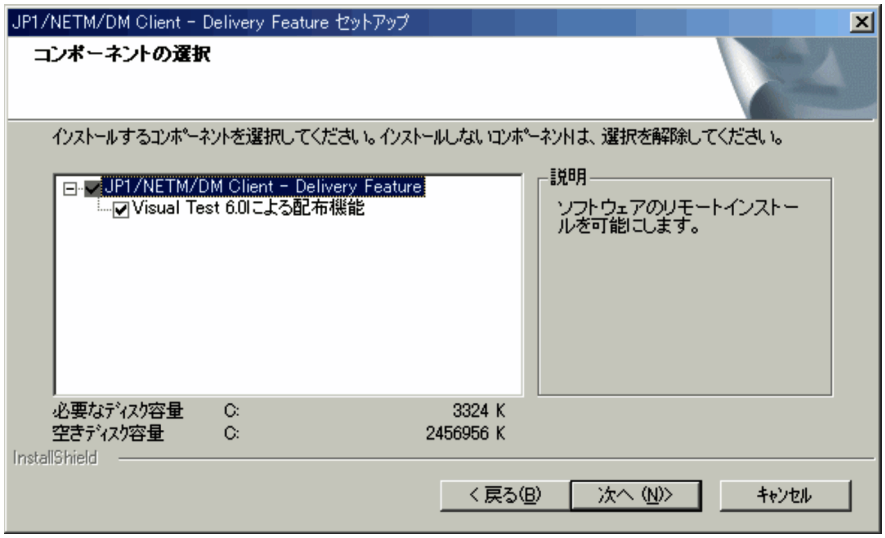
［次へ］ボタンをクリックし，インストールを続行します。インストールを中止するときは［キャンセル］ボタンをクリックします。また，以降で説明するダイアログボックスで［戻る］ボタンをクリックすると，一つ前のダイアログボックスに戻ります。

（3）コンポーネントの選択

このダイアログボックスは，JP1/NETM/DM Client - Base の「クライアント」がインストール済みの場合だけ表示されます。JP1/NETM/DM Client - Base の「中継システム」

がインストール済みの場合は，コンポーネントが無条件にインストールされるため，ダイアログボックスは表示されません。

図 3-28 ［コンポーネントの選択］ダイアログボックス

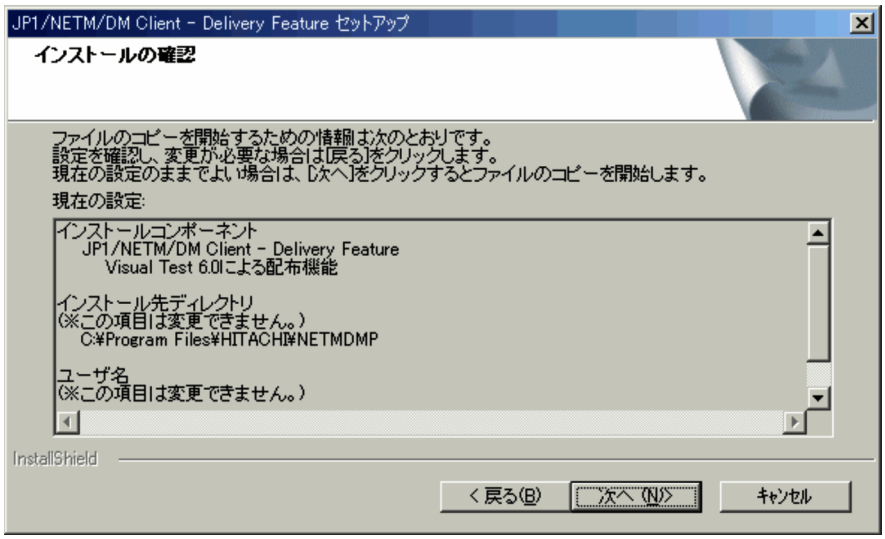


インストールできるコンポーネントは「Visual Test 6.0 による配布機能」です。なお，OS が 64 ビット版の Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) の場合，このコンポーネントはインストールできないため，ダイアログボックスは表示されません。

(4) インストール内容の確認

設定したコンポーネントの内容が，［インストールの確認］ダイアログボックスに表示されるので，確認します。

図 3-29　［インストールの確認］ダイアログボックス



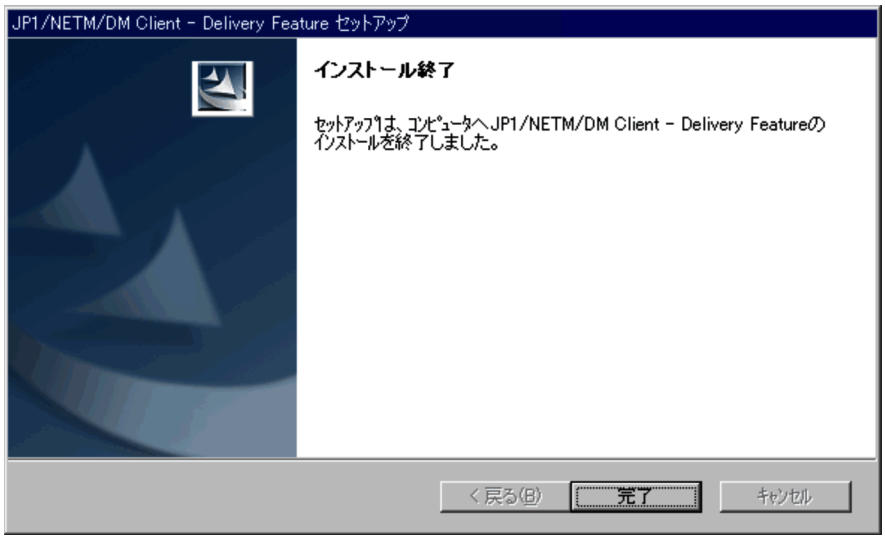
設定内容に変更が必要な場合は，［戻る］ボタンをクリックして，該当するダイアログボックスを表示し，変更してください。

表示された設定内容でよい場合は，［次へ］ボタンをクリックしてください。インストールが開始されます。

(5) インストールの終了

インストールが終了すると，［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。

図 3-30　［インストール終了］ダイアログボックス



［完了］ボタンをクリックして，インストールを完了してください。

3.2.5　JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のインストール

JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のインストール手順を説明します。

(1) ログオン

Windows NT の場合，Administrator 権限を持ったユーザの名前でログオンしてください。

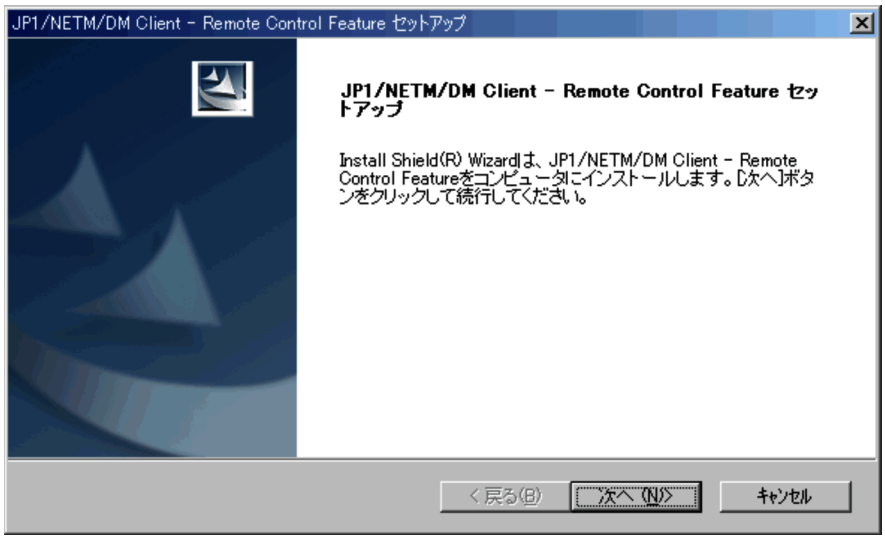
Windows Me または Windows 98 の場合は，どのユーザとしてログオンしてインストールしてもかまいません。

(2) インストーラの起動

提供媒体を CD-ROM ドライブに入れ，起動したインストーラの指示に従ってインストールを進めます。

インストーラを起動すると，JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のインストールプログラムが起動し，［JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 3-31　［JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature セットアップ］ダイアログボックス

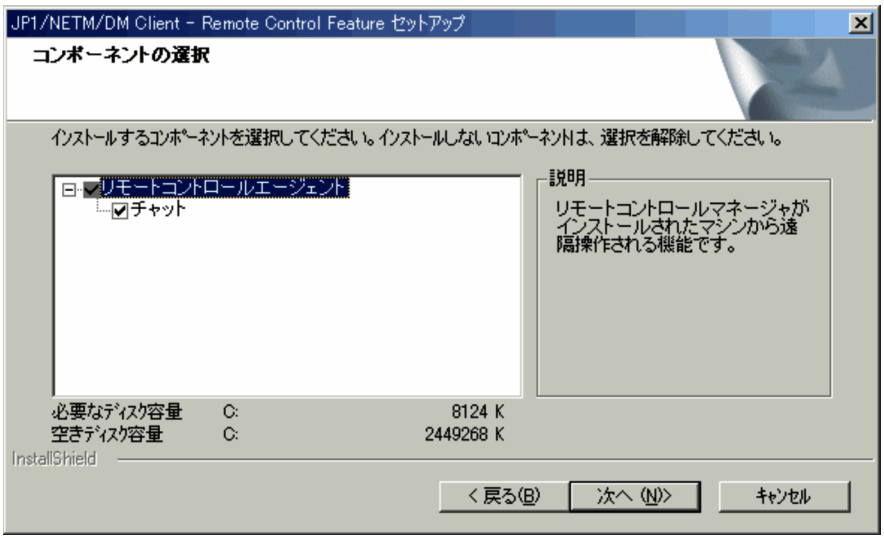


［次へ］ボタンをクリックし，インストールを続行します。インストールを中止するときは［キャンセル］ボタンをクリックします。また，以降で説明するダイアログボックスで［戻る］ボタンをクリックすると，一つ前のダイアログボックスに戻ります。

(3) コンポーネントの選択

「リモートコントロールエージェント」は無条件にインストールされます。「チャット」をインストールするかどうか選択できます。

図 3-32　［コンポーネントの選択］ダイアログボックス

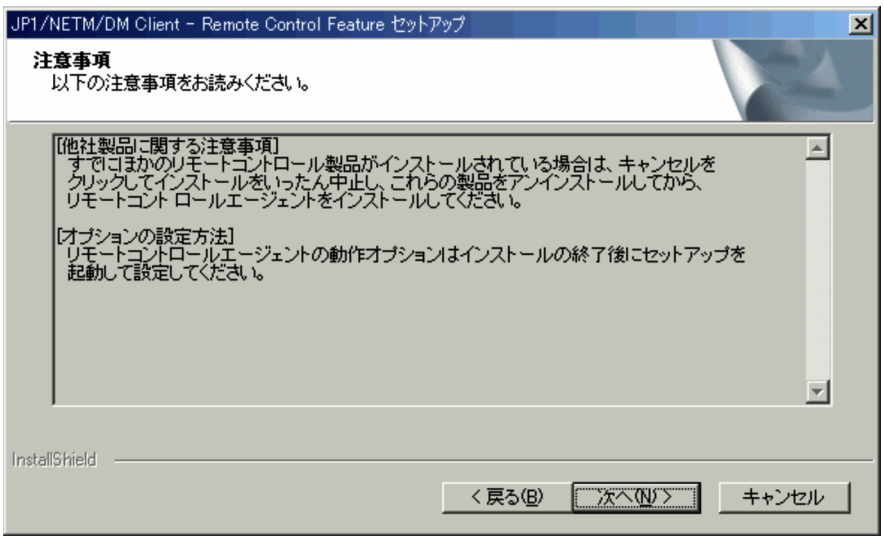


(4) 注意事項の確認

［注意事項］ダイアログボックスが表示されます。

注意事項の詳細は，マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

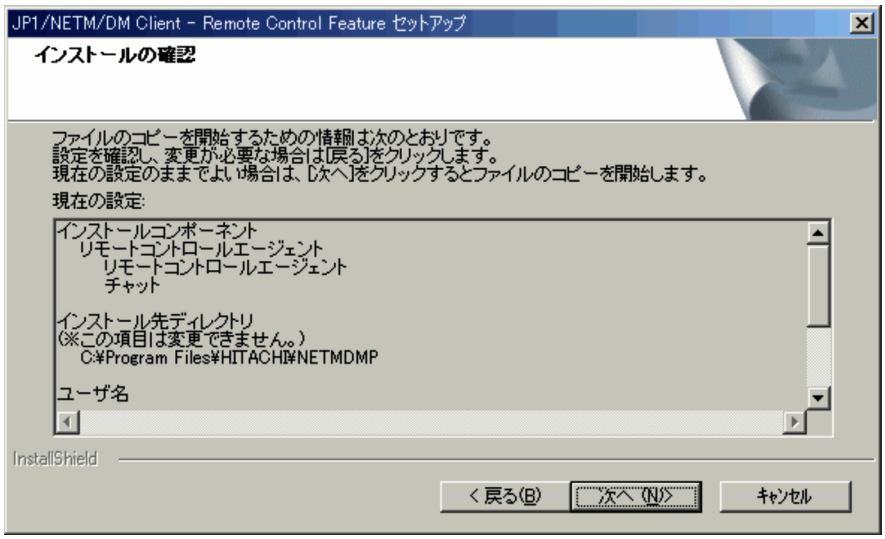
図 3-33　［注意事項］ダイアログボックス



(5) インストール内容の確認

設定したコンポーネントの内容が，［インストールの確認］ダイアログボックスに表示されるので，確認します。

図 3-34 ［インストールの確認］ダイアログボックス



設定内容に変更が必要な場合は，［戻る］ボタンをクリックして，該当するダイアログボックスを表示し，変更してください。

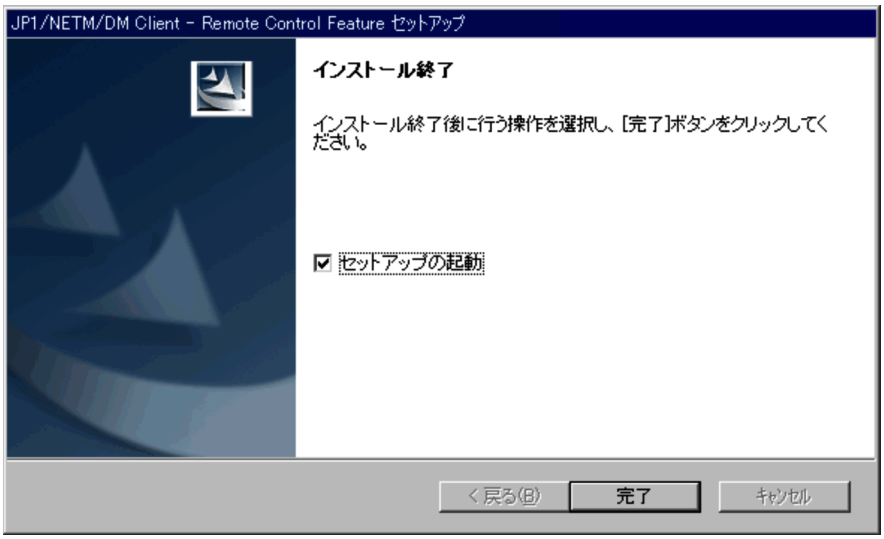
表示された設定内容でよい場合は，［次へ］ボタンをクリックしてください。インストールが開始されます。

(6) インストールの終了

インストールが終了すると，［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。［インストール終了］ダイアログボックスには次の 2 種類があり，インストール状態によって適切な方が表示されます。

● 通常の場合

図 3-35　［インストール終了］ダイアログボックス（通常の場合）



インストールが終了したあとに続けてセットアッププログラムを起動する場合は，「セットアップの起動」チェックボックスをオンにし，CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出して［完了］ボタンをクリックしてください。

● 再起動が必要な場合

図 3-36　再起動を要求するダイアログボックス



インストールのあとに再起動が必要な場合，再起動を要求するダイアログボックスが表示されるので，CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出して［OK］ボタンをクリックしてください。

3.2.6　インストール内容の変更

一度インストールしたオプション製品のインストール内容を変更する場合，製品によって変更する方法が異なります。

● 上書きインストールする製品

- JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature
- JP1/NETM/DM Client - Base の「中継システム」に対してインストールした JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature

● メンテナンスウィザードを使用する製品

- JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature
- JP1/NETM/DM Client - Base の「クライアント」に対してインストールした JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature

メンテナンスウィザードを使用したインストール内容の変更手順については,「1.3　インストール内容を変更する」を参照してください。

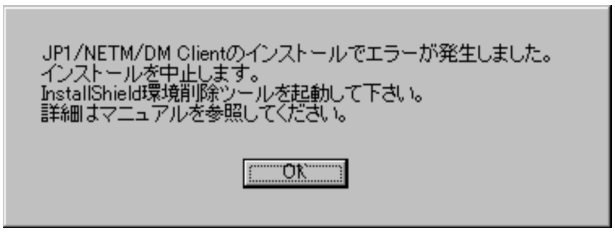
オプション製品は,［コントロールパネル］の［アプリケーションの追加と削除］または［プログラムの追加と削除］からアンインストールできます。

なお,JP1/NETM/DM Client - Base をアンインストールすると,すべてのオプション製品が自動的にアンインストールされます。

3.3　JP1/NETM/DM Client のインストールに失敗したときの対処

JP1/NETM/DM Client では，新規インストールが失敗すると，自動的に再インストールが実行されます。再インストール中にエラーが発生した場合，インストールは中止されます。再インストールに失敗すると，次のダイアログが表示されます。

図 3-37　インストール失敗時に表示されるダイアログ



JP1/NETM/DM Client をインストールし直す場合は，ダイアログの［OK］ボタンをクリックしたあと，InstallShield 環境削除ツールを実行してください。InstallShield 環境削除ツールは，インストール媒体の disk1 フォルダ下に格納されています。

- JP1/NETM/DM Client 用のツール：delisclt.exe
- JP1/NETM/DM Client - Base 用のツール：delisbs.exe

InstallShield 環境削除ツールの実行が完了したら，JP1/NETM/DM Client をインストールし直してください。

4 JP1/NETM/DM Manager をセットアップする

この章では，JP1/NETM/DM Manager のセットアップ方法について説明します。
なお，JP1/NETM/DM Manager のセットアップは，Administrator 権限のあるユーザだけが実行できます。

4.1 JP1/NETM/DM Manager のセットアップの流れ

4.2 サーバをセットアップする

4.3 中継マネージャの基本設定をセットアップする

4.4 中継マネージャの詳細設定をセットアップする

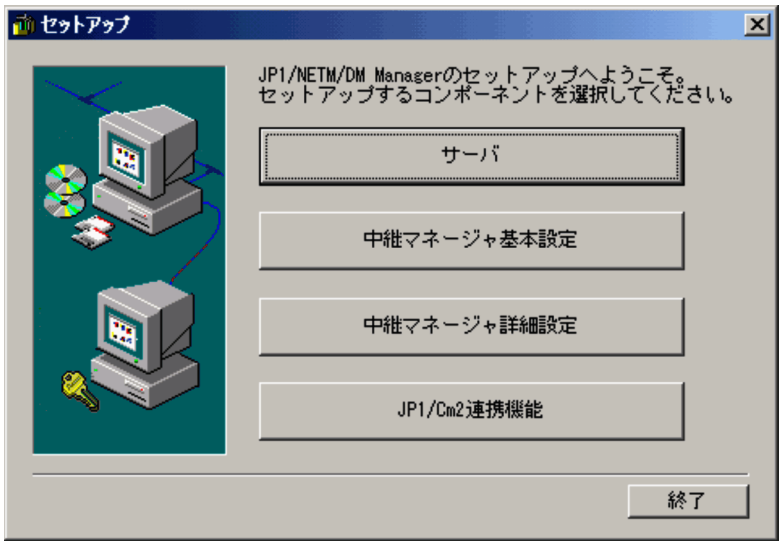
4.5 JP1/Cm2 連携機能をセットアップする

4.1　JP1/NETM/DM Manager のセットアップの流れ

JP1/NETM/DM Manager のセットアップの流れを次に示します。

1. **［スタート］メニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［セットアップ］を選択する。**
   ［セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 4-1　［セットアップ］ダイアログボックス



2. **セットアップをするコンポーネントのボタンをクリックする。**
   選択したコンポーネントのセットアッププログラムが起動します。マネージャでは「サーバ」，中継マネージャでは「サーバ」，「中継マネージャ基本設定」および「中継マネージャ詳細設定」を設定します。
3. **セットアップが終了したら，［終了］ボタンをクリックする。**
   セットアップが完了します。

次の節以降で，コンポーネントごとのセットアップ方法を説明します。

なお，「Asset Information Manager Limited」のセットアップについては，「10.　Asset Information Manager Limited を使用するための設定」を参照してください。

4.2 サーバをセットアップする

［サーバセットアップ］ダイアログボックスで各パネルを設定し，設定が終わったら［OK］ボタンをクリックしてください。［セットアップ］ダイアログボックスに戻ります。

なお，サーバのセットアップの設定を更新するには，JP1/NETM/DM Manager のセットアップの終了後，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，Remote Install Server サービスを再起動する必要があります。

サーバのセットアップ項目を次の表に示します。ただし，「リモートインストールマネージャ」だけをインストールした場合，セットアップで表示されるのは［データベース環境］，［通信関連］，［WSUS 連携］および［監査ログ］パネルだけです。

表 4-1 サーバのセットアップ項目

分類	項目
データベース環境	リレーショナルデータベースの設定（データベースサーバのホスト名・データベース名・管理者ユーザ ID・パスワード）
通信関連	ポート番号，起動プロトコル，インターバル転送
ダイヤルアップ※1	認証情報（ユーザ名・パスワード・ドメイン）
サーバカスタマイズオプション	同時に接続できる下位システム数
	下位システムの同時実行要求数
	ジョブを削除する時刻の指定
	下位システムの起動の監視
	下位システムのファイル転送エラーの監視
	接続先以外からのファイル転送の中断・再開ジョブの受け付け
マルチキャスト配布	マルチキャスト配布用のポート番号，マルチキャスト配布のジョブの送信設定（マルチキャストアドレス，パケットサイズ）
結果記録オプション	ジョブの実行結果の記録
	ID ジョブのクライアント実行結果の記録
	全あて先ジョブの実行結果の記録
システム構成関連	システム構成情報の自動反映
	システム構成変更時の連携
	システム構成情報の削除履歴
運用キー	キー項目
	アドレス解決の方法
	アドレス解決できないあて先へのジョブ
	ホスト識別子の使用
クラスタ設定※2	クラスタシステムの使用

分類	項目
JP1/Cm2 連携※3	JP1/Cm2 連携機能の使用
	JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm のホスト名または IP アドレス，およびポート番号
	JP1/Cm2 または HP OpenView のシンボル一括追加
イベントサービス	イベントサービス機能の使用
障害関連	ログ世代管理数
	ログエントリ数
	イベントビューアへ出力するメッセージ種別
クライアントアラート※4	クライアントアラート情報の上位システムへの中継
	クライアントアラート情報の出力（CSV 形式ファイルおよびイベントビューア）
稼働監視	ソフトウェア稼働監視履歴の保存
	ホストごとの操作履歴の削除条件
	操作履歴の削除時の退避
	抑止履歴を保存する最大イベント数
ネットワーク接続	認証情報（ログイン ID・パスワード・ドメイン）
JP1/NETM/CSC 連携	JP1/NETM/Client Security Control から実行された「メッセージの通知」ジョブの正常終了時の削除
WSUS 連携※5	WSUS 連携機能の使用
Directory 連携	Active Directory との連携
AIM 関連	接続する「Asset Information Manager Limited」または JP1/NETM/Asset Information Manager の URL
	［操作ログ一覧］ウィンドウでの管理用データベーステーブルに，稼働情報を格納するタイミング
AMT 連携※6	AMT 管理ユーザのユーザ ID およびパスワード
監査ログ	監査ログの出力

注※ 1

リモートアクセスサービスがインストールされている場合に表示されます。

注※ 2

中継マネージャでは表示されません。

注※ 3

「JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ」がインストールされている場合に表示されます。

注※ 4

中継マネージャでだけ選択できます。

注※ 5

サーバのサブコンポーネントの「リモートインストールマネージャ」がインストールされてい

る場合だけ表示されます。

注※ 6

「AMT 連携機能」がインストールされている場合に表示されます。

4.2.1 ［データベース環境］パネル

［データベース環境］パネルから，必要に応じてリレーショナルデータベースの設定を変更します。

なお，［データベース環境］パネルは，使用するリレーショナルデータベースによって表示される設定項目が異なります。

また，「Asset Information Manager Limited」を使用している場合に，［データベース環境］パネルからリレーショナルデータベースの設定を変更するときには，「Asset Information Manager Limited」の「データソース／ネット・サービスの作成」の再設定が必要になります。データソース／ネット・サービスの作成については，「10.3.8　データソースまたはネット・サービスを作成する」を参照してください。

（1）［データベース環境］パネル（Embedded RDB の場合）

Embedded RDB を使用する場合の，［データベース環境］パネルの設定方法について説明します。

［データベース環境］パネルは，「サーバ本体機能」をインストールする場合と，「リモートインストールマネージャ」だけをインストールする場合で，設定できる項目が異なります。

「サーバ本体機能」をインストールした場合と，「リモートインストールマネージャ」だけをインストールした場合の［データベース環境］パネルを，図 4-2 と図 4-3 に示します。

図 4-2 ［データベース環境］パネル（「サーバ本体機能」をインストールした場合）

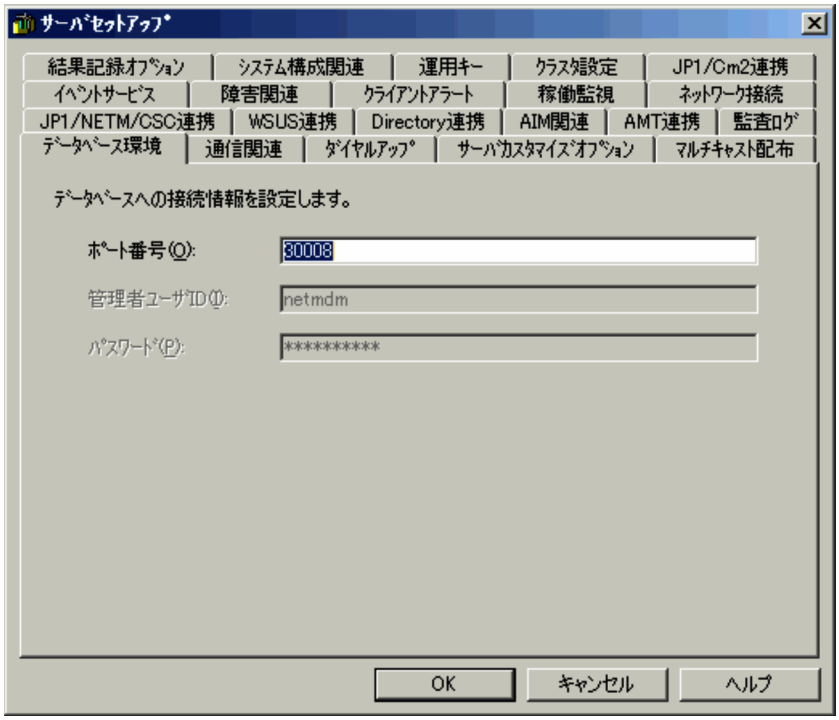
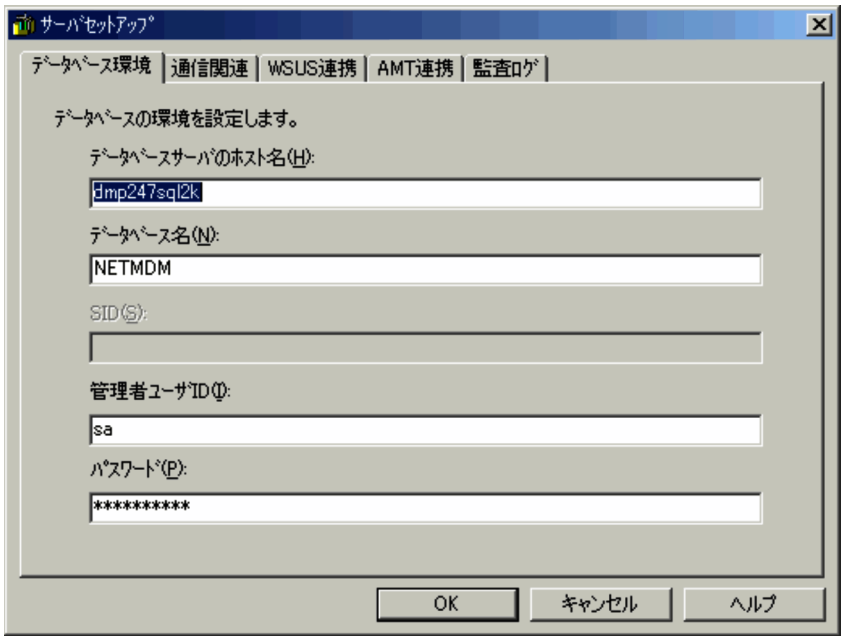


図 4-3 ［データベース環境］パネル（「リモートインストールマネージャ」だけをインストールした場合）



ポート番号

データベースとの接続に使用するポート番号を指定します。ポート番号は，5001 ～ 65535 で指定してください。デフォルトは，インストール時に［データベースの設定］に指定したポート番号です。

ポート番号をデフォルトから変更した場合，設定を有効にするためには，セットアップ完了後に次の操作を行う必要があります。

1. Remote Install Server サービスを停止する。
2. JP1/NETM/DM のインストールディレクトリ ¥BIN 下に格納されている netmdb_setup.bat コマンドを実行する。
   netmdb_setup.bat コマンドの終了時は，キー入力待ちの状態になります。キー入力なしでコマンドを終了させたい場合は，オプションに「/nopause」を指定してコマンドを実行してください。
3. Remote Install Server サービスを起動する。

管理者ユーザ ID

データベースにログインする管理者ユーザ ID を指定します。デフォルトは，インストール時に指定した管理者ユーザ ID です。

この項目は，「リモートインストールマネージャ」だけがインストールされている場合に活性化します。

パスワード

データベースにログインするためのパスワードを指定します。デフォルトは，インストール時に指定したパスワードです。

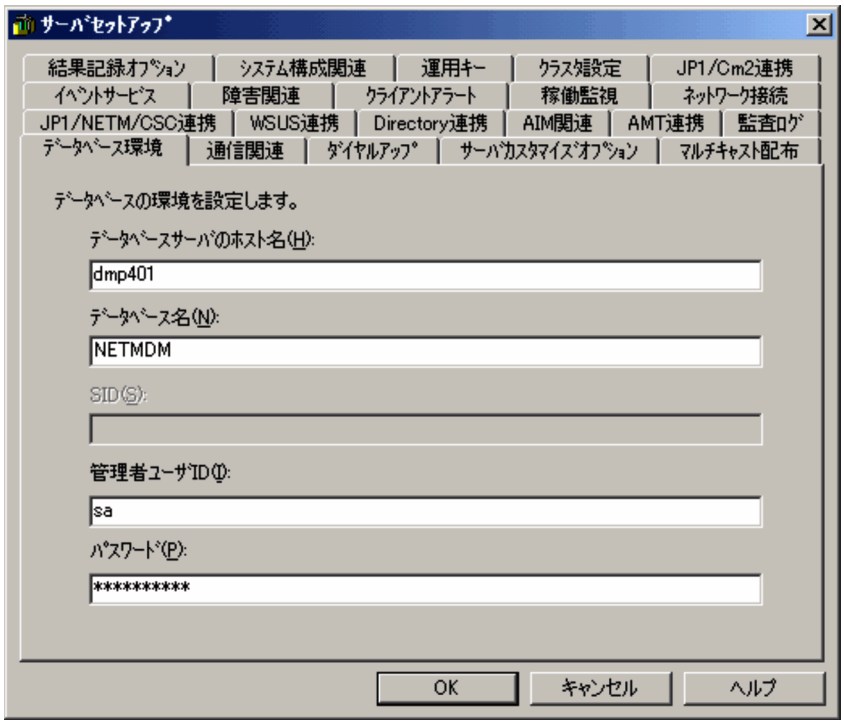
この項目は，「リモートインストールマネージャ」だけがインストールされている場合に活性化します。

(2) ［データベース環境］パネル（Microsoft SQL Server または Oracle の場合）

Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合の，［データベース環境］パネルの設定方法について説明します。

なお，「リモートインストールマネージャ」だけをインストールした PC では，このパネルの設定は無効です。「リモートインストールマネージャ」のインストール時または起動時に指定した接続先の PC での，［データベース環境］パネルの設定が有効になります。

図 4-4 ［データベース環境］パネル（Microsoft SQL Server または Oracle の場合）



データベースサーバのホスト名

データベースサーバとして使用するホスト名を指定します。
名前付きインスタンスを使用する場合は，次の形式でホスト名を指定してください。
データベースサーバのホスト名￥インスタンス名

データベース名

データベースの名称を指定します。設定は，データベースマネージャでの設定と合わせます。この項目はリレーショナルデータベースに，Microsoft SQL Server を使用する場合だけ指定します。

SID

データベースのシステム識別子（SID）を指定します。SID は Oracle データベース・インスタンスを表す英数字 4 文字で指定してください。デフォルトは，「NETM」です。この項目はリレーショナルデータベースに，Oracle を使用する場合だけ指定します。

管理者ユーザ ID およびパスワード

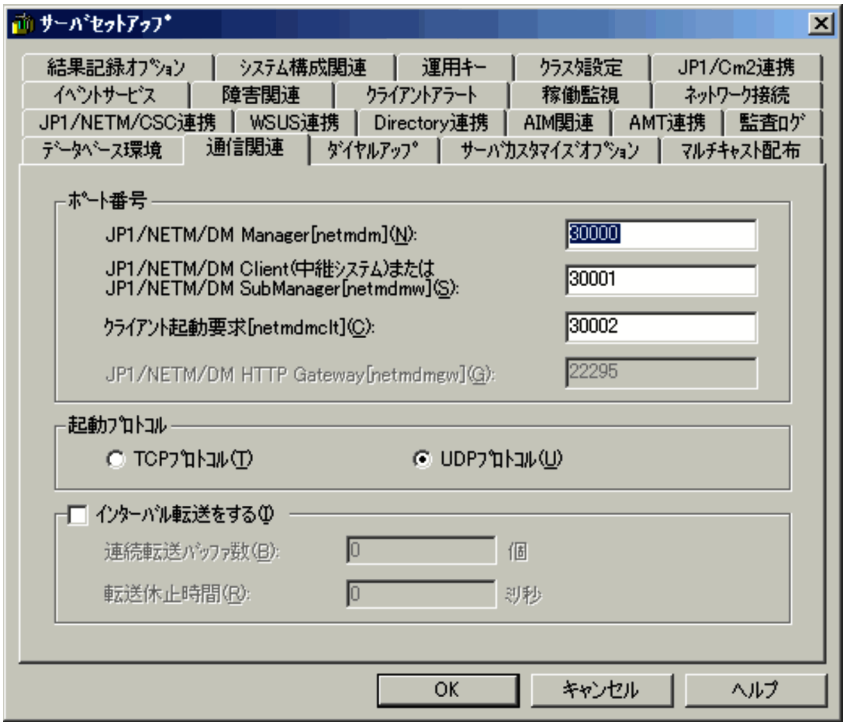
JP1/NETM/DM のデータベースにアクセス権のあるユーザ ID およびパスワードを設定します。ここで設定した管理者ユーザ ID は，パッケージャおよびクライアント接続時に使用されます。なお，リレーショナルデータベースに Oracle を使用する場合は，管理者ユーザ ID にシステム権限として「UNLIMITED TABLESPACE」が

必要です。

4.2.2　［通信関連］パネル

ポート番号と起動プロトコルを設定します。

図 4-5　［通信関連］パネル



(1) ポート番号

JP1/NETM/DM が通信するときに使用する，次の 4 種類のポート番号を設定します。

- JP1/NETM/DM Manager（デフォルト：30000）
- JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager（デフォルト：30001）
- クライアント起動要求（デフォルト：30002）
- JP1/NETM/DM HTTP Gateway（デフォルト：22295）

通常はデフォルトで表示されるポート番号を使用しますが，ほかのプログラムと重複するときは変更してください。TCP/IP の services ファイルにポート番号を設定しているときは，services ファイルの設定が有効になります。

「サーバ本体機能」と「リモートインストールマネージャ」を別の PC にインストールした場合は，「JP1/NETM/DM Manager」および「JP1/NETM/DM Client（中継システ

ム）または JP1/NETM/DM SubManager」のポート番号が，両方の PC で同じになるよう設定してください。ポート番号が異なる場合は，リモートインストールマネージャからサーバに接続できません。

なお，JP1/NETM/DM HTTP Gateway のポート番号は，JP1/NETM/DM HTTP Gateway を利用する場合にだけ使用されます。詳細については，「付録 E　インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入」を参照してください。

(2) 起動プロトコル

ダイヤルアップ接続を使用しない場合に，自システムを起動するときに使用するプロトコルを，UDP または TCP で設定します。デフォルトは「UDP プロトコル」です。

「TCP プロトコル」を選択し，services ファイルにポート番号を設定しているときは，services ファイルに netmdm *xxxxx*/tcp のエントリを追加してください（*xxxxx* はポート番号）。

「UDP プロトコル」を選択した場合，WAN 環境などで起動に失敗することがあるので注意してください。

(3) インターバル転送をする

下位システムへファイル転送が発生する場合，指定した単位ごとにファイルが分割され，インターバルを置いて実行されます。これによって，ファイル転送時のネットワークの負荷を軽減することができます。デフォルトはチェックボックスがオフです。

なお，インターバル転送は下位システムから上位システムへのファイル転送時は実行されません。

連続転送バッファ数

ファイルの転送先システムでのセットアップで指定した「ファイル転送バッファサイズ」を，ここでの 1 単位（個）とします。例えば「ファイル転送バッファサイズ」が 4,096 バイトであるとき，「連続転送バッファ数」に 2 個を指定すると，ジョブは 8,192 バイト単位で分割されます。

連続転送バッファ数は 0 ～ 4,294,967,295 個で指定してください。デフォルトは 1 個です。0 個を指定するとインターバル転送されません。

転送休止時間

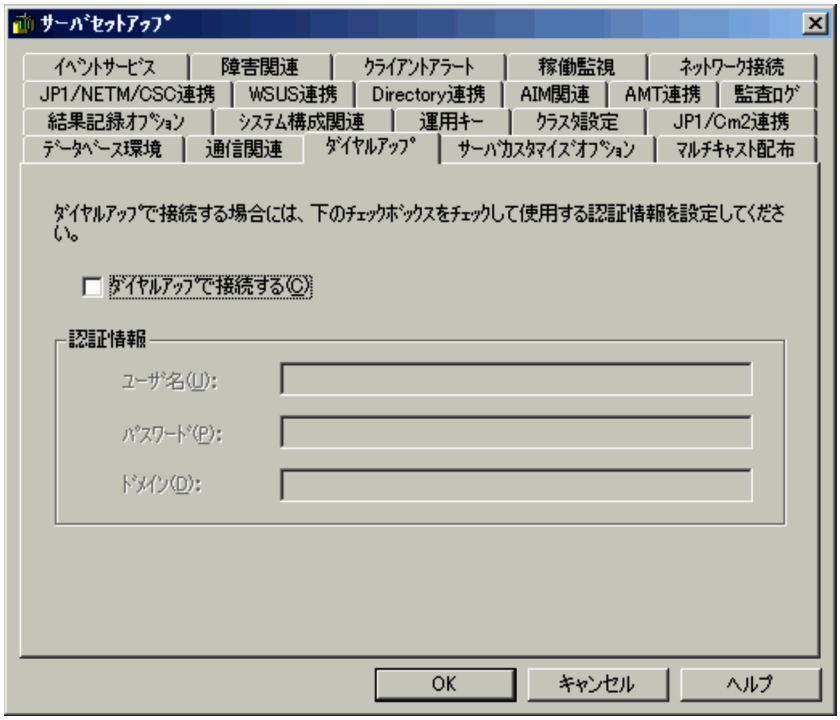
インターバル転送時に転送と転送との間のインターバルをどのくらいにするか指定します。0 ～ 4,294,967,295 ミリ秒で指定してください。デフォルトは 1,000 ミリ秒です。0 ミリ秒を指定するとインターバル転送されません。

4.2.3 ［ダイヤルアップ］パネル

ダイヤルアップで接続する場合は，「ダイヤルアップで接続する」チェックボックスをオンにし，ダイヤリングで使用するユーザ名，パスワード，およびドメインを設定します。

このパネルは，リモートアクセスサービスがインストールされている場合だけ表示されます。

図 4-6　［ダイヤルアップ］パネル



ダイヤルアップで接続する

ダイヤルアップ接続を使用する場合にチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオフです。

認証情報

ダイヤルアップ接続時に使用する，ユーザ名，パスワード，およびドメインを設定してください。

なお，ダイヤルアップ接続の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.6 ダイヤルアップ接続の設定」を参照してください。

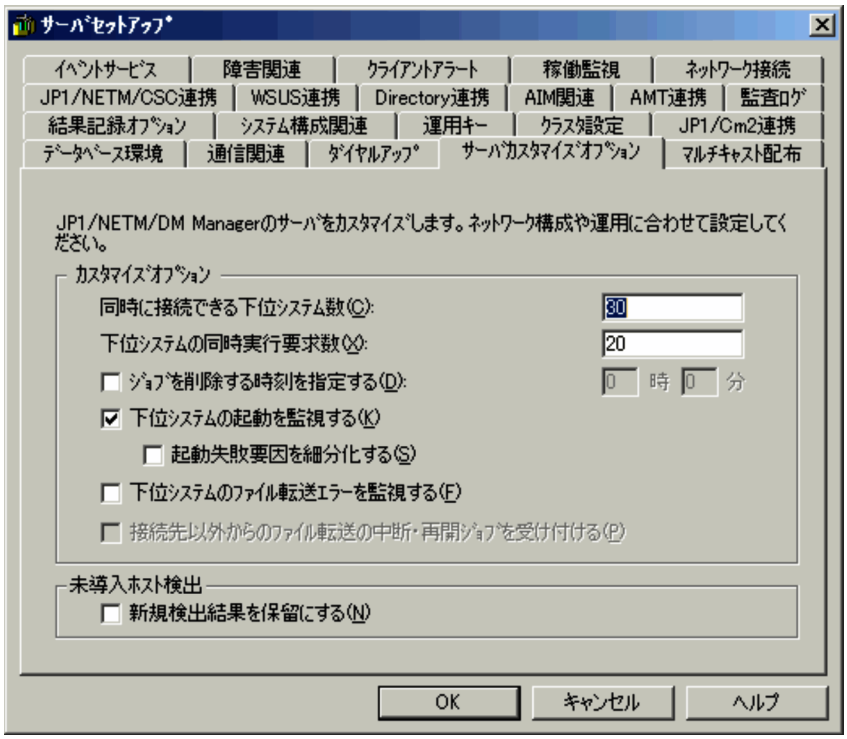
4.2.4　［サーバカスタマイズオプション］パネル

CPU，メモリ，ネットワークなどに関するチューニング項目を設定します。このパネルは，配布管理システムがインストールされているホストでだけ表示されます。配布管理システムが動作する PC の性能やネットワーク構成，動作環境を考慮して，必要な項目を設定してください。なお，チューニングの考え方については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.1.7(2)　同時に接続するホストの台数の調整」を参照してください。また，「同時に接続できる下位システム数」および「下位システムの同時実行要求数」の設

定によって，ジョブがどのように実行されるかについては，マニュアル「導入・設計ガイド」の「2.9.6　実行されたジョブの流れ」を参照してください。

このパネルでは，JP1/NETM/DM がインストールされていないホスト（JP1/NETM/DM 未導入ホスト）を検出する機能での，検出結果の管理方法も設定できます。JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能についての詳細は，「9.7　JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する」を参照してください。

図 4-7　［サーバカスタマイズオプション］パネル



同時に接続できる下位システム数

同時に接続する下位システムの数を絞り込むことができます。具体的には，この値は socket コネクションの数となります。socket コネクションの確立から解放までの間，カウントアップされています。

設定する値は，次の計算式に従って算出してください。

Embedded RDB を使用している場合，最小値は 4，最大値は 100，デフォルトは 30 です。

Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合，最小値は 4，最大値は 256，デフォルトは 50 です。

同時接続下位システム数＝直接接続するシステム数＋接続するパッケージャ数×2

ネットワークのトラフィックが高くなり，パケットの衝突が多いときには，この指

定値を小さくして下位システムの同時接続数を減らすことで，トラフィックを下げることができます。
指定した値を超える下位システムからの接続は拒否されますが，接続数に空きができると，再度，実行要求が送信されます。
なお，Embedded RDB を使用している場合，設定した値を有効にするためには，セットアップ完了後に次の操作を行う必要があります。

1. Remote Install Server サービスを停止する。
2. JP1/NETM/DM のインストールディレクトリ ¥BIN 下に格納されている netmdb_setup.bat コマンドを実行する。
   netmdb_setup.bat コマンドの終了時は，キー入力待ちの状態になります。キー入力なしでコマンドを終了させたい場合は，オプションに「/nopause」を指定してコマンドを実行してください。
3. Remote Install Server サービスを起動する。

下位システムの同時実行要求数

ジョブを実行するときに，同時に処理する下位システムの数を指定します。具体的には，配布管理システムが，下位システムに対して起動電文を一度に送信する数，つまり，一度にジョブを実行するクライアントの数となります。ここで指定した値よりも多くのクライアントに対してジョブを実行すると，この指定値に応じて分割してジョブを実行します。
最小値は 0，最大値は 100，デフォルトは 20 です。0 を指定すると下位システムへ起動電文を送信しなくなり，上位システム主導のジョブの実行や，クライアント制御を利用したあて先の起動ができなくなります。配布するファイルの容量が大きい（10 メガバイト以上）と，少数のクライアントの接続でも LAN の負荷が高くなることがありますので，ネットワークの性能に合わせた値を指定してください。「下位システムの同時実行要求数×パッケージサイズ」が，ネットワーク上に一度に流れるデータ量となります。
この値は，「同時に接続できる下位システム数」以下としてください。また，下位システムとの接続で回線交換網を経由している場合，契約している回線数以上の数を指定しても意味がないので注意してください。

ジョブを削除する時刻を指定する

ジョブの定義や実行状況を削除すると，すぐには削除されないで，ここで指定した時刻に削除されます。0 時 0 分～ 23 時 59 分で指定してください。
この設定は，正常に終了したジョブ，実行中のジョブおよびエラーになったジョブについてだけ有効です。ただし，実行待ち状態のジョブについては，ジョブ遅延実行の時間が設定されていても，削除を指示すると即時に削除されます。
デフォルトはチェックボックスがオフです。
通常，配布管理システムは多数のクライアントを管理しています。このため，ジョブの定義や実行状況を削除すると，データベースの削除に時間が掛かり，操作に支障を来したり，基幹業務に負荷を掛けたりするおそれがあります。ジョブ削除の遅延実行の時間を指定すると，都合の良い時刻に一斉に削除できるため，このような問題を回避できます。

下位システムの起動を監視する

下位システムが起動していないためジョブが実行されない場合，ジョブ実行状態を「起動失敗」に変更し，それを配布管理システムに通知するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオンになっています。なお，「起動失敗」のジョブは，次回クライアントからのポーリング時に実行されます。

起動失敗要因を細分化する

下位システムが起動に失敗した場合に，その要因を配布管理システムに細分化して通知するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオフになっています。チェックボックスをオンにすると，ジョブ実行状態「起動失敗」が，次のように細分化表示されます。

ジョブ実行状態	説明
起動失敗（JP1/NETM/DM 停止状態）	JP1/NETM/DM が停止しているため起動失敗した
起動失敗（電源オフ）	PC の電源がオフであるため起動失敗した
起動失敗	上記以外の要因で起動失敗した

なお，起動失敗要因を細分化するには，「下位システムの起動を監視する」と「起動失敗要因を細分化する」のチェックボックスが両方ともオンである必要があります。

下位システムのファイル転送エラーを監視する

次に示すジョブ種別のジョブがファイル転送時に通信エラーになった場合，ジョブの実行状態を「通信エラー」に変更し，それを配布管理システムに通知するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオフになっています。

- パッケージのインストール
- クライアントユーザによるインストール
- 中継までのパッケージ転送
- レジストリ取得項目の転送
- システム情報の取得
- 中継サーバからのコレクトファイル収集
- システム構成情報の取得
- 中継サーバからの結果通知保留
- 中継サーバの結果通知の保留解除
- メッセージの通知

なお，監視される下位システムの範囲は，セットアップで設定した配布管理システムとその直下の中継するシステムおよびクライアントの間のファイル転送に限られます。さらに階層下の通信エラーを監視するには，中継マネージャまたは中継システムのセットアップで設定が必要です。したがって，通信回線の品質に応じてジョブを監視する範囲を設定することができます。

接続先以外からファイル転送の中断・再開ジョブを受け付ける

複数の上位接続先を設定している場合に，デフォルトの接続先として設定した上位システム以外から「ファイル転送の中断」ジョブおよび「ファイル転送の再開」

ジョブを受け付けるかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオフです。
チェックボックスをオンにすると，中断を指示した上位システムとは別の上位システムからファイル転送を再開できます。ただし，このとき，中断を指示した上位システムのリモートインストールマネージャでは，ファイル転送を再開した下位システムの属性「ファイル転送中断」が「中断状態」と表示されたままになるのでご注意ください。

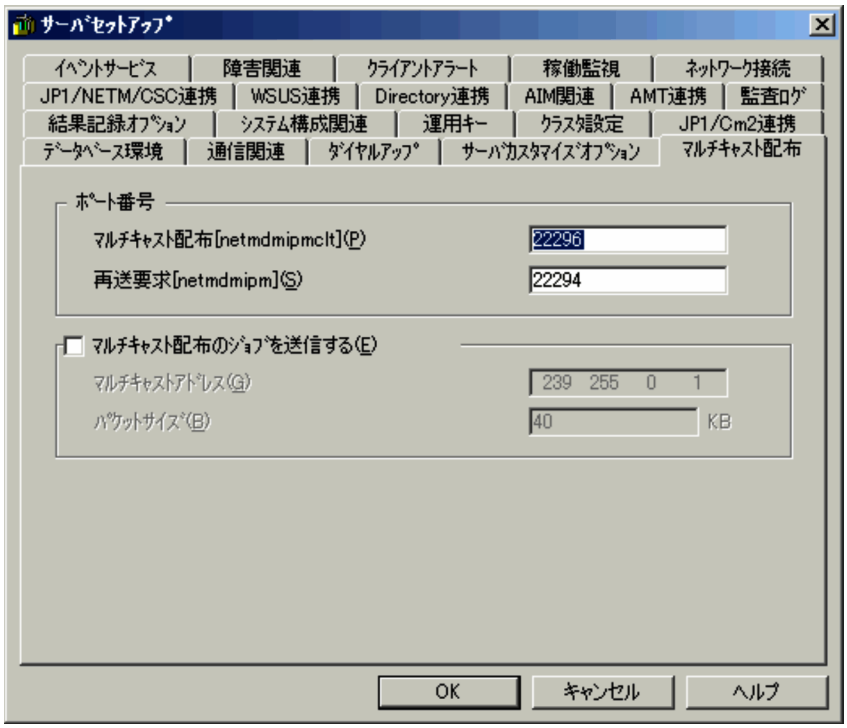
新規検出結果を保留にする

JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能では，通常，JP1/NETM/DM がインストールされていないコンピュータが，すべて「JP1/NETM/DM 未導入ホスト」として検出されます。
このチェックボックスをオンにすると，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出を実行したときに，JP1/NETM/DM がインストールされていないコンピュータが，「保留」として検出されるようになります。デフォルトはチェックボックスがオフです。
検出されたコンピュータのうち，任意のコンピュータを手動で JP1/NETM/DM 未導入ホストに指定できるため，OS が Windows のコンピュータと，OS が UNIX のコンピュータが混在している環境で，OS が Windows のコンピュータだけを未導入ホストとして管理したい場合などに有効です。

4.2.5 ［マルチキャスト配布］パネル

ジョブをマルチキャスト方式で下位のシステムに配布する場合の設定です。このパネルでの設定は，「マルチキャスト配布」が指定されたジョブに対して適用されます。

図 4-8 ［マルチキャスト配布］パネル



(1) ポート番号

ジョブのマルチキャスト配布に使用する，次の 2 種類のポート番号を設定します。

- マルチキャスト配布（デフォルト：22296）
- 再送要求（デフォルト：22294）

通常はデフォルトで表示されるポート番号を使用しますが，ほかのプログラムと重複するときは変更してください。マルチキャスト配布は UDP プロトコルを使用するため，配布中にパケットの再送が起こります。そのため，「再送要求」のポート番号も設定が必要です。

なお，TCP/IP の services ファイルにポート番号を設定しているときは，services ファイルの設定が有効になります。

(2) マルチキャスト配布のジョブを送信する

「マルチキャスト配布」が指定されたジョブを，下位のシステムにマルチキャスト方式で送信する場合に選択し，マルチキャストアドレスとパケットサイズを設定してください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

「マルチキャスト配布のジョブを送信する」がオフの場合，「マルチキャスト配布」を指定したジョブも，下位システムへユニキャスト配布されます。反対に，このチェック

ボックスをオンにしても，ジョブに「ユニキャスト配布」が指定されている場合はユニキャスト配布になります。

なお，ネットワーク中で IP マルチキャストに対応していないルータを使用している場合は，「マルチキャスト配布のジョブを送信する」をオフにしてください。IP マルチキャストに対応していないルータを使用している場合，マルチキャスト配布はできないので，ユニキャスト配布になります。このとき，「マルチキャスト配布のジョブを送信する」をオンにしていると，ユニキャスト配布に切り替わってジョブが配布されるまでに時間が掛かります。

マルチキャストアドレス

配布先のマルチキャストグループに割り当てられた，マルチキャストアドレスを指定します。224.0.1.0 ～ 239.255.255.255 で，ほかのマルチキャストグループと重複しない値を指定してください。デフォルトは 239.255.0.1 です。

マルチキャストグループは，この JP1/NETM/DM Manager に直接接続する下位システムをまとめたグループにします。配布先の下位システムのマルチキャストアドレスがここで設定したマルチキャストアドレスと一致しない場合，その下位システムにはジョブがユニキャスト配布されます。

マルチキャストグループとマルチキャストアドレスの詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.2.1　ユニキャスト配布とマルチキャスト配布」および「6.2.3　マルチキャスト配布をするためのシステム構成」を参照してください。

パケットサイズ

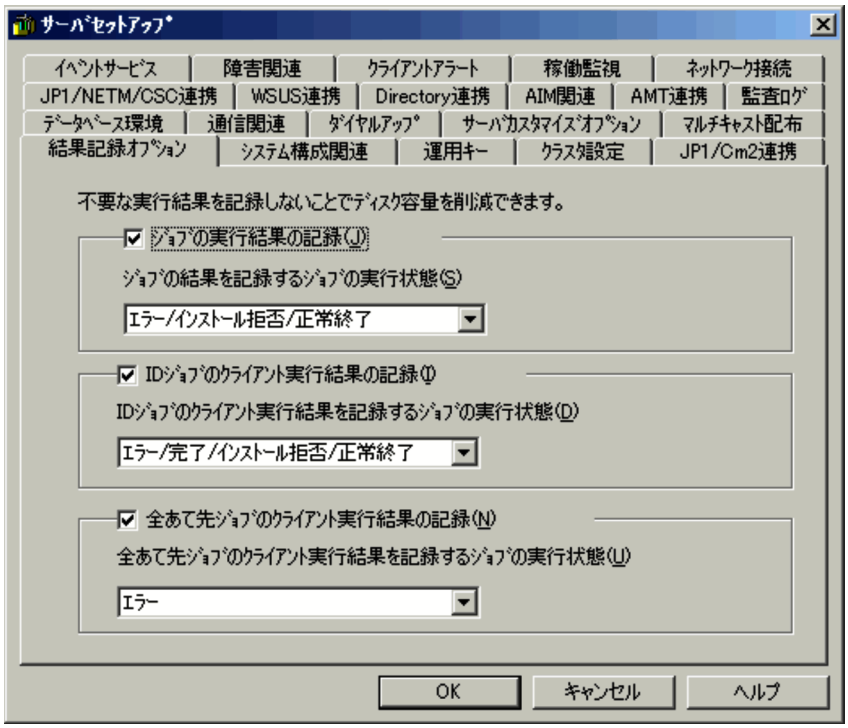
ジョブを配布するときの，1 パケット分のサイズを指定します。1 ～ 60 キロバイトで指定してください。デフォルトは，40 キロバイトです。

40 キロバイトは，100BASE の通信回線で効率的な値です。通信回線が 10BASE の場合は 4 キロバイトを設定してください。パケットサイズが大き過ぎると，マルチキャスト配布に失敗し，途中からユニキャスト配布になりますので，ご注意ください。

4.2.6　［結果記録オプション］パネル

ジョブの実行結果の保存についての設定です。不要な実行結果を記録しないことでディスク容量を削減できます。終了したジョブの実行結果が大量に残っていると，リモートインストールマネージャの動作が遅くなったりする場合があるため，確認が必要な実行状態のジョブだけを記録しておくことをお勧めします。

図 4-9 ［結果記録オプション］パネル



(1) ジョブの実行結果の記録

ID を指定しないジョブの実行結果をリモートインストールマネージャに記録するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。記録する場合は，記録するジョブの実行状態も選択します。

エラー

エラーのジョブだけをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

エラー / インストール拒否

実行状態が，エラーまたはインストール拒否のジョブだけをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

エラー / インストール拒否 / 正常終了（デフォルト）

実行状態が，エラー，インストール拒否，または正常終了のジョブをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

なお，次に示すジョブは，ジョブが終了しても実行状態を自動的に削除できません。

●「クライアントユーザによるインストール」ジョブ

●「システム情報の取得」ジョブのうち，クライアントでの実行日時が指定されたジョブ

●「ソフトウェア情報の取得」ジョブのうち，クライアントでの実行日時が指定された

ジョブ

（2） ID ジョブのクライアント実行結果の記録

ID を指定したジョブの，クライアントごとの実行結果を記録するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。記録する場合は，記録するジョブの実行状態も選択します。

エラー / 完了

実行状態が，エラーまたは完了のジョブをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

エラー / 完了 / インストール拒否

実行状態が，エラー，完了，またはインストール拒否のジョブをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

エラー / 完了 / インストール拒否 / 正常終了（デフォルト）

実行状態が，エラー，完了，インストール拒否，または正常終了のジョブをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

中継システムが管理する ID に属しているクライアントの実行結果については，すべてのジョブ種別でこの設定が有効になります。配布管理システムが管理する ID に属しているクライアントの場合，次に示すジョブはこの設定が無効になり，すべての実行状態が，配布管理システムに記録されます。

- 「クライアントユーザによるインストール」ジョブ
- 「システム情報の取得」ジョブのうち，クライアントでの実行日時が指定されたジョブ
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブのうち，クライアントでの実行日時が指定されたジョブ

（3） 全あて先ジョブのクライアント実行結果の記録

全あて先ジョブの，クライアントごとの実行結果を中継マネージャのリモートインストールマネージャに記録するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。記録する場合は，記録するジョブの実行状態もから選択します。

エラー（デフォルト）

エラーのジョブだけをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

エラー / インストール拒否

実行状態が，エラーまたはインストール拒否のジョブだけをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

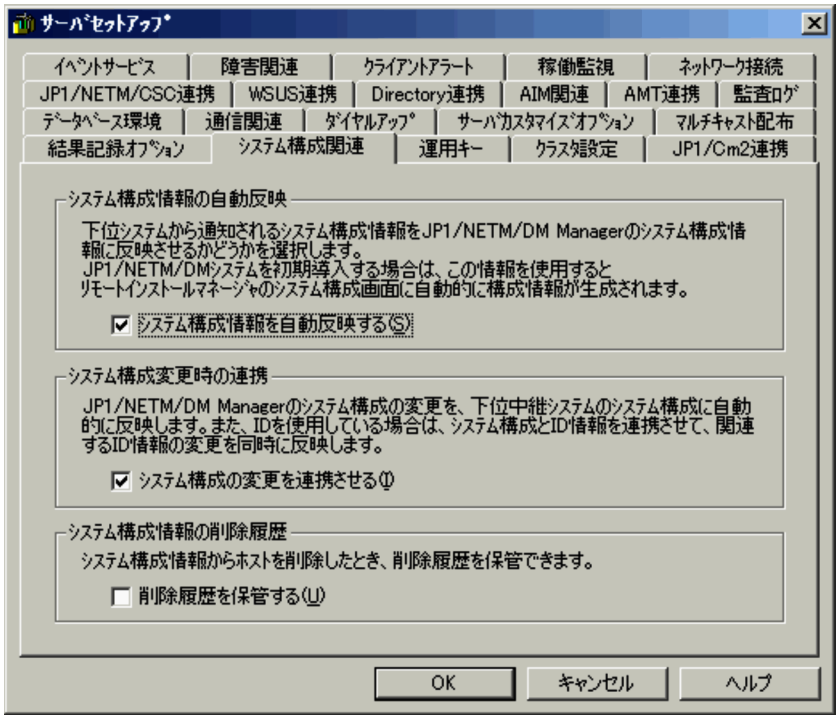
エラー / インストール拒否 / 正常終了

実行状態が，エラー，インストール拒否，または正常終了のジョブをリモートインストールマネージャに記録しておきます。

4.2.7 ［システム構成関連］パネル

システム構成情報に関する設定をします。システム構成が変更になったとき，付随して変更する必要のある情報を，自動的に変更できます。また，システム構成情報からホストを削除したときの履歴を管理できます。

図 4-10 ［システム構成関連］パネル



(1) システム構成情報の自動反映

下位システムから通知されるシステム構成情報を，自動的にシステム構成のデータベースに反映するかどうかを設定します。デフォルトはチェックボックスがオンです。
チェックボックスをオフにすると，ユーザが手動でシステム構成を定義することになります。

JP1/NETM/DM を初めて導入する場合は，チェックボックスをオンにしてください。配布管理システムでシステム構成を定義する必要がなくなり，作業を軽減できます。

なお，チェックボックスをオンにすると，作成済みのシステム構成情報が自動的に変更されることになるので注意が必要です。

(2) システム構成変更時の連携

JP1/NETM/DM Manager のシステム構成情報が変更になった場合に，その変更を自動的に下位システムのシステム構成情報に反映させることができます。また，システム構成

情報の変更に合わせて，ID の情報も自動的に編集させることができます。したがって，チェックボックスをオンにした場合は，配布管理システムまたは ID 管理中継から，システム管理者がシステム構成情報に合わせて ID を変更する必要がありません。チェックボックスをオフにした場合は，手動で ID の情報を編集する必要があります。

この設定は，「システム構成情報を自動反映する」チェックボックスがオンの場合だけ有効になります。デフォルトはチェックボックスがオンです。ただし，上書きインストールした場合，旧バージョンの設定がオフだったとき，デフォルトはオフになります。

なお，オンにした場合は，システム内のすべての JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM SubManager をバージョン 05-21 以降にバージョンアップする必要があります。したがって，バージョンが 05-21 より前の JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager がシステム内に混在する場合は，オフにしてください。

システム構成情報と ID を連携させた運用の詳細については，「8.4　システム構成情報と ID を連携させる運用」を参照してください。

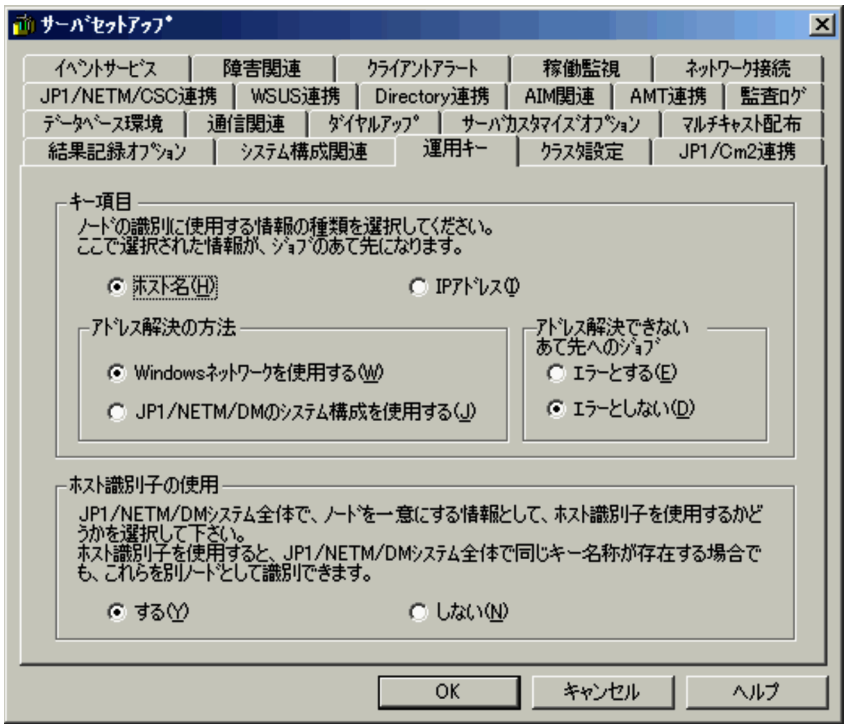
（3）システム構成情報の削除履歴

システム構成情報からホストを削除したとき，履歴を残すことができます。チェックボックスをオンにすると，いつ，どのような契機でホストが削除されたのかの履歴が記録されますので，管理情報として活用できます。また，削除履歴を基に，削除されたホストをシステム構成情報に復元することもできます。デフォルトはチェックボックスがオフで，削除履歴は保管されません。

4.2.8　［運用キー］パネル

ネットワーク上でホストを管理したり，あて先を識別したりするためのキーを設定します。また，ホスト識別子の使用についても設定します。

図 4-11　［運用キー］パネル



(1) キー項目

ホスト間で通信するときに，通信する相手先ホストを決定する情報の種類を「ホスト名」または「IP アドレス」で指定します。相手先ホストの運用キーの設定に合わせて「ホスト名」または「IP アドレス」のどちらかを指定してください。デフォルトは「ホスト名」です。キー項目としてホスト名を選択した場合，［アドレス解決の方法］および［アドレス解決できないあて先へのジョブ］を指定してください。

アドレス解決の方法

ジョブ作成または実行時にアドレス解決する方法として，「Windows ネットワークを使用する」または「JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する」のどちらかを選択します。デフォルトは「Windows ネットワークを使用する」です。

Windows ネットワークを使用する

ジョブ作成または実行時に Windows ネットワークから IP アドレスを取得します。アドレス解決には，hosts ファイルやネームサーバを使用します。アドレス解決に失敗した場合，JP1/NETM/DM のシステム構成から IP アドレスを取得します。

JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する

ジョブ作成または実行時に JP1/NETM/DM のシステム構成からだけ IP アドレスを取得します。したがって，システム構成の IP アドレスは常に正しい状態を

保持する必要があります。DHCP 環境などの IP アドレスが動的に変化する環境では，システム構成の自動登録機能を使用することで，システム構成の IP アドレスを正しい状態に保持することができます。
夜間などネームサーバが停止した状態でジョブを作成および実行するような環境では，「Windows ネットワークを使用する」を選択しても，アドレス解決に失敗し，ジョブを作成できないことがあります。しかし，「JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する」を選択すると，アドレス解決に失敗するまでに掛かっていた時間を短縮できるメリットがあります。
なお，この指定ではアドレス解決をしないで，システム構成情報から IP アドレスを取得することでジョブのあて先を決定します。しかし，ホスト識別子運用の場合，ジョブのあて先が取得できないため，ジョブを実行できないことがあります。この場合にジョブを実行する方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「8.2.4(4)　あて先を設定するときの注意事項」およびマニュアル「運用ガイド 2」の「4.25.9　JOB_DESTINATION（あて先の指定）」を参照してください。

アドレス解決できないあて先へのジョブ

ジョブ実行時にあて先のアドレス解決ができなかった場合に，そのジョブをエラーとするかどうかを選択します。デフォルトは「エラーとしない」です。「エラーとしない」を選択した場合，アドレス解決ができないジョブの実行状態は「実行待ち」となります。実在しないあて先へのジョブの実行状態も「実行待ち」のまま変化しません。
WINS サーバを使用している環境では，ジョブ実行時にクライアント PC の電源が OFF の場合，あて先のアドレス解決ができません。したがって「エラーとする」の設定では，休日や夜間にジョブを実行してシステム起動時ポーリングでインストールする運用ができなくなります。このような場合は，「エラーとしない」を設定してください。
なお，「エラーとしない」を選択した場合，実行したジョブにアドレス解決できないあて先が含まれていると，リモートインストールマネージャの動作が遅くなるなどの影響があります。

(2) キー項目を変更する場合の注意事項

運用の途中でキー項目を変更する場合，次に示す情報をリモートインストールマネージャから削除しておいてください。

- システム構成情報
- あて先
- ジョブ定義
- ジョブ実行状況

なお，パッケージ情報は引き継ぐことができるため，削除する必要はありません。

システム構成情報は，削除する前にファイルに出力しておくと便利です。キー項目を変更したあと，出力したシステム構成情報ファイルを編集し，インポートすることでシス

テム構成情報を設定できます。出力したシステム構成情報ファイルをインポートする場合，各ホストのホスト名または IP アドレスが正しく記述されているか確認してください。例えば，キー項目をホスト名から IP アドレスに変更する場合，出力したシステム構成情報ファイルに正しく IP アドレスが記述されている必要があります。修正が必要なときは，テキストエディタなどでファイルを編集してください。システム構成情報のファイルの内容と出力方法については，「8.1.4　システム構成情報をファイルから作成する」を参照してください。

(3) ホスト識別子の使用

JP1/NETM/DM のシステム全体で，ホストを一意に管理する情報としてホスト識別子を使うかどうかを選択します。デフォルトは使用「する」です。

なお，「Asset Information Manager Limited」を使用している場合に，「ホスト識別子の使用」の設定を変更するときには，「Asset Information Manager Limited」の「運用キー」の設定変更が必要になります。運用キーの設定については，「10.2.4　JP1/NETM/DM 連携の設定」を参照してください。

(4) ホスト識別子を使用する場合の注意事項

システムの運用後にキーを変更した場合，次の点に注意してください。

● ホスト識別子を使用しない運用からホスト識別子を使用する運用に変更する場合

ホスト識別子を使用する場合は次の 2 点を確認してください。

データベースのバックアップを取得していること

ホスト識別子を使用する設定で運用を始めると，再度使用しない設定に変更した場合に，データベースに記録されたパッケージ以外の情報は使用できません。したがって，ホスト識別子を使用しない設定で記録されたデータベースがある場合は，バックアップを取得してください。

上位マネージャがホスト識別子を使用する設定であること

中継マネージャでホスト識別子を使用する場合は，接続先の上位マネージャに設定した JP1/NETM/DM Manager がホスト識別子に対応しているバージョン（JP1/NETM/DM Manager 05-21 以降）で，かつホスト識別子を使用する設定になっている必要があります。

接続先の上位マネージャに設定した JP1/NETM/DM Manager がホスト識別子に対応していないバージョンである場合，または JP1/NETM/DM Manager のセットアップでホスト識別子を使用しない設定の場合は，中継マネージャではホスト識別子を使用しないでください。

● ホスト識別子を使用する運用からホスト識別子を使用しない運用に変更する場合

ホスト識別子を使用しない設定に変更すると，ホスト識別子を使用する設定で記録されていたデータベースの情報は，パッケージ以外使用できなくなります。

この場合，次のどちらかの方法で回避してください。

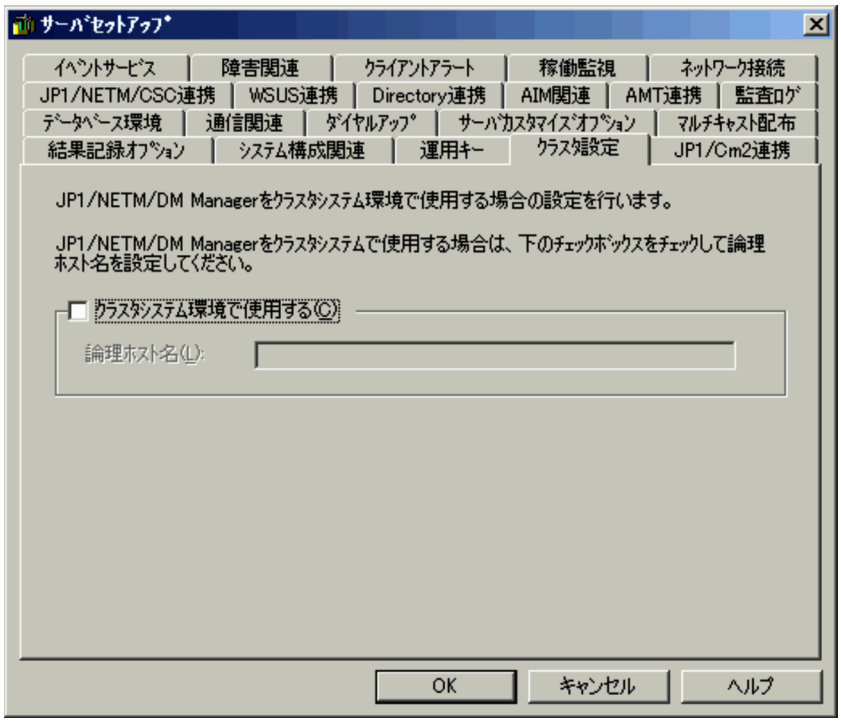
- ホスト識別子を使用しない設定に変更する前に，すべてのデータベースの情報を削除してください。

- 以前にホスト識別子を使用しない設定で記録されていたデータベースのバックアップがある場合は，バックアップから回復してください。

4.2.9 ［クラスタ設定］パネル

JP1/NETM/DM Manager をクラスタシステムで使用する場合に設定します。チェックボックスをオンにして，クラスタシステムの論理ホスト名を，ドメイン名を付けて設定してください。

図 4-12 ［クラスタ設定］パネル

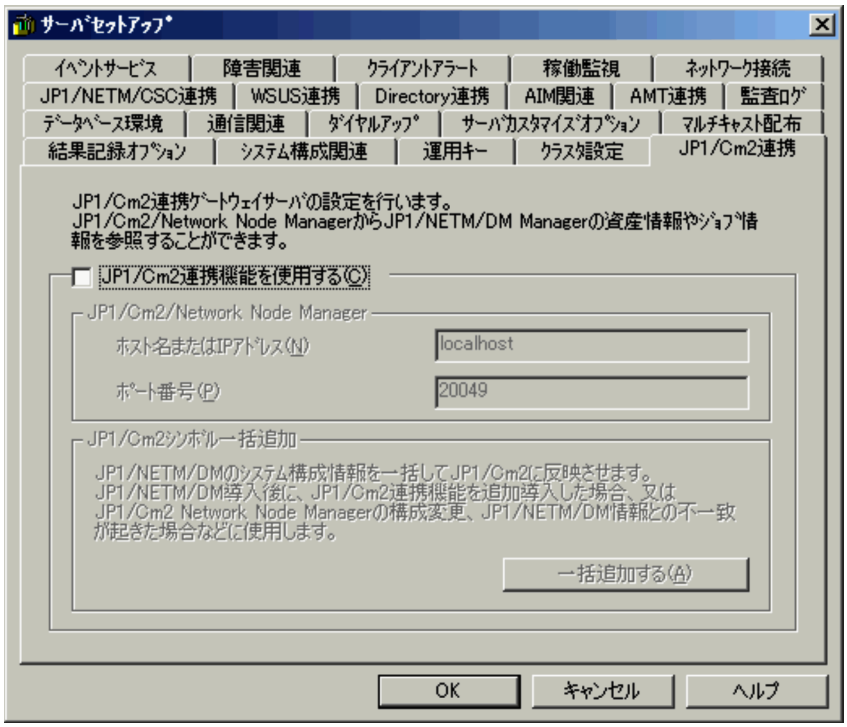


4.2.10 ［JP1/Cm2 連携］パネル

JP1/Cm2 連携機能を使用するための，JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバの設定をします。JP1/Cm2 連携機能を使用すると，JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm から，JP1/NETM/DM のインベントリ情報を参照できます。

なお，［JP1/Cm2 連携］パネルの設定を更新するには，JP1/NETM/DM Manager のセットアップの終了後，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，Remote Install Server サービスに加えて Remote Installation Gateway Server サービスも再起動する必要があります。

図 4-13　［JP1/Cm2 連携］パネル



（1） JP1/Cm2 連携機能を使用する

JP1/Cm2 連携機能を使用するかどうか選択します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。JP1/Cm2 連携機能を使用する場合は，JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm のホスト名または IP アドレス，およびポート番号を指定します。

（2） JP1/Cm2 シンボル一括追加

JP1/NETM/DM のシステム構成情報を一括して JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm に反映するかどうか操作します。JP1/NETM/DM の運用をすでに始めたあとで JP1/Cm2 連携機能を追加して運用したい場合や，JP1/NETM/DM 06-52 以降のシステムで中継マネージャ配下のシステム構成情報を追加したい場合は，［一括追加する］ボタンをクリックしてください。

4.2.11　［イベントサービス］パネル

JP1/Base のイベントサービス機能を使用して JP1/IM に通知するイベントについて設定するパネルです。「イベントサービス機能を使用する」チェックボックスをオンにすると，JP1/NETM/DM で実行したジョブの結果，および JP1/NETM/DM Manager に異常が発生したことを JP1 イベントとして JP1/IM に通知できます。また，クライアントから通知されたアラート情報を，JP1 イベントとして JP1/IM に通知することもできます。

デフォルトはチェックボックスがオフです。

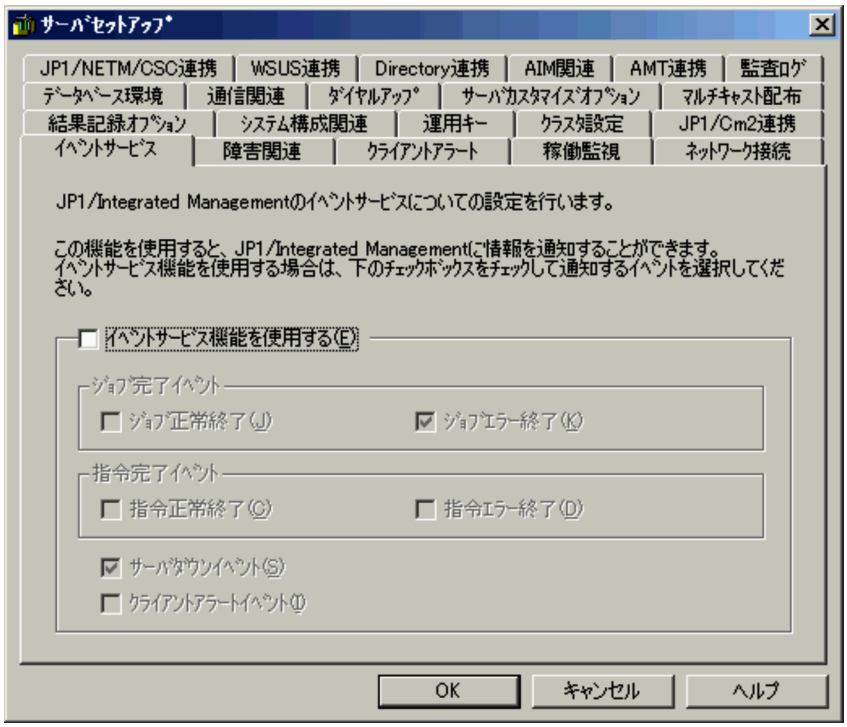
JP1/IM に実行結果を通知できるジョブ種別を次に示します。

- パッケージのインストール
- 中継システムまでのパッケージ転送
- リモートコレクト
- 中継までのリモートコレクト
- 中継サーバからのコレクトファイル収集
- クライアントユーザによるインストール

これらのジョブについては，ジョブの実行結果を詳細な単位（**指令**）で通知することもできます。指令とは，JP1/NETM/DM Manager で作成するジョブの最小単位で，あて先または配布するソフトウェアごとに作成されます。例えば，二つのあて先に対し，二つのソフトウェアを配布するジョブを作成した場合，一つのジョブに対し，四つの指令が作成されます。

JP1/NETM/DM Manager をクラスタ構成で使用している場合，イベントの転送先は物理ホストのイベントサービスになります。

図 4-14　［イベントサービス］パネル



ジョブ完了イベント

ジョブの実行結果を JP1/IM に通知する場合，オンにします。

ジョブ正常終了

すべてのあて先に対するジョブがすべて正常終了したことを通知します。

ジョブエラー終了

エラーのジョブが発生したことを通知します。

指令完了イベント

JP1/NETM/DM で実行したジョブの実行結果を指令で通知する場合，オンにします。

指令正常終了

すべての指令が正常終了したことを通知します。

指令エラー終了

エラーの指令が発生したことを通知します。

サーバダウンイベント

JP1/NETM/DM Manager に異常が発生した場合に通知します。

クライアントアラートイベント

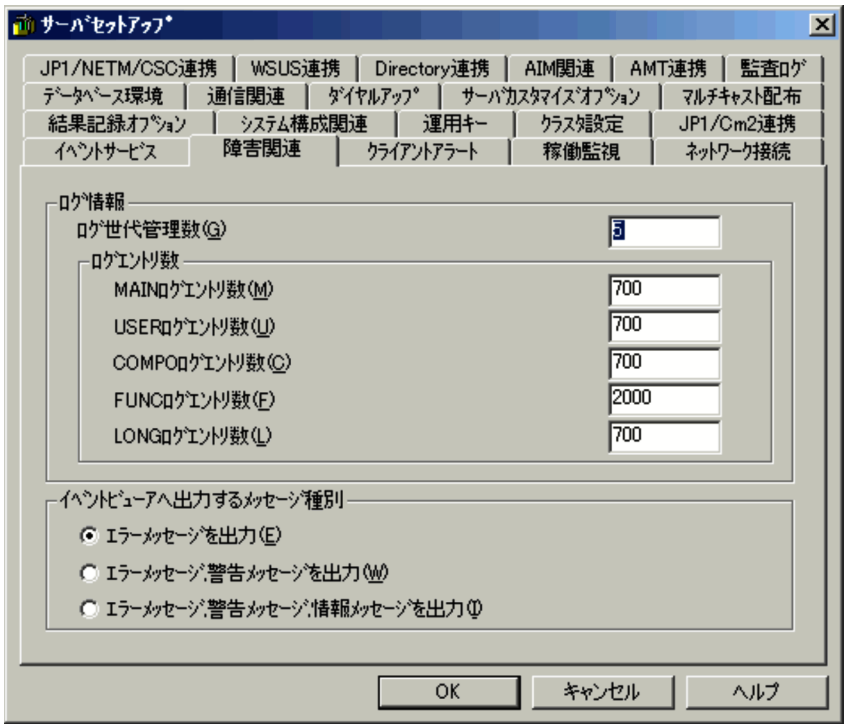
クライアントからアラート情報が通知された場合に，JP1/IM に通知します。

4.2.12 ［障害関連］パネル

出力されるログの世代管理数やエントリ数，イベントビューアへ出力されるメッセージ種別を設定します。

このダイアログボックスでの設定内容は，JP1/NETM/DM Client の［クライアントセットアップ］ダイアログボックスでの設定内容と同じです。詳細については，「6.2　クライアントをセットアップする」を参照してください。

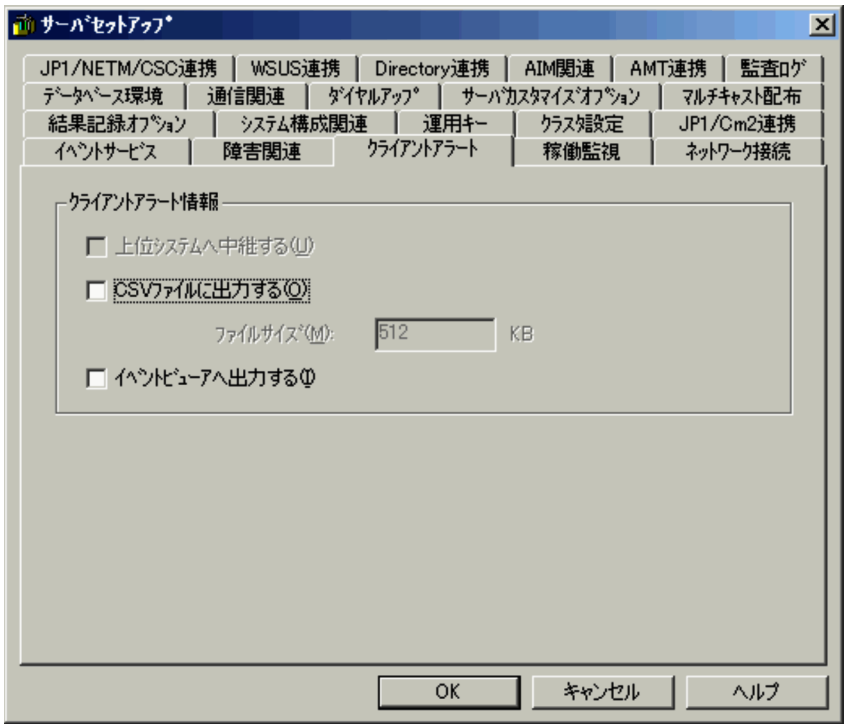
図 4-15　［障害関連］パネル



4.2.13　［クライアントアラート］パネル

クライアントから通知されたアラート情報の出力および中継について設定します。

図 4-16 ［クライアントアラート］パネル



上位システムへ中継する

クライアントから通知されたアラート情報を，上位システムへ中継します。中継マネージャの場合に選択でき，デフォルトはオンです。マネージャの場合は非活性になります。

CSV ファイルに出力する

クライアントから通知されたアラート情報の履歴を，CSV 形式のファイルに出力します。デフォルトはオフです。このチェックボックスを選択した場合，「ファイルサイズ」を設定してください。

ファイルサイズ

アラート情報の履歴を出力する CSV 形式ファイルのサイズを，100 ～ 2,500 キロバイトで指定します。デフォルトは 512 キロバイトです。100 キロバイト当たり，約 400 件のアラート情報を記録できます。

アラート情報が指定したファイルサイズを超えた場合，古いアラート情報から削除されます。

イベントビューアへ出力する

クライアントから通知されたアラート情報を，Windows NT のイベントビューアに出力します。デフォルトはオフです。

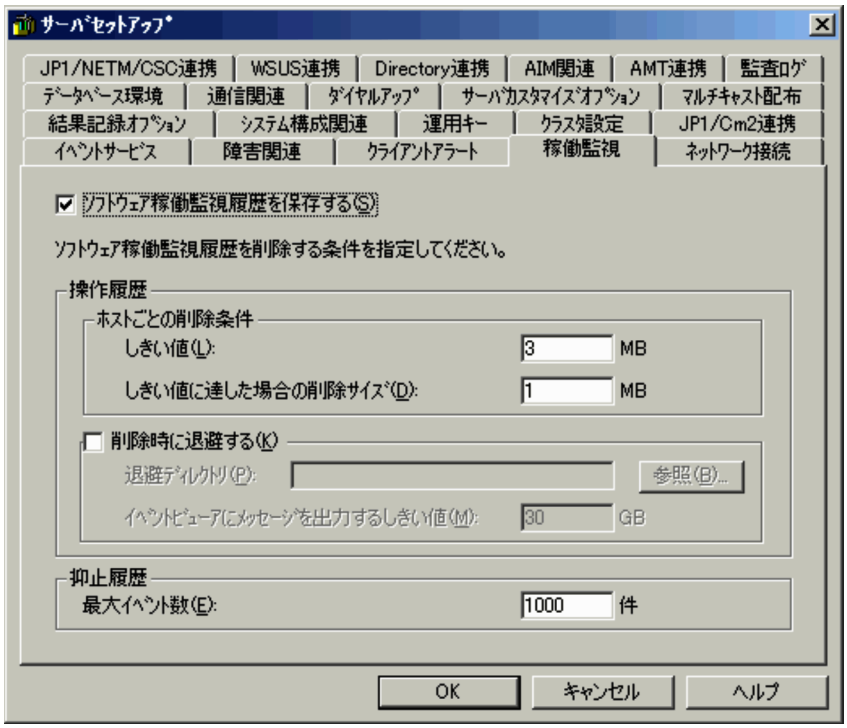
「イベントビューアへ出力する」チェックボックスをオンにした場合，［障害関連］パネルの「イベントビューアへ出力するメッセージ種別」での設定に関係なく，ア

ラート情報がすべてイベントビューアに出力されます。イベントビューアに表示されるメッセージ種別は，アラートイベントの種別が「危険」または「警告」のときは警告メッセージ，「正常」のときは情報メッセージとなります。

4.2.14 ［稼働監視］パネル

ソフトウェアの稼働状況を監視した場合に配布管理システムに通知される，操作履歴および抑止履歴の格納方法を設定します。監視するクライアントの台数と，配布管理システムのディスク容量を考慮して設定してください。

図 4-17 ［稼働監視］パネル



ソフトウェア稼働監視履歴を保存する

下位システムから通知された操作履歴および抑止履歴を保存するかどうかを設定します。デフォルトはオンです。

チェックボックスをオフにした場合，下位システムから通知された履歴は保存されません。ただし，履歴が通知されると，リモートインストールマネージャの［システム構成］ウィンドウ，［あて先］ウィンドウ，または［ディレクトリ情報］ウィンドウの［属性］パネルに表示される次の情報は更新されます。

- ソフトウェア稼働情報最終更新日時
- 適用済みソフトウェア稼働監視ポリシー
- 適用済みソフトウェア稼働監視ポリシーバージョン

なお，すでに保存されている履歴は，チェックボックスをオフにしてもそのまま残

ります。

(1) 操作履歴

操作履歴を削除する条件を指定します。また，削除する操作履歴をほかのディレクトリに退避するよう設定できます。

この項目は，「ソフトウェア稼働監視履歴を保存する」チェックボックスがオンの場合に活性化します。

ホストごとの削除条件

しきい値

クライアントごとに保存される操作履歴の最大サイズを，1 ～ 100 メガバイトで指定します。デフォルトは 3 メガバイトで，約 3 日分の操作履歴が保存されます。

指定した値を超えた場合，古い操作履歴から削除されます。

しきい値に達した場合の削除サイズ

「しきい値」に指定した値を超えた場合に削除される操作履歴のサイズを，1 ～ 100 メガバイトで指定します。デフォルトは 1 メガバイトで，しきい値を超えると約 1 日分の操作履歴が削除されます。

しきい値が 3 メガバイトで，削除サイズが 1 メガバイトの場合，操作履歴のサイズが 3 メガバイトを超えると，古い操作履歴が 1 メガバイト分削除され，2 メガバイトの操作履歴が残ります。

削除時に退避する

「しきい値」に指定した値を超えて操作履歴格納ディレクトリから削除される操作履歴を，ほかのディレクトリに退避するかどうかを設定します。デフォルトはチェックボックスがオフです。なお，操作履歴は退避時に約 20% の容量に圧縮されます。

退避ディレクトリ

操作履歴をほかのディレクトリに退避する場合の，退避先のディレクトリを指定します。退避ディレクトリには，実在するディレクトリを指定してください。

ネットワークドライブを指定する場合は，UNC 形式で半角 127 文字（全角 63 文字）以内で指定してください。半角記号は「-」，「_」，「¥」，「.」，「:」，「(」，および「)」を指定できます。ただし，「D:¥」のようなドライブ直下，および G:¥NETM¥MONITORING のようなドライブ文字が割り当てられているネットワークドライブは指定できません。

退避した操作履歴は，ここで指定した操作履歴退避ディレクトリの下に作成される OPERATION ディレクトリ下に，クライアントごとに格納されます。

なお，退避した操作履歴は自動的に削除されません。定期的に操作履歴退避ディレクトリのサイズを確認して，操作履歴を削除してください。

イベントビューアにメッセージを出力するしきい値

操作履歴退避ディレクトリの操作履歴のサイズがしきい値を超えた場合，イベントビューアにメッセージが出力されます。そのしきい値を，1 ～ 1,000 ギガ

バイトで指定します。デフォルトは 30 ギガバイトです。

(2) 抑止履歴

ソフトウェア起動抑止の抑止履歴を保存する最大イベント数を指定します。ソフトウェアの起動抑止 1 回がイベント 1 件に当たります。

この項目は,「ソフトウェア稼働監視履歴を保存する」チェックボックスがオンの場合に活性化します。

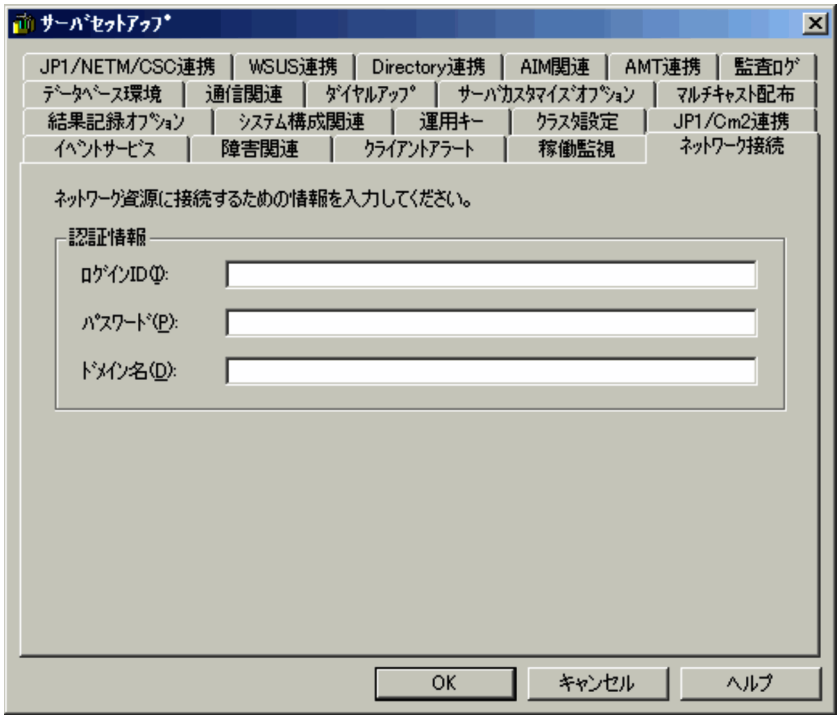
最大イベント数

すべてのクライアントを合わせて保存されるソフトウェア起動抑止の抑止履歴の最大イベント数を，500 ～ 10,000 件で指定します。指定した件数を超えた場合，古い抑止履歴から削除されます。デフォルトは 1,000 件です。

4.2.15 ［ネットワーク接続］パネル

操作履歴格納ディレクトリまたは操作履歴退避ディレクトリにネットワークドライブを使用する場合に，ネットワークドライブに接続するための認証情報について設定します。また，インストール時に［ネットワーク接続情報の設定］ダイアログボックスで認証情報を設定している場合，このパネルで認証情報を変更できます。

図 4-18 ［ネットワーク接続］パネル



ログイン ID

ネットワークドライブに接続するためのログイン ID を，半角で 30 文字以内の英数字および記号で指定します。ただし，次に示す半角記号は使用できません。
「¥」，「/」，「*」，「:」，「;」，「,」，「+」，「<」，「=」，「>」，「?」，「|」，「[」，「]」
なお操作履歴格納ディレクトリおよび操作履歴退避ディレクトリにネットワークドライブを指定している場合は，パスワードおよびドメイン名と併せて必ず指定してください。

パスワード

ネットワークドライブに接続するためのパスワードを，半角で 30 文字以内の英数字および記号で指定します。なお，スペースは使用できません。

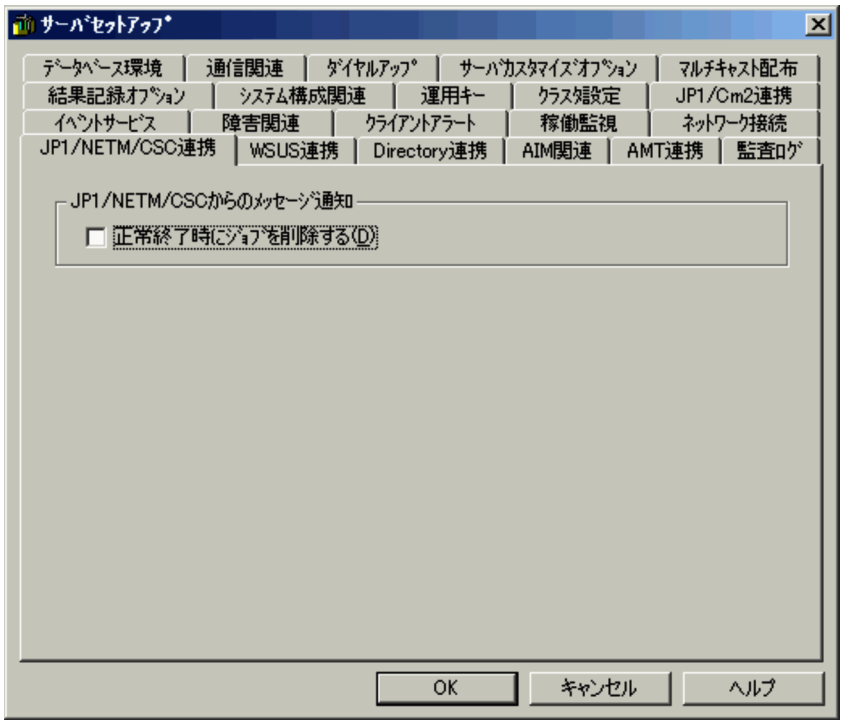
ドメイン名

ネットワークドライブに接続するためのドメイン名を，半角で 127 文字以内の英数字および記号で指定します。ただし，次に示す半角記号は使用できません。
「¥」，「/」，「*」，「:」，「;」，「,」，「+」，「<」，「=」，「>」，「?」，「|」，「[」，「]」

4.2.16 ［JP1/NETM/CSC 連携］パネル

JP1/NETM/Client Security Control からクライアントへメッセージを通知すると，リモートインストールマネージャの［ジョブ実行状況］ウィンドウの「CSCSendMessage」フォルダ下に，JP1/NETM/Client Security Control から実行された「メッセージの通知」ジョブが表示されます。この「メッセージの通知」ジョブの扱いについて設定します。

図 4-19　［JP1/NETM/CSC 連携］パネル



正常終了時にジョブを削除する

JP1/NETM/Client Security Control から実行された「メッセージの通知」ジョブのうち，正常終了したジョブを［ジョブ実行状況］ウィンドウから自動的に削除するかどうかを設定します。デフォルトはチェックボックスがオフです。

なお，サーバセットアップの［結果記録オプション］パネルでも，正常終了したジョブの実行結果を記録しておくかどうかを設定できます。正常終了した「メッセージの通知」ジョブを記録しておく場合と削除する場合，それぞれの設定方法を次に示します。

- **正常終了した「メッセージの通知」ジョブを記録しておく場合**

  「正常終了時にジョブを削除する」チェックボックスをオフにしてください。また，［結果記録オプション］パネルで「エラー / インストール拒否 / 正常終了」を選択してください。これ以外を選択すると，正常終了した「メッセージの通知」ジョブが削除されます。
- **正常終了した「メッセージの通知」ジョブを削除する場合**

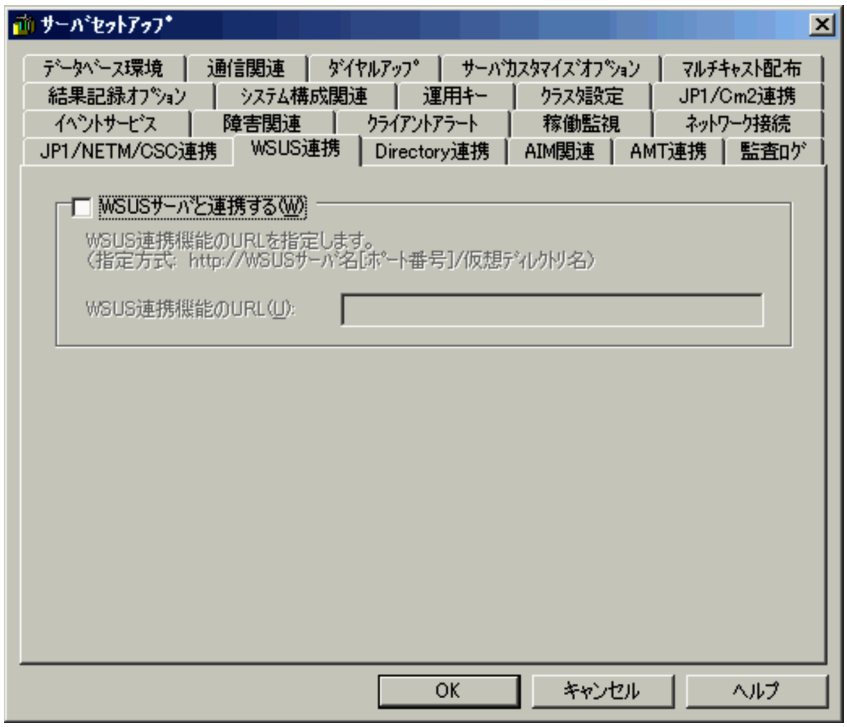
  「正常終了時にジョブを削除する」チェックボックスをオンにしてください。［結果記録オプション］パネルの設定に関係なく，正常終了した「メッセージの通知」ジョブが削除されます。

4.2.17　［WSUS 連携］パネル

WSUS と連携する場合に，JP1/NETM/DM が接続する「WSUS 連携機能」の URL を指

定します。

図 4-20 ［WSUS 連携］パネル



WSUS サーバと連携する

WSUS と連携する場合にチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオフです。

WSUS 連携機能の URL

JP1/NETM/DM が接続する「WSUS 連携機能」の URL を 127 文字以内で指定します。指定する URL の形式を次に示します。

http://*WSUS サーバ名*[:*ポート番号*]/*仮想ディレクトリ名*

WSUS サーバ名

「WSUS 連携機能」がインストールされている WSUS サーバのホスト名を指定します。

ポート番号

WSUS サーバ上の Web サーバのポート番号を指定します。この項目は省略できます。省略した場合は 80 番が設定されます。

仮想ディレクトリ名

「WSUS 連携機能」のインストール時に作成した仮想ディレクトリを指定します。

WSUS サーバ名が「wssrv001」，ポート番号が「80」，仮想ディレクトリ名が

「netmWS」の場合の指定例を次に示します。

```
http://wssrv001:80/netmWS
```

4.2.18　［Directory 連携］パネル

Active Directory と連携して，Active Directory で管理しているディレクトリ情報を配布管理システムで利用する場合に指定します。

図 4-21　［Directory 連携］パネル



Active Directory と連携する

Active Directory と連携する場合にチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオフです。

一度に取得できるエントリ数

Active Directory からディレクトリ情報を取得するときに，一度に取得できるエントリ数を指定します。この値は Active Directory のページサイズの設定（デフォルト 1,000）と一致させてください。

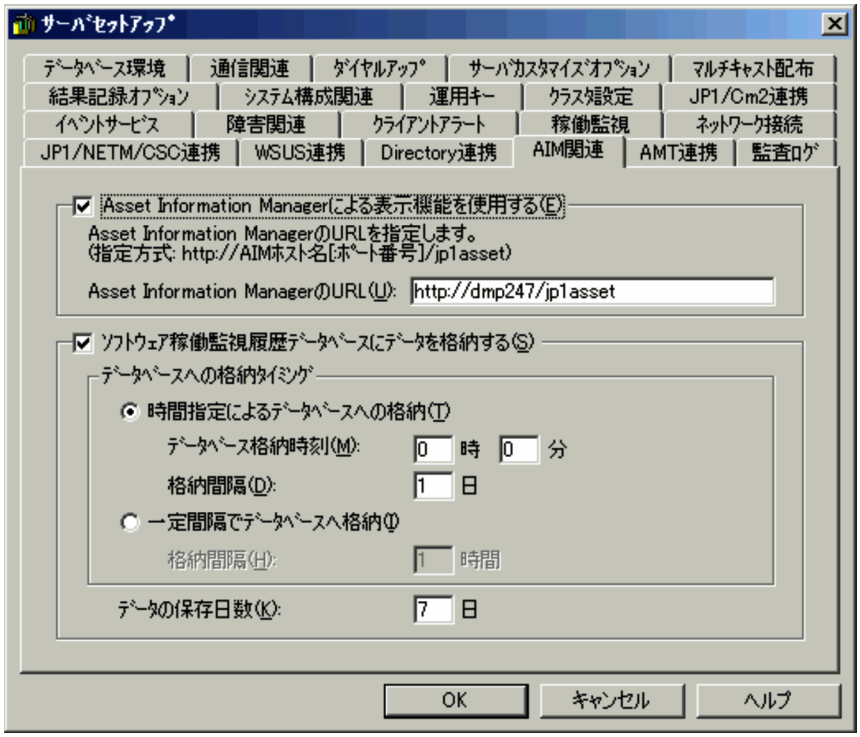
Active Directory のページサイズは Windows の Ntdsutil コマンドを使用して調べられます。

4.2.19　［AIM 関連］パネル

ソフトウェアの稼働状況を監視する場合に，［操作ログ一覧］ウィンドウ，［操作ログ集計］ウィンドウ，および［ソフトウェア稼働状況］ウィンドウを使用するための「Asset Information Manager Limited」の URL を設定します。

また，クライアントから取得した稼働情報を，［操作ログ一覧］ウィンドウで管理するためのデータベーステーブルに格納するタイミングについても設定します。

図 4-22　［AIM 関連］パネル



（1）Asset Information Manager による表示機能を使用する

［操作ログ一覧］ウィンドウ，［操作ログ集計］ウィンドウ，および［ソフトウェア稼働状況］ウィンドウを起動する場合に，チェックボックスをオンにします。

配布管理システムと同じコンピュータに「Asset Information Manager Limited」がインストールされている場合だけ，デフォルトはオンです。それ以外の場合は，デフォルトはオフです。

Asset Information Manager の URL

「Asset Information Manager Limited」または JP1/NETM/Asset Information Manager の Web サイトの URL を，次の形式で指定します。Web サイトを SSL で構築している場合は，「http」を「https」に置き換えてください。

http://*ホスト名*[:*ポート番号*]/jp1asset

なお，配布管理システムと同じコンピュータに「Asset Information Manager Limited」がインストールされている場合は，デフォルトで次の URL が設定されます。

http://*自ホスト名*/jp1asset

ホスト名

「Asset Information Manager Limited」または JP1/NETM/Asset Information Manager がインストールされているホストのホスト名または IP アドレスを指定します。

ポート番号

「Asset Information Manager Limited」または JP1/NETM/Asset Information Manager の Web サイトのポート番号を指定します。

(2) ソフトウェア稼働監視履歴データベースにデータを格納する

［操作ログ一覧］ウィンドウで稼働情報を管理する場合に，チェックボックスをオンにします。デフォルトはオフです。

［操作ログ一覧］ウィンドウで稼働情報（抑止履歴および操作履歴）を管理するためには，［操作ログ一覧］ウィンドウでの管理用のデータベーステーブルに稼働情報を格納する必要があります。

時間指定によるデータベースへの格納

前回の格納完了時から「格納間隔」で指定した日数の経過後，「データベース格納時間」で指定した時刻に稼働情報の格納を開始します。この項目は，デフォルトで選択されています。

初回の格納は，Remote Install Server サービスが起動されてから最初の「データベース格納時間」で指定した時刻に開始されます。

「データベース格納時間」は，0 時 0 分～ 23 時 59 分で指定します。デフォルトは，0 時 0 分です。

「格納間隔」は，1 ～ 30 日で指定します。デフォルトは 1 日です。

一定間隔でデータベースへ格納

前回の格納完了時から「格納間隔」で指定した時間の経過後，稼働情報の格納を開始します。

初回の格納は，Remote Install Server サービスが起動され，「格納間隔」に指定した時間の経過後に開始されます。

「格納間隔」は 1 ～ 24 時間で指定します。デフォルトは 1 時間です。

データの保存日数

格納された稼働情報を保存しておく日数を，クライアント単位に指定します。

各クライアントでの最新の稼働情報を基準として，指定された日数を経過した稼働情報が削除されます。

日数は，1 ～ 31 日で指定します。デフォルトは 7 日です。

(a) 注意事項

- クライアントからの稼働情報の受信と，［操作ログ一覧］ウィンドウでの管理用のデータベーステーブルへの稼働情報の格納が同じタイミングで実行された場合，それぞれの処理に時間が掛かることがあります。そのため，クライアントからの稼働情報の受信と，［操作ログ一覧］ウィンドウでの管理用のデータベーステーブルへの稼働情報の格納が異なるタイミングで実行されるように，それぞれの実行時間を設定してください。
- 稼働情報の保存日数を以前よりも長く設定し直した場合，設定変更後，初回の定期実行による格納に時間が掛かることがあります。
- 稼働情報の量によっては，データベースへの格納に時間が掛かる場合があります。取得した履歴の内容やシステムの環境にもよりますが，クライアント 1 台当たりの，1 日分の稼働情報の格納に掛かる時間は，10 秒を目安にしてください。

4.2.20 ［AMT 連携］パネル

「AMT 連携機能」を使用して，クライアントを制御するために必要な情報を設定します。デフォルトでは，インストール時に［AMT 連携機能の設定］ダイアログボックスで指定した内容が設定されています。

図 4-23 ［AMT 連携］パネル



AMT 管理ユーザ

クライアントの AMT にアクセスするための情報を設定します。ユーザ名とパスワードは，クライアントでの設定と合わせる必要があります。

ユーザ名

クライアントの AMT にアクセスするためのユーザ名を，半角 60 文字以内で指定します。

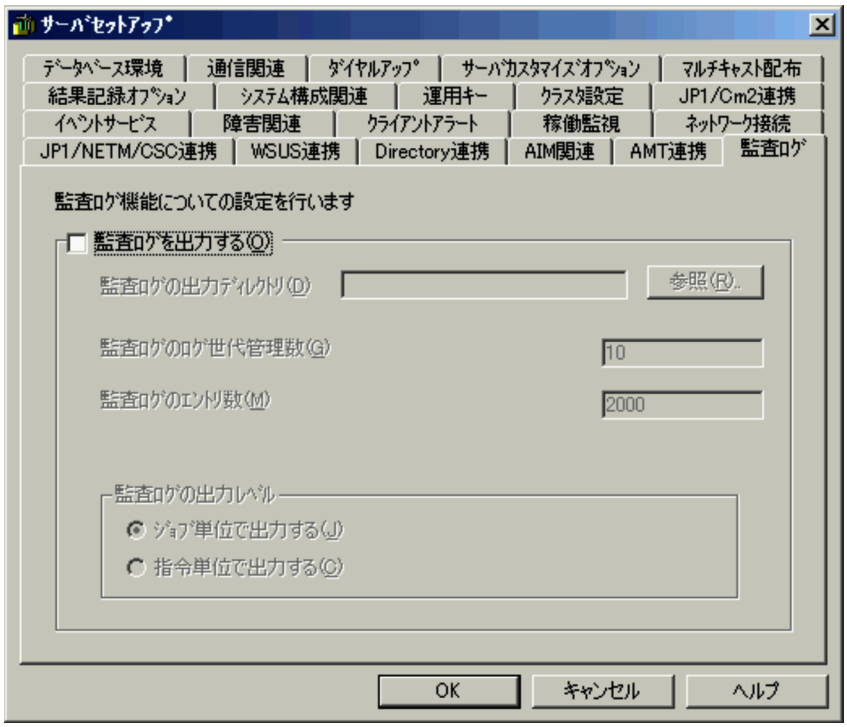
パスワード

クライアントの AMT にアクセスするためのパスワードを，半角 60 文字以内で指定します。

4.2.21　［監査ログ］パネル

監査ログを出力するかどうかを設定します。また，監査ログを出力する場合は，監査ログの出力先や出力されるログの粒度などを設定します。

図 4-24　［監査ログ］パネル



監査ログを出力する

監査ログを出力する場合にチェックボックスをオンにします。デフォルトはオフです。オンにすると，監査ログの出力に関する設定項目が活性化します。

監査ログの出力ディレクトリ

監査ログを出力するディレクトリを，4 ～ 127 バイトの全角または半角文字，

および「_」,「¥」,「.」,「:」,「(」,「)」で指定します。
デフォルトでは出力先のディレクトリは指定されていません。指定した出力先のディレクトリには，JP1/NETM/DM を使用するユーザに対して書き込み権限を設定しておく必要があります。
監査ログは，ここで指定したディレクトリの直下に生成される NETMAuditManager*n*.LOG ファイルに出力されます。*n* はログファイルの世代番号です。
なお，監査ログの出力ディレクトリに JP1/NETM/DM のインストールディレクトリを指定した場合，JP1/NETM/DM をアンインストールすると監査ログも削除されてしまいます。出力ディレクトリは，監査ログの運用方法に合わせて指定してください。

監査ログのログ世代管理数

監査ログが出力されるログファイルを管理する世代数を 1 ～ 999 で指定します。デフォルトは 10 です。
監査ログの出力件数が「監査ログのエントリ数」で指定した値を超えた場合，新しいログファイル NETMAuditManager1.LOG が作成され，古いログファイルは NETMAuditManager2.LOG に名称変更されます。以後，新しいログファイルが作成されるたびに，古いログファイルのファイル名末尾の世代番号が 1 ずつ増えます。設定した世代数を超えると，最も古いログファイルが削除されます。

監査ログのエントリ数

1 ファイル当たりに出力される，監査ログの件数を 500 ～ 9,999 件で指定します。デフォルトは 2,000 件です。

監査ログの出力レベル

監査ログが出力される粒度を選択します。デフォルトは「ジョブ単位で出力する」が選択されています。
「ジョブ単位で出力する」を選択すると，ジョブの実行結果の監査ログは，ジョブごとに出力されます。ただし，次に示すジョブおよび操作については，JP1/NETM/Audit - Manager からの監査対象外となります。

- ID ジョブ
- 定期実行ジョブ
- パッケージセットアップマネージャによるインストール操作

「指令単位で出力する」を選択すると，ジョブの実行結果の監査ログは，あて先ごとおよびパッケージごとに詳細に出力されるようになります。
この場合，すべての監査ログが JP1/NETM/Audit - Manager からの監査対象となります。
なお，JP1/NETM/DM で管理するクライアントの台数が大規模の場合，「指令単位で出力する」を選択していると，出力された監査ログの容量がディスク容量を圧迫するおそれがあるので注意してください。

4.3　中継マネージャの基本設定をセットアップする

中継マネージャの基本設定は，中継マネージャが配布管理システムまたは中継システムとして動作するときに必要な項目です。基本設定が終わった時点で，［OK］ボタンをクリックすると，［セットアップ］ダイアログボックスに戻ります。

引き続いて中継マネージャの詳細設定をしたい場合は，［中継マネージャ詳細設定］ボタンをクリックして［詳細情報の設定］ダイアログボックスを表示してください。詳細設定をしないで［終了］ボタンをクリックすると，詳細設定はすべてデフォルト値のまま設定されます。詳細設定については，「4.4　中継マネージャの詳細設定をセットアップする」を参照してください。

なお，中継マネージャのセットアップの設定を更新するには，中継マネージャのサービスを再起動する必要があります。中継マネージャのサービス起動中に，セットアップを変更して［中継マネージャセットアップ］ダイアログボックスの［OK］ボタンをクリックすると，中継マネージャのサービスが再起動されます。

中継マネージャの基本設定のセットアップ項目を次の表に示します。

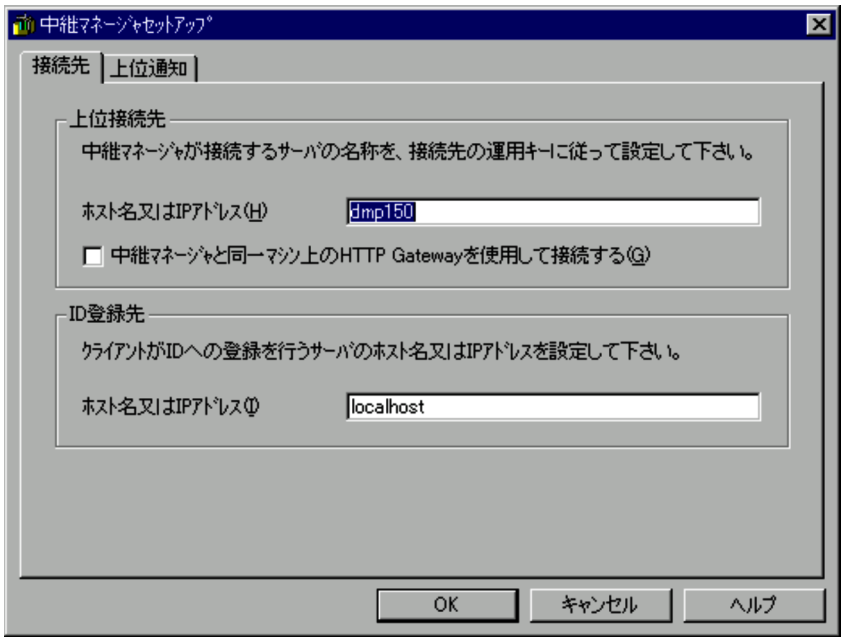
表 4-2　中継マネージャの基本設定のセットアップ項目

分類	項目
接続先	上位接続先と ID 登録先の設定
上位通知	サーバ通知ファイルの送信タイミング
	上位システムに対する，ジョブの受信とサーバ通知ファイルの送信を並行実行する
	下位システムへのパッケージの分割配布の実行状況を上位システムに通知する
	上位システムへ稼働監視履歴を中継する動作を指定する

4.3.1　［接続先］パネル

中継マネージャの接続先を設定します。

図 4-25 ［接続先］パネル



(1) 上位接続先

中継マネージャが接続する上位システムを，上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）で指定します。IP アドレスで指定する場合，それぞれの数値の先頭に「0」を付けないでください。例えば，「100.020.020.010」ではなく「100.20.20.10」と指定してください。

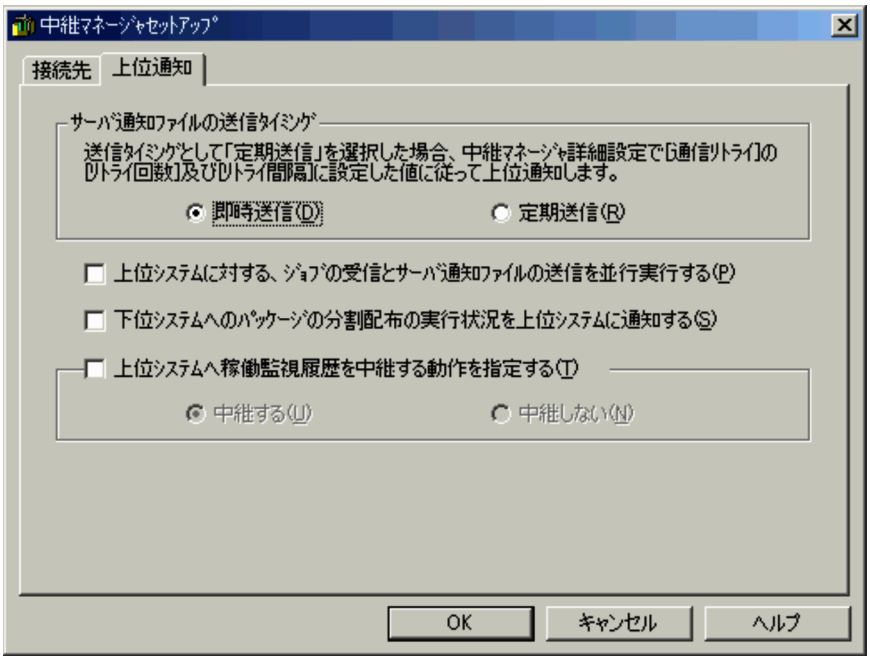
(2) ID 登録先

中継マネージャのクライアント機能が ID への登録をする上位システムを，上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）で指定します。

4.3.2 ［上位通知］パネル

下位システムから受信した通知ファイルを，配布管理システムに送信するタイミングを設定します。

図 4-26　［上位通知］パネル



（1）サーバ通知ファイルの送信タイミング

下位システムから受信した通知ファイルを，配布管理システムに送信するタイミングを設定します。デフォルトは「即時送信」です。

即時送信

下位システムから通知ファイルを受信した時点で，上位システムに送信します。
ジョブの実行結果をすぐに確認したい場合に選択してください。
中継システムと上位システム間の接続回数が通信コストに影響するネットワーク環境の場合，通信コストが大きくなるおそれがあります。

定期送信

下位システムから受信した通知ファイルを，一定間隔で上位システムに送信します。
そのため，送信が実行されるまではジョブの実行結果を確認できません。
中継システムと上位システム間の接続回数を減らし，通信コストを抑えたい場合に選択してください。

「定期送信」を選択した場合，［詳細情報の設定］ダイアログボックスの［通信リトライ］パネルで，「上位システムに送信していない通知ファイルをリトライ送信する」に設定した「リトライ回数」および「リトライ間隔」で送信します。「上位システムに送信していない通知ファイルをリトライ送信する」を設定しないで「定期送信」を選択した場合は，「リトライ回数」および「リトライ間隔」のデフォルトが自動的に設定された状態で通知ファイルを送信します。

(2) 上位システムに対する，ジョブの受信とサーバ通知ファイルの送信を並行実行する

通常，中継マネージャは上位システムへの接続を 1 本に制限しています。そのため，ジョブを受信中にサーバ通知ファイルを上位システムに送信したり，サーバ通知ファイルを送信している間に，ジョブを受信したりすることはできません。

自システムが接続する上位システム（マネージャまたは中継マネージャ）との間でジョブの受信（ダウンロード）と上位システムへの通知ファイルの送信（アップロード）を並行して実行したい場合に，このオプションをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

このオプションを有効にすると，中継マネージャは上位システムへの接続を 2 本用意し，ダウンロードとアップロードを並行して実行できるようになります。しかし，上位システムへの接続数が増えるため，ネットワークの負荷は増大します。また，リレーショナルデータベースへのクライアント接続数も増加します。したがって，この運用はネットワーク環境に余裕がある場合にお勧めします。

● 同時に接続できる下位システム数の見積もり

このオプションをオンに設定した場合，中継マネージャは上位システムへ最大 2 本の接続を用意します。そのため，上位システム（マネージャ）のセットアップの項目「同時に接続できる下位システム数」を増やしておく必要があります。見積もり方法については，下記の計算式を参考にしてください。

同時に接続できる下位システム数
　＝直接接続する中継システム数× 2
　＋直接接続するクライアント数
　＋同時に接続するリモートインストールマネージャ数
　＋同時に接続するパッケージャ数× 2

また同時に，上位システムで Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合，リレーショナルデータベースのクライアント接続数を増やす必要があります。クライアント接続数の見積もり方法は，Oracle と Microsoft SQL Server の場合で異なります。

Microsoft SQL Server の場合

見積もり方法については，「7.3.2(2)　データベース環境のチューニング」を参照してください。チューニングが必要な項目の「クライアントまたは中継システム同時接続数」の値を「同時に接続できる下位システム数」として，クライアント接続数を算出してください。

Oracle の場合

見積もり方法については，「7.3.3(2)　初期化パラメタファイルのチューニング」を参照してください。
チューニングの必要なパラメタの「クライアントまたは中継システム同時接続数」の値を「同時に接続できる下位システム数」として，クライアント接続数を算出し

てください。

(3) 下位システムへのパッケージの分割配布の実行状況を上位システムに通知する

パッケージを分割配布する場合に，下位システムで実行中の分割配布の進行状況を上位システムへ通知するときは，このチェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

このチェックボックスをオンにすると，中継するシステムより下位のシステムで実行中の分割配布の状況を，上位システムのリモートインストールマネージャの［ジョブ実行状況］ウィンドウで確認できるようになります。

［ジョブ実行状況］ウィンドウで，分割配布の状況を確認する方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「8.4.3 ［ジョブ実行状況］ウィンドウで表示される項目」を参照してください。

なお，このオプションを有効にすると，下位システムから分割配布の実行状況が上位システムへ通知されるため，通信量の増加によってネットワークの負荷が大きくなります。したがって，この運用はネットワーク環境に余裕がある場合にお勧めします。ただし，上位システムのバージョンが 07-53 以前，または UNIX の場合，このチェックボックスをオンにしても下位システムでの分割配布の実行状況を確認できないので，この運用はしないでください。

(4) 上位システムへ稼働監視履歴を中継する動作を指定する

中継マネージャを経由して稼働監視ポリシーを適用している場合と，中継マネージャからジョブを実行して稼働監視ポリシーを適用している場合では，稼働情報の通知先が異なります。このチェックボックスでは，下位システムから通知される稼働情報を，中継マネージャで管理するか，上位システムにも通知するかを設定できます。デフォルトはチェックボックスがオフです。

(a) チェックボックスがオンの場合の動作

「中継する」または「中継しない」のそれぞれを選択した場合の動作について説明します。

中継する

クライアントからの定期的な通知または「ソフトウェア稼働情報の取得」ジョブで取得される稼働情報は，中継マネージャを経由して必ず上位システムに通知されるようになります。

上位システムからポリシーを適用している場合，稼働情報はポリシーを適用した上位システムに通知されます。中継マネージャからポリシーを適用している場合，稼働情報は中継マネージャの接続先の上位システムに通知されます。

中継しない

下位システムから通知された稼働情報は，この設定をした中継マネージャよりも上位に通知されなくなります。

例えば，上位システムから「ソフトウェア稼働情報の取得」ジョブが実行されても，下位システムの稼働情報は中継マネージャに通知されます。上位システムには通知されません。

(b) チェックボックスがオフの場合の動作

クライアントからの定期的な通知または「ソフトウェア稼働情報の取得」ジョブで取得される稼働情報は，稼働監視ポリシーの適用元（「ソフトウェア稼働監視の制御」ジョブの実行元）に通知されます。

例えば，上位システムからポリシーを適用した場合に，中継マネージャから「ソフトウェア稼働情報の取得」ジョブを実行しても，稼働情報は上位システムに通知されます。

4.4　中継マネージャの詳細設定をセットアップする

中継マネージャの詳細設定は，中継マネージャがクライアントとして動作するときに必要な項目です。詳細設定が終わった時点で，［OK］ボタンをクリックすると，［セットアップ］ダイアログボックスに戻ります。

なお，中継マネージャのセットアップの設定を更新するには，中継マネージャのサービスを再起動する必要があります。中継マネージャのサービス起動中に，セットアップを変更して［詳細情報の設定］ダイアログボックスの［OK］ボタンをクリックすると，中継マネージャのサービスが再起動されます。

中継マネージャの詳細設定のセットアップ項目を次の表に示します。

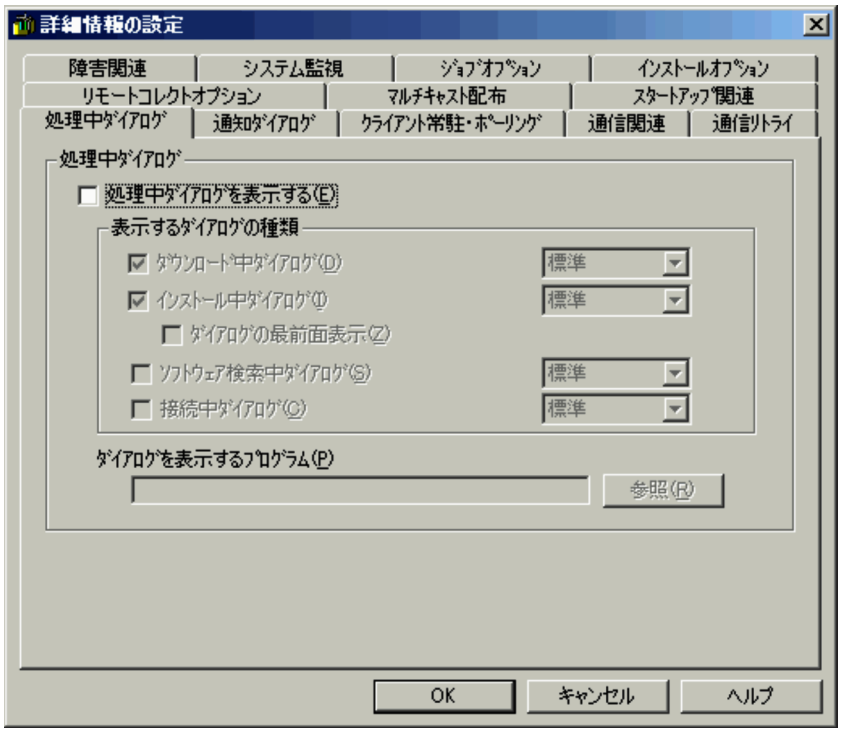
表 4-3　中継マネージャの詳細設定のセットアップ項目

分類	項目
処理中ダイアログ	処理中ダイアログ表示の有無
	ダイアログを表示するプログラム
通知ダイアログ	ジョブエラー時のダイアログの表示
	NETM_DM_P スタートアップから起動失敗したショートカットの削除確認ダイアログの表示
	起動時のユーザ情報設定ダイアログの表示
	ユーザ情報定期取得時のユーザ情報設定ダイアログ表示の有無
クライアント常駐・ポーリング	クライアントの常駐
	ポーリングの有無
	ポーリングのタイミング
通信関連	ポート番号
	上位システムからの起動要求プロトコル
	ファイル転送バッファサイズ
	通信ソフトからの応答待ち時間
	複数のネットワークアダプタの設定
	システム構成の自動登録
	インベントリ情報の通知の有無
通信リトライ	ソケットコネクション（リトライ回数 / 間隔）
	通信エラー（リトライ回数 / 間隔）
	上位システムへの未送信通知ファイル
障害関連	ログ世代管理数
	ログエントリ数

分類	項目
	イベントビューアへ出力するメッセージ種別
システム監視	システムの監視
	［システム監視］アイコンの表示
	アラートメッセージの表示
	アラートの上位システムへの通知
	システム変更時の上位システムへのインベントリ情報の通知
ジョブオプション	ダイナミックインベントリの通知の有無
	接続先以外の定期実行ジョブの抑止
	ジョブのインストール / 収集待ち通知の抑止
インストールオプション	インストール・収集（リトライ回数 / 間隔）
	パッケージの分割配布
	ダウンロード時のサイズチェック
	インストールエラー時のインストール履歴の保管
	日立 PP インストールワークディレクトリの削除
	インストールシールドからの応答待ち時間
リモートコレクトオプション	クライアントで実行するリモートコレクトのジョブの制限
マルチキャスト配布	マルチキャスト配布用のポート番号，マルチキャスト配布のジョブの受信設定（マルチキャストアドレス）
スタートアップ関連	NETM_DM_P スタートアップフォルダの作成
	スタートアッププログラムの移行
	NETM_DM_P スタートアップへ移行するショートカットの選択

なお，［詳細情報の設定］ダイアログボックスでの設定内容は，JP1/NETM/DM Client（クライアント）の［クライアントセットアップ］ダイアログボックスでの設定内容と同じです。詳細については，「6.2　クライアントをセットアップする」を参照してください。

図 4-27 ［詳細情報の設定］ダイアログボックス



4.5　JP1/Cm2 連携機能をセットアップする

［JP1/NETM/DM Manager Cm2 連携機能セットアップ］ダイアログボックスで JP1/Cm2 連携機能を使用する場合の動作環境を設定します。設定が終わったら［OK］ボタンをクリックし，［セットアップ］ダイアログボックスに戻ります。

4.5.1　［接続する JP1/NETM/DM Manager］パネル

JP1/Cm2 連携機能から接続する JP1/NETM/DM Manager のホスト名または IP アドレスを指定します。

図 4-28　［接続する JP1/NETM/DM Manager］パネル



4.5.2　［ポート番号］パネル

JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm から JP1/NETM/DM 管理情報にアクセスするときに使用するポート番号を指定します。

図 4-29　［ポート番号］パネル



この設定は，サーバセットアップの［JP1/Cm2 連携］パネルで指定した値と同じ値を指定する必要があります。デフォルトは 20049 です。

5 JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする

この章では，JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップ方法について説明します。
なお，JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップは，Administrator 権限のあるユーザだけが実行できます。

5.1 JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップの流れ

5.2 中継システムの基本設定をセットアップする

5.3 中継システムの詳細設定をセットアップする

5.1　JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップの流れ

JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップの流れを次に示します。

1. **［スタート］メニューから［JP1_NETM_DM Client］－［セットアップ］を選択する。**
   ［セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 5-1　［セットアップ］ダイアログボックス



2. **［基本設定］ボタンまたは［詳細設定］ボタンをクリックする。**
   選択した種類のセットアッププログラムが起動します。
3. **セットアップが終了したら，［終了］ボタンをクリックする。**
   セットアップが完了します。

次の節以降で，中継システムの基本設定，および詳細設定のセットアップ方法を説明します。

5.2 中継システムの基本設定をセットアップする

中継システムの基本設定は，JP1/NETM/DM Client（中継システム）が配布管理システムまたは中継システムとして動作するときに必要な項目です。基本設定が終わった時点で，［OK］ボタンをクリックすると，［セットアップ］ダイアログボックスに戻ります。

引き続いて中継システムの詳細設定をしたい場合は，［詳細設定］ボタンをクリックして［詳細情報の設定］ダイアログボックスを表示してください。詳細設定をしないで［終了］ボタンをクリックしてセットアップを終了すると，詳細設定はすべてデフォルト値のまま設定されます。詳細設定については，「5.3 中継システムの詳細設定をセットアップする」を参照してください。

なお，中継システムのセットアップの設定を更新するには，中継システムのサービスを再起動する必要があります。中継システムのサービス起動中に，セットアップを変更して［中継システムセットアップ］ダイアログボックスの［OK］ボタンをクリックすると，中継システムのサービスが再起動されます。

中継システムの基本設定のセットアップ項目を次の表に示します。

表 5-1 中継システムの基本設定のセットアップ項目

分類	項目
接続先	上位システム（JP1/NETM/DM Manager，JP1/NETM/DM Client（中継システム），または JP1/NETM/DM SubManager）のホスト名または IP アドレス
	複数の上位システムへのポーリングの有無
	ID 登録先システム（JP1/NETM/DM Manager，JP1/NETM/DM Client（中継システム），または JP1/NETM/DM SubManager）のホスト名または IP アドレス
通信関連	起動プロトコル（UDP または TCP）
	インターバル転送
ダイヤルアップ	認証情報（ユーザ名・パスワード・ドメイン）
中継システムカスタマイズオプション	同時に接続できるクライアント数
	中継 / クライアントの同時実行要求数
	下位クライアントの資源情報の記録
	ID ジョブのクライアントの実行結果の記録
	下位システムの起動の監視
	下位システムのファイル転送エラーの監視
	接続先以外からのファイル転送の中断・再開ジョブの受け付け
上位通知	サーバ通知ファイルの送信タイミング

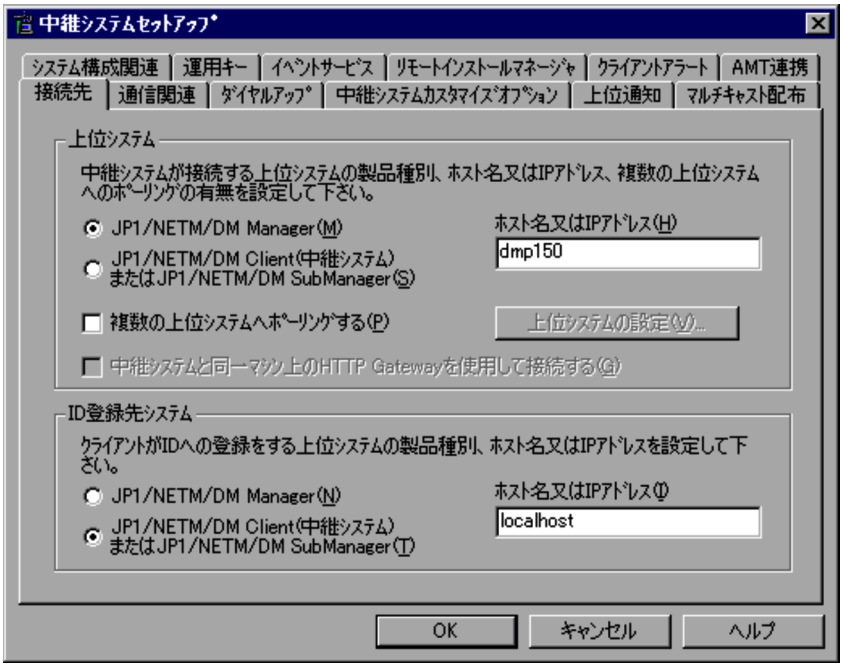
分類	項目
	上位システムに対する，ジョブの受信とサーバ通知ファイルの送信を並行実行する
	下位システムへのパッケージの分割配布の実行状況を上位システムに通知する
マルチキャスト配布	マルチキャスト配布のジョブの送信設定（マルチキャストアドレス，パケットサイズ）
システム構成関連	システム構成情報の自動反映
	システム構成変更時の連携
運用キー	キー項目（ホスト名 /IP アドレス）の選択
	アドレス解決の方法
	アドレス解決できないあて先へのジョブの処理
イベントサービス	イベントサービス機能の使用
リモートインストールマネージャ	配布管理システムへのインストール状況の通知
	配布管理システムへの ID ジョブの結果の通知
クライアントアラート	クライアントアラート情報の上位システムへの中継
	クライアントアラート情報の出力（CSV 形式ファイルおよびイベントビューア）
AMT 連携※	AMT 管理ユーザのユーザ ID およびパスワード

注※
「AMT 連携機能」がインストールされている場合に表示されます。

5.2.1 ［接続先］パネル

中継システムの接続先を設定します。

図 5-2　［接続先］パネル



（1）上位システム

自システムの上位システムが，JP1/NETM/DM Manager なのか，JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager なのかを選択してください。また，上位システムのアドレスを上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）で指定してください。

運用キーがホスト名の場合，接続先システムのネットワーク環境で解決できる名称，例えば DNS サーバを使用している環境であるなら完全修飾ドメイン名（ホスト名のあとにピリオドとドメイン名を表記した名前），で設定してください。

選択できる製品種別と対応する製品名

選択できる製品種別と，それに対応する製品名を次に示します。

製品種別	対応する製品名
JP1/NETM/DM Manager	Windows 版 JP1/NETM/DM Manager Windows 版 NETM/DM Manager UNIX 版 JP1/NETM/DM Manager UNIX 版 JP1/NETM/DM UNIX 版 JP1/NETM/DM/W-AF UNIX 版 NETM/DM UNIX 版 NETM/DM/W-AF

製品種別	対応する製品名
JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager	Windows 版 JP1/NETM/DM Client（中継システム） Windows 版 JP1/NETM/DM SubManager Windows 版 NETM/DM SubManager UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager UNIX 版 JP1/NETM/DM/W UNIX 版 NETM/DM/W

複数の上位システムへポーリングする

配布管理システムからのジョブの実行経路が複数ある場合に，複数の上位システムへポーリング（**マルチポーリング**）するかどうかを選択します。デフォルトはオフです。このチェックボックスをオンにすると［上位システムの設定］ボタンが活性化されます。このボタンをクリックして表示される［上位システムの設定］ダイアログボックスで，上位システムの名称，ポーリングの優先順位などを設定してください。上位システムの名称は，上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）を使って指定してください。

なお，ID 登録先システムとして自システムでない上位システムが設定されている場合，優先順位が 1 位の上位システムを変更すると，ID 登録先システムも新しく 1 位に設定した上位システムに変更されます。

また，上位システムの運用キーにホスト名と IP アドレスを混在させた設定はできません。

マルチポーリング機能の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.4.1　中継システムのマルチポーリング環境」を参照してください。

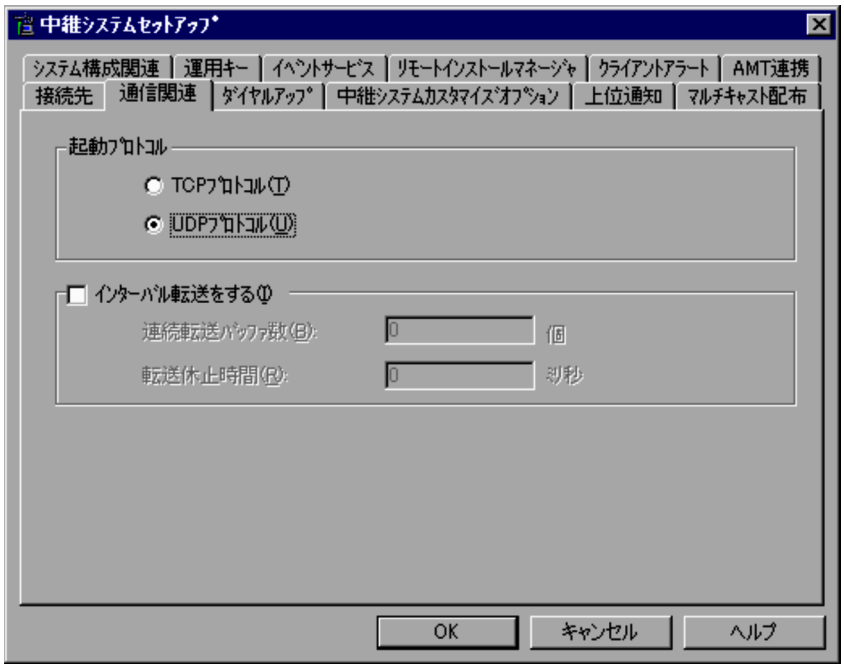
（2）ID 登録先システム

ID への登録を行う上位システムが，JP1/NETM/DM Manager なのか，JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager なのかを選択してください。また，上位システムのアドレスを上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）で指定してください。

5.2.2 ［通信関連］パネル

起動プロトコルと，インターバル転送するかどうかを設定します。

図 5-3　［通信関連］パネル



（1）起動プロトコル

自システムを起動するときに使用するプロトコルを，UDP または TCP で設定します。デフォルトは「UDP プロトコル」です。

「TCP プロトコル」を選択し，services ファイルにポート番号を設定しているときは，services ファイルに netmdm *xxxxx*/tcp のエントリを追加してください（*xxxxx* はポート番号）。

「UDP プロトコル」を選択した場合，WAN 環境などで起動に失敗することがあるので注意してください。

（2）インターバル転送をする

下位システムへファイル転送が発生する場合，指定した単位ごとにファイルが分割され，インターバルを置いて実行されます。これによって，ファイル転送時のネットワークの負荷を軽減することができます。デフォルトはチェックボックスがオフです。

なお，インターバル転送は下位システムから上位システムへのファイル転送時は実行されません。

連続転送バッファ数

ファイルの転送先システムでのセットアップで指定した「ファイル転送バッファサイズ」を，ここでの 1 単位（個）とします。例えば「ファイル転送バッファサイズ」が 4,096 バイトであるとき，「連続転送バッファ数」に 2 個を指定すると，ジョブは

8,192 バイト単位で分割されます。
連続転送バッファ数は 0 ～ 4,294,967,295 個で指定してください。デフォルトは 1 個です。0 個を指定するとインターバル転送されません。

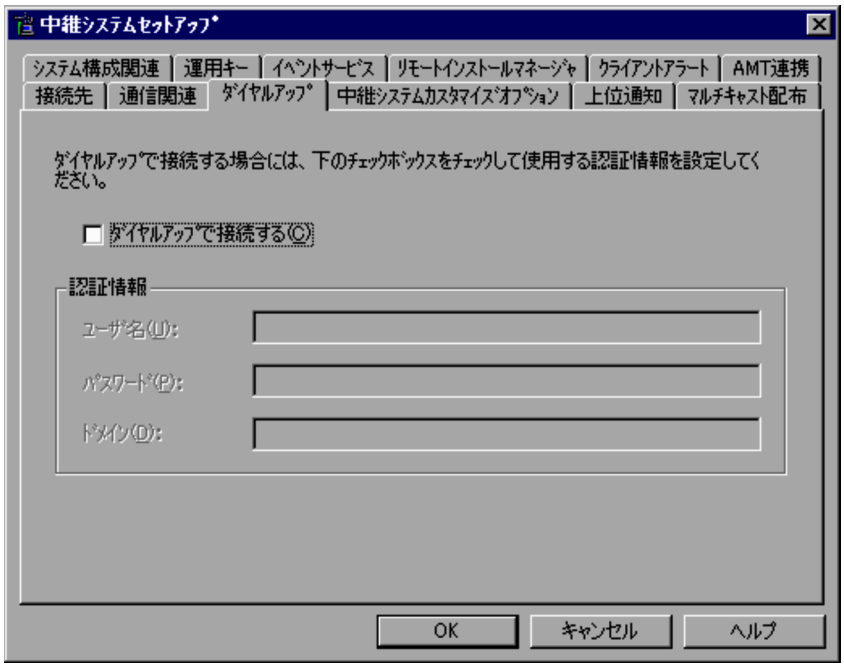
転送休止時間

インターバル転送時に転送と転送との間のインターバルをどのくらいにするか指定します。0 ～ 4,294,967,295 ミリ秒で指定してください。デフォルトは 1,000 ミリ秒です。0 ミリ秒を指定するとインターバル転送されません。

5.2.3 ［ダイヤルアップ］パネル

ダイヤルアップ接続を使用する場合は，「ダイヤルアップで接続する」チェックボックスをオンにし，接続時に使用する，ユーザ名，パスワード，およびドメインを設定してください。このパネルは，ダイヤルアップ接続が利用できる環境でだけ表示されます。

図 5-4 ［ダイヤルアップ］パネル



ダイヤルアップで接続する

ダイヤルアップ接続を使用する場合にチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオフです。

認証情報

ダイヤルアップ接続時に使用する，ユーザ名，パスワード，およびドメインを設定してください。

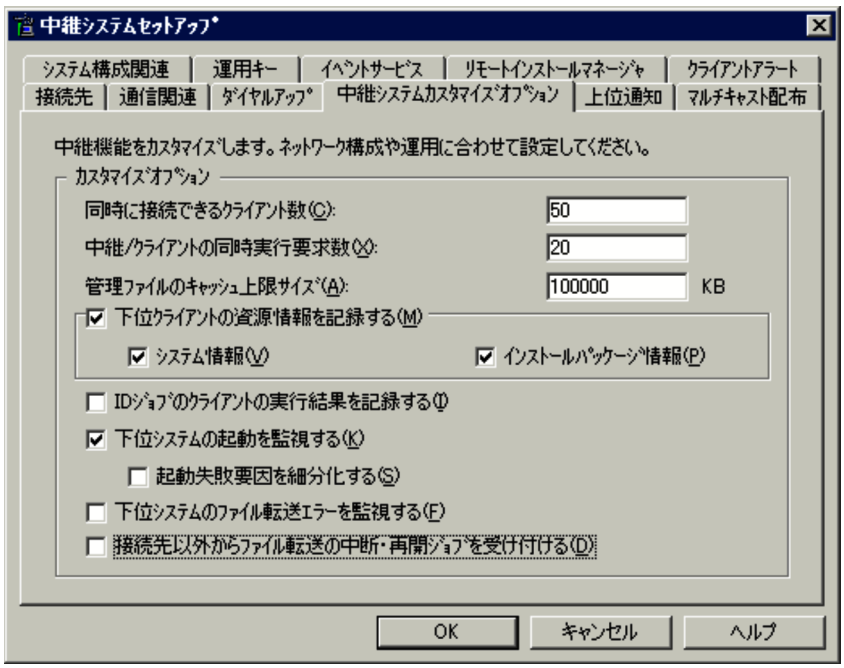
なお，ダイヤルアップ接続の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.6

ダイヤルアップ接続の設定」を参照してください。

5.2.4 ［中継システムカスタマイズオプション］パネル

自システムを配布管理システムまたは中継システムとして使用する場合の，CPU，メモリ，ネットワークなどに関するチューニング項目を設定します。チューニングの考え方については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.1.7(2)　同時に接続するホストの台数の調整」を参照してください。

図 5-5 ［中継システムカスタマイズオプション］パネル



このパネル独自の項目について次に説明します。これ以外の設定値については，JP1/NETM/DM Manager のサーバのセットアップ項目である「サーバカスタマイズオプション」と同じです。「4.2.4 ［サーバカスタマイズオプション］パネル」を参照してください。

同時に接続できるクライアント数

同時に接続するクライアントの数を絞り込むことができます。具体的には，この値は socket コネクションの数となります。socket コネクションの確立から解放までの間，カウントアップされています。設定する値は，次の計算式に従って算出してください。

同時に接続できるクライアント数＝
　　直接接続するシステム数＋接続するパッケージャ数× 2

最小値は 4，最大値は 9,999，デフォルトは 50 です。

ネットワークのトラフィックが高くなり，パケットの衝突が多いときには，この指定値を小さくしてクライアントの同時接続数を減らすことで，トラフィックを下げることができます。
指定した値を超えるクライアントからの接続は拒否されますが，接続数に空きができると，再度，実行要求が送信されます。

中継 / クライアントの同時実行要求数

ジョブを実行するときに，同時に処理する下位システムの数を指定します。具体的には，配布管理システムが，下位システムに対して起動電文を一度に送信する数，つまり，一度にジョブを実行するクライアントの数となります。ここで指定した値よりも多くのクライアントに対してジョブを実行すると，この指定値に応じて分割しジョブを実行します。
最小値は 0，最大値は 9,999，デフォルトは 20 です。0 を指定すると下位システムへ起動電文を送信しなくなり，上位システム主導のジョブの実行や，クライアント制御を利用したあて先の起動ができなくなります。配布するファイルの容量が大きい（10 メガバイト以上）と，少数のクライアントの接続でも LAN の負荷が高くなることがありますので，ネットワークの性能に合わせた値を指定してください。「中継 / クライアントの同時実行要求数×パッケージサイズ」が，ネットワーク上に一度に流れるデータ量となります。
この値は，「同時に接続できるクライアント数」以下としてください。また，下位システムとの接続で回線交換網を経由している場合，契約している回線数以上の数を指定しても意味がないので注意してください。

管理ファイルのキャッシュ上限サイズ

上位システムまたは中継システムから実行されたジョブの情報（管理ファイル）を，中継システムのメモリ上にキャッシュする上限サイズを指定します。最小値は 0，最大値は 1000000（1 ギガバイト），デフォルトは 100000（100 メガバイト）です。0 を指定すると，管理ファイルのキャッシュ機能を利用しません。
管理ファイルは，ジョブが作成されてから削除されるまでメモリ上にキャッシュされます。上限サイズを超える管理ファイルが発生すると，ジョブ処理のスループットが低下します。ジョブ処理のスループットの低下を回避するために，管理ファイルのキャッシュの上限サイズは運用規模に応じて適切な値を指定することをお勧めします。指定する値の目安は，次の計算式の各項目の見積もり値を基に算出してください。

管理ファイルのキャッシュサイズ（キロバイト）＝
　中継システムに保管されている，上位システムまたはその中継システムから実行されたジョブ数
　×各ジョブのあて先数
　×各ジョブのパッケージ数（リモートインストールのジョブの場合）
　×１キロバイト

管理ファイルの増加によって上限サイズを超える場合は，最も参照頻度の低い管理ファイルを削除してから，新しい管理ファイルをキャッシュします。

下位クライアントの資源情報を記録する

下位システムからジョブを実行したときに通知されるシステム情報，およびインストールパッケージ情報を記録するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。

システム情報

下位システムからジョブを実行したときに通知されるシステム情報を記録したい場合に選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。

インストールパッケージ情報

下位システムからジョブを実行したときに通知されるインストールパッケージ情報を記録したい場合に選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。

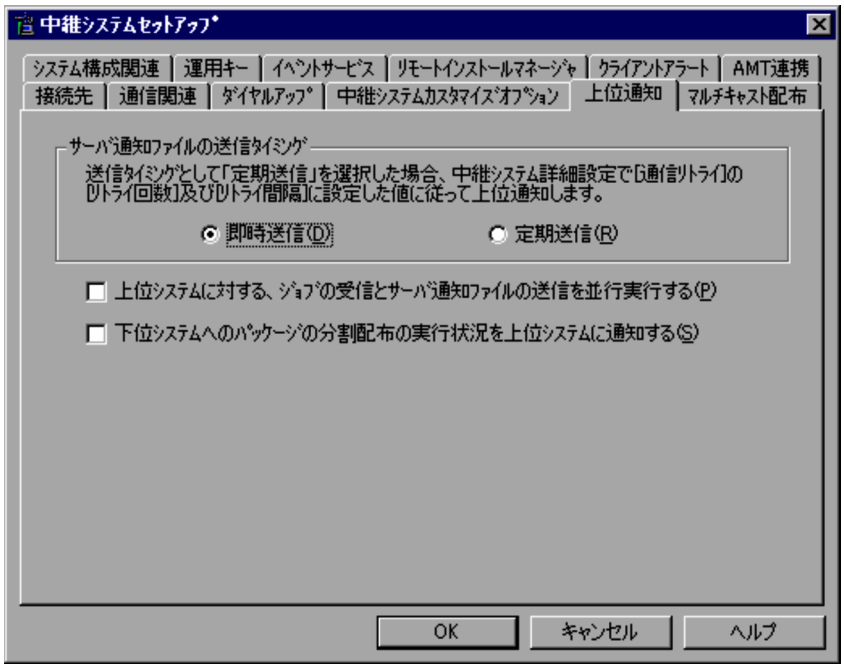
ID ジョブのクライアントの実行結果を記録する

正常終了した ID ジョブのクライアントの実行結果を記録するかどうかを選択します。エラーとなった ID ジョブは，チェックボックスの状態に関係なく記録されます。中継システムで ID ジョブの実行結果を確認するには，ID を管理している中継システムでクライアントの実行結果を管理しておく必要があります。各クライアントの結果は，ID ジョブが無効状態，または ID ジョブをキャンセルした場合に削除されます。デフォルトはチェックボックスがオフです。

5.2.5 ［上位通知］パネル

下位システムから受信した通知ファイルをどのタイミングで配布管理システムに送信するかを設定します。

図 5-6 ［上位通知］パネル



各項目の設定値は，JP1/NETM/DM Manager の中継マネージャのセットアップ項目である「上位通知」と同じです。「4.3.2 ［上位通知］パネル」を参照してください。

5.2.6 ［マルチキャスト配布］パネル

ジョブをマルチキャスト方式で下位のシステムに配布する場合の設定です。このパネルでの設定は，「マルチキャスト配布」が指定されたジョブに対して適用されます。

なお，マルチキャスト配布に使用するポート番号，およびパケットの再送要求に使用するポート番号は，このパネルでは設定できません。これらのポート番号は，中継システムの詳細設定で指定します。中継システムの場合，ジョブを送信するためのポート番号と受信するためのポート番号は同じ値を使用します。

図 5-7 ［マルチキャスト配布］パネル



（1） マルチキャスト配布のジョブを送信する

「マルチキャスト配布」が指定されたジョブを，下位のシステムにマルチキャスト方式で送信する場合に選択し，マルチキャストアドレスとパケットサイズを設定してください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

「マルチキャスト配布のジョブを送信する」がオフの場合，「マルチキャスト配布」を指定したジョブも，下位システムへユニキャスト配布されます。反対に，このチェックボックスをオンにしても，ジョブに「ユニキャスト配布」が指定されている場合はユニキャスト配布になります。

なお，ネットワーク中で IP マルチキャストに対応していないルータを使用している場合は，「マルチキャスト配布のジョブを送信する」をオフにしてください。IP マルチキャストに対応していないルータを使用している場合，マルチキャスト配布はできないので，ユニキャスト配布になります。このとき，「マルチキャスト配布のジョブを送信する」をオンにしていると，ユニキャスト配布に切り替わってジョブが配布されるまでに時間が掛かります。

マルチキャストアドレス

配布先のマルチキャストグループに割り当てられた，マルチキャストアドレスを指定します。224.0.1.0 ～ 239.255.255.255 で，ほかのマルチキャストグループと重複しない値を指定してください。デフォルトは 239.255.0.1 です。

マルチキャストグループは，この JP1/NETM/DM Client（中継システム）に直接接続する下位システムをまとめたグループにします。配布先の下位システムのマルチ

キャストアドレスがここで設定したマルチキャストアドレスと一致しない場合，その下位システムにはジョブがユニキャスト配布されます。
マルチキャストグループとマルチキャストアドレスの詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.2.1　ユニキャスト配布とマルチキャスト配布」および「6.2.3　マルチキャスト配布をするためのシステム構成」を参照してください。

パケットサイズ

ジョブを配布するときの，1 パケット分のサイズを指定します。1 ～ 60 キロバイトで指定してください。デフォルトは，40 キロバイトです。
40 キロバイトは，100BASE の通信回線で効率的な値です。通信回線が 10BASE の場合は 4 キロバイトを設定してください。パケットサイズが大き過ぎると，マルチキャスト配布に失敗し，途中からユニキャスト配布になりますので，ご注意ください。

5.2.7　［システム構成関連］パネル

自システムを中継システムとして使用する場合の，上位システムに対する各種の情報の通知について設定します。

図 5-8　［システム構成関連］パネル



(1) システム構成情報の自動反映

下位システムから通知されるシステム構成情報を上位システムに自動的に通知（中継）するかどうかを選択します。デフォルトはオンです。

JP1/NETM/DM Client（中継システム）を新規にインストールする場合，チェックボックスをオンにしてください。配布管理システムで構成定義をする必要がなく，作業を軽減できます。

JP1/NETM/DM Client（中継システム）がすでにインストールしてあり，バージョンアップだけをする場合は，チェックボックスをオンにすると，作成済みの構成定義が自動的に変更されますのでご注意ください。チェックボックスをオフにすると，ユーザが手動でシステム構成を定義する必要があります。

（2）システム構成変更時の連携

上位システムのシステム構成情報が変更になった場合に，その変更を自動的に中継システムのシステム構成情報に反映させることができます。また，システム構成情報の変更に合わせて，ID の情報も自動的に編集させることができます。したがって，チェックボックスをオンにした場合は，配布管理システムまたは ID 管理中継から，システム管理者がシステム構成情報に合わせて ID を変更する必要がありません。チェックボックスをオフにした場合は，手動で ID の情報を編集する必要があります。

この設定は，「システム構成情報を自動反映する」チェックボックスがオンの場合だけ有効になります。デフォルトはチェックボックスがオンです。ただし，上書きインストールした場合，旧バージョンの設定がオフだったとき，デフォルトはオフになります。

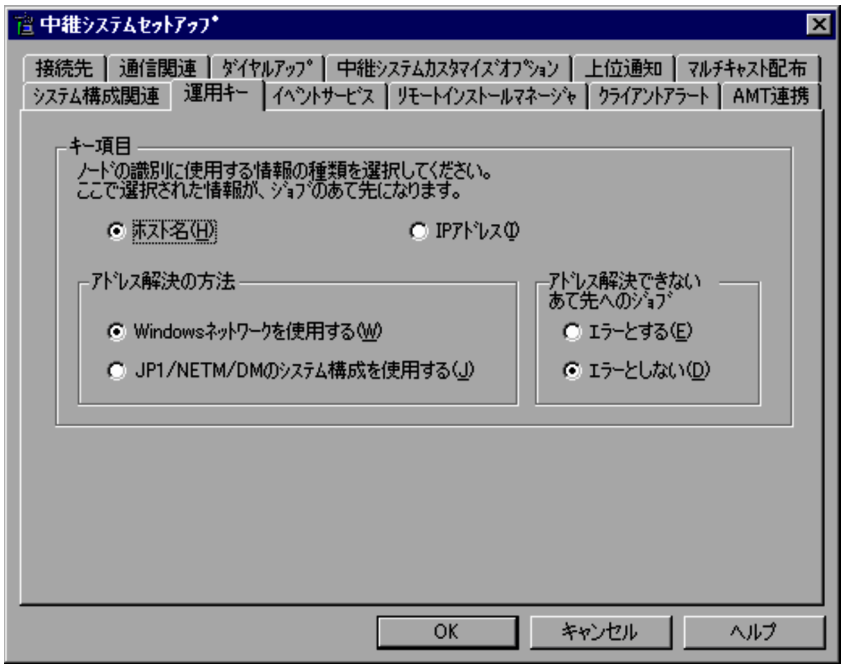
なお，オンにした場合は，システム内のすべての JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM SubManager をバージョン 05-21 以降にバージョンアップする必要があります。したがって，バージョン 05-21 より古い JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager がシステム内に混在する場合は，オフにしてください。

システム構成情報と ID を連携させた運用の詳細については，「8.4　システム構成情報と ID を連携させる運用」を参照してください。

5.2.8　［運用キー］パネル

ノード識別キー，アドレス解決の方法，およびアドレス解決できないあて先へのジョブの扱いについて設定します。

図 5-9 ［運用キー］パネル



(1) キー項目

ノードの識別に使用する情報の種類を「ホスト名」または「IP アドレス」で指定してください。接続先となる上位システムの運用キーの設定に合わせて「ホスト名」または「IP アドレス」のどちらかを指定してください。デフォルトは「ホスト名」です。キー項目としてホスト名を選択した場合，［アドレス解決の方法］および［アドレス解決できないあて先へのジョブ］を指定してください。

(a) アドレス解決の方法

ジョブ作成または実行時にアドレス解決する方法として，「Windows ネットワークを使用する」または「JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する」のどちらかを選択します。デフォルトは「Windows ネットワークを使用する」です。

Windows ネットワークを使用する

ジョブ作成または実行時に Windows ネットワークから IP アドレスを取得します。アドレス解決には hosts ファイルやネームサーバを使用します。アドレス解決に失敗した場合，JP1/NETM/DM のシステム構成から IP アドレスを取得します。

JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する

ジョブ作成または実行時に JP1/NETM/DM のシステム構成からだけ IP アドレスを取得します。したがって，システム構成の IP アドレスは常に正しい状態を保持する必要があります。DHCP 環境などの IP アドレスが動的に変化する環境では，シス

テム構成の自動登録機能を使用することで，システム構成の IP アドレスを正しい状態に保持することができます。
夜間などネームサーバが停止した状態でジョブを作成および実行するような環境では，「Windows ネットワークを使用する」を選択しても，アドレス解決に失敗し，ジョブを作成できないことがあります。しかし，「JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する」を選択すると，アドレス解決に失敗するまでに掛かっていた時間を短縮できるメリットがあります。
なお，この指定ではアドレス解決をしないで，システム構成情報から IP アドレスを取得することでジョブのあて先を決定します。しかし，ホスト識別子運用の場合，ジョブのあて先が取得できないため，ジョブを実行できないことがあります。この場合にジョブを実行する方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「8.2.4(4) あて先を設定するときの注意事項」およびマニュアル「運用ガイド 2」の「4.25.9 JOB_DESTINATION（あて先の指定）」を参照してください。

(b) アドレス解決できないあて先へのジョブ

ジョブ実行時にあて先のアドレス解決ができなかった場合に，そのジョブをエラーとするかどうかを選択します。デフォルトは「エラーとしない」です。「エラーとしない」を選択した場合，アドレス解決ができないジョブの実行状態は「実行待ち」となります。実在しないあて先へのジョブの実行状態も「実行待ち」のままとなります。

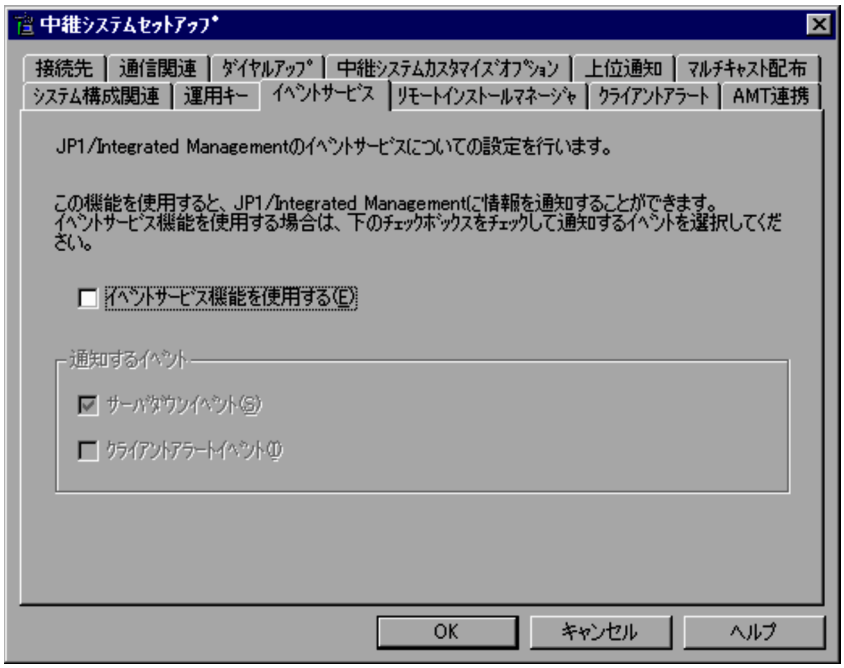
WINS サーバを使用している環境では，ジョブ実行時にクライアント PC の電源が OFF の場合，あて先のアドレス解決ができません。したがって，「エラーとする」の設定では，休日や夜間にジョブを実行してシステム起動時ポーリングでインストールする運用ができなくなります。このような場合に，「エラーとしない」を設定してください。

なお，「エラーとしない」を選択した場合，実行したジョブにアドレス解決できないあて先が含まれていると，リモートインストールマネージャの動作が遅くなるなどの影響があります。

5.2.9 ［イベントサービス］パネル

JP1/Base のイベントサービス機能を使用して JP1/IM に通知するイベントについて設定するパネルです。「イベントサービス機能を使用する」チェックボックスをオンにすると，JP1/NETM/DM Client（中継システム）に異常が発生したことを JP1 イベントとして JP1/IM に通知できます。また，クライアントから通知されたアラート情報を，JP1 イベントとして JP1/IM に通知することもできます。デフォルトではチェックボックスはオフです。

図 5-10　［イベントサービス］パネル



サーバダウンイベント

JP1/NETM/DM Client（中継システム）に異常が発生した場合に，JP1/IM にイベントを通知します。

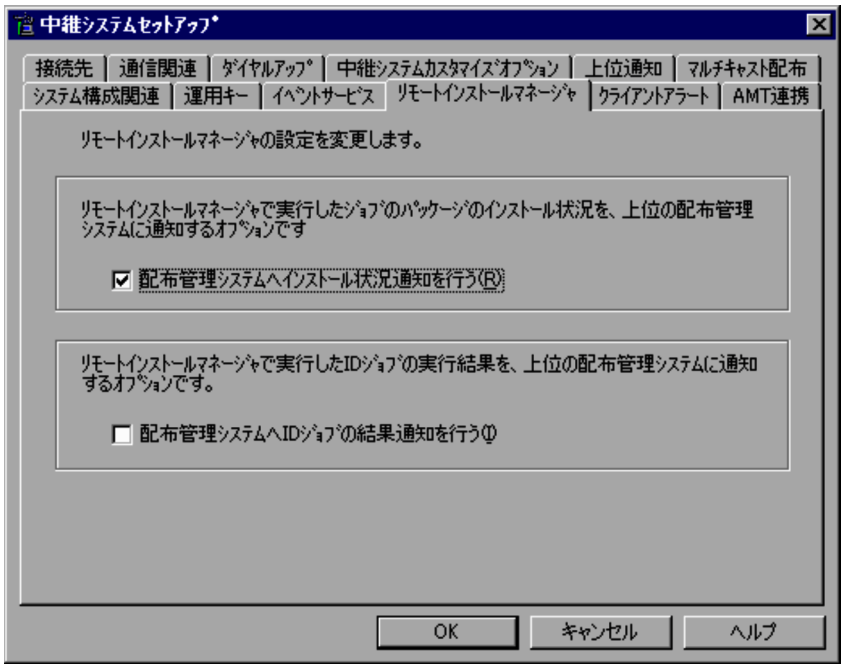
クライアントアラートイベント

クライアントからアラート情報が通知された場合に，JP1/IM に通知します。

5.2.10　［リモートインストールマネージャ］パネル

中継システムのリモートインストールマネージャで実行したリモートインストールの状況，および中継システムからの ID ジョブの実行結果を，上位の配布管理システムに通知するかどうかを設定します。

図 5-11　［リモートインストールマネージャ］パネル



配布管理システムへインストール状況通知を行う

リモートインストールマネージャで実行したジョブのパッケージのインストール状況を，上位の配布管理システムへ通知する場合に選択します。デフォルトでは，チェックボックスがオンです。

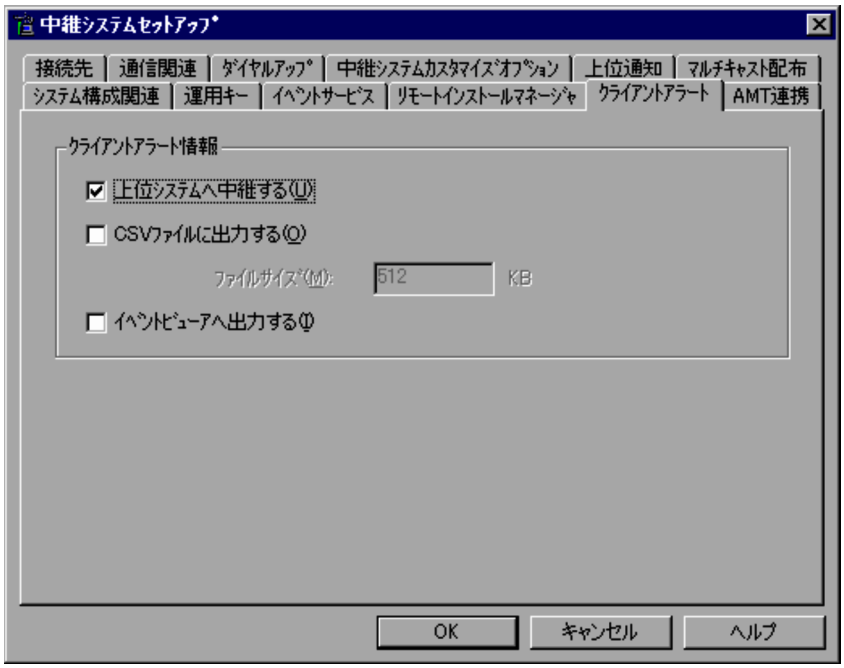
配布管理システムへ ID ジョブの結果通知を行う

リモートインストールマネージャで実行した ID ジョブの実行結果を，上位の配布管理システムへ通知する場合に選択します。デフォルトでは，チェックボックスがオフです。

5.2.11　［クライアントアラート］パネル

クライアントから通知されたアラート情報の出力および中継について設定します。

図 5-12 ［クライアントアラート］パネル



上位システムへ中継する

クライアントから通知されたアラート情報を，上位システムへ中継します。デフォルトはオンです。

CSV ファイルに出力する

クライアントから通知されたアラート情報の履歴を，CSV 形式のファイルに出力します。デフォルトはオフです。このチェックボックスを選択した場合，「ファイルサイズ」を設定してください。

ファイルサイズ

アラート情報の履歴を出力する CSV 形式ファイルのサイズを，100 ～ 2,500 キロバイトで指定します。デフォルトは 512 キロバイトです。100 キロバイト当たり，約 400 件のアラート情報を記録できます。

アラート情報が指定したファイルサイズを超えた場合，古いアラート情報から削除されます。

イベントビューアへ出力する

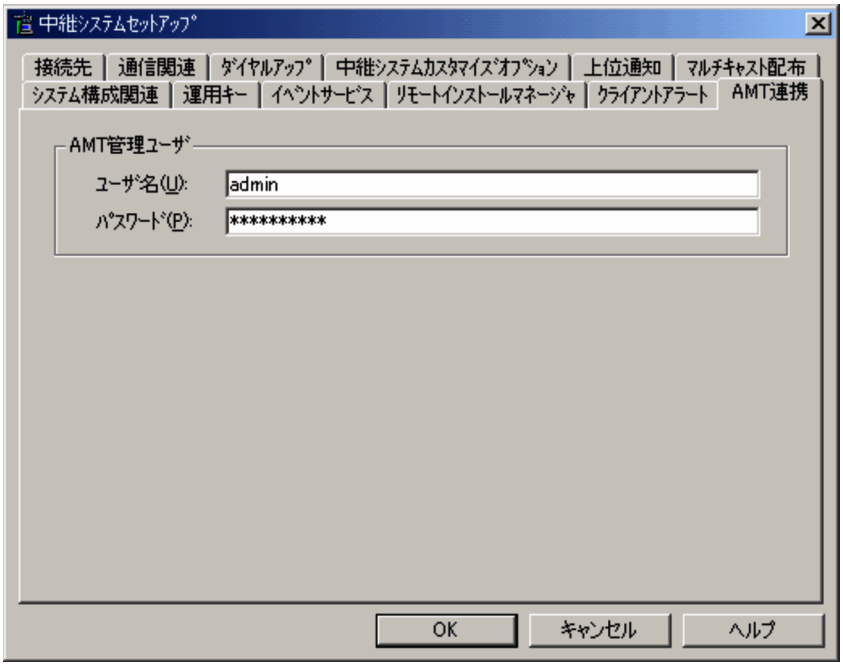
クライアントから通知されたアラート情報を，Windows NT のイベントビューアに出力します。デフォルトはオフです。

「イベントビューアへ出力する」を選択した場合，［障害関連］パネルの「イベントビューアへ出力するメッセージ種別」での設定に関係なく，アラート情報がすべてイベントビューアに出力されます。イベントビューアに表示されるメッセージ種別は，アラートイベントの種別が「危険」または「警告」のときは警告メッセージ，「正常」のときは情報メッセージとなります。

5.2.12　［AMT 連携］パネル

「AMT 連携機能」を使用して，クライアントを制御するために必要な情報を設定します。デフォルトでは，インストール時に［AMT 連携機能の設定］ダイアログボックスで指定した内容が設定されています。

図 5-13　［AMT 連携］パネル



AMT 管理ユーザ

クライアントの AMT にアクセスするための情報を設定します。ユーザ名とパスワードは，クライアントで設定されているものと合わせる必要があります。

ユーザ名

クライアントの AMT にアクセスするためのユーザ名を，半角 60 文字以内で指定します。

パスワード

クライアントの AMT にアクセスするためのパスワードを，半角 60 文字以内で指定します。

5.3 中継システムの詳細設定をセットアップする

中継システムの詳細設定は，JP1/NETM/DM Client（中継システム）がクライアントとして動作するときに必要な項目です。詳細設定が終わった時点で，［OK］ボタンをクリックすると，［セットアップ］ダイアログボックスに戻ります。

なお，中継システムのセットアップの設定を更新するには，中継システムのサービスを再起動する必要があります。中継システムのサービス起動中に，セットアップを変更して［中継システムセットアップ］ダイアログボックスまたは［詳細情報の設定］ダイアログボックスの［OK］ボタンをクリックすると，中継システムのサービスが再起動されます。

中継システムの詳細設定のセットアップ項目を次の表に示します。

表 5-2 中継システムの詳細設定のセットアップ項目

分類	項目
処理中ダイアログ	処理中ダイアログ表示の有無
	ダイアログを表示するプログラム
通知ダイアログ	ジョブエラー時のダイアログの表示
	NETM_DM_P スタートアップから起動失敗したショートカットの削除確認ダイアログの表示
	起動時のユーザ情報設定ダイアログの表示
	ユーザ情報定期取得時のユーザ情報設定ダイアログ表示の有無
クライアント常駐・ポーリング	クライアントの常駐
	ポーリングの有無
	ポーリングのタイミング
通信関連	ポート番号
	上位システムからの起動要求プロトコル
	ファイル転送バッファサイズ
	通信ソフトからの応答待ち時間
	複数のネットワークアダプタの設定
	システム構成の自動登録
	インベントリ情報の通知の有無
通信リトライ	ソケットコネクション（リトライ回数 / 間隔）
	通信エラー（リトライ回数 / 間隔）
	上位システムへの未送信通知ファイル
	システム構成の自動登録

分類	項目
障害関連	ログ世代管理数
	ログエントリ数
	イベントビューアへ出力するメッセージ種別
システム監視	システムの監視
	［システム監視］アイコンの表示
	アラートメッセージの表示
	アラートの上位システムへの通知
	システム変更時の上位システムへのインベントリ情報の通知
ジョブオプション	ダイナミックインベントリの通知の有無
	接続先以外の定期実行ジョブの抑止
	ジョブのインストール / 収集待ち通知の抑止
インストールオプション	インストール・収集（リトライ回数 / 間隔）
	パッケージの分割配布
	ダウンロード時のサイズチェック
	インストールエラー時のインストール履歴の保管
	日立 PP インストールワークディレクトリの削除
	インストールシールドからの応答待ち時間
リモートコレクトオプション	クライアントで実行するリモートコレクトのジョブの制限
マルチキャスト配布	マルチキャスト配布用のポート番号，マルチキャスト配布のジョブの受信設定（マルチキャストアドレス）
スタートアップ関連	NETM_DM_P スタートアップフォルダの作成
	スタートアッププログラムの移行
	NETM_DM_P スタートアップへ移行するショートカットの選択
権限	一般ユーザ権限での使用

なお，［詳細情報の設定］ダイアログボックスでの設定内容は，JP1/NETM/DM Client（クライアント）の［クライアントセットアップ］ダイアログボックスでの設定内容と同じです。詳細については，「6.2　クライアントをセットアップする」を参照してください。

図 5-14 ［詳細情報の設定］ダイアログボックス



6 JP1/NETM/DM Client（クライアント）をセットアップする

この章では，JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップ方法について説明します。
なお，JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップは，Administrator 権限のあるユーザだけが実行できます。

6.1 JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップの流れ
6.2 クライアントをセットアップする

6.1 JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップの流れ

JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップの流れを次に示します。

1. **［スタート］メニューから［JP1_NETM_DM Client］－［セットアップ］を選択する。**
   ［クライアントセットアップ］ダイアログボックスが表示されます。
2. **セットアップをする項目のタブを選択する。**
   選択した項目をセットアップします。
3. **セットアップが終了したら，［OK］ボタンをクリックする。**
   セットアップが完了します。なお，セットアップの設定を更新するには，クライアントマネージャでクライアントを再起動する必要があります。

次の節以降で，クライアントのセットアップ方法を説明します。

6.2 クライアントをセットアップする

JP1/NETM/DM Client（クライアント）は，［クライアントセットアップ］ダイアログボックスでセットアップ項目を設定します。これらの項目は，次に示す場合も設定が必要です。

- JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能を使用する場合
- 「スタートアップキット機能支援ツール」を使用してインストールセットにセットアップ情報を設定する場合

これらの場合は，［クライアントセットアップ］ダイアログボックスとほぼ同じ内容の［詳細情報の設定］ダイアログボックスでセットアップ項目を設定します。ただし，［詳細情報の設定］ダイアログボックスでは表示されない項目もあります。

クライアントのセットアップ項目を次の表に示します。

表 6-1 クライアントのセットアップ項目

分類	項目
接続先※1	製品種別（JP1/NETM/DM Manager，JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager）とホスト名または IP アドレス
	実行要求を送信した上位システムを接続先に自動設定する
	複数の上位システムへのポーリングの有無
	システム構成の自動登録
	インベントリ情報の通知の有無
処理中ダイアログ	処理中ダイアログ表示の有無
	ダイアログを表示するプログラム名
通知ダイアログ	ジョブエラー時のダイアログの表示
	NETM_DM_P スタートアップから起動失敗したショートカットの削除確認ダイアログの表示
	起動時のユーザ情報設定ダイアログの表示
	ユーザ情報定期取得時のユーザ情報設定ダイアログ表示の有無
クライアント常駐・ポーリング	クライアントの常駐
	ポーリングの有無
	ポーリングのタイミング
	上位システムへのポーリング形態
ダイヤルアップ※1	ダイヤルアップ接続
	認証情報（ユーザ名・パスワード・ドメイン）
通信関連	ポート番号

分類	項目
	上位システムからの起動要求プロトコル
	ファイル転送バッファサイズ
	通信ソフトからの応答待ち時間
	複数のネットワークアダプタの設定
通信リトライ	ソケットコネクション（リトライ回数 / 間隔）
	通信エラー（リトライ回数 / 間隔）
	上位システムへの未送信通知ファイル
障害関連	ログ世代管理数
	ログエントリ数
	イベントビューアへ出力するメッセージ種別
システム監視	システムの監視
	［システム監視］アイコンの表示
	アラートメッセージの表示
	アラートの上位システムへの通知
	システム変更時の上位システムへのインベントリ情報の通知
ジョブオプション	ジョブ保留機能
	運用管理者からのシャットダウンまたは再起動の許可
	ダイナミックインベントリの通知の有無
	接続先以外の定期実行ジョブの抑止
	ジョブのインストール / 収集待ち通知の抑止
	ソフトウェア情報での日立プログラムプロダクトの扱い
インストールオプション	インストール・収集（リトライ回数 / 間隔）
	パッケージの分割配布
	ダウンロード時のサイズチェック
	以前の接続先システムに対応するパッケージ情報の削除
	インストールエラー時のインストール履歴の保管
	日立 PP インストールワークディレクトリの削除
	インストールシールドからの応答待ち時間
リモートコレクトオプション	クライアントで実行するリモートコレクトのジョブの制限
マルチキャスト配布	マルチキャスト配布用のポート番号，マルチキャスト配布のジョブの受信設定（マルチキャストアドレス）
スタートアップ関連	NETM_DM_P スタートアップフォルダの作成
	スタートアッププログラムの移行
	NETM_DM_P スタートアップへ移行するショートカットの選択

分類	項目
セットアップの保護※2	セットアップ情報の保護
権限（Windows NT の場合）※3	一般ユーザ権限での使用

注※1

JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されません。また，インストールセットへのセットアップ情報設定時も表示されません。

注※2

JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されません。

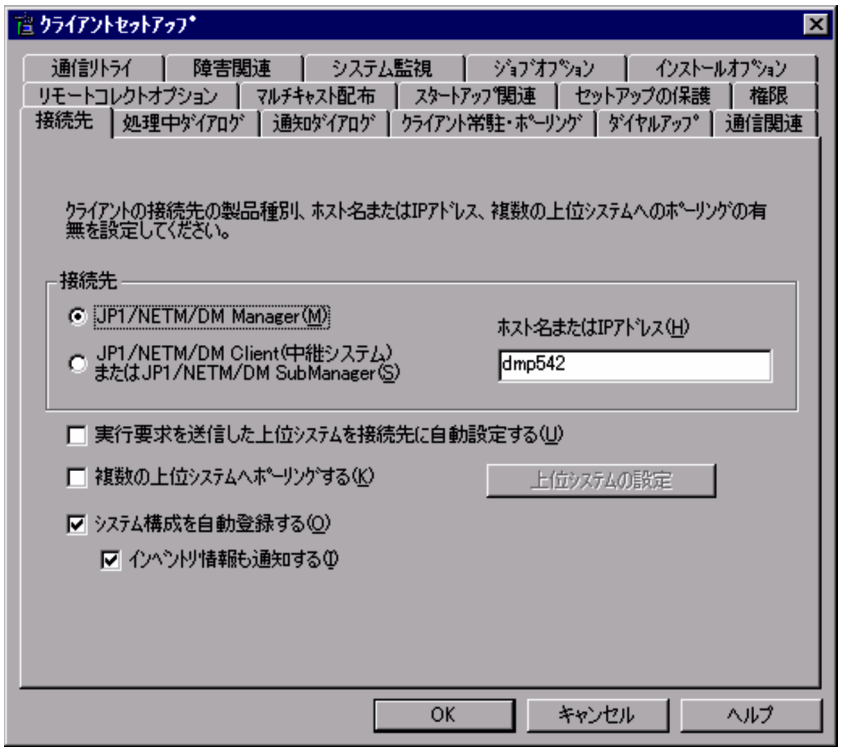
注※3

JP1/NETM/DM Manager のクライアント機能のセットアップでは表示されません。

6.2.1 ［接続先］パネル

クライアントの接続先を設定します。このパネルは，JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されません。また，インストールセットへのセットアップ情報設定時も表示されません。

図 6-1 ［接続先］パネル



(1) 接続先

クライアントの接続先（上位システム）が JP1/NETM/DM Manager なのか，JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager なのかを選択してください。また，接続先のアドレスを上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）で指定してください。

接続先が未定の場合や，クライアントをオフラインマシンとしてインベントリ管理する場合は，「?」を設定してください。「?」を設定すると，ローカルシステムビューアとシステム監視機能だけが使用できます。ほかの機能は，上位システムへの接続が必要なため使用できません。

また，プレインストール機能による JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストールで，ハードディスクのコピー元となる PC 環境を作成する場合は，接続先に「*」を指定してください。接続先に「*」を指定すると，セットアップ完了時にクライアントは初期化され，動作しなくなります。

なお，接続先を決定するためのファイルをクライアントに配布すると，各クライアント PC の IP アドレスに対応して適切な接続先を自動的に設定できます。IP アドレスが変更されると接続先も自動的に変更されるため，クライアント PC を移動した場合に便利です。ただし，接続先に「?」または「*」が設定されているときは，自動変更はできませ

ん。詳細は，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.5.4　クライアントの接続先の自動変更」を参照してください。

選択できる製品種別と対応する製品名

選択できる製品種別と，それに対応する製品名を次に示します。

製品種別	対応する製品名
JP1/NETM/DM Manager	Windows 版 JP1/NETM/DM Manager Windows 版 NETM/DM Manager UNIX 版 JP1/NETM/DM Manager UNIX 版 JP1/NETM/DM UNIX 版 JP1/NETM/DM/W-AF UNIX 版 NETM/DM UNIX 版 NETM/DM/W-AF
JP1/NETM/DM Client（中継システム） または JP1/NETM/DM SubManager	Windows 版 JP1/NETM/DM Client（中継システム） Windows 版 JP1/NETM/DM SubManager Windows 版 NETM/DM SubManager UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager UNIX 版 JP1/NETM/DM/W UNIX 版 NETM/DM/W

（2）実行要求を送信した上位システムを接続先に自動設定する

このチェックボックスをオンにすると，接続先に設定された上位システム以外のシステムからジョブの実行要求を受信した場合，クライアントの接続先をジョブの実行要求元の上位システムに自動的に切り替えます。

この設定をしておくと，クライアントセットアップを設定し直したり，上位接続先情報ファイルを作成したりしなくても，上位システムからのジョブの実行要求に応じてクライアントの接続先が自動的に変更されます。

なお，このチェックボックスをオンにした場合，次の機能は使用できません。

- 複数の上位システムへポーリングする。
- 複数のネットワークアダプタを設定する。

また，接続先に「*」または「?」が設定されているときは，このチェックボックスをオンにしても接続先は自動設定できません。

（3）複数の上位システムへポーリングする

配布管理システムからのジョブの実行経路が複数ある場合に，複数の上位システムへポーリング（**マルチポーリング**）するかどうかを選択します。デフォルトはオフです。このチェックボックスをオンにすると［上位システムの設定］ボタンが活性化されます。このボタンをクリックして表示される［上位システムの設定］ダイアログボックスで，上位システムの名称，ポーリングの優先順位などを設定してください。上位システムの名称は，上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）を使って指定してください。また，［クライアントセットアップ］ダイアログボックスの［クライアン

ト常駐・ポーリング］パネルで，ポーリング形態を設定してください。

なお，このチェックボックスをオンにし，かつ［通信関連］パネルの「複数のネットワークアダプタを設定する」でネットワークアダプタの優先順位を設定した場合，ポーリングに失敗してリトライしてからリトライアウトするまでに時間が掛かることがあります。

マルチポーリング機能の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.5.3 クライアントのマルチポーリング環境」を参照してください。

（4）システム構成を自動登録する

このチェックボックスをオンにすると，配布管理システムが管理する JP1/NETM/DM ネットワークに，自システムを自動的に登録します。また，JP1/NETM/DM Client（クライアント）のアンインストール時に，自システムを JP1/NETM/DM ネットワークから削除できます。なお，登録の動作はセットアップ完了のタイミングで実行されます。

デフォルトはチェックボックスがオンです。ファイアウォールを使用する場合は，チェックボックスをオフにしてください。チェックボックスをオフにしたときは，配布管理システムでのシステム構成定義時に，このクライアントを定義する必要があります。

バージョンが 06-00 以降の JP1/NETM/DM でクライアント制御を利用する場合や，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能を使用する場合も，チェックボックスをオンにしてください。

インベントリ情報も通知する

「システム構成を自動登録する」チェックボックスをオンにすると，この項目が活性化します。上位システムへシステム構成の情報とともにインベントリ情報についても通知したい場合に，チェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオンです。

通知されるインベントリ情報を次に示します。

- システム情報（システム情報およびレジストリ情報）
- ［アプリケーションの追加と削除］または［プログラムの追加と削除］に記録されたソフトウェア情報
- パッチ情報

上位システムへインベントリ情報が通知されるタイミングを次に示します。

- クライアントの新規インストール時
- クライアントセットアップでの接続先の変更時
- 上位システムがホスト識別子を使用しない運用から使用する運用に変更した場合

また，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能を使用する場合も，チェックボックスをオンにしてください。

6.2.2 ［処理中ダイアログ］パネル

配布管理システムからの指示で，JP1/NETM/DM Client（クライアント）が自動的に処

理を行うときに，処理中であることを示すメッセージダイアログボックスを表示するかどうかを設定します。また，表示するダイアログボックスの形式についても設定します。

図 6-2　［処理中ダイアログ］パネル



クライアントでの，ダウンロード，インストールなどの処理の実行中に，処理中であることを示すダイアログボックスを表示する場合，「処理中ダイアログを表示する」のチェックボックスをオンにします。デフォルトはオンです。ただし，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは，デフォルトでオフになっています。

「処理中ダイアログを表示する」のチェックボックスをオンにした場合は，さらに次のどの処理で表示するかを選択します。また，それぞれのダイアログボックスについて，表示するダイアログボックスの形式を「標準」と「プログラム指定」から選択します。「標準」を選択した場合，JP1/NETM/DM が標準で提供しているダイアログボックスを表示します。「プログラム指定」を選択した場合，ユーザが作成したダイアログボックス表示用プログラムを起動して表示します。

デフォルトでは，ダウンロードおよびインストールの処理中に，標準の処理中ダイアログを表示します。

（1）表示するダイアログの種類

ダウンロード中ダイアログ

パッケージのダウンロード処理中であることを示すダイアログボックスを表示しま

す。デフォルトはオンです。

インストール中ダイアログ

パッケージのインストール処理中であることを示すダイアログボックスを表示します。デフォルトはオンです。

ダイアログの最前面表示

他社ソフトウェアを配布する時にアプリケーションが表示するダイアログをユーザが誤って操作するのを抑止するため，インストール処理中ダイアログを最前面に表示するかどうかを指定します。デフォルトはオフです。

ソフトウェア検索中ダイアログ

インストールされているソフトウェアの検索処理中であることを示すダイアログボックスを表示します。デフォルトはオフです。

接続中ダイアログ

上位システムとの接続処理中であることを示すダイアログボックスを表示します。デフォルトはオフです。

注意事項

配布されたパッケージに処理中ダイアログの表示または非表示が設定されていた場合，「ダウンロード中ダイアログ」および「インストール中ダイアログ」はパッケージの設定に従って強制的に表示または非表示になります。この場合，クライアントセットアップの「処理中ダイアログを表示する」の設定は無効になります。

(2) ダイアログを表示するプログラム

処理中ダイアログの表示方法を「プログラム指定」とした場合に，ダイアログを表示するためのプログラム名を指定します。ユーザが作成したダイアログ表示プログラム（拡張子が exe のプログラムファイル）を，パス名も含めて指定してください。なお，以降で説明するパラメタやタイトルなどの条件に従っていれば，表示される画面はダイアログでなくてもかまいません。

指定したユーザプログラムが，設定ミスなどによって正しく表示されない場合でも，ユーザプログラムの動作に関係なく処理は続行されます。

各ダイアログボックスを表示する際に，ダイアログ表示プログラムに渡される引数（NULL で終わる文字列）の形式を次に示します。ユーザプログラム作成時の参考にしてください。

形式

```
パラメタ１△パラメタ２△パラメタ３△パラメタ４
```

（凡例）△：スペース

パラメタ 1

最前面表示オプション（半角で 1 文字）

1：最前面表示をしません。
2：最前面表示をします。

パラメタ 2

処理中ダイアログの種別（半角で 1 文字）
1：ダウンロード中ダイアログ
2：インストール中ダイアログ
3：ソフトウェア検索中ダイアログ
5：接続中ダイアログ

パラメタ 3 およびパラメタ 4

パラメタ 3 およびパラメタ 4 の内容は，パラメタ 2 の指定によって次のように異なります。

パラメタ 2	パラメタ 3	パラメタ 4
1	パッケージ識別 ID（半角で 1 ～ 44 文字）	パッケージ名称（半角で 1 ～ 50 文字）
2	パッケージ識別 ID（半角で 1 ～ 44 文字）	パッケージ名称（半角で 1 ～ 50 文字）
3	ホスト名または IP アドレス（半角で 1 ～ 256 文字）	(null)
5	(null)	(null)

注 「(null)」は，値がないことを示す文字列です（半角で 6 文字）。

指定例

表示するダイアログボックスごとの指定例を次に示します。

- **ダウンロード中ダイアログ**
  1 1 パッケージ識別 ID パッケージ名称
- **インストール中ダイアログ**
  （最前面表示をしない場合）
  1 2 パッケージ識別 ID パッケージ名称
  （最前面表示をする場合）
  2 2 パッケージ識別 ID パッケージ名称
- **ソフトウェア検索中ダイアログ**
  1 3 ホスト名 (null)
- **接続中ダイアログ**
  1 5 (null) (null)

なお，ユーザプログラム作成時，表示させるダイアログボックスのウィンドウ名は次のようにしてください。これ以外のウィンドウ名を設定すると，ダイアログボックスを非表示にできなくなります。また，ウィンドウ名内のかたかなは，半角で作成してください。

- ダウンロード中ダイアログ：[NETM/DM - ダウンロード]

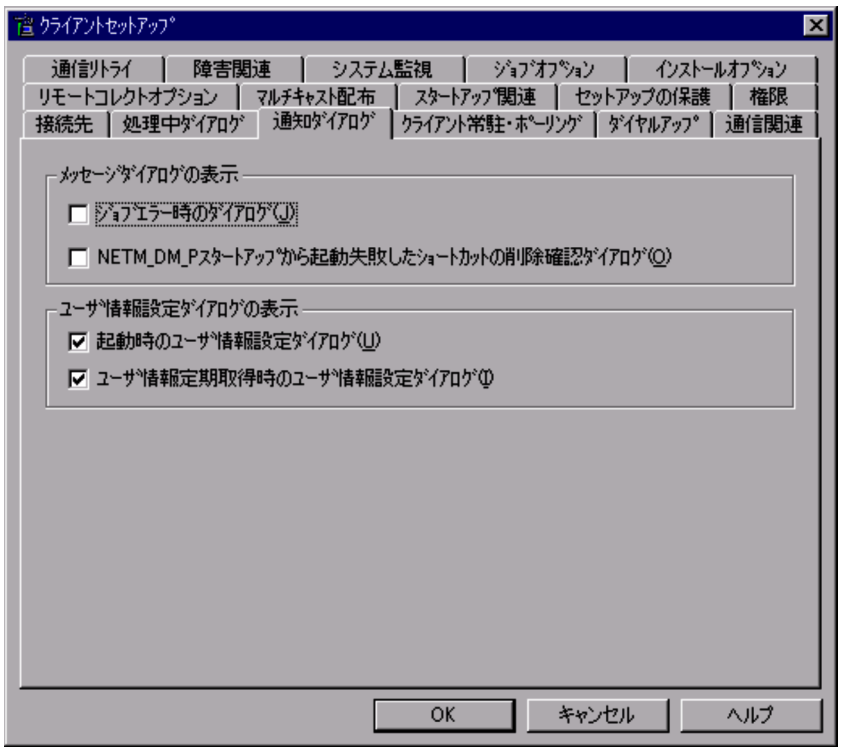
- インストール中ダイアログ：［NETM/DM - インストール］
- ソフトウェア検索中ダイアログ：［NETM/DM - ソフトウェア情報取得］
- 接続中ダイアログ：［NETM/DM - 接続中］

ダイアログボックスの表示停止は，JP1/NETM/DM からユーザプログラムに対して PostMessage 関数（WN_CLOSE 指定）を発行して指示します。また，Windows の場合は，PostMessage 関数を発行したあと，TerminateProcess 関数を発行してユーザプログラムのプロセスを停止します。

6.2.3 ［通知ダイアログ］パネル

各種メッセージダイアログボックス，および［JP1/NETM/DM ユーザ情報設定］ダイアログボックスを表示するかどうかを設定します。

図 6-3 ［通知ダイアログ］パネル



（1） メッセージダイアログの表示

ジョブエラー時のダイアログ

配布管理システムまたは中継システムからのジョブが失敗した場合に，クライアント側でエラーダイアログボックスを表示するかどうかを指定します。エラーダイアログボックスを表示させるには，チェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

NETM_DM_P スタートアップから起動失敗したショートカットの削除確認ダイアログ

クライアントの［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダに存在するアイコンやショートカットの実行ファイルがすでにアンインストールされていると，アイコンやショートカットが実行できないことがあります。

この場合，実行できないアイコンやショートカットを削除するかどうかを確認するダイアログボックスを表示させることができます。ダイアログボックスを表示させるには，チェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオフです。

（2）ユーザ情報設定ダイアログの表示

起動時のユーザ情報設定ダイアログ

配布管理システムから，ユーザ情報の入力を依頼された（入力項目一覧を配布された）とき，システム起動時に自動的に［JP1/NETM/DM ユーザ情報設定］ダイアログボックスを表示するかどうかを指定します。デフォルトはチェックボックスがオンです。

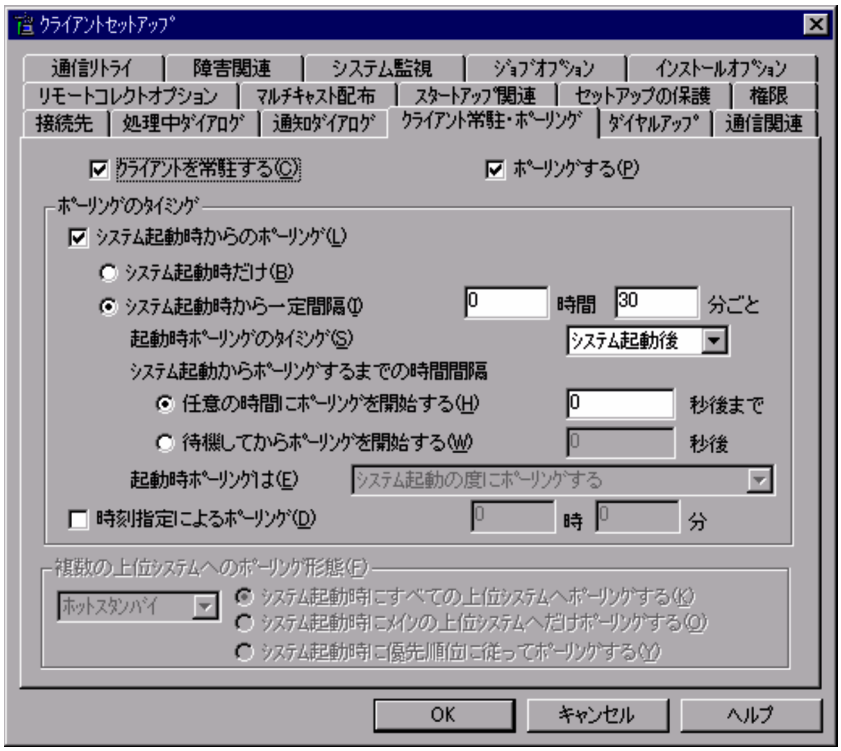
ユーザ情報定期取得時のユーザ情報設定ダイアログ

配布管理システムから「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブが定期的に実行される場合，ジョブが実行されるたびに［JP1/NETM/DM ユーザ情報設定］ダイアログボックスを表示するかどうかを指定します。デフォルトはチェックボックスがオンです。

6.2.4 ［クライアント常駐・ポーリング］パネル

クライアントを常駐させるかどうか，およびポーリングをするかどうかを設定します。ポーリングをする場合は，ポーリングのタイミングについても設定します。

図 6-4 ［クライアント常駐・ポーリング］パネル



クライアントを常駐する

クライアントを常駐させるかどうかを設定します。デフォルトは「クライアントを常駐する」チェックボックスがオンです。ただし，ネットワーク環境によってデフォルトが変わることがあります。

クライアントを常駐させ，接続先からの指示によって要求処理を実行するのが，通常のクライアントの運用です。しかし，その場合，ユーザが別の作業を行っていても，他社ソフトウェアのインストールが開始されたら作業を中断しなければなりません。また，クライアントを起動していると，クライアントを使用していないときでもメモリや CPU を使用してしまいます。クライアントを常駐させないことで，このような問題を回避することができます。

ただし，クライアントを常駐させない場合，クライアントが自動的にポーリングを行うのはシステム起動時だけとなります。クライアントを常駐しないシステム起動中にポーリングの必要が発生した場合は［ジョブ実行］アイコンを起動してポーリングしてください。

この項目は，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは設定できません。デフォルトで常駐になります。

ポーリングする

ポーリング（配布管理システムからの指示の監視）するかどうか設定します。

通常，配布管理システムからの指示によって，クライアントは要求された処理を実

行します。しかし，通信障害や，クライアントの PC が起動していなかったなどの要因で，配布管理システムからの指示が届かない場合があります。このようなとき，ポーリングすることで，指示を受信するようになります。クライアント制御を利用する場合は，ポーリングすることをお勧めします。また，低速な WAN を使用している場合は，ポーリングしないことで，むだなデータ送受信を少なくすることができます。

デフォルトは「ポーリングする」チェックボックスがオンです。ポーリングする場合は，さらにポーリングのタイミングを設定します。

（1）ポーリングのタイミング

ポーリングのタイミングを設定します。デフォルトは「システム起動時からのポーリング」です。

システム起動時からのポーリング

システム起動時を基準としたポーリングをする場合にチェックボックスをオンにしてください。さらに，ポーリング方法を「システム起動時だけ」と「システム起動時から一定間隔」から選択してください。

デフォルトは「システム起動時から一定間隔」です。デフォルトのポーリングの間隔は，プログラムによって異なります。

- JP1/NETM/DM Manager **および** JP1/NETM/DM Client**（中継システム）のクライアント機能のセットアップの場合**

  2 時間ごとにポーリングします。

- JP1/NETM/DM Client**（クライアント）のセットアップの場合，インストールセットへのセットアップ情報設定の場合**

  30 分ごとにポーリングします。ただし，ネットワーク環境によってデフォルト値が変わることがあります。

システム起動時だけ

システム起動時に 1 回だけポーリングします。

システム起動時から一定間隔

一定の間隔でポーリングします。ポーリングの間隔は 1 分～ 12 時間で指定できます。ネットワークの負荷を軽くするため，できるだけ大きな値を指定してください。

この値は，通信障害などが発生して，リモートインストールの指示がクライアントで認識できなかったときに，障害回復を監視するためのタイマ値として使用されます。

起動時ポーリングのタイミング

システム起動時のポーリングのタイミングを，「システム起動前」にするか「システム起動後」にするかを選択します。ジョブ実行時にクライアントが起動していなかった場合，この設定によって，「システム起動時インストール」が設定されたパッケージのインストールタイミングを制御できます。デフォルトは「システム起動後」です。

- **「システム起動前」を指定した場合**

クライアントのシステムを起動したとき，先にポーリングしてから，ダウンロード済みのパッケージのインストール処理をします。
システム起動時のポーリングで「システム起動時インストール」が設定されたパッケージをダウンロードすると，その直後にインストールします。そのため，1 回のシステム起動でインストールが完了します。

- **「システム起動後」を指定した場合**
  クライアントのシステムを起動したとき，ダウンロード済みのパッケージのインストール処理をしたあとに，ポーリングします。
  システム起動時のインストール処理終了後に，ポーリングによって「システム起動時インストール」が設定されたパッケージをダウンロードすると，このパッケージは，2 回目のシステム起動時にインストールされます。

「システム起動前」を指定すると，1 回のシステム起動でインストールが完了するメリットがあります。しかし，［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダにプログラムを登録している場合，これらのプログラムは，ポーリングによってダウンロードされたパッケージのインストール後に起動されるため，起動が遅くなります。
［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダに登録したプログラムの起動を早くしたい場合は，「システム起動後」を指定してください。その場合，これらのプログラムはポーリングを待たないで起動します。
ポーリングの設定によるインストールタイミングの違いについては，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.2.2　システム起動時インストールのための準備」を参照してください。

システム起動からポーリングするまでの時間間隔

システムを起動してからポーリングを開始するまでの時間とタイミングを指定します。

任意の時間にポーリングを開始する

クライアントが起動してから，指定した秒数が経過するまでの任意のタイミングでポーリングします。ポーリングする時間を 0 ～ 300 秒で指定します。デフォルトは 0 秒です。0 を指定すると，起動と同時にポーリングを開始します。
複数の PC が同時に起動した場合でも，同時に上位システムへ接続することがなくなり，ネットワークへの負荷が分散されます。上位システムに接続する PC の台数が多くてシステム能力が追い付かない場合，またはネットワークに負荷が掛かり過ぎる場合は，時間間隔の設定値を大きくすることで負荷を軽くできます。

待機してからポーリングを開始する

クライアントが起動してから，指定した秒数が経過するまでクライアントが待機したあとにポーリングを開始します。クライアントが待機する時間を 0 ～ 7,200 秒で指定します。デフォルトは 0 秒です。0 を指定すると，起動と同時にポーリングを開始します。
IEEE802.1X を使用した，ネットワーク接続時にユーザ認証が必要な環境などで，クライアントが上位システムと接続されてからポーリングを開始するよう，

ポーリングのタイミングを遅らせることができます。
なお，このような環境では，OS 起動からログインまでに掛かる時間を目安に待機する時間を設定してください。

起動時ポーリングは

ポーリング方法に「システム起動時だけ」を選択し，「起動時ポーリングのタイミング」に「システム起動前」を指定した場合に，「システム起動の度にポーリングする」か，「初回システム起動時のみポーリングする（1 日一回）」かを指定できます。デフォルトは「システム起動の度にポーリングする」です。なお，この項目は，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは設定できません。

時刻指定によるポーリング

1 日に 1 回，決まった時刻にポーリングする場合にチェックボックスをオンにしてください。チェックボックスをオンにした場合は，ポーリングの実行時刻を指定してください。ただし，1 日 1 回の設定でポーリングを実行したあとにポーリング実行時刻を変更した場合，変更後の実行時間がきても，その日はポーリングが再実行されません。
なお，時刻指定によるポーリングは，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは設定できません。

（2）複数の上位システムへのポーリング形態

ポーリング対象の上位システムとしている中継システムが障害などで接続できなくなった場合のポーリング形態を指定します。デフォルトは「ホットスタンバイ」です。なお，この項目は JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは設定できません。

この項目は，［接続先］パネルで「複数の上位システムへポーリングする」チェックボックスをオンにした場合に設定します。

ホットスタンバイ

［上位システムの設定］ダイアログボックスで設定した中継システムに対して，優先順位の高いものから順番にポーリングする方法です。接続できた中継システムを，その後のポーリング対象の上位システムと認識します。
ポーリング対象の上位システムが接続できなくなると，そのつど優先順位 1 位の中継システムから順番にポーリングし，ポーリング対象の上位システムを決定します。
ただし，システム起動時（第 1 回目）のポーリング形態だけは次の 3 種類から選択できます。

- システム起動時にすべての上位システムへポーリングする。
- システム起動時にメインの上位システムへだけポーリングする。
- システム起動時に優先順位に従ってポーリングする。

デフォルトは「システム起動時にすべての上位システムへポーリングする」ですが，ネットワーク環境によって変わることがあります。

マルチホスト

［上位システムの設定］ダイアログボックスで設定したすべての中継システムに対してポーリングします。

6.2.5 ［ダイヤルアップ］パネル

ダイヤルアップ接続をする場合の設定をします。このパネルは，ダイヤルアップ接続が利用できる環境でだけ表示されます。JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されません。また，インストールセットへのセットアップ情報設定時も表示されません。

図 6-5 ［ダイヤルアップ］パネル



ダイヤルアップ接続

ダイヤルアップ接続を使用する場合にチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオフです。

認証情報

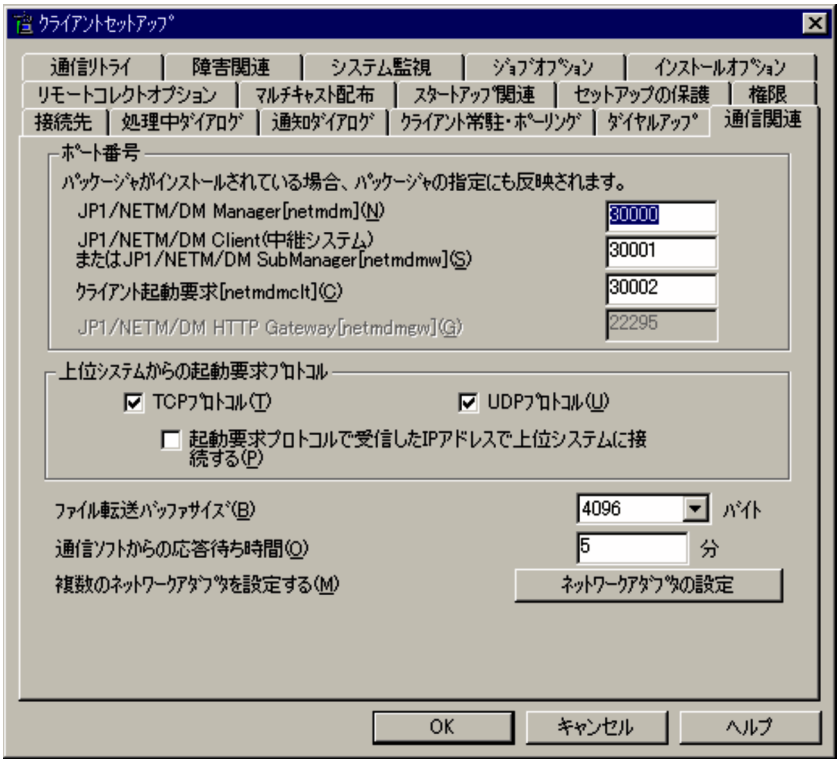
ダイヤルアップ接続時に使用する，ユーザ名，パスワード，およびドメインを設定してください。

なお，ダイヤルアップ接続の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.6 ダイヤルアップ接続の設定」を参照してください。

6.2.6 ［通信関連］パネル

ポート番号と起動プロトコルを設定します。

図 6-6 ［通信関連］パネル



(1) ポート番号

クライアントが通信で使用する，次の 4 種類のポート番号を指定します。

- JP1/NETM/DM Manager（デフォルト：30000）
- JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager（デフォルト：30001）
- クライアント起動要求（デフォルト：30002）
- JP1/NETM/DM HTTP Gateway（デフォルト：22295）

通常は，デフォルト値のままでかまいません。ほかのプログラムと重複するようであれば，変更してください。TCP/IP の services ファイルにクライアントで使用するポート番号を定義している場合は，services ファイルの設定が優先されます。

パッケージャがインストールされている場合，ここで指定した値はパッケージャにも反映されます。

JP1/NETM/DM HTTP Gateway のポート番号は，JP1/NETM/DM HTTP Gateway を利

用する場合にだけ使用されます。詳細については，「付録 E　インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入」を参照してください。

(2) 上位システムからの起動要求プロトコル

上位システムから，自システムに対する実行要求情報を受信するための通信プロトコルを設定してください。次の 2 種類から選択できます。

- UDP プロトコル
- TCP プロトコル

このとき，UDP と TCP の両方のプロトコルを指定できます。ファイアウォールを使用する場合は必ず TCP プロトコルを使用してください。デフォルトは両方のチェックボックスがオンです。

起動要求プロトコルで受信した IP アドレスで上位システムに接続する

上位システムを名前解決できないときにも上位システムに接続できるようにするには，チェックボックスをオンにします。デフォルトはオフです。

運用キーにホスト名を使用していると，検疫システムによってクライアントが DNS サーバへ接続できない環境や，上位システムが複数のネットワークアダプタを使用している環境などでは，クライアントが上位システムを名前解決できない場合があります。このような場合にチェックボックスをオンにすると，上位システムからの実行要求情報を受信したタイミングで実行要求情報中の IP アドレスが保管され，クライアントが上位システムへ接続できるようになります。

クライアントで上位システムを名前解決できない場合の接続設定の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.5.6　上位システムを名前解決できない場合の接続設定」を参照してください。

なお，このチェックボックスは，「TCP プロトコル」または「UDP プロトコル」チェックボックスをオンにした場合に活性化します。中継するシステムのクライアント機能のセットアップでは，常に非活性です。

注意事項

- 運用キーが IP アドレスの場合は設定不要です。
- 上位システムのバージョンが 06-71 より前の場合，チェックボックスをオンにしても正しく接続できません。
- 上位システムがクラスタシステムの場合，正しく接続できないことがあります。
- 実行要求情報の通信プロトコルが UDP の場合，上位システムが複数のネットワークアダプタを使用した環境では，正しく接続できないことがあります。

(3) ファイル転送バッファサイズ

上位システムとのファイル転送に使用するバッファのサイズを指定します。バッファサイズを大きくするほど，転送効率は良くなります。しかし，バッファサイズが大きいと，上位システム側で「バッファサイズ×クライアントの同時接続数」分のメモリが必要で

す。上位システム側のメモリ容量によって調整してください。バッファサイズは，512 ～ 4,096 バイトで指定してください。デフォルトは 4,096 バイトです。

なお，UNIX の NETM/DM 01-09 以前のファイル転送バッファサイズは 1,024 バイトに固定されているため，UNIX の NETM/DM 01-09 以前と接続する場合は 1,024 バイトを超えて指定しても無視されます。

（4）通信ソフトからの応答待ち時間

クライアントが，TCP/IP からの応答を待つ時間を設定します。この設定をすると，クライアントがファイルをダウンロードする処理などを監視できます。

設定した時間を過ぎても TCP/IP からの応答がない場合，通信エラーが発生したものと判断します。

応答待ち時間は，0 ～ 120 分で設定します。デフォルトは 5 分です。0 分を設定した場合は，TCP/IP からの応答を監視しません。

（5）複数のネットワークアダプタを設定する

ネットワークアダプタが複数存在する（複数 LAN 接続）環境で，JP1/NETM/DM で使う通信回線に優先順位を付けたい場合に設定します。この項目は，インストールセットへのセットアップ情報設定時は表示されません。

［ネットワークアダプタの設定］ボタンをクリックすると，［ネットワークアダプタの設定］ダイアログボックスが表示されます。

通常は優先順位が 1 位のネットワークを使い，障害が発生した場合などは，優先順位が 2 位以降のネットワークに切り替えて使いたい場合や，JP1/NETM/DM で使うネットワークを限定したい場合に設定してください。

［ネットワークアダプタの設定］ボタンは次の場合，非活性になります。

- ネットワークアダプタが一つしかない場合
- ダイヤルアップ接続が設定されている場合

図 6-7 ［ネットワークアダプタの設定］ダイアログボックス



使用するネットワークアダプタの優先順位を設定する

ネットワークアダプタが複数ある場合，ネットワークアダプタごとに優先順位を付けたいときにチェックします。デフォルトはチェックボックスがオフです。

ネットワークアダプター覧

一覧には次の項目が表示されます。

- ネットワークアダプタ※
- MAC アドレス
- IP アドレス
- サブネットマスク

注※

［］内の数字は Windows で設定されているバインド順を示します。ただし，Windows のバージョンによってはバインド順でない場合があります。

チェックボックスをオンにすると，JP1/NETM/DM で使用するネットワークアダプタに設定されます。複数チェックした場合は，一覧の上位にあるほど優先順位は高くなります。反対に，一つのネットワークアダプタだけチェックボックスをオンにした場合は，JP1/NETM/DM で専用に使用するネットワークアダプタとして設定されます。なお，使用できないネットワークアダプタは無視されます。

優先順位を変更したい場合は，変更したいネットワークアダプタを選択状態にして，［上へ移動］または［下へ移動］ボタンを使って上下させてください。

ただし，一つのネットワークアダプタに複数の IP アドレスを設定している場合，最後に設定した IP アドレスだけが「ネットワークアダプタ一覧」に表示され，JP1/NETM/DM で使用することができます。

クライアントの IP アドレスとして使用する

優先順位の設定に従って使用するネットワークアダプタの IP アドレスを，クライアントの IP アドレスとして上位システムに通知したいときにチェックしま

す。デフォルトはチェックボックスがオフです。チェックボックスがオフの場合は，Windows で設定されているバインド順で，優先順位が最も高いネットワークアダプタの IP アドレスが上位システムに通知されます。なお，IP アドレスが「0.0.0.0」のネットワークアダプタは無視されます。

注意事項

「使用するネットワークアダプタの優先順位を設定する」をオンにする場合，ホスト名をノード識別キーとして使用することをお勧めします。ノード識別キーとして IP アドレスを使用する場合，ホスト識別子を併用することで運用できますが，上位システムのリモートインストールマネージャで表示される IP アドレスは，ここで指定する「ネットワークアダプター覧」の IP アドレスとは異なることがあります。ただし，「クライアントの IP アドレスとして使用する」のチェックボックスをオンにすることで，ここで指定する「ネットワークアダプター覧」の IP アドレスが上位システムに通知され，リモートインストールマネージャに表示されるようになります。

（6）システム構成を自動登録する

この項目は，次に示す場合に表示されます。

- JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップ
- インストールセットへのセットアップ情報設定時

指定内容については，「6.2.1 ［接続先］パネル」を参照してください。

（7）インベントリ情報も通知する

この項目は，次に示す場合に表示されます。

- JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップ
- インストールセットへのセットアップ情報設定時

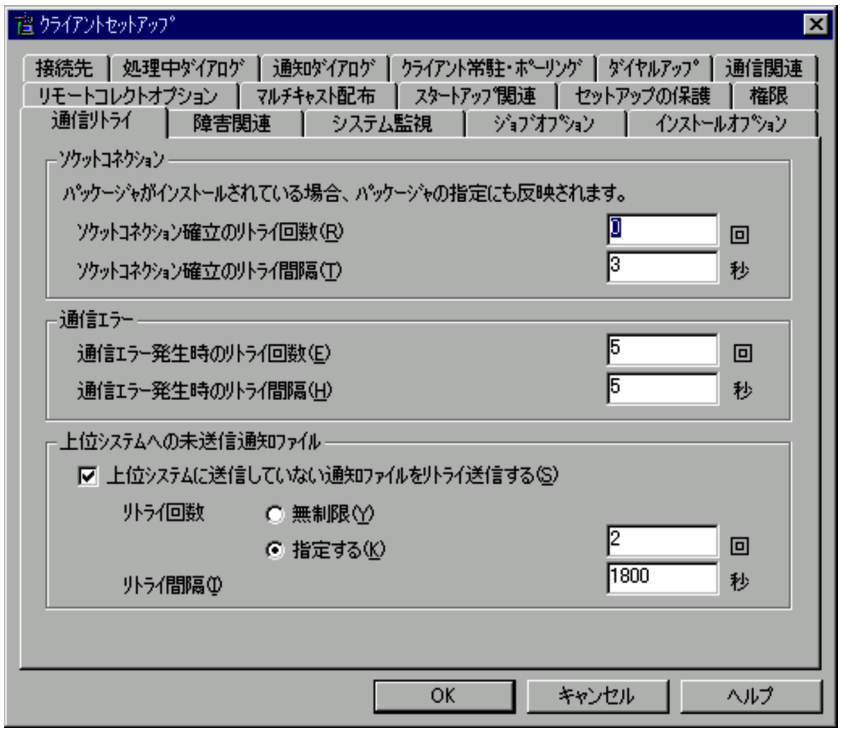
指定内容については，「6.2.1 ［接続先］パネル」を参照してください。

6.2.7 ［通信リトライ］パネル

エラーが発生した場合などの，リトライ回数を指定します。

指定した回数分リトライしても成功しなかった場合は，処理が中断されます。中断された処理は，上位システムへのポーリング，上位システムでのジョブの実行，再実行などを契機に再開されます。

図 6-8 ［通信リトライ］パネル



(1) ソケットコネクション

ソケットコネクション確立のリトライの回数および間隔を指定します。パッケージャがインストールされている場合，このパネルで指定したソケットコネクションの値は，パッケージャにも反映されます。

ソケットコネクション確立のリトライ回数

クライアントが上位システムにソケットコネクションの確立処理を行ってエラーになった場合の，ソケットコネクション確立のリトライ回数を指定します。次に指定する「ソケットコネクションリトライ間隔」の時間ごとに，この指定値の回数分リトライします。リトライ回数は，0 ～ 100 回で指定してください。デフォルトは 0 回です。0 を指定した場合はリトライしません。なお，バージョンアップした場合のデフォルト値は前のバージョンでの回数を引き継ぎます。

ソケットコネクション確立のリトライ間隔

クライアントが上位システムにソケットコネクションの確立処理を行ってエラーになった場合の，ソケットコネクション確立のリトライの間隔を指定します。ここで指定した間隔ごとに，上記の「ソケットコネクションリトライ回数」で指定した回数分リトライします。リトライ間隔は，1 ～ 1,800 秒で指定してください。デフォルトは 3 秒です。

（2）通信エラー

上位システムからクライアントへのファイル転送中に通信障害が発生した場合の，リトライ回数と間隔を指定します。

リトライが実行されると，ファイル転送が中断された時点のファイルから転送が再開されます。通信障害が発生した以前のファイルは再転送されないため，むだな通信量が削減できます。

なお，ここで指定したリトライ回数と間隔は，ユニキャスト配布の場合に有効になります。

通信エラー発生時のリトライ回数

ファイル転送中に通信障害が発生した場合の，リトライの回数を指定します。次に指定する「エラー発生時のリトライ間隔」の時間ごとに，この指定値の回数分リトライします。リトライ回数は，0 ～ 999 回で指定してください。デフォルトは 5 回です。ただし，デフォルトはネットワーク環境によって変わることがあります。

通信エラー発生時のリトライ間隔

ファイル転送中に通信障害が発生した場合の，リトライの間隔を指定します。ここで指定した間隔ごとに，上記の「エラー発生時のリトライ回数」で指定した回数分リトライします。リトライ間隔は，1 ～ 7,200 秒で指定してください。デフォルトは 5 秒です。

（3）上位システムへの未送信通知ファイル

上位システムへ送信していない通知ファイルの送信リトライをするかどうかを選択します。デフォルトは「上位システムに送信していない通知ファイルをリトライ送信する」チェックボックスがオンです。

上位システムに送信していない通知ファイルをリトライ送信する

上位システムへ送信していない通知ファイルがあるかどうかを監視し，あれば送信します。リトライの回数および間隔を指定できます。

リトライ回数

リトライの回数を次の二つから選択します。指定した「リトライ間隔」の時間ごとに，この指定値の回数分リトライします。

・無制限
・指定する

デフォルトは「指定する」です。また，「指定する」を選択した場合，リトライ回数を 1 ～ 300 回で指定できます。JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは，デフォルトは 10 回です。JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップ，およびインストールセットへのセットアップ情報の設定では，デフォルトは 2 回です。

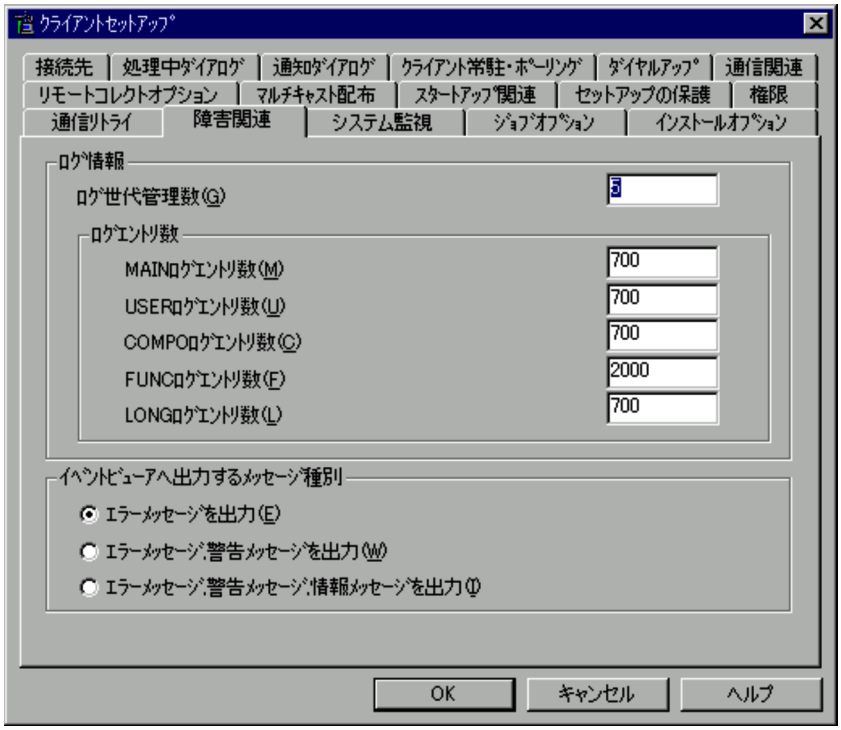
リトライ間隔

リトライの間隔を指定します。300 ～ 3,600 秒で指定できます。デフォルトは JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップの場合は 300 秒です。JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップ，およびインストールセットへのセットアップ情報設定の場合は 1,800 秒です。

6.2.8　［障害関連］パネル

出力するログの世代管理数やエントリ数，イベントビューアへ出力するメッセージ種別を設定します。

図 6-9　［障害関連］パネル



(1) ログ情報

トラブルの分析に役立てるため，インストールディレクトリ ¥log に，情報の種類別にログファイルが出力されます。通常の運用では，デフォルト値を変更する必要はありませんが，ログが増えてディスク容量を圧迫するようであれば，値を調整してください。

ログ世代管理数

各ログを何個まで保存するかを指定します。1 ～ 999 個で指定します。デフォルトは 5 個です。

ログエントリ数

次に示す各ログエントリの出力行数を指定します。500 ～ 9,999 行で指定します。
デフォルト値，および各ログエントリのファイル名を次に示します。

項目	デフォルト値	ファイル名
MAIN ログエントリ数	700	• MAIN.LOG
USER ログエントリ数	700	• BUILD.LOG • SCRIPT.LOG • USER.LOG
COMPO ログエントリ数	700	• API.LOG • ATRFILE.LOG • BSAPI.LOG • CLTPROTO.LOG • DEFAULT.LOG • EXCFILE.LOG • INVENTRY.LOG • MNGFILE.LOG • RDBMENTE.LOG • SCHEDULE.LOG • SERVICE.LOG • SRVSOCK.LOG • STSFILE.LOG • WSH.LOG
FUNC ログエントリ数	2,000	• AMTAPI.LOG • CLIENT.LOG • CLTDEL.LOG • DCMAMT.LOG • DISCVRY.LOG • DLL.LOG • DPT.LOG • MLTPROTO.LOG • NDGMENT.LOG • PSM.LOG • SERVER.LOG • SITE.LOG • SRVAPI.LOG • USER_CLT.LOG • WRAPPER.LOG
LONG ログエントリ数	700	• DUMP.LOG • NODE.LOG • NODEOPR.LOG • RDBSRV.LOG • USERINV.LOG

次に示すログファイルは，ログ世代管理数およびログエントリ数を設定できません。

- ALERTERR.LOG
- ALERTHIS.LOG
- CSVODBC.LOG

- CSVODBCSYS.LOG
- DMOLEDB.LOG
- INVODBC.LOG
- RIMFIND.LOG
- SMART*n*.LOG
- SMC.LOG
- SMCAPP64.LOG
- SMCCMDS.LOG
- SMCCSAPP.LOG
- SMCUAP64.LOG
- SMCUSAPP.LOG

各ログファイルの容量は，次に示す計算式で算出できます。

ログファイルの容量（バイト）＝
（ヘッダ部のサイズ＋（1 エントリのサイズ×エントリ数））×（世代数＋ 1）

ヘッダ部のサイズ：17 バイト

1 エントリのサイズ：192 バイト（LONG ログ以外）または 300 バイト（LONG ログ）

（2） イベントビューアへ出力するメッセージ種別

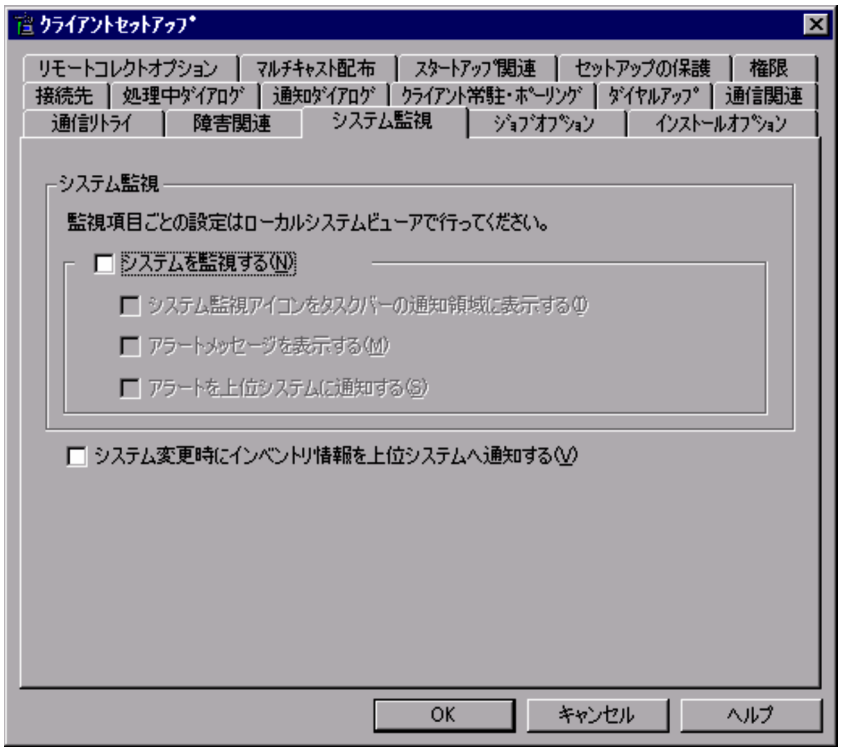
Windows NT のイベントビューアへ出力するメッセージ種別を選択します。次の 3 種類から選択できます。

- エラーメッセージを出力（デフォルト）
- エラーメッセージ，警告メッセージを出力
- エラーメッセージ，警告メッセージ，情報メッセージを出力

6.2.9 ［システム監視］パネル

クライアントが，自 PC のハードウェアを監視する機能を，**システム監視**と呼びます。ここでは，クライアントのシステム監視について設定します。

図 6-10　［システム監視］パネル



システムを監視する

自 PC のハードウェアの状態を監視するかどうかを指定します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。

このチェックボックスをオンにすると，ローカルシステムビューアの［システム監視の状態］パネルに，ハードディスクやメモリの状態を表示できます。また，監視対象で異常を検知したとき，アラートを通知させることができます。

システム監視の対象項目やアラート通知の出力方法の詳細は，［システム監視の条件設定］ウィンドウで設定してください。ただし，クライアントセットアップで「システムを監視する」をオンにしたときだけ，［システム監視の条件設定］ウィンドウでの設定が有効になります。

「システムを監視する」をオンにすると，次に示す三つの設定ができます。

システム監視アイコンをタスクバーの通知領域に表示する

［システム監視］アイコンをタスクバーの通知領域に表示するかどうかを選択します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。

［システム監視］アイコンを表示すると，アイコンの状態によって，システム監視中の有無，およびアラートの有無を確認できます。また，［システム監視］アイコンをダブルクリックするとローカルシステムビューアが起動し，アラートが発生した項目を確認できます。

［システム監視］アイコンの詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.8.3　［システム監視］アイコンの利用」を参照してください。

アラートメッセージを表示する

アラート発生時にポップアップメッセージを表示して，ユーザに通知するかどうかを選択します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。無人の PC をリモートコントロールしている場合は，このチェックボックスをオフにしてください。

なお，［システム監視の条件設定］ウィンドウで，監視項目ごとに設定した「アラートメッセージの表示」オプションを有効にするには，ここで「アラートメッセージを表示する」をオンにする必要があります。

アラートを上位システムに通知する

アラート発生時にアラートメッセージを上位システムに通知するかどうかを選択します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。

この設定は，クライアントが上位システムに接続している場合だけ有効です。

通知された上位システムでは，CSV 形式のアラート情報の履歴ファイル，Windows NT のイベントビューア，または JP1/IM - View の［イベントコンソール］画面でアラートメッセージを確認できます。

なお，［システム監視の条件設定］ウィンドウで，監視項目ごとに設定した「アラートを上位システムへ通知」オプションを有効にするには，ここで「アラートを上位システムに通知する」をオンにする必要があります。

システム変更時にインベントリ情報を上位システムへ通知する

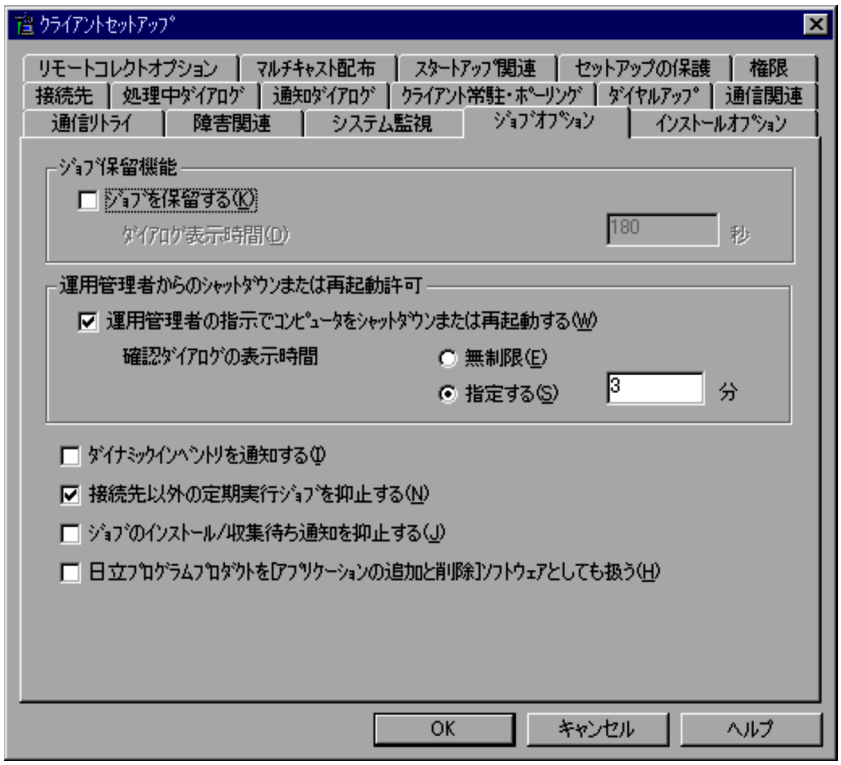
ホスト名の変更やソフトウェアのアンインストールといった，システム情報やソフトウェア情報の更新時に，自動的にインベントリ情報を上位システムへ通知するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオフです。

自動的に上位システムへインベントリ情報を通知する機能，および通知されるインベントリ情報の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「2.13.4(3) 更新されたインベントリ情報の自動通知」を参照してください。

6.2.10 ［ジョブオプション］パネル

ジョブの保留機能や，ジョブ実行時のクライアント制御などを使用するかどうかを設定します。

図 6-11　［ジョブオプション］パネル



（1）ジョブ保留機能

ジョブの保留機能について設定します。ジョブの保留機能の詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「2.13.1(2)(a)　ジョブの保留とキャンセル機能を使用する」を参照してください。なお，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは，表示されるだけで設定はできません。

ジョブを保留する

ジョブの保留機能を使用するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオフです。

ダイアログ表示時間

ジョブの保留・キャンセル機能を使用する場合に，［ジョブの保留・キャンセル］ダイアログボックスの表示時間を設定します。ダイアログボックス上には，実行までの残り秒数が表示されます。

ダイアログボックスに対し，ユーザからの操作がまったくないままこの表示時間が経過して，残り秒数が 0 になると，表示された動作を自動的に実行して，ダイアログボックスが閉じます。

0 ～ 1,800 秒で設定します。デフォルトは 180 秒です。0 秒を設定すると，ユーザが操作するまでダイアログボックスが表示されたままとなります。

（2）運用管理者からのシャットダウンまたは再起動許可

運用管理者は，クライアント制御によってジョブ実行後にコンピュータをシャットダウンするように，ジョブに指定できます。また，パッケージのインストール後にコンピュータを自動的に再起動させるように，パッケージに指定できます。

この項目では，ジョブ実行後のシャットダウンがジョブに指定されていた場合にクライアント側でシャットダウンを許可するか，およびパッケージにインストール後の再起動が指定されていた場合にクライアント側で再起動を許可するかを設定します。また，シャットダウンや再起動を許可する場合の確認ダイアログの動作も設定します。

なお，この項目は，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは設定できません（デフォルトはオフになります）。

運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する

運用管理者が，ジョブ実行後のシャットダウンやパッケージインストール後の再起動を指定した場合に，指示に従ってシャットダウンや再起動をするかを設定します。デフォルトはチェックボックスがオンです。
運用管理者が無人の PC をクライアント制御によって起動し，ジョブを実行する場合は，指示に従ってシャットダウンするようにチェックボックスをオンにします。常時起動している PC の場合には，チェックボックスをオフにしてください。
また，運用管理者の指示に従って，パッケージのインストール後にコンピュータを自動的に再起動したい場合は，チェックボックスをオンにしてください。
なお，「運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する」チェックボックスを選択した場合，シャットダウンまたは再起動の前に確認ダイアログボックスが表示されます。

確認ダイアログの表示時間

「運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する」をオンにした場合，シャットダウンまたは再起動の前に表示される確認ダイアログボックスの表示時間を指定します。クライアントで確認ダイアログボックスを表示してからここで指定した時間を過ぎた場合，シャットダウンまたは再起動を開始します。1 ～ 60 分で指定します。デフォルトは 3 分です。「無制限」を指定した場合は，ユーザの入力があるまでシャットダウンまたは再起動は開始されません。また，クライアントのパッケージセットアップマネージャからジョブを実行した場合は，ここで表示時間を指定しても，ユーザの入力があるまでシャットダウンまたは再起動は開始されません。

クライアント制御によるコンピュータのシャットダウンについては，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.3.3　シャットダウン時の注意事項」を参照してください。また，コンピュータの自動的な再起動については，マニュアル「運用ガイド 1」の「2.2.8 ［オプション］パネル」を参照してください。

（3）ダイナミックインベントリを通知する

インストールを実行したことで変化する，自システムのハードディスクの空き容量などの情報を，インストール結果とともに上位システムへ通知するかどうかを指定します。ダイナミックインベントリの通知をすると，1 回のインストール指示ごとに 500 バイト程度の通信量が増加します。デフォルトはチェックボックスがオフです。

（4）接続先以外の定期実行ジョブを抑止する

「システム情報の取得」，「ソフトウェア情報の取得」，および「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブのうち，「毎日実行」，「毎週実行」または「毎月実行」のようにクライアントでの定期的な実行を設定されたジョブを**定期実行ジョブ**と呼びます。

この定期実行ジョブは，そのジョブが実行された接続先へ定期的に実行結果を通知します。そのため，移動などによってクライアントが接続先と通信できない環境になっても実行結果を通知しようとします。このような場合，このチェックボックスをオンにすると変更後の接続先以外への定期実行ジョブの実行を抑止でき，不要な通信を止めることができます。

デフォルトはチェックボックスがオンです。

このオプションを設定しても抑止されないで実行される定期実行ジョブを，製品種別や設定条件別に示します。

製品種別と設定条件			抑止対象外の定期実行ジョブ
クライアント	複数の上位システムへのポーリング	なし	変更後の接続先のジョブ
		あり	変更後の接続先，かつ複数の上位システムのジョブ
中継システム			変更後の接続先，かつ中継システム自身のジョブ
中継マネージャ			変更後の接続先，かつ中継マネージャ自身のジョブ

なお，このオプション使用時の注意事項を次に示します。

● 接続先を変更しても同じジョブを実行したい場合

「接続先以外の定期実行ジョブを抑止する」の設定がオンになっている場合，接続先を変更すると変更前の接続先への定期実行ジョブは実行されません。変更後の接続先へ同じ定期実行ジョブの実行を希望する場合は，次のように運用してください。

- **ID ジョブによる運用時（同じ ID を使ったネットワーク内での接続先の変更）**

  「システム構成変更時の連携」ありの場合

  クライアントで接続先を変更しても ID と連携するため，同じ定期実行のジョブが実行されます。

  「システム構成変更時の連携」なしの場合

  クライアントで接続先を変更後，ID への登録を再度実行してください。
- **あて先グループによる運用時**

変更後の接続先システムで定期的に定期実行ジョブを削除および実行してください。

● オフラインマシンで使用する場合

オフラインマシンで接続先以外からの定期実行ジョブを抑止し，接続先からの定期実行ジョブを実行したい場合は，hosts ファイルに接続先のホスト名および IP アドレスを設定して，アドレス解決できる状態にしてください。アドレス解決できないときは，接続先からの定期実行ジョブも抑止されます。

アドレス解決できない場合に定期実行ジョブを実行したいときは，チェックボックスをオフにしてください。ただし，接続先以外からの定期実行ジョブを抑止できなくなります。

● 完了しないジョブの発生

定期実行ジョブを抑止するタイミングによっては，ジョブが一度も実行されないまま抑止されるおそれがあります。その場合，配布管理システムではジョブ実行状況が 70% のままとなり，完了しません。

(5) ジョブのインストール / 収集待ち通知を抑止する

クライアントにジョブが配布されたとき，ジョブの実行状態が「インストール / 収集待ち」であることを上位システムに通知することがあります。通知された上位システムは，［ジョブ実行状況］ウィンドウでこのジョブの実行状態を「インストール / 収集待ち」に変更します。通常，ジョブの配布完了後，インストールや収集の完了（またはエラー）を上位システムに通知するまでに間があるため，通知ごとに［ジョブ実行状況］ウィンドウの表示が変わります。

しかし，「インストール / 収集待ち」の通知の直後に「完了」または「エラー」の通知をする場合もあります。このような場合，このチェックボックスをオンにすると「インストール / 収集待ち」の通知をしません。「インストール / 収集待ち」の通知をしないと，通知 1 回につき 170 バイト（ID ジョブの場合 340 バイト）の通信量が削減できるため，ネットワークの負荷を軽減できます。また，上位システムでのジョブ実行状態の更新処理も削減できます。デフォルトはチェックボックスがオフです。

「インストール / 収集待ち」の通知を抑止できるジョブの種類は，次のとおりです。

- パッケージのインストール
- リモートコレクト
- 中継までのリモートコレクト
- システム情報の取得
- ソフトウェア情報の取得
- ユーザインベントリ情報の取得

これらのジョブの実行時に次表の「ジョブの指定」をした場合で，かつ「抑止する条件」をすべて満たしたとき「インストール / 収集待ち」の通知が抑止されます。抑止する条件は，ジョブの指定の組み合わせによって異なります。

ジョブの指定			抑止する条件
「インストール日時」	「システム起動時インストール」	「GUI インストールモード」	
○※1	×	×	• ジョブの配布が完了した時点で指定日時が経過した。
×	○	×	• クライアントで「起動時ポーリングのタイミング」に「システム起動前」を設定した。 • 起動時ポーリング時にジョブが配布された。
○	○	×	• クライアントで「起動時ポーリングのタイミング」に「システム起動前」を設定した。 • 起動時ポーリング時にジョブが配布された。 • ジョブの配布が完了した時点で指定日時が経過した。
×	×	○※2	• ジョブの配布が完了した時点でクライアントがログオン済み。
○	×	○※2	• ジョブの配布が完了した時点で指定日時が経過した。 • ジョブの配布が完了した時点でクライアントがログオン済み。
×	○	○※2	• クライアントで「起動時ポーリングのタイミング」に「システム起動前」を設定した。 • 起動時ポーリング時にジョブが配布された。 • ジョブの配布が完了した時点でクライアントがログオン済み。
○	○	○※2	• クライアントで「起動時ポーリングのタイミング」に「システム起動前」を設定した。 • 起動時ポーリング時にジョブが配布された。 • ジョブの配布が完了した時点で指定日時が経過した。 • ジョブの配布が完了した時点でクライアントがログオン済み。

（凡例）○：指定する　×：指定しない

注※1

「リモートコレクト」ジョブおよび「中継までのリモートコレクト」ジョブは抑止の対象外です。

注※2

「パッケージのインストール」ジョブの場合だけ抑止の対象になります。

（6）日立プログラムプロダクトを［アプリケーションの追加と削除］ソフトウェアとしても扱う

日立プログラムプロダクトのソフトウェア情報は，種別が「日立プログラムプロダクト」のインストールパッケージとして上位システムに通知されます。そのため，「アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索」が指定された「ソフトウェア情報の取得」ジョブを受信しても，日立プログラムプロダクトの情報は通知されません。

チェックボックスをオンにすると，［コンロトールパネル］の［アプリケーションの追加と削除］または［プログラムの追加と削除］に登録されている日立プログラムプロダクトの情報が，「アプリケーションの追加 / 削除」のインストールパッケージとして通知されるようになります。これによって，［コンロトールパネル］の［アプリケーションの追加と削除］または［プログラムの追加と削除］に登録されているソフトウェア情報を，日立プログラムプロダクトを含めて一括して取得できるようになります。デフォルトはチェックボックスがオフです。

なお，チェックボックスをオンにした場合，次の操作は実行しないでください。日立プログラムプロダクトの情報が「日立プログラムプロダクト」としても通知されるようになり，上位システムで管理するソフトウェア情報が重複してしまいます。

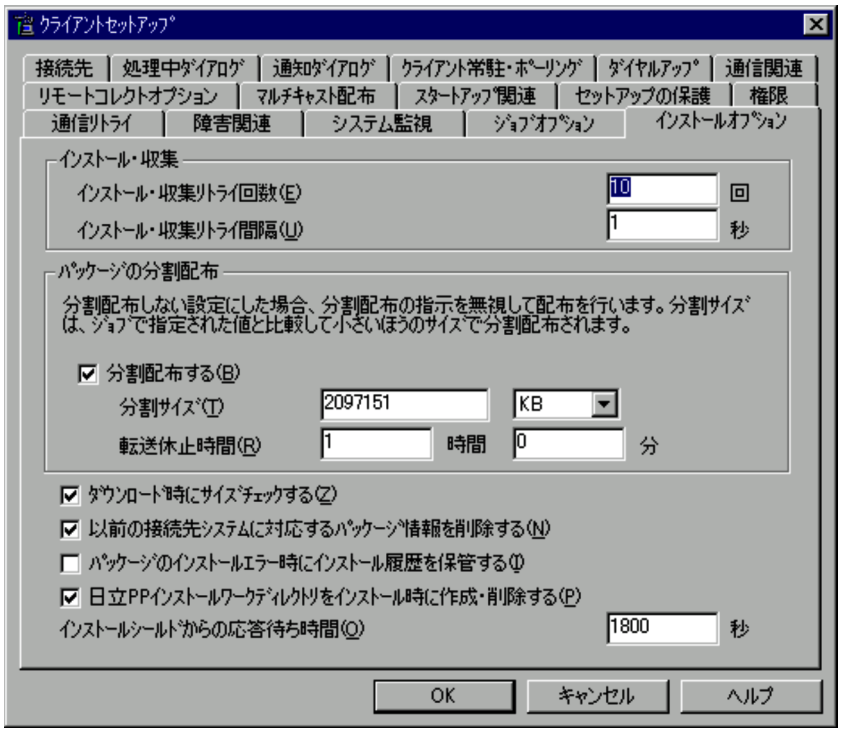
- 配布管理システムから，「すべてのソフトウェアを検索」を指定してソフトウェア情報を取得する。
- クライアントで，パッケージセットアップマネージャの［実行］－［ソフトウェア情報収集］を実行する。

JP1/NETM/Asset Information Manager と連携している場合，インストールパッケージ情報が重複すると，JP1/NETM/Asset Information Manager 上で情報を正しく管理できなくなるおそれがあります。

6.2.11 ［インストールオプション］パネル

リモートインストール中にエラーが発生した場合のリトライ回数や，パッケージを分割配布するかどうかなどを設定します。

図 6-12　［インストールオプション］パネル



(1) インストール・収集

ユーザプログラム・データのリモートインストールまたはリモートコレクトの処理中にエラーが発生した場合の，リトライの回数および間隔を指定します。

インストール・収集リトライ回数

0 ～ 100 回で指定します。デフォルトは 10 回です。0 を指定した場合はリトライしません。

インストール・収集リトライ間隔

0 ～ 3,600 秒で指定します。デフォルトは 1 秒です。0 を指定した場合は間隔を置かないでリトライします。

(2) パッケージの分割配布

「分割配布する」チェックボックスをオンにすると，配布されたパッケージがここで指定したサイズより大きい場合に，ここで指定したサイズに分割されて配布されます。また，分割配布のパッケージが配布される場合でも，配布元の分割サイズがここで指定したサイズよりも大きいパッケージの場合は，ここで指定したサイズに分割されて配布されます。ネットワークの負荷を軽減したい場合に設定してください。デフォルトは，チェックボックスがオンです。

なお，分割配布のパッケージが配布されても，このチェックボックスがオフの場合には，

分割配布されません。

分割サイズ

パッケージを分割するサイズを指定します。分割配布の実行時に，ここで設定した分割サイズと配布されるパッケージのサイズを比較して，小さい方のサイズに分割されて配布されます。指摘できる範囲は次のとおりです。デフォルトは 2,097,151 キロバイトです。

- キロバイトで指定する場合：1 ～ 2,097,151
- メガバイトで指定する場合：1 ～ 2,047

なお，分割サイズは転送するパッケージごとに適用されます。したがって，複数のパッケージを一括して転送する場合でも，個々のパッケージのサイズが分割サイズに満たないパッケージは，分割配布の対象にはなりません。

転送休止時間

分割したパッケージが転送される場合に，転送と転送の間にインターバルを設定できます。1 分～ 24 時間で指定します。デフォルトは 1 時間です。

転送休止時間は，配布元と配布先の分割サイズを比較して，小さい値の分割サイズが指定された側の転送休止時間が有効になります。分割サイズが同じだった場合は，配布先の転送休止時間が有効になります。

（3）ダウンロード時にサイズチェックする

リモートインストールによる，パッケージのダウンロード時に，自システムの空き容量をチェックするかどうかを選択します。サイズチェックをして，空き容量がなかった場合，上位システムにエラーを通知します。デフォルトはチェックボックスがオンです。

（4）以前の接続先システムに対応するパッケージ情報を削除する

セットアップで接続先のシステムを変更した場合に，以前の接続先システムに対応したパッケージ情報を削除するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオンです。接続先システムをたびたび変更するシステムでは，パッケージ情報が蓄積されてハードディスクの容量を圧迫することがあるので，以前の接続先システムに対するパッケージ情報を削除するよう設定してください。

複数システムと接続している場合は，チェックボックスをオンにしても，接続先システムとして指定されているシステムに対応したパッケージ情報は削除されません。

なお，この項目は JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されるだけで設定はできません。

（5）パッケージのインストールエラー時にインストール履歴を保管する

パッケージを上書きインストールしようとしてエラーとなったときに，上書きされる側のインストール済みパッケージの情報を保管するかどうかを選択します。デフォルトはチェックボックスがオフです。パッケージをインストールする際にソフトウェア条件を設定したい場合は，チェックボックスをオンにしてください。

● チェックボックスがオフの場合

上書きされる側のインストール済みパッケージの情報が，エラー時に削除されます。上書きインストールの際にエラーが発生すると，インストール済みだったパッケージ（ソフトウェア）が正常に動作するかどうか保証できなくなるためです。

パッケージの情報の削除に伴い，エラー発生後は，ソフトウェア条件を設定してパッケージをインストールできなくなります。また，パッケージセットアップマネージャでは，インストール済みだったパッケージの表示がインストールされていない状態に変わります。

なお，チェックボックスがオフの場合で，上書きインストールしようとしてエラーが発生したときは，それ以降，削除されたパッケージのバージョンまたは世代番号をソフトウェア条件に設定してインストールできなくなります。インストールするには，次の手順を実施してください。

1.「パッケージのインストールエラー時にインストール履歴を保管する」のチェックボックスをオンにする。
2. クライアントを再起動する。
3. ソフトウェア条件を設定しないで，インストール済みだった（情報が削除された）パッケージを再度インストールする。
4. ソフトウェア条件を設定してパッケージをインストールする。

● チェックボックスがオンの場合

上書きされる側のインストール済みパッケージの情報が，エラー発生後も保管されます。したがって，エラー発生後も，ソフトウェア条件を設定してパッケージをインストールできます。また，パッケージセットアップマネージャでのインストール済みパッケージの表示は変わりません。

なお，チェックボックスがオンの場合で，ソフトウェア条件を設定しないで上書きインストールしようとしてエラーが発生したときは，それ以降，インストールされていたパッケージを再度インストールする際に，［インストール条件の変更］ダイアログボックスの［システム条件］パネルで，「同じパッケージがあったら上書き」のチェックボックスをオンにしてください。

（6）日立 PP インストールワークディレクトリをインストール時に作成・削除する

日立プログラムプロダクトをインストールしたあと，「日立 PP インストールワークディレクトリ」（NETMDMWK ディレクトリ）を削除するかどうかを選択できます。ディレクトリを削除する場合は，「日立 PP インストールワークディレクトリをインストール時に作成・削除する」チェックボックスをオンにします。デフォルトはオンです。

この設定をオンにした場合の注意事項を次に示します。

- インストールセットのセットアップ情報では，設定できません。
- Windows NT の場合，作成したドライブの「読み取り」，「書き込み」および「削除」のアクセス権が必要です。これらのアクセス権が設定されていないと日立プログラムプロダクトのインストールが失敗します。
- 設定した場合でも，インストール後に NETMDMWK ディレクトリが残る場合があり

ます。その場合，PC の再起動時，またはポーリング時に削除されます。

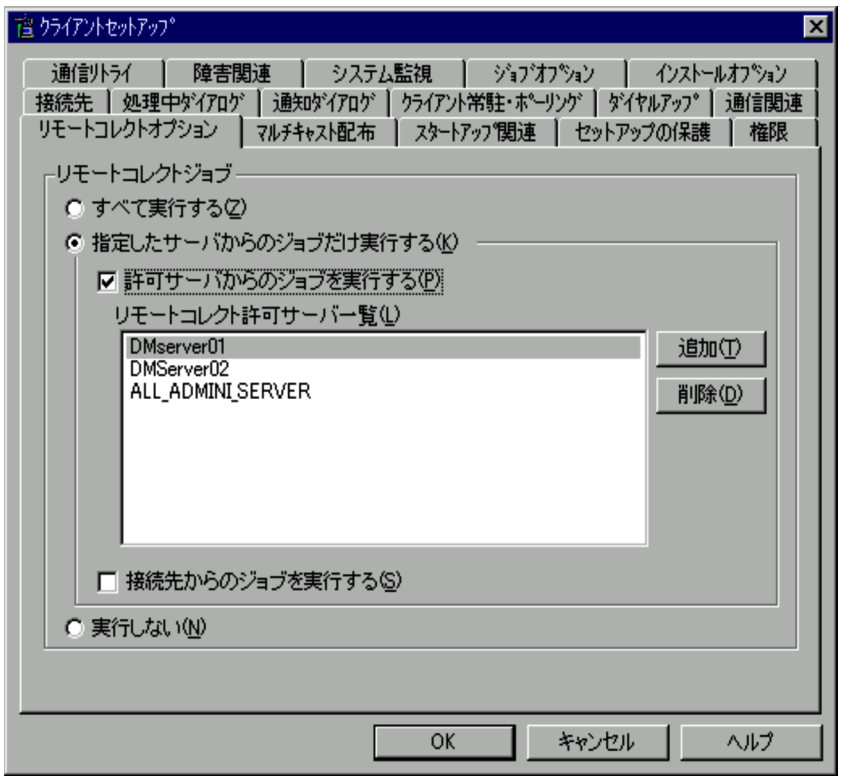
（7）インストールシールドからの応答待ち時間

日立プログラムプロダクトをリモートインストールした場合に，インストールシールドからの応答を待つ最大時間を設定します。この時間を過ぎてもインストールシールドから応答がない場合は，上位システムにエラーを通知します。180 ～ 7,200 秒で設定します。デフォルトは 1,800 です。

6.2.12 ［リモートコレクトオプション］パネル

クライアントで実行されるリモートコレクトのジョブを制限するかどうかを設定します。

図 6-13 ［リモートコレクトオプション］パネル



制限の対象となるリモートコレクトのジョブを次に示します。

- リモートコレクト
- 中継までのリモートコレクト
- 中継サーバからのコレクトファイル収集
- 中継サーバのコレクトファイル削除

設定は，「すべて実行する」，「指定したサーバからのジョブだけ実行する」，および「実

行しない」から選択できます。デフォルトは「すべて実行する」です。

すべて実行する

上位システムからのリモートコレクトのジョブをすべて実行させたい場合に指定します。

指定したサーバからのジョブだけ実行する

特定の上位システムからのリモートコレクトのジョブだけを実行させたい場合に指定します。指定の方法は，上位システムを直接指定する方法と上位接続先だけを指定する方法があります。

許可サーバからのジョブを実行する

「リモートコレクト許可サーバ一覧」に指定できる上位システムは最大 8 個です。［追加］ボタンをクリックすると［リモートコレクト許可サーバ］ダイアログボックスが表示されます。ホスト名または IP アドレスで上位システムを指定します。指定できるホスト名または IP アドレスは半角で 64 文字までです。

「リモートコレクト許可サーバ一覧」で上位システムを選択状態にして［削除］ボタンをクリックすると一覧から上位システムを削除できます。

接続先からのジョブを実行する

［接続先］パネルで指定した上位接続先および複数の上位システムからのリモートコレクトのジョブだけを実行させたい場合に指定します。［接続先］パネルで指定されていないシステムからのジョブは実行されません。

実行しない

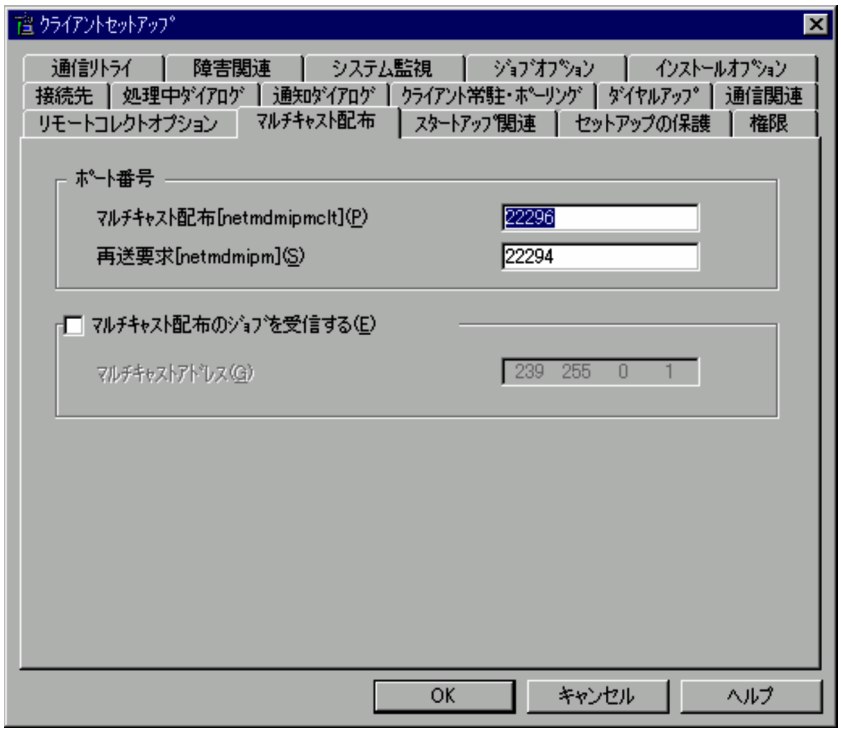
上位システムからのリモートコレクトのジョブを一切実行させたくない場合に指定します。

なお，［接続先］パネルの［実行要求を送信した上位システムを接続先に自動設定する］機能によって接続先が変更され，かつ［上位システム一覧］に新しい接続先が設定されていない場合でも，新しい接続先は一覧に自動追加されません。

6.2.13 ［マルチキャスト配布］パネル

ジョブをマルチキャスト方式で上位のシステムから受信する場合の設定です。このパネルでの設定は，「マルチキャスト配布」が指定されたジョブに対して適用されます。

図 6-14 ［マルチキャスト配布］パネル



(1) ポート番号

ジョブをマルチキャスト配布で受信するために使用する，次の 2 種類のポート番号を設定します。

- マルチキャスト配布（デフォルト：22296）
- 再送要求（デフォルト：22294）

通常はデフォルトで表示されるポート番号を使用しますが，ほかのプログラムと重複するときは変更してください。マルチキャスト配布は UDP プロトコルを使用するため，配布中にパケットの再送が起こります。そのため，「再送要求」のポート番号も設定が必要です。

なお，TCP/IP の services ファイルにポート番号を設定しているときは，services ファイルの設定が有効になります。

(2) マルチキャスト配布のジョブを受信する

「マルチキャスト配布」が指定されたジョブを，上位のシステムからマルチキャスト方式で受信する場合に選択します。デフォルトはチェックボックスがオフです。ジョブをマルチキャスト方式で受信したい場合は，このチェックボックスをオンにして，接続先の上位システムに設定されたマルチキャストアドレスと同じ値を設定してください。

「マルチキャスト配布のジョブを受信する」チェックボックスがオフの場合は，「マルチキャスト配布」を指定したジョブも，ユニキャストで受信します。反対に，このチェックボックスをオンにしても，ジョブに「ユニキャスト配布」が指定されている場合はユニキャスト配布になります。

なお，ネットワーク中で IP マルチキャストに対応していないルータを使用している場合は，「マルチキャスト配布のジョブを受信する」チェックボックスをオフにしてください。IP マルチキャストに対応していないルータを使用している場合，マルチキャスト配布はできないので，ユニキャスト配布になります。このとき，「マルチキャスト配布のジョブを受信する」チェックボックスをオンにしていると，ユニキャスト配布に切り替わってジョブが配布されるまでに時間が掛かります。

マルチキャストアドレス

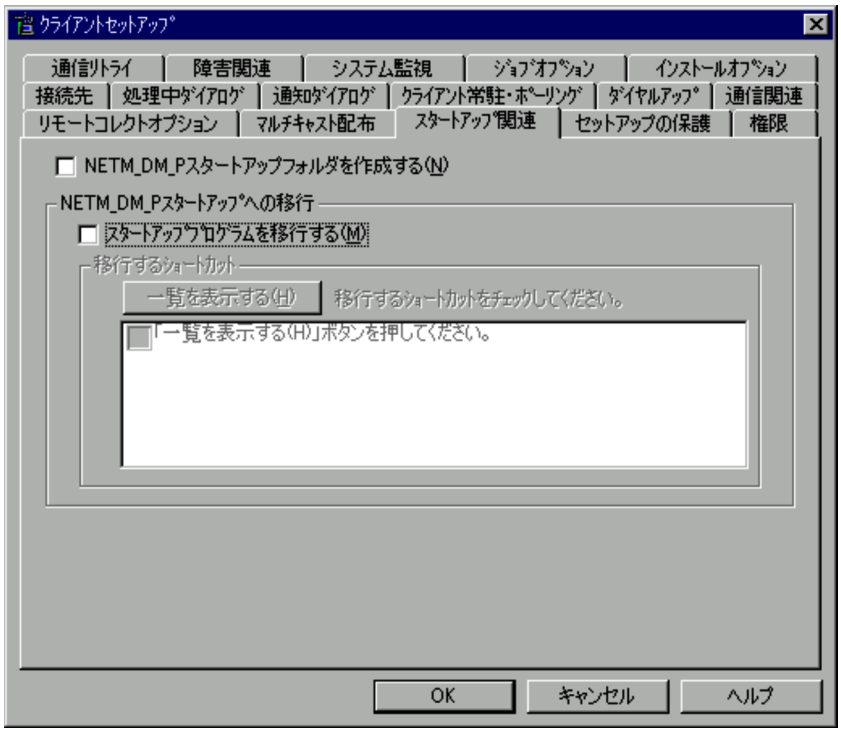
接続先の上位システムに設定されたマルチキャストアドレスと同じ値を設定します。これで，その上位システムが配布先とするマルチキャストグループに登録したことになります。指定できる範囲は，224.0.1.0 ～ 239.255.255.255 の値です。デフォルトは 239.255.0.1 です。

接続先の上位システムのマルチキャストアドレスがここで設定したマルチキャストアドレスと一致しない場合，ジョブはユニキャスト配布されます。マルチキャストグループとマルチキャストアドレスの詳細については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.2　マルチキャスト配布をするための設定」を参照してください。

6.2.14 ［スタートアップ関連］パネル

［スタートアップ］グループに登録されたプログラムをリモートインストールするために必要な設定をします。

図 6-15 ［スタートアップ関連］パネル



(1) NETM_DM_P スタートアップフォルダを作成する

［スタートアップ］グループに登録されたプログラムを移動させるための，［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダを作成するかどうかを選択します。デフォルトはオフです。

［スタートアップ］グループに登録されたプログラムは，Windows の起動と同時に自動的に起動されます。しかし，JP1/NETM/DM によるシステム起動時インストールのタイミングも，スタートアッププログラムと同じです。スタートアッププログラムの起動中に，JP1/NETM/DM がそのプログラムをリモートインストールしようとすると，インストールが失敗します。このことを避けるには，［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダを作成し，スタートアッププログラムをこのフォルダへ移動させます。スタートアッププログラムの移動の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.2.2(2)　スタートアッププログラムの移行」を参照してください。

(2) NETM_DM_P スタートアップへの移行

スタートアッププログラムを移行する

クライアントで［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダを作成する場合，［スタートアップ］グループのプログラムを自動的に［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダへ移動できます。自動的に移動させる場合は，「スタートアッププログラム

を移行する」のチェックボックスをオンにしてください。デフォルトはオフです。

移行するショートカット

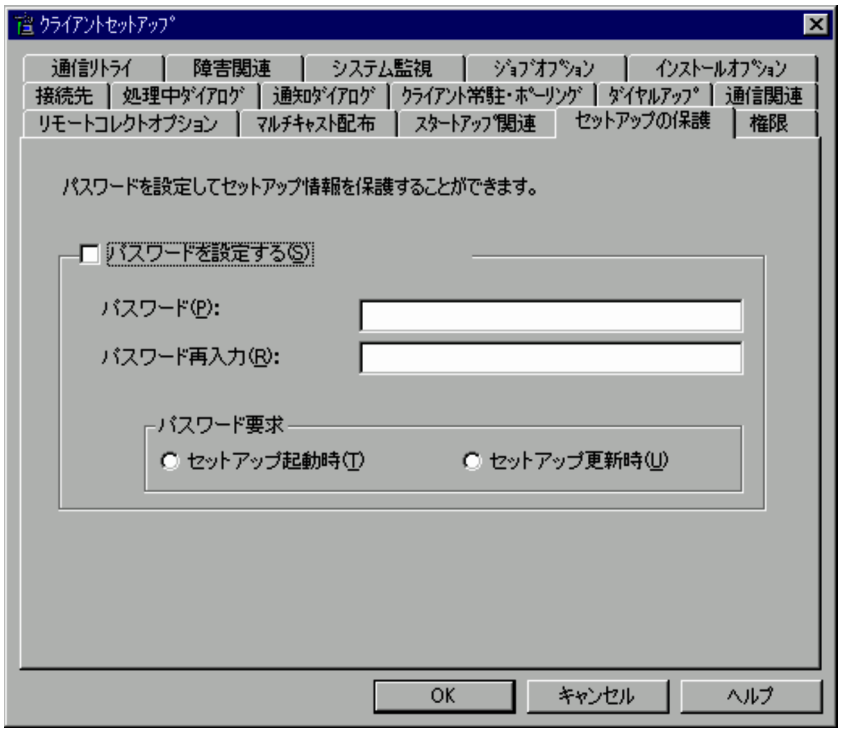
「スタートアッププログラムを移行する」を選択している場合に指定できます。
ショートカットの一覧を表示するには，［一覧を表示する］ボタンをクリックしてください。
［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダへ移動するショートカットのチェックボックスをオンにします。チェックボックスをオフにしたショートカットは移動されません。デフォルトではオンになっています。
チェックボックスをオフにしたショートカットが，すでに［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダに登録されている場合，ショートカットを［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダから［スタートアップ］グループに自動的に戻すと同時に，［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダへの移行対象外とします。
なお，インストールセットのセットアップ情報の場合，「移行するショートカット」をあらかじめ設定することはできません。「スタートアッププログラムを移行する」チェックボックスをオンにすることで，JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール先の［スタートアップ］グループに登録されているすべてのプログラムが移動します。

6.2.15 ［セットアップの保護］パネル

セットアップ情報を保護するためのパスワードを設定します。

このパネルは，JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されません。

図 6-16 ［セットアップの保護］パネル



クライアントセットアップで設定した内容（セットアップ情報）は，だれでも変更できるため不用意に変更されるとプログラムの動作を保証できません。このため，このパネルでパスワードを設定しておくことで，セットアップ情報を保護します。このパネルを設定すると，次回のクライアントセットアップの起動時またはセットアップ情報の変更時から，パスワード要求のダイアログボックスが表示されます。

パスワードを設定する

セットアップ情報にパスワードを設定する場合にチェックボックスをオンにしてください。デフォルトはオフです。

パスワード

セットアップ情報を保護するためのパスワードを，半角英数字 14 文字以内で指定します。「パスワードを設定する」のチェックボックスをオンにしている場合は，この項目の設定を省略できません。

パスワード再入力

確認のため，パスワードを再入力します。

パスワード要求

［パスワードの入力］ダイアログボックスをどのタイミングで表示するかを選択します。

- **セットアップ起動時**

  クライアントセットアップの起動時にパスワードを要求します。パスワード

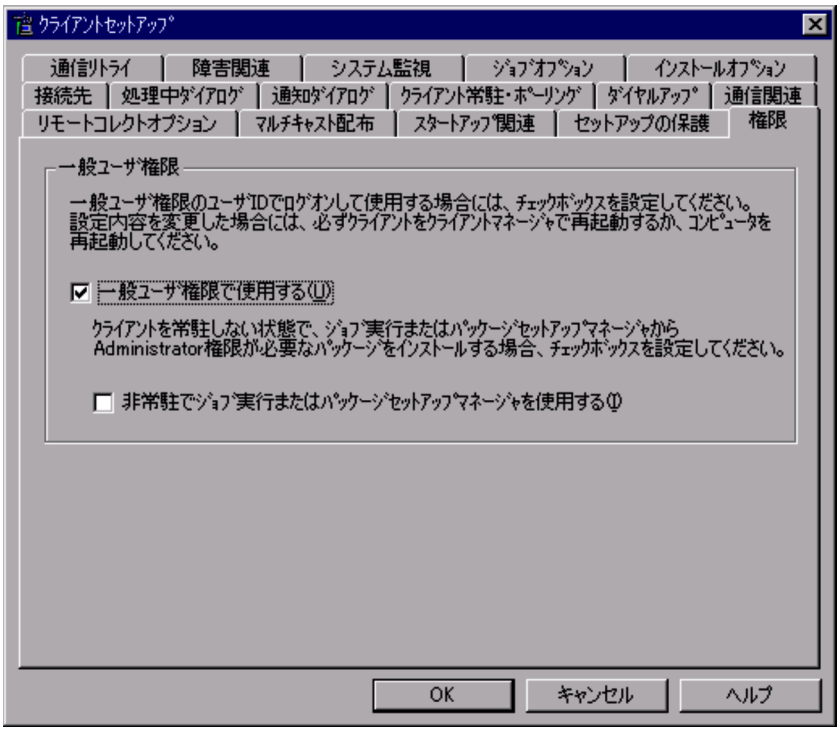
を知らないユーザはセットアップ情報を参照できません。

- **セットアップ更新時**
  セットアップ情報の更新時に，パスワードを要求します。パスワードを知らないユーザでも，セットアップ情報の参照だけできます。

6.2.16 ［権限］パネル（Windows NT の場合）

Administrator 権限を持たない一般ユーザ権限で，クライアントを使用するかどうかを設定します。

図 6-17 ［権限］パネル



Windows NT のクライアントの場合，クライアントをインストールしたユーザ以外でもパッケージをインストールできるように設定できます。このパネルは，JP1/NETM/DM Manager のクライアント機能のセットアップでは表示されません。

一般ユーザ権限で使用する

このチェックボックスをオンにすると，クライアントをインストールしたユーザ以外がログオンした状態でも，GUI インストールモードのパッケージのインストールおよび処理中ダイアログの表示ができます。そのため，Administrator 権限を持たないユーザ（一般ユーザ）でも，パッケージのインストールができます。
JP1/NETM/DM Client（クライアント）の場合，デフォルトはオンです。
JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合，デフォルトはオフです。

一般ユーザ権限でのインストールの詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.2.3　Windows NT の一般ユーザ権限でのインストール」を参照してください。

非常駐でジョブ実行またはパッケージセットアップマネージャを使用する

このチェックボックスは，JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能のセットアップでは表示されません。このチェックボックスは，JP1/NETM/DM Client（クライアント）で次の設定をしている場合に活性化します。

- 「一般ユーザ権限で使用する」チェックボックスがオン
- ［クライアント常駐・ポーリング］パネルの「クライアントを常駐する」チェックボックスがオフ

このチェックボックスをオンにすると，クライアントが非常駐の場合でも，一般ユーザ権限でログオンしたときに，クライアントのパッケージセットアップマネージャまたは［ジョブ実行］アイコンで，次のパッケージをインストールできるようになります。

- サービスの登録，開始または停止が必要なパッケージ
- レジストリキーを新規に作成するパッケージ
- インストール先ディレクトリおよびファイルのアクセス権に，「読み取り」，「書き込み」および「削除」が設定されていないパッケージ

なお，このチェックボックスをオンにすると，「dmpusers.exe」というプロセスが常駐します。

7 リレーショナルデータベースを設定する

この章では，JP1/NETM/DM システムで使用するリレーショナルデータベースの種類によるシステム構成の違いや，環境設定の方法，データベースマネージャを使用したデータベースの作成・メンテナンスの方法について説明します。

7.1 **必要なプログラムとシステム構成**

7.2 **リレーショナルデータベース使用時の注意事項**

7.3 **リレーショナルデータベースの環境設定**

7.4 **データベースマネージャの操作方法（**Embedded RDB **の場合）**

7.5 **データベースマネージャの操作方法（**Microsoft SQL Server **または** Oracle **の場合）**

7.1 必要なプログラムとシステム構成

ここでは，リレーショナルデータベースを使用するときに必要なプログラムとシステム構成について説明します。

7.1.1 必要なプログラム

JP1/NETM/DM の Embedded RDB を使用する場合は，リレーショナルデータベース用のプログラムを別途用意する必要はありません。

JP1/NETM/DM で Embedded RDB 以外のリレーショナルデータベースを使用するときは，次に示すプログラムが必要です。

リレーショナルデータベースのサーバ

データベースを管理するサーバプログラムです。次のどれかが使用できます。なお，それぞれのプログラムに対応する ODBC ドライバが必要です。

Microsoft SQL Server **の場合**

- Microsoft SQL Server 2005 Standard Edition
- Microsoft SQL Server 2005 Standard x64 Edition
- Microsoft SQL Server 2005 Enterprise Edition
- Microsoft SQL Server 2005 Enterprise x64 Edition
- Microsoft SQL Server 2000 Enterprise Edition
- Microsoft SQL Server 2000 Standard Edition
- Microsoft SQL Server 7.0 Enterprise Edition
- Microsoft SQL Server 7.0

Oracle **の場合**

- Oracle9i Release 2 Enterprise Edition R 9.2.0
- Oracle9i Release 2 Standard Edition R 9.2.0
- Oracle9i Enterprise Edition R 9.0.1
- Oracle9i Standard Edition R 9.0.1
- Oracle8i Enterprise Edition R 8.1.7
- Oracle8i Workgroup Server R 8.1.7

データベースサーバ以外のコンピュータからデータベースにアクセスする場合には，クライアント機能が必要です。

7.1.2 システム構成

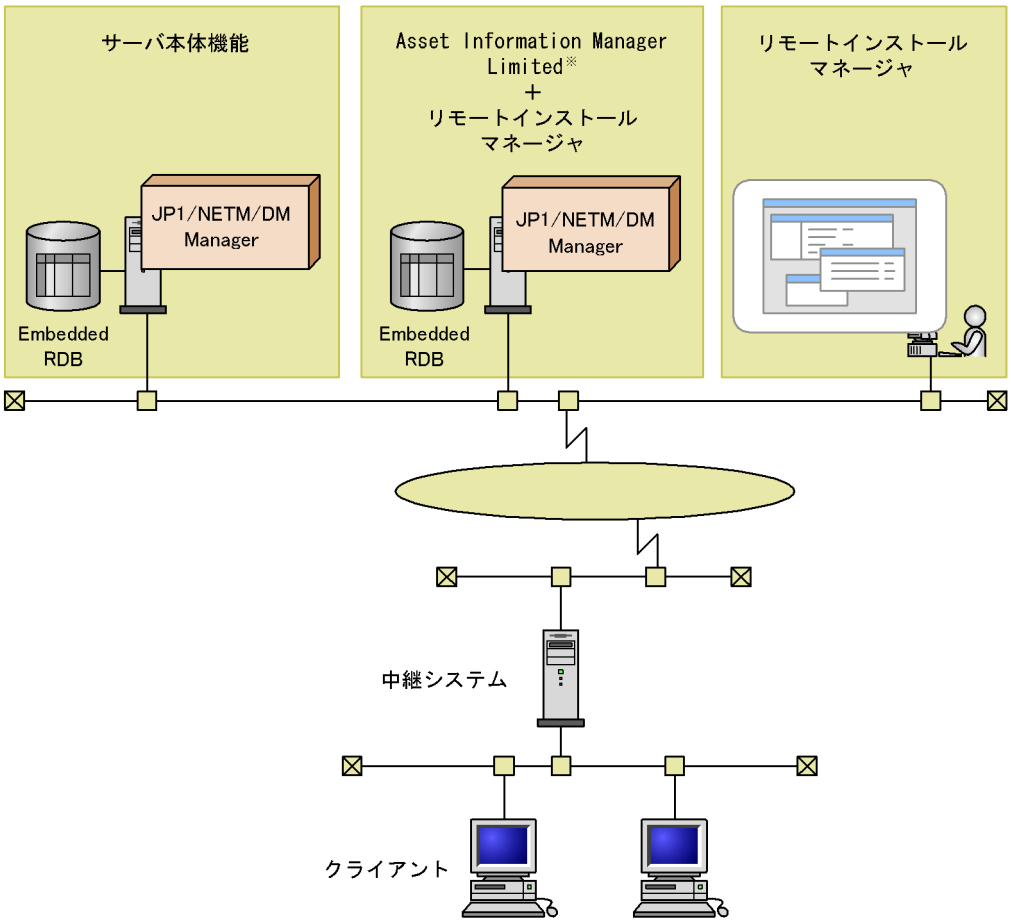
リレーショナルデータベースを使用するときのシステム構成について説明します。

（1） Embedded RDB を使用する場合

Embedded RDB を使用する場合，リレーショナルデータベースのサーバと JP1/NETM/DM Manager の「サーバ本体機能」は，別のコンピュータに配置できません。「リモートインストールマネージャ」は別のコンピュータに配置できます。

Embedded RDB を使用する場合に，「サーバ本体機能」と「リモートインストールマネージャ」を別のコンピュータに配置したときのシステム構成の例を次の図に示します。

図 7-1　Embedded RDB を使用したシステム構成



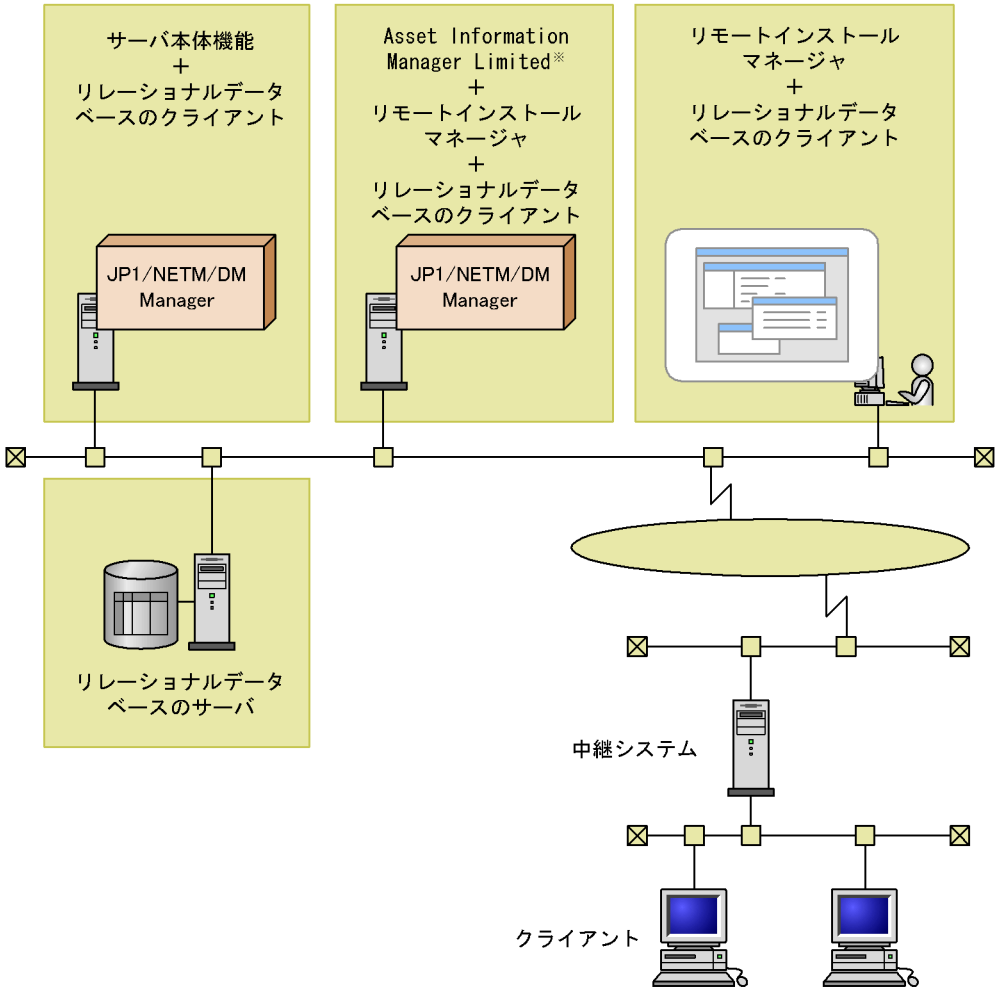
注※
「Asset Information Manager Limited」は，JP1/NETM/DMのコンポーネントの一つです。
「サーバ本体機能」と同じマシンにインストールすることもできます。

Embedded RDB を使用する場合は，データベースのプログラムは必要ありません。

（2） Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合

Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合，JP1/NETM/DM Manager とは別のコンピュータにデータベースサーバを配置できます。「サーバ本体機能」，「リモートインストールマネージャ」，およびデータベースサーバを，それぞれ別のコンピュータに配置した場合の例を次の図に示します。

図 7-2　Microsoft SQL Server または Oracle を使用したシステム構成



注※
「Asset Information Manager Limited」は，JP1/NETM/DMのコンポーネントの一つです。
「サーバ本体機能」と同じマシンにインストールすることもできます。

Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合は，「サーバ本体機能」および「リモートインストールマネージャ」をインストールしたコンピュータに，データベースのクライアントをインストールする必要があります。

(a) リレーショナルデータベースのサーバ

Microsoft SQL Server または Oracle のリレーショナルデータベースのサーバは，配布管理システムと同じコンピュータに配置しても，別のコンピュータに配置してもかまいません。

リレーショナルデータベースのサーバと配布管理システムを別のコンピュータに配置する場合は，リレーショナルデータベースの新規作成時に，データベースデバイスが作成されません。この場合，リレーショナルデータベースでデータベースデバイスをあらかじめ作成しておくか，またはリレーショナルデータベースのサーバが動作しているホストに，データベースマネージャをインストールして，リレーショナルデータベースを作成してください。

なお，複数の配布管理システムを配置するシステム構成の場合は，配布管理システムごとにリレーショナルデータベースを作成する必要があります。複数の配布管理システムで一つのリレーショナルデータベースを共用することはできません。

(b) リレーショナルデータベースのクライアント

Microsoft SQL Server または Oracle のリレーショナルデータベースのサーバを配布管理システムと別のコンピュータに配置した場合，配布管理システムのコンピュータにリレーショナルデータベースのクライアントが必要です。

また，配布管理システムとリモートインストールマネージャが別のホストにあるときは，リモートインストールマネージャのコンピュータにもリレーショナルデータベースのクライアントが必要です。

7.2 リレーショナルデータベース使用時の注意事項

リレーショナルデータベースを使用するときの注意事項を次に示します。

- リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用する場合，システムをシャットダウンするときは，事前に次の手順で JP1/NETM/DM および Embedded RDB を終了させてください。
  1. **リモートインストールマネージャを停止する。**
  2. **［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「**Remote Install Server**」サービスを停止する。**
  3. JP1/NETM/DM **のデータベースにアクセスしている製品を停止する。**
     例えば，JP1/NETM/Asset Information Manager から JP1/NETM/DM のデータベースにアクセスしている場合，JP1/NETM/Asset Information Manager のサービス，コマンド，タスクなどをすべて停止します。
  4. JP1/NETM/DM **のインストールディレクトリ** ¥BIN **に格納されている** netmdb_stop.bat **コマンドを実行してデータベースを停止する。**
- リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用する場合，Embedded RDB を直接参照するツールはありません。
- リレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server を使用する場合，インストール時に設定する並べ替え順には「バイナリ順」を選択してください。「大文字小文字を区別しない」を選択した場合，［あて先］ウィンドウの［検索］ダイアログボックスで，「大文字と小文字を区別する」を選択しても有効になりません。また，インベントリビューアの集計機能や CSV 出力ユティリティの出力範囲の設定機能でも，大文字と小文字を区別しなくなります。
- リレーショナルデータベースに Oracle を使用する場合，アカウントのパスワードを変更したときは，必ず Remote Install Server サービスの「アカウント」および「パスワード」も変更してください。
- リレーショナルデータベースに Oracle を使用する場合，データベースインスタンス作成時には，必ず「JA16SJIS」のキャラクタセットを指定してください。
- 管理情報の追加，変更または削除によってリレーショナルデータベースの断片化が進むと，データベースへのデータの格納効率が低下します。効率良く運用するために，リレーショナルデータベースは定期的に再編成してください。
  リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用している場合の再編成については，「7.4.6　データベースを再編成する」を参照してください。
  リレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合，リレーショナルデータベースの断片化の確認および再編成については，各 RDBMS のマニュアルを参照してください。

7.3 リレーショナルデータベースの環境設定

ここでは，リレーショナルデータベースの環境設定の方法について，それぞれ説明します。

7.3.1 Embedded RDB の環境設定

Embedded RDB を使用している場合，運用開始後に OS のホスト名を変更するときは，次の手順に従ってください。

(1) 運用開始後のホスト名の変更

運用開始後に，OS のホスト名を変更するときの手順を次に示します。JP1/NETM/DM および Embedded RDB を終了させてから，ホスト名を変更します。

1. **リモートインストールマネージャを停止する。**
2. **［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「**Remote Install Server**」サービスを停止する。**
3. JP1/NETM/DM **のデータベースにアクセスしている製品を停止する。**
   例えば，JP1/NETM/Asset Information Manager から JP1/NETM/DM のデータベースにアクセスしている場合，JP1/NETM/Asset Information Manager のサービス，コマンド，タスクなどをすべて停止します。
4. JP1/NETM/DM **のインストールディレクトリ** ¥BIN **に格納されている** netmdb_stop.bat **コマンドを実行してデータベースを停止する。**
5. JP1/NETM/DM **のインストールディレクトリ** ¥NETMDB¥conf **に格納されている** pdsys **ファイルをテキストエディタで開く。**
6. **「**pdunit -x **変更前ホスト名** -u unt1 -d "JP1/NETM/DM **のインストールディレクトリ** ¥NETMDB"**」の「変更前ホスト名」を変更する。**
7. JP1/NETM/DM **のインストールディレクトリ** ¥NETMDB¥conf **に格納されている** pdutsys **ファイルをテキストエディタで開く。**
8. **「**set pd_hostname = **変更前ホスト名」がある場合は「変更前ホスト名」を変更する。**
9. JP1/NETM/DM **のインストールディレクトリ** ¥NETMDB¥conf¥emb **に格納されている次の五つのファイルをテキストエディタで開く。**
   - HiRDB.ini ファイル
   - reload.bat ファイル
   - reorganization_al.bat ファイル
   - reorganization_tb.bat ファイル
   - unload.bat ファイル

10.「PDHOST= 変更前ホスト名」の「変更前ホスト名」を変更する。

11. OS のホスト名を変更する。

12. OS を再起動する。

(2) 運用開始後にホスト名を変更するときの注意事項

運用を開始後にホスト名を変更するときの注意事項を次に示します。

- ホスト名の指定方法は,「8.1.2 JP1/NETM/DM でのホスト名の付け方」を参照してください。
- 次のどれかのジョブがある場合は,これらのジョブを削除し,削除完了したことを確認してからホスト名を変更してください。
  - 実行状態が正常終了またはエラー終了していないジョブ
  - 「クライアントユーザによるインストール」ジョブ
  - 定期的にインベントリ情報を取得するジョブ

  これらのジョブを削除しないでホスト名を変更すると,実行中のジョブが止まったり,下位システムのジョブを連携して削除できなくなったりします。

7.3.2 Microsoft SQL Server の環境設定

Microsoft SQL Server のリレーショナルデータベースの場合,次に示す設定が必要です。

- ネットワークプロトコルの設定
- データベース環境のチューニング
- メモリ割り当ての設定
- 環境設定オプションのチューニング
- 認証モードの設定
- リレーショナルデータベースのアクセス権の設定
- トランザクションログの設定

次に,各設定について説明します。

(1) ネットワークプロトコルの設定

リレーショナルデータベースを使用するには,リレーショナルデータベースのサーバおよびクライアントの両方で,ネットワークプロトコルの設定が必要です。リレーショナルデータベースのプログラムごとの設定を次に示します。

- **リレーショナルデータベースのサーバでの設定**
  リレーショナルデータベースのサーバでは,配布管理システムやリモートインストールマネージャに接続できるプロトコルを選択してください。通常は,「TCP/IP ソケット」または「名前付きパイプ」を使用します。

● リレーショナルデータベースのクライアントでの設定

リレーショナルデータベースのクライアントでは，サーバで選択したプロトコルと同じプロトコルを設定してください。

ネットワークプロトコルの設定方法の詳細については，Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

ここで設定したプロトコルおよびサーバの名称は，リレーショナルデータベースの作成時に必要になりますので，控えておいてください。

(2) データベース環境のチューニング

Microsoft SQL Server 2005，Microsoft SQL Server 2000 および Microsoft SQL Server 7.0 には動作環境を自動的にチューニングする機能があるため，設定は不要です。必要に応じてデータベースのサーバの設定を変更することもできます。

ロック数の設定を変更したい場合は，Transact-SQL を使用します。また，ユーザ接続数およびメモリの設定を変更したい場合は，［SQL Server のプロパティ］ダイアログボックスの［接続］パネルおよび［メモリ］パネルから実行できます。メモリについては固定サイズを割り当てることもできます。

(3) メモリ割り当ての設定

JP1/NETM/DM を使用して効率良くリモートインストールするには，Microsoft SQL Server へのメモリ割り当ての設定が重要になります。Microsoft SQL Server でのメモリ概算式を次に示します。

(a) データキャッシュ

データキャッシュは，各テーブルのインデックスページおよびデータページから構成されます。次のメモリ概算式は，頻繁にアクセスするテーブルのインデックスページおよびデータページのサイズを示します。頻繁にアクセスするテーブルについて，インデックスページは 100%，データページは 20% をメモリに割り当てられる量が設定の目安です。メモリに余裕があれば，データページについても 100% 割り当てられる量を設定してください。パッケージ数とは，配布済みパッケージおよび配布予定のパッケージを加算した数です。

インデックスページ

クライアント管理台数×パッケージ数× 0.0005(メガバイト)

データページ

クライアント管理台数×パッケージ数× 0.0045(メガバイト)

(b) プロシージャキャッシュ

プロシージャキャッシュは，Microsoft SQL Server の実行プランなどから構成されます。JP1/NETM/DM を使用する場合には，プロシージャキャッシュへの割り当てが，5 メガバイト程度となるように設定してください。

(4) 環境設定オプションのチューニング

Microsoft SQL Server 2005，Microsoft SQL Server 2000 および Microsoft SQL Server 7.0 では，性能を最適化してメモリサイズを動的に調整するため，システム管理者がメモリサイズを意識する必要はありません。しかし，自動拡張または縮小によるオーバヘッドも考慮し，最大および最小値を設定することをお勧めします。

最小値

16 メガバイト以上

最大値

搭載メモリー（OS の使用するメモリ容量＋ JP1/NETM/DM のメモリ所要量※＋ほかのアプリケーションの使用するメモリ容量＋ 5 メガバイト）

注※　マニュアル「導入・設計ガイド」の「5.3.2　メモリ所要量」を参照してください。

(5) 認証モードの設定

認証モードには「混合モード」を選択してください。［SQL Server のプロパティ］ダイアログボックスの［セキュリティ］パネルの「セキュリティ」で設定してください。

(6) リレーショナルデータベースのアクセス権の設定

JP1/NETM/DM Manager でアクセスする ID を，Microsoft SQL Server システム管理者以外の ID に設定する場合は，リレーショナルデータベースの各テーブルにアクセス権を設定する必要があります。必要なアクセス権は，SELECT，INSERT，UPDATE，および DELETE です。アクセス権の設定方法を次に示します。

Microsoft SQL Server 2005 **の場合**

1. **［Microsoft SQL Server Management Studio］ウィンドウから，アクセス権を設定するオブジェクトを選択する。**
   ユーザ単位で設定する場合はデータベースを，オブジェクト単位で設定する場合はテーブルを選択してください。
2. **右クリックで表示される［プロパティ］メニューを選択する。**
   ［データベースのプロパティ］ダイアログボックスが表示されます。
3. **ダイアログボックスの左側で［権限］を選択して，アクセス権を設定する。**

Microsoft SQL Server 2000 **および** Microsoft SQL Server 7.0 **の場合**

1. **［SQL Enterprise Manager］ウィンドウで，アクセス権を設定するオブジェクトを選択する。**
   ユーザ単位で設定する場合はデータベースを，オブジェクト単位で設定する場合はテーブルを選択してください。
2. **右クリックで表示される［プロパティ］メニューを選択する。**
   データベースを選択していた場合は［*XXXXX* プロパティ］ダイアログボックス（*XXXXX* はデータベース名）が表示されます。テーブルを選択していた場合は

［オブジェクトのプロパティ］ダイアログボックスが表示されます。

3. **［権限］パネルでアクセス権を設定する。**

(7) トランザクションログの設定

Microsoft SQL Server では，リレーショナルデータベースの更新についてアクセスの履歴を**トランザクションログ**に採取しています。JP1/NETM/DM Manager ではリレーショナルデータベースの作成時にトランザクションログを割り当てていますが，履歴情報が満杯になると，以降リレーショナルデータベースへのアクセスができなくなります。トランザクションログは，自動的に切り捨てる運用をお勧めします。

Microsoft SQL Server 2005 の場合

1. Management Studio **を起動する。**
2. **該当データベースを選択し，［データベースのプロパティ］ダイアログボックスを開く。**
3. **「オプション」メニューを選択する。**
4. **ダイアログボックスの右側の「復旧モデル」から，「単純」を選択する。**

Microsoft SQL Server 2000 の場合

1. Enterprise Manager **を起動する。**
2. **該当データベースを選択し，［プロパティ］ダイアログボックスを開く。**
3. **［オプション］パネルの［モデル］から「シンプル」を選択する。**

Microsoft SQL Server 7.0 の場合

1. **［**SQL Enterprise Manager**］ウィンドウで該当データベースを右クリックして［プロパティ］メニューを選択する。**
2. **［***XXXXX* **プロパティ］ダイアログボックス（***XXXXX* **はデータベース名）の［オプション］パネルで「チェックポイント時のログ切り捨て」をチェックする。**

自動切り捨てを設定していない場合に，トランザクションログが満杯になったときは，JP1/NETM/DM Manager では「セグメントにオブジェクトの領域を割り当てられない」という内容のメッセージが RDBSRV.LOG に出力されます。この場合，次の方法でトランザクションログを切り捨ててください。

Microsoft SQL Server 2005 の場合

Management Studio でデータベースを右クリックして表示されるメニューから，［タスク］－［バックアップ］を選択し，［データベースのバックアップ］ダイアログボックスを表示します。［データベースのバックアップ］ダイアログボックスの［全般］タブから，トランザクションログのバックアップを取得してください。取得したバックアップ分のトランザクションログが切り捨てられます。

Microsoft SQL Server 2000 の場合

Enterprise Manager の［データベースのバックアップ］メニューからトランザクションログのバックアップを取得してください。取得したバックアップ分のトランザクションログが切り捨てられます。

Microsoft SQL Server 7.0 の場合

Enterprise Manager の［ログの切り捨て］メニューからトランザクションログを切り捨ててください。またはクエリアナライザで DUMP ステートメント（DUMP TRANSACTION データベース名 WITH NO_LOG）を記述してトランザクションログを削除してください。

7.3.3 Oracle の環境設定

Oracle のリレーショナルデータベースの場合，次に示す設定が必要です。

- データベースインスタンスの作成およびサービスの作成
- 初期化パラメタファイルのチューニング
- リレーショナルデータベースのアクセス権の設定

また，Asset Information Manager Limited を使用する場合は，Asset Information Manager Limited のリレーショナルデータベースの環境を設定する必要があります。

次に，各設定について説明します。

(1) データベースインスタンスの作成およびサービスの作成

リレーショナルデータベースを使用するには，リレーショナルデータベースのサーバで，データベースインスタンスを作成する必要があります。また，リレーショナルデータベースのクライアントで，サービスを作成する必要があります。それぞれの作成方法については Oracle のマニュアルを参照してください。

(a) リレーショナルデータベースのサーバでの設定

リレーショナルデータベースのサーバで，データベースインスタンスを作成してください。作成には，Oracle Database Configuration Assistant を使用してください。

(b) リレーショナルデータベースのクライアントでの設定

リレーショナルデータベースのクライアントで，サービスを作成してください。作成には，次のプログラムを使用してください。

Oracle8i の場合

Oracle Net8 Assistant

Oracle9i の場合

Oracle Net Manager

なお，サービス名は次の形式で指定してください。

「NETM_ 接続先サーバ名」

「接続先サーバ」とは，JP1/NETM/DM Manager のサーバがインストールされている PC を示します。また，接続先サーバ名は DNS 名称を含まない名称で指定してくださ

い。

（例）

接続先のサーバ名が「dmp380.Hitachi.co.jp」の場合
NETM_dmp380

なお，リモートインストールマネージャの［JP1/NETM/DM ログオン］ダイアログボックスで指定した接続先の「NETM/DM サーバ」にホスト名でなく IP アドレスを指定している場合，「接続先サーバ名」に IP アドレスの指定も必要です。指定する場合は，ピリオドを「_」（アンダーバー）に変更して指定してください。

（例）

接続先のサーバ名が「172.18.22.31」の場合
NETM_172_18_22_31

（2） 初期化パラメタファイルのチューニング

JP1/NETM/DM を使用する上で，チューニングを必要とするパラメタおよびチューニング方法について説明します。

（a） チューニングの必要なパラメタ

db_block_buffers

データベースブロック数を指定します。このパラメタ値は，データキャッシュのサイズを制御します。実際に割り当てられるデータキャッシュサイズは，db_block_size × db_block_buffers になります。

shared_pool_size

共用プールサイズ（単位：バイト）を指定します。共用プールには，Oracle の管理情報（SQL を解析した結果のライブラリキャッシュやディクショナリキャッシュ）が含まれます。

processes

同時に接続できるユーザ数の最大値を指定します。JP1/NETM/DM が必要とする同時に接続できるユーザ数の算出方法を次に示します。

同時接続数
＝ 25
＋リモートインストールマネージャ同時接続数× 5
＋パッケージャ同時接続数× 2
＋クライアントまたは中継システム同時接続数× 2
＋ WWW ブラウザからの同時接続数× 5
＋ JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm からの同時接続数× 5

（b） チューニング方法

db_block_buffers

割り当ての目安となる値を示します。データベース稼働状態で，次の SQL を実行し，データキャッシュのヒット率が 90% 以下の場合には，バッファ数を多くしてください。

データキャッシュヒット率を求める SQL

```
Select (a.value + b.value) "Log_Reads", c.value "Rhy_Reads",
Round(((1 - (c.value / (a.value + b.value))) * 100), 3) "Buffer Hit Ratio"
from v$sysstat a,v$sysstat b,v$sysstat c
where a.name = 'db block gets' and b.name = 'consistent gets'
and c.name = 'physical reads';
```

shared_pool_size

32 メガバイト程度の値を指定してください。データベース稼働状態で，次の SQL を実行し，ライブラリキャッシュおよびディクショナリキャッシュのヒット率が 90% 以下の場合には，割り当てサイズを大きくしてください。

ライブラリキャッシュヒット率を求める SQL

```
Select sum(pins) "Executions", sum(reloads) "Misses",
Round(100*(1-sum(reloads)/sum(pins)),3) "Hit Ratio" from v$librarycache;
```

ディクショナリキャッシュヒット率を求める SQL

```
Select sum(gets) "Gets", sum(getmisses) "Misses",
Round(100*(1-sum(getmisses)/sum(gets)),3) "Hit Ratio"
from v$rowcache where gets <> 0;
```

processes

同時に接続できるユーザ数を指定してください。

(3) リレーショナルデータベースのアクセス権の設定

リレーショナルデータベースを運用するにはアクセス権の設定が必要です。次に設定方法を示します。

データベース作成後にユーザを作成する場合は，次の手順で作成してください。

1. **ロール権限に「CONNECT」「EXP_FULL_DATABASE」「INP_FULL_DATABASE」および「RESOURCE」を与える。**
2. JP1/NETM/DM **の全テーブルにオブジェクト権限としてすべての権限を与える。**
   SYSTEM でデータベース作成し，NETM_USER01 を作成した場合の例
   ```
   GRANT ALL ON "SYSTEM"."NETMDM_CABINET" TO "NETM_USER01"
   ```
3. JP1/NETM/DM **の全テーブルをユーザから参照するためにシノニムを作成する。**
   SYSTEM でデータベースを作成し，NETM_USER01 を作成した場合の例
   ```
   CREATE SYNONYM "NETM_USER01"."NETMDM_CABINET" FOR
   "SYSTEM"."NETMDM_CABINET"
   ```

7.4　データベースマネージャの操作方法（Embedded RDB の場合）

JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースを作成したり，メンテナンスをしたりするには，JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つである**データベースマネージャ**を使用します。データベースマネージャは，メニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［データベースマネージャ］を選択して起動します。

なお，データベースマネージャを使用するときは次のことに注意してください。

- JP1/NETM/DM のリレーショナルデータベースを使用するアプリケーションは，すべて終了してください。
  JP1/NETM/Asset Information Manager と連携している場合は，JP1/NETM/Asset Information Manager のすべてのサービス，タスク，コマンドなども停止してください。
- データベースマネージャは，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で「Remote Install Server」を停止したあと，起動してください。
- データベースマネージャは，Administrator 権限を持つユーザだけが使用できます。

データベースマネージャが起動すると，データベースマネージャでの操作を選択する［Welcome］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-3　［Welcome］ダイアログボックス



なお，Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合は，［Welcome］ダイアログボックスに表示される項目が異なります。Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合のデータベースマネージャの操作については，「7.5　データベースマネージャの操作方法（Microsoft SQL Server または Oracle の場合）」を参照してください。

データベースマネージャで実行したい操作を選択します。

データベースを新規作成する

データベースを新規に作成します。JP1/NETM/DM Manager のインストール後，この項目からデータベースを新規に作成する必要があります。

ファイルシステム上の管理ファイルを移行する

JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM の簡易データベースから，リレーショナルデータベース（Embedded RDB）へデータベースを移行します。なお，この項目を選択する場合は，リレーショナルデータベースが作成されている必要があります。

データベースをアップグレードする

リレーショナルデータベースをアップグレードします。JP1/NETM/DM をバージョンアップした場合や，JP1 Version 7i の JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition から JP1 Version 8 の JP1/NETM/DM Manager へ移行したあとで選択します。

また，作成済みのデータベース領域のサイズを変更する場合も選択してください。

データベースをバックアップする

データベースのバックアップを実行します。データベースの定期的なバックアップを取得する場合などに選択します。

データベースをバックアップから復元する

バックアップファイルからデータベースを復元します。「データベースをバックアップする」で取得したバックアップを復元する場合に選択します。

データベースを再編成する

データベースの使用率が 80% を超えた場合は，データベースを編成し直してください。データベースの使用率が 80% を超えたかどうかは，イベントログに出力されるメッセージから判断できます。出力されるメッセージについては，「7.4.6　データベースを再編成する」を参照してください。

データベースのパスワードを変更する

データベースにログインするためのパスワードを変更します。

データベース上の不要インベントリ情報を削除する

データベース上に残っている不要なインベントリ情報を削除し，データベースの空き領域を増やします。

操作を選択して［次へ］ボタンをクリックすると，［データベースの認証情報］ダイアロ

グボックスが表示されます。

図 7-4　［データベースの認証情報］ダイアログボックス



データベースにログインする管理者ユーザ ID とパスワードを入力してください。データベースマネージャからデータベースを操作するには，ユーザ認証を行う必要があります。

次に，ユーザ認証後の各操作について説明します。

7.4.1　データベースを新規作成する

JP1/NETM/DM Manager を新規にインストールしたあとは，データベースを作成する必要があります。

ここでは，データベースを新規に作成する手順と，運用規模ごとに想定されるデータ件数の目安について説明します。

（1）データベースの作成手順

Embedded RDB のデータベースを新規に作成する手順を次に示します。

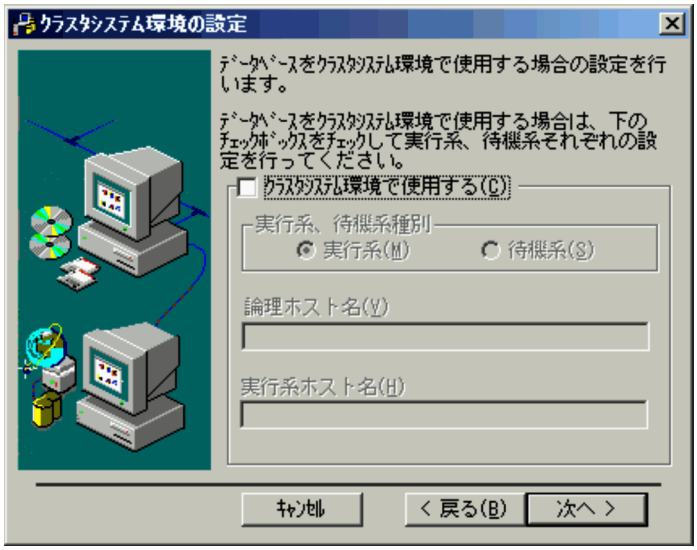
データベース領域のパスは，半角英数字，半角スペース，および次に示す記号を使用して，実在するディレクトリを指定してください。

「:」，「.」，「¥」，「#」，「@」，「(」，「)」，「「」，「」」

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベースを新規作成する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指**

定して，［次へ］ボタンをクリックする。
［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックスが表示されます。

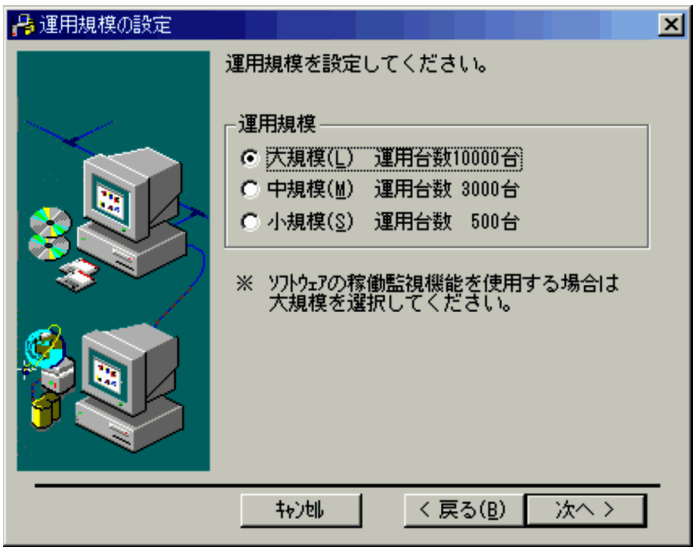
図 7-5　［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックス



JP1/NETM/DM Manager をクラスタシステム環境で使用する場合，「クラスタシステム環境で使用する」チェックボックスをオンにします。JP1/NETM/DM Manager をクラスタシステム環境で使用する場合の設定については，「付録 C　JP1/NETM/DM のクラスタシステムの構築」を参照してください。
ここでは，通常のネットワーク環境で，JP1/NETM/DM Manager で使用するデータベースを作成する場合について説明します。

3. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［運用規模の設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-6　［運用規模の設定］ダイアログボックス



JP1/NETM/DM Manager を使用する環境に応じて，運用規模を選択してください。選択した運用規模に合わせて，データベースの領域サイズのデフォルト値が設定されます。データベースの領域サイズは，以降のダイアログボックスで変更できます。ここでは，特に支障がないかぎり，「大規模」を選択することをお勧めします。クライアントの稼働状況を監視する場合は，必ず「大規模」を選択してください。運用規模ごとに想定されるデータ件数の目安については，「(2)　運用規模ごとのデータ量の目安」を参照してください。

4. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［管理データベースの設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-7　［管理データベースの設定］ダイアログボックス



管理データベース領域

作業表領域を含む JP1/NETM/DM Manager のデータベースを格納するディレクトリのパスを，半角 46 文字以内で指定します。

クラスタシステム環境で使用する場合，作業表領域を除く管理データベース領域のファイル（フェールオーバー発生時に引継ぎが必要なデータ）を格納する，共有ディスクのパスを指定します。

管理データベース領域のサイズは，4,270 メガバイトで固定です。作業表領域のサイズは，「作業表領域」の「サイズ」欄で指定します。

作業表領域

作業表領域のサイズを 50 ～ 1,048,575 メガバイトで指定します。

作業表領域のサイズのデフォルト値は，［運用規模の設定］ダイアログボックスで選択した運用規模によって異なります。選択した項目ごとの，データベース領域ファイルのサイズのデフォルト値を次の表に示します。

選択した運用規模	作業表領域のデフォルト値（メガバイト）
大規模	22,852
中規模	6,855
小規模	1,142

なお，「パス」欄は，クラスタシステム環境で使用する場合に活性化します。作業表領域のファイル（フェールオーバー発生時に引継ぎが不要なデータ）を格納する，ローカルディスクのパスを，半角 46 文字以内で指定します。

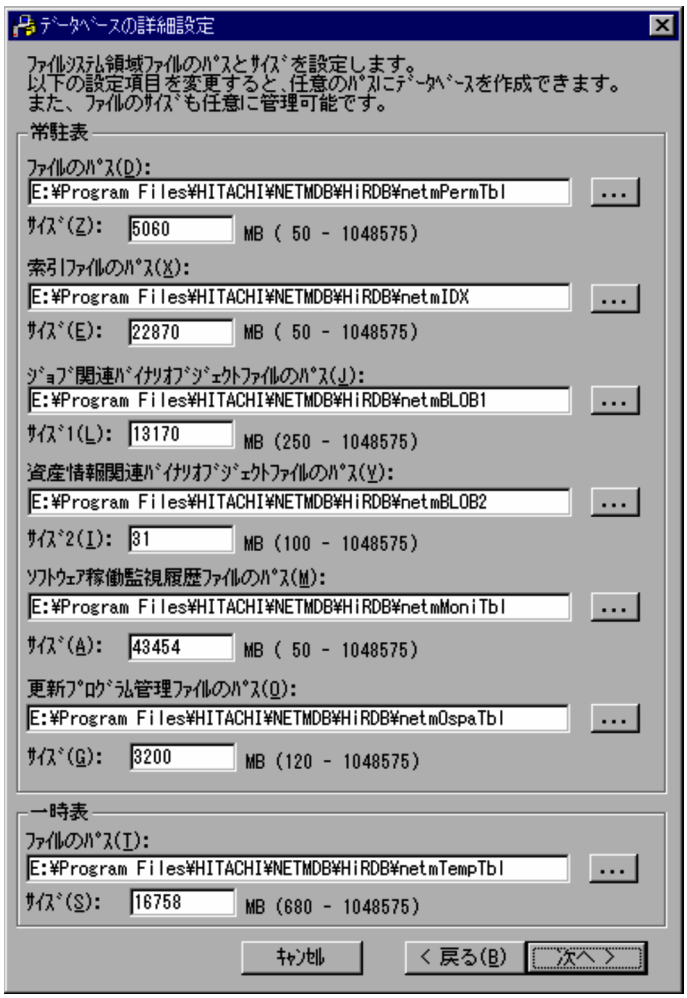
自動増分を行う

「自動増分を行う」チェックボックスをオンにすると，作業表領域の使用容量が「サイズ」欄に入力した値を超える場合，自動で作業表領域が増えるようになり

ます。
運用に伴い，見積もりで算出した作業表領域のサイズが指定した値を超える可能性のある場合は，チェックボックスをオンにしてください。デフォルトは，チェックボックスがオンです。
なお，作業表領域はディスクに空きがあれば最大 1,048,575 メガバイトまで増分します。
クラスタシステム環境で使用する場合，「自動増分を行う」チェックボックスは，実行系と待機系で同じ設定にしてください。

5. **［管理データベースの設定］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-8 ［データベースの詳細設定］ダイアログボックス



このダイアログボックスでは，データベース領域ファイルのパスおよびサイズを設定できます。

データベース領域ファイルのパスは，それぞれ半角 104 文字以内で指定してください。ただし，OS が 64 ビット版の Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) の場合，%Systemroot%¥system32 ディレクトリ下のパスは指定できません。
データベース領域ファイルのサイズのデフォルト値は，［運用規模の設定］ダイアログボックスで選択した運用規模によって異なります。選択した運用規模ごとの，データベース領域ファイルのサイズのデフォルト値，最小値，および最大値を次の表に示します。

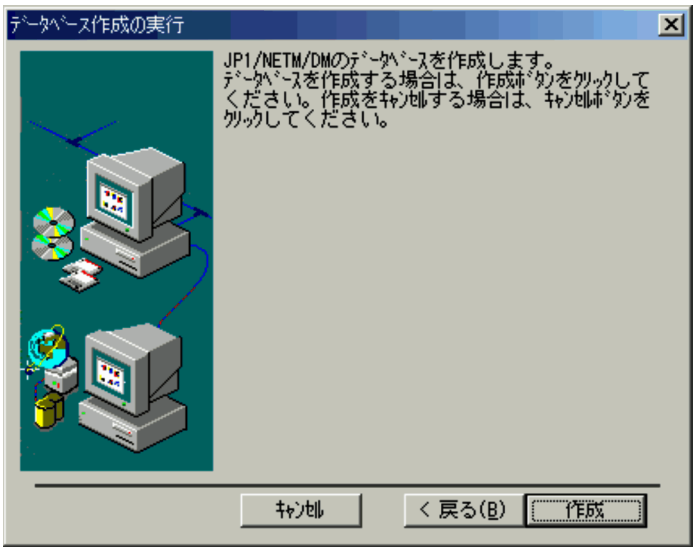
表 7-1 運用規模ごとのデータベース領域ファイルサイズのデフォルト値，最小値，および最大値

データベース領域ファイル	デフォルト値（メガバイト）			最小値（メガバイト）	最大値（メガバイト）
	大規模	中規模	小規模		
常駐表ファイル	5,060	1,455	241	50	1,048,575
索引ファイル	22,870	404	67	50	1,048,575
ジョブ関連バイナリオブジェクトファイル	13,420	4,232	951	250	1,048,575
資産情報関連バイナリオブジェクトファイル	131	131	131	100	1,048,575
ソフトウェア稼働監視履歴ファイル	43,454	50	50	50	1,048,575
更新プログラム管理ファイル	3,200	3,200	3,200	120	1,048,575
一時表ファイル	17,438	1,795	865	680	1,048,575

各データベース領域ファイルの，詳細な容量の計算方法については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「5.4　データベース容量の見積もり」を参照してください。
なお，ソフトウェアの稼働監視機能で［操作ログ一覧］ウィンドウを使用しない場合，ソフトウェア稼働監視履歴ファイルは使用されないため，小さいサイズを指定することをお勧めします。例えば，50 メガバイト（最小値）です。

6. **［データベースの詳細設定］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベース作成の実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-9　［データベース作成の実行］ダイアログボックス



7. **［作成］ボタンをクリックする。**
　データベースが作成されます。

（2）運用規模ごとのデータ量の目安

［運用規模の設定］ダイアログボックスで運用規模を選択する目安として，各運用規模で想定されるデータの件数を次の表に示します。データベースマネージャに設定されるデータベースの領域ファイルのデフォルト値は，ここで示すデータの件数を基に算出されます。

表 7-2　運用規模ごとに想定されるデータの件数（データベース領域）

項番	項目	想定されるデータの件数		
		大規模	中規模	小規模
1	キャビネット数	5	5	5
2	リモートコレクト関連のジョブ数	2	2	2
3	ジョブ当たりの平均クライアント数	10,000	3,000	500
4	リモートインストール関連のジョブ数	20	20	20
5	ジョブ当たりの平均パッケージ数	1	1	1
6	リモートインストール関連のジョブ以外のジョブ数	8	8	8
7	ID 管理中継で管理されている，リモートインストール関連の ID ジョブ数	20	20	20
8	ID 当たりの平均クライアント数	5,000	1,500	250
9	リモートインストール関連のジョブ以外の ID ジョブ数	8	8	8
10	ID 数	10	10	10

項番	項目	想定されるデータの件数		
		大規模	中規模	小規模
11	ID 当たりの平均管理中継数	10	3	0
12	ID 当たりの平均クライアント登録数	5,000	1,500	250
13	クライアント数	10,000	3,000	500
14	ソフトウェアインベントリの検索によって取得するファイル数の平均値	100	100	100
15	取得するシステム情報数の平均値	100	100	100
16	ジョブ定義数	55	55	55
17	フォルダ数	5	5	5
18	リモートコレクト関連のジョブ定義数	3	3	3
19	リモートインストール関連のジョブ定義数	20	20	20
20	「ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数	4	4	4
21	「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブ定義数	1	1	1
22	ジョブ数	55	55	55
23	ID 管理中継で管理されている ID ジョブ数	250	75	0
24	ID ジョブで指定されている ID 数の合計	25	25	25
25	ソフトウェア検索リスト項目数	200	200	200
26	Cm2 連携使用時の場合，システム構成にあるホスト数	0	0	0
27	あて先グループ数	100	30	5
28	パッケージ数	40	40	40
29	スケジュール指定して実行したジョブ数	5	5	5
30	リモートインストール関連以外のジョブ数	8	8	8
31	ユーザインベントリ項目数	20	20	20
32	取得するソフトウェア情報数の平均値	200	200	200
33	全あて先ジョブ数	1	1	1
34	全あて先ジョブで指定した中継マネージャ数の合計	3	0	0
35	レジストリ情報取得対象ホスト数	10,000	3,000	500
36	取得するレジストリ項目数	10	10	10
37	作成したレジストリ取得項目数	10	10	10
38	システム構成にあるホスト数	10,000	3,000	500
39	ソフトウェアインベントリ辞書で管理するファイル数	100	100	100
40	ライセンス管理するファイル数	10	10	10
41	ソフトウェアインベントリ辞書で削除管理するファイル数	10	10	10
42	Microsoft Office 製品取得対象クライアント数	10,000	3,000	500
43	管理する Microsoft Office 製品数	5	5	5

項番	項目	想定されるデータの件数		
		大規模	中規模	小規模
44	ウィルス対策製品取得対象クライアント数	10,000	3,000	500
45	管理するウィルス対策製品数	5	5	5
46	あて先自動メンテナンスのポリシー数	2	2	2
47	ID 自動メンテナンスのポリシー数	2	2	2
48	システム構成情報の削除履歴数	100	30	5
49	JP1/NETM/DM 未導入ホスト数	100	30	5
50	ホスト探索の条件設定数	5	5	5
51	ホスト探索設定で設定したコミュニティ数	5	5	5
52	ホスト探索で見つかったホスト数	10,000	3,000	500
53	「メッセージの通知」ジョブのジョブ定義数	10	10	10
54	ソフトウェア稼働監視ポリシー数	1	0	0
55	監視対象のプログラム数	10	0	0
56	稼働時間取得対象のプログラム数	10	0	0
57	ソフトウェア稼働監視の許可情報数	10	0	0
58	ソフトウェア稼働監視結果の起動抑止情報数	10	0	0
59	「ソフトウェア稼働情報の制御」ジョブ定義数	2	0	0
60	稼働監視ポリシーで設定したフィルタリングの条件数	10	0	0
61	ソフトウェア稼働監視の対象となるクライアントの台数	10,000	0	0
62	1 クライアント当たりの 1 日に取得する稼働情報量	1,500	0	0
63	稼働情報の保存日数	5	0	0
64	パッチ情報数	789	789	789
65	ダウンロード済みのパッチ数	100	100	100
66	インストールスクリプト数	10	10	10
67	あて先グループに属するクライアント数	10,000	3,000	500
68	ID に属するクライアント数	10,000	3,000	500
69	起動抑止履歴のあるクライアント数	10,000	3,000	500
70	稼働情報（抑止履歴および操作履歴）の総数	500,000	0	0

7.4.2 ファイルシステム上の管理ファイルを移行する

JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM の簡易データベースから，リレーショナルデータベース（Embedded RDB）へデータベースを移行する場合，あらかじめ，新規にリレーショナルデータベースを作成します。その後，作成したリレーショナルデータベースに，既存の JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースの内容を移行します。

(1) リレーショナルデータベースへ移行するときの制限

リレーショナルデータベースは，作成できるグループの階層などで，次に示す制限があります。制限を超えた構成の JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースから，リレーショナルデータベースへ移行する場合は，制限を超えた部分の情報だけが移行されません。

[システム構成] ウィンドウでの階層

［システム構成］ウィンドウで作成できる階層は，末端のホストを含めて 7 階層までです。また，階層ごとの文字数の合計（ホスト名とホスト名の間の区切り文字を含む）は，半角で 255 文字までです。

[あて先] ウィンドウでの階層

［あて先］ウィンドウで作成できる階層は，末端のホストを含めて 7 階層までです。また，最上層からあて先グループ名を連結した文字数（各あて先グループ名の先頭の区切り文字を含む）と，末端のホスト名の文字数（ホスト名の先頭の区切り文字を含む）の合計は半角で 255 文字までです。

[ジョブ定義] および [ジョブ実行状況] ウィンドウでのフォルダの階層

［ジョブ定義］および［ジョブ実行状況］ウィンドウで作成できるフォルダの階層は，4 階層までです。

(2) リレーショナルデータベースへの移行方法

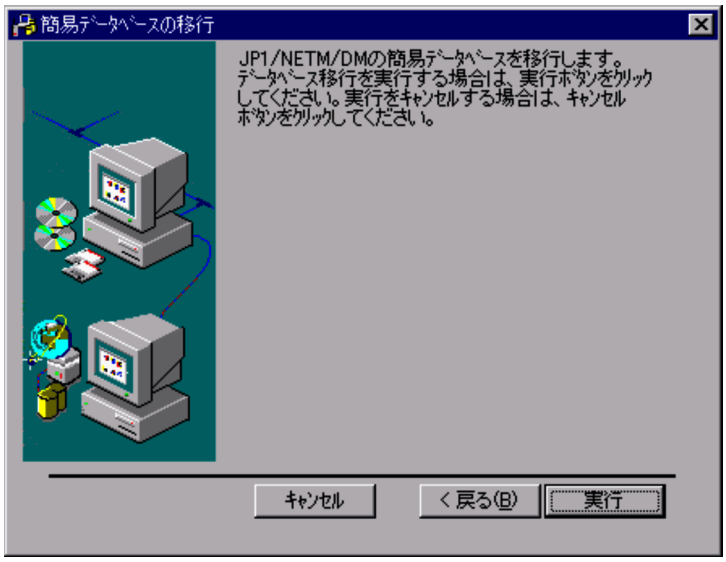
JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースから，リレーショナルデータベースへ移行する手順を次に示します。

注意事項

簡易データベースからリレーショナルデータベースへ移行する際に，パッケージ格納ディレクトリを変更した場合は，以前のパッケージ格納ディレクトリのファイルを，新しく設定したパッケージ格納ディレクトリへ移動してから次の作業を実施してください。

1. **[Welcome] ダイアログボックスで「ファイルシステム上の管理ファイルを移行する」を選択して，[次へ] ボタンをクリックする。**
   ［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［簡易データベースの移行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-10　［簡易データベースの移行］ダイアログボックス



3. **［実行］ボタンをクリックする。**
   簡易データベースから Embedded RDB へデータが移行されます。

7.4.3　データベースをアップグレードする

Embedded RDB を使用した JP1/NETM/DM Manager をバージョンアップした場合，Embedded RDB をアップグレードする必要があります。また，JP1 Version 7i の JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition から，Embedded RDB を使用した JP1 Version 8 の JP1/NETM/DM Manager へ移行する場合にも，この項目からデータベースをアップグレードします。

（1）アップグレード時の注意事項

● **08-00 以前のバージョンから 08-02 以降のバージョンへアップグレードする場合**

データベースの構造が変更されているため，データベースの所要量が異なります。そのため，アップグレード時に容量の不足によるエラーが発生するおそれがあります。この場合，データベースの所要量を見積もり直してからアップグレードを実行してください。データベースの容量は，アップグレードするときに変更できます。08-00 以前のバージョンから 08-02 以降のバージョンへアップグレードする場合の容量の見積もりについては，マニュアル「導入・設計ガイド」の「5.4.1(9)　08-00 以前と 08-02 以降の容量の差分について」を参照してください。

データベースのアップグレード前に取得したバックアップファイルは，アップグレードしたあとはデータベースの構造が異なるため復元できません。データベースをアップグレードしたあと，再度バックアップを取得してください。

● **「Asset Information Manager Limited」をインストールしている場合**

「Asset Information Manager Limited」をインストールしている場合，JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースをアップグレードまたは削除するときは，サービス，タスク，コマンドなど，「Asset Information Manager Limited」で実行中の業務をすべて停止させてください。
また，ODBC データソースで，接続プールが設定されていると，「Asset Information Manager Limited」の業務を停止させてから，接続プールで設定されているタイムアウトの時間が経過するまで接続状態が継続されます。そのため，接続状態が解除されるまで待ってから，アップグレードまたは削除を実行してください。

(2) データベースのアップグレード（Embedded RDB の場合）

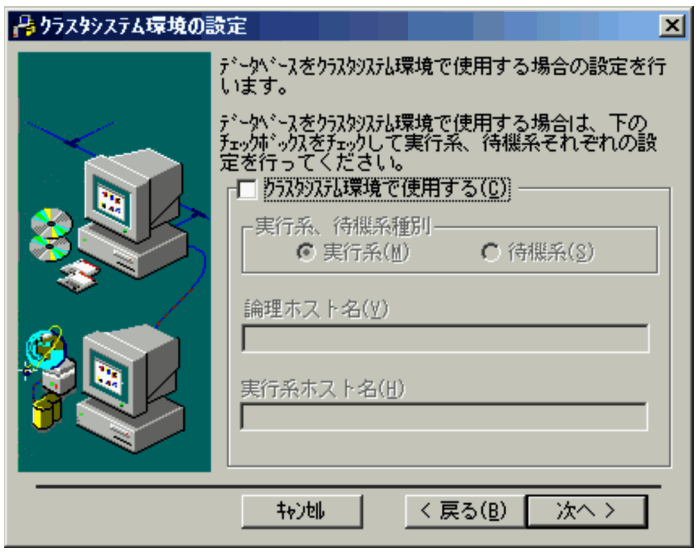
データベースのアップグレードは，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。

データベースをアップグレードする手順を次に示します。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベースをアップグレードする」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。

2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-11 ［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックス

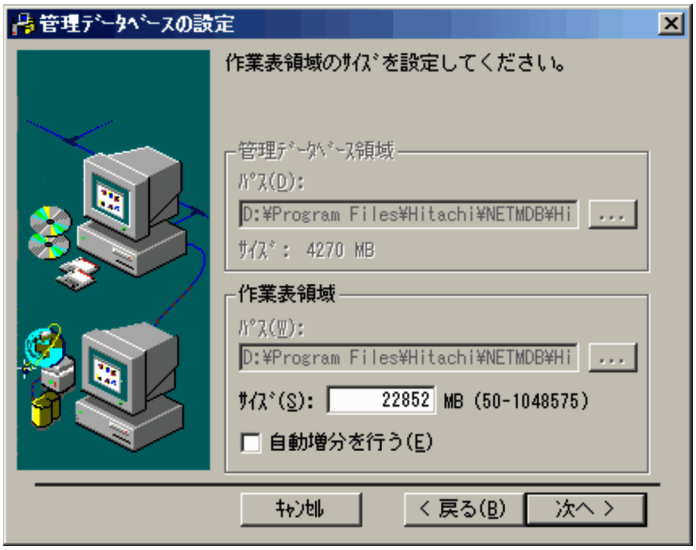


アップグレードするデータベースがクラスタ環境で使用されている場合は，既存のデータベースを新規作成したときと同じ設定にしてください。

3. **［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタ**

ンをクリックする。
［管理データベースの設定］ダイアログボックスが表示されます。

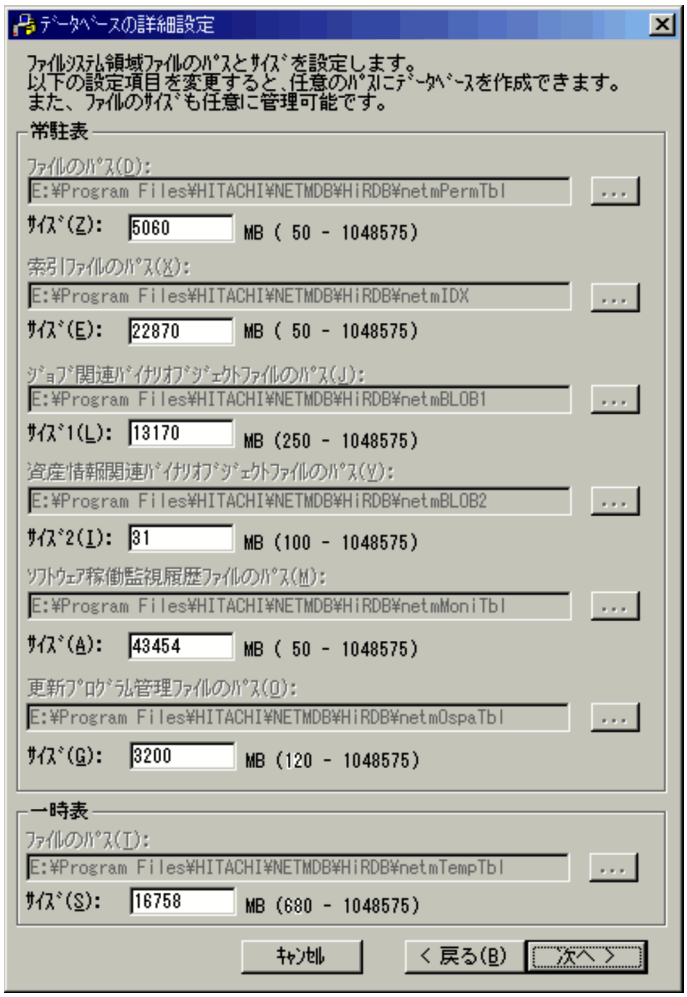
図 7-12　［管理データベースの設定］ダイアログボックス



作業表領域のサイズを変更できます。デフォルトは，新規作成時に設定した値が表示されます。ただし，自動増分を指定している場合は現在のサイズが表示されます。
現在割り当てられている作業表領域の値が，見積もりで算出したサイズと変わらない場合は，自動増分をする設定にしてください。
クラスタシステム環境で使用する場合，「自動増分を行う」チェックボックスは，実行系と待機系で同じ設定にしてください。

4. **［管理データベースの設定］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-13 ［データベースの詳細設定］ダイアログボックス



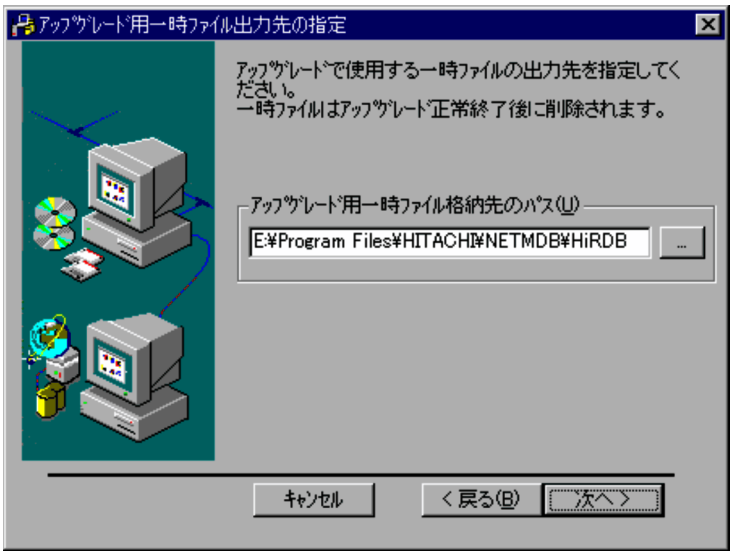
データベース領域ファイルのサイズを変更できます。デフォルトは，新規作成時に設定した値が表示されます。

［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックスで「待機系」を選択した場合，ダイアログボックスは表示されません。

5. **［データベースの詳細設定］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタンをクリックする。**

［アップグレード用一時ファイル出力先の指定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-14　［アップグレード用一時ファイル出力先の指定］ダイアログボックス



データベースのアップグレード時に出力される，一時ファイルの出力先を指定します。

［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックスで「待機系」を選択した場合，ダイアログボックスは表示されません。

アップグレード用一時ファイル格納先のパス

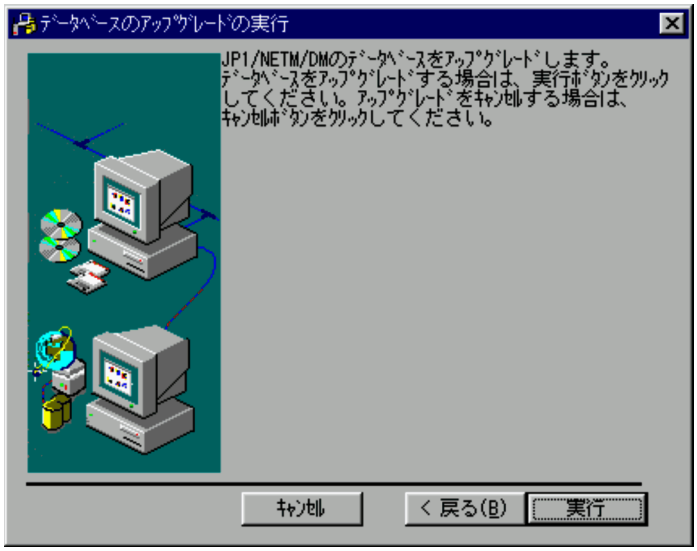
アップグレード時の一時ファイルの出力先フォルダを指定します。指定したフォルダには，次のファイルが出力されます。

- netmUpgTemp
- netmdm_cabinet
- netmdm_collect
- netmdm_inspackage
- netmdm_jobgen_collect
- netmdm_jobgen_pack
- netmdm_package_inf
- UPGTemp.log

6. **［アップグレード用一時ファイル出力先の指定］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタンをクリックする。**

［データベースのアップグレードの実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-15　［データベースのアップグレードの実行］ダイアログボックス



7. **［実行］ボタンをクリックする。**

   データベースがアップグレードされます。

   アップグレードが完了すると，アップグレード時の一時ファイルは自動的に削除されます。

   アップグレード時にデータベース領域ファイルのサイズが不足している旨のエラーが表示された場合，必要なデータベース容量を見積もり直して，アップグレード時に十分なサイズを指定してください。

   「データベースのアップグレードが正常終了しました」というメッセージが表示されても，次の表に示すイベントがアプリケーションログに出力されることがあります。この場合，アップグレードは正常終了しているので対処は不要です。

項番	ソース	種類	イベント ID	メッセージ ID
1	HiRDBEmbeddedEdition_JN1	警告	30001	KFPH22004-W
2	HiRDBEmbeddedEdition_JN1	警告	30001	KFPX24231-W
3	HiRDBEmbeddedEdition_JN1	エラー	30001	KFPH22003-E
4	HiRDBEmbeddedEdition_JN1	エラー	30001	KFPH00306-E

なお，データベースをアップグレードした場合，ソフトウェアの稼働監視の抑止履歴と操作履歴は移行されません。［操作ログ一覧］ウィンドウを使用して稼働情報を管理している場合は，dcmmonrst コマンドを使用して稼働情報を移行してください。dcmmonrst コマンドについては，マニュアル「運用ガイド 2」の「4.13　dcmmonrst.exe（稼働情報のデータベースへの格納）」を参照してください。

7.4.4　データベースをバックアップする

データベースをバックアップします。データベースをバックアップするには，データベースマネージャを使用する方法と netmdb_backup.bat コマンドを使用する方法があります。

PC リプレースなど，異なる環境へデータベースを移行する場合のバックアップについては，「付録 A.4(4)　Embedded RDB を使用している場合のデータ移行」を参照してください。

なお，［操作ログ一覧］ウィンドウを使用する場合，管理する操作ログの容量によってデータベースのバックアップに時間が掛かることがあります。

データベースマネージャまたは netmdb_backup.bat コマンドから取得したバックアップを復元する場合は，データベースマネージャの「データベースをバックアップから復元する」を使用します。

次に，データベースのバックアップ方法を説明します。

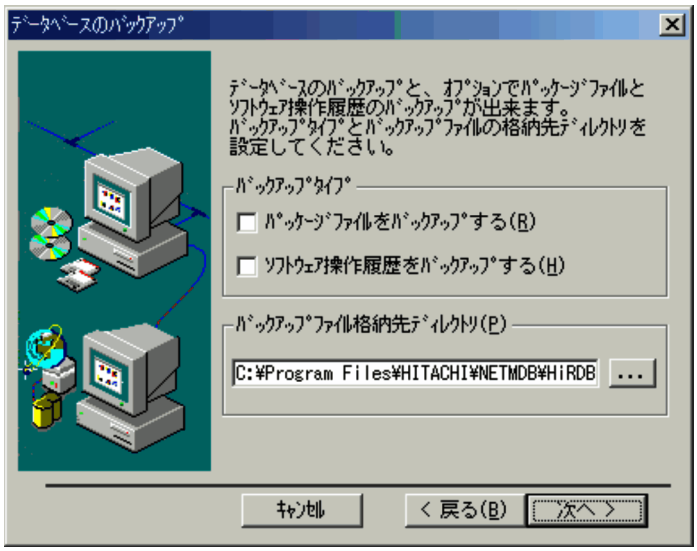
（1）データベースのバックアップ手順

データベースをバックアップする手順を次に示します。

なお，データベースのバックアップは，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベースをバックアップする」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースのバックアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-16 ［データベースのバックアップ］ダイアログボックス



パッケージファイルをバックアップする

データベースのバックアップ時に，パッケージファイルもバックアップするかどうかを選択します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。

ソフトウェア操作履歴をバックアップする

データベースのバックアップ時に，操作履歴格納ディレクトリもバックアップするかどうかを選択します。デフォルトは，チェックボックスがオフです。

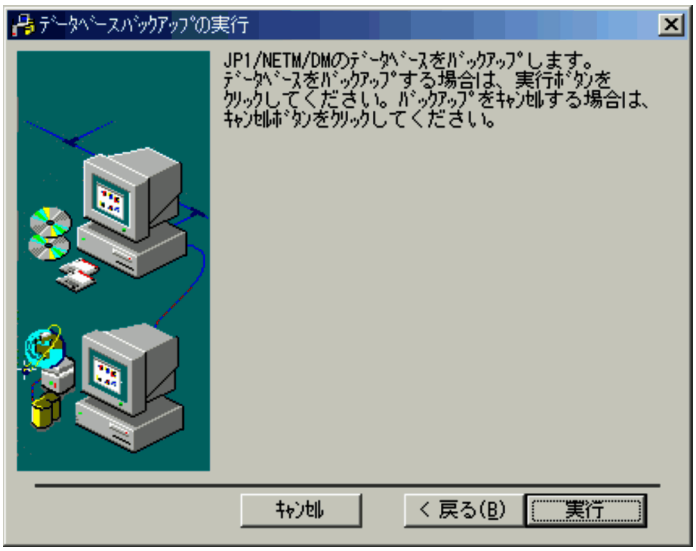
バックアップファイル格納先ディレクトリ

データベースのバックアップ時に生成されるバックアップファイルの格納先ディレクトリを指定します。

3. **［データベースのバックアップ］ダイアログボックスの項目を設定して，［次へ］ボタンをクリックする。**

［データベースバックアップの実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-17　［データベースバックアップの実行］ダイアログボックス



4. **［実行］ボタンをクリックする。**

データベースのバックアップが実行され，バックアップファイルが生成されます。
バックアップファイルは，バックアップファイル格納先ディレクトリ下に，「netmdbbackup」という名前で生成されます。バックアップファイルの名称は変更してもかまいません。
なお，バックアップ実行時に，バックアップ格納先ディレクトリに「netmdbbackup」の名前でバックアップファイルが格納されている場合，バックアップファイルが上書きされます。

パッケージファイルをバックアップする場合

バックアップファイル格納先ディレクトリ下に「RESOURCE」フォルダが作成され，パッケージファイルが格納されます。
なお，バックアップ実行時に，バックアップファイル格納先ディレクトリに「RESOURCE」フォルダがある場合は，「RESOURCE」フォルダが上書きされます。

ソフトウェア操作履歴をバックアップする場合

バックアップファイル格納先ディレクトリ下に「MONITORING」フォルダが作成され，ソフトウェア操作履歴のファイルが格納されます。
なお，バックアップ実行時に，バックアップファイル格納先ディレクトリに「MONITORING」フォルダがある場合は，「MONITORING」フォルダが上書きされます。

(2) コマンドを使用したデータベースのバックアップ

データベースをバックアップする，netmdb_backup.bat コマンドについて説明します。このコマンドは，JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥bin 下に格納

されています。

機能

データベースをバックアップします。パッケージファイルおよびソフトウェア操作履歴もバックアップできます。

形式

```
netmdb_backup.bat [/P]
                  [/h]
                   /i JP1/NETM/DM Managerのインストールディレクトリ
                   /b バックアップファイル格納先ディレクトリ
                   /o 実行結果の出力先ファイル名
```

オプション

- /P

  パッケージファイルをバックアップする場合に指定します。

- /h

  ソフトウェア操作履歴をバックアップする場合に指定します。

- /i

  JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリをフルパスで指定します。

- /b

  バックアップファイル格納先ディレクトリをフルパスで指定します。ディレクトリ名は 150 バイト以内で指定することをお勧めします。極端に長いパスで指定すると，ディレクトリの作成に失敗するおそれがあります。なお，格納先ディレクトリはローカルドライブを指定してください。また，格納先ディレクトリは，半角英数字，半角スペース，および次に示す記号で指定してください。
  「:」，「.」，「¥」，「#」，「@」，「(」，「)」，「「」，「」」

- /o

  実行結果を出力するファイル名をフルパスで指定します。

リターンコード

netmdb_backup.bat コマンド実行時のリターンコードを次の表に示します。

リターンコード	内容
0	正常終了
-1	異常終了

注意事項

- netmdb_backup.bat コマンドの BAT ファイルの内容を変更しないでください。変更した場合，データベースをバックアップできなくなります。
- データベースのバックアップは，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，JP1/NETM/DM Manager の「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。
- netmdb_backup.bat コマンドを使用してデータベースをバックアップする場合，コマンドを実行するユーザに Administrator 権限が必要です。

- データベースのバックアップを実行すると，格納先ディレクトリに以下のファイルまたはフォルダが作成されます。
  ・netmdbbackup ファイル
  ・「RESOURCE」フォルダ
  ・「MONITORING」フォルダ
  バックアップする場合，格納先ディレクトリに指定したパスに上記のファイルおよびフォルダがあるとき，これらは上書きされます。
- netmdb_backup.bat コマンドのオプションは，形式で示した順序で設定してください。

実行例

データベースをバックアップするときに，パッケージファイルおよびソフトウェア操作履歴もバックアップする場合を例に説明します。
この実行例では，各ディレクトリを次のように指定しています。

- JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ
  C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM
- バックアップファイル格納先ディレクトリ
  C:¥NETMDB
- 実行結果の出力先ファイル名
  C:¥NETMDB¥backup.txt

また，コマンドを実行する前に，バックアップファイル格納先ディレクトリおよび実行結果の出力先ファイルの格納先ディレクトリを作成しておいてください。
コマンドの実行例を次に示します。

```
netmdb_backup.bat /P /h /i "C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM" /b
C:¥NETMDB /o C:¥NETMDB¥backup.txt
```

7.4.5 データベースをバックアップから復元する

JP1/NETM/DM が使用する Embedded RDB に，データベースマネージャまたは netmdb_backup.bat コマンドで取得したバックアップファイルから，データを復元する手順を次に示します。

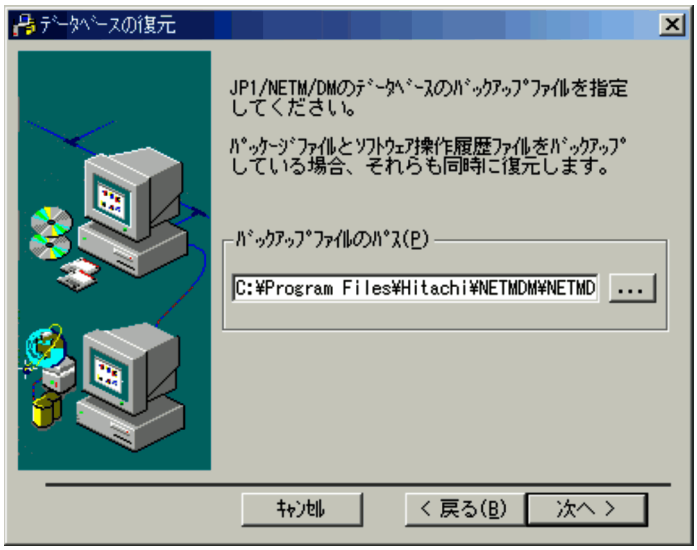
注意事項

- データを復元するデータベースは，バックアップを取得したデータベースと同じ環境になっている必要があります。
- データベースのアップグレード前に取得したバックアップファイルは，アップグレード後はデータベースの構造が異なるため復元できません。データベースをアップグレード後，再度バックアップを取得してください。
- ［操作ログ一覧］ウィンドウを使用している場合，管理する操作ログの容量によってデータベースの復元に時間が掛かることがあります。

データベースの復元は，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，JP1/NETM/DM Manager の「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベースをバックアップから復元する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの復元］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-18 ［データベースの復元］ダイアログボックス



バックアップファイルのパス

データベースを復元するバックアップファイルを指定します。なお，OS が 64 ビット版の Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) の場合，%Systemroot%¥system32 ディレクトリ下にあるバックアップファイルは指定できません。

3. **［データベースの復元］ダイアログボックスでバックアップファイルを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベース復元の実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-19　［データベース復元の実行］ダイアログボックス



4. **［実行］ボタンをクリックします。**
   データベースが復元されます。

7.4.6　データベースを再編成する

Embedded RDB では，レコードが削除された領域は再利用できない領域になります。このため，データベース領域に再利用できない領域が増えると，データベース領域の使用率を圧迫することがあります。

そこで，データベース領域の使用率が 80% 以上になった場合は，データベースを再編成して領域を再利用できるようにする必要があります。

データベース領域の使用率が 80% 以上かどうかは，イベントログに次の ID のメッセージが表示されるかどうかで判断できます。

- KFPA12300-I
- KFPH00211-I

メッセージの詳細については，マニュアル「HiRDB Version 8 メッセージ」を参照してください。

なお，データベースを再編成してもデータベースの容量不足を示すメッセージが表示される場合は，データベースの容量を拡張する必要があります。「データベースをアップグレードする」から，データベース領域ファイルのサイズを大きくしてください。

メッセージに出力される RD エリア（Embedded RDB で表およびインデックスを格納する論理的なエリア）の名称，データベースを再編成する範囲，および拡張するデータベース領域ファイルの対応を次の表に示します。

表 7-3 メッセージ，再編成する範囲および拡張するデータベース領域ファイルの対応

メッセージの RD エリア名称	再編成する範囲	拡張するデータベース領域ファイル
NETMDM_NETM_TABLES	全体	常駐表ファイル
NETMDM_NETM_INDEXES	全体	索引ファイル
NETMDM_COLLECT_SERVPATH NETMDM_EXECUTION_SITE_SYSINF NETMDM_EXECUTION_SYSINF NETMDM_JOBGEN_COLLECT_DIR NETMDM_JOBGEN_COLLECT_SCRPTF NETMDM_JOBGEN_COLLECT_SYSINF NETMDM_JOBGEN_PACK_ATTRINF NETMDM_JOBGEN_PACK_SCRPTF NETMDM_JOBGEN_SOFT_CONDF NETMDM_JOBSCRIPT_SCRPTF NETMDM_SYSTEMJOB_REQUESTFILE NETMDM_SYSTEMJOB_RESULTFILE NETMDM_MNGLIST_LIST NETMDM_SCHEDULE_SYSINF NETMDM_JOBGEN_MESSAGE	ジョブ	ジョブ関連バイナリオブジェクトファイル
NETMDM_CABINET_SYSINF NETMDM_PACKAGE_INF_SYSINF NETMDM_PACKAGE_PACKAGE NETMDM_PACKAGE_SCRPTF NETMDM_INSPACKAGE_SYSINF NETMDM_USERINVLIST_ITEMVALS NETMDM_USERINVLIST_SYSINF	パッケージ，インベントリ	資産情報関連バイナリオブジェクトファイル
NETMDM_NETM_MONITORING	稼働監視履歴	ソフトウェア稼働監視履歴ファイル
NETMDM_OSPATCH_FILE*n*※ NETMDM_OSPATCH_SCRIPT	更新プログラム	更新プログラム管理ファイル
NETMDM_NETM_TEMP_TABLES NETMDM_NETM_TEMP_INDEXES NETMDM_T6_DIR*n*※ NETMDM_T6_SCRPTF*n*※ NETMDM_T7_CONDF*n*※ NETMDM_T11_ATTRINF*n*※ NETMDM_T11_SCRPTF*n*※ NETMDM_T12_UINVINF*n*※ NETMDM_T14_ITEMVALS*n*※ NETMDM_T15_ITEMVALS*n*※ NETMDM_T30_MESSAGE*n*※	全体	一時表ファイル

注※ *n* には 1 ～ 8 の数字が入ります。

Embedded RDB を再編成するには，データベースマネージャを使用する方法と，コマンドを使用する方法があります。それぞれについて説明します。

（1）データベースマネージャを使用したデータベースの再編成

データベースマネージャを使用してデータベースを再編成する手順を次に示します。

なお，データベースの再編成は，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベースを再編成する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの再編成］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-20　［データベースの再編成］ダイアログボックス



再編成範囲

データベースを再編成する範囲を選択できます。

「全体」チェックボックスをオンにすると，ほかのすべてのチェックボックスが非活性になります。「全体」チェックボックスをオフにすると，すべてのチェックボックスが活性化します。

また，「全体」以外のチェックボックスをオンにすると，「全体」チェックボックスが非活性になります。デフォルトは，「全体」チェックボックスがオンです。

再編成される範囲に対応するテーブルの一覧を次の表に示します。

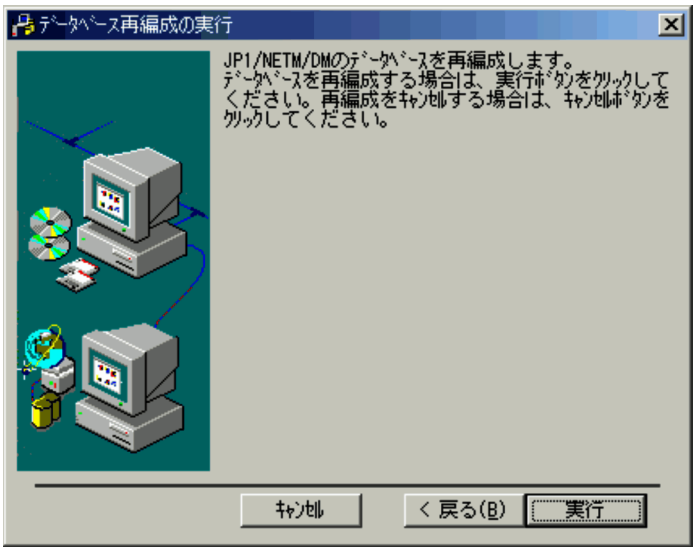
表 7-4 再編成される範囲に対応するテーブル一覧

再編成範囲		テーブル
全体	システム構成	netmdm_nnm_management，netmdm_system，netmdm_lastupdate，netmdm_host_withoutdm，netmdm_system_delete，netmdm_systeminf，netmdm_suspend
	パッケージ	netmdm_cabinet，netmdm_package，netmdm_package_inf
	あて先	netmdm_id，netmdm_id_policy，netmdm_identry，netmdm_node，netmdm_node_policy，netmdm_node_policy_detail
	ジョブ	netmdm_collect，netmdm_execution，netmdm_execution_site，netmdm_execution_summary，netmdm_jobgen，netmdm_jobgen_collect，netmdm_jobgen_id，netmdm_jobgen_node，netmdm_jobgen_pack，netmdm_jobgen_soft，netmdm_jobgen_system，netmdm_jobgen_userinv，netmdm_jobsch，netmdm_jobsch_site，netmdm_jobscript，netmdm_schedule，netmdm_stscnt，netmdm_jobgen_msg，netmdm_jobgen_monitoring，netmdm_stscnt_site，netmdm_stscnt_summary，netmdm_systemjob
	インベントリ	netmdm_clientlist，netmdm_inspackage，netmdm_inventry，netmdm_mnglist，netmdm_registry，netmdm_reglist，netmdm_softwaredic，netmdm_softwaredel，netmdm_softwarelicence，netmdm_userinventry，netmdm_userinvlist，netmdm_oidlist，netmdm_discovery_setup，netmdm_discovery_community，netmdm_discovery_info，netmdm_discovery_options，netmdm_monitoring_filter，netmdm_monitoring_policy，netmdm_monitoring_program，netmdm_monitoring_permission，netmdm_monitoring_result，netmdm_monitoring_work，netmdm_vidlist，netmdm_activedirectory，netmdm_adproperty，netmdm_addictionary，netmdm_adupdate，netmdm_monitoring_webfilter
	稼働監視履歴	netmdm_monitoring_security，netmdm_monitoring_workresult
	更新プログラム	netmdm_ospatch_patchinf，netmdm_ospatch_productref，netmdm_ospatch_classref，netmdm_ospatch_xmlinf，netmdm_ospatch_script

3. **［データベースの再編成］ダイアログボックスで再編成する範囲を設定し，［次へ］ボタンをクリックします。**

［データベース再編成の実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-21　［データベース再編成の実行］ダイアログボックス



4. **［実行］ボタンをクリックします。**
　データベースの再編成が実行されます。

(2) コマンドを使用したデータベースの再編成

データベースを再編成する，netmdb_reorganization.bat **コマンド**について説明します。このコマンドは，JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥bin 下に格納されています。

機能

　データベースを再編成します。再編成する範囲は「全体」になります。

形式

```
netmdb_reorganization.bat ポート番号
                          管理者ユーザID
                          パスワード
                        /i JP1/NETM/DM Managerのインストールディレクトリ
                          /o 実行結果の出力先ファイル名
```

オプション

- **ポート番号**
  データベースに接続するポート番号を指定します。
- **管理者ユーザ** ID
  データベースにログオンする管理者ユーザ ID を指定します。
- **パスワード**
  データベースにログオンするためのパスワードを指定します。
- /i
  JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリをフルパスで指定します。

- /o
  このオプションを指定すると，データベースの再編成の結果を通知するファイルが出力されます。実行結果を出力するファイル名をフルパスで指定します。

リターンコード

netmdb_reorganization.bat コマンド実行時のリターンコードを次の表に示します。

リターンコード	内容
0	正常終了
-1	異常終了

注意事項

- netmdb_reorganization.bat コマンドの BAT ファイルの内容を変更しないでください。変更した場合，データベースを再編成できなくなります。
- データベースの再編成は，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，JP1/NETM/DM Manager の「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。
- netmdb_reorganization.bat コマンドを使用してデータベースを再編成する場合，コマンドを実行するユーザに Administrator 権限が必要です。
- netmdb_reorganization.bat コマンドのオプションは，形式で示した順序で設定してください。

実行例

netmdb_reorganization.bat コマンドを使用して，データベースを再編成する例を説明します。
この実行例では，各ディレクトリを次のように指定しています。

- JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ
  C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM
- 実行結果の出力先ファイル名
  C:¥NETMDB¥reorg.txt

また，コマンドを実行する前に，実行結果の出力先ファイルの格納先ディレクトリを作成しておいてください。
コマンドの実行例を次に示します。

```
netmdb_reorganization.bat ポート番号 管理者ユーザID パスワード /i
"C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM" /o C:¥NETMDB¥reorg.txt
```

7.4.7 データベースのパスワードを変更する

データベースにログインするためのパスワードを変更する手順を次に示します。

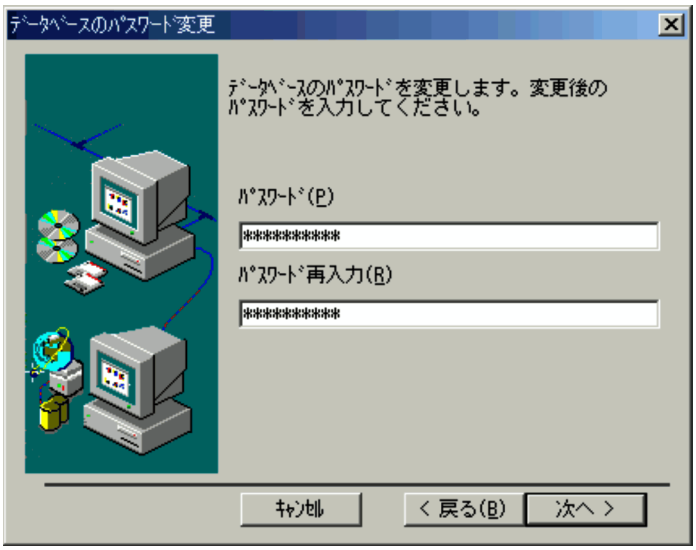
なお，データベースのパスワードの変更は，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベースのパスワードを変更する」を選択**

して，［次へ］ボタンをクリックする。
［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。

2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースのパスワード変更］ダイアログボックスが表示されます。

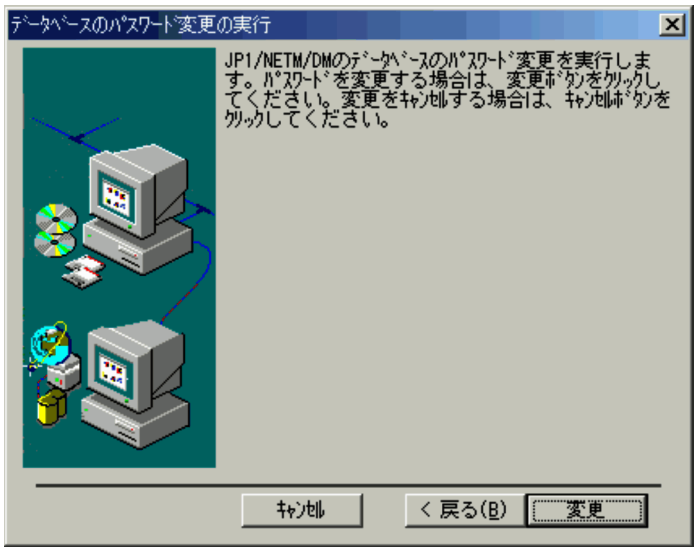
図 7-22　［データベースのパスワード変更］ダイアログボックス



変更後のパスワードを入力してください。

3. **［データベースのパスワード変更］ダイアログボックスでパスワードを指定し，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースのパスワード変更の実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-23　［データベースのパスワード変更の実行］ダイアログボックス



4. **［変更］ボタンをクリックする。**
   データベースのパスワードが変更されます。次回以降データベースにログインするときは，ここで設定したパスワードを使用してください。

7.4.8　データベース上の不要なインベントリ情報を削除する

ファイルを使ってシステム構成情報を更新した場合など，削除したホストのインベントリ情報が削除されないで，そのままデータベースに残ることがあります。このようなインベントリ情報は，JP1/NETM/DM で使用されることはなく，その分だけデータベースの空き領域が少なくなります。これらの不要なインベントリ情報を，データベースマネージャから一括して削除できます。

不要なインベントリ情報は次のような場合に発生します。

- ファイルを作成してシステム構成を更新した場合に，ファイルに記述されていないホストが削除された。
- ［システム構成］ウィンドウでホストを削除した場合に，関連するインベントリ情報を削除しなかった。
- システム構成にないホストからインベントリ情報が通知された。

大量のホストを削除した場合には，不要なインベントリ情報が多数残っているおそれがあります。このような場合には，不要なインベントリ情報を削除することをお勧めします。

データベースマネージャを使って削除できるインベントリ情報は，システム構成上に存在しないホストについての，次の表に示すインベントリ情報です。

表 7-5　削除対象となるインベントリ情報

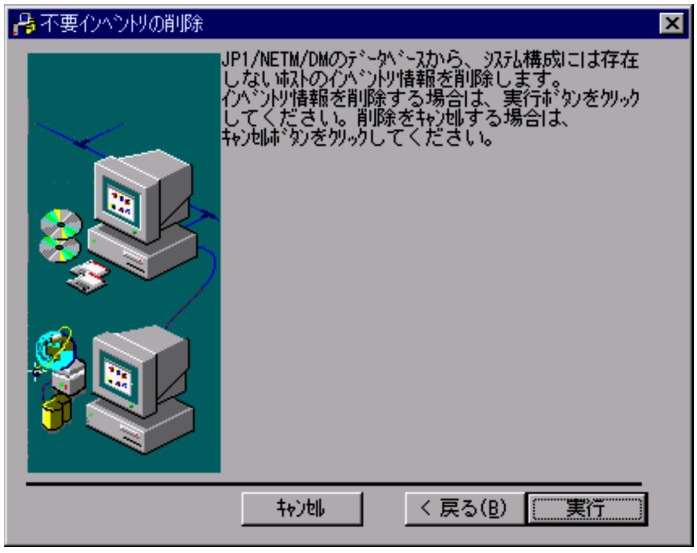
分類	インベントリ項目
システム情報	システム情報
	レジストリ情報
ソフトウェア情報	インストールパッケージ情報
	ソフトウェアインベントリ情報
	ウィルス対策製品情報
	Microsoft Office 製品情報
ユーザインベントリ情報	ユーザインベントリ情報

不要なインベントリ情報を削除する方法を次に示します。

なお，不要なインベントリ情報を削除する場合は，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，「Remote Install Server」サービスを停止してから実行してください。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで「データベース上の不要なインベントリ情報を削除する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの認証情報］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［データベースの認証情報］ダイアログボックスで管理者ユーザ ID とパスワードを指定して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［不要インベントリの削除］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-24　［不要インベントリの削除］ダイアログボックス



3. **［実行］ボタンをクリックする。**

Embedded RDB 上から不要なインベントリ情報が削除されます。情報が削除されたあとは，データベースが自動的に再編成され，Embedded RDB の空き容量が確保されます。

7.5 データベースマネージャの操作方法（Microsoft SQL Server または Oracle の場合）

Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合に，JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースを作成したり，メンテナンスしたりするには，JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つである**データベースマネージャ**を使用します。データベースマネージャは，メニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［データベースマネージャ］を選択して起動します。

なお，データベースマネージャを使用するときは次のことに注意してください。

- JP1/NETM/DM のリレーショナルデータベースを使用するアプリケーションは，すべて終了してください。
  JP1/NETM/Asset Information Manager と連携している場合は，JP1/NETM/Asset Information Manager のすべてのサービス，タスク，コマンドなども停止してください。
- データベースマネージャは，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で「Remote Install Server」を停止したあと，起動してください。
- データベースマネージャは，Administrator 権限を持つユーザだけが使用できます。

データベースマネージャが起動すると，データベースマネージャでの操作を選択する［Welcome］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-25　［Welcome］ダイアログボックス



なお，Embedded RDB を使用している場合は，［Welcome］ダイアログボックスに表示される項目が異なります。Embedded RDB を使用している場合のデータベースマネージャの操作については，「7.4　データベースマネージャの操作方法（Embedded RDB の場合）」を参照してください。

データベースマネージャで実行したい操作を選択します。

データベースを新規作成する

データベースを新規に作成します。JP1/NETM/DM Manager のインストール後，この項目からデータベースを新規に作成する必要があります。

ファイルシステム上の管理ファイルを移行する

JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM の簡易データベースから，リレーショナルデータベースへ，データベースを移行します。この項目を実行する場合は，リレーショナルデータベースが作成されている必要があります。

データベース上の資源をファイルシステムに移行する

パッケージデータの格納先をリレーショナルデータベースからファイルシステムへ移行します。なお，この項目は，サーバのインストール時に Oracle を選択した場合，非活性になります。

データベースをアップグレードする

データベースをアップグレードします。

データベースを回復する

リレーショナルデータベースを障害から回復させます。なお，この項目は，サーバ

のインストール時に Oracle を選択した場合，非活性になります。

データベース上の不要インベントリ情報を削除する
データベース上に残っている不要なインベントリ情報を削除し，データベースの空き領域を増やします。

次に，各項目での操作について説明します。

7.5.1 データベースを新規作成する

JP1/NETM/DM のデータベースを新規に作成します。

なお，データベース領域のパスは，半角英数字，半角スペース，および次に示す記号を使用して，実在するディレクトリを指定してください。

「:」，「.」，「¥」，「#」，「@」，「(」，「)」

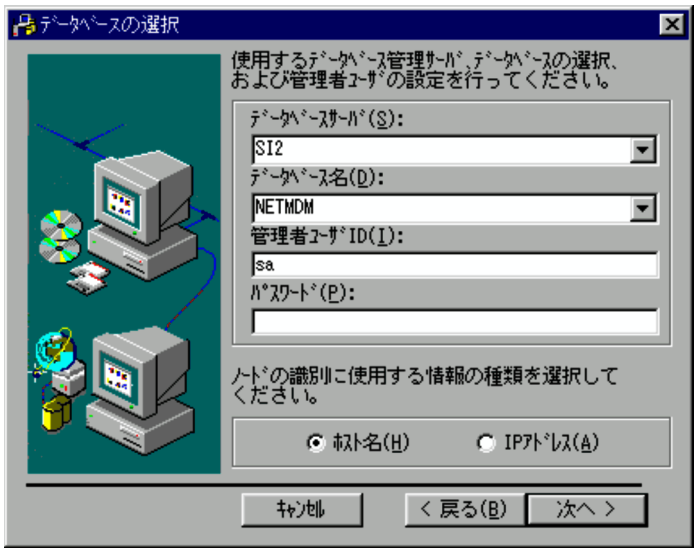
データベースを作成する手順は，Microsoft SQL Server を使用している場合と，Oracle を使用している場合で異なります。それぞれについて説明します。

（1）リレーショナルデータベースの新規作成（Microsoft SQL Server の場合）

Microsoft SQL Server の場合のリレーショナルデータベースを新規に作成する手順を次に示します。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベースを新規作成する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの選択］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-26 ［データベースの選択］ダイアログボックス



データベースサーバ

リレーショナルデータベースのサーバを設定します。

ネットワークプロトコルに，TCP/IP ソケットを使用している場合はサーバ名，名前付きパイプを使用している場合はコンピュータ名を設定します。

名前付きインスタンスを使用する場合，次の形式でホスト名を指定してください。

データベースサーバのホスト名 ¥ インスタンス名

データベース名

JP1/NETM/DM Manager のセットアップで設定したデータベース名を設定します。

管理者ユーザ ID

リレーショナルデータベースのシステム管理者（SA）の ID を設定します。管理者ユーザ ID とパスワードを設定することで，不当なユーザのアクセスを防ぐことができます。

パスワード

管理者ユーザ ID に対応したパスワードを設定します。入力したパスワードはアスタリスク（*）で表示されます。

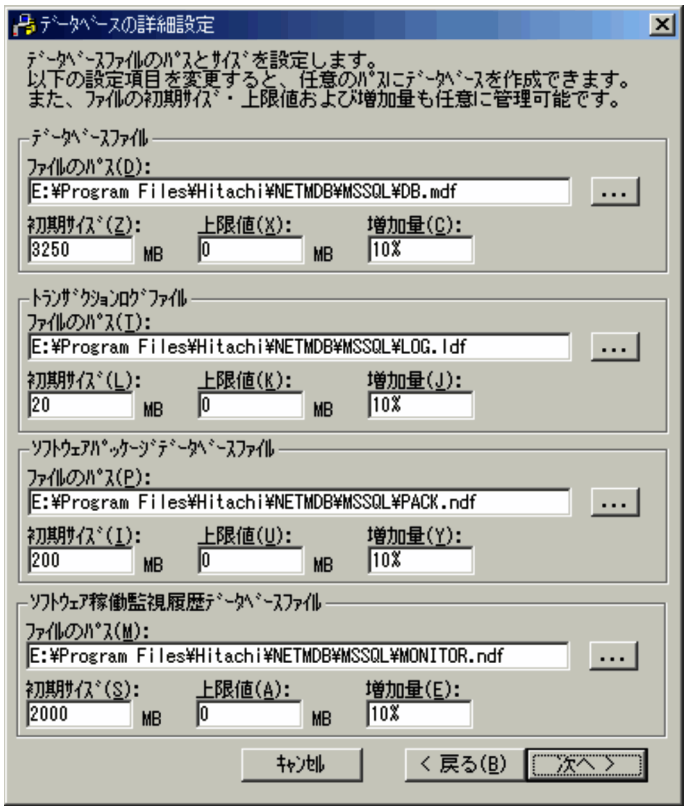
ホスト名または IP アドレスの選択

ノードの識別に使用する情報の種類を選択します。

2. **項目を設定して［次へ］ボタンをクリックする。**

［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-27　［データベースの詳細設定］ダイアログボックス



このダイアログボックスでは，データベースファイルのパス，サイズの初期値，上限値，および増加量を設定できます。

［...］ボタンをクリックすると，ファイルのパスを参照して設定できます。

なお，OS が 64 ビット版の Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) の場合，%Systemroot%¥system32 ディレクトリ下のパスは設定できません。また，データベースマネージャがインストールされているマシンとは別のマシンにデータベースを作成する場合，データベースファイルのパスは，実在するパスを指定してください。実在しないパスを指定したときは，データベースの作成に失敗します。

各サイズの算出方法については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「5.4　データベース容量の見積もり」を参照してください。それぞれのデフォルト値を次の表に示します。

表 7-6 データベースの詳細設定のデフォルト値（Microsoft SQL Server の場合）

ファイルの種類	パス	初期サイズ（単位：メガバイト）	上限値（単位：メガバイト）※1	増加量※2
データベースファイル	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥MSSQL¥DB.mdf	3,250	0	10%
トランザクションログファイル	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥MSSQL¥LOG.ldf	20	0	10%
ソフトウェアパッケージデータベースファイル	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥MSSQL¥PACK.ndf	200	0	10%
ソフトウェア稼働監視履歴データベースファイル※3	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥MSSQL¥MONITOR.sdf	2,000	0	10%

注※1

0 を指定すると，ディスクがいっぱいになるまでファイルが拡張されます。

注※2

1 回の増加量をメガバイト単位またはパーセント（%）単位で指定します。数値だけを指定した場合はメガバイト，「%」を付けた場合はパーセントが増加の単位となります。

注※3

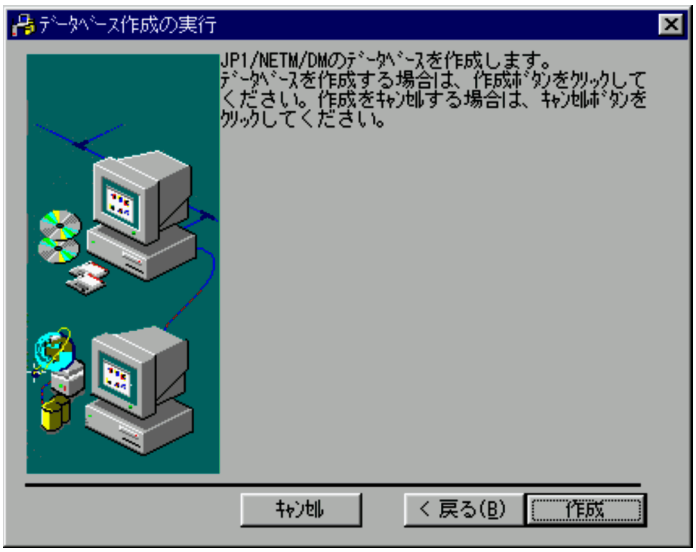
ソフトウェアの稼働監視機能で［操作ログ一覧］ウィンドウを使用しない場合，ソフトウェア稼働監視履歴データベースファイルは使用されないため，小さいサイズを指定することをお勧めします。

Microsoft SQL Server では，更新プログラムの管理用の領域は「データベースファイル」に含まれます。

3. **［次へ］ボタンをクリックする。**

［データベース作成の実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-28　［データベース作成の実行］ダイアログボックス



4. **［作成］ボタンをクリックする。**
   リレーショナルデータベースが作成されます。リレーショナルデータベースで使用するファイル内にデータがあるときは，データの初期化を確認するメッセージが表示されます。

（2） リレーショナルデータベースの新規作成（Oracle の場合）

Oracle の場合のリレーショナルデータベースを新規に作成する手順を次に示します。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベースを新規作成する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データソースの設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-29 ［データソースの設定］ダイアログボックス



データソース名

データソース名は自動的に設定されます。指定できません。

ユーザ ID

ユーザを作成した場合は，ユーザ名を指定してください。このとき，作成したユーザには DBA ロール権限が与えられている必要があります。ユーザを作成していない場合は，「system」と指定してください。

パスワード

ユーザを作成した場合は，ユーザのパスワードを指定してください。作成していない場合は，system ユーザのパスワードを指定してください。

ネット・サービス名

次の形式で指定してください。「NETM_ 接続先サーバ名」
接続先サーバ名は DNS 名称を含まない名称で指定してください。
< 接続先サーバ名が「dmp380.Hitachi.co.jp」の場合の例 >
NETM_dmp380

2. **項目を設定して［次］ボタンをクリックする。**

［表領域の設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-30　［表領域の設定］ダイアログボックス



［表領域の設定］ダイアログボックスでは，作成する表領域名を指定します。

ユーザ表領域

ユーザ表領域の表領域名を設定します。デフォルトは「NETM_USER_DATA」です。

インデックス表領域

インデックス表領域の表領域名を設定します。デフォルトは「NETM_INDEX_DATA」です。

一時表領域

一時表領域の表領域名を設定します。デフォルトは「NETM_TEMP_DATA」です。

ロールバック表領域

ロールバック表領域の表領域名を設定します。デフォルトは「NETM_ROLLBACK_DATA」です。

ソフトウェア稼働監視履歴表領域

ソフトウェア稼働監視履歴表領域の表領域名を設定します。デフォルトは「NETM_MONITOR_DATA」です。

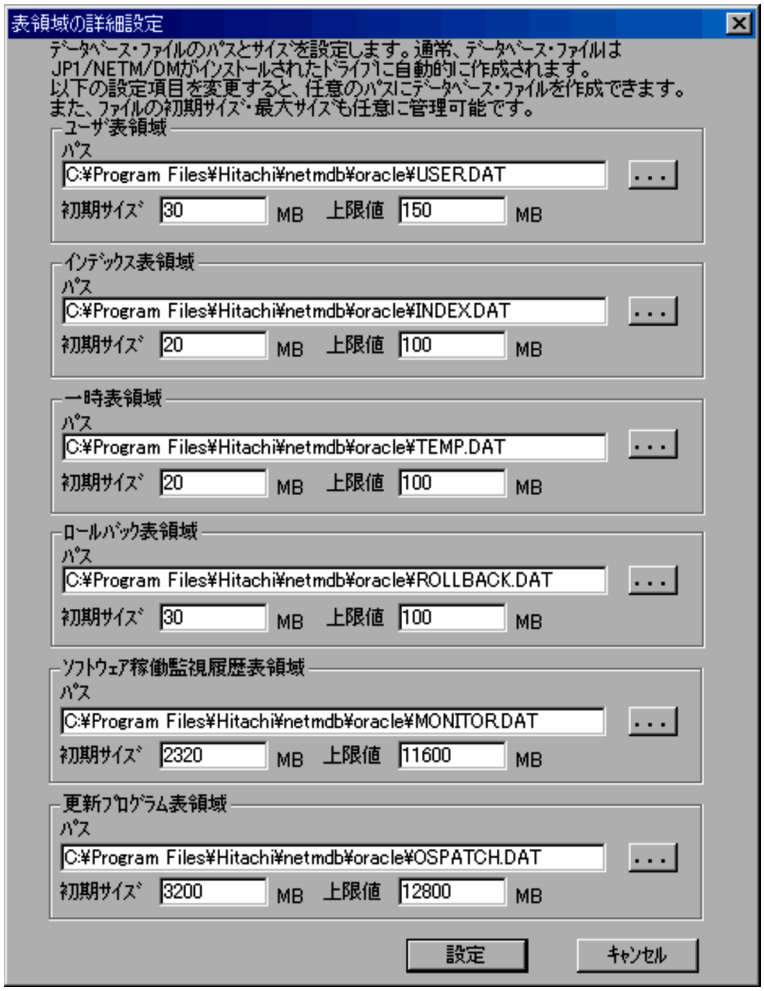
更新プログラム管理表領域

更新プログラム管理表領域の表領域名を設定します。デフォルトは「NETM_OSPATCH_DATA」です。

［詳細］ボタン

［表領域の詳細設定］ダイアログボックスが表示され，データベースファイルのパス，サイズの初期値，および上限値を設定できます。

図 7-31 ［表領域の詳細設定］ダイアログボックス



［...］ボタンをクリックすると，ファイルのパスを参照して設定できます。

なお，OS が Windows Server 2003 (x64) の場合，%Systemroot%¥system32 ディレクトリ下のパスは設定できません。また，データベースマネージャがインストールされているマシンとは別のマシンにデータベースを作成する場合，データベースファイルのパスは，実在するパスを指定してください。実在しないパスを指定したときは，データベースの作成に失敗します。

各サイズの算出方法については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「5.4　データベース容量の見積もり」を参照してください。それぞれのデフォルト値を次の表に示します。

表 7-7 表領域の詳細設定のデフォルト値（Oracle の場合）

表領域の種類	パス	初期サイズ（単位：メガバイト）	上限値（単位：メガバイト）
ユーザ表領域	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥oracle¥USER.DAT	30	150
インデックス表領域	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥oracle¥INDEX.DAT	20	100
一時表領域	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥oracle¥TEMP.DAT	20	100 ※1
ロールバック表領域	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥oracle¥ROLLBACK.DAT	30	100 ※2
ソフトウェア稼働監視履歴表領域※3	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥oracle¥MONITOR.DAT	2,320	11,600
更新プログラム管理表領域	C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDB¥oracle¥OSPATCH.DAT	3,200	12,800

注※ 1

通常はユーザ表領域の 60% の大きさを指定してください。

注※ 2

通常はユーザ表領域の 10% の大きさを指定してください。

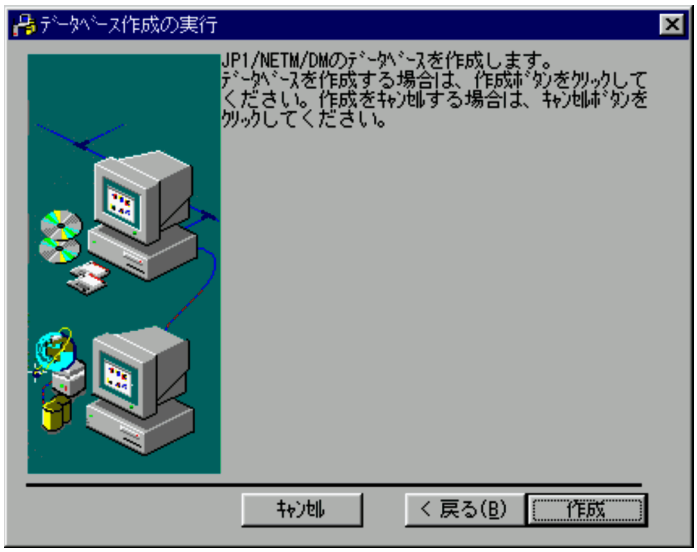
注※ 3

ソフトウェアの稼働監視機能で［操作ログ一覧］ウィンドウを使用しない場合，ソフトウェア稼働監視履歴表領域は使用されないため，小さいサイズを指定することをお勧めします。

3. **［次］ボタンをクリックする。**

［データベース作成の実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-32　［データベース作成の実行］ダイアログボックス



4. **［作成］ボタンをクリックする。**
   リレーショナルデータベースが作成されます。リレーショナルデータベースで使用するファイル内にデータがあるときは，データの初期化を確認するメッセージが表示されます。

7.5.2　ファイルシステム上の管理ファイルを移行する

JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースからリレーショナルデータベースに移行する場合，あらかじめ，新規にリレーショナルデータベースを作成します。その後，作成したリレーショナルデータベースに，既存の JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースの内容を移行します。

簡易データベースから，リレーショナルデータベースへ移行した場合に，制限される内容については，「7.4.2(1)　リレーショナルデータベースへ移行するときの制限」を参照してください。

JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースから，リレーショナルデータベースへ移行する手順を次に示します。

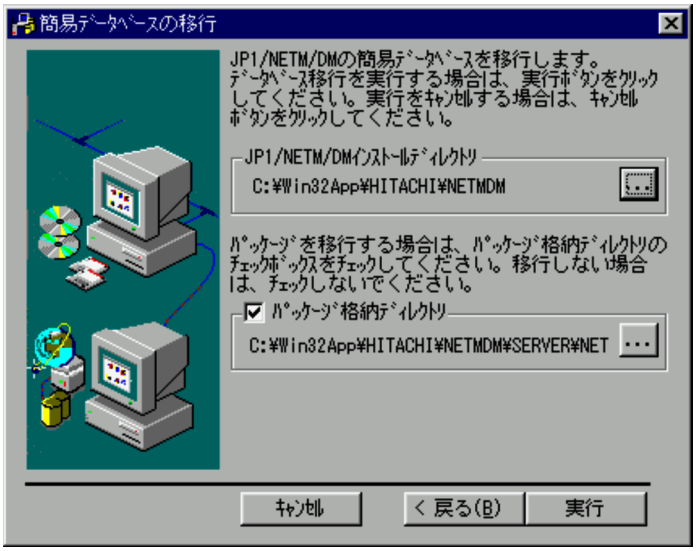
注意事項

簡易データベースからリレーショナルデータベースへ移行する際に，パッケージ格納ディレクトリを変更した場合は，以前のパッケージ格納ディレクトリのファイルを，新しく設定したパッケージ格納ディレクトリへ移動してから次の作業を実施してください。

1. ［Welcome］**ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「ファイルシステム上の管理ファイルを移行する」を選択して，［次**

へ］ボタンをクリックする。
［簡易データベースの移行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-33　［簡易データベースの移行］ダイアログボックス



JP1/NETM/DM インストールディレクトリまたはパッケージ格納ディレクトリを変更するときは，それぞれの項目に付けられている［...］ボタンをクリックします。また，パッケージを移行する場合は，「パッケージ格納ディレクトリ」のチェックボックスをオンにしてください。

2. **［実行］ボタンをクリックする。**
データベースが，JP1/NETM/DM Manager の簡易データベースから，リレーショナルデータベースに移行されます。

7.5.3　データベース上の資源をファイルシステムに移行する（Microsoft SQL Server）

パッケージデータの格納先を，リレーショナルデータベースからファイルシステムへ移行する手順を次に示します。

なお，この項目は，サーバのインストール時に Oracle を選択した場合，非活性になります。

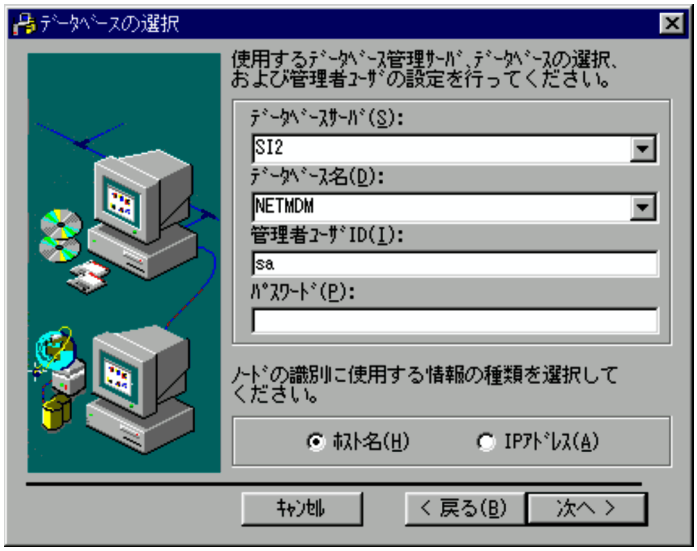
注意事項

パッケージデータの格納先をファイルシステムへ移行する場合は，事前に，メンテナンスウィザードでパッケージデータの格納先をリレーショナルデータベースからファイルシステムに変更しておく必要があります。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベース上の資源をファイルシステムに移行する」を選択して，**

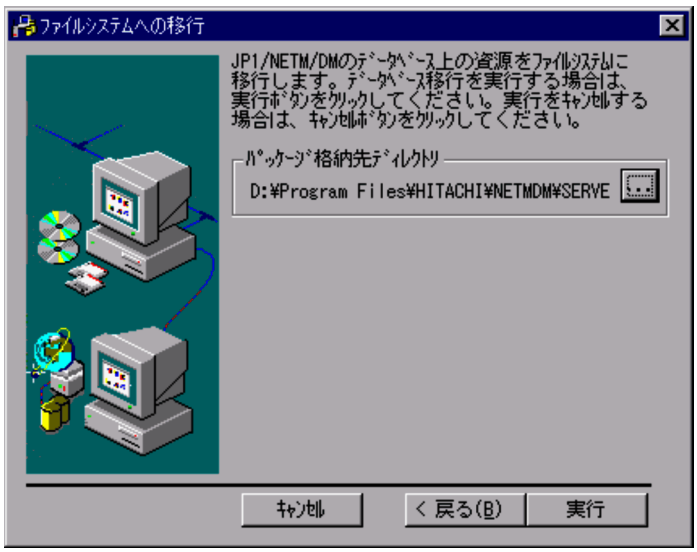
［次へ］ボタンをクリックする。
［データベースの選択］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-34 ［データベースの選択］ダイアログボックス



2. **移行の対象となるリレーショナルデータベースの情報を設定し，［次へ］ボタンをクリックする。**
［ファイルシステムへの移行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-35 ［ファイルシステムへの移行］ダイアログボックス



パッケージ格納先ディレクトリを変更するときは，項目に付けられている［...］ボタンをクリックします。

3. **［実行］ボタンをクリックする。**
パッケージ格納ディレクトリが，リレーショナルデータベースからファイルシステムへと移行されます。

7.5.4 データベースをアップグレードする

リレーショナルデータベースをアップグレードします。

データベースをアップグレードする手順は，Microsoft SQL Server を使用している場合と，Oracle を使用している場合で異なります。それぞれについて説明します。

（1）アップグレード時の注意事項

● JP1 Version 7i より前のバージョンを使用している場合

JP1 Version 7i より前のバージョンで次に示すリレーショナルデータベースを使用している場合は，JP1/NETM/DM Manager をアップグレードする際に，リレーショナルデータベースもアップグレードする必要があります。

- Oracle8i R8.1.5 または R8.1.6
- Oracle8
- Microsoft SQL Server 6.5

JP1/NETM/DM Manager のアップグレードの際にリレーショナルデータベースをアップグレードする場合は，リレーショナルデータベースをアップグレードしたあとで，データベースマネージャを使用して JP1/NETM/DM のデータベースをアップグレードしてください。

●「Asset Information Manager Limited」をインストールしている場合

「Asset Information Manager Limited」をインストールしている場合，JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースをアップグレードまたは削除するときは，サービス，タスク，コマンドなど，「Asset Information Manager Limited」で実行中の業務をすべて停止させてください。

また，ODBC データソースで，接続プールが設定されていると，「Asset Information Manager Limited」の業務を停止させてから，接続プールで設定されているタイムアウトの時間が経過するまで接続状態が継続されます。そのため，接続状態が解除されるまで待ってから，アップグレードまたは削除を実行してください。

（2）データベースのアップグレード（Microsoft SQL Server の場合）

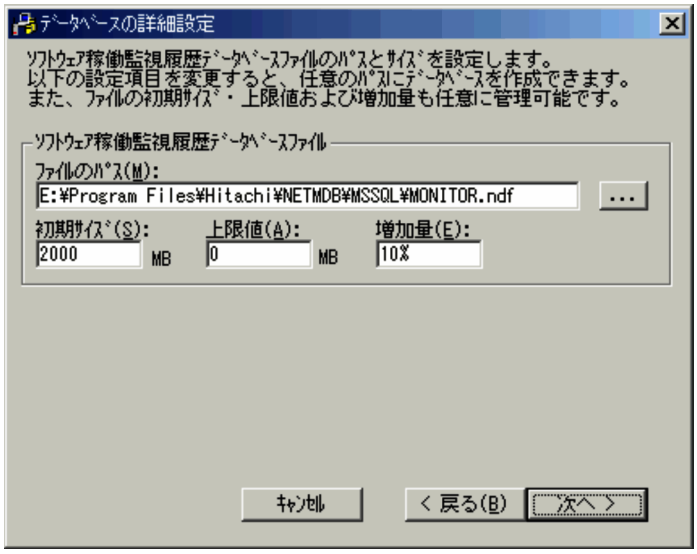
Microsoft SQL Server の場合の，データベースのアップグレード手順を次に示します。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベースをアップグレードする」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの選択］ダイアログボックスが表示されます。

2. **アップグレード先のリレーショナルデータベースの情報を設定し，［次へ］ボタンを**

クリックする。
作成されていないデータベースファイルがある場合，［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

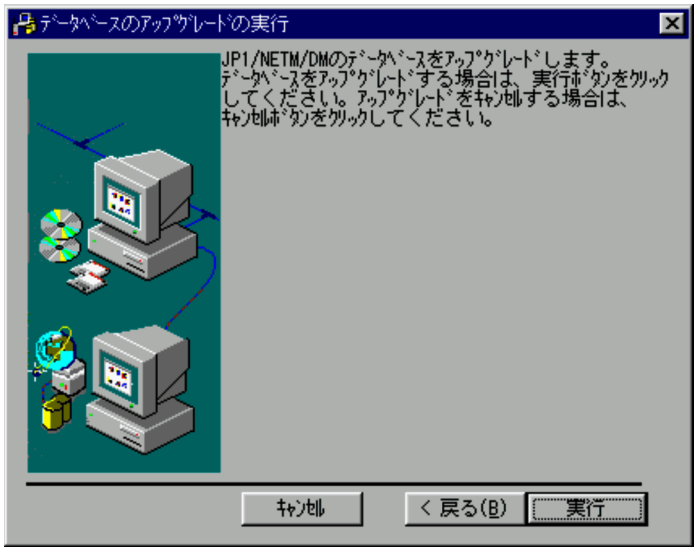
図 7-36 ［データベースの詳細設定］ダイアログボックス



ソフトウェア稼働監視履歴データベースファイルを設定できます。

3. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースのアップグレードの実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-37 ［データベースのアップグレードの実行］ダイアログボックス



4. **［実行］ボタンをクリックする。**

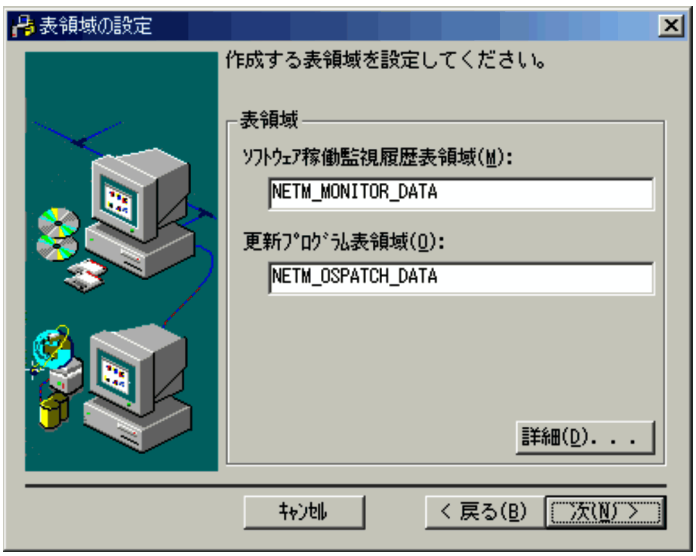
リレーショナルデータベースがアップグレードされます。

（3） データベースのアップグレード（Oracle の場合）

Oracle の場合の，データベースのアップグレード手順を次に示します。

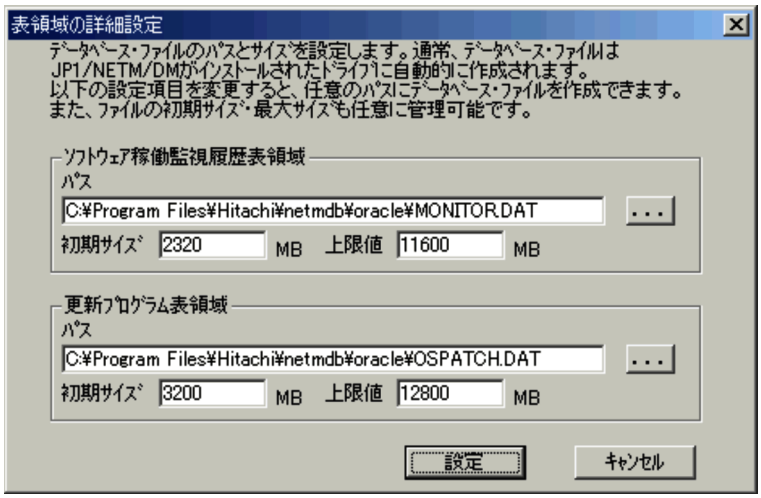
1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベースをアップグレードする」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データソースの設定］ダイアログボックスが表示されます。設定内容については，「7.5.1(2)　リレーショナルデータベースの新規作成（Oracle の場合）」を参照してください。
2. **［次へ］ボタンをクリックする。**
   作成されていないデータベースファイルがある場合，［表領域の設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-38　［表領域の設定］ダイアログボックス



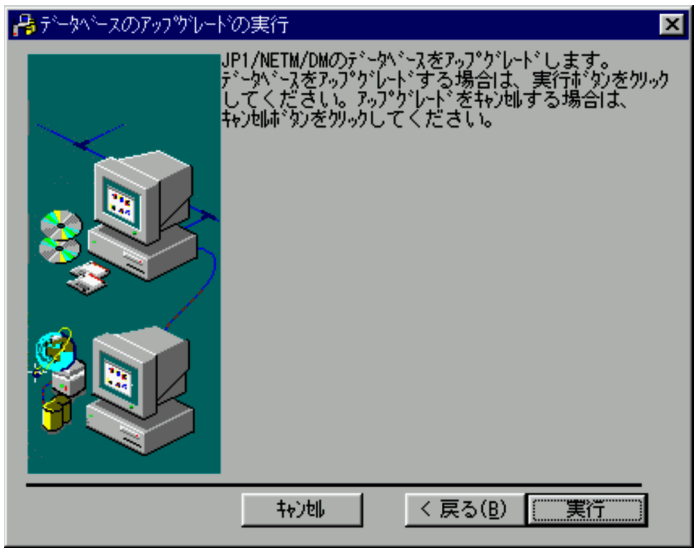
［詳細］ボタンをクリックすると，［表領域の詳細設定］ダイアログボックスが表示され，データベースファイルのパス，サイズの初期値，および上限値を設定できます。

図 7-39 ［表領域の詳細設定］ダイアログボックス



3. **［次］ボタンをクリックする。**
［データベースのアップグレードの実行］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-40 ［データベースのアップグレードの実行］ダイアログボックス



4. **［実行］ボタンをクリックする。**
リレーショナルデータベースがアップグレードされます。

7.5.5 データベースを回復する（Microsoft SQL Server）

JP1/NETM/DM Manager は，リレーショナルデータベースに障害が発生したときに，論理的に不整合なデータベースを修復し，障害から回復する機能を持ちます。

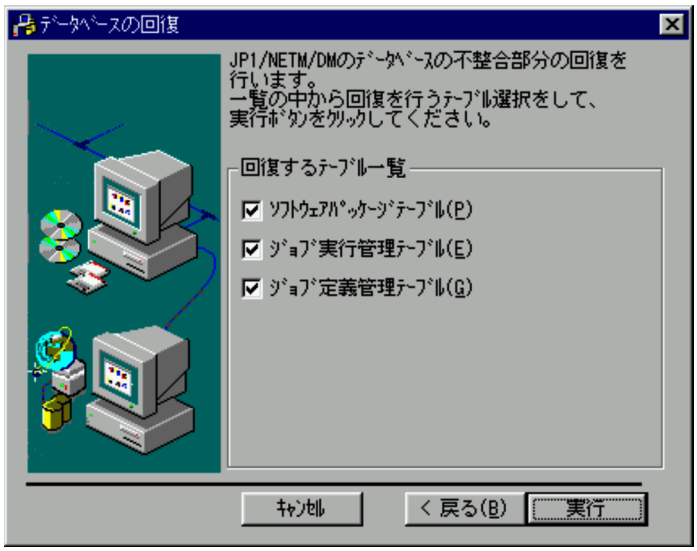
リレーショナルデータベースに障害が発生すると，通常はロールバックによって自動的に回復します。しかし，何らかの原因で自動的に回復しないときは，データベースマネージャを使用してリレーショナルデータベースを回復する必要があります。

なお，この項目は，サーバのインストール時に Oracle を選択した場合，非活性になります。

リレーショナルデータベースを回復する手順を次に示します。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベースを回復する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの選択］ダイアログボックスが表示されます。
2. **回復の対象とするデータベースの，サーバ，データベース名，管理者ユーザ ID およびパスワードを設定し，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの回復］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-41　［データベースの回復］ダイアログボックス



修復の対象となるテーブルが一覧表示されます。チェックボックスをオンにしたテーブルについて修復します。すべてのテーブルを選択すると，リレーショナルデータベース全体を検索して，テーブルの不整合を修復します。

- **ソフトウェアパッケージテーブル**
  パッケージに関するテーブルを修復します。
- **ジョブ実行管理テーブル**
  ジョブの実行に関するテーブルを修復します。
- **ジョブ定義管理テーブル**
  ジョブの定義に関するテーブルを修復します。

3. **［実行］ボタンをクリックする。**

選択したテーブルが修復され，リレーショナルデータベースが回復されます。

7.5.6 データベース上の不要なインベントリ情報を削除する

ファイルを使ってシステム構成情報を更新した場合など，削除したホストのインベントリ情報が削除されないで，そのままデータベースに残ることがあります。このようなインベントリ情報は，JP1/NETM/DM で使用されることはなく，その分だけデータベースの空き領域が少なくなります。これらの不要なインベントリ情報を，データベースマネージャから一括して削除できます。

不要なインベントリ情報は次のような場合に発生します。

- ファイルを作成してシステム構成を更新した場合に，ファイルに記述されていないホストが削除された。
- ［システム構成］ウィンドウでホストを削除した場合に，関連するインベントリ情報を削除しなかった。
- システム構成にないホストからインベントリ情報が通知された。

大量のホストを削除した場合には，不要なインベントリ情報が多数残っているおそれがあります。このような場合には，不要なインベントリ情報を削除することをお勧めします。

データベースマネージャを使って削除できるインベントリ情報は，システム構成上に存在しないホストのインベントリ情報です。削除対象となるインベントリ情報を，次の表に示します。

表 7-8 削除対象となるインベントリ情報

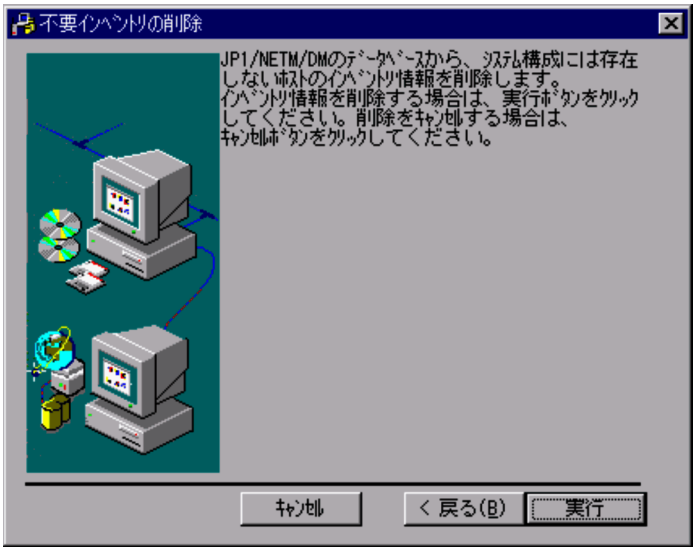
分類	インベントリ項目
システム情報	システム情報
	レジストリ情報
ソフトウェア情報	インストールパッケージ情報
	ソフトウェアインベントリ情報
	ウィルス対策製品情報
	Microsoft Office 製品情報
ユーザインベントリ情報	ユーザインベントリ情報

不要なインベントリ情報を削除する方法を次に示します。

1. **［Welcome］ダイアログボックスで，「使用するリレーショナルデータベースシステム」を選択し，「データベース上の不要インベントリ情報を削除する」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの選択］ダイアログボックス（Microsoft SQL Server の場合）または［データソースの設定］ダイアログボックス（Oracle の場合）が表示されます。

2. **必要な情報を入力し，［次へ］ボタンまたは「次」ボタンをクリックする。**
   ［不要インベントリの削除］ダイアログボックスが表示されます。

図 7-42　［不要インベントリの削除］ダイアログボックス



3. **［実行］ボタンをクリックする。**
   不要なインベントリ情報の削除処理が開始されます。削除処理中は実行状況を示すダイアログボックスが表示されます。

8 システム構成情報とあて先のグループを作成する

この章では，システム構成情報の作成方法と，ジョブの配布先をグルーピングして管理する方法について説明します。

8.1 **システム構成情報を作成する**

8.2 **あて先グループを作成する**

8.3 ID **を作成する**

8.4 **システム構成情報と** ID **を連携させる運用**

8.1 システム構成情報を作成する

JP1/NETM/DM の運用を開始する前に，中継するシステムとクライアントの構成を管理するための情報，**システム構成情報**を作成しておく必要があります。システム構成情報には，システム構成と各ホストのアドレスを定義します。各ホストのアドレスには，ノード識別キーで選択したアドレス（ホスト名または IP アドレス）を設定します。

ここでは，システム構成情報の作成方法の種類やホスト名の付け方，システム構成情報を作成および変更する方法について説明します。

8.1.1 システム構成情報の作成方法の種類

ここでは，システム構成情報の作成方法の種類と，作成方法を選択するときの基準について説明します。

(1) 作成方法の種類

システム構成情報の作成方法には，次の 4 種類があります。

システム構成情報を自動的に作成する

配布管理システム，中継するシステム，クライアントのそれぞれのセットアップ時に，システム構成を自動反映するように設定しておくと，物理的なネットワーク構成を基にシステム構成情報が自動的に作成され，［システム構成］ウィンドウに反映されます。

クライアントまたは中継システムが増設，削除されたり，ホスト名または IP アドレスが変更されたりしたとき，その情報が配布管理システムに自動的に通知されるため，配布管理システムではシステム構成情報をメンテナンスする必要がありません。また，**システム構成の自動登録機能**を使うと，システム構成の変更に合わせて ID も自動的に変更されます。システム構成情報と ID の連携については，「8.4　システム構成情報と ID を連携させる運用」を参照してください。

なお，ネットワークにファイアウォールを使用している場合，システム構成の自動登録機能を使用しない運用をお勧めします。また，すでに JP1/NETM/DM を導入していてバージョンアップする場合，システム構成の自動登録機能を使用すると，旧バージョンで作成済みのシステム構成情報が自動的に変更されてしまうので，注意が必要です。

システム構成情報をファイルから作成する

システム構成情報をテキスト形式のファイルで作成し，このファイルをリモートインストールマネージャに読み込みます。システム構成情報ファイルは，hosts ファイルのデータを利用すると，比較的簡単に作成できます。

なお，システム構成に変更がない場合，システム構成情報ファイルを保存しておくと，システムにトラブルが発生したときなど，システム構成情報を復旧するのに役立ちます。

システム構成情報を［システム構成］ウィンドウで作成する

リモートインストールマネージャの GUI 上で，クライアントや中継システムのホスト名または IP アドレスを一つ一つ定義します。

中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する

配布管理システムを階層化したシステムで，マネージャからシステム全体のシステム構成情報を管理するには，次の手順で中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する必要があります。

1. **中継マネージャごとにシステム構成情報を作成する。**
2. **マネージャから各中継マネージャをあて先にして，「システム構成情報の取得」ジョブを実行する。**
   システム全体のシステム構成情報をマネージャで取得できます。

システム全体のシステム構成情報を取得したあとのシステム構成情報のメンテナンスには，システム構成の自動登録機能を使用できます。中継マネージャ配下でシステム構成が変更されると，変更内容が中継マネージャからマネージャへ自動的に通知されます。

なお，3 階層以上の大規模システムで，中継マネージャまたは中継システムの接続先を変更した場合，変更先の配布管理システムに，移動したシステム配下の情報が反映されないことがあります。反映されていない場合には，変更先の配布管理システムで，移動した中継マネージャまたは中継システムに対して，「システム構成情報の取得」ジョブを実行してください。

（2）作成方法の選択基準

システム構成情報を［システム構成］ウィンドウで作成する方法は，小規模なシステムやシステム構成の変更が少ない場合に利用します。

システム構成情報を自動的に作成する方法は，ホストが増設，削除されたり，ホスト名または IP アドレスが変更されたりしたとき，その情報が配布管理システムに自動的に通知されるため，システム構成情報のメンテナンスの手間を省けます。ただし，次のような場合は，システム構成の自動登録機能を使用しないで，システム構成情報をファイルから作成する方法をお勧めします。

- DHCP と WINS を使用している環境で，IP アドレスの有効期限が短い場合
- システム構成情報の通信量がネットワークに負荷を掛ける場合
  システム構成情報を配布管理システムに通知すると，次に示す通信量を使用します。
  配布先システム 1 台につき，1 回の通信量（バイト）
  ＝（300 ＋（a － 1）× 50）×（a － 1）
  a：配布先システムにジョブが転送されるまでに経由する中継システムの数＋ 2

なお，システム構成の自動登録機能の使用はセットアップで設定します。新規に JP1/NETM/DM を導入する場合または NETM/DM Version 3.0 から移行する場合，デフォルトは，システム構成の自動登録機能を使用する設定になっています。

8.1.2 JP1/NETM/DM でのホスト名の付け方

ホスト名の付け方について説明します。

(1) ホスト名の付け方

ホスト名は 64 バイトまで設定できます。ただし，次の条件に従ってください。

- 半角英字（A ～ Z，a ～ z），数字（0 ～ 9），「-」（マイナス），および「.」（ピリオド）を使用する。
- 「.」（ピリオド）はドメイン名の区切り文字としてだけ使用する。
- DNS を利用している場合，ホスト名は「ホスト名 . ドメイン名」とし，ドメイン名を含めた長さを 64 バイト以内にする。
- ホスト名の最初の文字には英字を使用する。
- スペースは使用できない。
- 大文字と小文字は区別されないため，大文字を小文字に（または小文字を大文字に）変換すると同一名称となるような名称は使用できない。
- 全角文字は使用できない。
- 最後の文字に「-」（マイナス）および「.」（ピリオド）は使用できない。
- ホスト名として，hosts ファイルに定義されている別名は使用できない。
- ホスト名をノード識別キーとしているシステムでは，JP1/NETM/DM を使用するすべてのホストにユニークなホスト名を設定する。
- ホスト名として「localhost」は使用できない。
- Windows 95 のクライアントのホスト名に「_」（アンダーバー）は使用できない。

なお，配布管理システム（システム最上位のホスト）の直下のホストから最下位のホストまでのホスト名を合計した長さ（ホスト名とホスト名の間の区切り文字を含む）が 255 バイトを超える名称は設定できません。また，UNIX システムなど，大文字と小文字を区別するシステムがあるため，JP1/NETM/DM を使用するネットワークでは，ホスト名を大文字または小文字のどちらかに統一することをお勧めします。

(2) ホスト名を 64 バイトまで設定できない NETM/DM システム

ホスト名を 64 バイトまで設定できない NETM/DM システムを次に示します。

配布管理システム

- NETM/DM Manager 03-20 以前
- NETM/DM 01-00

中継システム

- NETM/DM SubManager 03-20 以前
- NETM/DM/W-AF 01-08 以前
- NETM/DM/W 01-13 以前
- NETM/DM/W Version 3.0 03-00

クライアント

- NETM/DM Client 03-20 以前
- NETM/DM/W 01-13 以前
- NETM/DM/W Version 3.0 03-00

(3) ホスト名を 64 バイトまで設定できないシステムが混在する場合

ホスト名を 64 バイトまで設定できないシステムでは，次に示す条件でホスト名を設定してください。

- 各ホストのホスト名は 32 バイトまで
- 配布管理システム（システム最上位のホスト）の直下のホストからホスト名を連結したアドレスは，64 バイトまで

下位の中継システムに，ホスト名を 64 バイトまで設定できない NETM/DM システムがある場合，上位の中継システムや配布管理システムのホスト名は，32 バイト以内で設定してください。

8.1.3 システム構成情報を自動的に作成する

中継システムやクライアントのセットアップ終了後，上位システムへ自動的にシステム構成情報を通知して登録させる**システム構成の自動登録機能**を使用して，システム構成情報を自動的に作成する方法について次に説明します。

(1) システム構成情報を自動登録する場合に必要な TCP/IP 環境の設定

配布管理システムをホスト名で設定する場合，TCP/IP の定義データベースに配布管理システムの定義が必要です。また，中継システムでは，TCP/IP の定義データベースに下位ホストの定義が必要です。

(2) システム構成情報の自動登録方法

セットアップで次の設定をしてください。中継システムとクライアントのシステム構成情報は，セットアップ終了時に自動的に上位システムに通知されます。

配布管理システム

［システム構成関連］パネルの「システム構成情報を自動反映する」のチェックボックスをオンにしてください。

中継システム

［システム構成関連］パネルの「システム構成情報を自動反映する」を選択します。また，システム構成の変更に合わせて，ID の情報も変更するには，「システム構成変更時の連携」で「システム構成の変更を連携させる」のチェックボックスをオンにしてください。

クライアント

［接続先］パネルで，「システム構成を自動登録する」のチェックボックスをオンに

してください。

なお，システム構成の自動登録機能を使用することで，配布管理システムからクライアントの接続先を変更し，変更結果をシステム構成情報に自動的に反映できます。その手順を次に示します。

1. **セットアップで次の設定をする。**

   配布管理システム

   ［システム構成関連］パネルで，次のチェックボックスをオンにしてください。
   ・「システム構成情報を自動反映する」
   ・「システム構成の変更を連携させる」

   中継システム

   ［システム構成関連］パネルで，次のチェックボックスをオンにしてください。
   ・「システム構成情報を自動反映する」
   ・「システム構成の変更を連携させる」

   クライアント

   ［接続先］パネルで，次のチェックボックスをオンにしてください。
   ・「実行要求を送信した上位システムを接続先に自動設定する」
   ・「システム構成を自動登録する」

2. **接続先を変更したいクライアントに対して，新しく接続先としたい中継システムに経路を変更して，ジョブを実行する。**
   なお，ジョブ実行前に［システム構成］ウィンドウでクライアントを移動させないでください。その後クライアントにジョブを実行すると接続先が変更されますが，変更前の接続先の中継システムにクライアントの情報が残ってしまいます。

(3) システム構成情報を自動登録する場合の注意事項

システム構成情報を自動登録するシステムでは，次の点に注意してください。

(a) ホスト識別子を使う場合

新規にホスト識別子を運用キーとして使用する場合，システムのバージョンアップは必ず上位システムから実行してください。

上位システムのシステム構成情報を誤って削除してしまった場合やデータベースが壊れてしまった場合は，バックアップから回復，または下位システムから再度システム構成情報ファイルを通知させてください。

(b) ホスト識別子管理ファイルの障害対策

クライアントでホスト識別子管理ファイルに障害が発生した場合，上位システムから次の手順で回復してください。

1. **リモートインストールマネージャの［システム構成］または［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択し，ファイルを出力する。**

2. **障害が発生したクライアントのホスト名または IP アドレスをキーにして出力したファイル内を検索し，障害が発生したクライアントを特定する。**
   ノード識別キーがホスト名の場合はホスト名を，IP アドレスの場合は IP アドレスをキーにして検索します。
3. **障害が発生したクライアントの情報を，ホスト識別子管理ファイルとして保存する。**
   ホスト識別子管理ファイルのファイル名は，「netmdmp.hid」にしてください。ホスト識別子管理ファイルのファイル形式は，システム構成情報またはあて先グループをファイルから作成する場合のファイル形式と同じです。システム構成情報のファイル形式については，「8.1.4　システム構成情報をファイルから作成する」を参照してください。あて先グループファイルのファイル形式については，「8.2.3　あて先グループをファイルから作成する」を参照してください。
4. **作成したホスト識別子管理ファイルを障害が発生したクライアントへファイル転送しリストアする。**
   ホスト識別子管理ファイルのファイルは，OS のインストールディレクトリ下に作成してください。
5. **クライアントを再起動する。**

なお，あて先グループファイルからホスト識別子管理ファイルを作成する場合，誤ってほかのクライアントのあて先をホスト識別子管理ファイルとして作成したり，あて先グループファイルからカット & ペーストしたあて先の内容をユーザが変更したりすると，ホスト識別子がシステム内で一意に保てなくなります。この場合，システムの動作を保証できません。

(c) ホスト識別子を使用しない運用でホスト名が重複した場合

ノード識別キーにホスト名を使用して運用する場合，JP1/NETM/DM を使用する各ホストに，ユニークなホスト名を付ける必要があります。システム構成情報が自動的に通知され，ホスト名が重複した場合はログ情報が出力されます。ログ情報を参照して，ホスト名が重複したクライアントの TCP/IP 環境の再設定をしてください。

● ログ情報の格納場所

ログ情報は，次に示すディレクトリに格納されています。

配布管理システムの場合

JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥LOG¥NODE.LOG

中継システムの場合

JP1/NETM/DM Client（中継システム）のインストールディレクトリ ¥LOG¥NODE.LOG

● ログ情報の内容

WARNING: The host name **（ホスト名）** already exists. Processing will continue.

配布管理システム（または中継システム）のシステム構成情報に登録されているノードと同一のホスト名，および IP アドレスを持つホストの情報が，通知され

ました。

WARNING: A host with the host name（ホスト名）already exists, but the existing host has a different IP Address. Processing will continue.

配布管理システム（または中継システム）のシステム構成情報に登録されているノードと同一のホスト名で IP アドレスが異なるホストの情報が，通知されました。

● **対処方法**

ログ情報で通知されたホストの TCP/IP 環境の設定を見直し，重複している場合は，ホスト名を変更してください。ホスト名を変更したあと，クライアントのセットアップを再度実行してください。

(d) システム構築時の注意事項

● 中継システムのシステム構成情報が登録されていないときに，下位システムからのシステム構成情報が通知されると，下位システムの構成情報が消失してしまう場合があります。そのため，JP1/NETM/DM システムをバージョンアップする場合，配布管理システム，中継システム，クライアントの順に，バージョンアップをしてください。

● システム構成の自動登録機能を使用している場合は，配布管理システムでシステム構成情報を編集しないでください。この機能を使ったシステム構成情報を構築した場合は，最初に JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップを終了させ，JP1/NETM/DM Manager のシステム構成情報にそれらのシステム構成情報を反映させてください。
JP1/NETM/DM Client（クライアント）は JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のシステム構成情報が JP1/NETM/DM Manager 上に構築されたあとにセットアップする必要があります。万一，正しくシステム構成情報が構築されていない場合は，JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）から「システム構成情報の取得」ジョブを実行してください。

(e) システム構成情報編集時の注意事項

システム構成情報を自動登録する場合，配布管理システムでシステム構成情報を編集しないでください。編集する必要がある場合はリモートインストールマネージャで，システム構成情報をファイルへ出力し，バックアップを取得してから編集してください。

特に，システム構成情報中の中継システムを削除してしまうと，この中継システムに接続しているクライアントのシステム構成情報も削除されます。システム構成情報が削除されたクライアントからシステム構成情報が通知されても配布管理システムには記録されなくなります。

システム構成情報をファイルへ出力する方法およびファイルから作成する方法については，「8.1.4　システム構成情報をファイルから作成する」を参照してください。

(f) 中継システムであて先を誤って追加した場合の削除方法

システム構成情報を自動登録した環境では，中継システムで誤ってあて先を追加した場

合，次の手順で削除してください。

1. **［スタート］メニューから［クライアントマネージャ］を選択し，表示される［クライアントマネージャ］ダイアログボックスで［停止］ボタンをクリックする。**
2. **中継システムのセットアップの［システム構成関連］パネルで，「システム構成情報を自動反映する」のチェックボックスをオフに変更する。**
3. **中継システムのセットアップを終了する。**
4. **［クライアントマネージャ］ダイアログボックスの［起動］ボタンをクリックする。**
5. **リモートインストールマネージャを起動し，誤って追加したあて先を削除する。**
6. **リモートインストールマネージャを終了し，［クライアントマネージャ］ダイアログボックスの［停止］ボタンをクリックする。**
7. **中継システムのセットアップの［システム構成関連］パネルで，「システム構成情報を自動反映する」のチェックボックスをオンに変更する。**
8. **中継システムのセットアップを終了する。**
9. **［クライアントマネージャ］ダイアログボックスの［起動］ボタンをクリックする。**

8.1.4 システム構成情報をファイルから作成する

システム構成情報を設定したファイルから，システム構成情報を作成できます。また，システム構成情報をファイルに出力することもできます。

システム構成情報のバックアップを取得する場合は，システム構成情報をファイルに出力してください。システム構成情報をリストアする場合は，出力したファイルからシステム構成情報を作成してください。

ここでは，システム構成情報ファイルの作成方法，ファイルからシステム構成情報を作成する方法，およびシステム構成情報をファイルに出力する方法について説明します。

（1）システム構成情報ファイルを作成する

システム構成情報ファイルでは一つのホストごとに，IP アドレス，ホスト名，ホストのタイプ，作成日時，コメント，経路などを設定します。ただし，作成日時を設定できるのは，JP1/NETM/DM Manager だけです。

ファイルはテキスト形式で，1 カラム目に「'」（シングルクォーテーション）または「#」（シャープ）を付けると，その行はコメントと見なされます。

形式

```
IPアドレス　ホスト名　HID=ホスト識別子,TYPE=ホストのタイプ,MAC=MACアドレス,COMMENT=コメント,ROOT=経路,DATE=作成日時
```

説明

ホスト識別子以降の順序は任意です。

- **IP アドレス（必ず設定）**

ホストの IP アドレスを設定します。
設定した IP アドレスは，JP1/NETM/DM Manager 上では管理されませんが，TCP/IP の hosts ファイルと形式を一致させるために設定します。
TCP/IP の hosts ファイルを，システム構成情報ファイルとして直接入力することもできます。この場合は，すべてのホストがクライアントとして設定されます。
TCP/IP の hosts ファイルを基に，ホストのタイプ（TYPE），コメント（COMMENT），経路（ROOT）を追加すると，より簡単にシステム構成情報ファイルを作成できます。

- **ホスト名（必ず設定）**
ホスト名の指定方法については，「8.1.2　JP1/NETM/DM でのホスト名の付け方」を参照してください。
- HID= **ホスト識別子**
ホストを一意に認識するホスト識別子を設定します。［システム構成］ウィンドウで［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択してシステム構成情報をファイルに出力し，ホスト識別子が設定されていた場合，必ずこのホスト識別子をそのまま設定してください。なお，［ファイルへの保存］で出力したシステム構成情報ファイルに，ホスト識別子が設定されていないホスト，または新規に追加するホストについては，このオペランドを指定しないでください。
- TYPE= **ホストのタイプ**
ホストのタイプとして，「MASTER」（中継システム，オフラインフォルダ）または「CLIENT」（クライアント，オフラインマシン）を設定します。省略したときは，デフォルトで「CLIENT」が設定されます。
TCP/IP の hosts ファイルとシステム構成情報ファイルを共用する場合は，「TYPE」の前に「#」を指定します。「#」と「TYPE」の間には半角スペースを指定してください。TCP/IP の hosts ファイルでは，「#」以降の記述はコメントと見なされます。
- MAC=MAC **アドレス**
ホストの MAC アドレスを設定します。MAC アドレスの情報は，Wake on LAN 機能などに関連する情報のため，基本的にこのオペランドは変更しないでください。変更すると機能が動作しないおそれがあります。
- COMMENT= **コメント**
コメントを設定します。コメントに「,」は使用できません。半角で 64 文字までの文字列が設定できます。
- ROOT= **経路**
複数の中継システムを経由する場合に，上位の中継システムから下位の中継システムまでのフルパスを，ホスト名，IP アドレス，またはホスト識別子のどれかで設定します。二つ以上の中継システムを経由する場合は，「¥」または「!」で区切って設定します。JP1/NETM/DM Manager と接続するホストの場合は，設定する必要はありません。
- DATE= **作成日時**
ホストをマネージャまたは中継マネージャに初めて登録する（した）日時です。

年月日時分秒を *YYYY/MM/DD/hh/mm/ss* の形式で入力します。*YYYY* に指定できる値は 1971 ～ 2037 で，*hh* に指定できる値は 0 ～ 23 です。
省略した場合は，［ファイルから作成］を実行したときの日時が設定されます。

（2）ファイルからシステム構成情報を作成する

ファイルからシステム構成情報を作成する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルから作成］を選択する。**
   ファイルを選択するためのダイアログボックスが表示されます。
2. **作成したシステム構成情報ファイルを選択し，［OK］ボタンをクリックする。**
   ファイルに設定されたシステム構成情報から，システム構成情報が作成されます。

ファイルからシステム構成情報を作成する場合，次の点に注意してください。

- すでにシステム構成情報を作成していた場合，［システム構成］ウィンドウの内容はファイルに設定された内容に置き換えられます。既存のシステム構成情報にあって，ファイルに記述されていないホストは，システム構成情報から削除されます。なお，ホストが削除された場合，削除されたホストのインベントリ情報がデータベースに残ります。削除されたホストのインベントリ情報は，データベースマネージャを使って削除できます。削除方法については，「7.5.6　データベース上の不要なインベントリ情報を削除する」を参照してください。
- 既存の［あて先］ウィンドウの内容は，ID の情報以外はすべて削除されます。
- 既存の［システム構成］ウィンドウの内容にホスト識別子が設定されている場合，必ずホスト識別子をそのまま設定してください。
- ホスト識別子を使用した環境で，ファイルからシステム構成情報を作成中に，システム構成の自動登録機能の処理が発生すると，「root 不正」のエラーになることがあります。この場合，しばらく待ってから実行し直してください。

（3）システム構成情報をファイルに出力する

［システム構成］ウィンドウに表示したシステム構成情報をファイルに出力できます。システム構成情報を変更する場合は，変更前のシステム構成情報をファイルに出力し，このファイルを編集すると便利です。

なお，配布管理システムを階層化している場合，マネージャで出力したファイルには，中継マネージャ配下のシステム構成情報は含まれません。中継マネージャ配下のシステム構成情報を出力する場合は，中継マネージャでシステム構成情報をファイルに出力してください。

システム構成情報をファイルに出力する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択する。**
   ［システム構成の保存］ダイアログボックスが表示されます。なお，この操作は，［最新の情報に更新］を実行したあと，行ってください。自動反映によって画面の状態と内部データの不一致が発生した場合，正しい情報が出力されないことがあります。

2. **ファイル名を設定し，[OK] ボタンをクリックする。**
   システム構成情報がファイルに出力されます。

システム構成情報のファイル出力例を次に示します。

図 8-1 システム構成情報のファイル出力例

```
11.11.10.10 SUB1 # HID=#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J,TYPE=MASTER,DATE=2006/11/30/10/22/33,COMMENT=横浜第一中継
11.10.10.11 CLT1 # HID=#GQ2RH8GAS6J9H39COO1G9F8EC,TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/03/08/55/12,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.10.10.12 CLT2 # HID=#G816OR5U5739H37AFO2OCGEJ5,TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/03/08/55/12,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.10.10.13 CLT3 # HID=#GP9MSOPGS6N9H37MVO1G9FG8F,TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/03/08/55/12,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.10.10.14 CLT4 # HID=#GU8HIOA3H739H35GMOOOE45JB,TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/03/08/55/12,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.10.10.15 CLT5 # HID=#G41SQI8AS6J9H3CT5OOOE47PG,TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/03/08/55/12,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.11.10.20 SUB2 # HID=#GC1C37HAA739H3DTLOO51K36J,TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/03/08/55/12,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.10.11.30 SUB3 # TYPE=MASTER,COMMENT=横浜第二中継,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J
11.10.11.11 CLT6 # TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J!SUB1
11.10.11.12 CLT7 # TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J!SUB1
11.10.11.13 CLT8 # TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J!SUB1
11.10.11.14 CLT9 # TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J!SUB1
11.10.11.15 CLTO # TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J!SUB1
11.10.11.40 SUB4 # TYPE=CLIENT,DATE=2006/12/01/15/00/38,ROOT=!#GC1C37HAA739H3DTLOOO1K36J!SUB1
                                                    .
                                                    .
                                                    .
```

1行目～7行目：ホスト識別子に対応しているマシン
8行目以降　：ホスト識別子に対応していないマシン

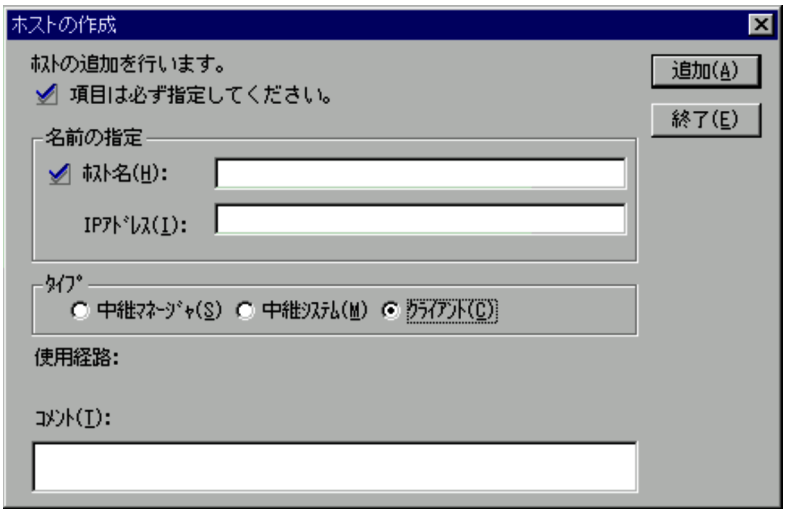
なお，システム構成からファイルを作成した場合，IP アドレスの位置に「xxx.xxx.xxx.xxx」が設定されます。出力したファイルを利用して，ホストを IP アドレスで管理する場合，テキストエディタなどで IP アドレスを記述する必要があります。

8.1.5 システム構成情報を［システム構成］ウィンドウで作成する

［システム構成］ウィンドウで，ホストを定義する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウをアクティブにし，ホストを設定する位置を選択する。**
   選択した位置の下位にホストを設定します。
2. **［ファイル］－［ホストの新規作成］を選択する。**
   ［ホストの作成］ダイアログボックスが表示されます。

図 8-2　［ホストの作成］ダイアログボックス



名前の指定

ホスト名，または IP アドレスを指定します。マネージャの場合は，必ずホスト名を指定してください。

ホスト名の指定方法は「8.1.2　JP1/NETM/DM でのホスト名の付け方」を参照してください。

タイプ

ホストのタイプとして，マネージャ，中継，またはクライアントを選択します。選択しなかったときは，クライアントがデフォルトで選択されます。

コメント

任意のコメントを，半角で 64 文字まで入力できます。

3. **項目を設定後，［終了］ボタンをクリックする。**

ホストが定義されます。［追加］ボタンをクリックすると，続けてホストを追加できます。

注意事項

オフラインマシンのインベントリ情報および稼働情報を管理すると，システム構成ウィンドウに「{OFFLINE}」という名称のオフラインフォルダが自動的に作成されます。しかし，このオフラインフォルダ下には［ホストの作成］ダイアログボックスでのホストの追加をしないでください。

8.1.6　中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する

配布管理システムを階層化したシステムでは，マネージャで中継マネージャ配下のシステム構成情報を作成，変更することはできません。中継マネージャが管理するシステム構成情報を「システム構成情報の取得」ジョブを実行して取得し，マネージャのシステ

ム構成情報に追加します。システム構成の自動登録機能を使用して取得することもできますが，下位システムより先に上位システムの設定を完了させておく必要があります。そのため，導入時やシステム構成情報を大きく変更するときなど，設定の順番を考慮できない場合は，「システム構成情報の取得」ジョブを実行して取得してください。

マネージャ配下のシステム構成情報を取得したあとのメンテナンスには，システム構成の自動登録機能を使用します。中継マネージャ配下のシステム構成情報に変更が発生した時点で，中継マネージャから自動的に変更内容が通知され，マネージャのシステム構成情報に反映されます。

なお，3 階層以上の大規模システムで，中継マネージャまたは中継システムの接続先を変更した場合，変更先の配布管理システムに，移動したシステム配下の情報が反映されないことがあります。反映されていない場合には，変更先の配布管理システムで，移動した中継マネージャまたは中継システムに対して，「システム構成情報の取得」ジョブを実行してください。

(1)「システム構成情報の取得」ジョブの実行方法

(a) ジョブの作成と実行

システム構成情報を取得するための，ジョブの作成手順を次に示します。操作および設定内容の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「8.2　ジョブを作成する」を参照してください。

1. **［あて先］または［システム構成］ウィンドウで［実行］－［ジョブの実行］を選択する，または［ジョブ定義］ウィンドウで［ファイル］－［ジョブ定義の新規作成］を選択する。**
   ［ジョブ定義の新規作成］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［ジョブ定義の新規作成］ダイアログボックスでジョブ種別（システム構成情報の取得）を指定し，［OK］ボタンをクリックする。**
   ［ジョブの作成］ダイアログボックスが表示されます。
3. **各パネルの項目を設定する。**
   ［ジョブの作成］ダイアログボックス上に表示されるパネルの種類および設定内容は次のとおりです。

   ［ジョブ］パネル
   ジョブ名を設定します。

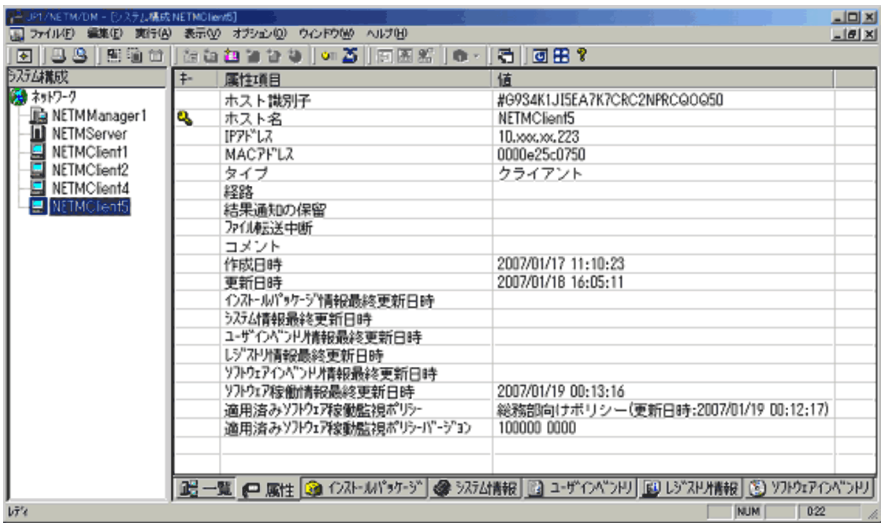
   ［あて先］パネル
   システム構成情報を取得する中継マネージャを指定します。中継マネージャ，または中継マネージャのあて先グループを指定してください。

   ［スケジュール］パネル
   ジョブの登録日時，実行日時，および実行期限を設定します。
4. **［実行］，［保存］，または［保存 & 実行］ボタンをクリックする。**
   ジョブが保存または実行されます。

(b) 実行結果の確認

ジョブを実行するとマネージャの［システム構成］ウィンドウに，中継マネージャ配下のシステム構成情報が反映されます。

図 8-3 ［システム構成］ウィンドウ



(c) ジョブ実行時の注意事項

「システム構成情報の取得」ジョブを実行すると，システム構成情報だけでなく，中継マネージャ配下のあて先グループの情報もマネージャの［あて先］ウィンドウに反映されます。しかし，中継マネージャ配下の ID の情報は，システム構成情報と ID を連携させる運用をしていたとしても，マネージャの［あて先］ウィンドウには反映されません。

(2) システム構成の自動登録機能の設定

マネージャで次の設定をすると，中継マネージャが管理するシステム構成情報が自動的にマネージャに通知され，マネージャのシステム構成情報に反映されます。

設定内容

［システム構成関連］パネルの「システム構成情報を自動反映する」のチェックボックスをオンにします。デフォルトはオンとなっているため，最初はオフに設定しておき，中継マネージャ配下のシステム構成情報をマネージャで取得したあと，オンに変更してください。

注意事項

システム構成の自動登録機能を設定しておくと，システム構成情報だけでなく，中継マネージャ配下のあて先グループの情報もマネージャの［あて先］ウィンドウに反映されます。しかし，中継マネージャ配下の ID の情報は，マネージャの［あて先］ウィンドウには反映されません。ID の情報も反映するには，システム構成情報と ID を連携させる設定にする必要があります。システム構成情報と ID の連携については，「8.4　システム構成情報と ID を連携させる運用」を参照してください。

8.1.7　システム構成情報を変更する

中継システム，クライアントを追加または削除すると，システム構成の自動登録機能を使用している場合は，変更した内容が自動的に配布管理システムに通知されます。通知された内容は，［システム構成］ウィンドウに自動的に反映されます。システム構成の自動登録機能を使用していない場合は，ユーザが配布管理システムを操作してシステム構成情報を修正する必要があります。ここでは，配布管理システムからの操作でシステム構成情報を変更する方法について説明します。

なお，配布管理システムまたは中継するシステムのホスト名（IP アドレス運用の場合は IP アドレス）を変更する場合は，事前にすべてのジョブを完了させるか，または削除する必要があります。特に定期実行ジョブは，必ず削除するようにしてください。

(1) ファイルから変更する

変更前のシステム構成情報をファイルに出力します。出力したファイルを更新したあと，このファイルからシステム構成情報を作成します。

システム構成の一部だけを変更する場合も，システム構成に残すすべてのホストをファイルに記述してください。ファイルに記述されていないホストは，システム構成から削除されます。

ホストを削除する場合は，そのホストの情報をファイルから削除してください。

システム構成情報をファイルに出力する方法，およびファイルからシステム構成情報を作成する方法については，「8.1.4　システム構成情報をファイルから作成する」を参照してください。

(2) システム構成ウィンドウで変更する

ここでは，［システム構成］ウィンドウからシステム構成情報を変更する方法を説明します。変更，削除するホストを検索する方法については，「9.1.1　名称によるホストの検索方法」を参照してください。

(a) ホストを移動する

中継システムを移動すると，中継システムの下位のホストもすべて移動します。複数のホストを同時に移動するときは，［システム構成］ウィンドウの右枠で移動するホストを

選択します。

ホストの移動方法は，以下のとおりです。

1. **［システム構成］ウィンドウをアクティブにし，移動するホストを選択する。**
   選択したホストが反転表示されます。
2. **［編集］－［切り取り］を選択する。**
   選択したホストが切り取られます。なお，［切り取り］選択後は，左枠の「ネットワーク」をダブルクリックしないでください。ダブルクリックすると［編集］メニューの［貼り付け］が非活性になり，ホストを貼り付けられなくなります。この場合は，再度［切り取り］を選択し直してください。
3. **移動先の位置を選択する。**
   選択した位置が反転表示されます。
4. **［編集］－［貼り付け］を選択する。**
   切り取ったホストが，移動先に貼り付けられます。
   なお，ホストの移動は，ドラッグ＆ドロップの操作でも実行できます。

(b) ホストを削除する

一度削除したホストを，元に戻すことはできません。中継システムを削除すると，下位の中継システムおよびクライアントもすべて削除されます。複数のホストを同時に削除するときは，［システム構成］ウィンドウの右枠で削除するホストを選択します。［システム構成］ウィンドウでホストを削除すると，［あて先］ウィンドウの同じ名称のホストも同時に削除されます。

下位ホストのある中継システムを削除する場合，［ホストの削除］ダイアログボックスでインベントリ情報の削除を選択しても，下位ホストの情報は削除されません。

ホストを削除する際には，［ホストの削除］ダイアログボックスが表示され，削除するホストに関連するインベントリ情報を削除するかどうかを選択できます。削除を選択すると，削除するホストに関連するシステム情報，ソフトウェア情報，およびユーザインベントリ情報が同時に削除されます。インベントリ情報の削除を選択しなかった場合，そのホストのインベントリ情報はそのままデータベースに残り，その分だけデータベースの空き領域が少なくなります。削除するホストに関連するインベントリ情報は，できるだけ削除するようにしてください。なお，不要なインベントリ情報は，データベースマネージャを使って削除することもできます。データベースマネージャでの削除方法の詳細については，「7.5.6　データベース上の不要なインベントリ情報を削除する」を参照してください。

ホストの削除方法は，以下のとおりです。

1. **［システム構成］ウィンドウをアクティブにし，削除するホストを選択する。**
   選択したホストが反転表示されます。
2. **［編集］－［削除］を選択する。**
   確認ダイアログボックスが表示されます。

3. **［OK］ボタンをクリックする。**
   選択したホストが削除されます。

ホストを検索したあと，［検索］ダイアログボックスでホストを削除することもできます。詳細は，「9.1.5　検索したホストをシステム構成情報から削除する」を参照してください。

(c) ホスト名または IP アドレスを変更する

ホスト名または IP アドレスを変更すると，変更した内容が自動的に配布管理システムに通知されます。通知された内容は，［システム構成］ウィンドウに自動的に反映されます。一度設定したホスト名（または IP アドレス）を，［システム構成］ウィンドウ上の操作で変更する手順を次に示します。

なお，［システム構成］ウィンドウでホスト名を変更すると，［あて先］ウィンドウにある同じホスト名も変更されます。また，インベントリ情報を表示するときのホスト名もあわせて変更されます。

1. **［システム構成］ウィンドウで名称を変更するホストを選択する。**
   選択したホストが反転表示されます。
2. **［ファイル］－［名前の変更］を選択する。**
   ［名前の変更］ダイアログボックスが表示されます。
3. **「新しい名前」を設定後，［OK］ボタンをクリックする。**
   設定した名前に変更されます。

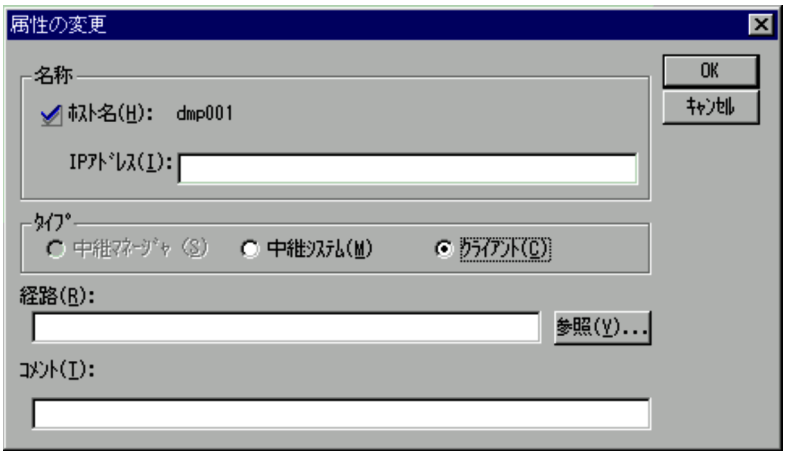
(d) ホストの属性を変更する

中継システムをクライアント（またはクライアントを中継システム）に変更したり，経路やコメントを変更したりする場合は，［ファイル］－［属性の変更］を選択すると表示される［属性の変更］ダイアログボックスを使用します。

なお，ホスト種別を変更する場合は，次の点にご注意ください。

- ［システム構成］ウィンドウでホストの属性を変更すると，［あて先］ウィンドウにある同じホストの属性も変更されます。
- 中継マネージャのホスト種別は変更できません。中継マネージャの場合，「IP アドレス」，「コメント」だけが変更できます。

図 8-4 ［属性の変更］ダイアログボックス



ホスト名

ホスト名が表示されます。

IP アドレス

IP アドレスが表示されます。

タイプ

ホストのタイプとして，中継システムまたはクライアントを選択します。ホストのタイプを中継システムからクライアントに変更すると，変更前に設定されていた中継システム下のホストは，すべて削除されます。

経路

ホスト名を「!」で区切って，経路を設定します。存在しない経路を設定したときは，経路は変更されないで，エラーとなります。

［参照］ボタン

システム構成から経路を選択できる［パスの設定］ダイアログボックスが表示されます。

コメント

任意のコメントを半角で 64 文字まで入力できます。

(3) 中継マネージャ配下のシステム構成情報を変更する

マネージャから，中継マネージャ配下のシステム構成情報を変更することはできません。中継マネージャ配下のシステム構成情報が変更された場合は，システム構成の自動登録機能を使用する，またはマネージャから「システム構成情報の取得」ジョブを実行して，変更された情報をマネージャのシステム構成情報に反映してください。

ただし，マネージャの［システム構成］ウィンドウで，中継マネージャ配下のホストのコメントを変更することはできます。

なお，3 階層以上の大規模システムで，中継マネージャまたは中継システムの接続先を変更した場合，変更先の配布管理システムに，移動したシステム配下の情報が反映されないことがあります。反映されていない場合には，変更先の配布管理システムで，移動した中継マネージャまたは中継システムに対して，「システム構成情報の取得」ジョブを実行してください。

(4) システム構成情報を変更するときの注意事項

システム構成情報を変更するときの注意事項を次に示します。

● ノード識別キーを変更する場合

ノード識別キーを変更する場合，システム構成情報をリモートインストールマネージャから削除しておいてください。システム構成情報は，ファイルに出力しておくと便利です。ノード識別キーを変更したあと，出力したファイルを使用してシステム構成情報を設定できます。

なお，システム構成情報の自動登録機能を使用しないで，システム構成情報を手動で作成した場合，出力したシステム構成情報ファイルには，使用中のノード識別キーで各ホストのアドレスが記述されています。そのため，出力したファイルに各ホストのホスト名または IP アドレスを記述する必要があります。例えば，ノード識別キーをホスト名から IP アドレスに変更する場合，ノード識別キーを変更する前に出力したファイルには IP アドレスが記述されていません。メモ帳などで IP アドレスを記述するか，hosts ファイルを読み込んで，システム構成情報を作成してください。

● オフラインマシンのインベントリ情報を管理している場合

- オフラインフォルダの移動，名称の変更，および属性の変更はできません。
- システム構成に登録するためにオフラインマシンの接続先を設定した場合は，接続先がオフラインマシンからのシステム情報を受信した時点で，オフラインマシンがシステム構成に登録されます。システム構成への登録後はクライアントとして扱われます。

● ホスト名を変更する場合

- JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のホスト名を変更したときは，そのホストに接続する下位システムのセットアップで，接続先のホスト名を変更してください。
- 運用キーのキー項目がホスト名のときは，ホスト名を変更したあと，コンピュータを再起動してください。

8.1.8 システム構成情報を作成するときの注意事項

システム構成情報を作成するときの注意事項を次に示します。

● 作成できるシステム構成情報の階層は 7 階層までです。

● システム構成に中継システムを作成する場合は，ノード識別キーで選択したアドレス（ホスト名または IP アドレス）で中継システムと同一名称のクライアントを，中継システム下に作成する必要があります。中継システム下に作成した，中継システムと同

一名称のクライアントは，ほかの経路に移動しないでください。

- UNIX の中継システムに対してリモートインストールやインベントリ情報の取得を実行する場合は，システム構成情報で，UNIX の中継システム下に同一ホスト名のクライアントを定義してください。ジョブのあて先には，このクライアントを指定します。

8.2 あて先グループを作成する

［あて先］ウィンドウでは［システム構成］ウィンドウで設定したホストを，あて先グループに分けて管理できます。

ここでは，あて先グループの作成方法について説明します。

8.2.1 あて先グループの作成方法の種類

あて先グループを作成するには，次の四つの方法があります。どの方法で作成するかは，あて先グループの特性によって判断してください。

システム構成情報を利用して作成する

システム構成情報をテキストファイルに出力して，これを編集してあて先グループを作成し，［あて先］ウィンドウに取り込む方法です。物理的なネットワーク構成に沿ったグループを作成する場合は，この方法が便利です。

詳細については，「8.2.3 あて先グループをファイルから作成する」を参照してください。

［あて先］ウィンドウ上の操作で作成する

GUI 操作で，直接［あて先］ウィンドウ上にあて先グループを作成する方法です。ネットワーク構成と関係のないあて先グループを作成する場合や，すでに作成しているあて先グループの情報を変更する場合は，この方法が便利です。

詳細については，「8.2.4 あて先グループを［あて先］ウィンドウで作成する」を参照してください。

条件（ポリシー）に従って自動作成する

あらかじめ設定しておいたグルーピング条件（ポリシー）に従って，新たに追加されたホストや移設されたホストを，あて先グループに自動的に振り分ける方法です。

詳細については，「9.3 あて先グループの自動メンテナンス」を参照してください。

集計結果から作成する

集計機能を利用して，同じインベントリ情報を持つホストであて先グループを作成する方法です。例えば，OS ごとにホストの台数を集計し，Windows 2000 のホストであて先グループを作成できます。このあて先グループに対して特定の配布を実行したい場合などに便利です。

集計結果からあて先グループを作成する方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「4.2.7 集計結果からあて先グループを作成する」を参照してください。

8.2.2 グループ名の付け方

あて先グループ名および ID 名は，32 バイトまで設定できます。ただし，次に示す制限があります。

● 次に示す半角文字は使用できません。

「!」「"」「%」「'」「*」「.」「/」「:」「<」「>」「?」「@」「¥」「|」

- スペースは使用できません。
- 大文字と小文字は区別されないため，大文字を小文字に（または小文字を大文字に）変換すると同一名称となるような名称は使用できません。

また，作成できるあて先グループの階層は 7 階層までです。最上層からあて先グループ名を連結した文字数（各あて先グループ名の先頭の区切り文字を含む）と，末端のホスト名の文字数（ホスト名の先頭の区切り文字を含む）を合計した文字数が 255 バイトを超える名称は設定できません。

8.2.3 あて先グループをファイルから作成する

あて先グループの情報を設定したファイル（**あて先グループファイル**）を作成して，あて先グループを作成します。

(1) あて先グループファイルを作成する

あて先グループファイルには，一つのあて先につき，あて先名，あて先のタイプ，所属あて先グループのパスなどを設定します。ファイルはテキスト形式で，1 カラム目に「'」（シングルクォーテーション）または「#」を付けると，その行はコメントと見なされます。

なお，システム構成情報をテキストファイルに出力し，これを加工すると簡単にあて先グループファイルを作成できます。作成例については，「8.2.6 あて先グループの作成例」を参照してください。

形式

あて先名 HID=ホスト識別子,TYPE=あて先のタイプ,MAC=MACアドレス,ROOT=所属あて先グループのパス,DATE=作成日時

説明

TYPE ＝あて先のタイプ以降の順序は任意です。

●あて先名（必ず設定）

あて先グループまたはホストの名称を設定します。
あて先名があて先グループの場合は，「* あて先グループ名」という形式で指定します。先頭の「*」は半角です。「*」とあて先グループ名の間を半角スペースで区切ります。あて先グループ名はユニークに設定します。あて先グループ名の付け方については，「8.2.2 グループ名の付け方」を参照してください。
あて先名がホストの場合，あて先名の指定方法はノード識別キーによって異なります。
ノード識別キーにホスト名を使用している場合，あて先名は「* ホスト名」という形式で指定します。先頭の「*」は半角です。「*」とホスト名の間を半角スペースで区切ります。「*」の代わりに，別の文字または文字列（スペース以外）を設定してもかまいません。例えば，「*」の部分に，IP アドレスを設定するこ

ともできます。
ノード識別キーに IP アドレスを使用している場合，あて先名は「IP アドレス *」という形式で指定します。先頭の IP アドレスと半角の「*」の間は半角スペースで区切ります。「*」の代わりに，別の文字または文字列を設定してもかまいません。例えば，「*」の部分に，ホスト名を設定することもできます。また，「*」を省略してもかまいません。

● HID= **ホスト識別子**

ホストを一意に認識するホスト識別子を設定します。［あて先］ウィンドウで［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択してあて先グループの情報をファイルに出力し，ホスト識別子が設定されていた場合，必ずこのホスト識別子をそのまま設定してください。なお，［ファイルへ保存］で出力したあて先グループファイルにホスト識別子が設定されていないホスト，または新規に追加するホストについては，このオペランドを指定しないでください。

● TYPE= **あて先のタイプ**

あて先のタイプとして次のホスト種別を設定できます。省略したときは，デフォルトで「CLIENT」が設定されます。

- GROUP（あて先グループ）
- MANAGER（中継マネージャ）
- MASTER（中継システム）
- CLIENT（クライアント）

● MAC=MAC **アドレス**

ホストの MAC アドレスを設定します。MAC アドレスの情報は，Wake on LAN 機能などに関連する情報のため，基本的にこのオペランドは変更しないでください。変更すると機能が動作しないおそれがあります。

● ROOT= **所属あて先グループのパス**

所属あて先グループをフルパスで設定します。ROOT を設定しない場合は，直前のあて先グループを所属あて先グループとして，TYPE オペランドで設定されたタイプであて先を作成します。

● DATE= **作成日時**

ホストをマネージャまたは中継マネージャに初めて登録する（した）日時です。年月日時分秒を *YYYY/MM/DD/hh/mm/ss* の形式で入力します。*YYYY* に指定できる値は 1971 ～ 2037 で，*hh* に指定できる値は 0 ～ 23 です。
省略した場合は，［ファイルから作成］を実行したときの日時が設定されます。

(2) ファイルからあて先グループを作成する

あて先グループファイルからあて先グループを作成すると，［あて先］ウィンドウの内容は，あて先グループファイルに設定された内容に置き換えられます。既存の［あて先］ウィンドウのあて先グループを保存するときは，ファイル名を付けて保存してください。

既存の［あて先］ウィンドウの内容にホスト識別子が設定されている場合，必ずホスト

識別子をそのまま設定してください。

ファイルからのあて先グループの作成方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルから作成］を選択する。**
2. **作成したあて先グループファイルを選択し，**［OK］**ボタンをクリックする。**

（3） あて先グループをファイルに出力する

［あて先］ウィンドウのあて先グループの構成をファイルに出力できます。あて先グループを変更する場合は，変更前のあて先グループをファイルに出力し，このファイルを編集すると便利です。

あて先グループの構成をファイルに出力する方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択する。**
   ［あて先の保存］ダイアログボックスが表示されます。なお，この操作は，［最新の情報に更新］を実行したあと，行ってください。自動反映によって画面の状態と内部データの不一致が発生した場合，正しい情報が出力されないことがあります。
2. **ファイル名を設定し，**［OK］**ボタンをクリックする。**
   あて先グループの構成がファイルに出力されます。

あて先グループの構成のファイル出力例を次に示します。

図 8-5　**あて先グループの構成のファイル出力例**

```
＊ 横浜第一中継 # TYPE=GROUP
＊ 横浜第二中継 # TYPE=GROUP
111.100.100.110 CLT100010 # HID=#GQ2RH8GAS6J9H39CO01G9F8ECPO,  TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第一中継
111.100.100.120 CLT100020 # HID=#G816OR5U5739H37AF020CGEJ5OG,  TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第一中継
111.100.100.130 CLT100030 # HID=#GP9MSOPGS6N9H37MV01G9FG8FFG, TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第一中継
111.100.100.140 CLT100040 # HID=#GU8HI0A3H739H35GM000E45JBSG,  TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第一中継
111.100.100.150 CLT100050 # HID=#G41SQI8AS6J9H3CT5000E47PGU0,  TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第一中継
111.100.110.110 CLT110010 # TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第二中継
111.100.110.120 CLT110020 # TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第二中継
111.100.110.130 CLT110030 # TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第二中継
111.100.110.140 CLT110040 # TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第二中継
111.100.110.150 CLT110050 # TYPE=CLIENT,ROOT=横浜第二中継
                          ・
                          ・
                          ・
```

ホスト識別子に対応しているマシン

ホスト識別子に対応していないマシン

8.2.4　あて先グループを［あて先］ウィンドウで作成する

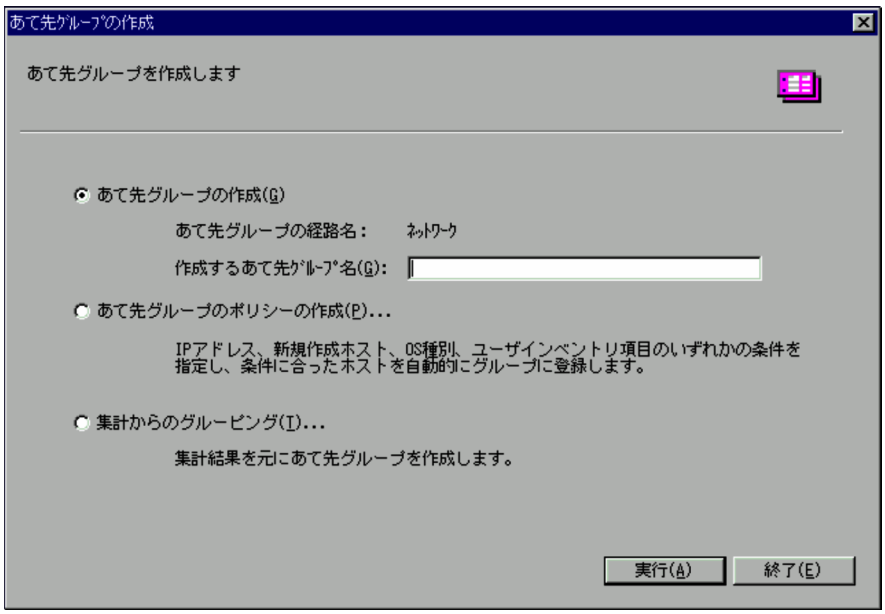
あて先グループを作成したあと，あて先グループに属するホスト（中継システムまたはクライアント）を登録します。

（1） あて先グループの作成手順

あて先グループの作成方法を次に示します。あて先グループ下にあて先グループを作成することはできますが，上位のあて先グループと同じ名称を下位のあて先グループに付けることはできません。作成できるあて先グループの階層は 7 階層までです。

1. **［あて先］ウィンドウをアクティブにし，あて先グループを作成する位置を選択する。**
   選択した位置の下位にあて先グループを作成します。
2. **［ファイル］－［グループの新規作成］を選択する。**
   ［あて先グループの作成］ダイアログボックスが表示されます。

図 8-6 ［あて先グループの作成］ダイアログボックス



「あて先グループの作成」を選択し，作成するあて先グループの名称をユニークに設定します。あて先グループ名の付け方については，「8.2.2　グループ名の付け方」を参照してください。

3. **項目を設定後，［実行］ボタンをクリックする。**
   あて先グループが作成されます。作成をやめるときは［終了］ボタンをクリックしてください。

(2) ホストの登録

作成したあて先グループに，ホストを登録する方法を次に示します。［システム構成］ウィンドウにないホストは，［あて先］ウィンドウでは設定できません。

1. **［あて先］ウィンドウをアクティブにし，ホストを設定する位置を選択する。**
   選択した位置の下位にホストを設定します。
2. **［ファイル］－［あて先の新規作成］を選択する（または，ホストの作成ボタンをクリックする）。**
   ［あて先の作成］ダイアログボックスが表示されます。

図 8-7 ［あて先の作成］ダイアログボックス



所属あて先グループ名

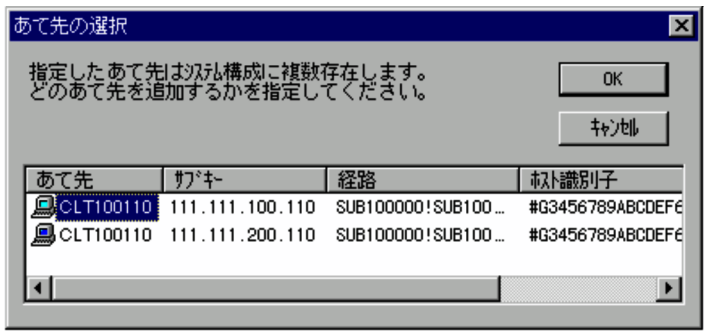
ホストを登録するあて先グループの名称が表示されます。

あて先名

登録するホストのホスト名または IP アドレスを指定します。

［追加］ボタンをクリックしたあと，ホスト識別子を使用した運用では，システム構成内に同じホスト名のホストが複数存在する場合，［あて先の選択］ダイアログボックスが表示されます。どのホストを選択するか指定します。

図 8-8 ［あて先の選択］ダイアログボックス



3. **項目を設定後，［終了］ボタンをクリックする。**

設定を保存して［あて先の作成］ダイアログボックスが閉じます。

このとき［追加］ボタンをクリックすると，続けてホストを追加できます。

また，［システム構成］ウィンドウに表示されているホストをあて先グループのアイコンにドラッグ & ドロップして，ホストを登録することもできます。

8.2.5 あて先グループを変更する

ここでは，あて先グループを変更する方法を説明します。

(1) ファイルから変更する

変更前のあて先グループの構成をファイルに出力します。出力したファイルを更新したあと，このファイルからあて先グループを作成します。

あて先グループの構成をファイルに保存する方法，および保存したファイルからあて先

グループを作成する方法については，「8.2.3　あて先グループをファイルから作成する」を参照してください。

(2) ［あて先］ウィンドウで変更する

［あて先］ウィンドウから，あて先グループを変更する方法を説明します。変更するあて先グループまたはホストを検索する方法については，「9.1.1　名称によるホストの検索方法」を参照してください。

(a) あて先グループ名の変更

あて先グループ名を変更する方法を説明します。

なお，［あて先］ウィンドウでは，ホストのあて先名は変更できません。

1. **［あて先］ウィンドウで名称を変更するあて先グループを選択する。**
   選択したあて先グループが反転表示されます。
2. **［ファイル］－［名前の変更］を選択する。**
   ［名前の変更］ダイアログボックスが表示されます。
3. **名称を設定後，［OK］ボタンをクリックする。**
   設定した名称に変更されます。

(b) あて先グループまたはホストの編集（削除，コピー，移動）

あて先グループまたはホストを編集（削除，コピー，移動）する場合，［あて先］ウィンドウをアクティブにし，編集するあて先グループまたはホストを選択して［編集］メニューから［削除］，［コピー］，［切り取り］，および［貼り付け］を選択します。なお，［コピー］または［切り取り］選択後は，左枠の「ネットワーク」をダブルクリックしないでください。ダブルクリックすると［貼り付け］が非活性になり，ホストを貼り付けられなくなります。この場合は，再度［コピー］または［切り取り］を選択してください。

また，あて先グループまたはホストは，ドラッグ & ドロップの操作でも編集できます。

(c) あて先を編集するときの注意事項

［あて先］ウィンドウで，あて先グループまたはホストを編集（削除，コピーまたは移動）しているときに通信障害などが発生すると，障害前の状態に戻すことができない場合があります。このため，多数のあて先グループまたはホストを編集する場合，編集する前にあて先グループの構成をファイルに保存しておくことをお勧めします。

あて先グループの構成をファイルに保存する方法，および保存したファイルからあて先グループを作成する方法については，「8.2.3　あて先グループをファイルから作成する」を参照してください。

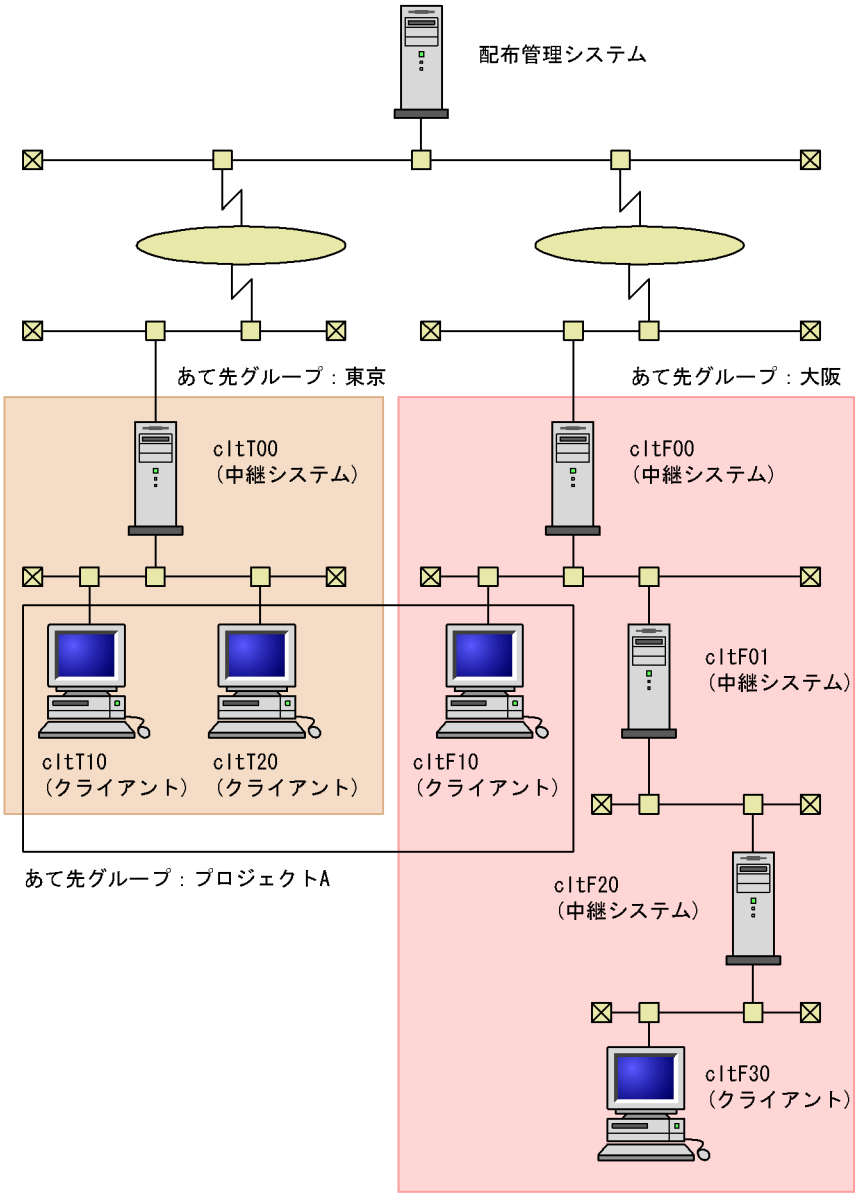
8.2.6　あて先グループの作成例

システム構成情報およびあて先グループの作成例を次に示します。

● システム構成情報およびあて先グループの構成

次の図に示す構成で，システム構成情報は自動的に作成し，あて先グループはシステム構成情報ファイルを編集して作成します。

図 8-9　システム構成およびあて先グループの構成



● システム構成情報ファイル

自動的に作成されたシステム構成情報をファイルに出力した結果を，次に示します。

図 8-10 システム構成情報ファイル

```
111.100.100.100 cltT00 TYPE=MASTER
111.100.100.110 cltT10 TYPE=CLIENT
111.100.100.120 cltT20 TYPE=CLIENT
111.110.100.100 cltF00 TYPE=MASTER
111.110.100.110 cltF10 TYPE=CLIENT
111.110.100.120 cltF01 TYPE=MASTER,ROOT=cltF00
111.110.100.130 cltF20 TYPE=MASTER,ROOT=cltF00¥cltF01
111.110.100.140 cltF30 TYPE=CLIENT
```

● あて先グループファイル

システム構成情報ファイルを編集して作成したあて先グループファイルを，次に示します。システム構成情報を出力するには，［システム構成］ウィンドウで［ファイル］－［ファイルの保存］を選択します。

図 8-11 あて先グループファイル

```
＊ 東京 TYPE=GROUP
＊ cltT00 TYPE=MASTER
＊ cltT10 TYPE=CLIENT
＊ cltT20 TYPE=CLIENT
＊ プロジェクトA TYPE=GROUP
＊ cltT10 TYPE=CLIENT
＊ cltT20 TYPE=CLIENT
＊ cltF10 TYPE=CLIENT
＊ 大阪 TYPE=GROUP
＊ cltF00 TYPE=MASTER
＊ cltF10 TYPE=CLIENT
＊ cltF01 TYPE=MASTER
＊ cltF20 TYPE=MASTER
＊ cltF30 TYPE=CLIENT
```

8.3　ID を作成する

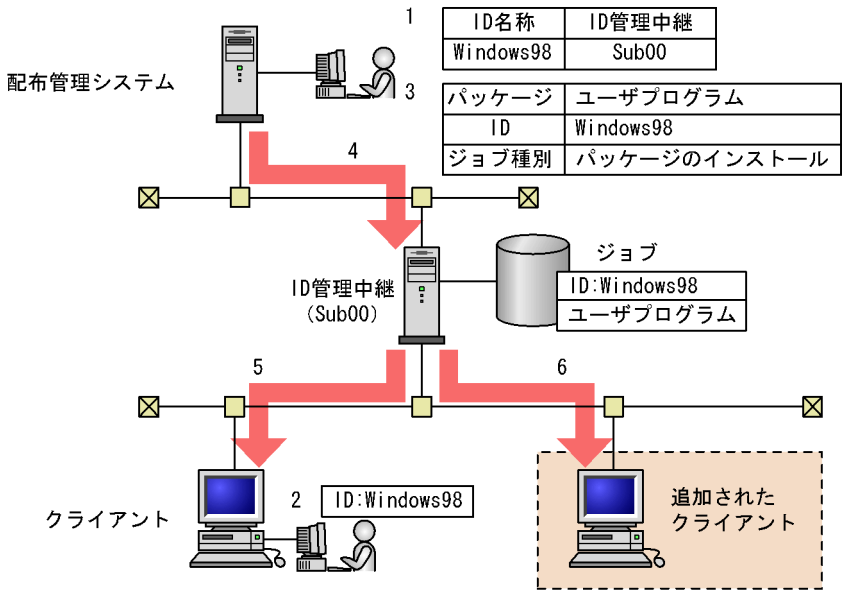
ID も，あて先グループと同様，リモートインストールマネージャの［あて先］ウィンドウで作成します。ID を作成するのは配布管理システムですが，作成した ID は，ID を管理する中継するシステム（ID **管理中継**）に通知され，管理されます。クライアント側からの ID への登録状況も，ID 管理中継で管理されます。

ここでは，ID の運用の概要を説明したあと，ID の作成やクライアントの登録の詳細を説明します。

8.3.1　ID の運用方法

ID の運用例を次の図に示します。

図 8-12　ID の運用例



1. IDを作成する
2. ID「Windows98」へ登録する
3. あて先に「Windows98」を指定したジョブを作成する
4. ジョブを実行する
5. ID管理中継によってクライアントにパッケージが配布される
6. 追加されたクライアントでID「Windows98」に登録すると，パッケージが配布される

次に，ID の運用手順，マネージャを階層化したシステムでの運用方法，および JP1/NETM/DM Client（中継システム）で ID を使用する場合の運用方法について説明します。

(1) ID の運用手順

(a) ID を作成する

ID は，配布管理システムで次に示す情報を設定して作成します。

● ID の名称
ここで設定した ID 名称が，ジョブの配布時に配布先として選択できます。

● パスワード（オプション）
クライアントが ID に登録するときに登録を許可するパスワードを設定できます。パスワードを設定すると ID にクライアントが登録するときは，ここで指定したパスワードを入力する必要があります。

● ID 管理中継
ID 管理中継として使用するホスト（中継マネージャまたは中継システム）を指定します。オフラインマシンおよびオフラインフォルダは指定できません。ID 管理中継は，一つの ID に対して複数指定できます。

(b) クライアントを ID へ登録する

ID への登録はクライアントで実行します。クライアントから ID 管理中継に接続して，その ID 管理中継が管理している ID に登録します。また，配布管理システム側および中継システム側でクライアントを ID に登録することもできます。JP1/NETM/DM システムに新規に追加されたクライアントを自動的に ID に登録することもできます。

クライアントから ID へ登録する ID 管理中継は，セットアップ時に，［接続先］パネル（JP1/NETM/DM Client の場合）で指定した上位システムとなります。JP1/NETM/DM Manager の場合は，中継マネージャのセットアップで設定した上位システムとなります。マルチホスト環境で動作するクライアントの場合，ID 管理中継は優先順位が 1 位の中継システムとなります。

(c) 配布管理システムからあて先に ID を指定したジョブを実行する

あて先に ID を指定できるジョブは次のとおりです。

- パッケージのインストール
- クライアントユーザによるインストール
- システム情報の取得
- ソフトウェア情報の取得
- ユーザインベントリ情報の取得
- レジストリ取得項目の転送
- ユーザインベントリ情報の転送（ユーザインベントリ項目の配布だけ）
- メッセージの通知
- ソフトウェア稼働監視の制御
- ソフトウェア稼働情報の取得

あて先に ID を指定したジョブ（ID **ジョブ**）は，指定した ID を管理する ID 管理中継に転送されます。ID 管理中継では転送されたジョブを保管し，この ID に登録されているクライアントに対してジョブを実行します。ID ジョブが実行されたあと，この ID にクライアントが登録されると，登録した時点で保存されている ID ジョブが実行されます。そのため，「パッケージのインストール」ジョブおよび「クライアントユーザによるインストール」ジョブで ID を指定する場合は，配布するパッケージの中継システムでの保管期限を考慮してください。中継システムでの保管期限を過ぎるとパッケージが中継システムから削除されるため，ID に登録したクライアントへパッケージが配布されません。

(d) ID ジョブの実行結果

次に示すジョブで ID を指定した場合，クライアントでの実行結果を配布管理システムで確認できます。ID ジョブの実行結果の確認方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「8.4.4　ジョブの実行状況の表示方法」を参照してください。

- パッケージのインストール
- クライアントユーザによるインストール

(e) ID の編集

作成した ID は，ID を作成した配布管理システムおよび ID 管理中継で次に示す編集ができます。

ID を作成した配布管理システム

- ID 管理中継の追加・削除
- パスワードの変更
- ID の削除
- クライアントを ID へ登録（ファイルから）
- ID 管理中継への ID の登録

ID 管理中継

- パスワードの変更
- ID の削除
- クライアントを ID へ登録（ファイルから）
- クライアントを ID へ登録（［あて先］ウィンドウから）
- ID に登録しているクライアントを削除

(2) 配布管理システムを階層化したシステムでの ID の運用方法

配布管理システムを階層化したシステムで，ID を使用する場合の運用方法を次に示します。

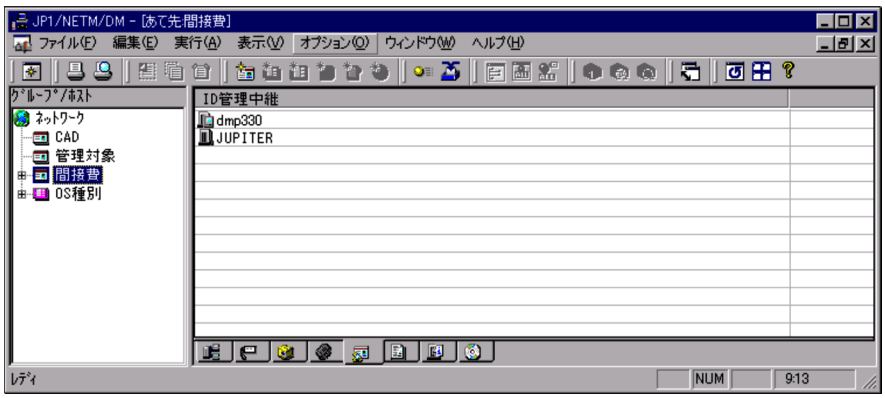
(a) マネージャでの ID の作成

マネージャで ID を作成する場合，ID 管理中継として次のホストを設定できます。

- 配下の中継マネージャ，中継システム
- 中継マネージャ配下の中継システム

マネージャで，中継マネージャを ID 管理中継として作成した ID の例を次に示します。

図 8-13 マネージャで中継マネージャを ID 管理中継として作成した ID



(b) 中継マネージャでの ID の管理

中継マネージャでは，中継マネージャで作成した ID のほか，上位マネージャから ID 管理中継として指定された ID が［あて先］ウィンドウに表示されます。

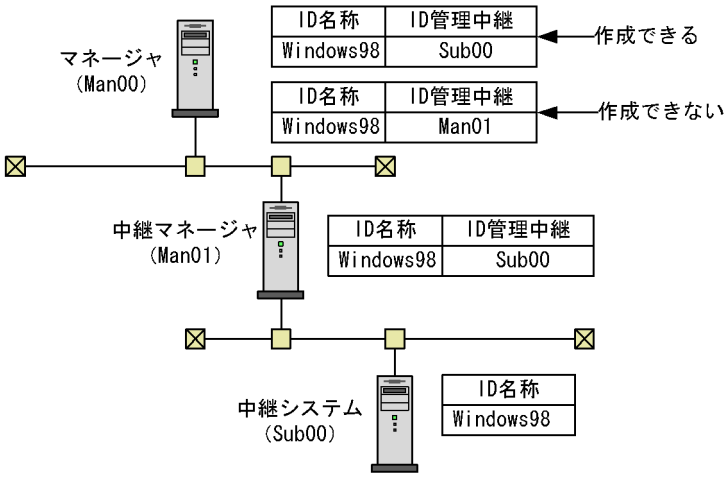
中継マネージャでは，上位のマネージャが作成した ID に対して次の操作ができます。

- パスワードの変更
- ID の削除
- ID に登録しているクライアントを削除

(c) 複数の配布管理システムで同じ ID を管理する場合

次の図に示すように，マネージャと中継マネージャで，同一の ID を作成できます。

図 8-14　複数の配布管理システムで同じ ID を管理する



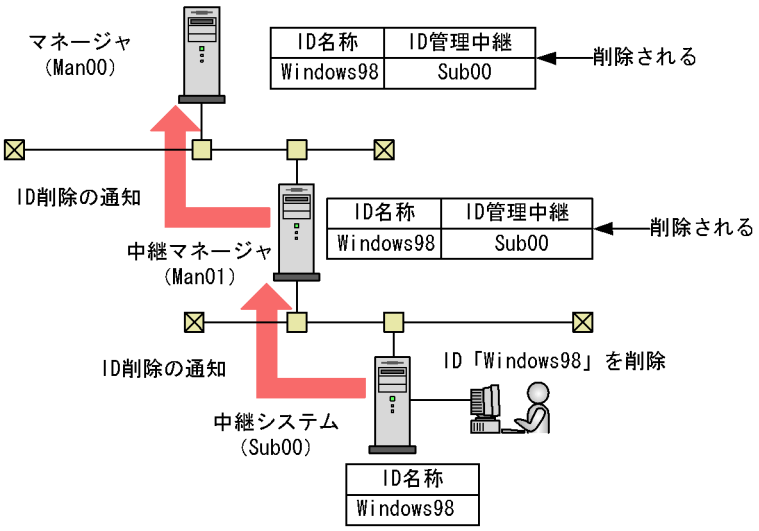
マネージャおよび中継マネージャの両方で，Sub00 を ID 管理中継として，「Windows98」の ID を作成できます。

ただし，マネージャが Man01 を ID 管理中継として，「Windows98」の ID を作成することはできません。中継マネージャでは同一名称の ID が作成済みのため，自システムで作成した ID と同じ ID に対して，上位のマネージャの ID 管理中継となることはできません。

ID を削除または，ID 管理中継を変更した場合は，変更したシステムから上位のシステムへ変更内容が通知され，上位のシステムに自動的に反映されます。

複数の配布管理システムで管理されている ID を削除する例を，次の図に示します。

図 8-15　複数の配布管理システムで管理されている ID を削除する



(3) 中継システムでの ID の運用方法

JP1/NETM/DM Client（中継システム）では，JP1/NETM/DM Manager の配布管理システムと同様，ID を作成して ID ジョブを配下のクライアントに対して実行できます。なお，JP1/NETM/DM Client（中継システム）で ID を使用する場合，ID 管理中継の役割を JP1/NETM/DM Client（中継システム）自身で行うため，ID 管理中継の設定は不要です。

JP1/NETM/DM Client（中継システム）で作成した ID を指定したジョブの実行結果は，JP1/NETM/DM Client（中継システム）で確認するほか，JP1/NETM/DM Manager の配布管理システムでも確認できます。JP1/NETM/DM Manager で，JP1/NETM/DM Client（中継システム）が実行した ID ジョブの実行結果を通知するには，JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップで次の設定が必要です。

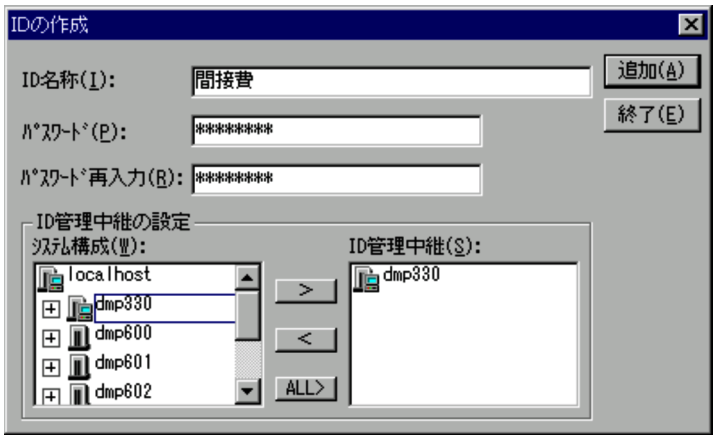
- ［リモートインストールマネージャ］パネルで，「配布管理システムへ ID ジョブの結果通知を行う」のチェックボックスをオンにする。

8.3.2　ID の作成

ID を作成する方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ID の作成］を選択する。**
   ［ID の作成］ダイアログボックスが表示されます。

図 8-16　［ID の作成］ダイアログボックス



ID 名称

ID の名称を設定します。ID 名の付け方については，「8.2.2　グループ名の付け方」を参照してください。

パスワード

クライアントが ID に登録するときに入力するパスワードを設定します。半角英数字で 14 文字までのパスワードが設定できます。パスワードの指定は省略できます。なお，入力した文字は「*」に変換して表示されます。

ID 管理中継の設定

ID 管理中継を設定します。複数のホストを ID 管理中継として設定できます。
「システム構成」には，［システム構成］ウィンドウに表示されるホストのうち，中継マネージャと中継システムが表示されます。オフラインマシンおよびオフラインフォルダは表示されません。「システム構成」で ID 管理中継にするホストを選択し，［>］ボタンをクリックすると，ID 管理中継に設定されます。「システム構成」では，同時に複数のホストを選択できます。
また，［ALL>］ボタンをクリックすると，すべての中継マネージャおよび中継システムを，一括して ID 管理中継に設定できます。

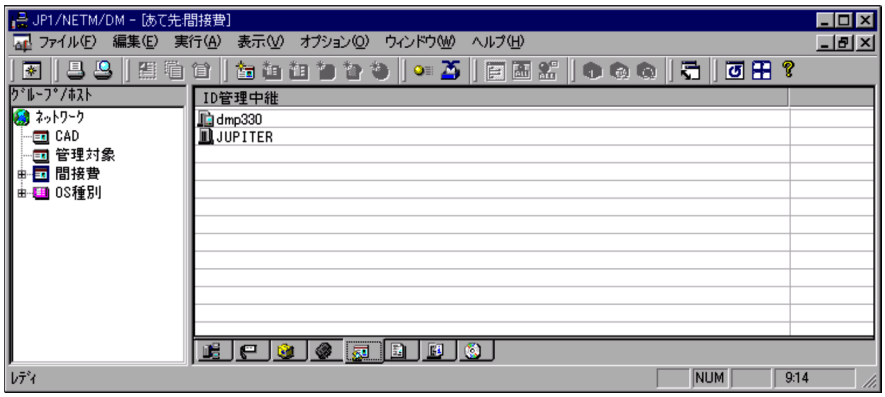
2. **ID を設定後，［追加］ボタンをクリックする。**

ID が作成されます。
ID 管理中継を追加するときに，追加処理に失敗して「登録中」のままとなることがあります。このような場合は，失敗要因を取り除いてから再実行してください。
「登録中」状態の管理中継は「ID の削除」で強制的に削除することができます。

3. **［終了］ボタンをクリックする。**

［ID の作成］ダイアログボックスが閉じます。
定義した ID は，［あて先］ウィンドウで確認できます。ID を管理する中継システムは，［あて先］ウィンドウの右枠の［ID 管理中継］タブを選択すると表示されます。

図 8-17　［あて先］ウィンドウの［ID 管理中継］パネル



8.3.3　クライアントの登録方法

ID へクライアントを登録させる方法には次の 4 種類があります。なお，オフラインマシンは ID に登録できません。

- クライアントから ID へ登録する。
- 配布管理システムからファイルを使ってクライアントを ID に登録する。
- ID 管理中継からクライアントを ID に登録する。
- ID の自動メンテナンスを使用してクライアントを ID に登録する。

(1) クライアントから ID に登録する

クライアントは，メニューの［ID への登録］を選択して表示される［ID への登録］ダイアログボックスを使用して，ID へ登録します。

ID への登録は，ID 管理中継と接続されている状態で処理します。しかし，ID 管理中継と接続されていない状態でも，ID への登録や ID からの登録解除を待ち状態にすることができます。ID 管理中継と接続できる状態になってからあとにログオンした時，または［ID への登録］メニューを選択した時に，実際の登録や登録解除を ID 管理中継に通知します。そのため，プレインストールやシステム構築の準備段階でも ID への登録ができます。また，クライアントがリモートインストールなどを実行している最中は，ID 管理中継とは別機能で接続している状態です。この場合も，ID 管理中継と接続されていないときと同じように扱われます。

クライアントでの ID への登録方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「11.2.1 ID への登録」を参照してください。

(2) 配布管理システムからファイルを使ってクライアントを ID に登録する

バージョン 05-20 以降の JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継

システム）で構成されたシステムでは，配布管理システム上で，ファイルを使ってクライアントを ID に登録できます。新規導入時などに，大量のクライアントを ID に登録する必要がある場合などに便利です。ファイルには，複数クライアントの ID 登録情報を設定しておきます。このようなファイルを ID **ファイル**と呼びます。ファイルを使ってクライアントを ID に登録する方法を次に示します。

(a) ID ファイルを作成する

ID ファイルでは，一つのホストごとに，ホスト名，ホスト識別子，ID 名称，ID 管理中継名称などを設定します。

ファイルはテキスト形式で，1 カラム目に「'」（シングルクォーテーション）または「#」を付けると，その行はコメントと見なされます。

形式

ホスト名 HID=ホスト識別子,MAC=MACアドレス,ID=ID名称,MASTER=ID管理中継名称

説明

●ホスト名（必ず設定）

ID に追加するホスト名または IP アドレスを指定します。64 バイトまで指定できます。

● HID= ホスト識別子

ホストを一意に認識する識別子を設定します。［ファイル］－［ID ホストをファイルへ保存］でファイルに出力した ID にホスト識別子が設定されていた場合は，［ファイルから ID 登録］でクライアントを ID へ登録する場合にも，このホスト識別子を必ずそのまま設定してください。なお，［ID ホストをファイルへ保存］で出力したファイルの ID にホスト識別子が設定されていないホスト，または新規に追加するホストについては，このオペランドを指定しないでください。

● MAC=MAC アドレス

ホストの MAC アドレスを設定します。MAC アドレスの情報は，Wake on LAN 機能などに関連する情報のため，基本的にこのオペランドは変更しないでください。変更すると機能が動作しないおそれがあります。

● ID=ID 名称（必ず設定）

追加する ID 名称を指定します。32 バイトまで指定できます。

● MASTER=ID 管理中継名称

追加する ID が存在する中継システムまたは中継マネージャの名称を指定します。中継システムの場合は，ホスト名，IP アドレス，またはホスト識別子を指定します。中継マネージャの場合は，ホスト名またはホスト識別子を指定します。［ID ホストをファイルへ保存］で ID をファイルに出力し，ホスト識別子が設定されていた場合は，必ずこのホスト識別子をそのまま設定してください。

64 バイトまで指定できます。配布管理システムまたは中継マネージャでこのパラメタを省略した場合，配布管理システム上の ID にクライアントを登録します。また，中継システム上ではこのパラメタを指定しても無視されます。この場合，中継システム上の ID に登録されます。

(b) ファイルを使ってクライアントを ID に登録する

作成した ID ファイルを使ってクライアントを ID に登録するには，配布管理システムの［あて先］ウィンドウで，メニューの［ファイル］－［ファイルから ID 登録］を選択し，作成した ID ファイルを選択します。

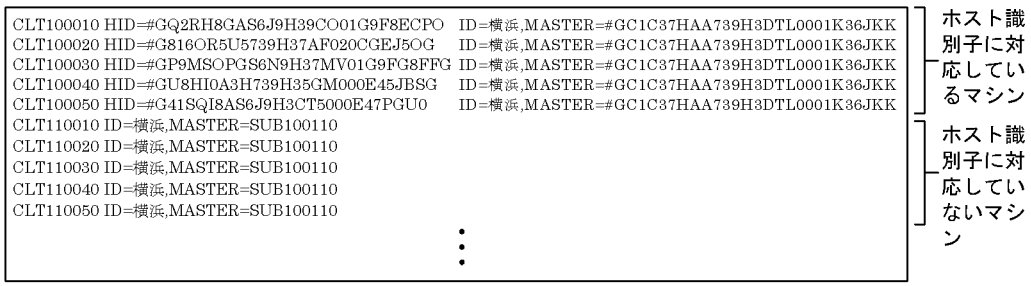
なお，バージョンが 05-20 より前の JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager で構成されたシステムでは，ファイルからの ID 登録を実行しても，クライアントが ID に登録されません。［あて先］ウィンドウに「登録中」のクライアントが残るので，削除してください。また，［ジョブ実行状況］ウィンドウの［ID グループの編集］フォルダ下の ID 名称のフォルダに，「エントリの追加」というジョブが残るので，削除してください。

(c) ID をファイルに出力する

配布管理システムに設定した ID と，ID に登録されているホストの情報をファイルに出力するには，［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ID ホストをファイルへ保存］を選択します。なお，この操作は，［最新の情報に更新］を実行したあと，行ってください。自動反映によって画面の状態と内部データの不一致が発生した場合，正しい情報が出力されないことがあります。

ID の情報のファイルへの出力例を次に示します。

図 8-18 ID の情報のファイルへの出力例



(3) ID 管理中継からクライアントを ID に登録する

JP1/NETM/DM SubManager をインストールした PC を ID 管理中継として使用している場合，［あて先］ウィンドウで，自システムに接続しているクライアントを ID へ登録できます。ID へ登録するクライアントが多数ある場合，ID 管理中継側で一括して登録できるため，クライアント側で登録する手間が省けます。

ID 管理中継でクライアントを ID に登録する場合，クライアントの接続先が，自システム（ID 管理中継）であることを確認してください。

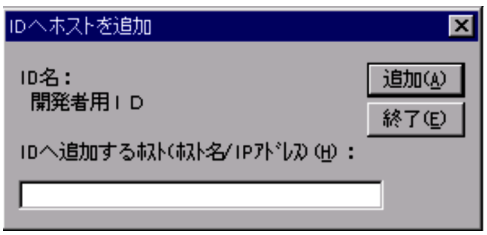
クライアントを ID に登録するには，メニューを使用する方法とドラッグ & ドロップで操作する方法とがあります。

(a) メニューを使用する方法

1. **リモートインストールマネージャの［あて先］ウィンドウで，クライアントを追加する ID を選択する。**

2. **［ファイル］－［ID へホストを追加］を選択する。**
   ［ID へホストを追加］ダイアログボックスが表示されます。

図 8-19 ［ID へホストを追加］ダイアログボックス



ID 名

［あて先］ウィンドウで選択した ID の名称が表示されます。

ID へ追加するホスト

ID へ追加するクライアントのホスト名または IP アドレスを指定します。
なお，ID へ追加できるのは，接続先として自システムを設定しているクライアントだけです。クライアントの接続先が自システムであることを確認してください。

3. **［追加］ボタンをクリックする。**
   指定したクライアントが ID に登録されます。

(b) ドラッグ & ドロップで登録する方法

1. **リモートインストールマネージャの［あて先］ウィンドウで，ID に登録するクライアントを選択する。**
   あて先グループ，ID，および ID に属しているホストは選択できません。

2. **登録先の ID へドラッグしたあと，ドロップする。**
   クライアントが ID に登録されます。

(4) ID の自動メンテナンスを使用してクライアントを ID に登録する

ID の自動メンテナンスを使用して，一定の条件に一致したクライアントを自動的に ID に登録できます。

ID の自動メンテナンスを使用してクライアントを ID に登録する方法については，「9.4 ID の自動メンテナンス」を参照してください。

8.3.4 ID の編集

ID を作成した配布管理システム，および ID 管理中継では次に示す ID の編集ができます。

- ID 管理中継を変更する。
- パスワードを変更する。
- ID を削除する。
- クライアントを ID へ登録する。
- ID に登録しているクライアントを削除する。
- ID 管理中継へ ID を登録する。

(1) ID 管理中継およびパスワードの変更

ID 管理中継，および ID への登録時に必要なパスワードを変更する方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ID の属性変更］を選択する。**
   ［ID の属性変更］ダイアログボックスが表示されます。
2. **変更後の ID 管理中継を設定する。**
   変更後の ID 管理中継，またはパスワードを設定します。ID 管理中継ではパスワードだけを変更できます。なお，入力した文字は「*」に変換して表示されます。
3. **ID 管理中継を変更後，［OK］ボタンをクリックする。**
   ID 管理中継が変更されます。
   ID 管理中継を変更する場合，処理に時間が掛かることがあります。［あて先］ウィンドウに変更した結果が表示されない場合は，しばらく時間をおいたあと，メニューの［ウィンドウ］－［最新の情報に更新］を選択して，再度表示させてください。

(2) ID の削除

ID を削除する方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウで削除する ID を選択し，［ファイル］－［ID の削除］を選択する。**
   削除を確認するダイアログボックスが表示されます。
2. **［OK］ボタンをクリックする。**
   選択した ID が削除されます。削除した ID は，［あて先］ウィンドウでは「削除中」の状態で表示され，削除されません。ID の削除が完了したあと，メニューの［ウィンドウ］－［最新の情報に更新］を選択すると，削除されます。

（3） ID に登録したクライアントの削除

ID に登録したクライアントの削除方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウで，削除するクライアントを選択し，［編集］ー［削除］を選択する。**
   削除を確認するダイアログボックスが表示されます。
2. **［OK］ボタンをクリックする。**
   選択したクライアントが削除されます。多階層の構成では，削除に時間が掛かる場合があります。
   削除したクライアントは，削除した時点では「削除中」の状態で［あて先］ウィンドウに表示されています。登録していた ID から削除が完了したあと，メニューの［ウィンドウ］ー［最新の情報に更新］を選択すると，表示されなくなります。

（4） ID 管理中継への ID の登録

ID を作成した配布管理システムで，ID 管理中継へ ID を登録できます。複数の ID を一括して ID 管理中継へ登録できるので，ID 管理中継を増設した場合に便利です。

ID 管理中継を ID へ登録する場合は，「(1)　ID 管理中継およびパスワードの変更」を参照してください。

(a) ID 管理中継へ ID を登録する

ID 管理中継へ ID を登録する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウで，［ファイル］ー［ID 管理中継への ID の登録・削除］を選択する。**
   ［ID 管理中継への ID の登録・削除］ダイアログボックスが表示されます。

図 8-20　［ID 管理中継への ID の登録・削除］ダイアログボックス



2. **「ID 一覧」から登録する ID を選択し，［>］ボタンをクリックする。**
   「管理する ID 一覧」へ ID が追加されます。

3. **［OK］ボタンをクリックする。**
   ID 管理中継へ ID が登録されます。

(b) ID 管理中継から ID を削除する

ID 管理中継に登録されている ID を削除する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウで，［ファイル］－［ID 管理中継への ID の登録・削除］を選択する。**
   ［ID 管理中継への ID の登録・削除］ダイアログボックスが表示されます。

2. **「管理する ID 一覧」から削除する ID を選択し，［<］ボタンをクリックする。**
   「管理する ID 一覧」から ID が削除されます。

3. **［OK］ボタンをクリックする。**
   ID 管理中継から ID が削除されます。

8.3.5　ID を使用する場合の注意事項

ID を使用する場合の注意事項を次に示します。

(1) クライアントのホスト名を変更する場合

ID を使用している環境では，ID の情報が連動して変更されません。そのため，ホスト名を変更する場合は，変更する前にクライアントで登録している ID を解除してください。そして，ホスト名を変更したあと，再度クライアントで ID への登録を実行してくだ

さい。

（2）ID に登録しているクライアントでシステム構成情報を削除した場合

ID に登録しているクライアントがセットアップの設定でシステム構成情報を削除しても，登録している ID の情報は連動して削除されません。そのため，クライアントのシステム構成情報を削除する前に，登録している ID を解除してください。

ID を解除しないで，システム構成情報を削除した場合，リモートインストールマネージャから削除してください。削除方法については，「8.3.4　ID の編集」を参照してください。

なお，自動的にシステム構成情報と ID の情報を連携させる運用もできます。詳細については，「8.4　システム構成情報と ID を連携させる運用」を参照してください。

（3）［ID グループの編集］フォルダが作成された場合

［ジョブ実況状況］ウィンドウに［ID グループの編集］フォルダが作成された場合は，［ID グループの編集］フォルダ，およびフォルダ内のジョブを削除しないでください。

［ID グループの編集］フォルダには，クライアントを ID に登録したり，ID 管理中継を追加したりするためのジョブが格納されます。これらの ID を編集するジョブは，自動的に作成され，正常終了すると自動的に削除されます。

ID を編集するジョブを手動で削除してしまった場合は，ID の編集が実施されなくなるため，ID を編集する操作（クライアントの ID への登録や ID 管理中継の追加など）をし直してください。

8.4 システム構成情報と ID を連携させる運用

システム構成情報が変更された場合，システム内の関連する ID の情報を連携して変更させることができます。この機能を利用するとシステム管理者が ID を管理する負担を軽減できます。

8.4.1 システム構成情報と ID を連携させるには

システム構成情報と ID の情報を連携させたい場合は，次の設定が必要です。

● **JP1/NETM/DM Manager の場合**
JP1/NETM/DM Manager のセットアップで，［システム構成関連］パネルの「システム構成の変更を連携させる」のチェックボックスをオンにしてください。

● **JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合**
JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップで，［システム構成関連］パネルの「システム構成の変更を連携させる」のチェックボックスをオンにしてください。

8.4.2 システム構成情報と ID の連携例

システム構成情報と ID の連携の例を次に示します。

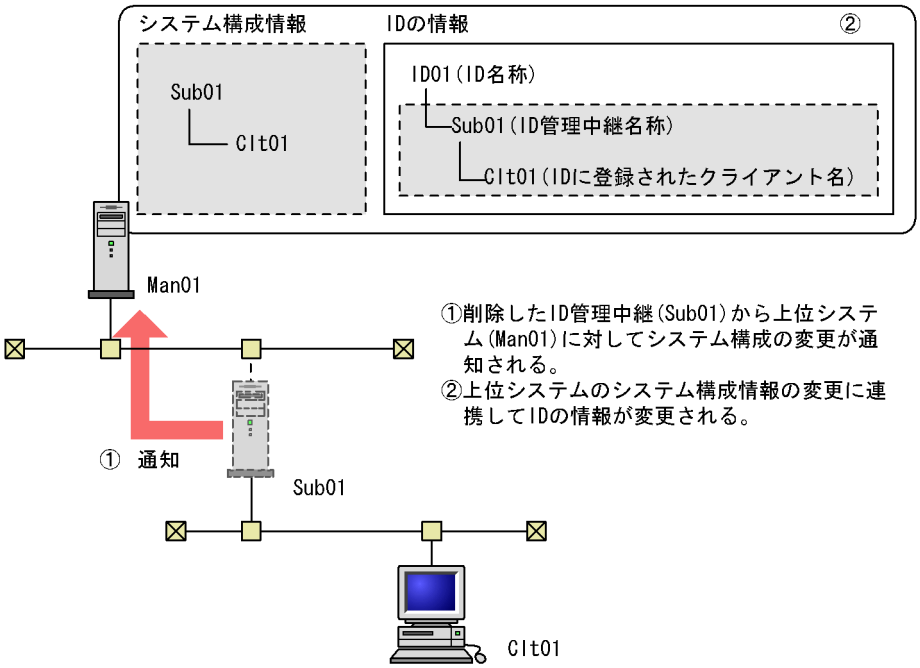
（1）システム構成情報からの削除

システム構成情報から ID 管理中継または ID に登録されたクライアントを削除した場合の，システム構成情報と ID の情報の連携について説明します。

(a) ID 管理中継を削除した場合

ID 管理中継として定義されている中継システムが削除された場合の例を次の図に示します。

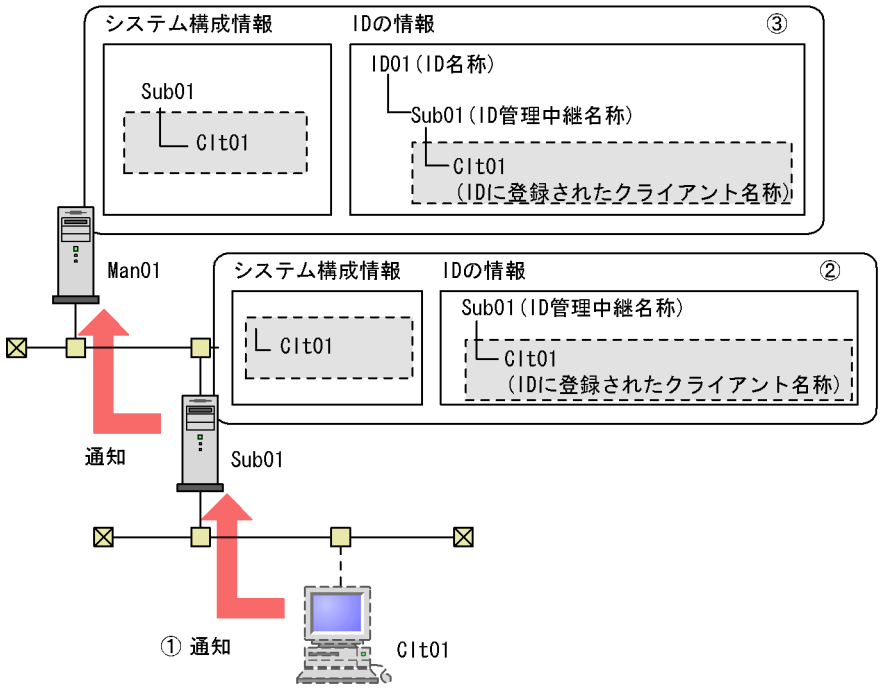
図 8-21　ID 管理中継として定義されている中継システムが削除された場合の例



(b) ID に登録されたクライアントを削除した場合

ID に登録されたクライアントを削除した場合の例を次の図に示します。

図 8-22 ID に登録されたクライアントを削除した場合の例



①削除したIDに登録されたクライアントから上位システムに対して名称変更が通知される。
②ID管理中継(Sub01)のシステム構成情報の変更に連携してIDの情報が変更される。
③配布管理システム(Man01)のシステム構成情報の変更に連携してIDの情報が変更される。

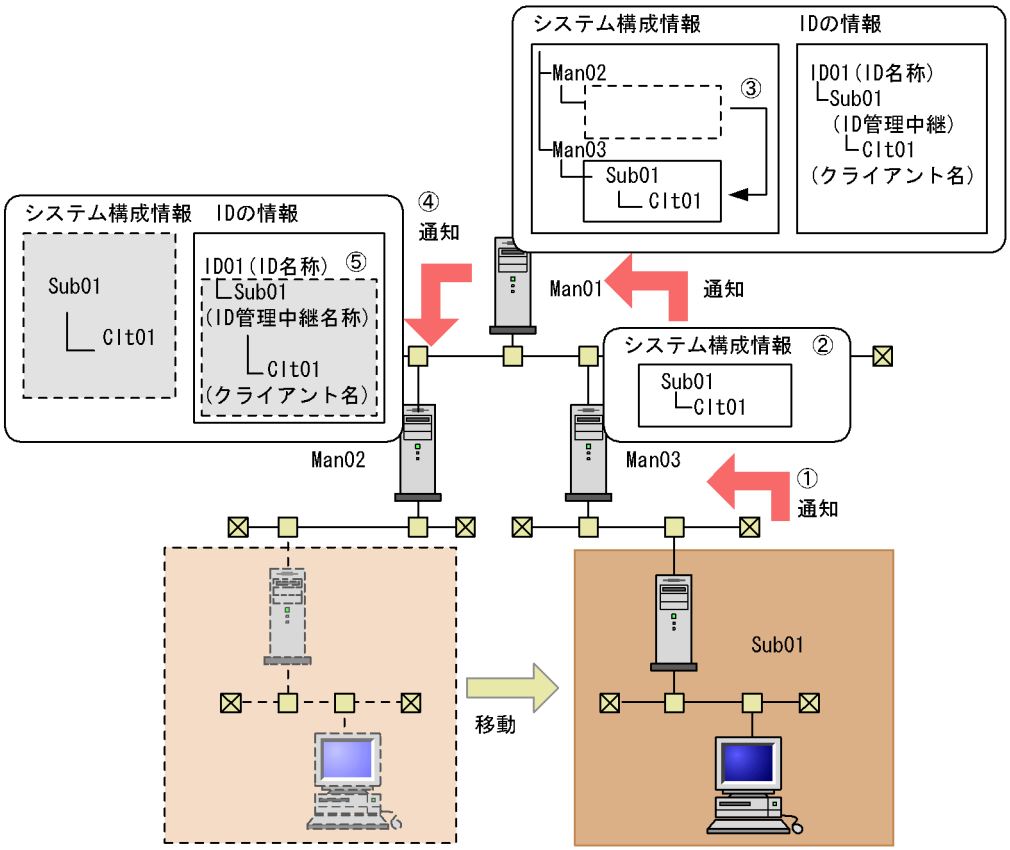
(2) システム構成情報での経路変更

システム構成情報から ID 管理中継または ID に登録されたクライアントの経路を変更した場合の，システム構成情報と ID の情報の連携について説明します。

(a) ID 管理中継の経路変更の場合

ID 管理中継として定義されている中継システムの接続先を変更した場合の例を次の図に示します。

図 8-23　ID 管理中継として定義されている中継システムの接続先を変更した場合の例

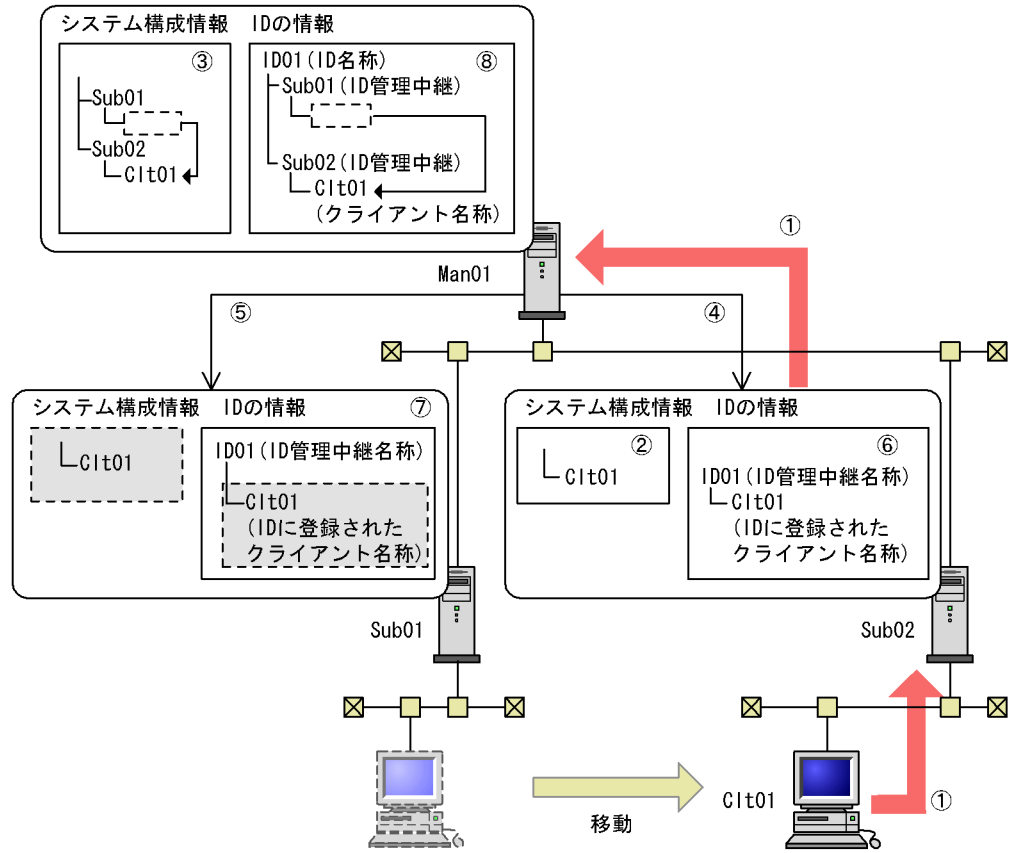


①接続先を変更した中継システム(Sub01)から新しい接続先に対してシステム構成の自動登録が通知される。
②新しい接続先の中継マネージャ（Man03）のシステム構成情報に中継システムが追加される。
③中継システム(Sub01)をID管理中継としているサーバのシステム構成情報の経路が変更される。このときIDの情報は影響がないため，IDの情報は変更されない。
④旧経路に残ったシステム構成およびIDの情報を削除するジョブが中継マネージャ(Man02)に通知される。
⑤ジョブを受け取った旧経路の中継マネージャ(Man02)から移動した中継システムのシステム構成情報およびIDの情報が削除される。

(b) ID に登録されたクライアントの経路変更の場合

ID に登録されたクライアントの接続先を変更した場合の例を次の図に示します。

図 8-24 ID に登録されたクライアントの接続先を変更した場合の例



①Clt01から変更した接続先に対してシステム構成が自動登録される。
②新しい接続先(Sub02)でシステム構成情報にクライアントが追加される。
③経路変更を検知したマネージャ(Man01)では，システム構成上のクライアントの経路を変更し，旧ID管理中継(Sub01)に所属していたIDの情報からクライアント(Clt01)を削除する。
④クライアントが所属していたIDに対して新経路のIDにクライアントを追加する指示が出される。
⑤旧経路の中継システム(Sub01)に対し，配下のクライアントが削除されたことを通知するジョブが実行される。
⑥④の指示を受けた新ID管理中継(Sub02)が自身のIDにクライアントを追加する。
⑦⑤の指示を受けた旧経路の中継システムのシステム構成情報およびIDの情報からクライアントが削除される。
⑧新しい接続先になったID管理中継(Sub02)下にクライアントが追加される。

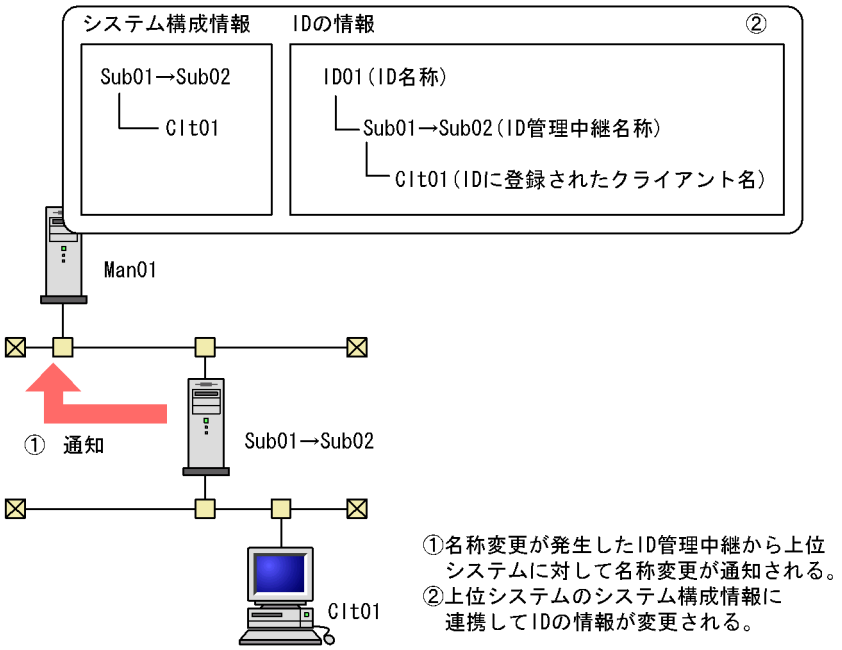
(3) システム構成情報での名称変更

システム構成情報から ID 管理中継または ID に登録されたクライアントの名称を変更した場合の，システム構成情報と ID の情報の連携について説明します。

(a) ID 管理中継の名称変更の場合

ID 管理中継として定義されている中継システムの名称を変更した場合の例を次の図に示します。

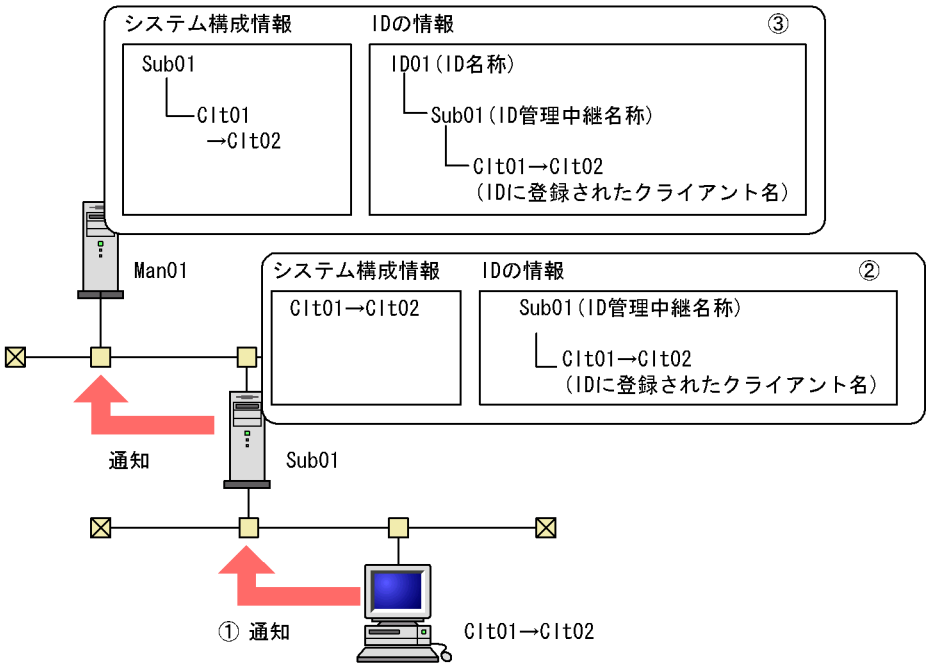
図 8-25　ID 管理中継として定義されている中継システムの名称を変更した場合の例



(b) ID に登録されたクライアントの名称変更の場合

ID に登録されたクライアントの名称を変更した場合の例を次の図に示します。

図 8-26　ID に登録されたクライアントの名称を変更した場合の例



①名称変更の発生したIDに登録されたクライアント(Clt01)から上位システムに対して名称変更が通知される。
②上位システム(Sub01)のシステム構成情報に連携してIDの情報が変更される。
③②上位システム(Man01)のシステム構成情報に連携してIDの情報が変更される。

8.4.3　システム構成情報と ID の連携時の注意事項

システム構成情報と ID を連携させる場合の注意事項を次に示します。

(1) パスワードのある ID の扱い

パスワードのある ID に登録されたクライアントのシステム構成情報が変わった場合，ID の情報は変更されません。また，ID の作成元でパスワードを設定していなくても，ID 管理中継でパスワードを設定していることがあります。この場合も，ID に登録されたクライアントのシステム構成情報に変更があっても，ID の情報は変更されません。

(2) 運用キーの異なる接続先へ変更した場合

ホスト識別子を使用していない環境の ID 管理中継や ID に登録されたクライアントを，運用キーの異なる環境に接続を変更した場合，接続を変更した ID 管理中継や ID に登録されたクライアントは，新規追加と認識されるため ID の情報は連携して変更されません。

(3) ジョブとの連携

- システム構成情報から ID 管理中継または ID に登録されたクライアントが削除された場合，その ID 管理中継あてまたは経由のジョブ，およびクライアントあてのジョブは削除されます。
- 経路変更時にはジョブは連携されません。したがって，旧経路に存在している ID ジョブは削除されません。
- 名称変更時はジョブは連携されません。したがって，名称が変更された時点でその ID 管理中継あてまたは経由するジョブは使用できなくなります。

(4) セットアップの設定について

- システム構成情報と ID を連携するためには，すべての JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップで「システム構成の変更を連携させる」のチェックボックスをオンにしておく必要があります。設定が一致していないと，上位システムと下位システムとで管理情報が不一致になることがあります。
- システム内にバージョンが 05-21 より前の JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager が存在する場合は，この機能を使用できません。この場合，システム内の JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM SubManager では「システム構成の変更を連携させる」のチェックボックスをオフにしておく必要があります。

(5) クライアント側でのネットワークからの削除

クライアント側でネットワークからクライアントまたは中継システムを削除した場合，以前の接続先に登録されている ID からもすべて削除されます。ただし，新しい接続先への ID 連携は実行されません。新しい接続先では新規登録のクライアントと見なされるため，ID への登録が再度必要です。

(6) 中継するシステムの場合

中継マネージャまたは中継システムの ID への登録先は自システムとする必要があります。上位システムを ID への登録先とする場合はそのシステムについてはシステム構成情報と ID が正しく連携しない場合があります。

(7) ID に登録されているクライアントの接続先を変更した場合

ID に登録されているクライアントの接続先を変更した場合，そのクライアントが新しい接続先の ID に自動的に登録されますが，時間が掛かる場合があります。ID を指定したジョブの実行前にまず ID の登録状況を確認してください。システム構成情報との ID の連携が実行されると構成変更対象となるクライアントの ID への追加ジョブが自動的に生成されリモートインストールマネージャのジョブ実行状況画面で参照できます。

（8）UNIX の中継システムが混在するシステム構成の場合

UNIX の中継システムが混在するシステム構成では，UNIX の中継システム配下と，Windows の配布管理システムおよび中継システム配下間で，システム構成情報が変更になっても，システム構成情報と ID を連携させる運用はできません。

9 システム構成情報とあて先のグループをメンテナンスする

この章では，運用を開始したあとで，システム構成情報とあて先のグループをメンテナンスする方法について説明します。また，JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する方法についても説明します。

9.1 **システム構成情報の手動メンテナンス**

9.2 **システム構成情報の自動メンテナンス**

9.3 **あて先グループの自動メンテナンス**

9.4 ID **の自動メンテナンス**

9.5 **ポリシーをファイルから作成する**

9.6 **システム構成情報の削除履歴を管理する**

9.7 JP1/NETM/DM **がインストールされていないホストを検出する**

9.1 システム構成情報の手動メンテナンス

JP1/NETM/DM Manager の［システム構成］または［あて先］ウィンドウで，新しく追加されたホストを検索してあて先グループに登録したり，不要なホストを検索してシステム構成情報から削除したりできます。

検索方法には次の 3 種類があります。

- あて先名，あて先グループ名，ID 名などの名称をキーにした検索
- ホストの登録日やインベントリ情報の最終更新日などの日付をキーにした検索
- ホスト識別子は異なるが，MAC アドレス，IP アドレス，またはホスト名が一致するホスト（重複ホスト）の検索

ここでは，各検索方法について説明します。また，検索結果のホストを［あて先］ウィンドウにコピーする方法や，システム構成情報から削除する方法についても説明します。

9.1.1 名称によるホストの検索方法

IP アドレス，あて先名，あて先グループ名，ID 名などの名称をキーにしたホストの検索方法を次に示します。

1. **［システム構成］または［あて先］ウィンドウの［オプション］－［検索］を選択する。**
   ［検索］ダイアログボックスが表示されます。［システム構成］ウィンドウから表示した場合と［あて先］ウィンドウから表示した場合とで，ダイアログボックスの表示項目は異なります。
   それぞれのウィンドウから表示した［検索］ダイアログボックスを次に示します。

図 9-1 ［システム構成］ウィンドウから表示した［検索］ダイアログボックス



図 9-2 ［あて先］ウィンドウから表示した［検索］ダイアログボックス



あて先（［あて先］ウィンドウから表示した場合だけ）

あて先名を検索対象とする場合に指定します。

あて先グループと ID（［あて先］ウィンドウから表示した場合だけ）

あて先グループ名と ID 名を検索対象とする場合に指定します。

検索文字列
検索文字列を最大 64 バイトで指定します。ただし，次に示す記号および半角スペースは指定できません。
「¥」「/」「*」「"」「:」「!」「|」「<」「>」「?」「%」「@」「'」
指定した文字列を含むあて先が検索されます。

ホスト名を検索
ホスト名をキーにして検索する場合に選択します。
［検索］ダイアログボックスを［あて先］ウィンドウから表示した場合，検索対象に「あて先グループと ID」を選択しているときは，非活性になります。

IP アドレスを検索
IP アドレスをキーにして検索する場合に選択します。
［検索］ダイアログボックスを［あて先］ウィンドウから表示した場合，検索対象に「あて先グループと ID」を選択しているときは，非活性になります。

完全に一致するものだけを検索
指定した検索文字列と完全に一致するものだけを検索したい場合に，チェックボックスをオンにします。

大文字と小文字を区別する
大文字と小文字を区別して検索したい場合に，チェックボックスをオンにします。ただし，リレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server を使用し，Microsoft SQL Server の並べ替え順の設定で「大文字小文字を区別しない」を選択している場合，ここで，「大文字と小文字を区別する」を選択しても無効になります。

2. **検索条件を設定し，［検索］ボタンをクリックする。**
検索が開始され，下部の「検索結果」リストに検索結果が表示されます。
［検索］ダイアログボックスは，見やすいサイズに変更できます。

3. **「検索結果」リストから任意のあて先を選択して［ジャンプ］ボタンをクリック，またはダブルクリックする。**
［システム構成］または［あて先］ウィンドウがアクティブになり，選択したあて先の情報が表示されます。

9.1.2 日付によるホストの検索方法

次に示す日付をキーにした検索ができます。

- **作成日時**
ホストを，初めてマネージャまたは中継マネージャへ登録した日時。
- **システム情報最終更新日時**
「システム情報の取得」ジョブで情報を取得した最終日時。
- **ユーザインベントリ情報最終更新日時**
ユーザインベントリ情報が更新された最終日時。
- **インストールパッケージ情報最終更新日時**

「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアを検索」,「すべてのソフトウェアを検索」, または「アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索」でソフトウェア情報を取得した最終日時。

- **ソフトウェアインベントリ情報最終更新日時**
  「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ファイルを検索」,「Microsoft Office 製品を検索」, または「ウィルス対策製品を検索」でソフトウェア情報を取得した最終日時。
- **ソフトウェア稼働監視情報最終更新日時**
  ソフトウェアの稼働状況を監視して, 抑止履歴または操作履歴が更新された最終日時。

日付をキーにしたホストの検索方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウの［オプション］－［検索］を選択する。**
   ［検索］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［日付による検索］タブを選択する。**

図 9-3 ［日付による検索］パネル



3. **検索するホストの種類を選択する。**

   一定期間内に作成されたホスト
   「日付指定」で指定した期間内に, 新規に追加されたホストを検索します。

   一定期間内にインベントリ情報が更新されたホスト
   「日付指定」で指定した期間内に, インベントリ情報またはソフトウェア稼働情報が更新されているホストを検索します。

   一定期間内にインベントリ情報が更新されなかったホスト
   「日付指定」で指定した期間内に, インベントリ情報またはソフトウェア稼働情報が更新されていないホストを検索します。

4. **「一定期間内にインベントリ情報が更新されたホスト」または「一定期間内にインベントリ情報が更新されなかったホスト」を選択した場合は，検索対象となる情報の種類を選択する。**

   システム情報
   「システム情報の取得」ジョブで情報を取得した最終日時を検索します。

   ユーザインベントリ情報
   ユーザインベントリ情報が更新された最終日時を検索します。

   インストールパッケージ情報
   「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ファイルを検索」以外でソフトウェア情報を取得した最終日時を検索します。

   ソフトウェアインベントリ情報
   「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ファイルを検索」でソフトウェア情報を取得した最終日時を検索します。

   ソフトウェア稼働監視情報
   ソフトウェアの稼働状況を監視して，抑止履歴または操作履歴が更新された最終日時を検索します。

   組み合わせ
   情報の種類を複数選択した場合は，それらの条件を「すべて」満たすものを検索するのか，「いずれか」を満たしているものを検索するのかを指定します。

5. **検索する日付の範囲を指定する。**

   範囲指定
   検索する日付範囲の開始日と終了日の両方，またはどちらか一方を指定します。入力形式は *YY/MM/DD* で，*YY* は西暦下 2 けたを，*MM* は月を，*DD* は日を表します。検索できる日付の範囲は 1971 年 1 月 1 日～ 2037 年 12 月 31 日です。なお，開始日または終了日のどちらか一方だけを指定する場合は，指定しない方のチェックボックスをオフにしておきます。

   過去 *n* か月間
   現在の日付から何か月前までを検索範囲にするのかを指定します。指定できる月数は 1 ～ 999 です。ただし，指定した月数が，検索可能範囲である 1971 年 1 月 1 日以前になる場合は，1971 年 1 月 1 日から現在の日付までが，検索範囲になります。

   過去 *n* 日間
   現在の日付から何日前までを検索範囲にするのかを指定します。指定できる日数は 1 ～ 999 です。ただし，指定した日数が，検索可能範囲である 1971 年 1 月 1 日以前になる場合は，1971 年 1 月 1 日から現在の日付までが，検索範囲になります。

   インベントリ情報を取得していないホストも検索する
   インベントリ情報またはソフトウェア稼働情報を一度も取得していないホストも，検索対象に加えます。この項目を選択できるのは，「一定期間内にインベン

トリ情報が更新されたホスト」を選択した場合だけです。

6. **検索条件を設定し終わったら，［検索］ボタンをクリックする。**
   検索が開始され，下部の「日付による検索結果」リストに検索結果が表示されます。［検索］ダイアログボックスは，ダイアログボックス枠をドラッグして，見やすいサイズに変更できます。

7. **「日付による検索結果」リストから任意のホストを選択して［ジャンプ］ボタンをクリック，またはダブルクリックする。**
   ［システム構成］ウィンドウがアクティブになり，選択したホストの情報が表示されます。

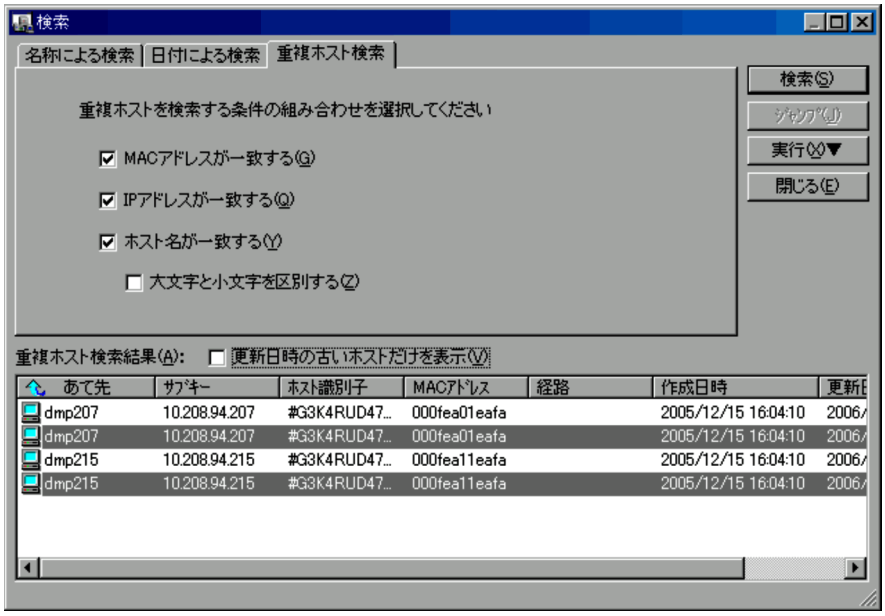
9.1.3　重複しているホストの検索方法

ホスト識別子は異なりますが，MAC アドレス，IP アドレス，またはホスト名が一致している重複ホストの検索方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウの［オプション］－［検索］を選択する。**
   ［検索］ダイアログボックスが表示されます。

2. **［重複ホスト検索］タブを選択する。**

図 9-4　［重複ホスト検索］パネル



3. **検索する条件の組み合わせを選択する。**
   ホスト識別子が異なり，かつ，ここで選択した条件に合致するホストを検索します。複数の条件を選択した場合は AND 条件で検索します。なお，MAC アドレスを条件に含めると，UNIX 版クライアントおよび PPP 接続のクライアントは検索対象にな

らないので注意してください。ただし，UNIX 版クライアントが 08-10 以降の場合，システム構成情報に MAC アドレスを取得する設定にしているときは，重複ホストとして検索できます。

MAC アドレスが一致する
システム構成情報の MAC アドレスが一致するホストを検索します。

IP アドレスが一致する
システム構成情報の IP アドレスが一致するホストを検索します。

ホスト名が一致する
システム構成情報のホスト名が一致するホストを検索します。

大文字と小文字を区別する
ホスト名で検索する場合に，大文字と小文字を区別して検索したいときは，チェックボックスをオンにします。ただし，リレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server を使用し，Microsoft SQL Server の並べ替え順の設定で「大文字小文字を区別しない」を選択している場合，ここで，「大文字と小文字を区別する」を選択しても無効になります。

4. **検索条件を設定し終わったら，［検索］ボタンをクリックする。**
検索が開始され，下部の「重複ホスト検索結果」リストに検索結果が表示されます。日付が最新でないホストは反転表示されます。
［検索］ダイアログボックスは，ダイアログボックス枠をドラッグして，見やすいサイズに変更できます。

5. **「検索結果」リストから任意のホストを選択して［ジャンプ］ボタンをクリック，またはダブルクリックする。**
［システム構成］ウィンドウがアクティブになり，選択したホストの情報が表示されます。

9.1.4 検索したホストを［あて先］ウィンドウにコピーする

［システム構成］ウィンドウで検索したホストを，［あて先］ウィンドウにコピーできます。新規に追加されたホストを検索したあと，あて先グループへ登録するのに便利です。検索したホストを［あて先］ウィンドウにコピーする方法を次に示します。

1. **［あて先］ウィンドウを表示する。**
2. **［システム構成］ウィンドウをアクティブにし，［オプション］－［検索］を選択する。**
［検索］ダイアログボックスが表示されます。
3. **［検索］ダイアログボックスでホストを検索する。**
4. **検索結果のリストで任意のホストを右クリックし，［コピー］メニューを選択する。**
5. **［あて先］ウィンドウのあて先グループを右クリックし，［貼り付け］メニューを選択する。**
指定したあて先グループにコピーされます。

上記操作の代わりに，ドラッグ & ドロップでも，［あて先］ウィンドウにコピーできます。

9.1.5 検索したホストをシステム構成情報から削除する

［システム構成］ウィンドウで検索したホストをシステム構成情報から削除できます。削除できるホストはクライアントだけです。中継マネージャまたは中継システムと同一 PC 上に存在するクライアントは削除できません。

クライアントをシステム構成情報から削除すると，所属するあて先グループおよび ID からも同時に削除されます。また，削除したクライアントのインベントリ情報もすべて削除されます。

中継するシステムのバージョンが 05-21 以降で，ID を連携させる運用をしている場合，マネージャから中継するシステム配下のクライアントを削除できます。その際，削除したクライアントは，中継するシステムで管理しているシステム構成情報，あて先グループ，および ID からも削除され，インベントリ情報も削除されます。ID を連携させる運用については，「8.4　システム構成情報と ID を連携させる運用」を参照してください。

なお，中継マネージャでクライアントを削除した場合は，削除した中継マネージャの上位システムから「システム構成情報の取得」ジョブを実行して，システム全体のシステム構成情報を一致させてください。

● 多数のクライアントを削除する場合の注意事項

誤って削除してしまったときの回復手段として，多数のクライアントを削除する場合は，あらかじめ，システム構成情報，あて先グループ，および ID のバックアップをとっておいてください。これらの情報をファイルに出力する方法およびファイルから作成する方法については，「8.1.4　システム構成情報をファイルから作成する」，「8.2.3　あて先グループをファイルから作成する」，および「8.3.3(2)(c)　ID をファイルに出力する」を参照してください。

(1) クライアントを削除する方法

検索したクライアントをシステム構成情報から削除する方法を，次に示します。

1. **［検索］ダイアログボックスで条件を指定し，ホストを検索する。**
2. **検索結果のリストで削除するクライアントを右クリックし，［システム構成から削除］メニューを選択する。**
3. **確認のメッセージに対して［OK］ボタンをクリックする。**

   指定したクライアントが，システム構成情報，あて先グループ，ID から削除されます。同時にインベントリ情報も削除されます。

(2) 削除したクライアントの情報を参照する

削除したクライアントの情報はログファイルに出力され，インストールディレクトリ

¥rmtins¥gui に 9 ファイルまで保存されます。

ログファイル名は rimfind*n*.log で，*n* は 1 ～ 9 の番号です。削除を実行するたびに番号が一つずつ増えて，rimfind1，rimfind2，rimfind3，（中略），rimfind9 というファイル名が順次付けられます。ファイルが rimfind9 まで作成されると，古いファイルが順次上書きされます。

ログファイルの先頭には検索条件が出力され，それに続いて，削除したクライアントの情報が，システム構成情報ファイルと同じ形式で出力されます。必要に応じて参照してください。

ログファイルの出力例を次に示します。

図 9-5　ログファイルの出力例

```
# 削除日時=2001/05/18 16:48:28
# 検索種別=日付による検索
# 日付種別=ｼｽﾃﾑ情報最終更新日時,ﾕｰｻﾞｲﾝﾍﾞﾝﾄﾘ情報最終更新日時,ｲﾝｽﾄｰﾙﾊﾟｯｹｰｼﾞ情報最終更新日時
# 検索ｵﾌﾟｼｮﾝ=いずれか,ｲﾝﾍﾞﾝﾄﾘ情報を取得していないﾎｽﾄも検索
# 開始日=2000/11/18
# 終了日=2001/02/18

172.20.20.10 tcstomi # TYPE=CLIENT,ROOT=tcsikeda,DATE=2001/01/20/16/48/18
172.20.20.20 Client1 # TYPE=CLIENT,ROOT=tcsikeda,DATE=2000/09/17/11/19/40
172.20.30.25 tcsokui # HID=#G62BFI36T4VAH399V000E4AHBBK,TYPE=CLIENT,DATE=2000/11/18/11/40/30
```

9.1.6　システム構成情報の手動メンテナンスの例

ここでは，システム構成情報の手動メンテナンスの例として，新規に追加されたクライアントを管理する例と，不要なクライアントを削除する例について説明します。

(1) 新規に追加されたクライアントを管理する例

ホストが初めてマネージャまたは中継マネージャに登録された日付をキーにして，一定期間に新規に追加されたクライアントを検索できます。新規に追加されたクライアントを定期的に検索することで，管理漏れのないように，ジョブの実行やあて先グループへの登録などを実施できます。

任意の期間に新規に追加されたクライアントを管理する例を，次の図に示します。

図 9-6　任意の期間に新規に追加されたクライアントを管理する例（1/2）

■初回検索：2005年9月10日

1. 8/10～9/10の間に新規に追加されたクライアントを検索の対象とする。

2. 検索を実行する。

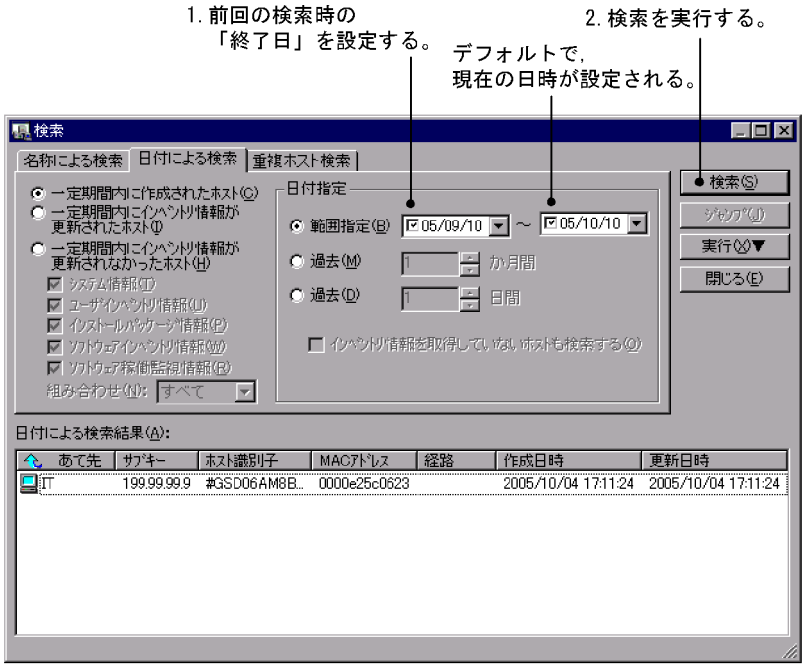


3. 8/10～9/10の間に新規に追加されたクライアントが検索される。

4. クライアントをあて先グループに登録したり，ジョブを実行したりできる。

図 9-7 任意の期間に新規に追加されたクライアントを管理する例（2/2）

■2回目検索：2005年10月10日



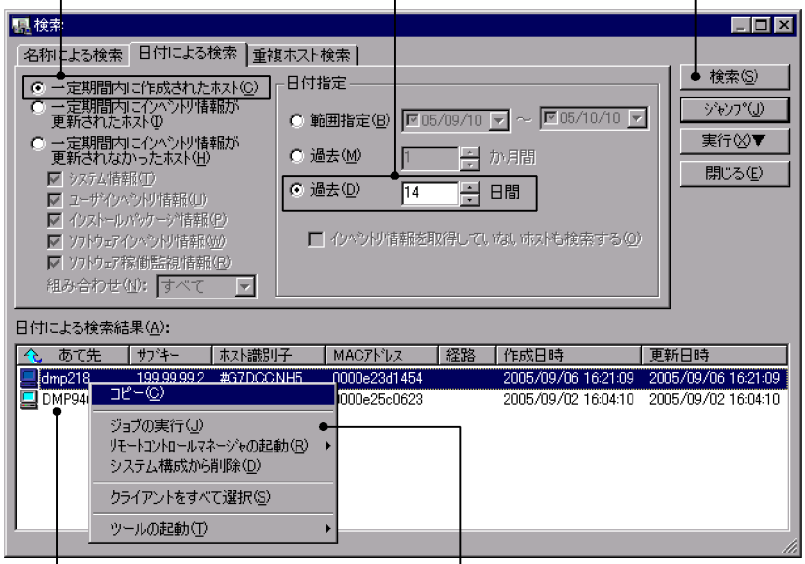
また，新規に追加されたクライアントを 14 日間ごと（隔週の特定曜日）に定型的に管理する例を，次の図に示します。新規に追加されたクライアントを一定の間隔で管理する場合は，この例のように指定します。

図 9-8　14 日間ごと（隔週の特定曜日）に新規追加クライアントを管理する例（1/2）

■初回検索：2005年9月10日

1. 9/10から過去14日間（8/27～9/10）の間に
新規に追加されたクライアントを検索の対象にする。

2. 検索を実行する。

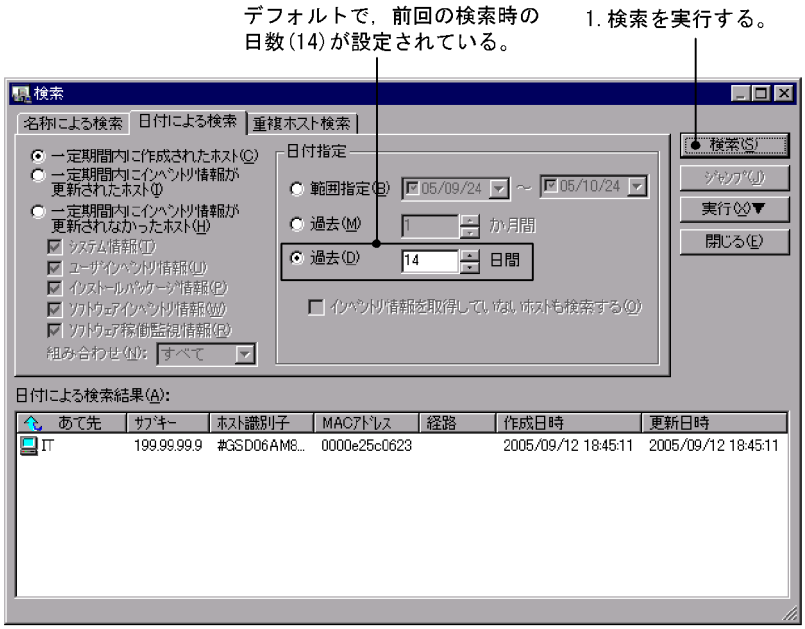


3. 8/27～9/10の間に新規に追加
されたクライアントが検索される。

4. クライアントをあて先グループに登録
したり，ジョブを実行したりできる。

図 9-9　14 日間ごと（隔週の特定曜日）に新規追加クライアントを管理する例（2/2）

■2回目検索：2005年9月24日



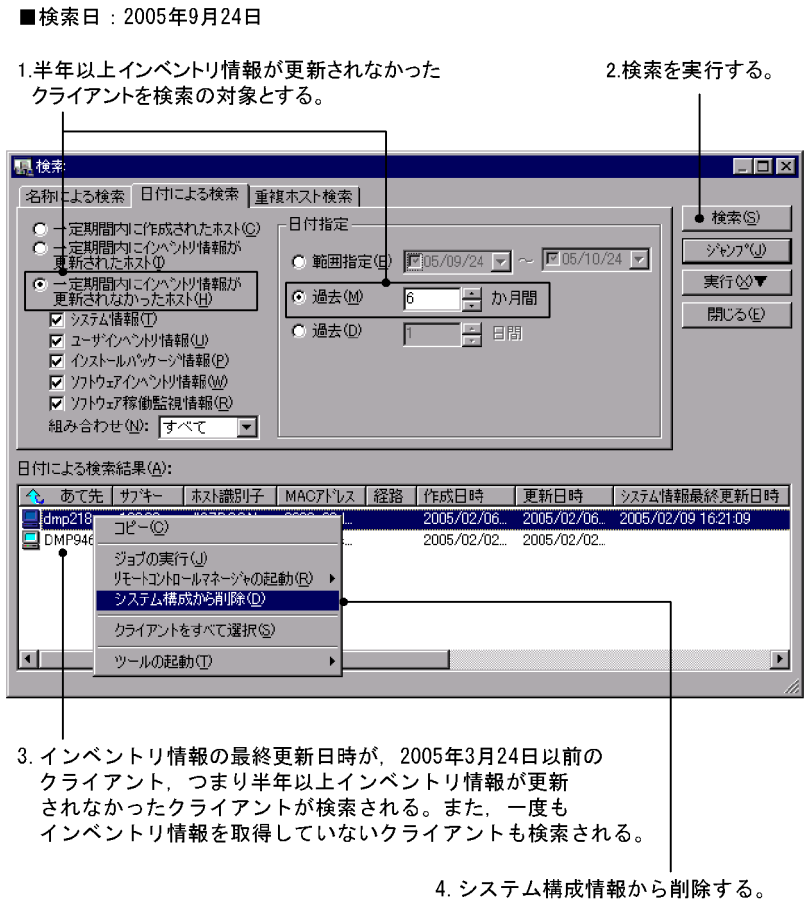
(2) 不要なクライアントを削除する例

インベントリ情報の取得ジョブを定期的に実行している場合，実際には存在しないクライアントがシステム構成上に存在すると，ジョブが実行されないため，そのクライアントのインベントリ情報最終更新日時は，更新されることなく古いまま残ります。

このインベントリ情報が更新された最終日時をキーにして，一定期間インベントリ情報を取得することができなかったクライアントを検索できます。検索されたクライアントは，不要資産と見なして，システム構成情報から削除する運用ができます。

例えば，半年以上インベントリ情報を取得できなかったクライアントをシステム構成情報から削除する場合は，次の図のように操作します。

図 9-10　半年以上インベントリ情報を取得できなかったクライアントをシステム構成情報から削除する例



(3) 重複しているクライアントを削除する例

ホスト識別子を使用する運用では，次の場合にホスト識別子が再生成されるため，同じクライアントがシステム構成上に重複して登録されてしまいます。

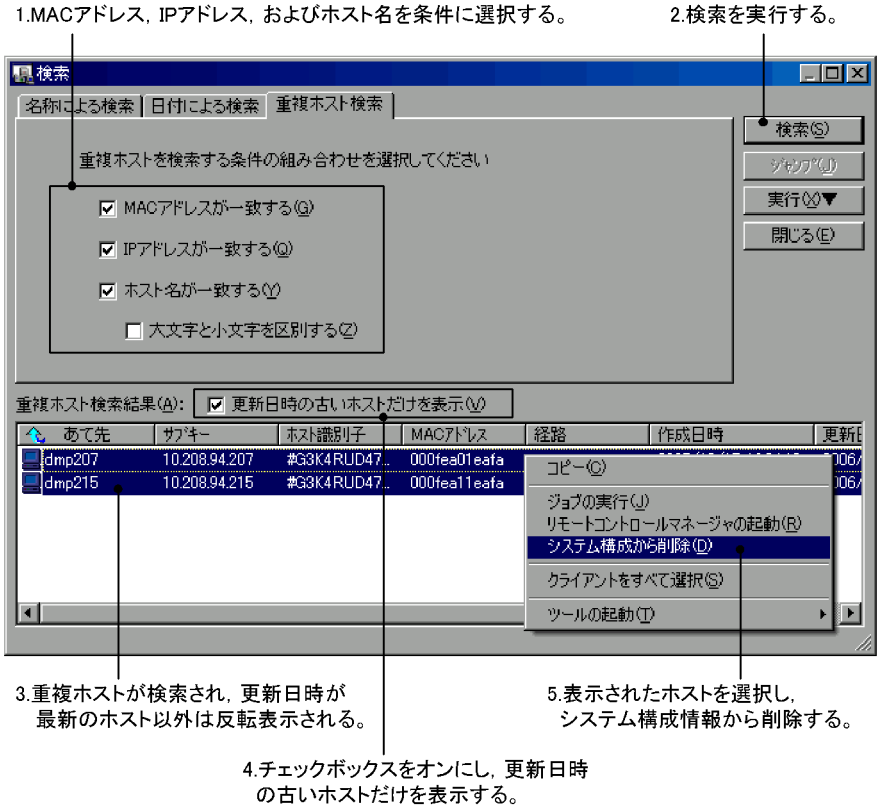
- ハードディスクを交換した PC に JP1/NETM/DM Client（クライアント）を再インストールした場合
- 上位システムに通知しないで JP1/NETM/DM Client（クライアント）をアンインストールし，その後再インストールした場合
- PC をリプレースして，JP1/NETM/DM Client（クライアント）を新規インストールした場合

ホスト識別子が異なるクライアントがシステム構成上に重複して登録されている場合，目的のクライアントに対してジョブを実行できなかったり，意図しないクライアントにジョブが実行されたりするおそれがあります。

このような場合に，重複しているホストを検索して更新日時が古いクライアントを削除することで，システム構成情報に重複して登録されているクライアントをなくせます。

例えば，ホスト識別子は異なるが，MAC アドレス，IP アドレス，およびホスト名が一致するクライアントをシステム構成情報から削除する場合は，次の図のように操作します。

図 9-11　ホスト識別子は異なるが MAC アドレスなどが一致するクライアントをシステム構成情報から削除する例



9.2 システム構成情報の自動メンテナンス

不要なホストを検知して，システム構成情報，あて先グループ，および ID から自動的に削除できます。

システム構成情報の自動メンテナンスには，次の 2 種類があります。

● 更新がないクライアントを自動的に削除する。

● 重複するクライアントを自動的に削除する。

ここでは，システム構成情報の自動メンテナンスの方法と，出力されるログファイル，および自動メンテナンス運用時の注意事項について説明します。

9.2.1 更新がないクライアントを自動的に削除する

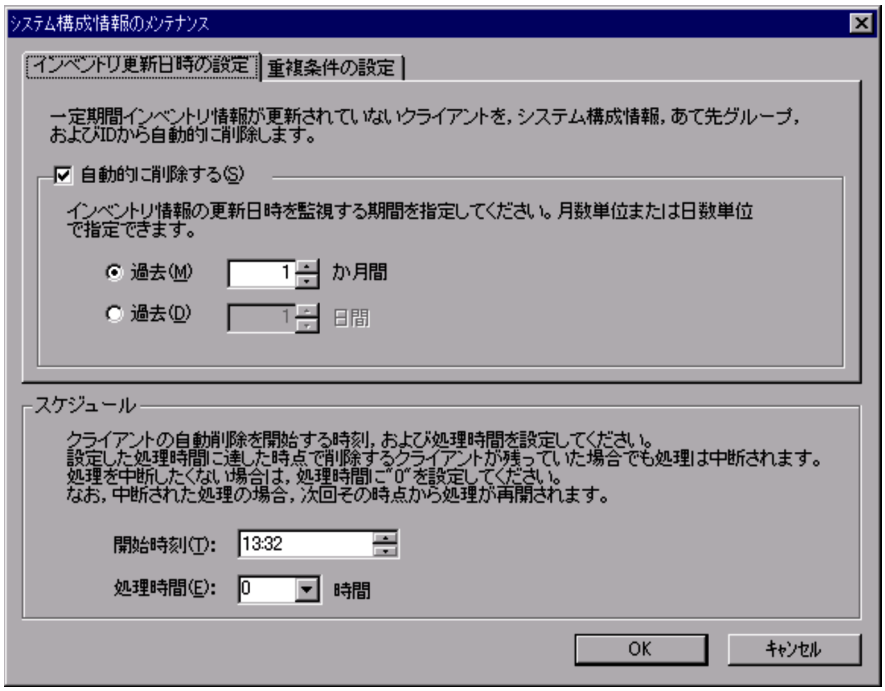
一定期間更新がないため不要なホストとして判断されるインベントリ情報の更新日時には，次の種類があります。

- システム情報最終更新日時
- インストールパッケージ情報最終更新日時
- ユーザインベントリ情報最終更新日時
- レジストリ情報最終更新日時
- ソフトウェアインベントリ情報最終更新日時

インベントリ更新日時を設定して，更新がないクライアントを自動的に削除する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウの［オプション］－［システム構成情報の自動メンテナンス］を選択する。**
   ［システム構成情報のメンテナンス］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［インベントリ更新日時の設定］タブを選択する。**
   ［インベントリ更新日時の設定］パネルが表示されます。

図 9-12 ［インベントリ更新日時の設定］パネル



3. **「自動的に削除する」をチェックして，各項目を設定する。**

過去 *n* か月間

現在の日付から何か月前までを検索範囲にするのかを指定します。指定できる月数は 1 ～ 999 です。ただし，指定した月数が，検索できる範囲である 1971 年 1 月 1 日以前になる場合は，1971 年 1 月 1 日から現在の日付までが，検索範囲になります。

過去 *n* 日間

現在の日付から何日前までを検索範囲にするのかを指定します。指定できる日数は 1 ～ 999 です。ただし，指定した日数が，検索できる範囲である 1971 年 1 月 1 日以前になる場合は，1971 年 1 月 1 日から現在の日付までが，検索範囲になります。

スケジュール

クライアントの自動削除を開始する時刻と処理時間を指定します。指定した処理時間に達した時点で削除するクライアントが残っていた場合でも，処理は中断されます。処理を中断したくない場合は，処理時間に「0」を指定してください。なお，処理が中断された場合，次回の処理は中断された時点から再開されます。

4. **設定が終わったら［OK］ボタンをクリックする。**

システム構成の自動メンテナンスの開始時刻は，設定した翌日から設定の内容が有効になります。したがって，設定した開始時刻が過ぎていない場合でも，システム構成のメンテナンスが実行されるのは，翌日の開始時刻からになります。

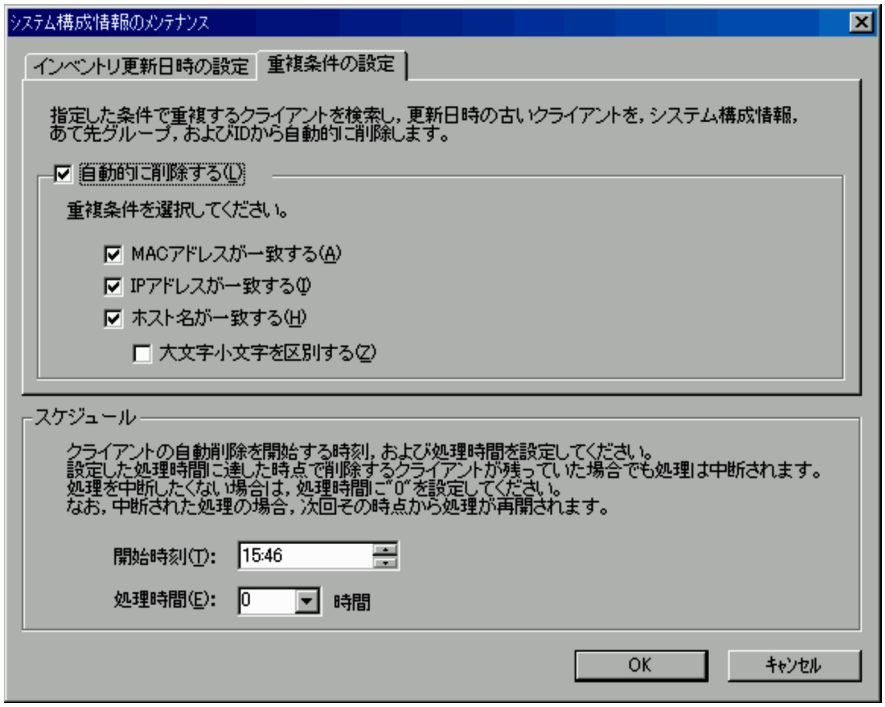
9.2.2 重複しているクライアントを自動的に削除する

重複しているホストを検索する条件を設定して，更新日時が古い重複しているクライアントを自動的に削除する方法を次に示します。

1. **［システム構成］ウィンドウの［オプション］－［システム構成情報の自動メンテナンス］を選択する。**
   ［システム構成情報のメンテナンス］ダイアログボックスが表示されます。

2. **［重複条件の設定］タブを選択する。**
   ［重複条件の設定］パネルが表示されます。

図 9-13 ［重複条件の設定］パネル



3. **「自動的に削除する」をチェックして，各項目を設定する。**
   ホスト識別子が異なり，かつ，ここで選択した条件に合致するホストを検索します。複数の条件を選択した場合は AND 条件で検索します。なお，MAC アドレスを条件に含めると，UNIX 版クライアントおよび PPP 接続のクライアントは検索対象にならないので注意してください。ただし，UNIX 版クライアントが 08-10 以降の場合，システム構成情報に MAC アドレスを取得する設定にしているときは，重複ホストとして検索できます。

   MAC アドレスが一致する

   システム構成情報の MAC アドレスが一致するホストを検索します。

   IP アドレスが一致する

システム構成情報の IP アドレスが一致するホストを検索します。

ホスト名が一致する

システム構成情報のホスト名が一致するホストを検索します。

大文字と小文字を区別する

ホスト名で検索する場合に，大文字と小文字を区別して検索したいときは，チェックボックスをオンにします。ただし，リレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server を使用し，Microsoft SQL Server の並べ替え順の設定で「大文字小文字を区別しない」を選択している場合，ここで，「大文字と小文字を区別する」を選択しても無効になります。

スケジュール

クライアントの自動削除を開始する時刻と処理時間を指定します。指定した処理時間に達した時点で削除するクライアントが残っていた場合でも，処理は中断されます。処理を中断したくない場合は，処理時間に「0」を指定してください。なお，処理が中断された場合，次回の処理は中断された時点から再開されます。

4. **設定が終わったら［OK］ボタンをクリックする。**

システム構成の自動メンテナンスの開始時刻は，設定した翌日から設定の内容が有効になります。したがって，設定した開始時刻が過ぎていない場合でも，システム構成のメンテナンスが実行されるのは，翌日の開始時刻からになります。

9.2.3 システム構成情報の自動メンテナンスのログファイル

削除したクライアントの情報は，検索条件とともにログファイルに出力され，インストールディレクトリ ¥log に 5 ファイルまで保存されます。

削除を実行するたびに，ログファイルには cltdel.log，cltdel.log1，cltdel.log2，cltdel.log3，cltdel.log4 というファイル名が順次付けられます。ファイルが cltdel.log4 まで作成されると，古いファイルが順次上書きされます。必要に応じて参照してください。

9.2.4 システム構成情報の自動メンテナンス運用時の注意事項

- 削除したホストがあて先としてジョブ定義に残っていても，そのあて先は削除されません。
- 次の場合，クライアントをシステム構成情報に登録した直後は，インベントリ情報の最終更新日時が空欄になり，インベントリ情報を取得していないクライアントとして扱われます。
  - バージョン 06-51 のクライアントで，システム構成の自動登録時にインベントリ情報を通知しない場合
  - バージョン 06-01 以前のクライアントの場合
  - クライアントをシステム構成情報に手動で追加した場合

システム構成情報の自動メンテナンスを実行する前に，「システム構成情報の手動メンテナンス」機能などを利用して，このようなクライアントを検出し，インベントリ情報の取得ジョブを実行しておいてください。また，インベントリ情報の取得は，定期的に実行することをお勧めします。

- 中継マネージャでシステム構成情報の自動メンテナンスを実施している場合は，その中継マネージャの上位システムから「システム構成情報の取得」ジョブを定期的に実行して，システム全体のシステム構成情報を一致させてください。
- オフラインマシンも，システム構成情報の自動メンテナンスの対象になります。オフラインマシンのインベントリ情報は定期的に更新されないため，システム構成情報の自動メンテナンスでシステム構成から削除されてしまうことがあります。このような場合に備えて，オフラインマシンからインベントリ情報を取得してきた媒体を，保管しておくことをお勧めします。または，システム構成情報を手動でメンテナンスして，オフラインマシンが削除されないようにしてください。

9.3　あて先グループの自動メンテナンス

新たに追加されたホストや移設されたホストを自動的に検知し，あらかじめ作成しておいたグルーピング条件（**ポリシー**）に従ったあて先グループに自動的に振り分けることができます。これを**あて先グループの自動メンテナンス**と呼びます。

ここでは，あて先グループのポリシーを設定する方法やあて先グループにポリシーを一括して反映する方法について説明します。また，あて先グループにポリシーを設定する運用例についても説明します。

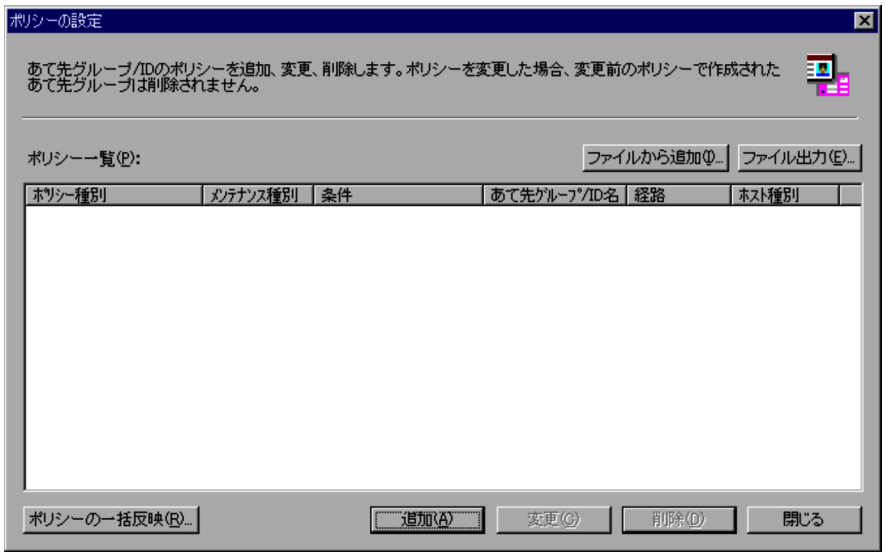
9.3.1　あて先グループのポリシーを設定する

あて先グループのポリシーを設定する方法を次に示します。

なお，ポリシー設定時にあて先グループ名を指定する際には，「8.2.2　グループ名の付け方」を参照してください。

1. **［あて先］ウィンドウで，［オプション］－［あて先グループ /ID の自動メンテナンス］を選択する。**
   ［ポリシーの設定］ダイアログボックスが表示されます。
   ［ファイル］－［グループの新規作成］を選択し，［あて先グループの作成］ダイアログボックスを表示させ，「あて先グループのポリシーの作成」を実行してもこのダイアログボックスを表示できます。

図 9-14　［ポリシーの設定］ダイアログボックス

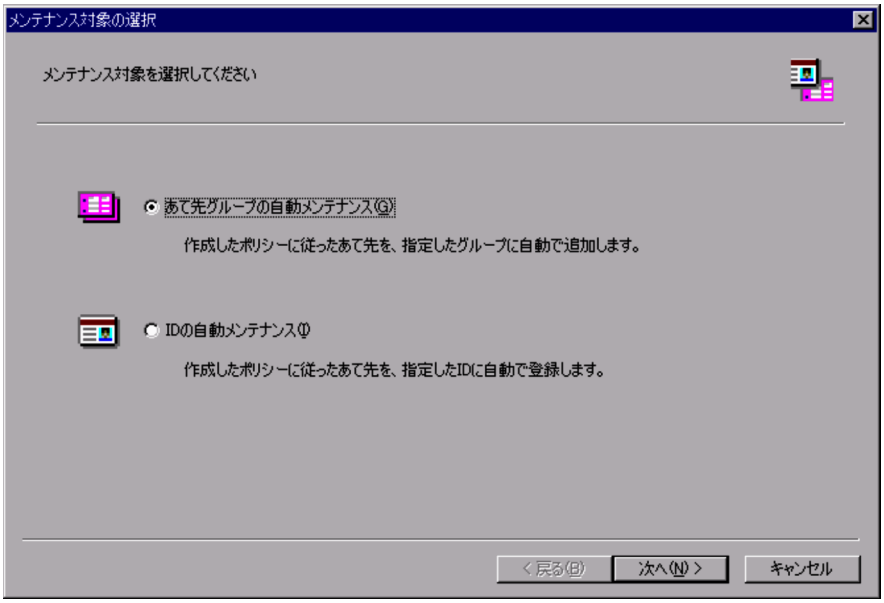


［ポリシーの設定］ダイアログボックスには，条件が半角で 260 文字（全角で 130 文字）まで表示されます。260 文字を超えた部分は表示されませんが，条件として正しく設定されています。

新規にポリシーを設定したい場合は，［追加］ボタンをクリックしてください。
既存のポリシーを変更したい場合は，変更したいポリシーを選択して［変更］ボタンをクリックしてください。一覧表示内の「グループ名称」および「経路」をダブルクリックすると，直接編集することもできます。
既存のポリシーを削除したい場合は，削除したいポリシーを選択して［削除］ボタンをクリックしてください。なお，ポリシーを削除しても，そのポリシーによって作成されたあて先グループは削除されません。また，ポリシーによって登録されたホストも，あて先グループからは削除されません。

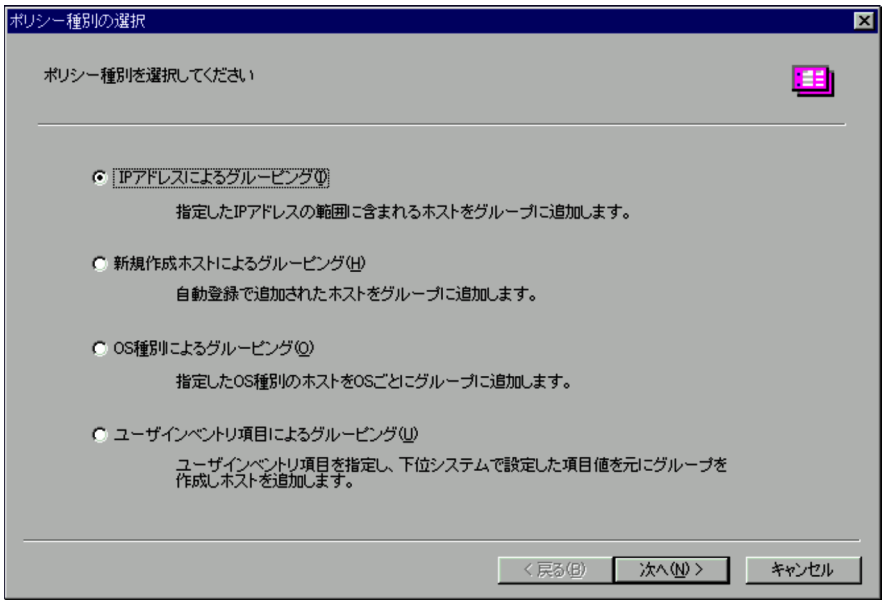
2. **［追加］ボタンをクリックする。**
［メンテナンス対象の選択］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-15 ［メンテナンス対象の選択］ダイアログボックス



3. **「あて先グループの自動メンテナンス」を選択し，［次へ］ボタンをクリックする。**
［ポリシー種別の選択］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-16 ［ポリシー種別の選択］ダイアログボックス



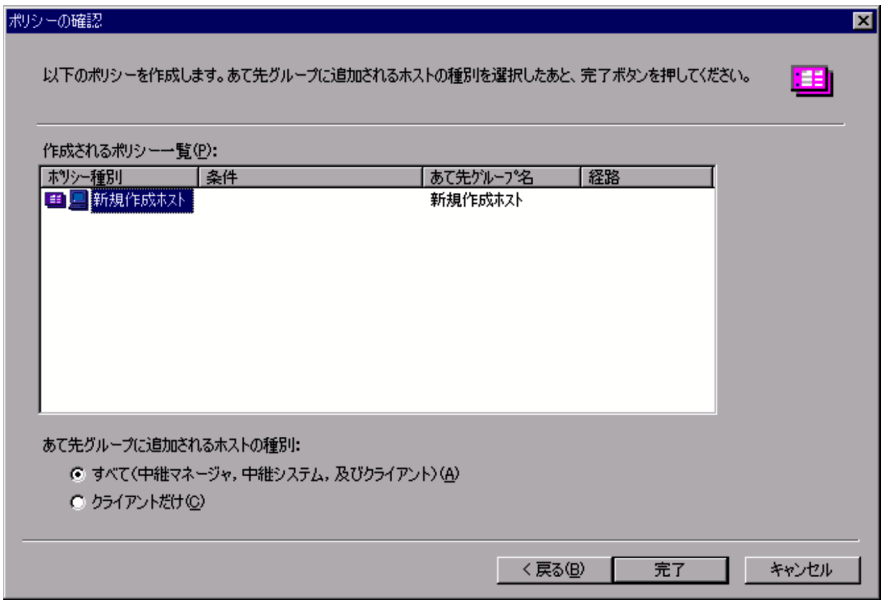
4. **設定したいポリシー種別を選択し，［次へ］ボタンをクリックする。**

5. **表示されたダイアログボックスでポリシーを設定する。**
   選択した項目ごとに，表示されるダイアログボックスが異なります。各ダイアログボックスでの設定については，次の表に示す (1) ～ (4) を参照してください。

選択項目	参照先
IP アドレスによるグルーピング	(1) ［IP アドレスによるグルーピング］ダイアログボックスでの設定
新規作成ホストによるグルーピング	(2) ［新規作成ホストによるグルーピング］ダイアログボックスでの設定
OS 種別によるグルーピング	(3) ［OS 種別によるグルーピング］ダイアログボックスでの設定
ユーザインベントリ項目によるグルーピング	(4) ［ユーザインベントリ項目によるグルーピング］ダイアログボックスでの設定

6. **ポリシーの設定が完了したら，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［ポリシーの確認］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-17 ［ポリシーの確認］ダイアログボックス



［ポリシーの確認］ダイアログボックスには，条件が半角で 260 文字（全角で 130 文字）まで表示されます。260 文字を超えた部分は表示されませんが，条件として正しく設定されています。

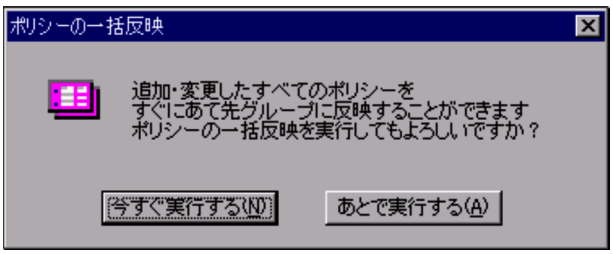
あて先グループに追加されるホストの種別

ポリシーによって追加されるホストの種別を選択します。「クライアントだけ」を指定した場合，中継マネージャおよび中継システムと同じ PC 上のクライアントは対象外になります。中継マネージャおよび中継システムへの配布やインベントリ情報の取得が不要な場合に選択してください。

7. **［完了］ボタンをクリックする。**

ポリシーが作成され，［ポリシーの一括反映］ダイアログボックスが表示されます。ただし，作成したポリシーの種別が新規作成ホストの場合は，このダイアログボックスは表示されないで，［ポリシーの設定］ダイアログボックスに戻ります。

図 9-18 ［ポリシーの一括反映］ダイアログボックス



［ポリシーの一括反映］ダイアログボックスでは，追加，変更したポリシーを即時に

一括反映するかどうか選択します。
［今すぐ実行する］ボタンをクリックすると，追加，変更したポリシーを即時にあて先グループに一括反映します。［あとで実行追加，変更する］ボタンをクリックすると，［ポリシーの設定］ダイアログボックスに戻ります。
なお，複数のポリシーが同じあて先グループに登録する設定になっていても，エラーにはなりません。

図 9-19 ［ポリシーの設定］ダイアログボックス

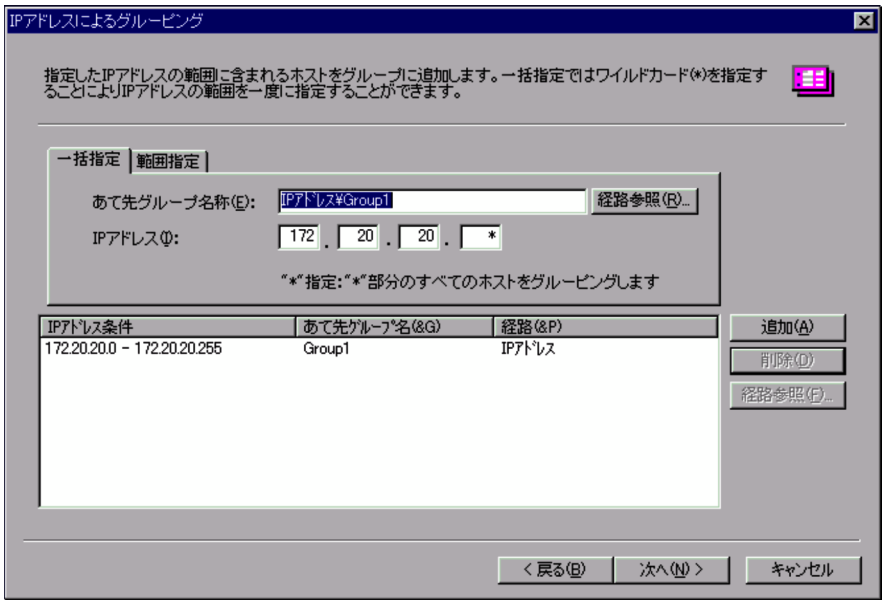


(1) ［IP アドレスによるグルーピング］ダイアログボックスでの設定

指定した IP アドレスの範囲でクライアントをグルーピングします。一括指定と範囲指定が選択できます。

［一括指定］パネル

図 9-20 ［一括指定］パネル



あて先グループ名称と IP アドレスを指定します。IP アドレスの指定に「*」をワイルドカードとして使用してください。
例えば，「172.20.20.*」と指定した場合，「172.20.20.0 ～ 172.20.20.255」の IP アドレスがグルーピングされます。
［追加］ボタンをクリックすると，一覧表示に条件が追加されます。IP アドレスによるグルーピングでは，複数の異なる条件を設定することができます。既存の条件を削除するには［削除］ボタンをクリックしてください。

［範囲指定］パネル

図 9-21 ［範囲指定］パネル

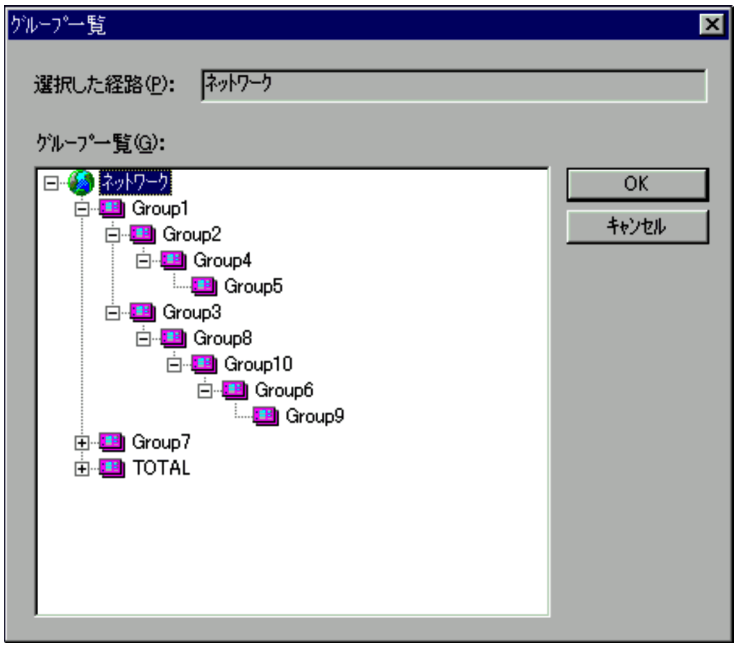


IP アドレスを範囲指定できます。ポリシーの追加時,「あて先グループ名称」には,デフォルトの上位の経路として「IP アドレス ¥Default」が表示されます。

［経路参照］ボタン

各タブで［経路参照］ボタンをクリックすると,［グループ一覧］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-22 ［グループ一覧］ダイアログボックス

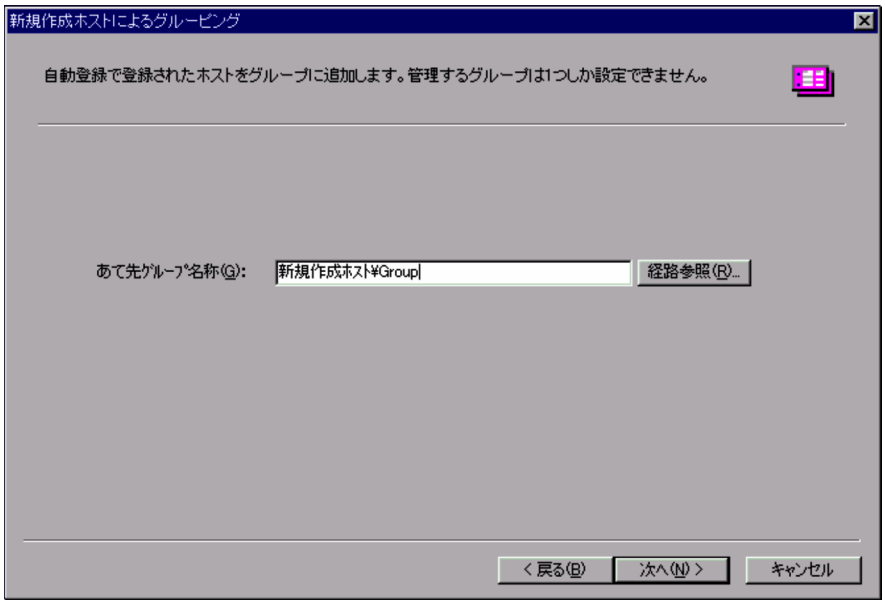


現在のあて先グループの一覧がツリー表示され，あて先グループの経路を設定できます。

(2) ［新規作成ホストによるグルーピング］ダイアログボックスでの設定

システム構成情報に新規に登録されたホストをグルーピングします。このポリシーを使ったあて先グループは一つしか設定できません。

図 9-23 ［新規作成ホストによるグルーピング］ダイアログボックス



ポリシーの追加時，「あて先グループ名称」には，デフォルトとして「新規作成ホスト」が表示されます。

［経路参照］ボタンをクリックすると，(1) で説明した［グループ一覧］ダイアログボックスが表示され，経路を指定できます。

(3) ［OS 種別によるグルーピング］ダイアログボックスでの設定

システム情報の「OS 種別」単位でクライアントをグルーピングします。

図 9-24　［OS 種別によるグルーピング］ダイアログボックス



チェックボックスがオンの OS 種別が，グルーピングの対象となります。OS 種別ごとのあて先グループ名は任意に設定できます。複数の OS 種別に対して同じあて先グループ名を設定すれば，複数の OS 種別のホストを一つのあて先グループで管理することもできます。

ポリシーの追加時，デフォルトの上位の経路として「OS 種別 ¥」が表示されます。

［経路参照］ボタンをクリックすると，(1) で説明した［グループ一覧］ダイアログボックスが表示され，経路を指定できます。

［全選択］ボタンをクリックすると，すべての OS 種別のチェックがオンになります。［全選択解除］ボタンをクリックすると，すべての OS 種別のチェックがオフになります。

「OS サブバージョンレベルまでグルーピングする」チェックボックスをオンにすると，OS 種別のあて先グループの配下に，Service Pack などの OS サブバージョン単位でグルーピングされるようになります。ただし，システム情報の「OS サブバージョン」の値を取得できない場合は，OS 種別のあて先グループに登録されます。「OS サブバージョン」の値が半角で 32 文字（全角で 16 文字）を超えた場合は，あて先グループ名は「unknown」となります。

(4)［ユーザインベントリ項目によるグルーピング］ダイアログボックスでの設定

ユーザインベントリ項目でクライアントをグルーピングします。クライアントから入力されたユーザインベントリ情報をあて先グループ名に設定し，グルーピングします。表

示されるユーザインベントリ項目は自管理項目および共通管理項目だけです。このポリシーは 16 個まで作成できます。

図 9-25 ［ユーザインベントリ項目によるグルーピング］ダイアログボックス



ユーザインベントリ項目を階層別に指定することによって，作成されるあて先グループを階層化できます。ただし，設定できる階層は 6 階層までです。

［経路参照］ボタンをクリックすると，(1) で説明した［グループ一覧］ダイアログボックスが表示され，経路を指定できます。

なお，あて先グループの自動メンテナンスでは，クライアントで入力するユーザインベントリ情報について，次の制限事項があります。

- 半角で 32 文字（全角で 16 文字）を超えるユーザインベントリ情報は，あて先グループとして扱われません。
- 次に示す半角記号とタブ文字は使用できません。
  「¥」「/」「*」「"」「'」「:」「;」「,」「&」「!」「|」「.」「<」「>」「?」「@」「%」
- 文字列の末尾の半角スペースは無視されます。
- データの途中にスペースは使用できません。
- あて先のグルーピング時には，大文字と小文字の区別がありません。
- ポリシーでの階層が異なるユーザインベントリ項目には，同じユーザインベントリ情報を指定できません。あて先グループ名はユニークな必要があるため，ユーザインベントリ情報が同じ場合，あて先グループが作成されません。
  ［*n* 階層目に設定］ボタンをクリックすると，選択したユーザインベントリ項目を *n* 階層目のあて先グループとして設定します。設定後，ボタン名が［*n* 階層目を解除］に

変わります。［n 階層目を解除］ボタンをクリックすると，設定した階層が解除されます。下位項目がある場合は，下位項目すべてが解除されます。
なお，ユーザインベントリ情報のデータ内にスペースが入力された場合，ポリシーで指定したとおりのあて先グループを作成することができません。ご注意ください。

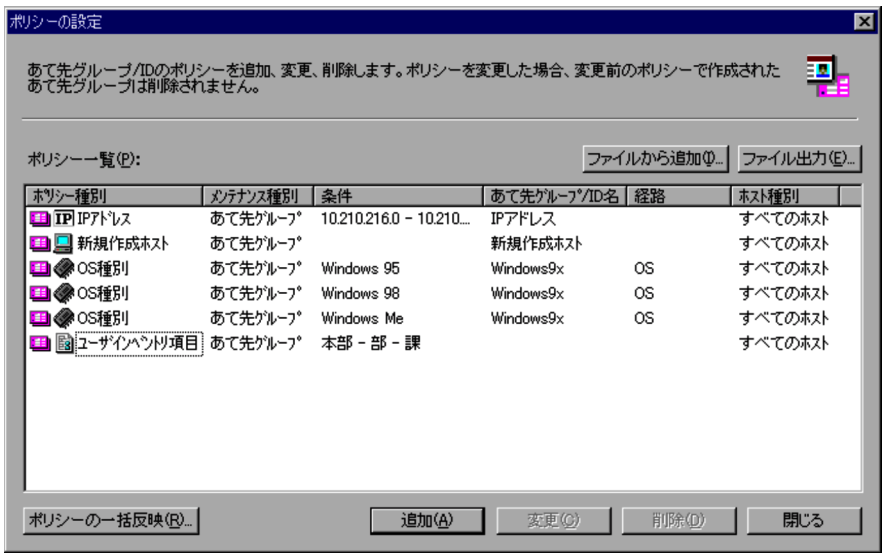
- 上位システムで共通管理項目のユーザインベントリ項目を削除・変更した場合，その項目が中継するシステムでポリシーに設定されていても中継するシステムにユーザインベントリ項目の変更・削除は反映されません。このような場合，不正なユーザインベントリ項目が中継するシステムのポリシーに設定され，自動メンテナンスが正しく実行されなくなるおそれがあります。

9.3.2　あて先グループにポリシーを一括反映する

あて先グループに既存のポリシーを一括反映する方法を次に示します。なお，あて先グループに一括反映できるのはシステム構成情報に登録済みのホストです。新規作成ホストは一括反映できません。

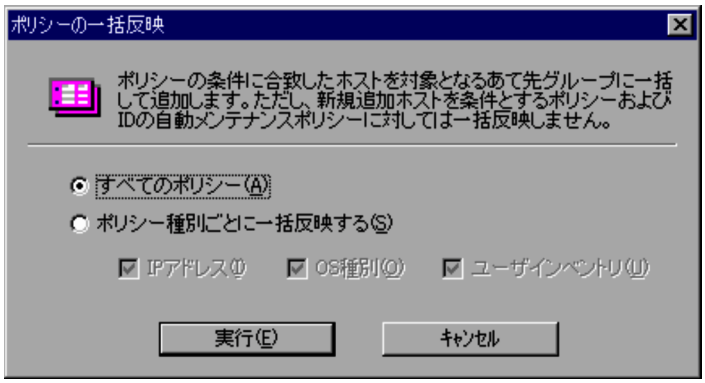
1. **［あて先］ウィンドウで，［オプション］－［あて先グループ /ID の自動メンテナンス］を選択する。**
［ポリシーの設定］ダイアログボックスが表示されます。
［ファイル］－［グループの新規作成］を選択し，［あて先グループの作成］ダイアログボックスを表示させ，「あて先グループのポリシーの作成」を実行してもこのダイアログボックスを表示できます。

図 9-26　［ポリシーの設定］ダイアログボックス



2. **［ポリシーの一括反映］ボタンをクリックする。**
［ポリシーの一括反映］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-27 ［ポリシーの一括反映］ダイアログボックス



3. **一括反映したいポリシー種別を次の種類から選択し，［実行］ボタンをクリックする。**

すべてのポリシー

［ポリシーの設定］ダイアログボックスのポリシー一覧に表示されているすべてのポリシーを，あて先グループに一括反映します。ただし，新規作成ホストを条件とするポリシーは反映しません。

なお，ID のポリシーは種別に関係なく，一括反映しません。

ポリシー種別ごとに一括反映をする

一括反映するポリシー種別を次の中から選択します。複数のポリシー種別を選択できます。

- **IP アドレス**
- **OS 種別**
- **ユーザインベントリ**

ポリシー種別を選択後，［実行］ボタンをクリックしてください。選択したポリシーに従って，システム構成情報に登録されているホストがあて先グループに振り分けられます。

(1) 新規作成ホストを即時にグルーピングする方法

設定したポリシーに従って，新規作成ホストを即時にあて先グループへ反映したい場合は，次の方法で更新してください。

● IP アドレスによるグルーピング

中継マネージャおよび中継システムに対して，「システム構成の取得」ジョブを実行してください。中継マネージャと同じ PC 上のクライアントの場合，［あて先］ウィンドウの［ファイル］－［あて先の新規作成］から追加してください。

● 新規作成ホストによるグルーピング

［システム構成］ウィンドウの［オプション］－［検索］で日付による検索を実行後，検索したホストをあて先グループへ登録してください。

● OS 種別によるグルーピング

「システム情報の取得」ジョブを再度実行してください。

● ユーザインベントリ項目によるグルーピング

「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブを再度実行してください。

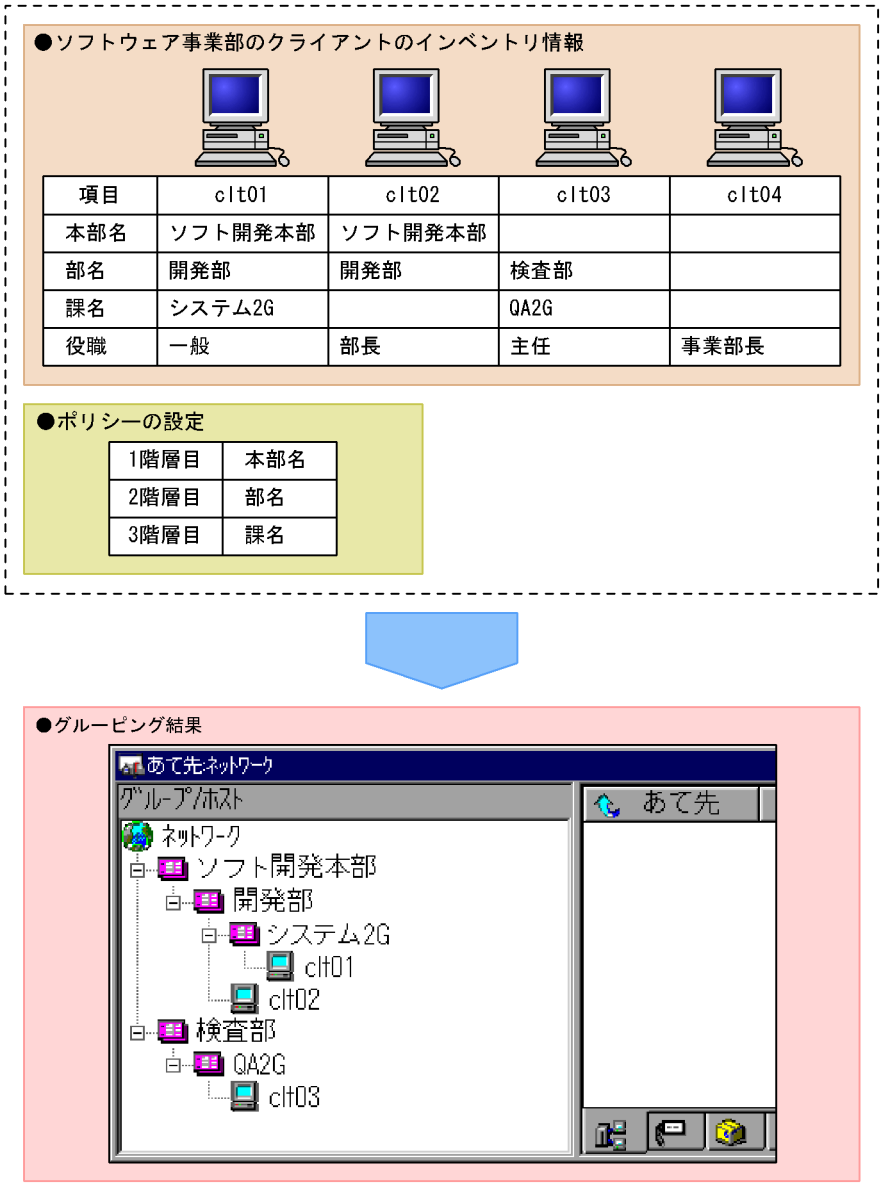
(2) あて先グループのバックアップを保存する方法

あて先グループのバックアップを保存したい場合は，［あて先］ウィンドウで，バックアップとして保存したいあて先グループの名称を変更してください。名称を変更すると，変更後の名称のあて先グループは自動メンテナンスされなくなるので，バックアップとして保存できます。名称を変更してからホストの追加や変更があった場合には，ポリシーの設定に従い，変更前の名称のあて先グループが再度作成され，以降，更新されます。

9.3.3 ユーザインベントリ項目によるグルーピング例

ユーザインベントリ項目をポリシーに設定した場合のグルーピング例を，次の図に示します。なお，ここでは「ソフトウェア事業部」に所属するクライアントを例としています。

図 9-28　ユーザインベントリ項目によるグルーピング例（1）



項目	clt01	clt02	clt03	clt04
本部名	ソフト開発本部	ソフト開発本部		
部名	開発部	開発部	検査部	
課名	システム2G		QA2G	
役職	一般	部長	主任	事業部長

1階層目	本部名
2階層目	部名
3階層目	課名

図 9-28 のグルーピング結果について，次に説明します。

- clt01 は，ポリシーの設定に従って，「課名」の直下に追加されます。
- clt02 は，「役職」が「部長」であるため，「課名」がありません。この場合は，「課名」に対応する階層が繰り上げられ，「部名」の直下に clt02 が追加されます。
- clt03 は，所属する「検査部」が「ソフトウェア事業部」の直属であるため，「本部名」がありません。この場合も clt02 と同様に，「本部名」に対応する階層が繰り上げら

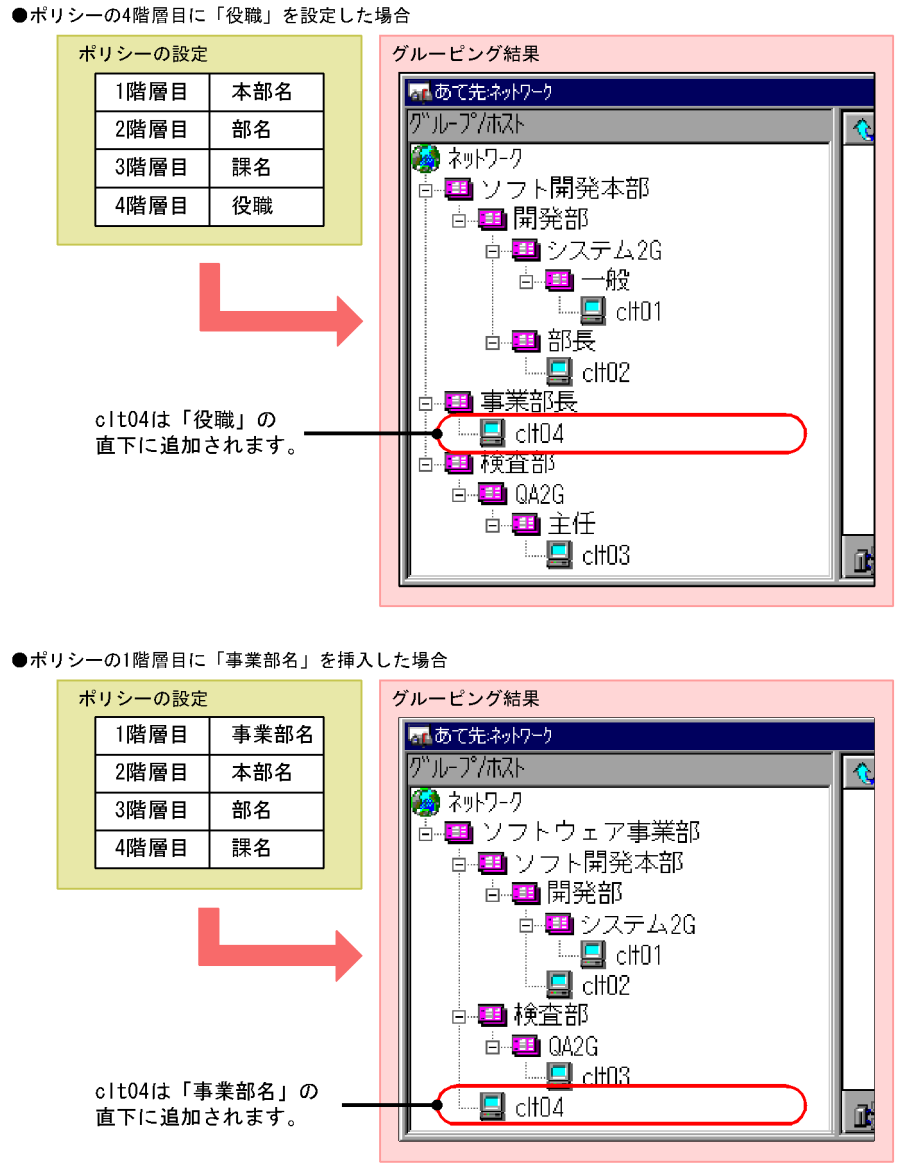
れ，最上位に「部名」が追加されて，「部名」の下に「課名」が，「課名」の下に clt03 が追加されます。

● clt04 は，図 9-28 のポリシー設定ではグルーピングされません。clt04 がグルーピングされるようにするには，例えば，ポリシーを次のように設定する方法があります。

- ポリシーの 4 階層目に「役職」を設定
- ポリシーの 1 階層目として「事業部名」を挿入

それぞれの設定でグルーピングし直した結果を，次の図に示します。

図 9-29　ユーザインベントリ項目によるグルーピング例（2）



9.4 ID の自動メンテナンス

ID にポリシーを設定して，自動的にクライアントを ID に登録する運用を，**ID の自動メンテナンス**と呼びます。

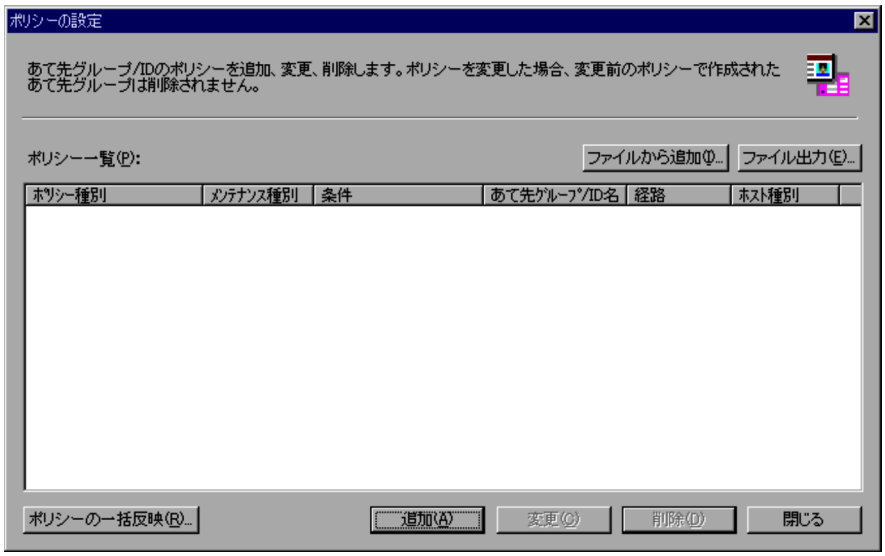
ここでは，ID にポリシーを設定する方法と，ID の自動メンテナンス運用時の注意事項について説明します。

9.4.1 ID のポリシーを設定する

ID のポリシーは，ID を管理するマネージャまたは ID 管理中継に指定された中継マネージャから設定できます。ID のポリシーを設定する方法を次に示します。

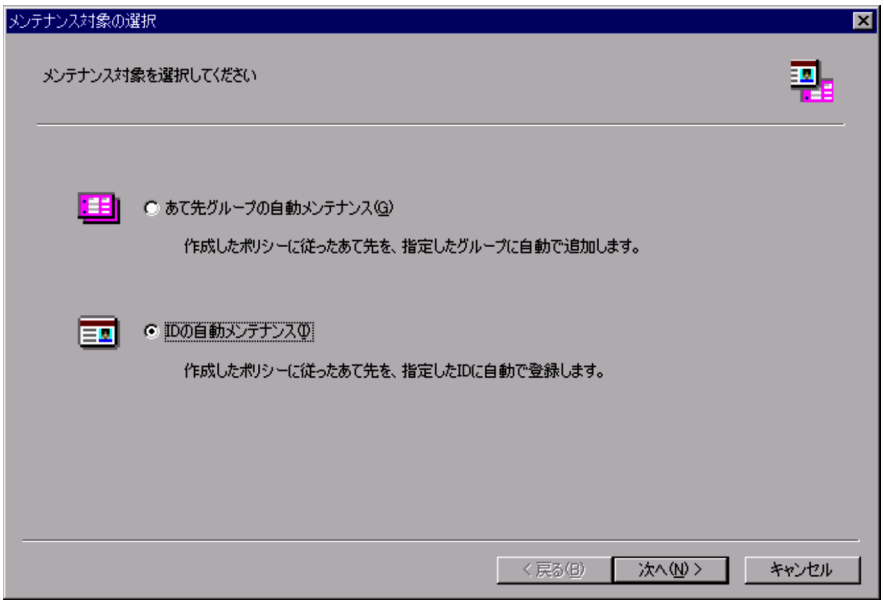
1. **［あて先］ウィンドウで，［オプション］－［あて先グループ /ID の自動メンテナンス］を選択する。**
   ［ポリシーの設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-30 ［ポリシーの設定］ダイアログボックス



2. **［追加］ボタンをクリックする。**
   既存のポリシーを変更したい場合は，変更したいポリシーを選択して［変更］ボタンをクリックしてください。ポリシーを削除したい場合は，削除したいポリシーを選択して［削除］ボタンをクリックしてください。
   ［追加］ボタンをクリックすると，［メンテナンス対象の選択］ダイアログボックスが表示されます。

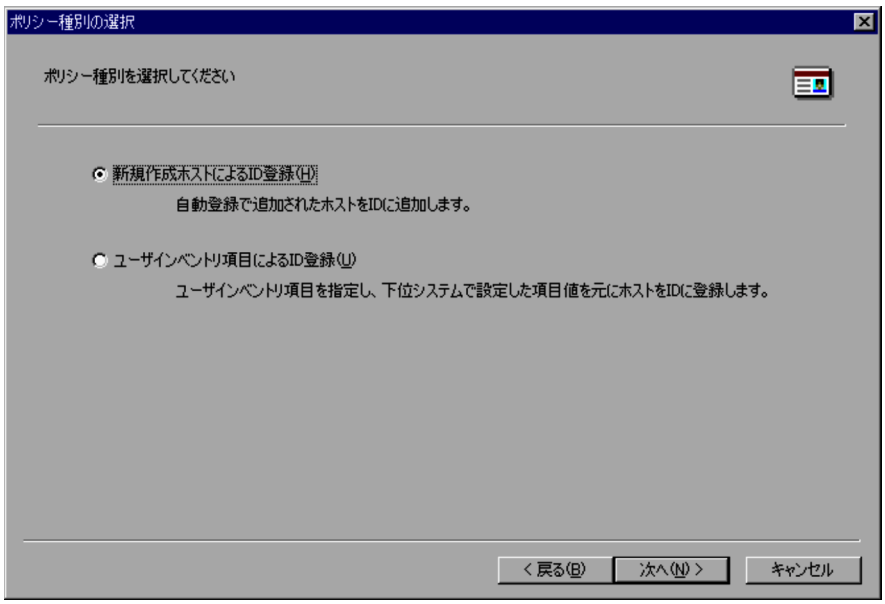
図 9-31　［メンテナンス対象の選択］ダイアログボックス



「ID の自動メンテナンス」を選択してください。

3. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［ポリシー種別の選択］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-32　［ポリシー種別の選択］ダイアログボックス



4. **設定したいポリシー種別を選択し，［次へ］ボタンをクリックする。**

5. **表示されたダイアログボックスでポリシーを設定する。**
選択した項目ごとに，表示されるダイアログボックスが異なります。各ダイアログボックスでの設定については，次の表に示す (1) または (2) を参照してください。

選択項目	参照先
新規作成ホストによる ID 登録	(1) ［新規作成ホストによる ID 登録］ダイアログボックスでの設定
ユーザインベントリ項目による ID 登録	(2) ［ユーザインベントリ項目による ID 登録］ダイアログボックスでの設定

6. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［ポリシーの確認］ダイアログボックスが表示されます。

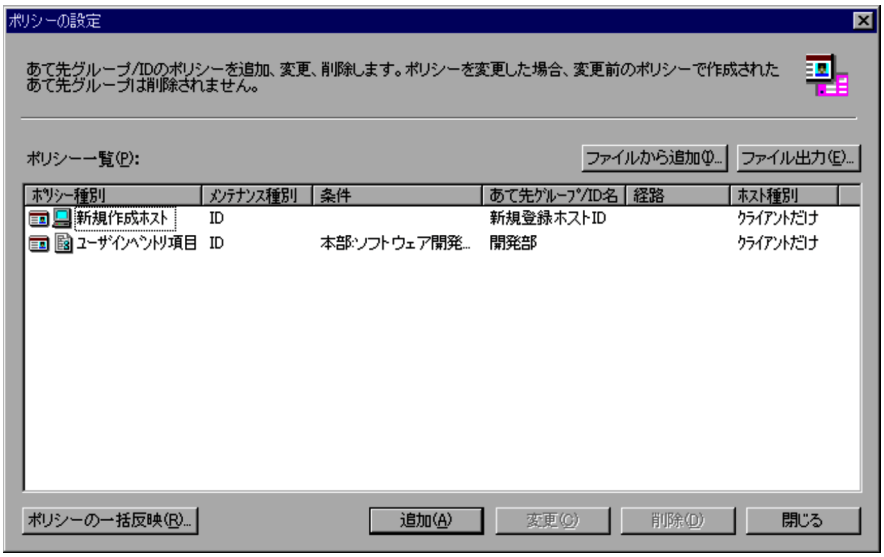
図 9-33 ［ポリシーの確認］ダイアログボックス



ポリシーを設定する ID を確認してください。変更する場合は，［戻る］ボタンをクリックして ID を選択し直してください。

7. **［完了］ボタンをクリックする。**
設定されたポリシーが，［ポリシーの設定］ダイアログボックスに表示されます。

図 9-34　［ポリシーの設定］ダイアログボックス



（1）［新規作成ホストによる ID 登録］ダイアログボックスでの設定

システム構成情報に新規に登録されたホストを自動的に ID に登録します。このポリシーは一つだけ設定できます。

図 9-35　［新規作成ホストによる ID 登録］ダイアログボックス



［参照］ボタンをクリックすると，［ID 一覧］ダイアログボックスが表示されます。ポリシーを設定する ID を選択します。

また，ID を新規作成する場合は，［ID 一覧］ダイアログボックスの［ID の作成］ボタンをクリックしてください。

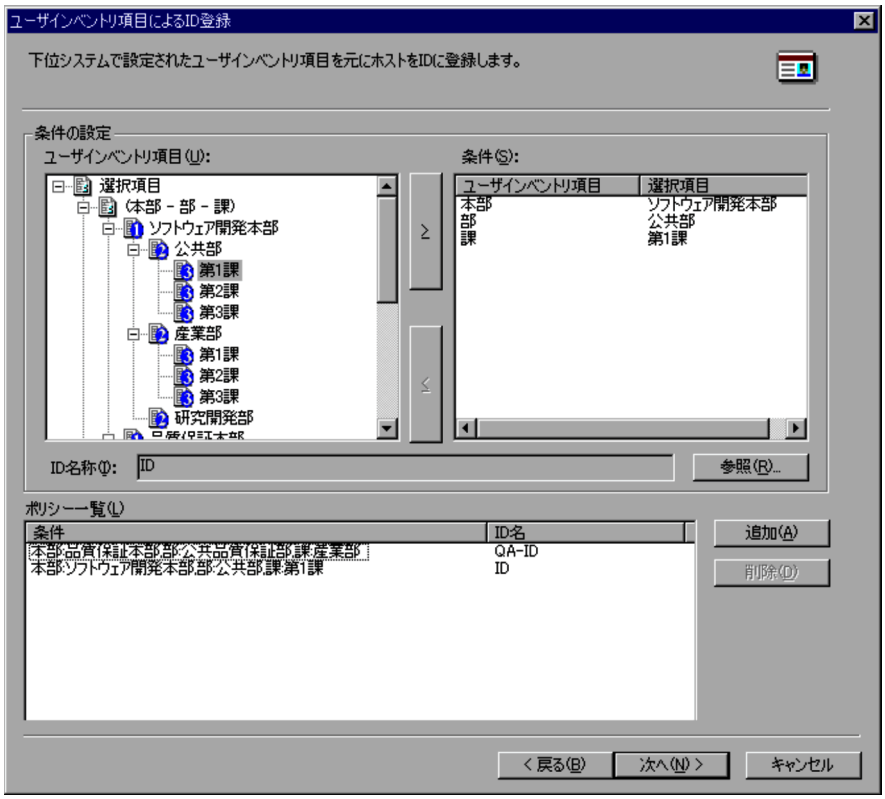
(2) ［ユーザインベントリ項目による ID 登録］ダイアログボックスでの設定

クライアントから通知されたユーザインベントリ情報を基に，クライアントを ID に登録します。ポリシーに指定できるのは，自管理項目および共通管理項目だけです。設定できるポリシー数に上限はありません。

なお，ID 自動メンテナンスの実行に掛かる時間は，設定したポリシー数によって異なります。ID の自動メンテナンスの実行に掛かる時間の見積もり式を次に示します。

（ポリシーによって登録される ID 数× 15）＋（登録先 ID に実行されているジョブ数× 50）＋ 20 （単位：ミリ秒）

図 9-36 ［ユーザインベントリ項目による ID 登録］ダイアログボックス



［ユーザインベントリ項目による ID 登録］ダイアログボックスでの設定方法を次に示します。

1. **設定したい「ユーザインベントリ項目」欄の選択項目を選択して［>］ボタンをク**

リックする。
選択した選択項目を「条件」欄に追加します。条件は 10 個まで設定できます。なお，一つのポリシー内で，同じユーザインベントリ項目は複数指定できません。
「条件」欄から選択項目を削除したい場合は，削除したい選択項目を選択して［<］ボタンをクリックしてください。

2. **［参照］ボタンをクリックする。**
［ID 一覧］ダイアログボックスが表示されます。ポリシーを設定する ID を選択してください。
また，ID を新規作成する場合は，［ID 一覧］ダイアログボックスの［ID の作成］ボタンをクリックしてください。

3. **［追加］ボタンをクリックする。**
「条件」欄で指定したポリシーを「ポリシー一覧」に追加します。
ポリシーを削除したい場合は，削除したいポリシーを選択して［削除］ボタンをクリックしてください。

9.4.2 ID の自動メンテナンス運用時の注意事項

ID の自動メンテナンス運用時の注意事項を次に示します。

- 同じポリシーは複数設定できません。
- ID の自動メンテナンスでは，ID のパスワードの有無に関係なく自動的にクライアントが登録されます。
- 中継マネージャおよび中継システムは，ID の自動メンテナンスの対象外となります。これらを ID に登録するには，手動で ID に登録する必要があります。
- ID ジョブは，クライアントが ID に登録されたあとで再度上位システムと通信が発生したタイミングで実行されます。そのため，ID ジョブを実行してから ID の自動メンテナンスを使用する場合，クライアントが自動的に ID に登録されますが，ID ジョブが実行されるタイミングはクライアントによって異なります。
クライアントが ID に登録されたタイミングで ID ジョブを実行したいときは，クライアント側で次の操作を実施してください。
  1. **［スタート］メニューの［ID への登録］アイコンから［ID への登録］ダイアログボックスを表示して，ID に登録されたことを確認する。**
  2. **［スタート］メニューの［ジョブ実行］アイコンを選択して，ID ジョブを受信する。**
- ID が削除された場合，その ID を指定したポリシーも自動的に削除されます。ただし，ポリシーを設定中にほかのリモートインストールマネージャから ID が削除されたときは，その ID を指定したポリシーは自動的には削除されません。このような場合，そのポリシーを削除するか ID の指定を変更してください。指定した ID が存在しないため，自動メンテナンスの対象外となります。

- ポリシーを削除しても，ID に登録済みのクライアントは ID から解除されません。
- 上位システムで共通管理項目のユーザインベントリ項目を削除・変更した場合，その項目が中継するシステムでポリシーに設定されていても中継するシステムにユーザインベントリ項目の変更・削除は反映されません。このような場合，不正なユーザインベントリ項目が中継するシステムのポリシーに設定され，ID の自動メンテナンスが正しく実行されなくなるおそれがあります。
- 中継マネージャで，上位システムで作成された共通管理項目のユーザインベントリ項目と ID をポリシーに設定する場合，上位システムと同じ条件で，登録先の ID が異なる設定はしないでください。
- ポリシーを設定中に ID を新規に作成し，さらにその ID を ID 管理中継で管理する場合，ポリシーの設定が完了する前に中継するシステムが ID 管理中継に設定される必要があります。中継するシステムが管理中継に設定されたことを確認してからポリシーの設定を完了してください。

9.5　ポリシーをファイルから作成する

あて先グループおよびIDの自動メンテナンスのポリシーを，テキスト形式ファイルに出力できます。複数のポリシーを作成し，目的に合わせてファイルを入力することで，ポリシーを一括して設定できます。また，ポリシーを出力したテキスト形式ファイルを編集することで，既存のポリシーの設定を流用してポリシーを新規に作成できます。

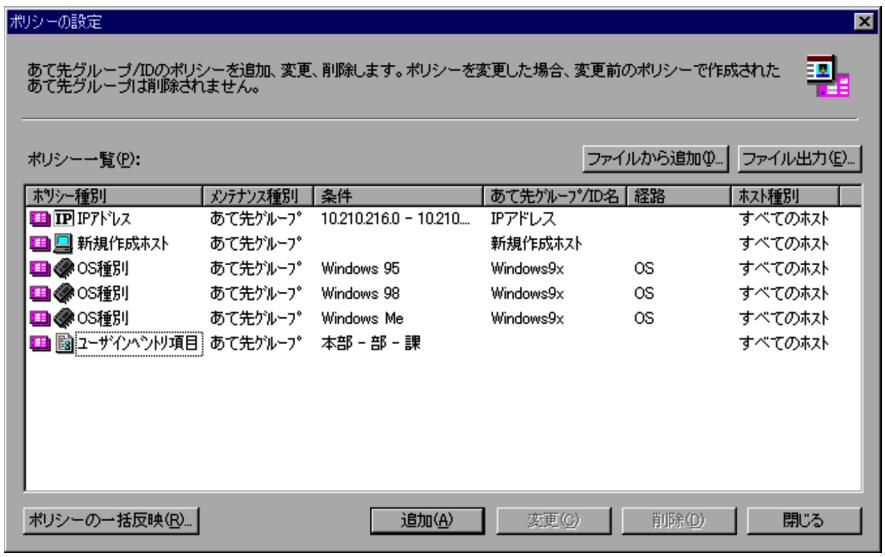
ポリシーの設定を記載したファイルを**自動メンテナンスポリシーファイル**と呼びます。

ここでは自動メンテナンスポリシーファイルの入出力方法と，編集方法について説明します。

9.5.1　自動メンテナンスポリシーファイルの入出力方法

自動メンテナンスポリシーファイルは，［ポリシーの設定］ダイアログボックスの［ファイルから追加］ボタンおよび［ファイル出力］ボタンから入出力できます。

図 9-37　［ポリシーの設定］ダイアログボックス



［ファイルから追加］ボタン

［ファイルから追加］ボタンをクリックすると，［自動メンテナンスポリシーの追加］ダイアログボックスが表示されます。入力対象の自動メンテナンスポリシーファイルを指定して，［開く］ボタンをクリックすると，ファイルに記述された内容でポリシーが追加されます。

なお，自動メンテナンスポリシーファイルの入力には，次の注意事項があります。

- 自動メンテナンスポリシーファイルでユーザが入力したコメントは，ファイル入力時に消去されます。そのため，ファイル出力時には出力されません。
- ポリシー種別によって設定できる数に制限があります。［ポリシーの設定］ダイア

ログボックスの［追加］ボタンからポリシーを作成した場合，ポリシー種別の制限数に達すると，ポリシーの作成は自動的に制限されます。自動メンテナンスポリシーファイル上で制限数より多いポリシー種別を作成した場合，ファイル入力時にエラーメッセージが表示され，自動メンテナンスポリシーファイルのポリシーは反映されません。ポリシー種別の制限数を次の表に示します。

表 9-1　ポリシー種別の制限数

自動メンテナンス種別	ポリシー種別	制限数
あて先グループ	新規作成ホスト	1
	ユーザインベントリ項目	16
ID	新規作成ホスト	1

［ファイル出力］ボタン

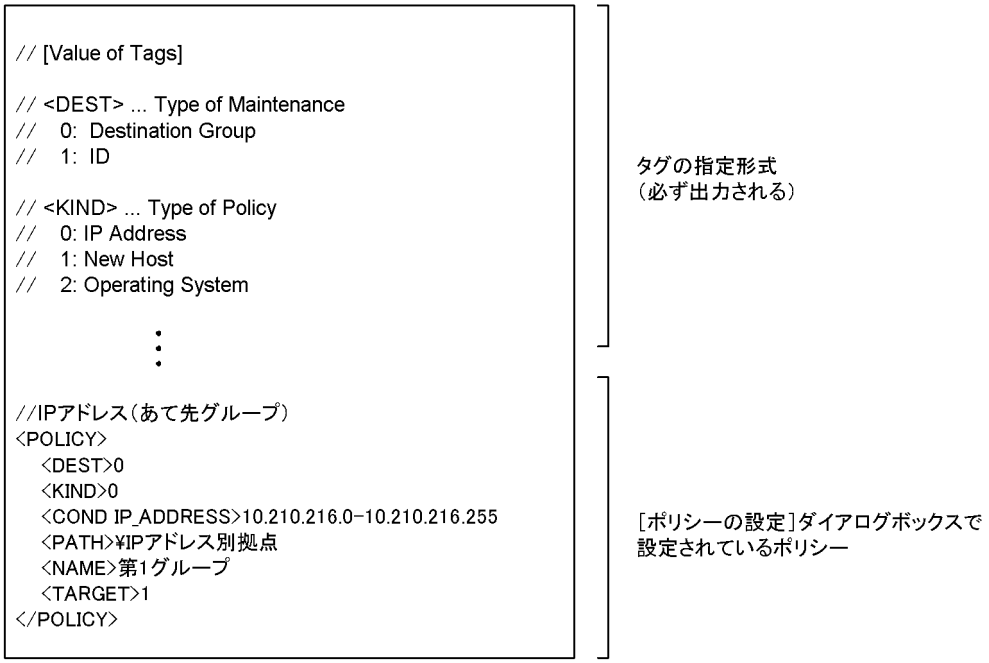
［ファイル出力］ボタンをクリックすると，［自動メンテナンスポリシーの出力］ダイアログボックスが表示されます。格納先ディレクトリを指定して，［保存］ボタンをクリックするとファイルが出力されます。

9.5.2　自動メンテナンスポリシーファイルの編集方法

自動メンテナンスポリシーファイルは，「//」で始まるコメントおよび <POLICY> と </POLICY> のタグに囲まれたポリシーによって構成されます。

自動メンテナンスポリシーファイルの出力例を次の図に示します。

図 9-38　自動メンテナンスポリシーファイルの出力例



<POLICY> と </POLICY> 内のタグの記述を変更することで，ポリシーの設定を変更できます。

自動メンテナンスポリシーファイルで使用するタグを次の表に示します。

表 9-2　自動メンテナンスポリシーファイルで使用するタグ

タグ	説明	必須のタグ
<DEST>	自動メンテナンスの種別を設定します。	○
<KIND>	ポリシーの種別を指定します。	○
<COND>	選択したポリシー種別の条件を設定します。	×
<PATH>	あて先グループのグルーピングを実行する経路を設定します。	×
<NAME>	あて先グループ /ID 名を設定します。	×
<TARGET>	ホスト種別を設定します。	×
<SUBVER>	OS のサブバージョンを設定します。	×

（凡例）○：該当する　×：該当しない

次に，<POLICY> と </POLICY> 内に記述するタグの記述ルール，説明形式，および詳細な記述方法について説明します。

(1) タグの記述ルール

タグを記述するときの記述ルールを説明します。

● タグは，半角英大文字，半角の記号，および半角スペースで記述します。

● タグおよび値は複数行にわたって記述できません。

● タグと同じ行にコメントは記述できません。

● コメントまたはタグは，<POLICY> および </POLICY> の行に記述できません。

● タグの値は省略できません。

● <POLICY> と </POLICY> 内のタグの記述順序は任意です。

(2) タグの説明形式

自動メンテナンスポリシーファイルの各タグを次の形式で説明します。

形式

タグの記述形式を示します。

説明

タグの記述方法を説明します。

注意事項

タグを記述するときの注意事項を説明します。

記述例

タグの値が数字以外の場合，記述例を示します。

(3) <DEST>（自動メンテナンス種別の設定）

自動メンテナンス種別を設定します。このタグは必ず設定してください。

形式

<DEST> *自動メンテナンス種別*

説明

自動メンテナンス種別を，0 または 1 で指定してください。

自動メンテナンス種別	値
あて先グループ	0
ID	1

注意事項

- 0 または 1 以外の値は指定できません。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

（4）<KIND>（ポリシー種別の設定）

ポリシー種別を指定します。このタグは必ず設定してください。

形式

<KIND> *ポリシー種別*

説明

ポリシー種別を，0 ～ 3 で指定してください。なお，<DEST> の値によって，ポリシー種別に指定できる値が異なります。

<DEST> の値	ポリシー種別	値
0（あて先グループ）	IP アドレス	0
	新規作成ホスト	1
	OS 種別	2
	ユーザインベントリ項目	3
1（ID）	新規作成ホスト	1
	ユーザインベントリ項目	3

注意事項

- 上記以外の組み合わせはできません。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

（5）<COND>（条件の設定）

<KIND> で指定したポリシー種別の条件を設定します。

なお，<DEST> と <KIND> の値によって記述するタグが異なります。

<DEST> および <KIND> の組み合わせに応じて記述するタグを次の表に示します。

<DEST> の値	<KIND> の値	記述するタグ
0（あて先グループ）	0（IP アドレス）	<COND IP_ADRESS>
	2（OS 種別）	<COND OS>
	3（ユーザインベントリ項目）	<COND USER>
1（ID）	3（ユーザインベントリ項目）	<COND USER_VALUE>

各タグの記述方法を次に示します。

（a）<COND IP_ADRESS>（IP アドレスの設定）

あて先グループの自動メンテナンスの条件に IP アドレスを設定する場合に，自動メンテナンスの対象となる IP アドレスの範囲を指定します。

形式

<COND IP_ADRESS>*IP アドレスの範囲*

説明

IP アドレスの範囲を，「-」（ハイフン）でつないで指定してください。
IP アドレスに指定できる範囲は，0.0.0.0 ～ 255.255.255.254 です。
一けたまたは二けたの値の場合は，値の前に 0 は不要です。

注意事項

- 必ず値が小さい IP アドレスを「-」の前に，値が大きい IP アドレスを「-」の後に記述してください。
- 「-」の前後に半角スペースおよびタブは記述できません。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

記述例

- <COND IP_ADRESS>178.10.10.0-178.10.10.255

(b) <COND OS>（OS 種別の設定）

あて先グループの自動メンテナンスの条件に OS 種別を設定する場合に，自動メンテナンスの対象となる OS 種別を指定します。

形式

<COND OS>*OS 種別*

説明

OS 種別を，0 ～ 20 で指定してください。一度に指定できる値は，一つだけです。

OS 種別	値
Windows 95	0
Windows 98	1
Windows Me	2
Windows NT	3
Windows 2000	4
Windows XP	5
Windows Server 2003	6
MS-DOS+Windows	7
Windows CE	8
Windows CE .NET	9
HP-UX	10
Solaris	11
AIX	12
HP Tru64 UNIX	13

OS 種別	値
HI-UX/WE2	14
Linux	15
Windows Vista	19
Windows Server 2008	20

注意事項

- 複数の OS 種別をポリシーに設定したい場合は，異なるポリシーを作成してください。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

(c) <COND USER>（ユーザインベントリ項目の設定（あて先グループ））

あて先グループの自動メンテナンスの条件にユーザインベントリ項目を設定する場合に，自動メンテナンスの対象となるユーザインベントリ項目を指定します。

形式

<COND USER> *ユーザインベントリ項目（1 階層目）*,・・・, *ユーザインベントリ項目（6 階層目）*

説明

ユーザインベントリ項目を，階層ごとに「,」（コンマ）で区切って指定してください。ユーザインベントリ項目は 6 階層まで指定できます。

注意事項

- ユーザインベントリ項目の値には，半角スペースおよびタブだけを記述することはできません。
- 最後の階層の後には，「,」は付けられません。
- 「,」と「,」間に何も記述されていない場合，エラーとなります。
- 末尾の半角スペースは無視されます。

記述例

- <COND USER> 本部名 , 部名 , 社員番号

(d) <COND USER_VALUE>（ユーザインベントリ項目の設定（ID））

ID に自動メンテナンスの条件にユーザインベントリ項目を設定する場合に，ID への登録の対象となるユーザインベントリ項目とユーザインベントリ項目の選択項目を指定します。

形式

<COND USER_VALUE> *ユーザインベントリ項目* , *ユーザインベントリ項目の選択項目*

説明

ユーザインベントリ項目とユーザインベントリ項目の選択項目を「,」（コンマ）で区切って指定してください。一つのポリシー内に同時に 10 個まで設定できます。

注意事項

- ユーザインベントリ項目の値には，半角スペースおよびタブだけを記述することはできません。
- 末尾の半角スペースは無視されます。

記述例

<COND USER_VALUE> 本部 , ソフトウェア開発部
<COND USER_VALUE> 部 , 公共部
<COND USER_VALUE> 課 , 第 1 課

（6） <PATH>（経路の設定）

あて先グループが作成される経路を設定します。

形式

<PATH> *経路*

説明

グループが作成される経路を指定してください。
複数の経路を「¥」で区切って指定することもできます。各経路は 32 バイト以内で指定してください。複数の経路を指定する場合 , あて先グループ名および区切り文字の「¥」を含めて 190 バイトまで記述できます。
また，経路の名称には，「¥」「/」「*」「"」「'」「:」「!」「|」「.」「<」「>」「?」「@」「%」および半角スペースは使用できません。

注意事項

- <DEST>1 を指定した場合，<PATH> を指定しても無視されます。
- それぞれの経路で，同じ経路名は指定できません。
- 新しい経路を記述した場合，自動メンテナンス実行時に新たに経路が作成されます。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

記述例

<PATH>¥group1¥group2¥group

（7） <NAME>（あて先グループ名または ID 名）

自動メンテナンスの対象となる，あて先グループ名または ID 名を設定します。

形式

<NAME> *あて先グループ名または ID 名*

説明

あて先グループ名または ID 名を記述してください。あて先グループ名および ID 名は 32 バイト以内で指定してください。ただし，「¥」「/」「*」「"」「'」「:」「!」「|」「.」「<」「>」「?」「@」「%」および半角スペースは使用できません。

注意事項

- <DEST>0 を指定し，<KIND> の入力値が 0，1，および 2 の場合は，必ずあて先グループ名を指定してください。
- <DEST>1 を指定した場合，必ず ID 名を入力してください。
- 経路で指定したあて先グループ名と同じ名称は指定できません。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

（8）<TARGET>（ホスト種別の設定）

自動メンテナンスの対象となるホスト種別を設定します。このタグは省略できます。

形式

<TARGET> *ホスト種別*

説明

ホスト種別を，0 または 1 で指定してください。

ホスト種別	値
すべてのホスト	0
クライアントだけ	1

注意事項

- <KIND> の値が 0 および 2 の場合は，<TARGET> の値を統一してください。
- タグを省略した場合，<DEST>0 を指定していると自動的に 0 が指定されます。<DEST>1 を指定していると自動的に 1 が指定されます。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

（9）<SUBVER>（OS サブバージョンの有無の設定）

ポリシー種別に OS 種別を指定している場合の，OS サブバージョンの有無を設定します。このタグは省略できます。

<SUBVER> はポリシー種別に OS 種別を選択した場合だけ指定できます。

形式

<SUBVER>*OS サブバージョンの有無*

説明

OS サブバージョンの有無を，0 または 1 で指定してください。

OS サブバージョンの有無	値
無	0

OS サブバージョンの有無	値
有	1

注意事項

- タグを省略した場合，自動的に 0 が指定されます。
- OS 種別以外のポリシー種別を選択した場合，このタグは指定しても無視されます。
- 値の前後の半角スペースおよびタブは無視されます。

9.5.3 ポリシーの作成例

あて先グループの自動メンテナンスで，IP アドレスの範囲が 100.0.0.0 ～ 100.0.0.255 のクライアントを，経路が「開発部」のあて先グループ「第 1 グループ」に登録するポリシーを設定する場合，自動メンテナンスポリシーファイルには次のように指定します。

図 9-39 自動メンテナンスポリシーファイルの作成例

```
//IPアドレス(あて先グループ)
<POLICY>
   <DEST>0
   <KIND>0
   <COND IP_ADDRESS>100.0.0.0-100.0.0.255
   <PATH>¥開発部
   <NAME>第1グループ
</POLICY>
```

また，このポリシーをコピーして，IP アドレスの範囲，あて先グループ名などを変更することで，IP アドレスを条件にした異なるポリシーを作成できます。このように，既存のポリシーをコピーして編集することで，効率良く複数の自動メンテナンスポリシーを作成できます。

9.6　システム構成情報の削除履歴を管理する

JP1/NETM/DM Manager では，いつ，どのような契機で，各システムがシステム構成情報から削除されたか，その削除履歴を管理できます。

システム構成情報の削除履歴を管理するには，JP1/NETM/DM Manager のセットアップで，次の設定をしてください。

JP1/NETM/DM Manager のセットアップ

［システム構成関連］パネルの「削除履歴を保管する」チェックボックスをオンにしてください。

9.6.1　削除履歴の表示

システム構成情報の削除履歴は，［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスに表示されます。［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスは，［ファイル］－［システム構成情報の削除履歴］を選択して，表示します。リモートインストールマネージャのどのウィンドウからでも表示できます。

図 9-40　［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックス



［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスには，システム構成情報である「あて先」，「サブキー」，「経路」に加えて，次の 2 項目が，削除されたホストごとに表示されます。

削除要因

システム構成情報からホストが削除された要因が，次の三つに分けて表示されます。

削除要因	意味
アンインストール結果受信による削除	• クライアント，中継システム，または中継マネージャからアンインストールが通知された。 •「システム構成情報の取得」ジョブによって，ホストが削除された。
管理者による削除	•［システム構成］ウィンドウから，クライアント，中継システム，および中継マネージャを手動で削除した。 • システム構成情報の自動または手動メンテナンスによって，クライアントを削除した。
上位マネージャの指示による削除	• 下位システムが接続先を変更したとき，中継マネージャが上位マネージャから，旧経路に残っている下位システムのシステム構成情報の削除通知を受信した。 • 中継マネージャが上位マネージャから，システム構成情報の自動または手動メンテナンスによる削除通知を受信した。

削除日時

システム構成情報からホストが削除された日時です。

［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスには，次の項目を追加表示することもできます。

ホスト識別子，MAC アドレス，コメント，作成日時，更新日時

追加表示するには，右クリックして表示されるメニューから［表示する情報］を選択したあと，表示項目を選択します。

［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスは，ダイアログボックス枠をドラッグして，見やすいサイズに変更できます。また，各列名をクリックするたびに，昇順，降順のソートが繰り返されます。

9.6.2 削除履歴の CSV 形式ファイルへの出力

システム構成情報の削除履歴を CSV 形式ファイルへ出力できます。ホストごとに次の情報が出力されます。

ホスト名称，IP アドレス，ホスト識別子，MAC アドレス，タイプ，経路，コメント，削除要因，削除日時，作成日時，更新日時

削除履歴を CSV 形式ファイルへ出力する方法は，次のとおりです。

1. **［ファイル］－［システム構成情報の削除履歴］を選択する。**
   ［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［CSV 出力］ボタンをクリックする。**
   ［削除履歴の CSV 出力］ダイアログボックスが表示されます。
3. **ファイルを保存する場所とファイル名を指定し，［保存］ボタンをクリックする。**
   指定したファイルに，削除履歴が CSV 形式で保存されます。
   CSV 形式ファイルの出力を途中で中止する場合は，［中止］ボタンをクリックしてく

ださい。

9.6.3 削除したホストのシステム構成情報への復元

システム構成情報の削除履歴を基に，削除したホストをシステム構成情報に復元できます。ただし，削除したホストのあて先グループ，ID，およびインベントリ情報は復元されません。

ホスト削除時の経路が存在しない場合，同じホストがシステム構成情報に登録されている場合は，復元できません。また，配布管理システムを階層化したシステムの場合，上位マネージャから，中継マネージャ配下の中継システムおよびクライアントは復元できません。

なお，削除したホストをシステム構成情報に復元しても，［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスの削除履歴からは削除されません。削除履歴は，必要に応じて，削除してください。

削除したホストをシステム構成情報に復元する方法は，次のとおりです。

1. **［ファイル］－［システム構成情報の削除履歴］を選択する。**
   ［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスが表示されます。
2. **復元したいホストを選択し，［復元］ボタンをクリックする。**
   システム構成情報に復元されます。
   複数のホストを選択して，一括して復元することもできます。

9.6.4 削除履歴の削除

削除履歴を基に，ホストをシステム構成情報に復元しても，［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスの削除履歴からは削除されません。削除履歴が大量に残っていると，データベース容量を圧迫しますので，不要な履歴は定期的に削除することをお勧めします。

削除履歴を削除するには，［システム構成情報の削除履歴］ダイアログボックスで，履歴の不要なホストを選択し，［削除］ボタンをクリックします。［すべて削除］ボタンをクリックすると，すべての削除履歴が削除されます。

なお，［システム構成］ウィンドウから手動でホストを削除した際に，インベントリ情報を削除しない設定にしていた場合，システム構成情報からホストは削除されても，インベントリ情報は残っています。このような場合には，削除履歴を削除しても，インベントリ情報は削除されません。

9.7 JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する

配布管理システムからネットワーク上のホストを探索（**ホスト探索**）し，JP1/NETM/DM がインストールされていないホスト（JP1/NETM/DM **未導入ホスト**）を検出することで，JP1/NETM/DM のインストール状況を確認できます。

ここでは，JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出される条件，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する方法，および検出したあとの運用について説明します。

9.7.1 JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出される条件

配布管理システムに登録されているホストの MAC アドレスと，ネットワーク上から探索されたホストの MAC アドレスを比較して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出します。

ここでは，検出対象となる MAC アドレスおよび JP1/NETM/DM のバージョンについて説明します。

配布管理システムに登録されている MAC アドレスには，次の 2 種類があります。

- システム構成情報として登録されている MAC アドレス
- 「システム情報の取得」ジョブで取得した MAC アドレス

探索されたホストの MAC アドレスが，これらの MAC アドレスと一致しない場合，JP1/NETM/DM がインストールされていないと見なされ，JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されます。

また，MAC アドレスを取得できない JP1/NETM/DM がインストールされているホストは，すべて JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されます。そのため，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を利用するには，MAC アドレスを取得できるバージョンの JP1/NETM/DM でシステムを構築している必要があります。MAC アドレスを取得できる JP1/NETM/DM のバージョンを次の表に示します。

表 9-3 MAC アドレスを取得できる JP1/NETM/DM のバージョン

JP1/NETM/DM		バージョン
Windows 版	Manager（中継マネージャ）	05-12 以降※
	SubManager	03-10 以降※
	Client	03-10 以降※
UNIX 版		06-71 以降

注※

インベントリ情報を管理しない運用の場合，MAC アドレスを取得できるバージョンは 06-00 以降となります。
また，複数のネットワークアダプタを使用しているホストが存在する環境での運用の場合，MAC アドレスを取得できるバージョンは 06-01 以降となります。

9.7.2 JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出方法

JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出するには，次の 2 とおりの方法があります。

- ホスト探索を実行して検出する。
- ネットワーク構成情報ファイルを入力して検出する。

それぞれについて説明します。

(1) ホスト探索を実行して検出する

ホスト探索を実行して，探索されたホストの MAC アドレスと，配布管理システムに登録されている MAC アドレスを比較して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出します。

新規に JP1/NETM/DM システムを構築した場合や，ネットワーク上にホストが追加された場合などに，この方法を使用して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。

ホスト探索を実行して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する流れを次に示します。

1. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスを表示する。**
［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスを表示する方法については，「9.7.3 ［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの操作」を参照してください。
2. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスから，［ホスト探索］ダイアログボックスを表示する。**
3. **ホスト探索を実行する。**
ホスト探索が完了すると，自動的に JP1/NETM/DM 未導入ホストが検出されます。
4. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスに検出結果を表示する。**
［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの［最新情報］ボタンをクリックして，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を表示してください。

ホスト探索を実行して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する方法の詳細については，「9.7.4 JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出」を参照してください。

(2) ネットワーク構成情報ファイルを入力して検出する

ホスト探索を実行する代わりに，ネットワーク構成情報ファイルを入力して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出できます。

ネットワーク上のホストの構成が固定されている環境や，ネットワークに負荷を掛けな

いで運用する必要がある環境では，この方法を使用して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。

ネットワーク構成情報ファイルを入力して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する流れを次に示します。

1. **ネットワーク構成情報ファイルを作成する。**
   ネットワーク構成情報ファイルの作成方法については，「9.7.8　ネットワーク構成情報ファイルの作成」を参照してください。
2. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスを表示する。**
   ［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスを表示する方法については，「9.7.3 ［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの操作」を参照してください。
3. **［CSV 入力］ボタンをクリックしてネットワーク構成情報ファイルを入力する。**
   JP1/NETM/DM 未導入ホストが検出され，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスに検出結果が表示されます。

また，JP1/NETM/DM が提供する dcmhstwo コマンドを使用して，ネットワーク構成情報ファイルから JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出することもできます。dcmhstwo コマンドを使用して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する方法については，マニュアル「運用ガイド 2」の「4.9　dcmhstwo.exe（JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出）」を参照してください。

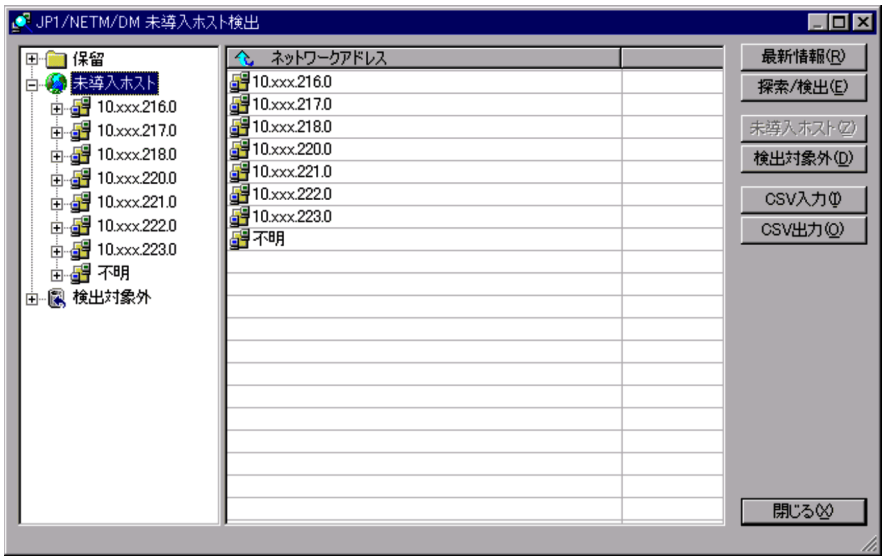
9.7.3 ［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの操作

［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスでは，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出したり，JP1/NETM/DM 未導入ホストを管理したりできます。また，ホスト探索を実行する［ホスト探索］ダイアログボックスも，ここから表示します。

［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスは，リモートインストールマネージャで［オプション］－［JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出］を選択して表示します。

［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスを次に示します。

図 9-41　［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックス



ダイアログボックスの左枠には，検出されたホストがネットワークアドレスごとにツリー形式で表示されます。ただし，サブネットマスクの情報を持たないホストは「不明」として表示されます。

右枠には，左枠で選択した項目ごとに，ネットワークアドレスに含まれるホストの情報や，選択したホストの情報が表示されます。ホストの情報では，ホストが初めて検出された日時（**検出日時**）と，ホストが最後に検出された日時（**最終更新日時**）を確認できます。検出日時は，ホストが初めて検出されたときに設定され，以降の検出時には更新されません。最終更新日時は，ホストが再度検出されたり，検出対象外に指定したりして，ホストの情報が更新されたときに設定されます。これらの日時を比較することで，ホストに JP1/NETM/DM がインストールされていない期間を確認できます。

［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスのアイコンおよびボタンについて説明します。

［保留］アイコン

JP1/NETM/DM Manager のセットアップで，［サーバカスタマイズオプション］パネルの「新規検出結果を保留とする」チェックボックスをオンにしている場合，検出された JP1/NETM/DM 未導入ホストは，すべて［保留］アイコン下に表示されます。

［保留］アイコンを使用する運用では，検出されたコンピュータのうち，任意のコンピュータを手動で JP1/NETM/DM 未導入ホストまたは検出の対象外に指定できます。そのため，OS が Windows のホストと，OS が UNIX のホストが混在している環境で，OS が Windows のホストだけを未導入ホストとして管理したい場合などに有効です。

［未導入ホスト］アイコン

JP1/NETM/DM 未導入ホストとして管理するホストが表示されます。デフォルトでは，検出された JP1/NETM/DM 未導入ホストは，すべて［未導入ホスト］アイコン下に表示されます。

［検出対象外］アイコン

JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出の対象外として管理するホストが表示されます。ここに表示されているホストは，次回検出時に JP1/NETM/DM がインストールされていなくても，JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されません。

JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出時に，種別が「コンピュータ」以外のホストが存在した場合は，自動的に［検出対象外］アイコン下に表示されます。

［最新情報］ボタン

［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新します。ホスト探索を実行したあと，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を表示する場合などに使用します。

［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示の更新が必要なタイミングについては，「9.7.5　検出結果の更新」を参照してください。

［探索 / 検出］ボタン

［探索 / 検出］ボタンをクリックすると，次のメニューが表示されます。

［ホスト探索画面を起動する］メニュー

［ホスト探索］ダイアログボックスが表示されます。［ホスト探索］ダイアログボックスでは，ネットワーク上のホストを探索して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出できます。

ネットワーク上のホストを探索して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する方法については，「9.7.4　JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出」を参照してください。

［未導入ホストを検出する］メニュー

以前に実行したホスト探索の探索結果に登録されているホストの MAC アドレスと，配布管理システムに登録されているホストの MAC アドレスを比較して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出します。

以前にホスト探索を実行したときと，ネットワーク上のホストの構成に変更がない場合は，ホスト探索を実行する必要がないため，このメニューを使用して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出します。

［未導入ホストを検出する］メニューから JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出するタイミングについては，「9.7.5　検出結果の更新」を参照してください。

［未導入ホスト］ボタン

選択したホストを JP1/NETM/DM 未導入ホストに指定できます。［保留］アイコンまたは［検出対象外］アイコン下に表示されているホストを選択した場合に活性化します。

［検出対象外］ボタン

選択したホストが，次回検出時にJP1/NETM/DM未導入ホストとして検出されないよう，「検出対象外」に指定できます。［保留］アイコンまたは［未導入ホスト］アイコン下に表示されているホストを選択した場合に活性化します。
ホストを検出対象外として管理する方法については，「9.7.6　ホストを検出対象外にする方法」を参照してください。

［CSV入力］ボタン

ネットワーク構成情報ファイルを入力するダイアログボックスが表示されます。
ホスト探索を実行する代わりに，ネットワーク構成情報ファイルを入力してJP1/NETM/DM未導入ホストを検出する場合に使用します。

［CSV出力］ボタン

［CSV出力］ボタンをクリックすると，次のメニューが表示されます。

［ホスト探索結果］メニュー

ホストの探索結果をCSV形式ファイルに出力します。

［未導入ホスト情報］メニュー

JP1/NETM/DM未導入ホストの検出結果をCSV形式ファイルに出力します。
ホストの探索結果，およびJP1/NETM/DM未導入ホストの検出結果をCSV形式ファイルへ出力する方法，出力される項目などについては，「9.7.7　検出結果のCSV形式ファイルへの出力」を参照してください。

9.7.4　JP1/NETM/DM未導入ホストの検出

ここでは，ホスト探索を実行してJP1/NETM/DM未導入ホストを検出する方法について説明します。

ホスト探索が完了すると，JP1/NETM/DM未導入ホストが自動的に検出されます。JP1/NETM/DM未導入ホストの検出結果は，［JP1/NETM/DM未導入ホスト検出］ダイアログボックスに表示されます。

（1）検出手順

ホスト探索を実行してJP1/NETM/DM未導入ホストを検出する手順と注意事項を次に示します。

1. **［JP1/NETM/DM未導入ホスト検出］ダイアログボックスを表示する。**
2. **［JP1/NETM/DM未導入ホスト検出］ダイアログボックスから，［ホスト探索］ダイアログボックスを表示する。**
   ホスト探索は，［ホスト探索］ダイアログボックスから実行します。［ホスト探索］ダイアログボックスを表示する方法，および［ホスト探索］ダイアログボックスの操作方法については，「(3)　［ホスト探索］ダイアログボックスの操作」を参照してください。
3. **ホスト探索の詳細を設定する。**

ホスト探索は，探索するネットワークの範囲や探索スケジュールを設定した「**ホスト探索設定**」に従って実行されます。ホスト探索設定を設定する方法については，「(4) ホスト探索の詳細設定」を参照してください。
また，探索されたホストの情報を保管しておく期間を設定できます。探索されたホストの情報を保管しておく期間の設定については，「(5) 探索結果の有効期間の設定」を参照してください。

4. **ホスト探索を実行する。**
ホスト探索を実行する方法については，「(6) 探索の実行」を参照してください。
探索が完了すると，自動的に JP1/NETM/DM 未導入ホストが検出されます。

5. **検出結果を表示する。**
［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの［最新情報］ボタンをクリックして，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を表示してください。

JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出時の注意事項を次に示します。

- 複数のネットワークアダプタを使用している UNIX 版 JP1/NETM/DM のホストは，一つの MAC アドレスだけが配布管理システムに登録されます。そのため，ホストが持つほかの MAC アドレスによって JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されてしまいます。
この場合，ほかの MAC アドレスによって検出された JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出対象外に指定して対処してください。
- 中継マネージャで JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する場合，中継マネージャが管理しているシステム構成の範囲内でホスト探索を実行してください。中継マネージャが管理している範囲外のホストは，すべて JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されます。
- JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出中に，システム構成の自動登録やシステム情報の通知によって，配布管理システムにホストが新規登録された場合，新規登録されたホストが，JP1/NETM/DM 未導入ホストとしても検出されてしまうときがあります。このとき，［未導入ホストを検出する］メニューから再度検出を実行してください。JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果から，配布管理システムに登録されたホストの情報が削除されます。正しく登録されているかどうかは，配布管理システムのシステム構成情報と，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を比較して確認してください。

(2) ホストとして探索される条件

ホスト探索では，SNMP を使用して，ホスト探索設定で指定した IP アドレスの範囲内で電源がオンのホストを探索します。電源がオフのホストは探索されません。

また，ホスト探索時にはホストの情報も取得します。取得したホストの情報は JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報として管理できます。

なお，探索されるホストが SNMP をサポートしているかどうかによって，取得できるホ

ストの情報が異なります。ホスト探索で取得できるホストの情報を次の表に示します。

表 9-4 ホスト探索で取得できるホストの情報

ホストの情報	SNMP をサポートしているホスト	SNMP をサポートしていないホスト
MAC アドレス※1	○	○
IP アドレス	○	○
ホスト名※2	○	○
サブネットマスク※3	○	×
ノード種別※4	○	×
説明※3	○	×

（凡例）○：取得できる　×：取得できない

注※1
ルータが SNMP をサポートしている場合に情報を取得できます。

注※2
IP アドレスからホスト名を名前解決できる場合に情報を取得できます。

注※3
MIB に値が設定されている場合に情報を取得できます。

注※4
種別を判定できない場合，または SNMP をサポートしていないホストの場合，「コンピュータ」が設定されます。

(3) ［ホスト探索］ダイアログボックスの操作

［ホスト探索］ダイアログボックスでは，ホスト探索を実行したり，ホスト探索設定を追加・変更したりできます。［ホスト探索］ダイアログボックスを表示する手順を次に示します。

1. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの［探索 / 検出］ボタンをクリックする。**
2. **表示されるメニューの［ホスト探索画面を起動する］を選択する。**
   ［ホスト探索］ダイアログボックスが表示されます。

図 9-42 ［ホスト探索］ダイアログボックス





［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスが表示され，ホスト探索設定を作成できます。



「ホスト探索設定」で選択している設定を削除します。



「ホスト探索設定」で選択している設定で，ホスト探索を開始します。



「ホスト探索設定」で選択した，実行中のホスト探索を停止します。



ホスト探索の実行状況（ステータス）の表示を最新の状態に更新します。

ホスト探索設定

［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスで設定したホスト探索設定の内容や，ホスト探索の状況などが表示されます。［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスでの設定方法については，「(4)　ホスト探索の詳細設定」を参照してください。

また，表示されているホスト探索設定の内容を変更することもできます。ホスト探索を実行中のホスト探索設定の内容を変更する場合は，ホスト探索を停止させる必要があります。

ホスト探索設定の内容を変更するには，変更したいホスト探索設定を選択して，［編集］－［変更］から［ホスト探索設定の変更］ダイアログボックスを表示します。［ホスト探索設定の変更］ダイアログボックスでの設定方法は，［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスでの設定方法と同様です。ただし，変更時にはホスト探索設定の「名称」は変更できません。

名称

［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスで設定した，ホスト探索設定の名称です。必ず表示されます。

IP アドレス範囲

［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスで設定した，ホスト探索を実行するネットワークの範囲です。必ず表示されます。

スケジュール

［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスで設定した，ホスト探索のスケジュールです。デフォルトで表示されます。

ステータス

ホスト探索の実行状況です。デフォルトで表示されます。
実行状況は自動的に更新されます。更新の間隔は，［表示オプション］ダイアログボックスで設定できます。

完了数

「IP アドレス範囲」に含まれる IP アドレスのうち，ホスト探索を実行した IP アドレスの数です。デフォルトでは表示されません。

開始日時

ホスト探索を開始した日時です。デフォルトでは表示されません。

終了日時

ホスト探索が終了した日時です。デフォルトでは表示されません。

［開始］ボタン

「ホスト探索設定」で選択している設定で，ホスト探索を開始します。

［停止］ボタン

「ホスト探索設定」で選択した，実行中のホスト探索を停止します。

［閉じる］ボタン

［ホスト探索］ダイアログボックスを閉じます。

なお，「ホスト探索設定」の表示項目や，ホスト探索の実行状況（ステータス）の表示の更新間隔を変更したい場合は，［表示オプション］ダイアログボックスから設定を変更できます。

［表示オプション］ダイアログボックスは，［表示］－［表示オプション］から表示できます。

図 9-43 ［表示オプション］ダイアログボックス



表示列

「ホスト探索設定」に表示される項目を設定します。表示したい項目はチェックボックスをオンに，非表示にしたい項目はチェックボックスをオフにしてください。

なお，「名称」および「IP アドレス範囲」は必ず表示されます。

デフォルトは，「スケジュール」および「ステータス」チェックボックスがオンです。

自動更新間隔

「ホスト探索設定」に表示される，探索の実行状況（ステータス）を更新する間隔を，0 ～ 60 分で設定します。デフォルトは 15 分です。0 分を指定した場合，表示は更新されません。

(4) ホスト探索の詳細設定

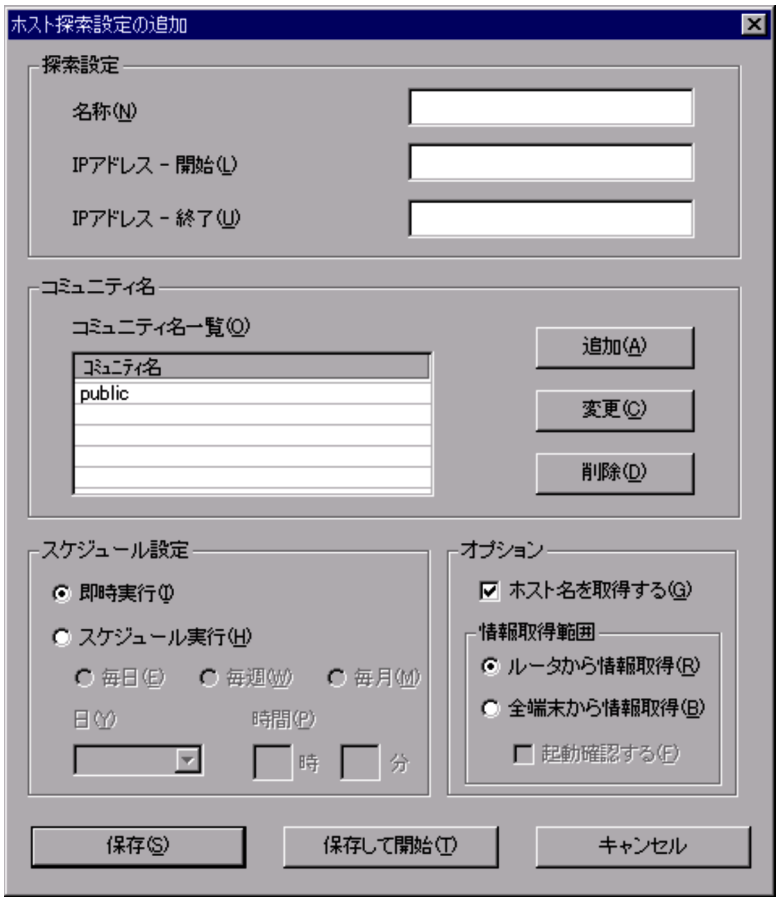
ホスト探索を実行するためには，ホスト探索の対象となるネットワーク上の IP アドレスの範囲や，ホスト探索の実行日時などを指定した**ホスト探索設定**を設定する必要があります。

ホスト探索設定は，［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスで設定します。［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスを表示する方法を次に示します。

- ［ホスト探索］ダイアログボックスで  をクリックする。
- ［ホスト探索］ダイアログボックスで［編集］－［追加］を選択する。

［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスを次に示します。

図 9-44 ［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックス



探索設定

ホスト探索設定の名称，およびネットワークの探索範囲を指定します。

名称

ホスト探索設定の名称を半角で 64 文字（全角で 32 文字）以内で指定します。ホスト探索設定は複数追加できるため，管理しやすい名称を指定することをお勧めします。この項目は，省略することもできます。

IP **アドレス－開始**（必ず指定）

ホスト探索を実行するネットワークの範囲の，IP アドレスの開始値を指定します。

IP **アドレス－終了**（必ず指定）

ホスト探索を実行するネットワークの範囲の，IP アドレスの終了値を指定します。

コミュニティ名（必ず指定）

ホスト探索で使用する SNMP のコミュニティ名を 255 文字以内で指定します。デ

フォルトでは，「public」が指定されています。
コミュニティ名は，一つのホスト探索設定につき 10 個まで登録できます。
コミュニティ名を登録する場合は，［追加］ボタンをクリックして登録するコミュニティ名を指定してください。「コミュニティ名」に表示されているコミュニティ名を変更または削除する場合は，該当するコミュニティ名を選択して，［変更］ボタンまたは［削除］ボタンをクリックしてください。

スケジュール設定

ホスト探索をすぐに実行するか，日時を指定して実行するかを選択します。

即時実行

「即時実行」を選択した場合，［保存して開始］ボタンをクリックすると，ホスト探索設定を設定するのと同時にホスト探索を実行します。

スケジュール実行

指定した日時にホスト探索を実行します。
「毎月」を選択した場合，「日」ドロップダウンリストから，ホスト探索を実行する日付を選択してください。なお，日付に「31 日」を指定した場合の 4 月など，該当する日付がないときは，その月の最終日にホスト探索が実行されます。
「毎週」を選択した場合，「日」ドロップダウンリストから，ホスト探索を実行する曜日を選択してください。
ホスト探索を実行する時刻は，次の範囲で指定してください。

- 時：0 ～ 23
- 分：0 ～ 59

オプション

ホストの情報を取得する方法を選択します。

ホスト名を取得する

ホスト探索でホスト名を取得する場合にチェックボックスをオンにしてください。デフォルトはチェックボックスがオンです。
JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報としてホスト名が不要な場合は，このチェックボックスをオフにしてください。名前解決を行わなくなるため，ホスト探索が完了する時間を短縮できるときがあります。
なお，SNMP をサポートしているホストは，チェックボックスをオフにしていてもホスト名が取得されます。

情報取得範囲

ホストの情報を取得する範囲を選択します。デフォルトは，「ルータから情報取得」です。

ルータから情報取得

ルータから探索できたホストに対して，SNMP を使用してホストの情報を取得します。通常は，この項目を選択することをお勧めします。

全端末から情報取得

探索範囲として指定された IP アドレスすべてに対して，SNMP を使用してホストの情報を取得します。VPN 環境など，探索経路に SNMP に応答しない

ルータが含まれる場合は，この項目を選択してください。また，「ルータから情報取得」を選択してホスト探索を実行した結果，実際のホスト数に比べて探索結果が少ない場合に選択してください。
なお，指定された IP アドレスを持つホストが存在しなかったり，ホストの電源がオフであったりしてもホストの情報の取得を試みるため，ホスト探索が完了するまでに時間が掛かります。

起動確認する

「全端末から情報取得」を選択した場合に「起動確認する」チェックボックスをオンにすると，ホストの起動を確認してから，ホストの情報の取得を試みます。探索範囲として指定された IP アドレスのうち半数以上が，ホストが存在しなかったり，ホストの電源がオフだったりする場合は，チェックボックスをオンにするとホスト探索が完了する時間を短縮できるときがあります。
なお，ネットワークの探索範囲に，OS が Windows XP Service Pack 2 や Windows Server 2003 Service Pack 1 などの ICMP ポートが使用できないホストが存在する場合は，チェックボックスをオフにしてください。

［保存］ボタン

ホスト探索設定を設定します。ホスト探索設定は，［ホスト探索］ダイアログボックスの「ホスト探索設定」に表示されます。

［保存して開始］ボタン

ホスト探索設定を設定して，ホスト探索を開始します。「即時実行」を選択した場合は，ホスト探索設定を設定するのと同時にホスト探索が実行されます。「スケジュール実行」を選択した場合は，設定した日時になるとホスト探索が実行されます。
ホスト探索設定は，［ホスト探索］ダイアログボックスの「ホスト探索設定」に表示されます。

［キャンセル］ボタン

ホスト探索設定を設定しないで，［ホスト探索設定の追加］ダイアログボックスを閉じます。

(5) 探索結果の有効期間の設定

探索しても情報を取得できなかったホストが，電源がオフの状態なのか，ネットワーク上から撤去されたのかを判定するために，探索結果の有効期間を設定できます。

探索しても情報を取得できなかったホストは，ホスト探索完了時の JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出で，ネットワーク上に存在しないと判断されてしまいます。これを避けるために，情報を取得できなかった場合でもホストの情報を有効にしておく期間を設定します。

最後にホストが探索された日から，設定した期間を過ぎてホスト探索を実行した場合，探索しても情報を取得できなかったホストは，ネットワーク上から撤去されたと見なされ，JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されなくなります。

探索結果の有効期間は，［探索］－［探索オプション］から表示される，［探索オプショ

ン］ダイアログボックスで設定します。

図 9-45 ［探索オプション］ダイアログボックス



有効期間

探索されたホストの情報を有効にしておく期間を設定します。1 ～ 365 日で設定してください。デフォルトは 90 日です。

(6) 探索の実行

ホスト探索を実行するには，［ホスト探索］ダイアログボックスで実行したいホスト探索設定を選択し，▶ または［開始］ボタンをクリックします。

ホスト探索が開始されると，「ステータス」に「実行中」と表示されます。

ホスト探索が完了すると，「ステータス」の表示が「完了」となり，JP1/NETM/DM 未導入ホストが自動的に検出されます。

なお，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果は，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスに反映されません。検出結果を表示するには，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの［最新情報］ボタンをクリックして，表示を更新する必要があります。

ホスト探索を途中で停止する場合は，■ または［停止］ボタンをクリックしてください。「ステータス」の表示が「キャンセル」となり，ホスト探索が停止します。ホスト探索を途中で停止した場合，停止するまでに探索されたホストの情報は，配布管理システムに登録されます。ただし，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出は実行されません。

9.7.5 検出結果の更新

検出結果を更新することで，最新の JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報を確認できます。

次に示す場合では，JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報が更新されていたり，JP1/NETM/DM 未導入ホストがネットワークに追加されていたりしますが，検出結果には自動的に反映されません。検出結果を更新して，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスから最新の JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報を確認してください。

- ホスト探索を実行した場合

- JP1/NETM/DM 未導入ホストに JP1/NETM/DM をインストールした場合
- JP1/NETM/DM がアンインストールされた場合
- ネットワークに JP1/NETM/DM 未導入ホストが追加された場合
- ネットワークからホストが撤去された場合
- システム構成情報をファイルから作成した場合
- dcmhstwo コマンドを実行して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出した場合

それぞれの場合で，検出結果を更新する方法について説明します。

(1) ホスト探索を実行した場合

［最新情報］ボタンをクリックして，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新してください。

ホスト探索を実行して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出した場合，JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報が更新されますが，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示は更新されません。

(2) JP1/NETM/DM 未導入ホストに JP1/NETM/DM をインストールした場合

［最新情報］ボタンをクリックして，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新してください。

システム構成情報の自動登録機能，「システム構成情報の取得」または「システム情報の取得」ジョブによって，JP1/NETM/DM をインストールしたホストの MAC アドレスが配布管理システムに登録されると，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果から，該当するホストの情報が自動的に削除されます。

なお，検出対象外に指定している JP1/NETM/DM 未導入ホストに JP1/NETM/DM をインストールした場合，検出対象に戻しても，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果から，該当するホストの情報は自動的に削除されません。この場合，最新の情報を表示するには，ホストを検出対象に戻したあとで，［探索 / 検出］ボタンをクリックして表示される［未導入ホストを検出する］メニューを選択してください。

(3) JP1/NETM/DM がアンインストールされた場合

配布管理システムに登録されているシステム構成情報から，該当するホストの情報を削除し，［探索 / 検出］ボタンをクリックして表示される［未導入ホストを検出する］メニューを選択してください。

なお，システム構成の自動メンテナンス機能を使用している場合，JP1/NETM/DM がアンインストールされたホストを自動的にシステム構成情報から削除できます。この場合，JP1/NETM/DM をアンインストールしてから［探索 / 検出］ボタンをクリックして表示される［未導入ホストを検出する］メニューを選択すると，自動的に JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されます。

(4) ネットワークに JP1/NETM/DM 未導入ホストが追加された場合

ホスト探索を実行して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。

ホスト探索が完了したら，［最新情報］ボタンをクリックして，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新してください。

(5) ネットワーク上からホストが撤去された場合

ホスト探索を実行して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。ただし，ネットワーク上から撤去されたホストの情報は，探索結果の有効期限を過ぎている場合に削除されます。探索結果の有効期限については，「9.7.4(5)　探索結果の有効期間の設定」を参照してください。

ホスト探索が完了したら，［最新情報］ボタンをクリックして，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新してください。

(6) システム構成情報をファイルから作成した場合

システム構成情報をファイルから作成した場合，JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報は更新されません。次の方法で，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。

ネットワーク上のホストが探索されている場合

［探索 / 検出］ボタンをクリックして表示される［未導入ホストを検出する］メニューを選択して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。

ネットワーク上のホストが探索されていない場合

ホスト探索を実行して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出してください。

ホスト探索が完了したら，［最新情報］ボタンをクリックして，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新してください。

(7) dcmhstwo コマンドを実行して JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出した場合

［最新情報］ボタンをクリックして，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示を更新してください。

dcmhstwo コマンドを実行して，ネットワーク構成情報ファイルから JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出した場合，JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報が更新されますが，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの表示は更新されません。

9.7.6 ホストを検出対象外にする方法

JP1/NETM/DM 未導入ホストとして管理する必要のないホストがネットワーク上に存在する場合，JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されたホストを，次回の検出時から検出の対象外に指定できます。また，検出対象外に指定されたホストを検出対象に戻す

こともできます。

なお，ルータやプリンタといった，種別が「コンピュータ」以外のネットワーク機器は，自動的に「検出対象外」として検出されます。

また，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を［保留］アイコン下に表示する設定にしている場合，検出結果のうち，JP1/NETM/DM 未導入ホストとして管理したいホストと，次回の検出時から検出の対象外とするホストを手動で指定する必要があります。

(1) ホストを検出対象外にする

検出対象外に指定されたホストは，［検出対象外］アイコンの下に表示されます。検出対象外に指定されたホストは，未導入ホストに指定するまで検出されません。

ホストを検出対象外にする方法を説明します。

1. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの左枠で，検出対象外にしたいホストを選択する。**
   ［保留］アイコン，［未導入ホスト］アイコン，またはネットワークアドレスを選択した場合，選択した項目の下位に表示されているすべてのホストが選択されます。
2. **［検出対象外］ボタンをクリックする。**
   選択したホストが［検出対象外］アイコンの下に表示され，次回検出時から，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出の対象外になります。

(2) ホストを検出対象にする

［保留］アイコン下に表示されているホストや検出対象外に指定されているホストを JP1/NETM/DM 未導入ホストに指定して，検出対象にすることができます。

ホストを検出対象にした場合，［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスでのホストの表示位置は変更されますが，検出は実行されません。最新の情報を表示するには，再度検出を実行してください。

ホストを検出対象にする方法を説明します。

1. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスの左枠で，検出対象にしたいホストを選択する。**
   ［保留］アイコン，［検出対象外］アイコン，またはネットワークアドレスを選択した場合，選択した項目の下位に表示されているすべてのホストが選択されます。
2. **［未導入ホスト］ボタンをクリックする。**
   選択したホストが［未導入ホスト］アイコンの下に表示され，次回検出時から，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出の対象になります。
   最新の JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報を表示するには，再度検出を実行してください。

9.7.7 検出結果の CSV 形式ファイルへの出力

ネットワーク上のホストの探索結果，および JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を，CSV 形式ファイルに出力できます。

出力した CSV 形式ファイルは，ネットワーク構成情報ファイルとしても使用できます。

（1） ネットワーク上のホストの探索結果を出力する

CSV 形式ファイルには，ホストごとに次の情報が出力されます。

IP アドレス，ノード種別，ノード名称，MAC アドレス，サブネットマスク，ネットワークアドレス，最終更新日時，説明

探索結果を CSV 形式ファイルに出力する方法を説明します。

1. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスで［CSV 出力］ボタンをクリックする。**
2. **表示されるメニューから［ホスト探索結果］を選択する。**
   探索結果の CSV 形式ファイルを保存するダイアログボックスが表示されます。
3. **ファイルを保存する場所とファイル名を指定し，［保存］ボタンをクリックする。**
   指定したファイルに，検出結果が CSV 形式ファイルで保存されます。

また，JP1/NETM/DM が提供する dcmcsvu コマンドを使用して，探索結果を CSV 形式ファイルに出力することもできます。dcmcsvu コマンドを使用して探索結果を CSV 形式ファイルに出力する方法については，マニュアル「運用ガイド 2」の「4.5 dcmcsvu.exe（CSV 出力）」を参照してください。

（2） JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を出力する

CSV 形式ファイルには，ホストごとに次の情報が出力されます。ただし，保留または検出対象外に指定されているホストの情報は出力されません。

IP アドレス，ノード種別，ノード名称，MAC アドレス，サブネットマスク，ネットワークアドレス，検出日時，最終更新日時，説明

検出結果を CSV 形式ファイルに出力する方法を説明します。

1. **［JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出］ダイアログボックスで［CSV 出力］ボタンをクリックする。**
2. **表示されるメニューから［未導入ホスト情報］を選択する。**
   検出結果の CSV 形式ファイルを保存するダイアログボックスが表示されます。
3. **ファイルを保存する場所とファイル名を指定し，［保存］ボタンをクリックする。**
   指定したファイルに，検出結果が CSV 形式ファイルで保存されます。

また，JP1/NETM/DM が提供する dcmcsvu コマンドを使用して，検出結果を CSV 形式

ファイルに出力することもできます。dcmcsvu コマンドを使用して検出結果を CSV 形式ファイルに出力する方法については，マニュアル「運用ガイド 2」の「4.5 dcmcsvu.exe（CSV 出力）」を参照してください。

9.7.8　ネットワーク構成情報ファイルの作成

ホスト探索を実行する代わりに，ネットワーク上に存在するホストの MAC アドレス，IP アドレスなどの情報を記述した CSV 形式ファイル（**ネットワーク構成情報ファイル**）を入力して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出できます。

ネットワーク構成情報ファイルを作成するには，次の方法があります。

- ホストの探索結果，または JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出結果を CSV 形式ファイルに出力する。
- 手動または任意のツールを使用して作成する。

ここでは，ネットワーク構成情報ファイルの記述形式と，記述する項目について説明します。また，ツールを使用してネットワーク構成情報ファイルを作成する例として，JP1/NetInsight II -PortDiscovery を使用してネットワーク構成情報ファイルを作成する方法についても説明します。JP1/NetInsight II -PortDiscovery を使用してネットワーク構成情報ファイルを作成する方法については，「(3)　JP1/NetInsight II -PortDiscovery を使用してネットワーク構成情報ファイルを作成する」を参照してください。

（1）ネットワーク構成情報ファイルの記述形式

ネットワーク構成情報ファイルは，CSV 形式で記述します。1 行目に「タイトル行」を記述し，2 行目以降で 1 行ごとに各ホストの情報を記述します。

ネットワーク構成情報ファイルの記述例を次の図に示します。

図 9-46　ネットワーク構成情報ファイルの記述例

```
①  MACアドレス,IPアドレス,サブネットマスク,ノード名称,ノードの説明,検出日時,ノード種別
②  00:90:27:52:0a:7a,10.xxx.94.181,255.255.255.0,CLT021,Windows 2000 SP4
    00:00:e2:61:38:08,10.xxx.94.33,255.255.255.0,CLT023,Windows 2000 SP4
    00:00:e2:3d:eb:fa,10.xxx.94.55,255.255.255.0,CLT024,,コンピュータ
    00:00:e2:2d:02:7a,10.xxx.94.162,,,Windows XP（共用機）,2005/03/07,コンピュータ
    00:00:e2:2b:92:00,10.xxx.94.82,255.255.255.0,CLT029,Windows NT version 4.0
```

①：タイトル行　　②：ホスト情報

タイトル行では，ホスト情報に記述する項目の順序を定義します。タイトル行は任意の

順序で項目を記述できますが，タイトル行に記述する項目の順序と，ホスト情報に記述する項目の順序は，同じにする必要があります。

なお，ネットワーク構成情報ファイルは，次に示す範囲内で記述してください。

- 1 行に指定できる項目数：32 項目以内
- 1 行当たりのデータ量：16 キロバイト以内

(2) ネットワーク構成情報ファイルの項目

ネットワーク構成情報ファイルのタイトル行に記述する項目と，ホスト情報に記述する項目について説明します。

(a) タイトル行に記述する項目

タイトル行に記述する項目と，各項目の形式を次に示します。

●「MAC アドレス」（必ず記述）
「MAC」は半角大文字で，「アドレス」は全角かたかなで記述します。

●「IP アドレス」（必ず記述）
「IP」は半角大文字で，「アドレス」は全角かたかなで記述します。

●「サブネットマスク」
全角かたかなで記述します。

●「ノード名称」
すべて全角で記述します。

●「ノードの説明」
すべて全角で記述します。

●「検出日時」
すべて全角で記述します。

●「ノード種別」
すべて全角で記述します。

同じ項目は複数記述しないでください。「MAC アドレス」と「IP アドレス」以外の項目は省略できます。

タイトル行に，形式が異なる項目や記述できない項目が含まれる場合，その項目は無視されます。また，その項目の記述位置に対応するホスト情報の項目も無視されます。例えば，タイトル行の三つ目に「機器情報」という項目を記述した場合，「機器情報」は記述できない項目なので，ネットワーク構成情報ファイル内の 3 列目に位置するホスト情報の項目が，すべて無視されます。

(b) ホスト情報に記述する項目

タイトル行に記述した項目，および項目の順序に対応するよう，ホストごとに次に示す項目を記述します。

● MAC アドレス（必ず記述）

ホストの MAC アドレスを，12 ～ 17 バイトの 16 進数で記述します。英字の大文字と小文字は区別されません。MAC アドレスを 2 けたずつ区切る場合は，半角の「:」（コロン），「-」（ハイフン），またはスペースのうち，どれか一つを区切り文字に使用してください。

なお，同じ MAC アドレスを持つホスト情報が複数記述されている場合，該当するホスト情報のうち，最後に記述されたホスト情報だけが検出の対象になります。

● IP アドレス（必ず記述）

ホストの IP アドレスを記述します。

● サブネットマスク

ホストのサブネットマスクを記述します。

● ノード名称

ホストの名称を，半角で 80 文字（全角で 40 文字）以内で記述します。通常はホスト名やコンピュータ名を記述します。

● ノードの説明

ホストの説明を，半角で 255 文字（全角で 127 文字）以内で記述します。

● 検出日時

JP1/NETM/DM 未導入ホストとして初めて検出された日時です。JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出時に，自動的に設定されます。

検出日時を記述する場合は，*YYYY/MM/DD hh:mm:ss* の形式で記述します。「*YYYY/MM/DD*」と「*hh:mm:ss*」の間には半角スペースを記述してください。

- *YYYY*：西暦年（1970 ～ 2038）
- *MM*：月（01 ～ 12）
- *DD*：日（01 ～ 31）
- *hh*：時（00 ～ 23）※
- *mm*：分（00 ～ 59）※
- *ss*：秒（00 ～ 59）※

注※

省略できる項目です。省略した場合は，それ以降の項目も省略する必要があります。省略した項目には 00 が設定されます。

● ノード種別

ホストの種別を指定します。指定できる種別を次に示します。

- コンピュータ（全角かたかな）
- ルータ（全角かたかな）
- ブリッジ（全角かたかな）
- リピータ（全角かたかな）
- プリンタ（全角かたかな）
- RMON（半角英文字）

省略した場合は「コンピュータ」が設定されます。また，上記以外の項目を記述した場合，JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出時にエラーとなります。
JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出時には，種別が「コンピュータ」以外のホストは，自動的に検出対象外に指定されます。

(c) ネットワーク構成情報ファイル作成時の注意事項

- ネットワーク構成情報ファイルに，JP1/NETM/DM が管理しているネットワークの範囲外のホストが記述されている場合，該当するホストはすべて JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出されます。
- ホスト情報に「"」（ダブルクォーテーション）および「,」（コンマ）が含まれる項目を指定する場合，次に示す方法で指定してください。
  ホスト情報の項目は，「"」で囲んで指定できます。

  （例）「Windows 2000 Professional」と記述する場合

  ```
  …,"Windows 2000 Professional",…
  ```

  また，ホスト情報の項目中に「,」または「"」を使用する場合は，次の規則に従って指定してください。

  ホスト情報の項目中に「,」を使用する場合

  項目を「"」で囲んでください。

  （例）「Windows 2000, Professional」と記述する場合

  ```
  …,"Windows 2000, Professional",…
  ```

  ホスト情報の項目中に「"」を使用する場合

  項目中の「"」は文字列と見なされるので，そのまま指定してかまいません。

  （例）「Windows "2000" Professional」と記述する場合

  ```
  …,Windows "2000" Professional,…
  ```

  ただし，項目を「"」で囲んで指定する場合は，項目中の「"」を二つ連続して記述してください。

  （例 1）「Windows "2000" Professional」と記述する場合

  ```
  …,"Windows ""2000"" Professional",…
  ```

  （例 2）「"Windows 2000 Professional"」と記述する場合

  ```
  …,"""Windows 2000 Professional""",…
  ```

  ホスト情報の項目中に「,」および「"」を使用する場合

  項目を「"」で囲んでください。また，項目中の「"」を二つ連続して記述してください。

  （例）「Windows "2000", Professional」と記述する場合

  ```
  …,"Windows ""2000"", Professional",…
  ```

(3) JP1/NetInsight II -PortDiscovery を使用してネットワーク構成情報ファイルを作成する

JP1/NETM/DM システムと JP1/NetInsight II -PortDiscovery を同じネットワーク内で

運用している場合，JP1/NetInsight II -PortDiscovery を使用してネットワーク構成情報ファイルを作成できます。

JP1/NetInsight II -PortDiscovery は，ネットワークに接続している機器の情報を収集し，ネットワークの構成情報の一覧を作成するプログラムです。ネットワークに接続されている機器の種別や IP アドレスなどの情報を一覧形式で確認できます。また，定期的にネットワークの構成情報を収集したり，不正な接続を監視したりすることもできます。JP1/NetInsight II -PortDiscovery の機能および操作方法の詳細については，マニュアル「JP1/NetInsight II -PortDiscovery Advance」を参照してください。

JP1/NetInsight II -PortDiscovery を使用してネットワーク構成情報ファイルを作成する方法について説明します。

1. JP1/NetInsight II -PortDiscovery **のエクスプローラを起動する。**
2. **エクスプローラの［コントローラ］画面で，**JP1/NETM/DM **未導入ホストを検出したいネットワークの範囲を指定して，［探索］－［実行］を選択する。**
   指定した範囲内に接続されている機器の情報が取得されます。
   探索結果が，JP1/NetInsight II -PortDiscovery のエクスプローラに表示されます。
3. **エクスプローラで，［編集］－［検索］を選択する。**
   ［検索］ダイアログボックスが表示されます。探索結果から，ネットワーク構成情報ファイルに記載する情報を抽出します。
   ［検索］ダイアログボックスでの指定方法について説明します。
   - **［検索条件］パネル**

図 9-47 ［検索条件］パネル



検索項目

「クラス」を指定します。

比較条件

「=」を指定します。

値

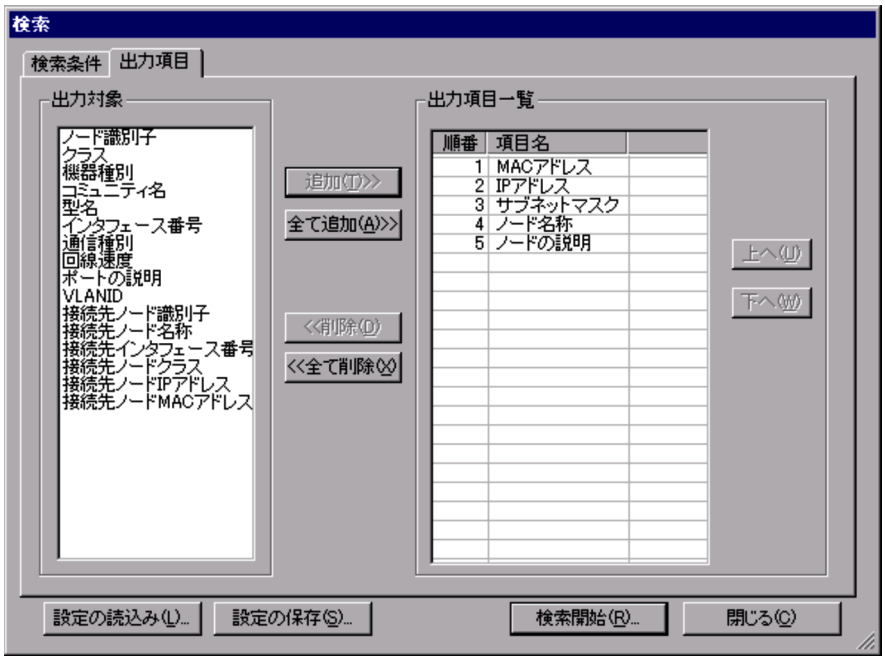
ホストの情報を抽出するので，「端末」を指定します。

OS のルータ機能を使用しているホストや，プリンタサーバ用のソフトウェアをインストールしているホストは，クラスが「ルータ」「プリンタ」として探索されます。そのため，探索されたすべてのホストを JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出の対象にするには，「ルータ」と「プリンタ」も検索条件に加えてください。

各項目を設定したら，［OR 追加］ボタンをクリックして「検索条件一覧」に検索条件を追加します。

- **［出力項目］パネル**

図 9-48 ［出力項目］パネル



出力対象

ネットワーク構成情報ファイルに記載する項目を指定します。

MAC アドレス（必ず指定），IP アドレス（必ず指定），サブネットマスク，ノード名称，およびノードの説明をそれぞれ選択し，［追加］ボタンをクリックして「出力項目一覧」に追加します。

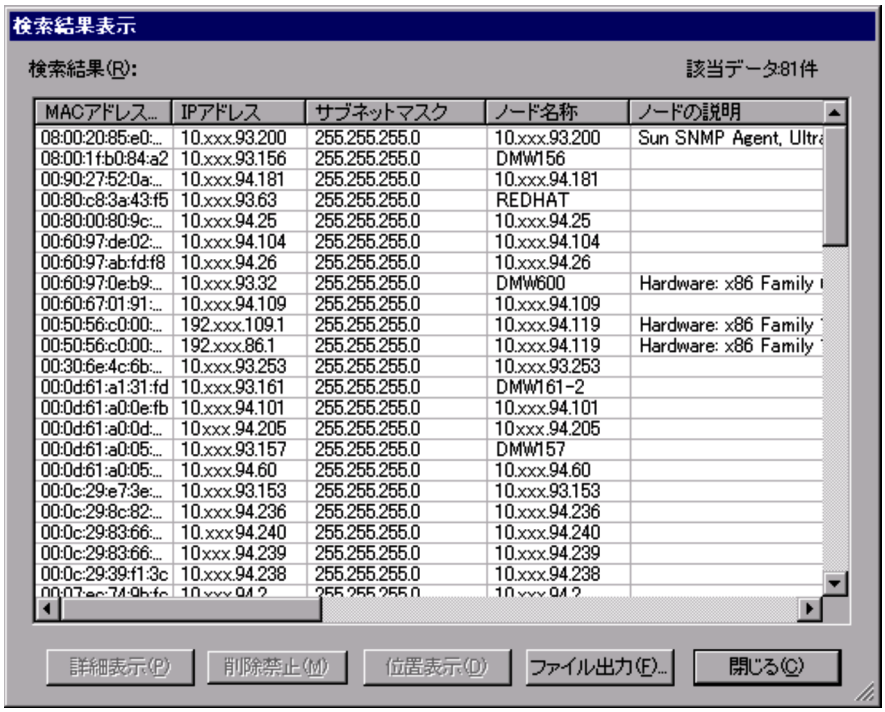
出力項目一覧

ネットワーク構成情報ファイルに記載される項目が表示されます。項目の順序は

任意に設定してください。

4. **［検索開始］ボタンをクリックする。**
［検索結果表示］ダイアログボックスに，検索結果が表示されます。

図 9-49 ［検索結果表示］ダイアログボックス



5. **［検索結果表示］ダイアログボックスで，［ファイル出力］ボタンをクリックする。**
検索結果が CSV 形式ファイルで出力されます。出力された CSV 形式ファイルは，そのまま，ネットワーク構成情報ファイルとして使用できます。

10 Asset Information Manager Limited を使用するための設定

この章では，「Asset Information Manager Limited」を使用して，インベントリ情報や操作ログを集計するために必要な設定について説明します。

10.1 Asset Information Manager Limited をセットアップする

10.2 Asset Information Manager Limited のサーバをセットアップする

10.3 Asset Information Manager Limited のデータベースをセットアップする

10.4 仮想ディレクトリを設定する

10.5 Asset Information Manager Limited で使用するサービスの設定

10.6 Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用する場合の設定

10.7 タスクスケジューラに登録されるタスクの設定

10.8 部署単位で操作ログを集計するための設定

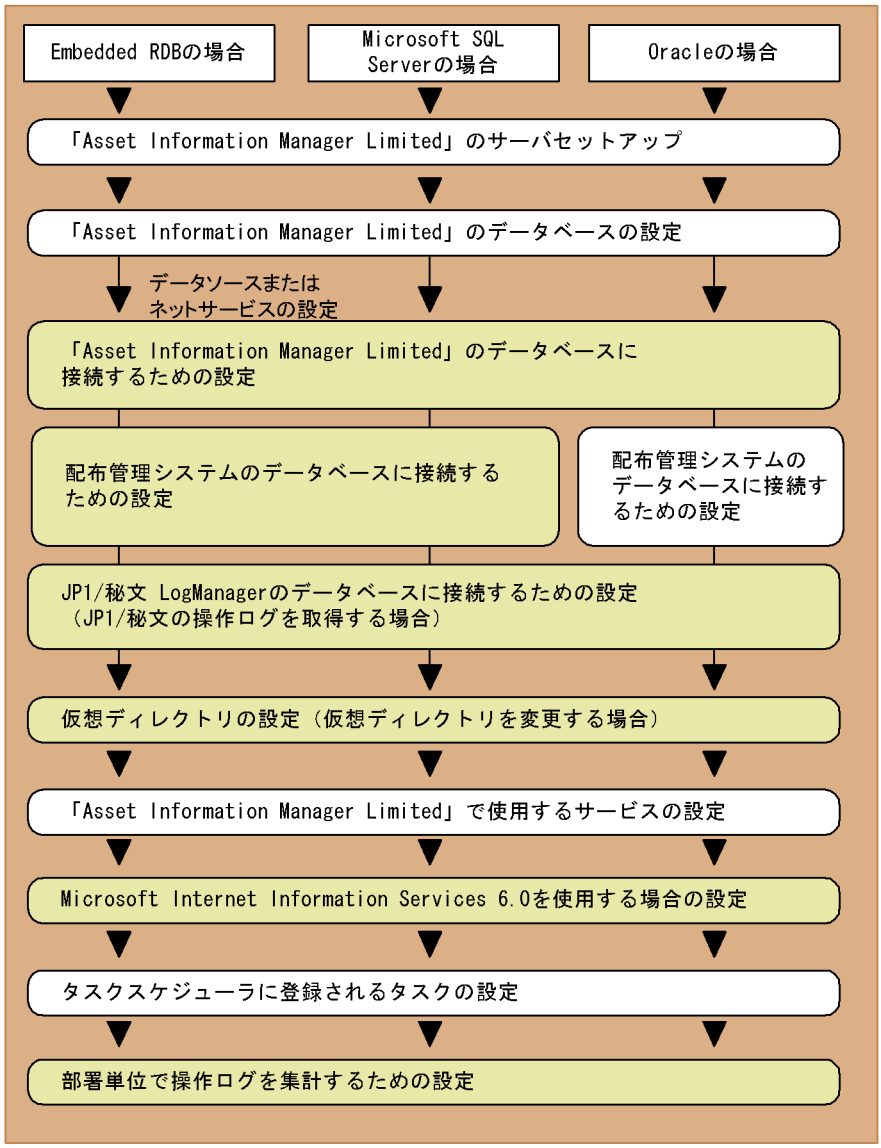
10.9 Asset Information Manager Limited で表示できるインベントリ情報

10.1　Asset Information Manager Limited をセットアップする

「Asset Information Manager Limited」を使用してインベントリ情報や操作ログを集計するには，「Asset Information Manager Limited」の環境設定が必要です。環境設定の手順は，データベースの種類や JP1/ 秘文の操作ログを参照するかどうかによって異なります。

「Asset Information Manager Limited」をセットアップする流れを，次の図に示します。

図 10-1　「Asset Information Manager Limited」のセットアップの流れ



なお，「Asset Information Manager Limited」をセットアップするときは次の点に注意してください。

●「Asset Information Manager Limited」のデータベースを使用するアプリケーションは，すべて終了してください。

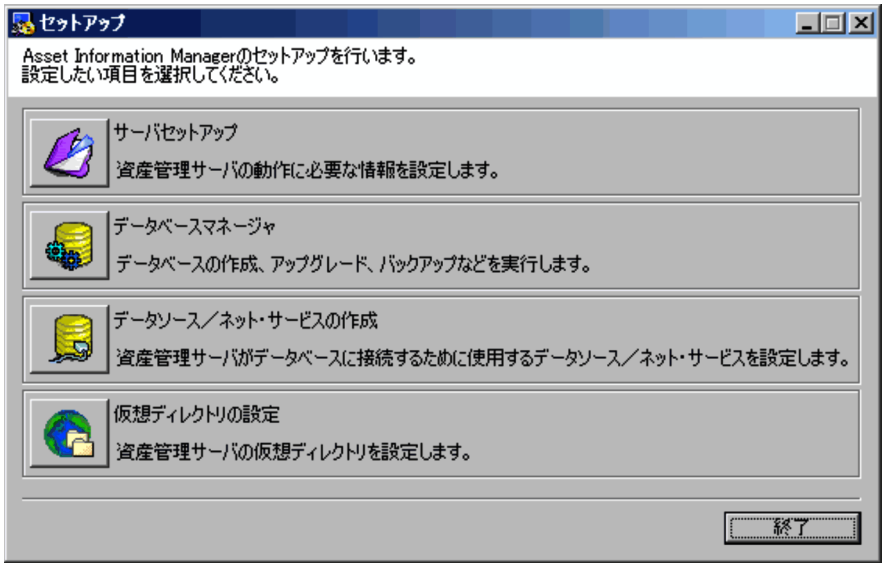
●「Asset Information Manager Limited」のセットアップを実行するためには，

Administrator 権限を持つユーザでログオンしてください。

サーバセットアップから仮想ディレクトリの設定までは，「Asset Information Manager Limited」の［セットアップ］ダイアログボックスを使用して設定します。

「Asset Information Manager Limited」の［セットアップ］ダイアログボックスは，［スタート］メニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［Asset Information Manager］－［セットアップ］を選択して表示します。

図 10-2　［セットアップ］ダイアログボックス



実行したい操作のボタンをクリックすると，設定するダイアログボックスが表示されます。

サーバセットアップ

「Asset Information Manager Limited」のセットアップに必要な情報を［サーバセットアップ］ダイアログボックスで設定します。「Asset Information Manager Limited」のセットアップ方法については，「10.2　Asset Information Manager Limited のサーバをセットアップする」を参照してください。

データベースマネージャ

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの環境を作成するには，データベースマネージャを使用します。「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャの操作方法については，「10.3　Asset Information Manager Limited のデータベースをセットアップする」を参照してください。

データソース／ネット・サービスの作成

配布管理システムのデータベース，および「Asset Information Manager Limited」のデータベースに接続するためのデータソースまたはネット・サービスを作成しま

す。また，JP1/ 秘文の操作ログを参照する場合は，JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続するためのデータソースの作成も必要です。
データソースおよびネット・サービスの作成方法については，「10.3.8　データソースまたはネット・サービスを作成する」を参照してください。

仮想ディレクトリの設定

「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリを，「既定の Web サイト」以外の Web サイトに設定します。
また，Microsoft Internet Information Services 6.0 を使用している場合に，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリに関連づけるアプリケーションプールを作成・変更します。
仮想ディレクトリの設定方法，およびアプリケーションプールを作成・変更方法については，「10.4　仮想ディレクトリを設定する」を参照してください。

これ以降で，「Asset Information Manager Limited」のセットアップの各手順について説明します。

10.2 Asset Information Manager Limited のサーバをセットアップする

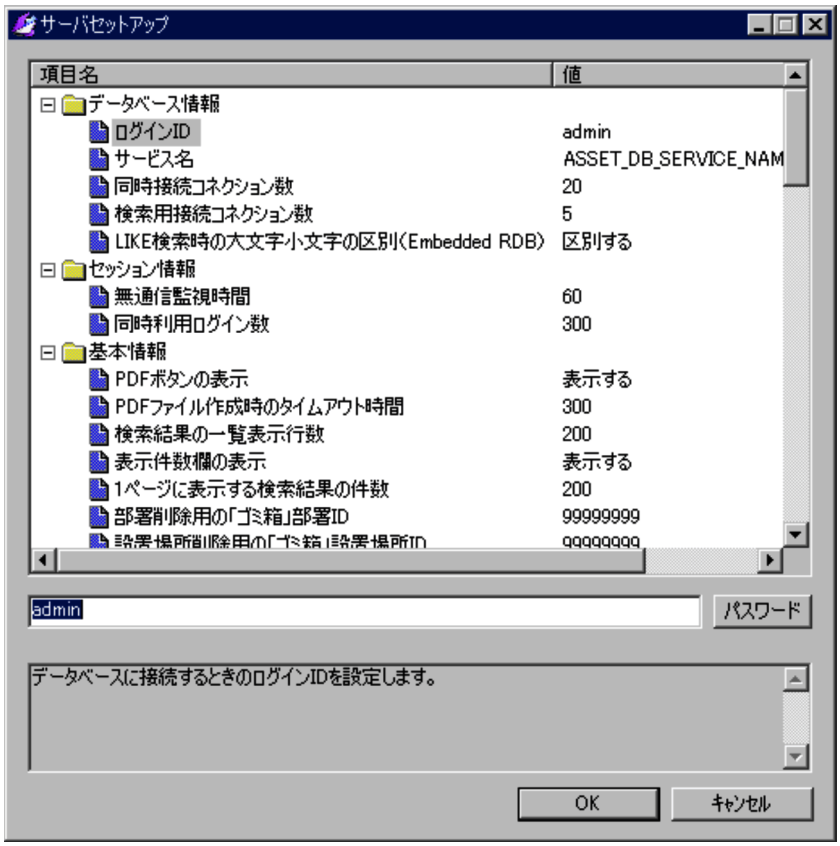
「Asset Information Manager Limited」のサーバのセットアップに必要な情報は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで設定します。設定内容を次に示します。

- **データベース情報**
  「Asset Information Manager Limited」のデータベースに接続するためのログイン ID やサービス名などを設定します。
- **セッション情報**
  「Asset Information Manager Limited」の操作画面，およびリモートインストールマネージャから起動する［操作ログ一覧］ウィンドウ，［操作ログ集計］ウィンドウ，［ソフトウェア稼働状況］ウィンドウから，強制ログアウトさせる時間および同時にログインできるユーザ数を設定します。
- **基本情報**
  検索結果の表示件数，部署を管理するための項目を設定します。
- JP1/NETM/DM **連携**
  配布管理システムのデータベースに接続するためのログイン ID やサービス名などを設定します。また，「Asset Information Manager Limited」のデータベースにインベントリ情報を取り込むための，引き当て方法も設定します。
- JP1/ **秘文連携**
  JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続して操作ログを参照するためのログイン ID やサービス名を設定します。なお，JP1/ 秘文の操作ログを参照しない場合には，連携しないことを設定する必要があります。

［サーバセットアップ］ダイアログボックスの各項目を設定する手順について説明します。

1. **スタートメニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［Asset Information Manager］－［セットアップ］を選択する。**
   「Asset Information Manager Limited」の［セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。
2. **「サーバセットアップ」を選択する。**
   ［サーバセットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

図 10-3　［サーバセットアップ］ダイアログボックス



3. **使用する環境に合わせて各項目を設定する。**
   各項目の設定内容については，各項目の説明を参照してください。
   なお，次に示す項目を設定する場合は，［パスワード］ボタンをクリックすると表示される［パスワード設定］ダイアログボックスで，パスワードを設定してください。
   - 「データベース情報」の「ログイン ID」
   - 「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」

4. **［OK］ボタンをクリックする。**
   指定した内容で「Asset Information Manager Limited」のサーバ環境が設定されて，［サーバセットアップ］ダイアログボックスが閉じます。
   環境設定をしないで［サーバセットアップ］ダイアログボックスを閉じるには，［キャンセル］ボタンをクリックします。

次に，各項目の内容について説明します。

10.2.1　データベース情報の設定

「Asset Information Manager Limited」のデータベースに接続するためのログイン ID やサービス名などを設定します。

データベース情報で設定する項目を次に示します。

(1) ログイン ID

データベース接続ユーザのログイン ID を設定します。ここで設定するのは，「Asset Information Manager Limited」のデータベース作成時に使用する接続ユーザ ID です。データベースの作成方法については「10.3.1　データベースを新規作成する」を参照してください。

また，［パスワード設定］ダイアログボックスでパスワードを設定します。

この項目は必ず設定してください。

● 指定できる値

1 ～ 29 バイトの文字です（「ログイン ID」およびパスワード）。ただし，Embedded RDB の場合，「ログイン ID」には 1 ～ 8 バイトの文字を指定してください。デフォルトは，「ログイン ID」およびパスワードのどちらも「admin」です。

「ログイン ID」およびパスワードに指定する値には，DBMS の種類によって制限があります。各 DBMS での指定できる値の制限を次の表に示します。

表 10-1 「ログイン ID」およびパスワードに指定できる値の制限

DBMS の種類	指定する値の制限
Embedded RDB	先頭の文字には，必ず半角英字を指定してください。
Microsoft SQL Server	「!」，「(」，「)」，「*」，「,」，「;」，「=」，「?」，「@」，「[」，「]」，「{」，「}」および半角スペースは指定できません。
Oracle	「"」は指定できません。

ここで設定した値は，次に示すダイアログボックスの「接続ユーザ ID」に反映されます。ただし，データベースの新規作成後に値を変更した場合は，データソースまたはネット・サービスを再作成してください。

- ［データベースの基本設定］ダイアログボックス
- ［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックス

(2) サービス名

「Asset Information Manager Limited」のデータベース用のサービス名を設定します。ここで設定するのは，「Asset Information Manager Limited」のデータベース作成時に使用する ODBC データソース名（Embedded RDB または Microsoft SQL Server の場合）またはネット・サービス名（Oracle の場合）です。データベースの作成方法については，「10.3.1　データベースを新規作成する」を参照してください。

この項目は，必ず設定してください。

● 指定できる値

1 ～ 63 バイトの半角英数字および記号です。デフォルトは「ASSET_DB_SERVICE」です。
「サービス名」に指定する値には，DBMS の種類によって制限があります。各 DBMS での指定できる値の制限を次の表に示します。

表 10-2 「サービス名」に指定できる値の制限

DBMS の種類	指定する値の制限
Embedded RDB または Microsoft SQL Server	「!」，「(」，「)」，「*」，「,」，「;」，「=」，「?」，「@」，「[」，「]」，「{」，「}」および半角スペースは指定できません。
Oracle	「!」，「"」，「#」，「$」，「%」，「&」，「'」，「(」，「)」，「*」，「+」，「,」，「/」，「:」，「;」，「<」，「=」，「>」，「?」，「@」，「[」，「¥」，「]」，「^」，「`」，「{」，「|」，「}」，「~」および半角スペースは指定できません。

ここで設定した値は，次に示すダイアログボックスの「ODBC データソース名」および「ネット・サービス名」に反映されます。ただし，データベースの新規作成後に値を変更した場合は，データソースまたはネット・サービスを再作成してください。

- ［データベースの基本設定］ダイアログボックス
- ［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックス

（3） 同時接続コネクション数

データベースに同時に接続するコネクション数を設定します。

なお，この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

1 ～ 64 です。デフォルトは 20 です。この項目では，「データベース情報」の「検索用接続コネクション数」よりも大きい値を指定してください。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

（4） 検索用接続コネクション数

データベースに長時間接続する必要のある処理が同時に接続できるコネクション数を設定します。この設定をすることで，検索要求といった，長時間の処理によるデータベース接続の占有を防げます。

なお，この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

1 ～ 64 です。デフォルトは 5 です。この項目では，「データベース情報」の「同時接続コネクション数」よりも小さい値を指定してください。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

（5） LIKE 検索時の大文字小文字の区別（Embedded RDB）

「LIKE 検索時の大文字小文字の区別（Embedded RDB）」では，Embedded RDB を使用

している場合，前方一致および後方一致を含む部分一致で検索するときに，大文字と小文字を区別するかどうかを設定します。

● 指定できる値

- **「区別する」**（デフォルト）
  大文字と小文字を区別します。
- **「区別しない」**
  大文字と小文字を区別しません。

10.2.2 セッション情報の設定

［操作ログ一覧］ウィンドウから強制ログアウトさせる時間，および同時にログインできるユーザ数を設定します。

セッション情報で設定する項目を次に示します。

(1) 無通信監視時間

WWW ブラウザから一定時間操作しない場合に，強制ログアウトするまでの時間を設定します。

なお，この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

1 ～ 2,880 分です。デフォルトは 60 分です。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

(2) 同時利用ログイン数

同時に利用できるログインユーザ数を設定します。

この項目は，必ず設定してください。

● 指定できる値

1 ～ 100,000 です。デフォルトは 300 です。

10.2.3 基本情報の設定

「基本情報」では，操作画面に表示される項目，操作を実行する際の上限値などを設定します。

なお，次の項目は，JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合に使用する設定です。JP1/NETM/Client Security Control と連携しない場合は，設定不要です。

- PDF ボタンの表示
- PDF ファイル作成時のタイムアウト時間

各項目の内容については，マニュアル「JP1/NETM/Asset Information Manager 設計・構築ガイド」を参照してください。

そのほかの項目について説明します。

(1) 検索結果の一覧表示行数

検索した結果の一覧の表示件数を設定します。この設定は，検索結果がページで区切られていない画面に適用されます。

なお，この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

1 ～ 1,000 件です。デフォルトは 200 件です。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

(2) 表示件数欄の表示

1 ページに表示する検索結果の件数を指定する「表示件数」の欄を，操作画面に表示するかどうかを選択します。この設定は，検索結果がページで区切られて表示される画面のうち，検索を実行する画面に適用されます。

● 指定できる値

- **「表示する」**（デフォルト）
  「表示件数」の欄を表示します。
- **「表示しない」**
  「表示件数」の欄を表示しません。1 ページ当たりに表示される検索結果の件数は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスの「基本情報」の「1 ページに表示する検索結果の件数」で設定した値で固定となります。

(3) 1 ページに表示する検索結果の件数

検索した結果の一覧の表示件数を設定します。この設定は，検索結果がページで区切られて表示される画面に適用されます。

この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

1 ～ 1,000 件です。デフォルトは 200 件です。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

(4) 部署削除用の「ゴミ箱」部署 ID

部署を削除した場合に，削除した部署に登録されていたユーザ情報を一時退避するために「ゴミ箱」という部署が自動的に作成されます。「部署削除用の「ゴミ箱」部署 ID」では，「ゴミ箱」の部署 ID を設定します。

なお，この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

0 ～ 64 文字の英数字です。デフォルトは，「99999999」です。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

(5) 設置場所削除用の「ゴミ箱」設置場所 ID

設置場所を削除した場合に，削除した設置場所を一時退避するために「ゴミ箱」という設置場所が自動的に作成されます。「設置場所削除用の「ゴミ箱」設置場所 ID」では，「ゴミ箱」の設置場所 ID を設定します。

なお，この項目は設定を省略できます。

● 指定できる値

0 ～ 64 文字の英数字です。デフォルトは，「99999999」です。空白を指定した場合は，デフォルトの値が設定されます。

(6) 部署別 IP グループを使用した部署の設定

「部署別 IP グループを使用した部署の設定」では，IP アドレスに合わせて，機器を使用している部署を設定するかどうかを選択します。IP アドレスに対応する部署は，業務メニュー「IP グループ管理」で登録します。また，「部署」は，ハードウェア資産情報の「IP アドレス」に合わせて設定されます。

この設定は，サービス「Asset Information Synchronous Service」，タスク「インベントリ情報の取込み」，およびタスク「データメンテナンス」の実行時に有効になります。ただし，タスク「データメンテナンス」の実行時に有効にするには，設定ファイル（taskopt.ini）を変更する必要があります。設定ファイルの変更方法については，「10.7.2(2)　設定ファイルの作成」を参照してください。

● 指定できる値

- **「設定しない」**
  IP アドレスに対応した機器の「部署」は設定されません。
- **「設定する」**
  IP アドレスに対応する部署が，機器の「部署」として設定されます。すでに値が設定されていても，対応する IP グループの部署の値で上書きされます。
  業務メニュー「IP グループ管理」での設定に合わせて「部署」を更新する場合は，この値を指定してください。
- **「部署が未設定のときのみ設定する」**（デフォルト）
  機器の「部署」が登録されていないときだけ，IP アドレスに対応する部署が設定されます。
  主に，新規登録の機器に「部署」を設定したい場合などに，指定してください。

注意事項

「設定する」を選択した場合でも，ユーザインベントリの値，または［機器詳細］ダイアログボックスで入力した値が設定されている場合は，上書きされません。
そのため，すべての機器に対応する IP グループの部署の値を設定したい場合は，業務メニュー「一括変更」で，一度すべての「部署」の値を削除してください。また，業務メニュー「インベントリ情報の引き当て」で，「部署情報 . 部署名」の「上書き設定」を「上書きする（NULL または N/A は上書きしない）」に設定するか，タス

ク「データメンテナンス」を使用して上書きする設定にしてください。タスク「データメンテナンス」での設定方法については，「10.7.2　タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定」を参照してください。

（7）設置場所別 IP グループを使用した設置場所の設定

「設置場所別 IP グループを使用した設置場所の設定」では，IP アドレスに対応する設置場所を機器の「設置場所」に設定するかどうかを選択します。IP アドレスに対応する設置場所は，業務メニュー「IP グループ管理」で登録します。また，「設置場所」は，ハードウェア資産情報の「IP アドレス」に合わせて設定されます。

この設定は，サービス「Asset Information Synchronous Service」，タスク「インベントリ情報の取込み」，およびタスク「データメンテナンス」の実行時に有効になります。ただし，タスク「データメンテナンス」の実行時に有効にするには，設定ファイル（taskopt.ini）を変更する必要があります。設定ファイルの変更方法については，「10.7.2　タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定」を参照してください。

● 指定できる値

- **「設定しない」**（デフォルト）
  IP アドレスに対応した機器の「設置場所」は設定されません。
- **「設定する」**
  IP アドレスに対応する設置場所が，機器の「設置場所」として設定されます。すでに値が設定されていても，対応する IP グループの設置場所の値で上書きされます。業務メニュー「IP グループ管理」での設定に合わせて「設置場所」を更新する場合は，この値を指定してください。
- **「設置場所が未設定のときのみ設定する」**
  機器の「設置場所」が登録されていないときだけ，IP アドレスに対応する設置場所が設定されます。
  主に，新規登録の機器に「設置場所」を設定したい場合などに，指定してください。

注意事項

「設定する」を選択した場合でも，ユーザインベントリから取得した値，または［機器詳細］ダイアログボックスで入力した値が設定されている場合は，上書きされません。そのため，すべての機器に対応する IP グループの設置場所の値を設定したい場合は，業務メニュー「一括変更」で，一度すべての「設置場所」の値を削除してください。また，業務メニュー「インベントリ情報の引き当て」で，「設置場所情報 . 設置場所名」の「上書き設定」が「上書きする（NULL または N/A は上書きしない）」に設定されていることを確認してください。

参考

タスク「データメンテナンス」を使用することで，ユーザインベントリから取得した値，または［機器詳細］ダイアログボックスで入力した値が設定されている場合でも，業務メニュー「IP グループ管理」での設定に合わせて設置場所を更新できます。タスク「データメンテナンス」での設定方法については，「10.7.2　タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定」を参照してください。

(8) 操作ログの検索結果取得件数

検索に時間が掛かり過ぎるのを防ぐため，配布管理システムと JP1/ 秘文のテーブルごとの，操作ログを検索する件数を指定します。

操作ログを管理しない場合でも，値を空白にすることはできません。

● 指定できる値

1 ～ 100,000 件です。デフォルトは 5,000 件です。

(9) 操作ログ一覧の検索期間の警告

検索に時間が掛かり過ぎるのを防ぐため，業務メニュー「操作ログ一覧」および［操作ログ一覧］ウィンドウでの検索期間に対して，警告する範囲を設定します。「検索期間（開始）」から「検索期間（終了）」までに設定した時間が，この項目で設定した時間を超えている場合，警告が表示されます。なお，この項目に 0 を設定した場合，警告は表示されません。

操作ログを管理しない場合でも，値を空白にすることはできません。

● 指定できる値

0 ～ 10,080 分です。デフォルトは 60 分です。

(10) トレース時の表示階層

「トレース時の表示階層」では，業務メニュー「操作ログ一覧」および［操作ログ一覧］ウィンドウで操作を追跡する際に，バックアイコンまたはフォワードアイコンを選択して一度に表示される階層の数を設定します。

操作ログを管理しない場合でも，値を空白にすることはできません。

● 指定できる値

0 ～ 10 階層です。デフォルトは 10 階層です。0 を設定した場合は，すべての階層が表示されます。

(11) トレース時間範囲の設定

「トレース時間範囲の設定」では，業務メニュー「操作ログ一覧」および［操作ログ一覧］ウィンドウで，あるクライアントに対するネットワーク経由の操作を追跡する場合に，同時刻と見なす時間の範囲を設定します。

操作ログを管理しない場合でも，値を空白にすることはできません。

● 指定できる値

0 ～ 300 秒です。デフォルトは 60 秒です。この場合，基準となるノードから前後それぞれ 60 秒が同時刻と見なされます。

10.2.4　JP1/NETM/DM 連携の設定

配布管理システムのデータベースに接続するためのログイン ID やサービス名，インベントリ情報のデータベースへの登録方法などを設定します。

(4) ～ (9) のインベントリ情報と「Asset Information Manager Limited」の資産情報との引き当ての設定については，「10.2.6　インベントリ情報の引き当て方法の設定」を基に決定した値を設定してください。

なお，次の項目は，JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合に使用する設定です。JP1/NETM/Client Security Control と連携しない場合は，設定不要です。

- 削除された資産に設定するコード
- パッケージ識別 ID の取得
- JP1/NETM/DM で使用するジョブ格納フォルダ名

各項目の内容については，マニュアル「JP1/NETM/Asset Information Manager 設計・構築ガイド」を参照してください。

そのほかの項目について説明します。

（1）JP1/NETM/DM データベースログイン ID

配布管理システムのデータベースに接続するためのログイン ID を設定します。

また，［パスワード設定］ダイアログボックスでパスワードを設定します。

この項目は必ず設定してください。

● 指定できる値

1 ～ 29 バイトの文字です（「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」およびパスワード）。ただし，Embedded RDB の場合，「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」には 1 ～ 8 バイトの文字を指定してください。デフォルトは，「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」およびパスワードのどちらも「admin」です。

「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」およびパスワードに指定する値には，DBMS の種類によって制限があります。各 DBMS での指定できる値の制限を次の表に示します。

表 10-3 「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」およびパスワードに指定できる値の制限

DBMS の種類	指定する値の制限
Embedded RDB	先頭の文字には，必ず半角英字を指定してください。
Microsoft SQL Server	「!」，「(」，「)」，「*」，「,」，「;」，「=」，「?」，「@」，「[」，「]」，「{」，「}」および半角スペースは指定できません。
Oracle	「"」は指定できません。

ここで設定した値は，［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスの「接続ユーザ ID」に反映されます。

（2） JP1/NETM/DM データベース接続サービス名

配布管理システムのデータベースに接続するためサービス名を設定します。この項目では，配布管理システムのデータベースに接続するために使用するに ODBC データソース名（Embedded RDB または Microsoft SQL Server の場合）またはネット・サービス名（Oracle の場合）を指定します。

この項目は必ず設定してください。

● 指定できる値

1 ～ 63 バイトの半角英数字および記号です。デフォルトは「NETM_DB_SERVICE」です。

「JP1/NETM/DM データベース接続サービス名」に指定する値には，配布管理システムの DBMS の種類によって制限があります。各 DBMS での指定できる値の制限を次の表に示します。

表 10-4 「JP1/NETM/DM データベース接続サービス名」に指定できる値の制限

DBMS の種類	指定する値の制限
Microsoft SQL Server および Embedded RDB	「!」，「(」，「)」，「*」，「,」，「;」，「=」，「?」，「@」，「[」，「]」，「{」，「}」および半角スペースは指定できません。
Oracle	「!」，「"」，「#」，「$」，「%」，「&」，「'」，「(」，「)」，「*」，「+」，「,」，「/」，「:」，「;」，「<」，「=」，「>」，「?」，「@」，「[」，「¥」，「]」，「^」，「`」，「{」，「|」，「}」，「~」および半角スペースは指定できません。

ここで設定した値は，［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスの「ODBC データソース名」および「ネット・サービス名」に反映されます。

（3） JP1/NETM/DM 未導入機器の取り込み

ネットワークにある，JP1/NETM/DM Client をインストールしていない機器（JP1/NETM/DM 未導入ホスト）の情報を取得するかどうかを選択します。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「取り込む」**（デフォルト）
  JP1/NETM/DM Client がインストールされているかどうかに関係なく，ネットワークにあるすべての機器のインベントリ情報を取得します。
- **「取り込まない」**
  JP1/NETM/DM Client がインストールされている機器のインベントリ情報だけを取得します。

（4） 運用キー

配布管理システムでの設定に合わせて，運用キーにホスト識別子を使用しているかどうかを選択します。配布管理システムで「ホスト識別子の使用」の有無を変更したら，この設定も合わせて変更してください。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「ホスト識別子あり」**（デフォルト）
  配布管理システムで，運用キーにホスト識別子を使用している場合に設定します。この値を選択すると，ホスト識別子を使用して JP1/NETM/DM のインベントリ情報と「Asset Information Manager Limited」の資産情報を引き当てます。
- **「ホスト識別子なし」**
  配布管理システムで，運用キーにホスト識別子を使用していない場合に設定します。システム構成情報の「ノード識別キー」が「ホスト名運用」の場合は，MAC アドレス，ホスト名が同一の資産を引き当てます。引き当てられなかった場合は，MAC アドレスが同一の資産を引き当てます。MAC アドレスで引き当てられなかった場合は，ホスト名が同一の資産を引き当てます。
  システム構成情報の「ノード識別キー」が「IP アドレス運用」の場合は，MAC アドレス，IP アドレスが同一の資産を引き当てます。引き当てられなかった場合は，MAC アドレスが同一の資産を引き当てます。MAC アドレスで引き当てられなかった場合は，IP アドレスが同一の資産を引き当てます。

（5） 資産情報の引き当てキー

配布管理システムで収集した情報を「Asset Information Manager Limited」の資産情報に対応づけて登録する際，識別するための引き当てキーを選択します。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「運用キーに従う」**（デフォルト）
  「運用キー」で指定した値をキーに，JP1/NETM/DM のインベントリ情報と「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
- **「資産番号を使用する」**
  インベントリ情報の引き当てで資産番号に設定した値が，引き当てキーとなります。インベントリ情報の引き当てでは，デフォルトは自動採番する設定になっています。そのため，デフォルトの設定のままではインベントリ情報を引き当てられないので，必ず設定を変更してください。
  インベントリ情報の引き当てでの設定については，「10.2.6　インベントリ情報の引き当て方法の設定」を参照してください。

（6）資産情報の引き当て 1

JP1/NETM/DM のインベントリ情報を取得するときの，「Asset Information Manager Limited」の資産情報の引き当て方法を選択します。この設定は，「資産情報の引き当てキー」の値が「運用キーに従う」で，「運用キー」の値が「ホスト識別子あり」の場合に有効になります。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「ホスト識別子のみが同一の資産を引き当てる」**（デフォルト）
  JP1/NETM/DM のシステム構成情報の「ホスト識別子」で引き当てられなかった場合は，ほかの値を使って引き当てることはしません。
- **「MAC アドレスが同一の資産を引き当てる」**
  JP1/NETM/DM のシステム構成情報の「ホスト識別子」で引き当てられなかった場合は，MAC アドレスが同一の資産を引き当てます。
- **「運用方式に従って引き当てる」**
  JP1/NETM/DM のシステム構成情報の「ホスト識別子」で引き当てられなかった場合は，MAC アドレス，ホスト名，IP アドレスが同一の資産を引き当てます。
  引き当てられなかった場合は，システム構成情報の「ノード識別キー」が「ホスト名運用」のときは，MAC アドレス，ホスト名が同一の資産を引き当てます。また，システム構成情報の「ノード識別キー」が「IP アドレス運用」のときは，MAC アドレス，IP アドレスが同一の資産を引き当てます。
  それでも引き当てられなかった場合は，MAC アドレスが同一の資産を引き当てます。

なお，どの値を選択した場合でも，「Asset Information Manager Limited」の資産情報の「引き当てキー」には，ホスト識別子の値が登録されます。

（7）資産情報の引き当て 2

「資産情報の引き当て 1」で引き当てられなかった場合の引き当て方法を選択します。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「IP アドレスとホスト名を使用して引き当てる」**（デフォルト）
  「資産情報の引き当て 1」で引き当てられなかった機器の中から，ホスト名と IP アドレスが同一の資産を引き当てます。
  引き当てられなかった場合，システム構成情報の「ノード識別キー」が「ホスト名運用」のときはホスト名が同一の資産，「ノード識別キー」が「IP アドレス運用」のときは IP アドレスが同一の資産を引き当てます。
- **「引き当てを行わない」**
  引き当てられなかった資産は登録されません。

（8）引き当たらなかった資産の新規登録

引き当てられなかった資産があった場合に，新規に登録するかどうかを選択します。「運用キー」で「ホスト識別子あり」を選択した場合は，「資産情報の引き当て 1」および「資産情報の引き当て 2」で引き当てられなかった資産が対象になります。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「新規登録する」**（デフォルト）
  データベースに登録されている資産と引き当てられなかったインベントリ情報があった場合，新規資産として登録します。
- **「新規登録しない」**
  データベースに登録されている資産と引き当てられなかったインベントリ情報は登録されません。
  この値を設定した場合，新規に追加された資産が登録されないことがあるので注意してください。

（9）ダイヤルアップ接続の MAC アドレス

ダイヤルアップ接続の MAC アドレスを，「Asset Information Manager Limited」の資産情報と引き当てるための情報に加えるかどうかを選択します。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「引き当て情報にする」**

ダイヤルアップ接続の MAC アドレスを使用して，「Asset Information Manager Limited」の資産情報と引き当てます。

- **「引き当て情報にしない」**（デフォルト）
  「Asset Information Manager Limited」の資産情報との引き当てに，ダイヤルアップ接続の MAC アドレスは使用しません。「資産情報との引き当て 1」で「MAC アドレスが同一の資産を引き当てる」を選択して，「資産情報との引き当て 2」で「引き当てを行わない」を選択している場合は，ホスト識別子で引き当てられなかった「Asset Information Manager Limited」の資産情報は，引き当てられなくなるので注意してください。

（10）取り込む情報の種別

配布管理システムから「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込む情報の種類を設定します。

ソフトウェア適用状況画面からソフトウェアを配布する場合は，配布対象とする機器を検索するために，ソフトウェア情報を取り込むように設定してください。

配布管理システムから取り込むことによって更新される情報の詳細については，「10.9 Asset Information Manager Limited で表示できるインベントリ情報」を参照してください。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「ハードウェア情報」**
  ハードウェアに関する情報だけが登録されます。
- **「ハードウェア情報＋ソフトウェア情報」**（デフォルト）
  ハードウェアに関する情報とソフトウェアに関する情報が登録されます。ソフトウェアに関する情報は，クライアントにインストールされているすべての情報が取得されます（取捨選択できません）。
- **「ハードウェア情報＋ソフトウェアインベントリ情報」**
  ハードウェアに関する情報と，ソフトウェアインベントリ辞書で管理対象に設定したソフトウェアの情報が登録されます。
- **「ハードウェア情報＋ソフトウェア情報＋ソフトウェアインベントリ情報」**
  ハードウェアに関する情報とソフトウェアに関する情報，およびソフトウェアインベントリ辞書で管理対象に設定したソフトウェアの情報が登録されます。

（11）監視間隔

インベントリ情報が更新されたかどうかを監視する間隔を指定します。この設定は，値を空白にすることはできません。

● 指定できる値

1 ～ 429,496 秒です。デフォルトは 60 秒です。

（12）JP1/NETM/DM で削除された資産の機器状態

「JP1/NETM/DM で削除された資産の機器状態」では，インベントリ情報の更新をリアルタイムに取得する場合，削除機器として取得された機器の機器状態を設定します。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合は，JP1/NETM/Client Security Control と連携するための設定値を優先してください。

● 指定できる値

- **「廃棄」**
  機器状態が「廃棄」に設定されて，タスク「データメンテナンス」でほかの情報との関連づけが削除されます。
- **「仮廃棄」**
  インベントリ情報の引き当て対象となります。情報が引き当てられた場合は，機器状態が「運用」に戻ります。
  なお，タスク「データメンテナンス」では，「廃棄」と同様にほかの情報との関連づけが削除されます。
- **「抹消」**（デフォルト）
  「抹消」に設定されて，タスク「データメンテナンス」で削除されます。
- **「コード指定」**
  「削除された資産に設定するコード」で指定したコードの状態になります。
- **「何もしない」**
  機器状態は変更されません。

10.2.5 JP1/ 秘文連携の設定

JP1/ 秘文の操作ログを参照するためのログイン ID やサービス名を設定します。JP1/ 秘文の操作ログを参照しない場合は，連携しない設定にしてください。

「JP1/ 秘文連携」で設定する項目を次に示します。

（1） JP1/ 秘文との連携設定

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続して JP1/ 秘文の操作ログ情報を参照するかどうかを選択します。

この項目は必ず設定してください。

● 指定できる値

- **「連携する」**（デフォルト）
  JP1/ 秘文と連携します。
- **「連携しない」**
  JP1/ 秘文と連携しません。

（2） JP1/ 秘文データベースログイン ID

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続するためのログイン ID を設定します。

また，［パスワード設定］ダイアログボックスでパスワードを設定します。

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続する場合，この項目は必ず設定してください。JP1/ 秘文と連携しない場合でも，値を空白にすることはできません。

● 指定できる値

1 ～ 29 バイトの文字です。（「JP1/ 秘文データベースログイン ID」およびパスワード）。ただし，「!」，「(」，「)」，「*」，「,」，「;」，「=」，「?」，「@」，「[」，「]」，「{」，「}」および半角スペースは指定できません。デフォルトは，「JP1/ 秘文データベースログイン ID」およびパスワードのどちらも「admin」です。

ここで設定した値は，データソースを作成するダイアログボックスの「接続ユーザ ID」に反映されます。

（3） JP1/ 秘文データベース接続サービス名

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続するためのサービス名を設定します。この項目では，JP1/ 秘文 LogManager のデータベース接続のセットアップで設定するデータソース名を指定します。

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続する場合，この項目は必ず設定してください。

● 指定できる値

1 ～ 63 バイトの半角英数字および記号です。ただし，「!」，「(」，「)」，「*」，「,」，「;」，「=」，「?」，「@」，「[」，「]」，「{」，「}」および半角スペースは指定できません。デフォルトは，「HIBUN_DB_SERVICE」です。

10.2.6　インベントリ情報の引き当て方法の設定

インベントリ情報を，「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込んで管理するためには，JP1/NETM/DM でのクライアントと，「Asset Information Manager Limited」での管理対象を一致させて，同一の機器の情報が別の機器の情報として登録されてしまうなどの，誤登録を避ける必要があります。

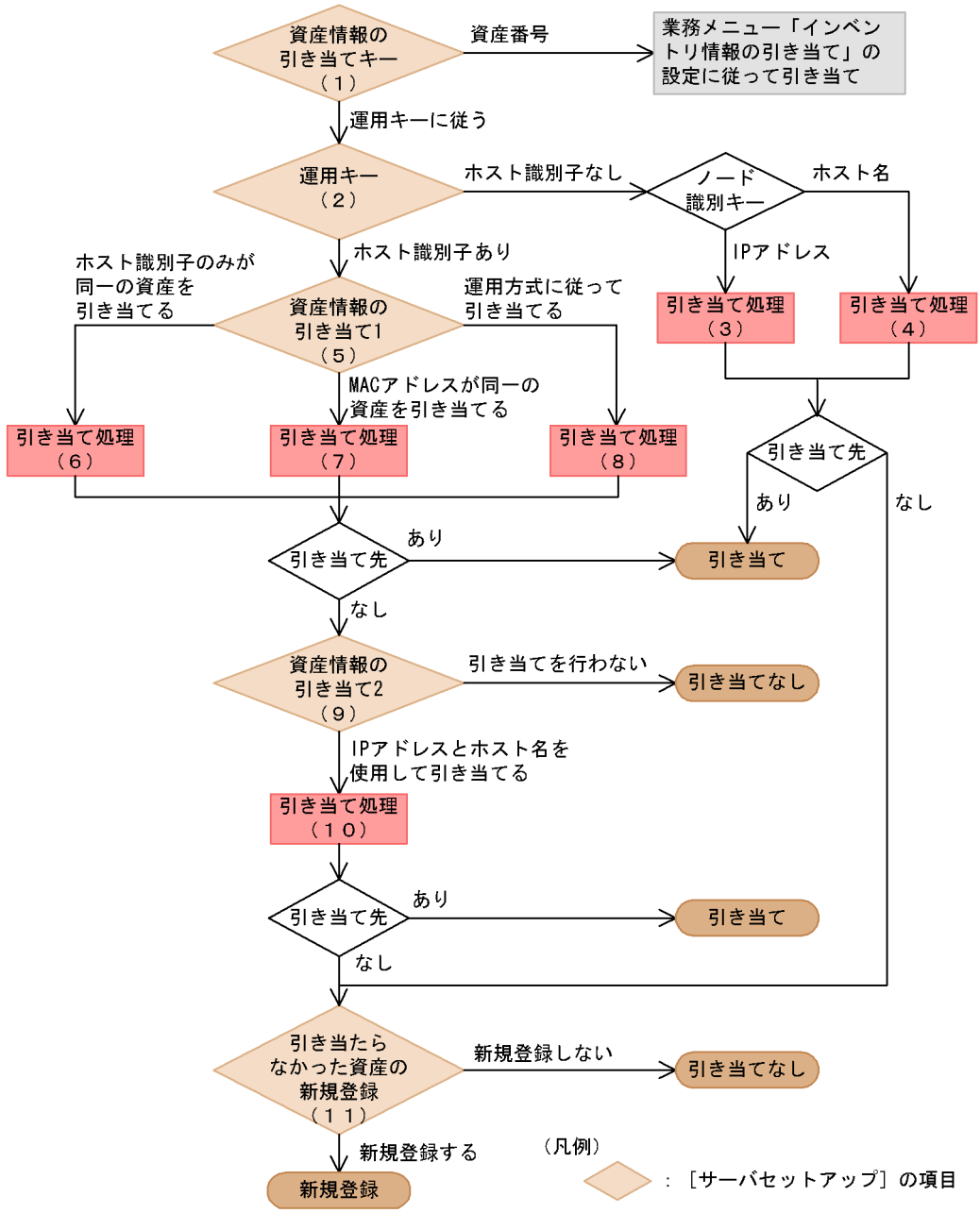
JP1/NETM/DM で収集した情報を，正確に「Asset Information Manager Limited」の資産情報に引き当てるために，インベントリ情報および「Asset Information Manager Limited」の資産情報のキーとなる情報を設定します。

インベントリ情報の「Asset Information Manager Limited」の資産情報への引き当て方法は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで設定します。設定する項目については，「10.2.4　JP1/NETM/DM 連携の設定」を参照してください。

ここでは，［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定に従って，どのようにインベントリ情報が登録されるかについて，詳しく説明します。

［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定と引き当ての流れを次の図に示します。

図 10-4　［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定と引き当ての流れ



図中の (1) ～ (11) の数字は，これ以降の説明の見出しと対応しています。

注意事項

- ［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定「ダイヤルアップ接続の MAC アドレス」で，「引き当て情報にしない」を指定している場合，ダイヤルアップ接続の機器は MAC アドレスで引き当てられません。
- 引き当て先となる資産情報の機器種別が「システム装置」（「機器種別」のコードが 100 ～ 199）ではない場合，資産が新規に登録されます。

(1)「資産情報の引き当てキー」の種類

インベントリ情報の「Asset Information Manager Limited」の資産情報への引き当て方法は，JP1/NETM/DM の運用キーを使用する方法と，業務メニュー「インベントリ情報の引き当て」で設定した資産番号への引き当て項目を使用する方法があります。

● 業務メニュー「インベントリ情報の引き当て」で設定した資産番号を使用する場合
業務メニュー「インベントリ情報の引き当て」での，資産番号への引き当ての設定に従います。

● 運用キーを使用する場合
ユーザインベントリ情報で資産番号を管理していない場合は，運用キーを使用して，「Asset Information Manager Limited」の資産情報に引き当てます。この場合は JP1/NETM/DM での運用キーによって引き当て方法が異なります。

(2) 運用キーを使用する場合

ホスト識別子とは，JP1/NETM/DM システム内で一意な値で，各機器を識別するキー情報です。ホスト識別子は JP1/NETM/DM Client のインストール時に生成され，JP1/NETM/DM サーバに自動的に通知されます。したがって，ホスト識別子は，ノード識別キーに比べて，ネットワーク構成の変化による影響を受けません。

JP1/NETM/DM の設定でホスト識別子ありの運用にしている場合は，このホスト識別子を使用して引き当てます。「ホスト識別子あり」を選択していない場合は，ノード識別キーを使用して引き当てます。

ノード識別キーには，ホスト名または IP アドレスが使用できます。どちらで管理するかは JP1/NETM/DM のセットアップ時に選択します。両方を混在して使用することはできません。

(3) 引き当て処理（ノード識別キーが「IP アドレス運用」の場合）

次の順序で引き当てられます。

1. MAC アドレスおよび IP アドレスが同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
2. MAC アドレスが同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。

3. IP アドレスが同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。

登録，更新時には，「Asset Information Manager Limited」の資産情報の「引き当てキー」に IP アドレスが設定されます。

(4) 引き当て処理（ノード識別キーが「ホスト名運用」の場合）

次の順序で引き当てられます。

1. MAC アドレスおよびホスト名が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
2. MAC アドレスが同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
3. ホスト名が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。

登録，更新時には，「Asset Information Manager Limited」の資産情報の「引き当てキー」にホスト名が設定されます。

(5) ホスト識別子で引き当てられなかった場合

ホスト識別子で引き当てられなかった場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定「資産情報の引き当て 1」で指定します。

なお，登録，更新時には，「Asset Information Manager Limited」の資産情報の「引き当てキー」に，ホスト識別子が設定されます。

(6) 引き当て処理（「ホスト識別子のみが同一の資産を引き当てる」を指定した場合）

ホスト識別子と「引き当てキー」の値が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。

(7) 引き当て処理（「MAC アドレスが同一の資産を引き当てる」を指定した場合）

次の順序で引き当てられます。

1. ホスト識別子と「引き当てキー」の値が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
2. 該当する資産情報がない場合，MAC アドレスが同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。

(8) 引き当て処理（「運用方式に従って引き当てる」を指定した場合）

次の順序で引き当てられます。

1. ホスト識別子と「引き当てキー」の値が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
2. MAC アドレス，IP アドレス，ホスト名が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
3. ノード識別子が「ホスト名運用」の場合，MAC アドレスとホスト名が同一の，「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
4. ノード識別子が「IP アドレス運用」の場合，MAC アドレスと IP アドレスが同一の，「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
5. 3. と 4. のどちらの場合でも，該当する資産情報がない場合は，MAC アドレスが同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報に引き当てられます。

(9)「資産情報の引き当て 1」で指定した方法で引き当てられなかった場合

「資産情報の引き当て 1」で指定した方法で引き当てられなかった場合（ホスト識別子または MAC アドレスが同じ資産がなかった場合）は，「資産情報の引き当て 2」での指定に従います。ホスト識別子で引き当てられなかった場合とは，リプレースで機器が異なる場合，または OS を再インストールした場合が該当します。

(10) 引き当て処理（「IP アドレスとホスト名を使用して引き当てる」を指定した場合）

次の順序で引き当てられます。

1. IP アドレスとホスト名が同じ「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
2. ノード識別子が「ホスト名運用」の場合，ホスト名が同一の「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。
   ノード識別子が「IP アドレス運用」の場合，IP アドレスが同一の「Asset Information Manager Limited」の資産情報が引き当てられます。

(11) 引き当たらなかった資産の新規登録

該当する「Asset Information Manager Limited」の資産情報がない場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定「引き当たらなかった資産の新規登録」の指定に従って，登録されるかどうかが決まります。「新規登録する」を指定した場合は，新規に登録されます。「新規登録しない」を指定した場合は，登録されません。

(12) 運用キー別の資産情報の引き当て方法

［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定「資産情報の引き当てキー」で，「運用キーに従う」を指定した場合に，引き当てキーとなる情報が更新されたときの引き当て方法を次の表に示します。

表 10-5　JP1/NETM/DM の運用キー別の引き当て方法

インベントリ情報が 更新される状況 （更新される情報）	ホスト識別子あり	ホスト識別子なし	
		ホスト名	IP アドレス
IP アドレスの変更 （IP アドレス）	ホスト識別子で引き当てる。	MAC アドレスとホスト名で引き当てる。	MAC アドレスで引き当てる。
ホスト名の変更 （ホスト名）	ホスト識別子で引き当てる。	MAC アドレスで引き当てる。	MAC アドレスと IP アドレスで引き当てる。
OS の再インストール （ホスト識別子）	次のどれかで引き当てる。 • MAC アドレス • MAC アドレス，ホスト名および IP アドレス • MAC アドレスおよびホスト名 • MAC アドレスおよび IP アドレス	MAC アドレスとホスト名で引き当てる。	MAC アドレスと IP アドレスで引き当てる。
リプレース （ホスト識別子，MAC アドレス）	次のどれかで引き当てる。※ • ホスト名および IP アドレス • ホスト名 • IP アドレス	ホスト名で引き当てる。	IP アドレスで引き当てる。

注※
「資産情報の引き当て 2」で「IP アドレスとホスト名を使用して引き当てる」を選択している場合の引き当て方法です。

リプレースを例に，［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定方法を説明します。なお，［サーバセットアップ］ダイアログボックスでの設定「資産情報の引き当てキー」で，「運用キーに従う」を指定して，「運用キー」で「ホスト識別子あり」を指定していることを前提とします。

リプレースすると，ホスト識別子と MAC アドレスが異なるため，「資産情報の引き当て 1」では引き当てられません。そのため，「資産情報の引き当て 2」の設定に従って引き当てられます。

リプレースの際は，リプレース後の機器を新規機器とするか，リプレース前の資産と同一の機器とするかによって，次のように指定します。

リプレースした機器を新規資産として登録するには

- 「資産情報の引き当て 2」で「引き当てを行わない」を指定する。
- 「引き当たらなかった資産の新規登録」で「新規登録する」を指定する。

リプレースした機器を前の機器と同じ資産として引き当てるには

- 「資産情報の引き当て 2」で「IP アドレスとホスト名を使用して引き当てる」を指定する。
  リプレース前の機器とホスト名または IP アドレスが一致した場合は，リプレース前の機器の情報と引き当てられます。

注意事項

- 該当する資産が複数存在する場合は，登録日が最新の資産の情報が更新されます。
- PC カードなど移動可能なネットワークカードを複数の機器で共有する場合は，JP1/NETM/DM で「ホスト識別子あり」の運用にしてください。
- JP1/NETM/DM で「ホスト識別子あり」の運用にしている場合，機器の OS をインストールし直すと，「ホスト識別子」が新たに採番されます。そのため，「引き当てキー」による引き当てができなくなります。
  この場合，「資産情報の引き当て 1」および「資産情報の引き当て 2」での設定に従って引き当てられます。
- 引き当てには，ハードウェア資産情報の「MAC アドレス」，「IP アドレス」および「ホスト名」の値が使用されます。
- 引き当てられた「Asset Information Manager Limited」の資産情報の状態が，「廃棄」（「機器状態」のコードが 500 ～ 699）の場合，情報は更新されません。

10.3　Asset Information Manager Limited のデータベースをセットアップする

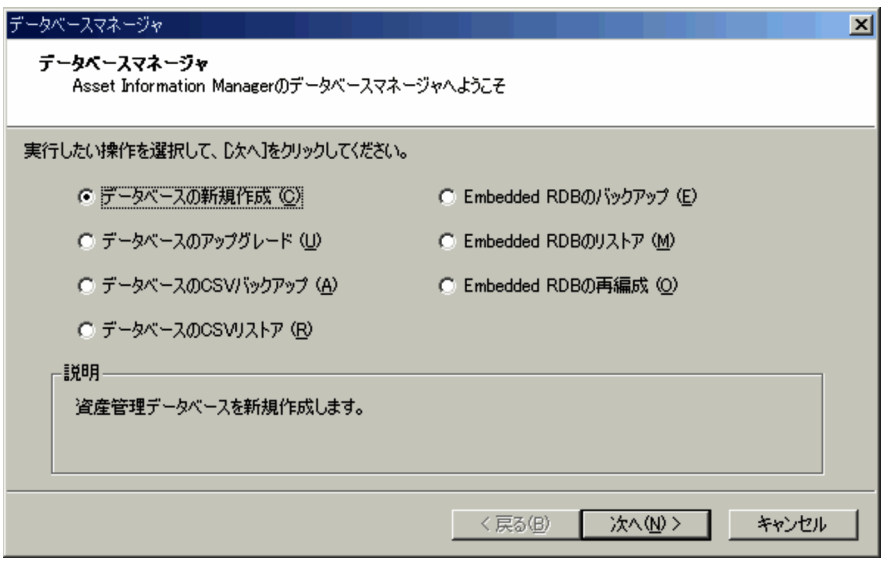
「Asset Information Manager Limited」で使用するデータベースを作成したり，メンテナンスしたりするには，「Asset Information Manager Limited」の**データベースマネージャ**を使用します。

また，JP1/ 秘文の操作ログを参照する場合は，JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続するためのデータソースの作成も必要です。データソースおよびネット・サービスの作成方法については，「10.3.8　データソースまたはネット・サービスを作成する」を参照してください。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャの起動方法を次に示します。

1. **スタートメニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［Asset Information Manager］－［セットアップ］を選択する。**
   「Asset Information Manager Limited」の［セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。
2. **「データベースマネージャ」を選択する。**
   ［データベースマネージャ］ダイアログボックスが表示されます。

図 10-5　［データベースマネージャ］ダイアログボックス



なお，データベースの種類が Microsoft SQL Server または Oracle の場合は，「Embedded RDB のバックアップ」，「Embedded RDB のリストア」，および「Embedded RDB の再編成」の項目は表示されません。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャで実行したい操作を選択します。

データベースの新規作成

「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成します。

データベースのアップグレード

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをアップグレードします。
配布管理システムをバージョンアップした場合に選択します。
なお，データベースのアップグレードは，すでに作成されているデータベースに対して実行します。

データベースの CSV バックアップ

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの情報を CSV 形式ファイルに出力して，データベースのバックアップを実行します。
データベースの定期的なバックアップを取得する場合などに選択します。

データベースの CSV リストア

CSV 形式のバックアップファイルから「Asset Information Manager Limited」のデータベースを復元します。
「データベースの CSV バックアップ」で取得したバックアップを復元する場合に選択します。

Embedded RDB のバックアップ

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップを実行します。
データベースの定期的なバックアップを取得する場合などに選択します。
なお，この項目は，データベースの種類が Embedded RDB の場合に表示されます。

Embedded RDB のリストア

「Embedded RDB のバックアップ」で取得したバックアップファイルから「Asset Information Manager Limited」のデータベースを復元します。
なお，この項目は，データベースの種類が Embedded RDB の場合に表示されます。

Embedded RDB の再編成

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを再編成します。
なお，この項目は，データベースの種類が Embedded RDB の場合に表示されます。

なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャで作成した Microsoft SQL Server および Oracle のデータベースは，「Asset Information Manager Limited」をアンインストールしても削除されません。RDBMS のツールを使用して削除してください。

次に，各項目での操作について説明します。

10.3.1　データベースを新規作成する

「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成します。

データベースを作成する手順は，データベースの種類によって異なります。それぞれについて説明します。

（1）Embedded RDB の場合

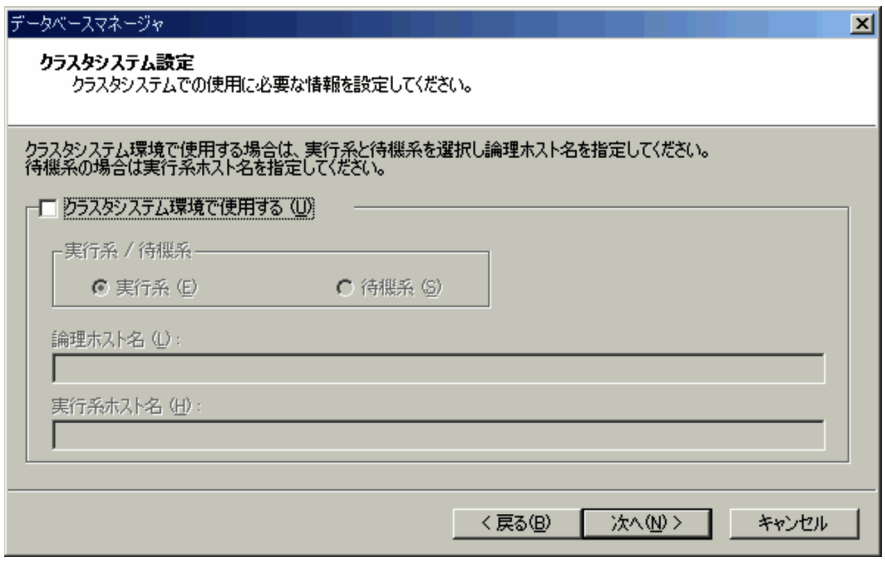
「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用すると，次の処理が実施されます。

- 「Asset Information Manager Limited」のサーバのセットアップ時に指定したサービス名（ODBC データソース名）の作成
- データベースの作成
- データベースの初期化

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成する手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「データベースの新規作成」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［クラスタシステム設定］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，「Asset Information Manager Limited」をクラスタシステムで使用する場合に必要な情報を設定します。クラスタシステムを使用しない場合は，［次へ］ボタンをクリックします。

図 10-6　［クラスタシステム設定］ダイアログボックス



クラスタシステム環境で使用する

「Asset Information Manager Limited」をクラスタシステムで使用する場合は，このチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオフです。このチェックボックスをオンにすると，ほかの項目が活性化して設定できるようになります。

実行系 / 待機系

インストール先のクラスタノード種別を「実行系」または「待機系」から選択します。デフォルトは「実行系」です。

論理ホスト名

クラスタシステムに作成した論理ホスト名を 1 ～ 64 バイトの半角英数字，全角文字，および次に示す記号で指定します。

「%」，「-」，「_」

実行系ホスト名

「実行系 / 待機系」で「待機系」を選択した場合に，クラスタシステムの実行系ホスト名を 1 ～ 64 バイトの半角英数字，全角文字，および次に示す記号で指定します。

「%」，「-」，「_」

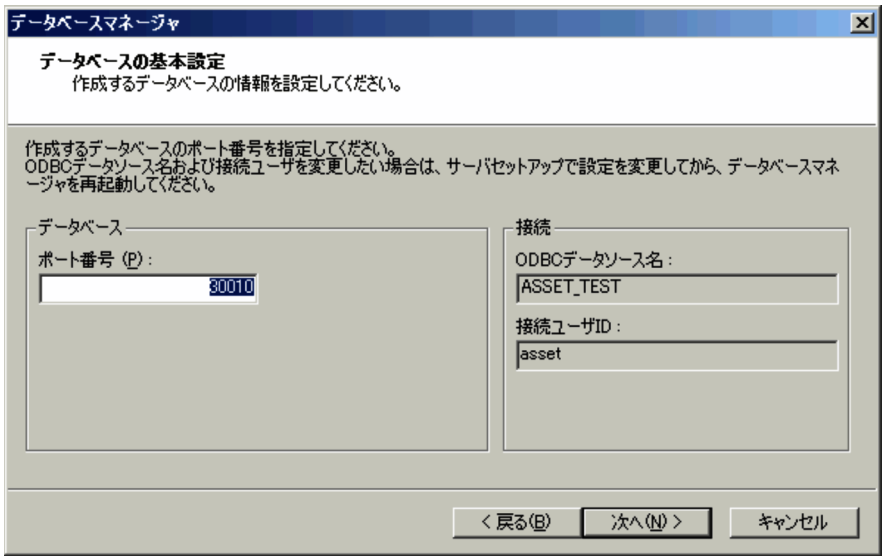
なお，「実行系 / 待機系」で「実行系」を選択した場合，この項目は非活性です。

2. **項目を設定して［次へ］ボタンをクリックする。**

［データベースの基本設定］ダイアログボックスが表示されます。

ここでは，「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースを作成するのに必要な接続情報を設定します。

図 10-7 ［データベースの基本設定］ダイアログボックス（Embedded RDB の場合）



ポート番号

「Asset Information Manager Limited」が Embedded RDB へ接続するためのポート番号を指定します。未使用のポート番号を指定してください。指定できる値は 5001 ～ 65535 です。デフォルトは 30010 です。

ODBC データソース名

ODBC データソース名が表示されます。

ODBC データソース名を変更したい場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「サービス名」の設定を変更して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを再起動してください。

接続ユーザ ID

「Asset Information Manager Limited」のデータベースにログオンする接続ユーザ ID が表示されます。

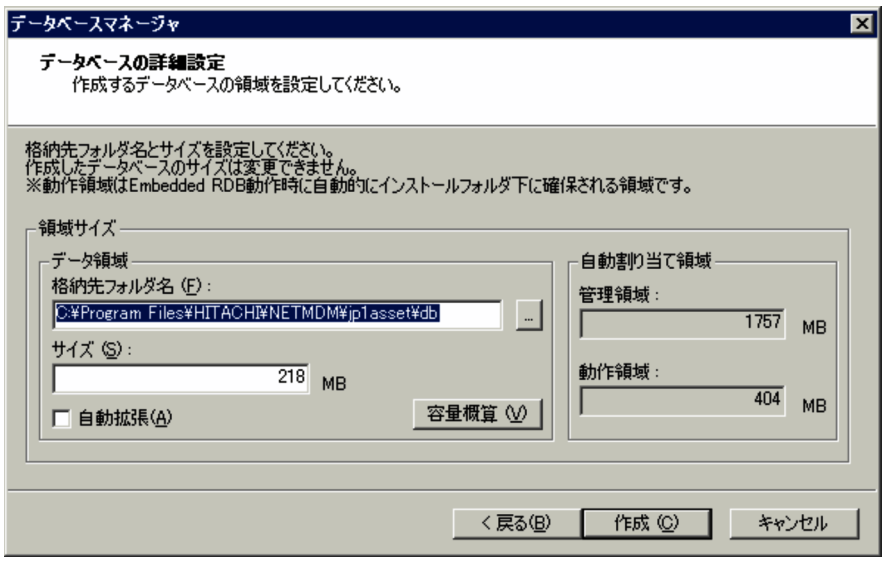
接続ユーザ ID を変更したい場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「ログイン ID」の設定を変更して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを再起動してください。

3. **項目を設定して［次へ］ボタンをクリックする。**

［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

ここでは，「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースを作成するのに必要な領域の情報を設定します。

図 10-8　［データベースの詳細設定］ダイアログボックス（Embedded RDB の場合）



格納先フォルダ名

「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースの格納先フォルダ名を指定します。デフォルトのデータベース格納先フォルダ名を変更する場合

は，［...］ボタンをクリックして，データベース格納先ディレクトリを設定します。デフォルトは，「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥jp1asset¥db」です。
データベース領域のパスは，1 ～ 125 バイトの半角英数字，半角スペース，および次に示す記号で指定してください。
「_」，「¥」，「:」，「.」，「(」，「)」

サイズ

「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースのサイズを指定します。単位はメガバイトです。30 以上を指定してください。デフォルトは容量概算に設定された値が指定されています。
なお，作成したデータベースのサイズは変更できません。サイズを変更するには，領域を削除してから再作成する必要があります。

［容量概算］ボタン

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの容量概算を実施します。容量概算については，「(4)　データベースの容量概算」を参照してください。

「自動拡張」

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのサイズを自動拡張させたい場合に，チェックボックスをチェックします。デフォルトではチェックされていません。このチェックボックスにチェックした場合，「サイズ」は 100 ～ 65535 の整数で指定してください。

管理領域

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの管理領域に必要なサイズが表示されます。
管理領域は，「サイズ」で設定した値によって自動的に割り当てられ，「格納先フォルダ名」配下に自動的に作成されます。

動作領域

Embedded RDB の動作時に必要なサイズが表示されます。
動作領域は，Embedded RDB の動作時に必要な値が自動的に割り当てられ，JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥jp1asset 配下に自動的に作成されます。

4. **項目を設定して［作成］ボタンをクリックする。**

「Asset Information Manager Limited」のデータベースが作成されます。
なお，Embedded RDB のサイズを変更するには，必要に応じて CSV 形式ファイルでバックアップを取得したあとで，データベースを再作成します。

（2） Microsoft SQL Server の場合

「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用すると，次の処理が実行されます。

- 「Asset Information Manager Limited」のサーバのセットアップ時に指定したサービ

ス名（ODBC データソース名）の作成
- データベースの作成
- データベースアクセス用ユーザの作成
- データベースの初期化

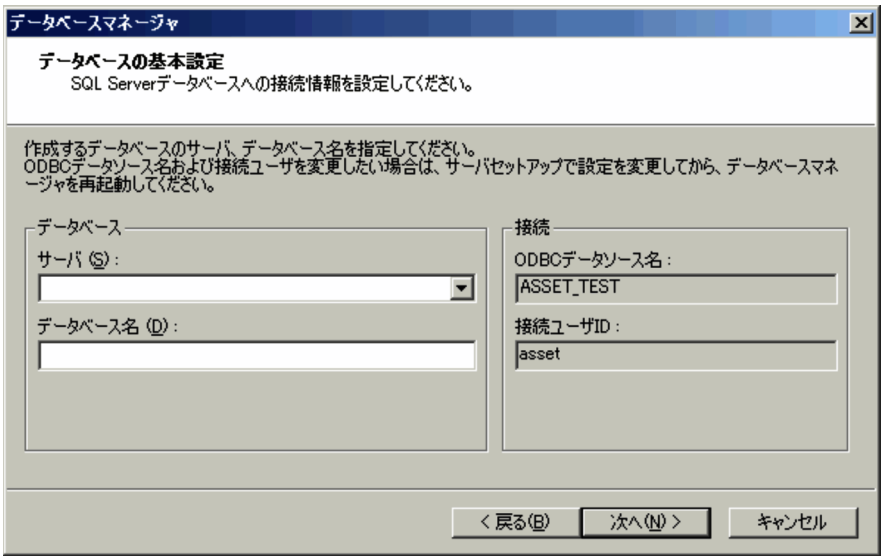
注意事項

［データベースマネージャ］ダイアログボックスから「Asset Information Manager Limited」のデータベースを作成する場合，データベースは Microsoft SQL Server のカスタムインストール時（Microsoft SQL Server 2005 の場合はインストール時）に設定した照合順序で作成されます。
そのため，カスタムインストール時に設定した照合順序とは別の照合順序でデータベースを作成する場合は，手動でデータベースを作成する必要があります。

Microsoft SQL Server 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成する手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「データベースの新規作成」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの基本設定］ダイアログボックスが表示されます。
ここでは，「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースを作成するのに必要な接続情報を設定します。

図 10-9　［データベースの基本設定］ダイアログボックス（Microsoft SQL Server の場合）



サーバ

「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースのサーバ名および IP アドレスを指定します。デフォルト値は空白です。
指定できる値は，1 ～ 63 バイトの文字列および次に示す記号です。

「%」，「~」，「-」，「_」，「.」，「/」，「¥」

データベース名

「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースの名称を指定します。デフォルト値は空白です。

指定できる値は，1 ～ 128 バイトの半角英数字および記号です。ただし，次に示す記号およびスペースは使用できません。

「¥」，「/」，「*」，「"」，「'」，「|」，「.」，「<」，「>」，「?」

ODBC データソース名

ODBC データソース名が表示されます。

ODBC データソース名を変更したい場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「サービス名」の設定を変更して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを再起動してください。

接続ユーザ ID

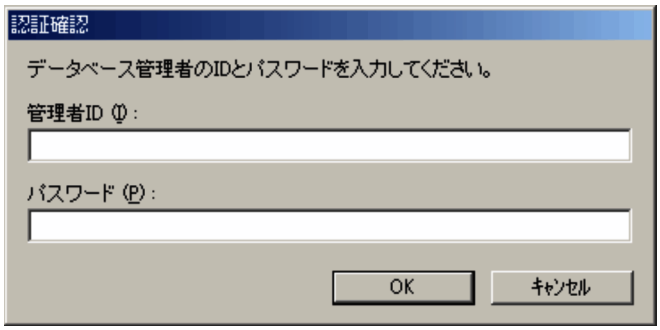
「Asset Information Manager Limited」のデータベースにログオンする接続ユーザ ID が表示されます。

接続ユーザ ID を変更したい場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「ログイン ID」の設定を変更して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを再起動してください。

2. **項目を設定して［次へ］ボタンをクリックする。**

［認証確認］ダイアログボックスが表示されます。

図 10-10 ［認証確認］ダイアログボックス（Microsoft SQL Server の場合）



管理者 ID

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの管理者 ID を指定します。

デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 30 バイトの半角英数字および「¥」を除く記号です。

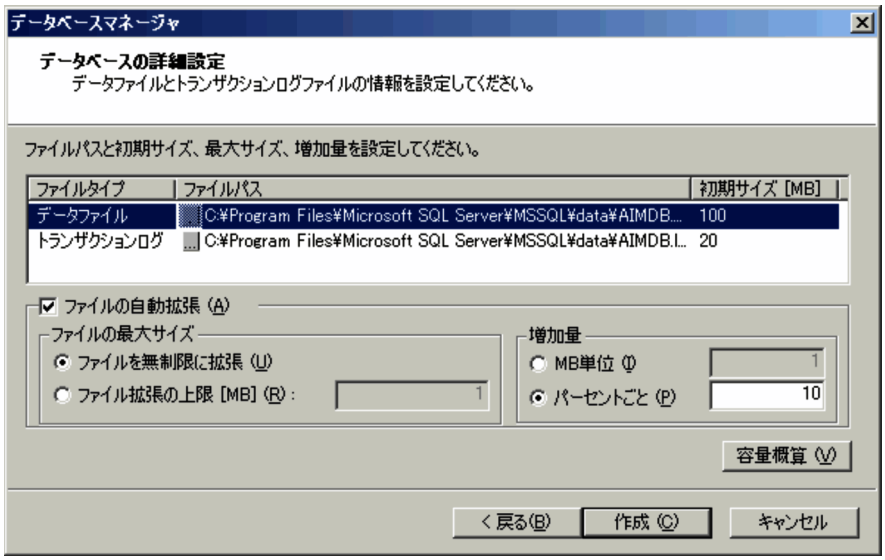
パスワード

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの管理者 ID に対するパスワードを指定します。
デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 30 バイトの半角英数字および記号です。

3. **管理者 ID とパスワードを指定して，［OK］ボタンをクリックする。**

［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。
ここでは，「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースを作成するのに必要なデータファイルとトランザクションログファイルの情報を設定します。

図 10-11　［データベースの詳細設定］ダイアログボックス（Microsoft SQL Server の場合）



ファイルタイプ

「データファイル」と「トランザクションログ」が表示されます。

ファイルパス

データファイルとトランザクションログファイルのパスを絶対パスで指定します。デフォルトのファイルパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，ファイルパスを指定します。ファイルパスは，1 ～ 255 バイトの半角英数字，半角スペースで指定してください。ただし，次に示す記号は使用できません。
「"」，「|」，「*」，「<」，「>」，「?」，「&」，「^」，「/」
デフォルトでは，接続先 master データベースのデータファイル格納フォルダ内のデータファイルとトランザクションログファイルのパスが指定されています。データファイル名は「AIMDB.mdf」，トランザクションログファイル名は「AIMDB.ldf」です。

初期サイズ

データファイルとトランザクションログファイルの初期サイズを指定します。単

位はメガバイトです。デフォルトでは，データファイルは容量概算で設定された値が，トランザクションログファイルは 20 メガバイトが指定されています。

ファイルの自動拡張

データファイルとトランザクションログファイルのサイズを拡張する場合は，領域リストからファイルの種類を選択して，このチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェックボックスがオンです。このチェックボックスをオンにすると，ほかの項目が活性化して設定できるようになります。

ファイルの最大サイズ

ファイルサイズの上限値の設定を，次のどちらかから選択します。

・「ファイルを無制限に拡張」

・「ファイル拡張の上限」

デフォルトは「ファイルを無制限に拡張」です。

「ファイル拡張の上限」を選択した場合は，ファイルサイズの上限値を指定します。単位はメガバイトです。デフォルトは 1 です。

増加量

ファイルサイズの増加量の単位を選択して，増加量を指定します。デフォルトは「パーセントごと」の 10% です。

・「MB 単位」

メガバイト単位で増加量を設定したい場合に選択します。1 以上の整数を入力領域に指定してください。

・「パーセントごと」

パーセントごとに増加量を設定したい場合に選択します。1 ～ 100 の整数を指定してください。「パーセントごと」のデフォルトは 10 です。

［容量概算］ボタン

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの容量概算を実施します。容量概算については，「(4)　データベースの容量概算」を参照してください。

4. **項目を設定して［作成］ボタンをクリックする。**

「Asset Information Manager Limited」のデータベースが作成されます。

(3) Oracle の場合

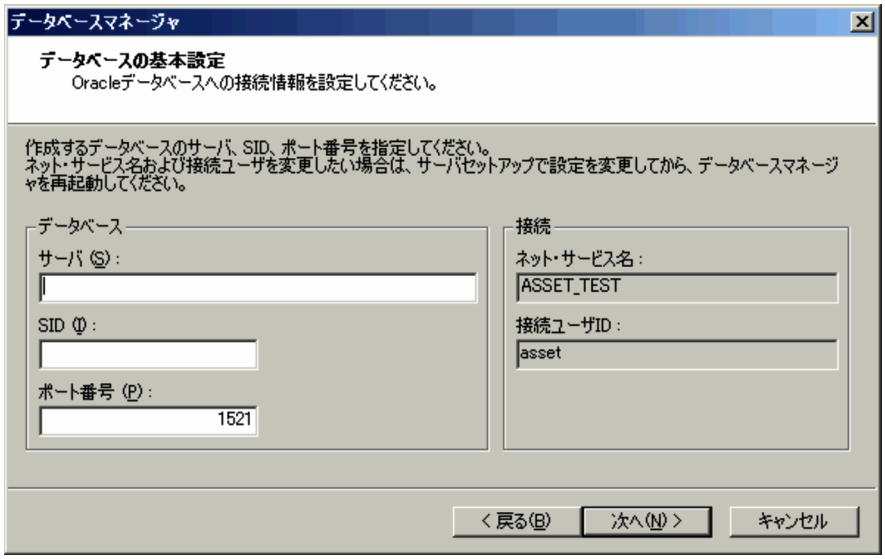
「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用すると，次の処理が実施されます。

- 「Asset Information Manager Limited」のサーバのセットアップ時に指定したサービス名（ネット・サービス名）の作成
- データベースの作成
- データベースアクセス用ユーザの作成
- データベースの初期化

Oracle 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成する手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「データベースの新規作成」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースの基本設定］ダイアログボックスが表示されます。
ここでは，「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースを作成するのに必要な接続情報を設定します。

図 10-12　［データベースの基本設定］ダイアログボックス（Oracle の場合）



サーバ

「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースのサーバ名および IP アドレスを指定します。デフォルト値は空白です。
指定できる値は，1 ～ 63 バイトの文字列および次に示す記号です。
「%」，「~」，「-」，「_」，「.」，「/」，「¥」

SID

Oracle 8i の場合は，接続するデータベースの SID を指定します。Oracle 9i の場合は，接続するデータベースのサービス名を指定してください。デフォルト値は空白です。
指定できる値は，1 ～ 8 バイトの半角英数字です。

ポート番号

「Asset Information Manager Limited」が Oracle へ接続するためのポート番号を指定します。指定できる値は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 1521 です。

ネット・サービス名

ネット・サービス名が表示されます。
ネット・サービス名を変更したい場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「サービス名」の設定を変更して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを再起動してくださ

い。

接続ユーザ ID

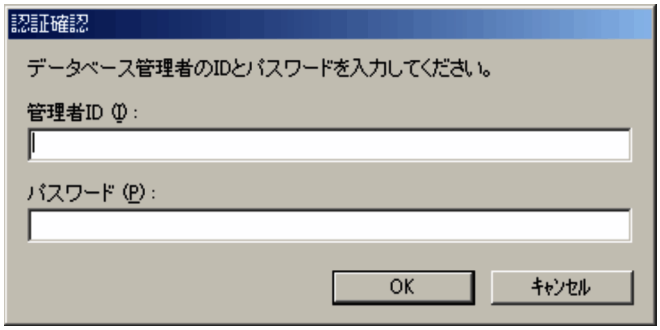
「Asset Information Manager Limited」のデータベースにログオンする接続ユーザ ID が表示されます。

接続ユーザ ID を変更したい場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「ログイン ID」の設定を変更して，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを再起動してください。

2. **項目を設定して［次へ］ボタンをクリックする。**

［認証確認］ダイアログボックスが表示されます。

図 10-13 ［認証確認］ダイアログボックス（Oracle の場合）



管理者 ID

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの管理者 ID を指定します。

デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 30 バイトの半角英数字および「¥」を除く記号です。

パスワード

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの管理者 ID に対するパスワードを指定します。

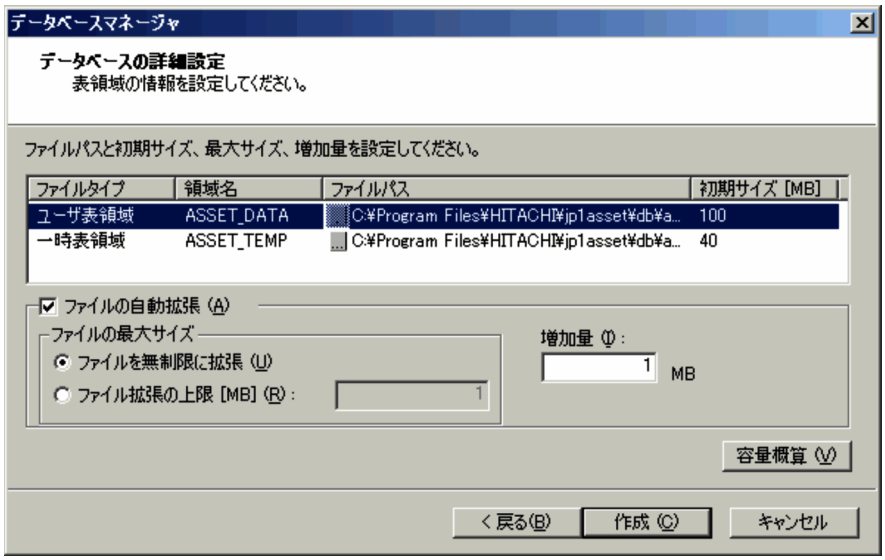
デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 30 バイトの半角英数字および記号です。

3. **管理者 ID とパスワードを指定して，［OK］ボタンをクリックする。**

［データベースの詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

ここでは，「Asset Information Manager Limited」が使用するデータベースを作成するのに必要な表領域の情報を設定します。

図 10-14　［データベースの詳細設定］ダイアログボックス（Oracle の場合）



ファイルタイプ

「ユーザ表領域」と「一時表領域」が表示されます。

領域名

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの領域名を 1 ～ 30 バイトで指定します。ただし「"」は使用できません。Oracle の SQL リファレンスに記載されているスキーマ・オブジェクトのネーミング規則に従って指定してください。

ファイルパス

ユーザ表領域と一時表領域のパスを絶対パスで指定します。デフォルトのファイルパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，ファイルパスを指定します。ファイルパスは，1 ～ 255 バイトの半角英数字，半角スペースで指定してください。ただし，次に示す記号は使用できません。

「"」，「|」，「*」，「<」，「>」，「?」，「&」，「^」，「/」

デフォルトでは，ユーザ表領域は「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥jp1asset¥db¥asset_db.dbf」が，一時表領域は「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥jp1asset¥db¥asset_temp.dbf」が指定されています。

初期サイズ

ユーザ表領域と一時表領域の初期サイズを指定します。1 以上の整数を指定してください。単位はメガバイトです。デフォルトでは，容量概算で設定された値が指定されています。

ファイルの自動拡張

ユーザ表領域と一時表領域のサイズを拡張する場合は，領域リストからファイルの種類を選択して，このチェックボックスをオンにします。デフォルトはチェッ

クボックスがオンです。このチェックボックスをオンにすると，ほかの項目が活性化して設定できるようになります。

ファイルの最大サイズ

ファイルサイズの上限値の設定を，次のどちらかから選択します。

・「ファイルを無制限に拡張」

・「ファイル拡張の上限」

デフォルトは「ファイルを無制限に拡張」です。

「ファイル拡張の上限」を選択した場合は，ファイルサイズの上限値を指定します。単位はメガバイトです。デフォルトは 1 です。

増加量

ファイルサイズの増加量を指定します。1 以上の整数を指定してください。単位はメガバイトです。デフォルトは 1 です。

［容量概算］ボタン

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの容量概算を実施します。容量概算については，「(4)　データベースの容量概算」を参照してください。

4. **項目を設定して［作成］ボタンをクリックする。**

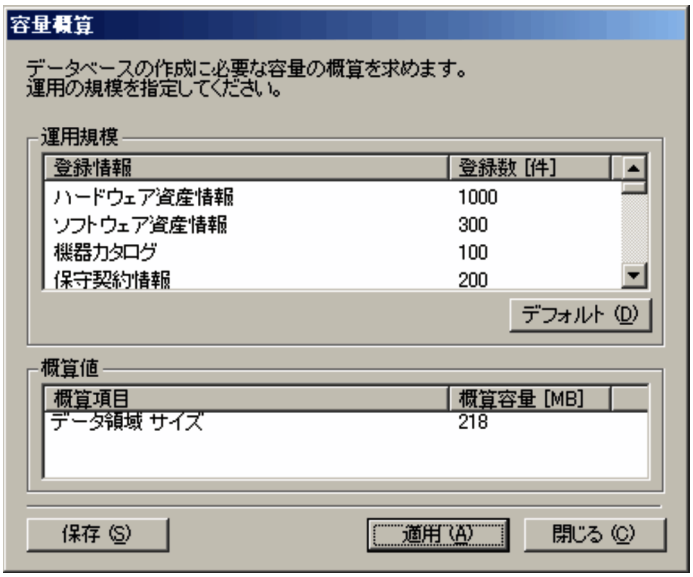
「Asset Information Manager Limited」のデータベースが作成されます。

(4) データベースの容量概算

「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャの［データベースの詳細設定］ダイアログボックスの［容量概算］ボタンをクリックすると，［容量概算］ダイアログボックスが表示されます。

ここでは，「Asset Information Manager Limited」のデータベース容量の概算値の算出に必要な情報を設定します。

図 10-15　［容量概算］ダイアログボックス



運用規模

使用する情報ごとの登録数を指定します。

概算値

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの容量の概算値が表示されます。

［デフォルト］ボタン

運用規模の各登録数をデフォルトに戻します。

［保存］ボタン

「運用規模」で指定した登録数をテキスト形式のファイルに保存します。

［適用］ボタン

概算値が「Asset Information Manager Limited」のデータベースの領域を設定するダイアログボックスに反映されます。

10.3.2　データベースをアップグレードする

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをアップグレードします。配布管理システムをバージョンアップした場合に選択します。

注意事項

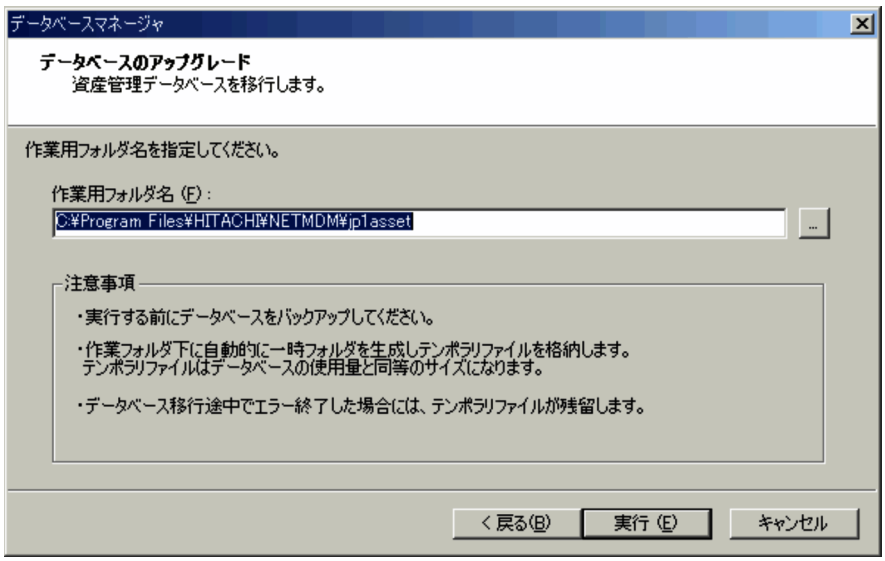
- 「Asset Information Manager Limited」のデータベースをアップグレードする前に，データベースをバックアップしてください。
- 「Asset Information Manager Limited」のアップグレードを実行すると，作業用フォルダにデータベースの内容が格納されます。そのため，十分な空き容量のあ

るドライブのフォルダを指定してください。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをアップグレードする手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「データベースのアップグレード」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データベースのアップグレード］ダイアログボックスが表示されます。
ここでは，「Asset Information Manager Limited」のデータベースをアップグレードするために必要な作業用フォルダ名の情報を設定します。

図 10-16 ［データベースのアップグレード］ダイアログボックス



作業用フォルダ名

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをアップデートするための作業用フォルダ名を絶対パスで指定します。
デフォルトは，「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ¥jp1asset」です。デフォルトのファイルパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，ファイルパスを設定します。
ファイルパスを直接指定する場合，1 ～ 255 バイトの半角英数字，半角スペースで指定してください。ただし，次に示す記号は指定できません。
「/」，「*」，「?」，「"」，「<」，「>」，「|」

2. **項目を設定して［実行］ボタンをクリックする。**
「Asset Information Manager Limited」のデータベースがアップグレードされます。
アップグレードが完了すると，アップグレード時の一時ファイルは自動的に削除されます。

10.3.3　データベースを CSV 形式ファイルでバックアップする

「Asset Information Manager Limited」のデータベースを CSV 形式ファイルでバックアップするには，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用する方法と jamdbexport.bat を使用する方法があります。

データベースに障害が発生したときに，データベースを回復するために，定期的にバックアップすることをお勧めします。

また，障害回復のためのバックアップのほかに，次の目的にも利用できます。

- OS のバージョンアップ時や PC リプレース時などに，このバックアップファイルを「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用してリストアすると，データベースを移行できます。
- Embedded RDB の場合にデータベースの容量を拡張するには，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用してデータベースを再作成したあとに，このバックアップファイルをリストアします。

なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースをバックアップするときは，次に示す順にサービスを停止してください。

1. World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing
2. Asset Information Synchronous Service，「Asset Information Manager Limited」のコマンドおよびタスク
3. JP1/NETM/Client Security Control - Manager（JP1/NETM/CSC と連携している場合）

また，データベースマネージャを操作したあとに「Asset Information Manager Limited」を使用するときは，停止時と逆の順でサービスを起動してください。

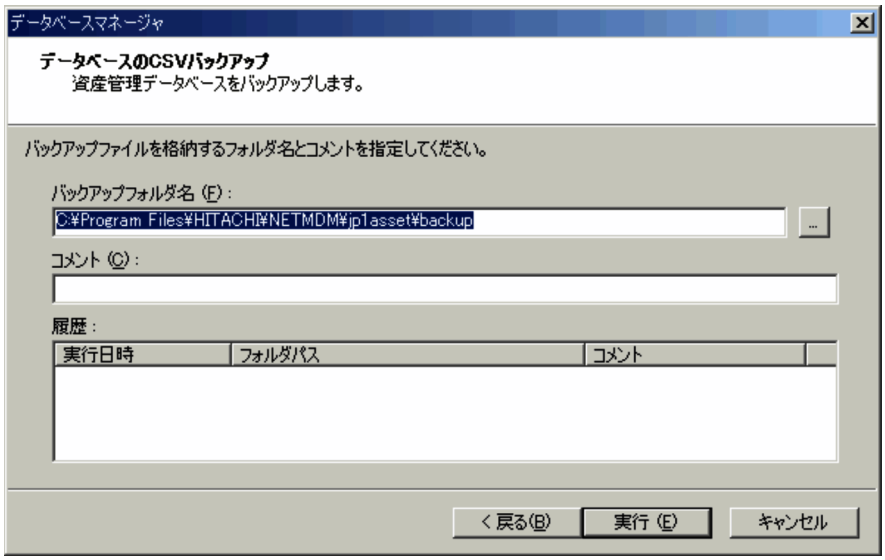
次に，「Asset Information Manager Limited」のデータベースを CSV 形式ファイルでバックアップする方法を説明します。

（1）データベースを CSV 形式ファイルでバックアップする手順

「Asset Information Manager Limited」のデータベースを CSV 形式ファイルでバックアップする手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「データベースの CSV バックアップ」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの CSV バックアップ］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルを格納するフォルダ名やコメントなどの情報を設定します。

図 10-17 ［データベースの CSV バックアップ］ダイアログボックス



バックアップフォルダ名

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルを格納するフォルダ名を絶対パスで指定します。

デフォルトは，「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ¥jp1asset¥backup」です。デフォルトのフォルダパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，フォルダパスを設定します。

フォルダパスを直接指定する場合，1 ～ 223 バイトの半角英数字，半角スペースで指定してください。ただし，次に示す記号は指定できません。

「"」，「|」，「*」，「<」，「>」，「?」，「&」，「^」，「/」

コメント

バックアップの履歴情報としてコメントを指定します。

この項目は省略できます。デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 64 バイトの文字です。

履歴

バックアップの履歴が日付の降順に 10 件まで表示されます。

履歴リストの項目を選択すると，「バックアップフォルダ名」および「コメント」に情報が反映されます。

2. **項目を設定して［実行］ボタンをクリックする。**

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップが実行され，CSV 形式のバックアップファイルが生成されます。

(2) コマンドを使用した CSV 形式ファイルでのデータベースのバックアップ

［データベースマネージャ］ダイアログボックスからのバックアップと同等のバックアップを，「Asset Information Manager Limited」のサーバ上のコマンドラインから実行する jamdbexport.bat の機能，形式，オプションおよびコマンド実行時の注意事項について説明します。

jamdbexport.bat は次のフォルダに格納されています。

「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥exe

(a) 機能

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップを取得します。「Asset Information Manager Limited」のデータベースのデータをすべて CSV 形式ファイルで出力します。jamdbexport.bat を実行すると，バックアップ用フォルダに「Asset Information Manager Limited」のデータベースの内容が格納されます。

(b) 形式

```
jamdbexport.bat ［バックアップ用フォルダのパス］ ［-rp］
```

(c) オプション

バックアップ用フォルダのパス

バックアップ用フォルダをフルパスで指定します。バックアップ用フォルダに指定するドライブには，十分な空き容量を確保してください。パスを指定する際は，次のことに注意してください。

- フォルダ名にスペースを含めないでください。
- フォルダ名を "（ダブルクォーテーション）で囲まないでください。
- 既存のフォルダ名を指定しないでください。

パスを省略した場合，「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥backup が設定されます。

-rp

このオプションを指定すると，バックアップの実行前にキー応答を待たないで実行を開始します。
このオプションを指定しないとキー応答待ちになります。このとき，実行を中止したい場合は，［Ctrl］+［C］を押してください。

(d) コマンド実行時の注意事項

- オプション「-rp」を指定した場合，処理が終了するとコマンドプロンプトが閉じてしまうため，エラーが発生したかどうかを確認できません。
- jamdbexport.bat を実行して取得した CSV 形式ファイルのファイル名および内容は変更しないでください。「Asset Information Manager Limited」のデータベースをリストアできなくなります。

10.3.4 データベースを CSV 形式ファイルからリストアする

「Asset Information Manager Limited」のデータベースの CSV 形式のバックアップファイルを使用して，データベースのリストアを実行します。

OS のバージョンアップ時や PC リプレース時などに「Asset Information Manager Limited」のデータベースを移行することもできます。

リストアする前に，「Asset Information Manager Limited」のデータベースが作成されていることを確認してください。「Asset Information Manager Limited」のデータベースが作成されていない場合は，［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成したあとで，リストアを実行してください。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースを CSV 形式ファイルからリストアすると，次の処理が実施されます。

- データベースの初期化
- バックアップデータ（データベース）の復元

なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースをリストアするときは，次に示す順にサービスを停止してください。

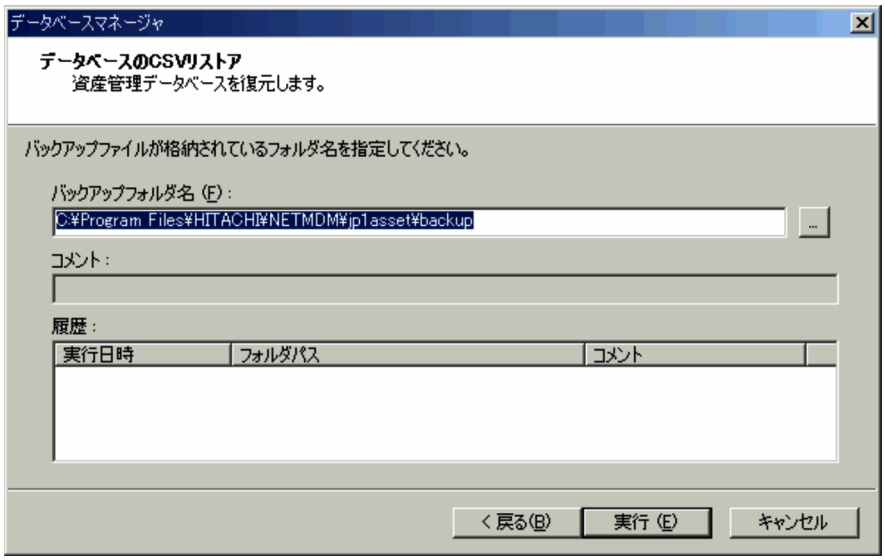
1. World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing
2. Asset Information Synchronous Service，「Asset Information Manager Limited」のコマンドおよびタスク
3. JP1/NETM/Client Security Control - Manager（JP1/NETM/CSC と連携している場合）

また，データベースマネージャを操作したあとに「Asset Information Manager Limited」を使用するときは，停止時と逆の順でサービスを起動してください。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをリストアする手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「データベースの CSV リストア」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［データベースの CSV リストア］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルが格納されているフォルダ名の情報を設定します。

図 10-18　［データベースの CSV リストア］ダイアログボックス



バックアップフォルダ名

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルが格納されているフォルダ名を絶対パスで指定します。

デフォルトは，「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ¥jp1asset¥backup」です。デフォルトのフォルダパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，フォルダパスを設定します。

フォルダパスを直接指定する場合，1 ～ 255 バイトの半角英数字，半角スペースで指定してください。ただし，次に示す記号は指定できません。

「/」，「*」，「?」，「"」，「<」，「>」，「|」，「&」，「^」

コメント

バックアップ時に履歴情報として指定したコメントが表示されます。

履歴

バックアップの履歴が日付の降順に 10 件まで表示されます。

履歴リストの項目を選択すると，「バックアップフォルダ名」および「コメント」に情報が反映されます。

2. **項目を設定して［実行］ボタンをクリックする。**

バックアップファイルのリストアが実行され，「Asset Information Manager Limited」のデータベースが復元されます。

10.3.5　Embedded RDB 環境でデータベースをバックアップする

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースをバッ

クアップするには，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用する方法と jamemb_backup.bat を使用する方法があります。

データベースに障害が発生したときに，データベースを回復するために，定期的にバックアップすることをお勧めします。

なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースをバックアップするときは，次に示す順にサービスを停止してください。

1. World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing
2. Asset Information Synchronous Service，「Asset Information Manager Limited」のコマンドおよびタスク
3. JP1/NETM/Client Security Control - Manager（JP1/NETM/CSC と連携している場合）

また，データベースマネージャを操作したあとに「Asset Information Manager Limited」を使用するときは，停止時と逆の順でサービスを起動してください。

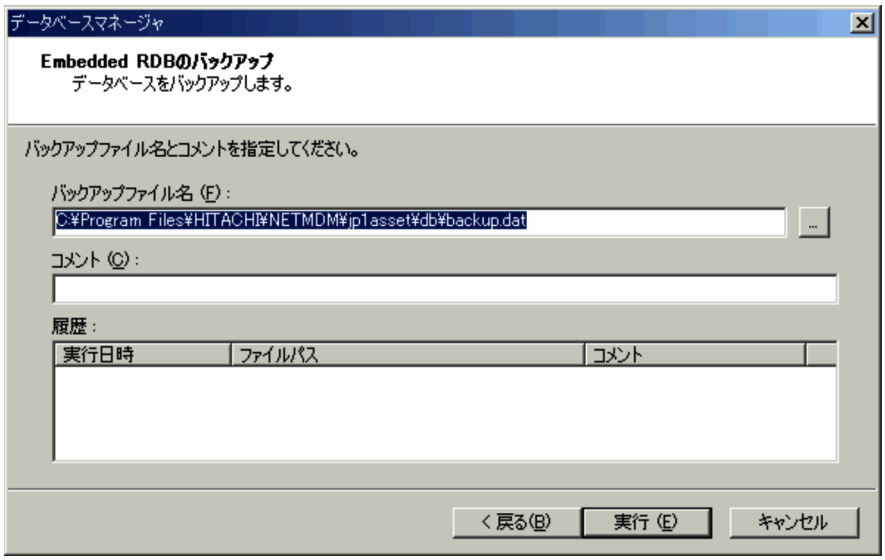
次に，Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースをバックアップする方法を説明します。

（1） Embedded RDB 環境でデータベースをバックアップする手順

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースをバックアップする手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「Embedded RDB のバックアップ」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［Embedded RDB のバックアップ］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイル名やコメントなどの情報を設定します。

図 10-19　［Embedded RDB のバックアップ］ダイアログボックス



バックアップファイル名

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイル名を絶対パスで指定します。

デフォルトは，「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ¥jp1asset¥db¥backup.dat」です。デフォルトのファイルパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，ファイルパスを設定します。

ファイルパスを直接指定する場合，1 ～ 255 バイトの半角英数字，半角スペースで指定してください。ただし，次に示す記号は指定できません。

「"」，「|」，「*」，「<」，「>」，「?」，「&」，「^」，「/」

コメント

バックアップの履歴情報としてコメントを指定します。

この項目は省略できます。デフォルトの設定はありません。指定できる値は，1 ～ 64 バイトの文字です。

履歴

バックアップの履歴が日付の降順に 10 件まで表示されます。

履歴リストの項目を選択すると，「バックアップファイル名」および「コメント」に情報が反映されます。

2. **項目を設定して［実行］ボタンをクリックする。**

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップが実行され，バックアップファイルが生成されます。

注意事項

ここで作成したバックアップファイルをリストアするには，「Asset Information Manager Limited」のデータベースを作成したときの環境（ポート番号やデータ

ベース格納先など）が同一であることが必要です。
なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースを作成したときの環境を変更してバックアップファイルをリストアしたい場合は，「データベースの CSV バックアップ」を使用してバックアップを取得してください。「データベースの CSV バックアップ」からのデータのバックアップ方法については，「10.3.3 データベースを CSV 形式ファイルでバックアップする」を参照してください。

(2) コマンドを使用した Embedded RDB 環境でのデータベースのバックアップ

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルを取得する jamemb_backup.bat の機能，形式，オプション，戻り値，コマンド実行時の注意事項および実行例について説明します。なお，jamemb_backup.bat は，Embedded RDB だけで有効です。

jamemb_backup.bat は次のフォルダに格納されています。

「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥exe

(a) 機能

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをバックアップします。

(b) 形式

```
jamemb_backup.bat -b バックアップファイルのパス -o 結果ファイルのパス [-y]
```

(c) オプション

-b バックアップファイルのパス

バックアップを取得するファイルをフルパスで指定します。このオプションは必ず指定してください。

-o 結果ファイルのパス

実行結果を出力するファイルをフルパスで指定します。このオプションは必ず指定してください。

-y

このオプションを指定すると，バックアップの実行前にキー応答を待たないで実行を開始します。
このオプションを指定しないとキー応答待ちになります。このとき，実行を中止したい場合は，［Ctrl］+［C］を押してください。

(d) 戻り値

次の戻り値を返します。

戻り値	内容
0	正常終了。結果ファイルを参照してバックアップの詳細を確認できます。
11	オプションの書式に誤りがあります。
101 以上	そのほかのエラーで終了しました。

(e) コマンド実行時の注意事項

Administrators 権限を持つユーザで jamemb_backup.bat を実行してください。

(f) 実行例

```
jamemb_backup.bat -b C:¥temp¥backup¥Backup.dat -o
C:¥temp¥backup¥kekka.log -y
```

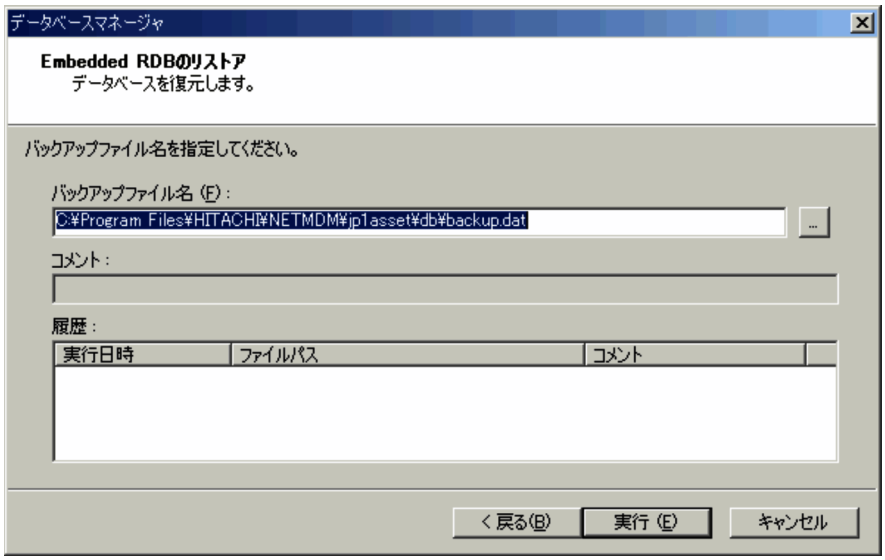
10.3.6 Embedded RDB 環境でデータベースをリストアする

「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用して作成した，Embedded RDB 環境での「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルをリストアします。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースをリストアする手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「Embedded RDB のリストア」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［Embedded RDB のリストア］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイル名を設定します。

図 10-20　［Embedded RDB のリストア］ダイアログボックス



バックアップファイル名

「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップ時に指定した「バックアップファイル名」を絶対パスで指定します。

デフォルトは，「JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ¥jp1asset¥db¥backup.dat」です。デフォルトのファイルパスを変更する場合は，［...］ボタンをクリックして，ファイルパスを設定します。

なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップ時に指定したバックアップファイルの格納先が変更されている場合は，「Asset Information Manager Limited」のデータベースをリストアできません。バックアップファイルの格納先を元に戻してから，「バックアップファイル名」を指定してください。

コメント

バックアップ時に履歴情報として指定したコメントが表示されます。

履歴

バックアップの履歴が日付の降順に 10 件まで表示されます。

履歴リストの項目を選択すると，「バックアップファイル名」および「コメント」に情報が反映されます。

2. **項目を設定して［実行］ボタンをクリックする。**

バックアップファイルのリストアが実行され，「Asset Information Manager Limited」のデータベースが復元されます。

10.3.7　Embedded RDB 環境でデータベースを再編成する

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを再編

成するには，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用する方法と jamemb_reorganization.bat を使用する方法があります。

Embedded RDB では，レコードが削除された領域は再利用できない領域になります。このため，データベース領域に再利用できない領域が増えると，データベース領域の使用率を圧迫することがあります。そこで，データベースを再編成して領域を再利用できるようにする必要があります。

なお，「Asset Information Manager Limited」のデータベースを再編成してもデータベースの容量不足になる場合は，データベースの容量を拡張してください。

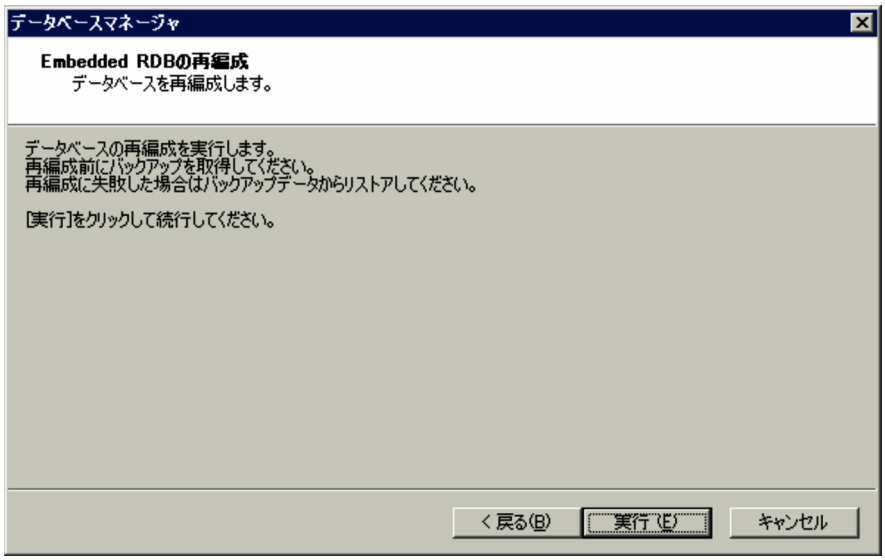
次に，Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを再編成する方法を説明します。

（1） Embedded RDB 環境でデータベースを再編成する手順

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを再編成する手順を次に示します。

1. **［データベースマネージャ］ダイアログボックスで「Embedded RDB の再編成」を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［Embedded RDB の再編成］ダイアログボックスが表示されます。

図 10-21　［Embedded RDB の再編成］ダイアログボックス



2. **［実行］ボタンをクリックする。**
   「Asset Information Manager Limited」のデータベースの再編成が実行されます。

(2) コマンドを使用した Embedded RDB 環境でのデータベースの再編成

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースの再編成を実行する jamemb_reorganization.bat の機能，形式，オプション，戻り値，コマンド実行時の注意事項および実行例について説明します。

jamemb_reorganization.bat は次のフォルダに格納されています。

「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥exe

再編成に失敗した場合は，「Asset Information Manager Limited」のデータベースが使用できなくなります。バックアップしたデータをリストアして「Asset Information Manager Limited」のデータベースを復旧してください。

(a) 機能

「Asset Information Manager Limited」のデータベースを再編成します。

(b) 形式

```
jamemb_reorganization.bat ポート番号 ユーザID パスワード -o 結果ファイルのパス [-y]
```

(c) オプション

ポート番号

ポート番号には，「Asset Information Manager Limited」のインストール時に指定したデータベース接続用のポート番号を指定してください。設定したポート番号は，「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥aimdb¥conf¥emb に格納されている HiRDB.ini ファイルの PDNAMEPORT で確認できます。このオプションは必ず指定してください。

ユーザ ID，パスワード

［サーバセットアップ］ダイアログボックスの「データベース情報」の「ログイン ID」で指定した値を指定してください。このオプションは必ず指定してください。

-o 結果ファイルのパス

実行結果を出力するファイルをフルパスで指定します。このオプションは必ず指定してください。

-y

このオプションを指定すると，再編成の実行前にキー応答を待たないで実行を開始します。
このオプションを指定しないとキー応答待ちになります。このとき，実行を中止したい場合は，［Ctrl］+［C］を押してください。

(d) 戻り値

次の戻り値を返します。

戻り値	内容
0	正常終了。結果ファイルを参照して再編成の詳細を確認できます。
11	オプションの書式に誤りがあります。
101 以上	そのほかのエラーで終了しました。

(e) コマンド実行時の注意事項

- jamemb_reorganization.bat を実行する前に，「Asset Information Manager Limited」のサービスを次に示す順で停止してください。
  1. World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing
  2. Asset Information Synchronous Service
  3. JP1/NETM/Client Security Control - Manager（JP1/NETM/CSC と連携している場合）

  また，jamemb_reorganization.bat を実行したあとに「Asset Information Manager Limited」を使用するときは，停止時と逆の順でサービスを起動してください。
- Administrators 権限を持つユーザで jamemb_reorganization.bat を実行してください。

(f) 実行例

```
jamemb_reorganization.bat 30010 admin admin -o
C:¥temp¥backup¥kekka.log -y
```

(3) Embedded RDB の作業表用ファイルで自動拡張された領域の解放

Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規作成する際，自動拡張する設定にしていると，データベースを作成したドライブの空き容量が著しく減少する場合があります。

これは，Embedded RDB の作業表用ファイル（SQL 文を実行するときに必要とする一時的な情報を格納するファイル）の容量が，自動拡張された影響による可能性があります。

作業表用ファイルの容量は，大量の検索結果を出力したときに自動拡張されます。「Asset Information Manager Limited」のデータベースを作成したドライブの空き容量が圧迫された際には，jamemb_workcomp.exe を実行することで，作業表用ファイルで自動拡張された領域を解放できます。

ここでは，Embedded RDB の作業表用ファイルで，自動拡張された領域を解放する jamemb_workcomp.exe の機能，形式，戻り値およびコマンド実行時の注意事項について説明します。

jamemb_workcomp.exe は次のフォルダに格納されています。

Asset Information Manager のインストールフォルダ ¥exe

(a) 機能

Embedded RDB の作業表用ファイルで，自動拡張された領域を解放します。

(b) 形式

```
jamemb_workcomp.exe
```

(c) 戻り値

次の戻り値を返します。

戻り値	内容
0	正常終了。
11	オプションの書式に誤りがあります。
101 以上	そのほかのエラーで終了しました。

(d) コマンド実行時の注意事項

Administrators 権限を持つユーザで jamemb_workcomp.exe を実行してください。

10.3.8 データソースまたはネット・サービスを作成する

配布管理システムおよび配布管理システムの「Asset Information Manager Limited」のデータベースとして作成したデータベースに接続するためのデータソース（Embedded RDB および Microsoft SQL Server の場合），またはネット・サービス（Oracle の場合）を作成します。

また，［操作ログ一覧］ウィンドウで JP1/ 秘文の操作ログを管理する場合には，JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに接続するためのデータソースを作成します。

データベースと接続するためのデータソースおよびネット・サービスの作成手順を次に示します。

1. **スタートメニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［Asset Information Manager］－［セットアップ］を選択する。**
   「Asset Information Manager Limited」の［セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。
2. **「データソース／ネット・サービスの作成」を選択する。**
   ［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスが表示されます。

図 10-22　［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックス



JP1/NETM/Asset Information Manager

「Asset Information Manager Limited」のデータベースに接続するためのデータソース（Embedded RDB および Microsoft SQL Server の場合）またはネット・サービス（Oracle の場合）を作成します。

既存の「Asset Information Manager Limited」のデータベースに接続する場合に選択してください。「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャでデータベースを作成する場合は，データベース作成時にデータソース（Embedded RDB および Microsoft SQL Server の場合）またはネット・サービス（Oracle の場合）が作成されるので実施不要です。

JP1/NETM/DM

配布管理システムのデータベースに接続するためのデータソース（Embedded RDB および Microsoft SQL Server の場合）またはネット・サービス（Oracle の場合）を作成します。

データベースの種類が Oracle の場合に選択してください。Embedded RDB または Microsoft SQL Server の場合は，インストール時にデータソースが作成されるので実施不要です。

なお，配布管理システムのデータベース環境を変更したとき，または配布管理システムに接続できないとき（「Asset Information Manager Limited」のインストール時の指定値誤りなどのため）は，設定を変更してください。

JP1/ 秘文 LogManager

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースへ接続するためのデータソースを作成します。

［操作ログ一覧］ウィンドウで JP1/ 秘文の操作ログを管理する場合に選択してください。

3. **「接続先一覧」から接続するデータベースの製品名を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データソースの作成］ダイアログボックスが表示されます。

なお，［データソースの作成］ダイアログボックスは，データベースの種類によって異なります。それぞれについて説明します。

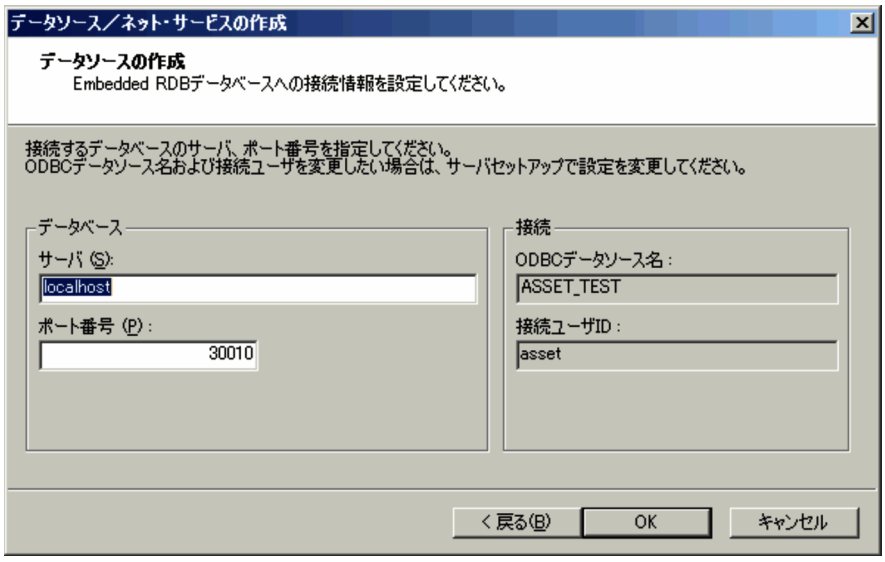
（1） Embedded RDB の場合

「接続先一覧」で指定したデータベースに接続するためのデータソースを作成します。

Embedded RDB のデータソースを作成する手順を次に示します。

1. **［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスで，「接続先一覧」から接続するデータベースの製品名を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
［データソースの作成］ダイアログボックスが表示されます。
ここでは，データソースを作成するために必要なサーバおよびポート番号を指定します。

図 10-23 ［データソースの作成］ダイアログボックス（Embedded RDB の場合）



サーバ

接続先のデータベースのサーバ名または IP アドレスを指定します。デフォルト値は，［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスの接続先一覧で選択した項目によって異なります。

・「JP1/NETM/Asset Information Manager」の場合：local host

・「JP1/NETM/DM」の場合：空白

指定できる値は，1 ～ 63 バイトの文字列および次に示す記号です。

「%」，「~」，「-」，「_」，「.」，「/」，「¥」

ポート番号

接続先のデータベースサーバのポート番号を指定します。指定できる値は 5001 ～ 65535 です。デフォルト値は，［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスの接続先一覧で選択した項目によって異なります。

・「JP1/NETM/Asset Information Manager」の場合：30010

・「JP1/NETM/DM」の場合：30008

ODBC データソース名

ODBC データソース名として，選択した接続先に応じてデータベース接続サービス名が表示されます。

ODBC データソース名を変更したい場合は，次の作業が必要です。

接続先一覧で「JP1/NETM/Asset Information Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「サービス名」の設定を変更してください。

接続先一覧で「JP1/NETM/DM」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベース接続サービス名」の設定を変更してください。

接続ユーザ ID

データベースにログオンする接続ユーザ ID として，セットアップで設定したデータベースのログイン ID が表示されます。

なお，接続ユーザ ID を変更したい場合は，次の作業が必要です。

接続先一覧で「JP1/NETM/Asset Information Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「ログイン ID」の設定を変更してください。

接続先一覧で「JP1/NETM/DM」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」の設定を変更してください。

2. **項目を設定して［OK］ボタンをクリックする。**

データソースが作成されます。

（2） Microsoft SQL Server の場合

「接続先一覧」で指定したデータベースに接続するためのデータソースを作成します。

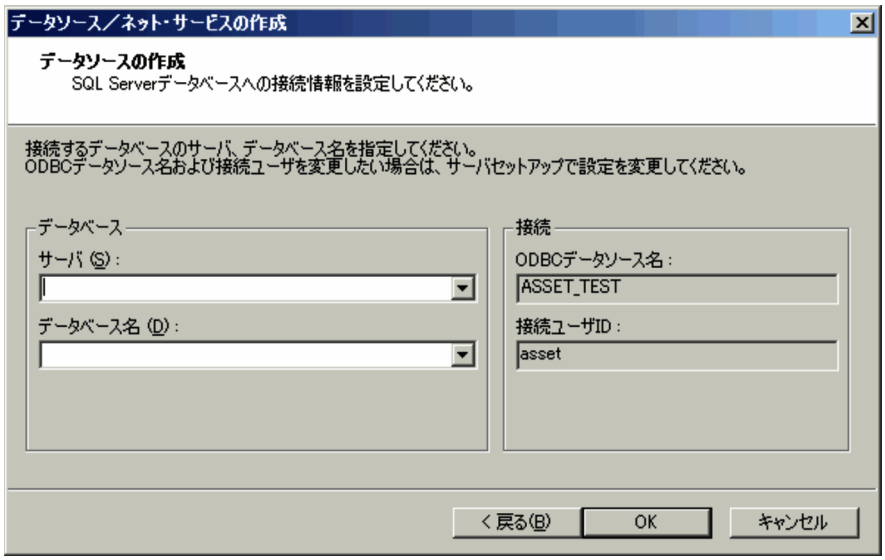
Microsoft SQL Server のデータソースを作成する手順を次に示します。

1. **［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスで，「接続先一覧」から接続するデータベースの製品名を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**

［データソースの作成］ダイアログボックスが表示されます。

ここでは，データソースを作成するために必要なサーバおよびデータベース名の情報を設定します。

図 10-24　［データソースの作成］ダイアログボックス（Microsoft SQL Server の場合）



サーバ

接続先のデータベースのサーバ名または IP アドレスを指定します。デフォルト値は空白です。

指定できる値は，1 ～ 63 バイトの文字列および次に示す記号です。

「%」，「~」，「-」，「_」，「.」，「/」，「¥」

データベース名

接続先のデータベースの名称を指定します。デフォルト値は空白です。

指定できる値は，1 ～ 128 バイトの半角英数字および記号です。ただし，次に示す記号およびスペースは使用できません。

「¥」，「/」，「*」，「"」，「'」，「|」，「.」，「<」，「>」，「?」，

ODBC データソース名

ODBC データソース名として，選択した接続先に応じてデータベース接続サービス名が表示されます。

なお，ODBC データソース名を変更したい場合は，次の作業が必要です。

接続先一覧で「JP1/NETM/Asset Information Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「サービス名」の設定を変更してください。

接続先一覧で「JP1/NETM/DM」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベース接続サービス名」の設定を変更してください。

接続先一覧で「JP1/ 秘文 Log Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/ 秘文連携」の「JP1/ 秘文データベース接続サービス名」の設定を変更してください。

接続ユーザ ID

データベースにログオンする接続ユーザ ID として，セットアップで設定したデータベースのログイン ID が表示されます。
なお，接続ユーザ ID を変更したい場合は，次の作業が必要です。
接続先一覧で「JP1/NETM/Asset Information Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「ログイン ID」の設定を変更してください。
接続先一覧で「JP1/NETM/DM」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」の設定を変更してください。
接続先一覧で「JP1/ 秘文 Log Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/ 秘文連携」の「JP1/ 秘文データベースログイン ID」の設定を変更してください。

2. **項目を設定して［OK］ボタンをクリックする。**
   データソースが作成されます。

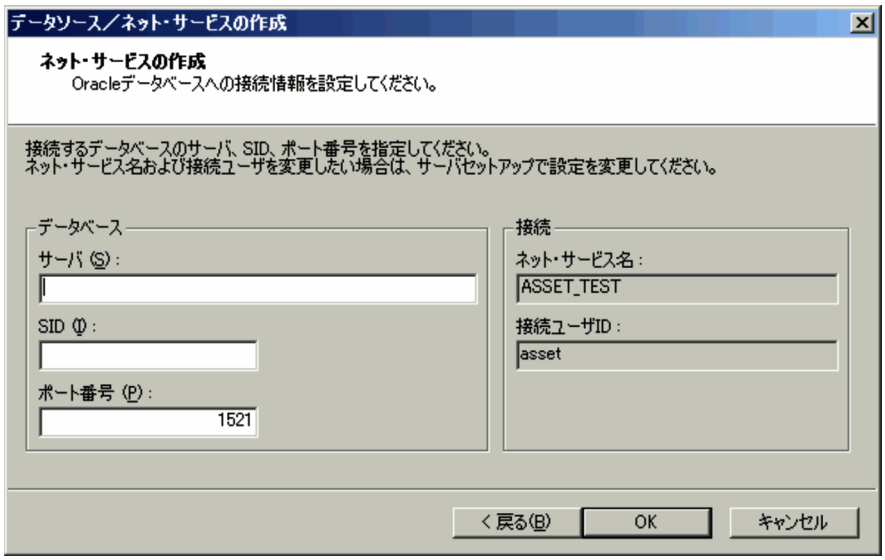
（3） Oracle の場合

「接続先一覧」で指定したデータベースに接続するための Oracle ネット・サービスを作成します。

Oracle のデータソースを作成する手順を次に示します。

1. **［データソース／ネット・サービスの作成］ダイアログボックスで，「接続先一覧」から接続するデータベースの製品名を選択して，［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［ネット・サービスの作成］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，ネット・サービスを作成するために必要なサーバおよびポート番号の情報を設定します。

図 10-25　［ネット・サービスの作成］ダイアログボックス（Oracle の場合）



サーバ

接続先のデータベースのサーバ名および IP アドレスを指定します。

デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 63 バイトの文字列および次に示す記号です。

「%」，「~」，「-」，「_」，「.」，「/」，「¥」

SID

Oracle 8i の場合は，接続するデータベースの SID を指定します。Oracle 9i の場合は，サービス名を指定してください。

デフォルト値は空白です。指定できる値は，1 ～ 8 バイトの半角英数字です。

ポート番号

接続先のデータベースサーバのポート番号を指定します。指定できる値は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 1521 です。

ネット・サービス名

ネット・サービス名として，選択した接続先に応じてデータベース接続サービス名が表示されます。

なお，ネット・サービス名を変更したい場合は，次の作業が必要です。

接続先一覧で「JP1/NETM/Asset Information Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「サービス名」の設定を変更してください。

接続先一覧で「JP1/NETM/DM」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベース接続サービス名」の設定を変更してください。

接続ユーザ ID

データベースにログオンする接続ユーザ ID が表示されます。
なお，接続ユーザ ID を変更したい場合は，次の作業が必要です。
接続先一覧で「JP1/NETM/Asset Information Manager」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「データベース情報」の「ログイン ID」の設定を変更してください。
接続先一覧で「JP1/NETM/DM」を選択した場合は，［サーバセットアップ］ダイアログボックスで「JP1/NETM/DM 連携」の「JP1/NETM/DM データベースログイン ID」の設定を変更してください。

2. **項目を設定して［OK］ボタンをクリックする。**
   データソースが作成されます。

10.4 仮想ディレクトリを設定する

Microsoft Internet Information Services に，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリを設定します。

Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用している場合は，アプリケーションプールを作成および変更できます。

注意事項

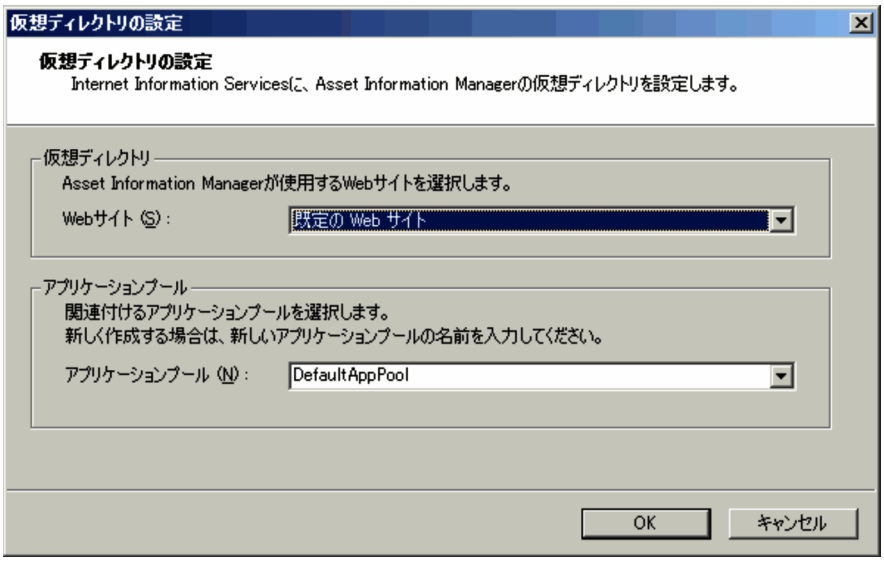
Windows Server 2003 に「Asset Information Manager Limited」をインストールする場合，インストール終了後に Microsoft Internet Information Services にアプリケーションプールの設定が必要です。既存のアプリケーションプールを使用する場合，「10.6.1(1)　アプリケーションプールの作成」と同様の設定になるようにしておく必要があります。

「Asset Information Manager Limited」が使用する Web サイトを変更する場合，およびアプリケーションプールを作成・変更する場合の手順を次に示します。

なお，［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスを使用してアプリケーションプールを設定できるのは，Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用している場合だけです。

1. **スタートメニューから［JP1_NETM_DM Manager］－［Asset Information Manager］－［セットアップ］を選択する。**
   「Asset Information Manager Limited」の［セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。
2. **「仮想ディレクトリの設定」を選択する。**
   ［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスが表示されます。
   ここでは，「Asset Information Manager Limited」の実行時に必要なデータや，ログファイルなどが格納される，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリを設定します。

図 10-26　［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックス



なお，インストールされている Microsoft Internet Information Services のバージョンが 5.1 以前の場合，アプリケーションプールの項目は表示されません。

Web サイト

「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリを登録する Web サイトを指定します。コンボボックスから「Web サイト」を選択してください。入力はできません。デフォルトでは，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリが表示されている Web サイトが指定されています。仮想ディレクトリが登録されていない場合は，「既定の Web サイト」が指定されます。ただし，Web サイトが登録されていない場合は，空白が指定されます。

アプリケーションプール

「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリと関連づけるアプリケーションプールを指定します。コンボボックスから「アプリケーションプール」を選択してください。デフォルトでは，「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリと関連づいているアプリケーションプールが表示されます。仮想ディレクトリが登録されていない場合は，「AIMPool」が表示されます。

なお，インターネットインフォメーションサービスマネージャで，「=」，「:」および「,」を含んだ名称のアプリケーションプールを登録していた場合，コンボボックスには表示されません。

新しくアプリケーションプールを作成する場合は，作成するアプリケーションプールの名前を入力してください。指定できる値は，1 ～ 255 バイトの文字です。ただし，「/」，「¥」，「=」，「:」および「,」は指定できません。アプリケーションプールは，「10.6.1(1)　アプリケーションプールの作成」または「10.6.2(2)　アプリケーションプールの作成」と同様の設定で作成されます。

3. **項目を設定して［OK］ボタンをクリックする。**
   仮想ディレクトリの変更およびアプリケーションプールの作成・変更が実行されます。変更が完了すると，仮想ディレクトリの設定が完了したことを示すメッセージが表示されます。

4. **［OK］ボタンをクリックする。**
   ［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスが閉じます。

既存のアプリケーションプールを「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリに関連づける場合は，インターネットインフォメーションサービスマネージャを使用して「アプリケーションプール」を設定してください。インターネットインフォメーションサービスマネージャを使用した「アプリケーションプール」の設定については，次に示す説明個所を参照してください。

- Microsoft Internet Information Services 6.0 を使用する場合
  「10.6.1(1)　アプリケーションプールの作成」
- Microsoft Internet Information Services 7.0 を使用する場合
  「10.6.2(2)　アプリケーションプールの作成」

10.5　Asset Information Manager Limited で使用するサービスの設定

「Asset Information Manager Limited」では，次のサービスを使用します。

- IIS Admin Services
- World Wide Web Publishing Service **または** World Wide Web Publishing
- Asset Information Synchronous Service
  インベントリ情報の更新をリアルタイムに取得する場合に必要です。JP1/NETM/DM Manager のインストール時に，コンポーネント「Asset Information Manager Limited」を選択すると作成されます。

「Asset Information Manager Limited」で使用するサービスは，自動的に開始する設定にしておきます。「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとは，Asset Information Synchronous Service は自動的に開始する設定になっていないので，次の手順で自動的に開始するように設定してください。

1. **［サービス］ウィンドウで，「Asset Information Synchronous Service」を選択する。**
2. **メニューから「操作」－「プロパティ」を選択する。**
   ［プロパティ］ダイアログボックスが表示されます。
3. **［全般］タブで，「スタートアップの種類」を「自動」に変更する。**
4. **［OK］ボタンをクリックする。**
   ［プロパティ］ダイアログボックスが閉じて，サービス「Asset Information Synchronous Service」が自動的に開始する設定になります。
5. **サービス「Asset Information Synchronous Service」を開始する。**

また，「Asset Information Manager Limited」のサーバで使用するほかのサービスのプロパティを確認して，自動的に開始する設定になっていない場合は，同じ手順で自動的に開始するように設定してください。

10.6 Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用する場合の設定

ここでは，Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用している場合，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたときに必要な設定および注意について説明します。

なお，Microsoft Internet Information Services 5.1 以前を使用している場合は，ここで説明する設定を実施する必要はありません。

10.6.1 WWW サーバの設定（Microsoft Internet Information Services 6.0 の場合）

Microsoft Internet Information Services 6.0 を使用している場合，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたときに必要な設定および注意について説明します。

（1） アプリケーションプールの作成

既存のアプリケーションプールを「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリに関連づける場合は，ここで説明する設定内容に合わせてください。「Asset Information Manager Limited」のセットアップからアプリケーションプールを新規に作成した場合は，この設定は不要です。

インターネットインフォメーションサービスマネージャを使用して「アプリケーションプール」を設定する手順を次に示します。

1. **インターネットインフォメーションサービスマネージャを起動する。**
2. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「アプリケーションプール」を選択する。**
3. **メニューから「操作」－「新規作成」－「アプリケーションプール」を選択する。**
   ［新しいアプリケーションプールの追加］ダイアログボックスが表示されます。
4. **「アプリケーションプール ID」に，任意のアプリケーションプール名を入力して，［OK］ボタンをクリックする。**
5. **アプリケーションプール名には，「=」，「:」および「,」を指定しないでください。［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスのコンボボックスに表示されなくなります。**
6. **作成したアプリケーションプールのプロパティを表示する。**
7. **［リサイクル］タブ，［パフォーマンス］タブで，オプションのチェックをすべてオフにする。**

8. **［識別］タブで，「アプリケーションプール** ID**」に「定義済み」－「**Local System**」を選択する。**
9. **「**Asset Information Manager Limited**」の「**Web **サイト」から，「既定の** Web **サイト」－「**jp1asset**」を選択し，プロパティを表示する。**
10. **手順** 4. **で作成したアプリケーションプールを選択して，**［OK］**ボタンをクリックする。**
11. World Wide Web Publishing Service **を再起動する。**

なお，［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスの「Web サイト」に指定した仮想ディレクトリには，ワーカプロセスをリサイクルする Web サイトを作成しないでください。

（2） Asset Information Manager Limited のサイトの追加

Microsoft Internet Information Services 6.0 を使用している場合，Microsoft Internet Explorer から「Asset Information Manager Limited」を使用するためには，「Asset Information Manager Limited」のサイトの追加が必要です。

「Asset Information Manager Limited」のサイトを追加する手順を次に示します。

1. Microsoft Internet Explorer **の［ツール］－［インターネットオプション］を選択する。**
   ［インターネットオプション］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［セキュリティ］タブの［イントラネット］アイコンを選択して，［サイト］ボタンをクリックする。**
3. **表示されたダイアログボックスから「**Asset Information Manager Limited**」のサイトを追加して，［閉じる］ボタンをクリックする。**

（3） サイトを作成する場合の注意事項

Microsoft Internet Information Services 6.0 の場合，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたときは，［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスの「Web サイト」に指定した仮想ディレクトリに，ワーカープロセスをリサイクルするサイトを作成しないでください。「Web サイト」には，デフォルトでは「既定の Web サイト」が指定されています。

10.6.2　WWW サーバの設定（Microsoft Internet Information Services 7.0 の場合）

Microsoft Internet Information Services 7.0 を使用している場合，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたときに必要な設定および注意について説明します。

（1）役割サービスのインストール

Microsoft Internet Information Services 7.0 を使用している場合，用途に応じた役割サービスをインストールする必要があります。

Microsoft Internet Information Services 7.0 の役割サービスをインストールする手順を次に示します。

1. **［サーバーマネージャ］の「役割」を選択し，「役割サービスの追加」を選択する。**
   役割サービスを選択するダイアログボックスが表示されます。
2. **用途に応じた役割サービスを選択し，［次へ］ボタンをクリックする。**
   インストールオプションを確認するダイアログボックスが表示されます。
   「Asset Information Manager Limited」のサーバおよび WSUS サーバの構築時に選択する役割サービスを次の表に示します。

表 10-6 「Asset Information Manager Limited」のサーバおよび WSUS サーバの構築時に選択する役割サービス

項目	役割サービス	AIM Limited ※サーバ	WSUS サーバ
HTTP 基本機能	静的なコンテンツ	○	○
	既定のドキュメント	△	－
	ディレクトリの参照	○	－
	HTTP エラー	△	△
アプリケーション開発	ASP.NET	－	○
	ISAPI 拡張	○	－
	ISAPI フィルタ	○	－
パフォーマンス	静的なコンテンツの圧縮	△	－
IIS 管理コンソール	IIS 管理コンソール	○	○
IIS6 管理互換	IIS6 メタベース互換	○	○

（凡例）
○：選択が必要な役割サービス
△：選択を推奨する役割サービス
－：該当なし
注※　AIM Limited：Asset Information Manager Limited

3. **手順 2. で選択した役割サービスが表示されていることを確認し，［インストール］ボタンをクリックする。**
   インストールが完了すると，インストールの結果を示すダイアログボックスが表示されます。
4. **［閉じる］ボタンをクリックする。**

(2) アプリケーションプールの作成

既存のアプリケーションプールを「Asset Information Manager Limited」の仮想ディレクトリに関連づける場合は，ここで説明する設定内容に合わせてください。「Asset Information Manager Limited」のセットアップからアプリケーションプールを新規に作成した場合は，この設定は不要です。

インターネットインフォメーションサービスマネージャを使用して「アプリケーションプール」を設定する手順を次に示します。

1. **インターネットインフォメーションサービスマネージャを起動する。**
2. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「アプリケーションプール」を選択する。**
3. **「操作」メニューから「アプリケーションプールの追加」を選択する。**
   ［アプリケーションプールの追加］ダイアログボックスが表示されます。
4. **「名前」に，任意のアプリケーションプール名を入力し，「マネージパイプラインモード」を「クラシック」にして［OK］ボタンをクリックする。**
   アプリケーションプール名には，「=」，「:」および「,」を指定しないでください。［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスのコンボボックスに表示されなくなります。
5. **作成したアプリケーションプールを選択し，「操作」メニューから「詳細設定」を選択する。**
   ［詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。
6. **必要な項目を指定し，［OK］ボタンをクリックする。**
   ［詳細設定］ダイアログボックスの各項目に，次のように指定してください。ほかの項目はデフォルトの設定でかまいません。

   （全般）

   キューの長さ：「4000」
   32 ビットアプリケーションの有効化：「True」（64 ビット版の Windows Server 2008 の場合だけ）

   プロセスモデル

   ID：「LocalSystem」
   Ping の有効化：「False」
   アイドル状態のタイムアウト（分）：「0」

   ラピッドフェール保護

   有効：「False」

   リサイクル

   異常が報告された ISAPI：「True」
   手動リサイクル：「True」
   特定の時間：「True」

変更されたアプリケーションプール構成：「True」
要求制限の超過：「True」
構成の変更時のリサイクルを無効にする：「True」
定期的な間隔（分）：「0」

7. **「操作」メニューから「リサイクルの設定」を選択する。**
［アプリケーションプールのリサイクル設定の編集］ダイアログボックスが表示されます。

8. **リサイクル条件のチェックボックスをすべてオフにし，［次へ］ボタンをクリックする。**

9. **ログを記録するリサイクルイベントのうち，アプリケーションプールのリサイクル時にログを記録するリサイクルイベントのチェックボックスをオンにして，［終了］ボタンをクリックする。**
活性化されているチェックボックスをすべてオンにすることをお勧めします。アプリケーションプールのリサイクル時にログを記録したくないリサイクルイベントがある場合は，チェックボックスをオフにしてから［終了］ボタンをクリックしてください。

10. **World Wide Web Publishing Service を再起動する。**

なお，［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスの「Web サイト」に指定した仮想ディレクトリには，ワーカプロセスをリサイクルする Web サイトを作成しないでください。

(3) アプリケーション（仮想ディレクトリ）の設定

役割サービスの「IIS6 メタベース互換」を，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとで追加した場合は，インターネットインフォメーションサービスマネージャでのアプリケーション（仮想ディレクトリ）の設定が必要です。

アプリケーション（仮想ディレクトリ）を新規で作成する手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「サイト」から，「Default Web Site」を選択して右クリックし，「アプリケーションの追加」を選択する。**
［アプリケーションの追加］ダイアログボックスが表示されます。

2. **［選択］ボタンをクリックして，「アプリケーションプール」に作成したアプリケーションプールを指定する。**

3. **「物理パス」に「Asset Information Manager Limited」のサーバの仮想ディレクトリを指定し，［OK］ボタンをクリックする。**
「Asset Information Manager Limited」のサーバの仮想ディレクトリは，デフォルトでは「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥wwwroot です。

また，すでにアプリケーション（仮想ディレクトリ）がある場合の，設定の変更手順を

次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「サイト」から，「Default Web Site」ー「jp1asset」を選択して，操作メニューから「詳細設定」を選択する。**
   ［詳細設定］ダイアログボックスが表示されます。

2. **「アプリケーションプール」に作成したアプリケーションプール，「物理パス」に「Asset Information Manager Limited」のサーバの仮想ディレクトリを指定し，［OK］ボタンをクリックする。**
   「Asset Information Manager Limited」のサーバの仮想ディレクトリは，デフォルトでは「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥wwwroot です。

（4） ISAPI の制限の設定

役割サービスの，「IIS6 メタベース互換」および「ISAPI 拡張」を，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとで追加した場合は，インターネットインフォメーションサービスマネージャでの ISAPI の制限の設定が必要です。

ISAPI の制限の設定手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」のサーバを選択して，「ISAPI および CGI の制限」を選択する。**

2. **「操作」メニューから「追加」を選択する。**
   ［ISAPI または CGI の制限の追加］ダイアログボックスが表示されます。

3. **「ISAPI または CGI パス」にファイルのパスを指定し，「拡張パスの実行を許可する」チェックボックスをオンにして，［OK］ボタンをクリックする。**
   「ISAPI または CGI パス」には，「Asset Information Manager Limited」のサーバの仮想ディレクトリに格納された次のファイルのパスを指定します。
   - jamwscript.dll
   - bin¥jamlogin.dll
   - jamenter.dll
   - jamfile.dll
   - jamhtmlfile.dll

   手順 1. ～手順 3. を繰り返して，これらのファイルをすべて追加してください。
   「Asset Information Manager Limited」のサーバの仮想ディレクトリは，デフォルトでは「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥wwwroot です。

（5） ISAPI フィルタの設定

役割サービスの，「IIS6 メタベース互換」および「ISAPI フィルタ」を，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとで追加した場合は，インター

ネットインフォメーションサービスマネージャでの ISAP フィルタの設定が必要です。

ISAPI フィルタの設定手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「サイト」から，「Default Web Site」を選択して，「ISAPI フィルタ」を選択する。**
2. **「操作」メニューから「追加」を選択する。**
   ［ISAPI フィルタの追加］ダイアログボックスが表示されます。
3. **「実行可能ファイル」にファイルのパスを指定し，［OK］ボタンをクリックする。**
   「実行可能ファイル」には，「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダに格納された「bin¥jamssessionfilter.dll」のパスを指定します。
   「フィルタ名」は変更する必要はありません。

(6) ハンドラマッピングの設定

役割サービスの「IIS6 メタベース互換」を，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとで追加した場合は，インターネットインフォメーションサービスマネージャでのハンドラマッピングの設定が必要です。

ハンドラマッピングの設定手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「サイト」から，「Default Web Site」－「jp1asset」を選択して，「ハンドラマッピング」を選択する。**
2. **「操作」メニューから「機能のアクセス許可の編集」を選択する。**
   ［機能のアクセス許可の編集］ダイアログボックスが表示されます。
3. **すべてのチェックボックス（「読み取り」，「スクリプト」および「実行」）をオンにし，［OK］ボタンをクリックする。**

(7) ディレクトリの参照の設定

役割サービスの，「IIS6 メタベース互換」および「ディレクトリの参照」を，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたあとで追加した場合は，インターネットインフォメーションサービスマネージャでのディレクトリの参照の設定が必要です。

ディレクトリの参照の設定手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」のサーバの「サイト」から，「Default Web Site」－「jp1asset」－「log」を選択して，「ディレクトリの参照」を選択する。**
2. **「操作」メニューから「有効にする」を選択する。**

(8) サイトの追加

Microsoft Internet Information Services 7.0 を使用している場合，Microsoft Internet Explorer から「Asset Information Manager Limited」を使用するためには，「Asset

Information Manager Limited」のサイトの追加が必要です。

「Asset Information Manager Limited」のサイトを追加する手順を次に示します。

1. Microsoft Internet Explorer **の［ツール］－［インターネットオプション］を選択する。**
   ［インターネットオプション］ダイアログボックスが表示されます。
2. **「セキュリティ」タブの「ローカルイントラネット」アイコンを選択して，［サイト］ボタンをクリックする。**
3. **表示されたダイアログから「**Asset Information Manager Limited**」のサイトを追加して，［閉じる］ボタンをクリックする。**

（9）サイトを作成する場合の注意

Microsoft Internet Information Services 7.0 の場合，「Asset Information Manager Limited」をインストールしたときは，［仮想ディレクトリの設定］ダイアログボックスの「Web サイト」に指定した仮想ディレクトリに，ワーカープロセスをリサイクルするサイトを作成しないでください。「Web サイト」には，デフォルトでは「Default Web Site」が指定されています。

10.7 タスクスケジューラに登録されるタスクの設定

「Asset Information Manager Limited」では，日々の資産管理業務で発生する資産情報のメンテナンスおよび監視作業を Windows のタスクスケジューラの機能を使用して自動的に実行できます。

「Asset Information Manager Limited」をインストールすると，Windows のタスクスケジューラに，各作業を実行するためのタスクが作成されます。このタスクのスケジュールや，タスクの有効と無効の設定を，資産情報の運用に合わせて変更します。

なお，「Asset Information Manager Limited」のインストール時は，すべてのタスクは無効になっています。

ここでは，各タスクの内容や設定手順について説明します。

注意事項

- Administrators 権限を持つユーザでタスクのスケジュールを実行してください。
- Windows XP Professional でタスクのスケジュールを実行する場合，Windows XP Professional にログオンするユーザおよびパスワードが設定された環境で実行してください。ユーザおよびパスワードが設定されていない環境では，タスクのスケジュールが実行されません。

10.7.1 タスクの種類

Windows のタスクスケジューラに設定された，タスクの種類，各タスクの内容，および各タスクを有効にした場合のデフォルトの設定について説明します。

(1) タスクの名称と内容

各タスクの名称と内容について次に示します。各タスクで使用しているファイルは変更しないでください。

● データメンテナンス

配布管理システムのデータベースと「Asset Information Manager Limited」のデータベースのデータの整合性を保つために，更新された情報に合わせて，関連するほかの情報を更新します。また，不要な情報を削除します。
このタスクは，「Asset Information Manager Limited」のセットアップが完了したあとで，必ず有効にしてください。
データメンテナンスで実施する作業の指定方法については，「10.7.2 タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定」を参照してください。

● 履歴情報の削除

資産情報の履歴および変更履歴を，指定した期間の情報を残して削除します。
デフォルトでは，6 か月以上経った履歴情報が削除される設定になっています。削除

する履歴情報の指定方法については，「10.7.3　削除する履歴情報の種類と履歴情報を削除するタイミングの指定」を参照してください。

● インベントリ情報の取込み

インベントリ情報を，「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込みます。更新されたインベントリ情報をリアルタイムに取得する場合は，このタスクを使用する必要はありません。
オプションを指定して，すべてのインベントリ情報を再取得する手順については，「10.7.4　すべてのインベントリ情報の取得」を参照してください。
また，インベントリ情報として取得できる情報の詳細については，「10.9　Asset Information Manager Limited で表示できるインベントリ情報」を参照してください。

● ディレクトリ情報の取込み

ディレクトリ情報から，部署およびユーザの情報を「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込みます。このタスクを実行するタイミングは，ディレクトリ情報が更新されたあとに設定することをお勧めします。
なお，部署およびユーザの情報が重複するおそれがあるため，ユーザインベントリ情報と併せて取得することはお勧めしません。
ディレクトリ情報を取得する手順については，「10.7.6　ディレクトリ情報の取得」を参照してください。

注意事項

ディレクトリ情報を取得する場合は，既存のデータを上書きするかどうかを選択できません。引き当てられた部署またはユーザ名は，ディレクトリ情報の内容で上書きされます。

（2）各タスクのデフォルトの設定

各タスクを有効にした場合に，実行されるデフォルトのスケジュールの設定について，次の表に示します。

表 10-7　各タスクを有効にした場合のデフォルトの設定

タスクの名称	デフォルトのスケジュールの設定
データメンテナンス	毎日，午前 5 時 00 分
履歴情報の削除	毎月 1 日の午前 6 時 00 分
インベントリ情報の取込み	毎週水曜日の午前 5 時 30 分
ディレクトリ情報の取込み	毎週日曜日の午前 0 時 00 分

10.7.2　タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定

タスク「データメンテナンス」を実行すると，配布管理システムのデータベースと「Asset Information Manager Limited」のデータベースでデータの整合性を保つために，更新された情報に合わせて，関連するほかの情報が更新されます。また，不要な情報が

削除されます。

データメンテナンスで実施する作業の指定方法については，「(2) 設定ファイルの作成」を参照してください。

ここでは，タスク「データメンテナンス」で実施する作業と，設定ファイルの作成方法を説明します。

(1) タスク「データメンテナンス」で実施する作業

タスク「データメンテナンス」を利用して実施できる作業を次に示します。

- **「抹消」状態の資産情報を削除する作業**
  資産情報の削除に伴って，関連づけられている次の情報も削除されます。
  ハードウェア資産情報，ネットワーク情報，インストールソフトウェア情報，パッチ情報，ウィルス定義情報，移管履歴，コンポーネント情報
- **「返却」，「廃棄」または「仮廃棄」状態の資産情報に関連づけられている情報を削除する作業**
  次の情報が削除されます。
  インストールソフトウェア情報，パッチ情報，ウィルス定義情報，ソフトウェア稼働情報，コンポーネント情報，ネットワーク情報※
  注※ ネットワーク情報で削除されるのは，IP アドレスだけです。
- **操作画面で変更した部署，設置場所およびユーザ名に合わせて既存の資産情報に登録されている部署，設置場所，ユーザ名を変更する作業**
  操作画面で変更した部署，設置場所およびユーザ名は，このタスクによって資産情報に反映され，変更した履歴が移管履歴に取得されます。
- **ID に対応する部署，設置場所およびユーザ名を，資産情報に設定する作業**
  資産情報に，部署 ID，設置場所 ID，ユーザ ID，管理者 ID および管理部署 ID が設定されていて，対応する部署，設置場所，ユーザ名，管理者および管理部署が設定されていない場合，対応する名称が設定されます。
- **不要な IP アドレス管理情報を削除する作業**
  IP グループ情報の範囲外で，利用されていない IP アドレスの IP アドレス管理情報が削除されます。
- **インストールソフトウェア名が登録されていないインストールソフトウェア情報を削除する作業**
- **管理レベルを「管理対象外」に設定したソフトウェアのインストールソフトウェア情報を削除する作業**
- **部署または設置場所別の IP グループで，対応する部署または設置場所が削除された IP グループを削除する作業**
- **ハードウェア資産情報の「IP アドレス」の値に対応する部署を，資産情報の「部署」に登録する作業**

IP アドレスと部署との対応は，業務メニュー「IP グループ管理」で作成した IP グループの設定に従います。この作業は，デフォルトでは実施しない設定になっています。

● **ハードウェア資産情報の「IP アドレス」の値に対応する設置場所を，資産情報の「設置場所」に登録する作業**

IP アドレスと設置場所との対応は，業務メニュー「IP グループ管理」で作成した IP グループの設定に従います。この作業は，デフォルトでは実施しない設定になっています。

（2） 設定ファイルの作成

タスク「データメンテナンス」で実施する作業を，設定ファイル（taskopt.ini）に記述します。

taskopt.ini は，「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダ ¥env に格納されています。taskopt.ini を作成するときは，同じフォルダに格納されている taskopt.org を利用すると便利です。

次の内容で taskopt.ini を作成してください。

```
[DATAMAINTENANCE]
ASSET_ERASE_DEL                = YES
ASSET_ASSOC_DEL                = YES
SOFTINFO_ERASE_DEL             = NO
SOFTINFO_ASSOC_DEL             = NO
CONTRACT_ERASE_DEL             = NO
VOLUME_ERASE_DEL               = NO
USER_ASSOC_UPD                 = YES
GROUP_ASSOC_UPD                = YES
LOCATION_ASSOC_UPD             = YES
IP_UNNECESSARY_DEL             = YES
INSTINFO_NOLIST_DEL            = YES
LICENSELINK_UNNECESSARY_DEL    = NO
SOFTINFO_CONSOLIDATE           = NO
INSTINFO_UNMANAGED_DEL         = YES
IPGROUP_NOOBJECT_DEL           = YES
IP_GROUP_ASSOC                 = OVERWRITE
IP_LOCATION_ASSOC              = OVERWRITE
ATTACHFILE_DEL                 = NO
```

「IP_GROUP_ASSOC」は，ユーザインベントリの値が設定されている場合でも上書きされます。すべての資産の「部署」を，業務メニュー「IP グループ管理」での設定に合わせて更新する場合に「OVERWRITE」を指定します。業務メニュー「IP グループ管理」を使用して部署を管理しない場合は，「NO」を指定してください。

10.7.3　削除する履歴情報の種類と履歴情報を削除するタイミングの指定

（1） 削除する履歴情報の指定

［タスク］タブの「実行するファイル名」で，ファイル名のあとに「-s TARGET=（削除

する履歴情報のコード)」の形式で指定します。削除する履歴情報のコードは複数指定できます。

なお，何も指定しないと，資産情報の履歴情報だけが削除されます。

削除する履歴情報のコードを次に示します。

- A
  資産情報の履歴
- U
  変更履歴

複数指定する場合は，「-s TARGET=AU」のように続けて指定してください。

(2) 履歴情報を残す期間の指定

［タスク］タブの「実行するファイル名」で，ファイル名のあとに，次の形式で指定します。

- 資産情報の履歴
  -s TARGET=A -s MONTH=（履歴情報を残す期間）

  履歴情報を残す期間は，月単位で 0 ～ 120 で指定します。0 を指定するとすべての履歴情報が削除されます。
  なお，何も指定しないと，6 か月以上経過した履歴情報が削除されます。

- 変更履歴
  -s TARGET=U -s UMONTH=（履歴情報を残す期間）

  履歴情報を残す期間は，月単位で 0 ～ 120 で指定します。0 を指定するとすべての履歴情報が削除されます。
  なお，何も指定しないと，すべての履歴情報が削除されます。

指定例

3 か月以上経過した，資産情報の履歴を削除する場合の指定例を次に示します。

```
"C:¥netmdm¥jp1asset¥exe¥jamscript.exe"
-f "C:¥jp1asset¥scriptbatch¥RemoveRecord.txt"
-s TARGET=A -s MONTH=3
```

「C:¥netmdm¥jp1asset」は「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダを示しています。

10.7.4 すべてのインベントリ情報の取得

更新日時が更新されていない情報も，すべて更新します。

［タスク］タブの「実行するファイル名」で，ファイル名のあとに，「ALL」を指定します。このオプションを省略すると，更新されたインベントリ情報だけを取得します。

指定例を次に示します。

```
"C:¥netmdm¥jp1asset¥exe¥jamTakeDMInventory.bat" ALL
```

「C:¥netmdm¥jp1asset」は「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダを示しています。

注意事項

「ALL」を指定しないと，インベントリ情報の更新日時が更新されていない場合，そのインベントリ情報は取り込まれません。

10.7.5　タスクの設定手順

Windows のタスクスケジューラでの，タスクの有効と無効の切り換え，タスクの実行スケジュールの変更，およびタスクの削除の手順について次に示します。

（1）タスクを有効にする

Windows のタスクスケジューラに作成された「Asset Information Manager Limited」のタスクは，デフォルトでは無効になっているので，使用するには，タスクを有効にする必要があります。

タスクスケジューラに登録されているタスクの有効，無効を切り換える手順を次に示します。

1. **Windows の［コントロールパネル］で，［タスク］アイコンをダブルクリックする。**
   タスクスケジューラの画面が表示されます。
2. **有効にしたいタスクを選択して，プロパティを表示する。**
   選択したタスクのプロパティダイアログボックスが表示されます。
3. **［タスク］タブの「実行する（スケジュールされたタスクは指定の時間に実行されます）」チェックボックスをチェックする。**
4. **［OK］ボタンをクリックする。**
   タスクが有効になって，タスクのプロパティダイアログボックスが閉じます。
   タスクの実行結果は，Windows の［コントロールパネル］で，［タスク］をダブルクリックすると表示される，タスクスケジューラの画面で確認します。
   タスクスケジューラの画面を詳細表示に切り換えて，「前回の結果」に表示される戻り値を確認してください。なお，内容の詳細は ASTMESn.log を参照してください。

各タスクの「実行するファイル名」の指定内容を次の表に示します。

なお，表中の「<INSTALL>」は「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダを示しています。

表 10-8 各タスクの「実行するファイル名」の指定内容

タスクの名称	「実行するファイル名」の指定内容
データメンテナンス	"<INSTALL>¥exe¥jamscript.exe" -f "<INSTALL>¥scriptbatch¥DataMaintenance.txt"
履歴情報の削除	"<INSTALL>¥exe¥jamscript.exe" -f "<INSTALL>¥scriptbatch¥RemoveRecord.txt" -s TARGET=A -s MONTH=6
インベントリ情報の取込み	"<INSTALL>¥exe¥jamTakeDMInventory.bat"
ディレクトリ情報の取込み	"<INSTALL>¥exe¥jamscript.exe" -f "<INSTALL>¥scriptbatch¥DMDirectory.txt"

(2) タスクのスケジュールの変更

タスクを実行する日時を変更できます。また，スケジュールを追加することもできます。

● 実行日時の変更

タスクが実行される日時を変更する手順を次に示します。

1. Windows **のコントロールパネルで，［タスク］アイコンをダブルクリックする。**
   タスクスケジューラの画面が表示されます。
2. **実行日時を変更したいタスクを選択して，プロパティを表示する。**
   選択したタスクのプロパティダイアログボックスが表示されます。
3. **［スケジュール］タブの「タスクのスケジュール」および「開始時刻」を変更する。**
4. **［OK］ボタンをクリックする。**
   指定したスケジュールでタスクが変更されて，タスクのプロパティダイアログボックスが閉じます。

● 実行スケジュールの追加

タスクが実行されるスケジュールを追加する手順を次に示します。

1. Windows **のコントロールパネルで，［タスク］アイコンをダブルクリックする。**
   タスクスケジューラの画面が表示されます。
2. **スケジュールを追加したいタスクを選択して，プロパティを表示する。**
   選択したタスクのプロパティダイアログボックスが表示されます。
3. **［スケジュール］タブの「複数のスケジュールを表示する」チェックボックスをチェックする。**
   ［スケジュール］タブの上部に，スケジュールのドロップダウンリストと，［新規］ボタン，［削除］ボタンが表示されます。
4. **［新規］ボタンをクリックする。**
   ドロップダウンリストに，スケジュールが追加されます。
5. **追加されたスケジュールの「タスクのスケジュール」および「開始時刻」を設定する。**
6. **［OK］ボタンをクリックする。**
   タスクにスケジュールが追加されて，タスクのプロパティダイアログボックスが閉じます。

（3） タスクの削除

不要なタスクを削除する手順を次に示します。

1. Windows のコントロールパネルで，［タスク］アイコンをダブルクリックする。
   タスクスケジューラの画面が表示されます。
2. 削除したいタスクを選択して，「ファイル」－「削除」を選択する。
   選択したタスクが削除されます。

（4） タスクの実行結果

タスクの実行結果は，Windows のコントロールパネルで，［タスク］アイコンをダブルクリックすると表示される，タスクスケジューラの画面で確認します。

タスクスケジューラの画面を詳細表示に切り換えて，「前回の結果」に表示される戻り値を確認してください。なお，内容の詳細は ASTMESn.log を参照してください。

各戻り値の内容を次の表に示します。

戻り値	内容
0x0	正常終了。
0x1	該当するデータが存在しません。
0x2 以上	そのほかのエラーで終了しました。

10.7.6　ディレクトリ情報の取得

ディレクトリ情報のうち，部署情報だけを取得するか，部署情報に加えてユーザ情報も取得するかを選択できます。

取得する情報は，マップファイルで説明すると，「OU ou 名前」に定義されている部署情報，および「USR cn フルネーム」に定義されているユーザ情報です。

取得する情報は，「タスク」タブの「実行するファイル名」で，ファイル名のあとに次の形式で指定します。

形式

-s OPT= 処理内容の種別

処理内容の種別は，次のどちらかを半角数字で指定します。

- 1：ディレクトリ情報のうち，部署情報だけを取得する（デフォルト）。
  取得した部署情報を，部署情報（GroupInfo）として作成します。
- 2：ディレクトリ情報のうち，部署情報およびユーザ情報を取得し，資産情報に引き当てる。
  取得した部署情報を，部署情報（GroupInfo）として作成したあと，管理項目「資産情報 . 部署」に引き当てます。

また，取得したユーザ情報を，管理項目「資産情報 . ユーザ名」に引き当てます。ただし，ユーザ管理情報（UserInfo）としては作成されません。

指定例

```
"C:¥jp1asset¥exe¥jamscript.exe"
-f "C:¥jp1asset¥scriptbatch¥DMDirectory.txt"
-s OPT=1
```

「C:¥jp1asset」は「Asset Information Manager Limited」のインストールフォルダを示しています。

注意事項

- ディレクトリ情報から部署情報を取得する際，同一名称の部署が同一の階層に複数存在する場合，そのうちの一つを取り込みます。
- 「Asset Information Manager Limited」のデータベースの部署情報の「部署名」および「ADGUID」で引き当たらなかった場合，部署情報が新規登録されます。このとき，「部署 ID」は自動採番され，「部署（英名）」および「部署名（英名）」には「部署 ID」の値が設定されます。
- ディレクトリ情報からユーザ情報を取得する場合，ユーザ名（英名）は引き当てられません。

10.8　部署単位で操作ログを集計するための設定

［操作ログ集計］ウィンドウでは，管理対象の機器から収集した操作ログを，機器の管理部署ごとに集計できます。そのためには，操作ログとは別に，部署の情報を管理する必要があります。

ここでは，部署の情報を管理する方法について説明します。

機器の管理部署は，「Asset Information Manager Limited」のデータベース上で，機器の属性の一つとして管理します。機器の属性に部署の情報を登録するには，次の 3 種類の方法があります。

1. IP アドレスを利用して，該当する部署を一括して登録する。
2. ユーザインベントリ情報を利用して，部署を一括して登録する。
3. 1 台ごとに部署を登録する。

1. ～ 3. の方法はすべて併用できます。これ以降で，それぞれの方法で部署の情報を登録する手順について説明します。

10.8.1　IP アドレスを利用する

部署ごとに使用する IP アドレスの範囲を定義して，グループを作成しておくことで，IP アドレスの値を基に，機器の管理部署を登録します。

インベントリ情報の IP アドレスを利用して，機器の管理部署を登録する手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」にログインする。**
   WWW ブラウザを起動して，URL に「http:// ホスト名 /jp1asset/login.htm」を指定します。「ホスト名」には「Asset Information Manager Limited」をインストールしたサーバのホスト名を指定します。
   「ユーザ ID」と「パスワード」には「dm_admin」を指定してください。

2. **部署を作成する。**
   組織階層に合わせて，部署を作成します。部署は，業務メニュー「ユーザ組織管理」で作成します。部署の作成方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.7.1　ユーザと組織の情報を変更する（ユーザ組織管理）」を参照してください。

3. **IP アドレスを部署ごとにグルーピングする。**
   手順 2. で作成した部署ごとに，IP アドレスの範囲を定義して，グループを作成します。IP アドレスのグループは，業務メニュー「IP グループ管理」で定義します。部署ごとに IP アドレスのグループを作成する方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.7.4　IP グループ情報を変更する（IP グループ管理）」を参照してくだ

さい。

部署を作成して，部署ごとに IP アドレスのグループを作成することで，インベントリ情報を「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込む際に，各機器に管理部署の情報が登録されます。

10.8.2　ユーザインベントリ情報を利用する

ユーザインベントリを定義して部署の情報を収集している場合，ユーザインベントリ情報を利用して，該当する部署を登録できます。

ユーザインベントリ情報を利用して，該当する部署を登録する手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」にログインする。**
   WWW ブラウザを起動して，URL に「http:// ホスト名 /jp1asset/login.htm」を指定します。「ホスト名」には「Asset Information Manager Limited」をインストールしたサーバのホスト名を指定します。
   「ユーザ ID」と「パスワード」には「dm_admin」を指定してください。

2. **部署の属性を管理する項目に，ユーザインベントリ情報を引き当てる。**
   「Asset Information Manager Limited」で部署の情報を管理する項目（「部署情報 . 部署名」）に，ユーザインベントリ情報の部署名を引き当てます。ユーザインベントリ情報の引き当ては，業務メニュー「インベントリ情報の引き当て」で実行します。
   ユーザインベントリ情報の引き当て方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.8.5　引き当て項目の設定（インベントリ情報の引き当て）」を参照してください。

管理項目にユーザインベントリ情報を引き当てることで，インベントリ情報を「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込む際に，各機器に管理部署の情報が登録されます。

10.8.3　機器に部署名を設定する

「Asset Information Manager Limited」に登録されている機器の情報を編集して，部署を登録できます。この方法は管理する機器の情報に一つずつ設定するため，IP アドレスやユーザインベントリ情報を登録できなかった機器に利用してください。

各機器に部署名を設定する手順を次に示します。

1. **「Asset Information Manager Limited」にログインする。**
   WWW ブラウザを起動して，URL に「http:// ホスト名 /jp1asset/login.htm」を指定します。「ホスト名」には「Asset Information Manager Limited」をインストールしたサーバのホスト名を指定します。
   「ユーザ ID」と「パスワード」には「dm_admin」を指定してください。

2. **部署を設定する機器を検索する。**
   機器の検索は，業務メニュー「保有機器一覧」で実行します。機器を検索する方法に

ついては，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.2.2　機器を検索する（保有機器一覧）」を参照してください。

3. **機器の部署を設定する。**
検索結果の一覧から［機器詳細］ダイアログボックスを表示して，部署を設定します。［機器詳細］ダイアログボックスでの情報の編集方法については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.2.6　各機器の詳細情報の管理」を参照してください。

10.9　Asset Information Manager Limited で表示できるインベントリ情報

インベントリ情報を基にして，「Asset Information Manager Limited」の対応する情報が作成・更新されます。

また，JP1/NETM/DM Client がインストールされていない機器からも情報を収集する場合は，取得できる情報が限定されます。JP1/NETM/DM 未導入機器から取得できる情報については，「10.9.1(1)　JP1/NETM/DM 未導入機器から取得できる資産情報」および「10.9.2(1)　JP1/NETM/DM 未導入機器から取得できるハードウェア資産情報」を参照してください。

作成・更新される情報と，引き当てられるインベントリ情報との対応を次の表に示します。

表 10-9　作成・更新される情報と，引き当てられるインベントリ情報との対応

「Asset Information Manager Limited」の情報	インベントリ情報
資産情報	• システム構成情報
ハードウェア資産情報	• システム情報
ネットワーク情報	• ユーザインベントリ情報
インストールソフトウェア情報※1	• インストールパッケージ情報
インストールソフトウェアリスト※1	• ソフトウェアインベントリ情報
コンポーネント情報※1	• Microsoft Office 情報
パッチ情報※2	• システム情報 • インストールパッケージ情報
パッチリスト	インストールパッケージ情報
ウィルス定義情報	ウィルス対策製品情報
部署情報※3	ユーザインベントリ情報
設置場所情報※3	ユーザインベントリ情報

注※1

セットアップでハードウェアに関する情報だけを取得する設定にした場合は，作成・更新されません。

配布管理システムから取り込む情報の種類を選択する方法については，「10.2.4　JP1/NETM/DM 連携の設定」を参照してください。

注※2

未適用パッチ情報を取得する設定にしている場合は，インストールが必要なパッチの情報も取得できます。未適用パッチ情報を取得する設定の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「7.2　クライアントのパッチ情報を検出する」を参照してください。

注※ 3

インベントリ情報の引き当てで，ユーザインベントリ情報の部署および設置場所の情報を登録する設定にした場合に，作成・更新されます。

注意事項

- システム情報およびシステム構成情報を引き当てる際に，引き当て元の値が NULL の場合，「Asset Information Manager Limietd」の情報は更新されません。
- 機器状態が「運用」，「在庫」，「仮廃棄」および「抹消」の場合に，情報が更新されます。引き当てた機器の状態が「在庫」，「仮廃棄」または「抹消」の場合には，「運用」に変更されます。

作成・更新される各情報の詳細について次に示します。

10.9.1　資産情報として取得できるインベントリ情報

配布管理システムのデータベースに格納されているインベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information ManagerLimited」の資産情報の詳細を次の表に示します。

インベントリ情報の引き当てでの設定の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.8.5　引き当て項目の設定（インベントリ情報の引き当て）」を参照してください。

表 10-10　インベントリ情報を基に作成・更新される資産情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	新規作成時は自動採番されます。	×
資産種別	「ハードウェア」が設定されます。	×
資産番号	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 自動採番 • ユーザインベントリ • ホスト名（ドメイン名を取得） • ホスト名（ドメイン名を取得しない） • 運用キー • IP アドレス • MAC アドレス • コンピュータ名 デフォルトは「自動採番」です。なお，「運用キー」とは，ホスト識別子またはノード識別キーのことです。	○
部署 ID	「部署」に設定された部署に対応する ID が設定されます。	○
部署	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • ユーザの所属部署を設定する • ユーザインベントリから取得 デフォルトは「設定しない」です。	○

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
ユーザ ID	「ユーザ名」に設定されたユーザ名に対応する ID が設定されます。	○
ユーザ名	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • ユーザ名（ユーザインベントリ情報） • ユーザ ID（ユーザインベントリ情報） • メールアドレス（ユーザインベントリ情報） • システム構成情報 • システム情報 デフォルトは「設定しない」です。	○
設置場所 ID	「設置場所」に設定された設置場所に対応する ID が設定されます。	○
設置場所	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • ユーザインベントリから取得 デフォルトは「設定しない」です。	○
機器状態	コード ID「AssetStatus」のコードの中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 デフォルトは「運用」です。	○
登録日	インベントリ情報の取得によって，新規に資産情報の作成された日時が設定されます。	×
DM 導入状態	「導入」が設定されます。	○
DM ハードウェア更新日付	システム構成情報の「システム情報最終更新日時」から取得されます。	○
DM ソフトウェア更新日付	システム構成情報の「ソフトウェアインベントリ情報最終更新日時」から取得されます。	○
DM パッケージ更新日付	システム構成情報の「インストールパッケージ情報最終更新日時」から取得されます。	○
DM ユーザ更新日付	システム構成情報の「ユーザインベントリ情報最終更新日時」から取得されます。	○
DM 最終更新日付	システム構成情報の「最終更新日付」，および削除履歴情報の「最終更新日付」のうち，最新の日付が設定されます。	○
引き当てキー	システム構成情報の「ノード名」から取得されます。	○
稼働管理種別	コード ID「AssetWorkKind」のコードの中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 デフォルトは「稼働管理対象」です。	○

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
固有情報	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • システム構成情報 • システム情報 • コード（コード ID「AssetProperty1」～「AssetProperty6」） • ユーザインベントリから取得 • レジストリ情報から取得 • 固定値 デフォルトは「設定しない」です。	○

（凡例）
○：更新される
×：更新されない

注意事項

［サーバセットアップ］ダイアログボックスで，「資産情報の引き当てキー」に「資産番号を使用する」を選択している場合，資産番号の更新はできません。

［サーバセットアップ］ダイアログボックスで，「資産情報の引き当てキー」に「運用キーに従う」を選択して，インベントリ情報の引き当て画面で，資産番号に「自動採番」以外の項目を選択した場合，選択した引き当て項目に該当するインベントリ情報の値が変更になると，資産番号も変更されます。ただし，次の場合は変更されないので注意してください。

- 変更した値がすでに「Asset Information Manager Limited」のデータベースに登録されている資産番号と重複する場合
  資産番号の引き当て項目に「ホスト名」，「IP アドレス」，「MAC アドレス」，「コンピュータ名」のどれかを選択している場合は，重複するおそれがあるので注意してください。
- 配布管理システムで最新の情報を収集していない場合

（1）JP1/NETM/DM 未導入機器から取得できる資産情報

JP1/NETM/DM 未導入機器から取得した情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」の資産情報の詳細を次の表に示します。

表 10-11　JP1/NETM/DM 未導入機器から取得できる資産情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	新規作成時は自動採番されます。	×
資産種別	「ハードウェア」が設定されます。	×
資産番号	自動採番されます。	×

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
機器状態	JP1/NETM/DM 未導入ホストテーブルの属性が「対象」の場合，「運用」が設定されます。「対象外」または「撤去」の場合，「抹消」が設定されます。	○※
登録日	インベントリ情報の取得によって，新規に資産情報の作成された日時が設定されます。	×
DM 導入状態	「未導入」が設定されます。	○
DM 最終更新日付	未導入機器情報の「最終更新日付」が設定されます。	○
稼働管理種別	「稼働管理対象外」が設定されます。	×

（凡例）

○：更新される

×：更新されない

注※

「抹消」に設定されるのは，既存の資産情報が引き当てられた場合だけです。JP1/NETM/DM 未導入ホストテーブルの属性が「対象外」または「撤去」の場合，既存の機器と引き当てられなかったときは新規登録されません。

10.9.2 ハードウェア資産情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」のハードウェア資産情報の詳細を次の表に示します。

表 10-12 インベントリ情報を基に作成・更新されるハードウェア資産情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×
機器種別	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • システム情報の「OS」 • コード（コード ID「MachineKind」のシステム装置カテゴリのコード） • ユーザインベントリから取得 デフォルトでは，システム情報の「OS」が取得されて，OS の種別に従って次のどちらかが設定されます。 • PC • UNIX	○※

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
製造者	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • システム構成情報 • システム情報 • ユーザインベントリから取得 • 固定値 デフォルトでは，システム情報の「製造元」から取得されます。	○
製造番号	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • システム構成情報 • システム情報 • ユーザインベントリから取得 • 固定値 デフォルトでは，JP1/NETM/DM（06-71 以降）のシステム情報の「マシンシリアルナンバー」から取得されます。	○
名称	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • システム構成情報 • システム情報 • ユーザインベントリから取得 • 固定値 デフォルトでは，システム情報の「モデル」から取得されます。	○
CPU	システム情報の「CPU 種別」から取得されます。	○
CPU クロック数	システム情報の「CPU クロック数」から取得されます。	○
CPU 数	システム情報の「プロセッサ数」から取得されます。	○
メモリサイズ	システム情報の「実メモリ容量」から取得されます。	○
ディスク容量	システム情報の「全ディスク容量」から取得されます。	○
空ディスク容量	システム情報の「空きハードディスク容量」から取得されます。	○
モニタ解像度	システム情報の「ディスプレイ水平解像度」および「ディスプレイ垂直解像度」から取得されます。	○
IP アドレス	システム構成情報の「IP アドレス」から取得されます。	○
MAC アドレス	システム構成情報の「MAC アドレス」から取得されます。	○
ホスト名	システム構成情報の「ホスト名」から取得されます。	○
MBSA バージョン	システム構成情報の「MBSA」から取得されます。	○
OS 情報	システム情報の「OS ファミリー名」から取得されます。 OS ファミリー名が無い場合は「OS」から取得されます。	○

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
OS バージョン	機器種別が「PC」の場合，システム情報の「OS バージョン」から取得されます。 機器種別が「UNIX」の場合，システム情報の「UNIX の OS バージョン」から取得されます。	○
コンピュータ ID	システム情報の「コンピュータ ID」から取得されます。	○
固有情報	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • システム構成情報 • システム情報 • コード（コード ID「HardwareProperty1」～「HardwareProperty6」） • ユーザインベントリから取得 • レジストリ情報から取得 • 固定値 デフォルトは「設定しない」です。	○

（凡例）
○：更新される
×：更新されない

注※　インベントリ情報の引き当てでの設定に従います。

（1）JP1/NETM/DM 未導入機器から取得できるハードウェア資産情報

JP1/NETM/DM 未導入機器から取得した情報を基に作成・更新される，「Asset Information Manager Limited」のハードウェア資産情報の詳細を次の表に示します。

表 10-13　未導入機器から取得できるハードウェア資産情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×
機器種別	「PC」が設定されます。	×
IP アドレス	システム構成情報の「IP アドレス」から取得されます。	○
MAC アドレス	システム構成情報の「MAC アドレス」から取得されます。	○
ホスト名	システム構成情報の「ホスト名」から取得されます。	○

（凡例）
○：更新される
×：更新されない

10.9.3 ネットワーク情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」のネットワーク情報の詳細を次の表に示します。

表 10-14 インベントリ情報を基に作成・更新されるネットワーク情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×
ネットワーク情報 ID	新規作成時は自動採番されます。	×
IP アドレス※1	JP1/NETM/DM（06-71 以降）のシステム情報，または JP1/NETM/DM（06-70 以前）のシステム構成情報の「IP アドレス」から取得されます。	○
サブネットマスク※2	システム情報の「サブネットマスク」から取得されます。	○
IP 種別	「IPv4」が設定されます。	○
MAC アドレス	システム情報の「MAC アドレス」から取得されます。	○
ノード名（ホスト名）	システム構成情報の「ホスト名」から取得されます。	○
DHCP サーバ名	該当する IP グループの DHCP サーバ名から取得されます。	○
デフォルトゲートウェイ※2	システム情報の「デフォルトルータアドレス」から取得されます。	○
コンピュータ名	システム情報の「コンピュータ名」から取得されます。	○
固有情報	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • システム構成情報 • システム情報 • コード（コード ID「NetworkProperty1」～「NetworkProperty2」） • ユーザインベントリから取得 • レジストリ情報から取得 • 固定値 デフォルトは「設定しない」です。	○

（凡例）

○：更新される

×：更新されない

注※ 1

インベントリ情報とネットワーク情報は，MAC アドレスで引き当てられます。配布管理システ

ムから取得した MAC アドレスに対応する IP アドレスが，すでに登録されているネットワーク情報と異なる場合，配布管理システムから取得した値で，IP アドレスが更新されます。

注※ 2

配布管理システムから値を取得できなかった場合は，IP アドレスが所属する IP グループから値が取得されます。また，IP アドレスが所属する IP グループに DHCP サーバ名が設定されている場合，配布管理システムから DHCP サーバ名が取得されたときも，IP グループから取得した値が優先されます。

10.9.4 インストールソフトウェア情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報を基に作成される「Asset Information Manager Limited」のインストールソフトウェア情報の詳細を次の表に示します。

表 10-15 インベントリ情報を基に作成されるインストールソフトウェア情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×
インストール ID	インストールパッケージ情報，またはソフトウェアインベントリ情報に対応するインストール ID がインストールソフトウェアリストから取得されます。	×
プロダクト ID	Microsoft Office 情報の「プロダクト ID」から取得されます。 OS の場合は，システム情報の「OS シリアルナンバー」から取得されます。 プロダクト ID がないソフトウェアからは取得されません。	×
インストール日	次に示す中から，取得したインベントリ情報の種類に応じて設定されます。 • インストールパッケージ情報の「インストール日時」 • システム情報の「OS インストール日時」 • Microsoft Office 情報の「インストール日付」 ソフトウェアインベントリ情報の場合は，取得されません。	×
固有情報	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 設定しない • インストールパッケージ情報 • ソフトウェアインベントリ情報 • コード（コード ID「InstalledInfoProperty1」～「InstalledInfoProperty2」） • ユーザインベントリから取得 • 固定値 デフォルトは「設定しない」です。	○

（凡例）

○：更新される

×：更新されない

10.9.5　インストールソフトウェアリストとして取得できるインベントリ情報

該当するソフトウェア名およびソフトウェアのバージョンをインストールソフトウェアリストから検索し，該当する情報がない場合，インストールソフトウェアリストに追加されます。

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」のインストールソフトウェアリストの詳細を次の表に示します。

表 10-16　インベントリ情報を基に作成されるインストールソフトウェアリストの詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
インストール ID	新規作成時は自動採番されます。	×
インストールソフトウェア名※1	次に示す中から，取得したインベントリ情報の種類に応じて設定されます。 • インストールパッケージ情報の「パッケージ名」 • ソフトウェアインベントリ情報の「ソフトウェア名」 • Microsoft Office 情報の「ソフトウェア名」	×
インストールソフトウェアバージョン※2	次に示す中から，取得したインベントリ情報の種類に応じて設定されます。 • インストールパッケージ情報の「パッケージバージョン」 • ソフトウェアインベントリ情報の「ソフトウェアバージョン」 • Microsoft Office 情報の「ソフトウェアバージョン」	×
ファイル名	ソフトウェアインベントリ情報の「対象ソフトウェアを構成するファイル名称」から取得されます。	×
ファイルサイズ	ソフトウェアインベントリ情報の「対象ソフトウェアの作成日時」から取得されます。	×
ファイル日付	ソフトウェアインベントリ情報の「対象ソフトウェアのファイルサイズ」から取得されます。	×
パッケージ元属性	インストールパッケージ情報の「パッケージャタイプ」から取得されます。	△
パッケージ識別 ID	インストールパッケージ情報の「パッケージ識別 ID」から取得されます。	○
管理レベル	コード ID「InstalledInd」のコードの中から，インベントリ情報の種類に応じて次の項目が設定されます。 • インストールパッケージ情報，ソフトウェアインベントリ情報，Microsoft Office 情報，または OS 情報の場合，「管理対象」 • IE パッチ情報の場合，「集計対象外」	○
許可	コード ID「Permit」のコードの中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 デフォルトは「許可する」です。	○

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
種別	次に示す引き当て項目の中から，インベントリ情報の引き当てで選択した項目が設定されます。 • 取得した情報に従って設定する • コード（コード ID「InstalledKind」） デフォルトは「取得した情報に従って設定する」が設定されて，取得したインストールソフトウェア情報に従って次の項目の中から設定されます。 • 一般ソフト • Office • OS 情報	○

（凡例）

○：更新される

△：値が登録されていない場合だけ更新される

×：更新されない

注※ 1

OS の情報の場合，「インストールソフトウェア名」は，システム情報の「OS ファミリー名」から取得されます。「OS ファミリー名」に値がないときは「OS サブバージョン」から取得され，「OS サブバージョン」に値がないときは，「OS」から取得されます。

Microsoft Internet Explorer のパッチに関する情報の場合，「Microsoft Internet Explorer Patch」が設定されます。

注※ 2

OS の情報の場合，「インストールソフトウェアバージョン」は，システム情報の「OS バージョン」から取得されます。

Microsoft Internet Explorer のパッチに関する情報の場合，システム情報の「IE パッチ情報」から取得されます。

10.9.6 コンポーネント情報として取得できるインベントリ情報

Microsoft Office 情報のコンポーネントを登録します。資産情報に該当するソフトウェアのコンポーネントが登録されていない場合は，コンポーネント情報に追加されます。取得したコンポーネント情報にない情報は削除されます。

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」のコンポーネント情報の詳細を次の表に示します。

表 10-17 インベントリ情報を基に作成・更新されるコンポーネント情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
インストール ID	インストールパッケージ情報の「パッケージ名」および「パッケージバージョン」に対応するインストール ID がインストールソフトウェアリストから取得されます。	×
コンポーネント名	コンポーネント情報の「ソフトウェア表示名」から取得されます。	○
コンポーネントバージョン	コンポーネント情報の「表示バージョン」から取得されます。	○
親ソフトウェア識別 ID	Microsoft Office 情報の「ソフトウェア識別 ID」から取得されます。	×

（凡例）
○：更新される
×：更新されない

10.9.7　パッチ情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」のパッチ情報の詳細を次の表に示します。

表 10-18　インベントリ情報を基に作成・更新されるパッチ情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×
パッチ ID	システム情報の「IE パッチ情報」またはインストールパッケージ情報の「インストール名」に対応するパッチ ID が，パッチリストから取得されます。	×
インストール日	インストールパッケージ情報の場合だけ，「インストール日付」から取得されます。	○
適用状態	システム情報から取得した場合は「適用」が設定されます。インストールパッケージ情報から取得した場合は，「パッケージ識別 ID」の先頭が「SUP」または「WUA-SUP」のとき「適用」，「BSA」のとき「未適用」が設定されます。なお，「BSD」は対象外です。	○

（凡例）
○：更新される
×：更新されない

10.9.8　パッチリストとして取得できるインベントリ情報

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」の

パッチリストの詳細を次の表に示します。

表 10-19 インベントリ情報を基に作成・更新されるパッチリストの詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
パッチ ID	新規採番されます。	×
パッチ名	「Microsoft Internet Explorer Patch」またはインストールパッケージ情報の「インストール名」が取得されます。	×
バージョン	システム情報の「IE パッチ情報」またはインストールパッケージ情報の「インストールバージョン」が取得されます。	×

（凡例）
×：更新されない

10.9.9 ウィルス定義情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報を基に作成・更新される「Asset Information Manager Limited」のウィルス定義情報の詳細を次の表に示します。

表 10-20 インベントリ情報を基に作成・更新されるウィルス定義情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
資産 ID	該当する資産情報の「資産 ID」が設定されます。	×
ウィルス対策ソフトウェア名	ウィルス対策製品情報の「ソフトウェア名称（表示用）」が取得されます。	×
ウィルス対策ソフトウェアバージョン	ウィルス対策製品情報の「ソフトウェアバージョン」から取得されます。	×
エンジンバージョン	ウィルス対策製品情報の「エンジンバージョン」から取得されます。	○
常駐／非常駐	ウィルス対策製品情報の「ウィルス検出の常駐／非常駐設定」から取得されます。	○
インストール日付	ウィルス対策製品情報の「インストール日付」から取得されます。	○
ウィルス定義バージョン	ウィルス対策製品情報の「ウィルス定義バージョン」から取得されます。	×

（凡例）
○：更新される
×：更新されない

10.9.10　部署情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報に該当する部署が登録されていない場合に，部署情報に追加されます。部署情報に追加するかどうかは，インベントリ情報の引き当てで設定します。インベントリ情報の引き当てでの設定の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.8.5　引き当て項目の設定（インベントリ情報の引き当て）」を参照してください。

インベントリ情報を基に作成される「Asset Information Manager Limited」の部署情報の詳細を次の表に示します。

表 10-21　インベントリ情報を基に作成される部署情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
部署 ID	自動採番されます。	×
上位部署 ID	上位部署がある場合は，上位部署の「部署 ID」が設定されます。	×
部署	上位からすべての階層関係を示した部署情報が設定されます。	×
部署名	ユーザインベントリ情報から取得した部署名が設定されます。	×
部署名（英名）	「部署 ID」が設定されます。	×

（凡例）
×：更新されない

10.9.11　設置場所情報として取得できるインベントリ情報

インベントリ情報に該当する設置場所が登録されていない場合に，設置場所情報に追加されます。設置場所情報に追加するかどうかは，インベントリ情報の引き当てで設定します。インベントリ情報の引き当てでの設定の詳細については，マニュアル「運用ガイド 1」の「10.8.5　引き当て項目の設定（インベントリ情報の引き当て）」を参照してください。

インベントリ情報を基に作成される「Asset Information Manager Limited」の設置場所情報の詳細を次の表に示します。

表 10-22　インベントリ情報を基に作成される設置場所情報の詳細

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
設置場所 ID	自動採番されます。	×
上位設置場所 ID	上位設置場所がある場合は，上位設置場所の「設置場所 ID」が設定されます。	×

項目名	設定される値	既存データが存在した場合の更新の有無
設置場所	上位からすべての階層関係を示した設置場所情報が設定されます。	×
設置場所名	ユーザインベントリ情報から取得した設置場所名が設定されます。	×
設置場所名（英名）	「設置場所 ID」が設定されます。	×
場所属性	「エリア」が設定されます。	×

（凡例）

×：更新されない

付録

付録 A　JP1/NETM/DM のバージョンアップと移行方法

付録 B　ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用

付録 C　JP1/NETM/DM のクラスタシステムの構築

付録 D　HP-UX JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストールとセットアップ

付録 E　インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入

付録 F　各バージョンの変更内容

付録 G　用語解説

付録 A　JP1/NETM/DM のバージョンアップと移行方法

ここでは，バージョンアップする手順や，使用するデータベースを変更する場合のデータ移行の方法，PC リプレース時の移行手順など，JP1/NETM/DM の環境を移行する方法について説明します。

付録 A.1　JP1/NETM/DM のバージョンアップ

JP1/NETM/DM をバージョンアップする手順と，バージョンアップ時の注意事項について説明します。

JP1/NETM/DM システム全体をバージョンアップする場合は，次の手順で，上位システムのプログラムから順にバージョンアップしてください。

1. **マネージャおよび中継マネージャをバージョンアップする。**
2. **データベースをアップグレードする。**
3. **中継システムをバージョンアップする。**
4. **クライアントをバージョンアップする。**

バージョンアップした場合，バージョンアップ前の既存の設定内容が引き継がれます。インストール時の各ダイアログボックスには既存の設定内容が表示されるので，変更したい場合だけ設定し直してください。

JP1/NETM/DM をバージョンアップするときの注意事項については，「(5)　バージョンアップ時の注意事項」を参照してください。

(1) マネージャおよび中継マネージャをバージョンアップする

マネージャおよび中継マネージャのコンピュータで，JP1/NETM/DM Manager をバージョンアップします。

JP1 Version 7i 以前の簡易データベースを使用している場合は，リレーショナルデータベースを作成します。

(2) データベースをアップグレードする

JP1/NETM/DM Manager をバージョンアップしたあと，データベースマネージャを使用してリレーショナルデータベースをアップグレードする必要があります。

なお，リレーショナルデータベースをアップグレードする前に，リレーショナルデータベースのバックアップを取得しておくことをお勧めします。取得するバックアップについては，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.9　トラブルに備えたバックアップの取得」を参照してください。

JP1 Version 7i 以前の簡易データベースを使用している場合は，データベースマネージャを使用して，簡易データベースのデータを手順 1. で作成したリレーショナルデータベースに移行します。

データベースマネージャの操作については，「7.4　データベースマネージャの操作方法（Embedded RDB の場合）」または「7.5　データベースマネージャの操作方法（Microsoft SQL Server または Oracle の場合）」を参照してください。

また，「Asset Information Manager Limited」コンポーネントをバージョンアップした場合は，「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャを使用して「Asset Information Manager Limited」のリレーショナルデータベースをアップグレードする必要があります。アップグレードの方法は，「10.3.2　データベースをアップグレードする」を参照してください。

（3）中継システムをバージョンアップする

中継システムのコンピュータで JP1/NETM/DM をバージョンアップします。

JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager を使用している場合は，JP1/NETM/DM Client（中継システム）へバージョンアップします。JP1/NETM/DM Client（中継システム）は，リモートインストール機能を使用して，JP1/NETM/DM Manager から配布することもできます。

また，JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager を使用している場合に，バージョンアップと PC リプレースを併せて実施するときは，中継システムを JP1/NETM/DM Client（中継システム）にバージョンアップしたあとで，「付録 A.4　PC リプレース時のデータ移行」の手順に従って PC をリプレースしてください。JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager で取得したバックアップは，JP1 Version 8 の JP1/NETM/DM Client（中継システム）では復元できません。

（4）クライアントをバージョンアップする

クライアントのコンピュータで JP1/NETM/DM Client をバージョンアップします。リモートインストール機能を使用して，JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）から配布することもできます。

（5）バージョンアップ時の注意事項

JP1/NETM/DM をバージョンアップする場合の注意事項を次に示します。

- JP1 Version 7i より前のバージョンで，JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM SubManager の二つのプログラムがインストールされているマシンを，JP1 Version 8 へバージョンアップする場合は，JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager をアンインストールしてください。
  JP1 Version 8 では，JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継シス

テム）を同じマシンにインストールできません。

- JP1/NETM/DM 08-10 以前のバージョンから，JP1/NETM/DM 08-11 以降にバージョンアップした場合，「Asset Information Manager Limited」の GUI で一部の業務メニューが表示されない状態になっています。使用できる業務メニューをすべて表示するには，データベースをアップグレードしたあとに次の操作を実行してください。
  1. **「Asset Information Manager Limited」にログインする。**
  2. **業務カテゴリ「システム定義」から業務メニュー「利用可能業務割り当て」をクリックする。**
     利用可能業務割り当て画面が表示されます。
  3. **「ソフトウェア適用管理」，「ソフトウェア適用状況」および「配布状況」のチェックボックスをオンにする。**
  4. **［更新］ボタンをクリックする。**

- リモートコントロールマネージャをインストールしている JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM SubManager に，JP1 Version 8 の JP1/NETM/DM Client（中継システム）を上書きインストールすると，リモートコントロールマネージャは削除されます。

- JP1/NETM/DM Client に JP1/NETM/DM Client - Base を上書きインストールした場合，使用できる機能は，JP1/NETM/DM Client - Base で使用できる機能の範囲となります。

- JP1 Version 7i より前のバージョンで次に示すリレーショナルデータベースを使用している場合は，JP1/NETM/DM を JP1 Version 7i 以降にアップグレードする際に，リレーショナルデータベースもアップグレードする必要があります。
  - Oracle8i R8.1.5 または R8.1.6
  - Oracle8
  - Microsoft SQL Server 6.5

  JP1 Version 7i 以降へのアップグレードの際にリレーショナルデータベースをアップグレードする場合は，必ず次の手順でアップグレードしてください。
  1. **JP1/NETM/DM のデータベースのバックアップを取得する。**
  2. **リレーショナルデータベースを，JP1 Version 7i 以降でサポートするバージョンにアップグレードする。**
  3. **JP1/NETM/DM Manager をアップグレードする。**
  4. **データベースマネージャを使用して，JP1/NETM/DM のデータベースをアップグレードする。**
     データベースマネージャを使用して JP1/NETM/DM のデータベースをアップグレードする手順については，「7.5.4　データベースをアップグレードする」を参照してください。

- JP1 Version 7i 以前の簡易データベースを使用している環境から，JP1 Version 8 へ移行する場合，インストール時に運用キーを変更するときは，あらかじめ幾つかの情報を削除しておく必要があります。削除する情報については，「4.2.8(2)　キー項目を変更する場合の注意事項」を参照してください。

- JP1 Version 7i 以前の JP1/NETM/DM Manager からバージョンアップする場合，パッケージを分割配布するジョブが終了したあとでバージョンアップしてください。分割配布するジョブの実行中にバージョンアップすると，分割配布の実行状況を示す百分率 (%) が正しく表示されないことがあります。なお，配布への影響はありません。
- バージョンが 05-24 より前の JP1/NETM/DM Client を 06-00 以降にバージョンアップした場合，レジストリ情報が取得できなくなることがあります。レジストリ情報の取得の前に，再度レジストリ取得項目を転送してください。

付録 A.2　データベースの種類の変更

JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースの種類を変更する場合の，データの移行手順と，移行できるデータについて説明します。

ここで説明する手順は，次のような場合に実施してください。

- Embedded RDB から Microsoft SQL Server に変更する場合
- Microsoft SQL Server から Oracle に変更する場合
- Oracle から Embedded RDB に変更する場合

「Asset Information Manager Limited」を使用している場合の注意事項を次に示します。

- Embedded RDB および Oracle では，デフォルトで大文字と小文字，全角と半角，かたかなとひらがなが区別して検索されます。そのため，Embedded RDB および Oracle から Microsoft SQL Server に移行する場合，データベースの照合順序には「バイナリ順」を設定して，大文字と小文字，全角と半角，かたかなとひらがなが区別できるようにしてください。
- Microsoft SQL Server から Embedded RDB および Oracle に移行する場合，大文字と小文字，全角と半角，かたかなとひらがなは，移行したあとで検索時に区別されます。ただし，Embedded RDB を使用する場合は，サーバセットアップの「LIKE 検索時の大文字小文字の区別（Embedded RDB）」の設定で，大文字と小文字を区別しないで検索することもできます。

(1) 移行手順

リレーショナルデータベースの移行手順を次に示します。

1. **移行するデータをエクスポートする。**
   移行するデータについては，「(2)　移行できるデータ」を参照してください。
2. JP1/NETM/DM Manager **をアンインストールする。**
3. JP1/NETM/DM Manager **を新規にインストールする。**
   インストーラで，変更したあとのデータベースをセットアップします。
4. **データベースマネージャでデータベースを新規作成する。**

5. **手順 1. でエクスポートしたデータをインポートする。**

(2) 移行できるデータ

移行できるデータと，各データをエクスポートおよびインポートする方法を次に示します。

移行できるデータ	エクスポート方法	インポート方法
システム構成情報※	［システム構成］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択してください。	［システム構成］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルから作成］を選択してください。
あて先グループ	［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルへ保存］を選択してください。	［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルから作成］を選択してください。
ID	［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ID ホストをファイルへ保存］を選択してください。	［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルから ID 登録］を選択してください。
あて先グループおよび ID のポリシー	［ポリシーの設定］ダイアログボックスで，［ファイル出力］ボタンをクリックしてください。	［ポリシーの設定］ダイアログボックスで，［ファイルから追加］ボタンをクリックしてください。
パッケージ	dcmpkget コマンドを実行してください。	dcmpkput コマンドを実行してください。
ソフトウェア検索リスト	［管理情報リスト］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルへの保存］を選択してください。	［管理情報リスト］ウィンドウで，［ファイル］－［ファイルから作成］を選択してください。
ユーザインベントリ項目	［ユーザインベントリ項目作成］ダイアログボックスで，［エクスポート］ボタンをクリックしてください。	［ユーザインベントリ項目作成］ダイアログボックスで，［インポート］ボタンをクリックしてください。
ユーザインベントリ情報	CSV 出力ユティリティで，ユーザ資産情報のテンプレートの CSV 形式ファイルを出力してください。	［システム情報］または［あて先］ウィンドウで，［ファイル］－［CSV ファイルを入力］を選択してください。
ソフトウェアインベントリ辞書	dcmdice コマンドを実行してください。	dcmdici コマンドを実行してください。

注※

配布管理システムを階層化している場合，マネージャで出力したファイルには，中継マネージャ配下のシステム構成情報は含まれません。中継マネージャ配下のシステム構成情報を出力する場合は，中継マネージャでシステム構成情報をファイルに出力してください。
また，システム構成情報を復元するときは，中継マネージャでシステム構成情報をインポートしたあと，マネージャから中継マネージャに対して「システム構成情報の取得」ジョブを実行してください。

付録 A.3　OS バージョンアップ時のデータ移行

ここでは，JP1/NETM/DM がインストールされているコンピュータの OS をバージョンアップする場合の手順について説明します。

JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client がインストールされているコンピュータの OS をバージョンアップする場合は，バックアップを取得してから，いったん JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client をアンインストールする必要があります。

JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）または JP1/NETM/DM Client で「AMT 連携機能」を使用してホスト識別子を保管しておくと，データ移行後にホスト識別子を復元できるため，上位システムから移行前と同じ資産として認識されます。クライアントのホスト識別子を保管しておく方法については，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.5.1　クライアントでのホスト識別子の保管」を参照してください。

なお，バックアップの取得時および復元時には，JP1/NETM/DM のサービスを停止する必要があります。JP1/NETM/DM Manager の場合は，Remote Install Server サービスを停止してください。JP1/NETM/DM Client の場合は，クライアントマネージャからクライアントを停止してください。

次に，OS のバージョンアップ時の手順を示します。

1. **JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client のバックアップを取得する。**
   必要になるバックアップ内容については，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.9　トラブルに備えたバックアップの取得」を参照してください。
2. **JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client をアンインストールする。**
   アンインストールの方法については，「1.4　JP1/NETM/DM をアンインストールする」を参照してください。
3. **OS をバージョンアップする。**
4. **JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client を新規にインストールする。**
   JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）または JP1/NETM/DM Client で「AMT 連携機能」を使用してホスト識別子を保管している場合，アンインストール前に使用していたホスト識別子が復元されます。
5. **バックアップを復元する。**

付録 A.4　PC リプレース時のデータ移行

PC のリプレースに伴い，使用中の JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のデータを移行したい場合の手順について説明します。

バックアップの取得時および復元時には，JP1/NETM/DM のサービスを停止する必要があります。JP1/NETM/DM Manager の場合は，Remote Install Server サービスを停止してください。JP1/NETM/DM Client の場合は，クライアントマネージャからクライアントを停止してください。

（1） JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）のデータを移行する

ここでは，JP1/NETM/DM Manager のリレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合の手順を説明します。Embedded RDB を使用している場合の移行手順については，「(4)　Embedded RDB を使用している場合のデータ移行」を参照してください。

JP1/NETM/DM Manager をマネージャとして使用している場合の，PC リプレース時のデータ移行手順を次に示します。

1. **リプレース前の** PC **でバックアップを取得する。**
   必要になるバックアップ内容については，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.9.1 JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）のバックアップ」を参照してください。
2. **リプレース後の** PC **に** JP1/NETM/DM Manager **をインストールする。**
3. **手順** 1. **で取得したバックアップを復元する。**

（2） JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）のデータを移行する

JP1/NETM/DM Manager を中継マネージャとして使用している場合の，PC リプレース時のデータ移行手順を次に示します。

1. **リプレース前の** PC **でバックアップを取得する。**
   必要になるバックアップ内容については，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.9.2 JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）のバックアップ」を参照してください。
2. **ホスト識別子を使用している場合，**Windows **のインストールディレクトリ配下にある** netmdmp.hid **のバックアップを取得する。**
3. **手順** 2. **で取得した** netmdmp.hid **を，リプレース後の** PC **にある** Windows **のインストールディレクトリ配下にコピーする。**
4. **リプレース後の** PC **に** JP1/NETM/DM Manager **をインストールする。**
5. **手順** 1. **で取得したバックアップを復元する。**

（3） JP1/NETM/DM Client **のデータを移行する**

JP1/NETM/DM Client（中継システムおよびクライアント）の，PC リプレース時のデータ移行手順を次に示します。

1. **リプレース前の** PC **でバックアップを取得する。**
   JP1/NETM/DM Client（中継システム）で必要になるバックアップ内容については，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.9.3　JP1/NETM/DM Client（中継システム）のバックアップ」を参照してください。
   JP1/NETM/DM Client（クライアント）で必要になるバックアップ内容については，マニュアル「運用ガイド 2」の「5.9.4　JP1/NETM/DM Client（クライアント）の

バックアップ」を参照してください。

2. **ホスト識別子を使用している場合，**Windows **のインストールディレクトリ配下にある** netmdmp.hid **のバックアップを取得する。**
3. **手順** 2. **で取得した** netmdmp.hid **を，リプレース後の** PC **にある** Windows **のインストールディレクトリ配下にコピーする。**
4. **リプレース後の** PC **に** JP1/NETM/DM Client **をインストールする。**
5. **手順** 1. **で取得したバックアップを手順** 4. **のインストール先にコピーする。**

（4） Embedded RDB を使用している場合のデータ移行

PC をリプレースする場合など，異なる環境に Embedded RDB を新規に作成し直す必要があるときは，データベース移行時のバックアップに netmdb_unload.bat **コマンド**を，データベースの復元に netmdb_reload.bat **コマンド**を使用します。バックアップの取得時および復元時には，JP1/NETM/DM のサービス（Remote Install Server サービス）を停止してください。

データベースに Embedded RDB を使用している PC をリプレースする手順と，各コマンドについて説明します。

なお，［操作ログ一覧］ウィンドウを使用する場合，管理する操作ログの容量によってデータベースのバックアップおよび復元に時間が掛かるときがあります。

（a） 移行手順

PC リプレース時の移行手順を次に示します。

1. **リプレース前の** PC **でデータベースの移行用バックアップを取得する。**
   netmdb_unload.bat コマンドを使用して，データベースの移行用バックアップを取得します。
   また，操作履歴退避ディレクトリのバックアップもあわせて取得してください。
2. **リプレース後の** PC **に** JP1/NETM/DM Manager **をインストールする。**
3. **データベースマネージャでデータベース（**Embedded RDB**）を新規作成する。**
   データベースマネージャの操作方法については，「7.4　データベースマネージャの操作方法（Embedded RDB の場合）」を参照してください。
4. **データベースを復元する。**
   netmdb_reload.bat コマンドを使用して，手順 1. で取得した移行用バックアップから，データベースを復元します。
   また，操作履歴退避ディレクトリのバックアップも復元してください。

次に，各コマンドを使用するときの注意事項を次に示します。

- 各コマンドの BAT ファイルの内容を変更しないでください。変更した場合，コマンドが実行できなくなるおそれがあります。

● コマンドを実行するときは，あらかじめ，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］で，JP1/NETM/DM Manager の「Remote Install Server」サービスを停止してください。

● Administrator 権限を持ったユーザでコマンドを実行してください。

(b) データベースの移行時に使用するコマンド

Embedded RDB を移行するときに使用するコマンドについて説明します。

● データベースの移行用バックアップ（netmdb_unload.bat コマンド）

Embedded RDB の移行用バックアップを取得する，netmdb_unload.bat コマンドについて説明します。このコマンドは，JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥bin 下に格納されています。

機能

データベースを移行するためのバックアップを取得します。パッケージファイルおよび操作履歴格納ディレクトリのバックアップも自動的に取得します。

形式

```
netmdb_unload.bat  ポート番号
                   管理者ユーザID
                   パスワード
                   /i JP1/NETM/DM Managerのインストールディレクトリ
                   /b 移行用バックアップファイル格納先ディレクトリ
                   /o 実行結果の出力先ファイル名
```

オプション

- **ポート番号**
  データベースに接続するポート番号を指定します。
- **管理者ユーザ** ID
  データベースにログオンする管理者ユーザ ID を指定します。
- **パスワード**
  データベースにログオンするためのパスワードを指定します。
- /i
  JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリをフルパスで指定します。
- /b
  移行用バックアップファイルの格納先ディレクトリをフルパスで指定します。格納先ディレクトリは 150 バイト以内で指定することをお勧めします。極端に長いパスで指定すると，ディレクトリの作成に失敗するおそれがあります。なお，格納先ディレクトリはローカルドライブを指定してください。また，格納先ディレクトリは，半角英数字，半角スペース，および次に示す記号で指定してください。
  「:」，「.」，「¥」，「#」，「@」，「(」，「)」，「「」，「」」
- /o
  実行結果を出力するファイル名をフルパスで指定します。

リターンコード

netmdb_unload.bat コマンド実行時のリターンコードを次の表に示します。

リターンコード	内容
0	正常終了
-1	異常終了

注意事項

- netmdb_unload.bat コマンドおよび netmdb_reload.bat コマンドで設定する管理者ユーザ ID は，同じ管理者ユーザ ID を指定してください。
- データベースのアンロードを実行すると，格納先ディレクトリに，以下に示すファイルまたはフォルダが作成されます。
  ・netmdbreplece ファイル
  ・「RESOURCE」フォルダ
  ・「MONITORING」フォルダ
  バックアップする場合，格納先ディレクトリに指定したパスに上記のファイルおよびフォルダがあるとき，これらは上書きされます。
- netmdb_unload.bat コマンドのオプションは，形式で示した順序で設定してください。

実行例

Embedded RDB を使用している場合に，移行用バックアップを取得する例を説明します。
この実行例では，各ディレクトリを次のように指定しています。

- JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ
  C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM
- 移行用バックアップファイル格納先ディレクトリ
  C:¥NETMDB
- 実行結果の出力先ファイル名
  C:¥NETMDB¥unload.txt

また，コマンドを実行する前に，移行用バックアップファイル格納先ディレクトリおよび実行結果の出力先ファイルの格納先ディレクトリを作成しておいてください。
コマンドの実行例を次に示します。

```
netmdb_unload.bat ポート番号 管理者ユーザID パスワード /i "C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM" /b C:¥NETMDB /o C:¥NETMDB¥unload.txt
```

● データベースの復元（netmdb_reload.bat コマンド）

Embedded RDB を復元する，netmdb_reload.bat コマンドについて説明します。このコマンドは，JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ ¥bin 下に格納されています。

機能

netmdb_unload.bat コマンドで取得した移行用バックアップからデータベースを復元します。パッケージファイルおよび操作履歴格納ディレクトリのバックアップも

復元されます。

形式

```
netmdb_reload.bat  ポート番号
                   管理者ユーザID
                   パスワード
                   /i JP1/NETM/DM Managerのインストールディレクトリ
                   /b 移行用バックアップファイル格納先ディレクトリ
                   /o 実行結果の出力先ファイル名
```

オプション

- **ポート番号**
  データベースに接続するポート番号を指定します。
- **管理者ユーザ ID**
  データベースにログオンする管理者ユーザ ID を指定します。
- **パスワード**
  データベースにログオンするためのパスワードを指定します。
- /i
  JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリをフルパスで指定します。
- /b
  移行用バックアップファイルの格納先ディレクトリをフルパスで指定します。格納先ディレクトリは 150 バイト以内で指定することをお勧めします。極端に長いパスで指定すると，ディレクトリの作成に失敗するおそれがあります。格納先ディレクトリはローカルドライブを指定してください。また，格納先ディレクトリは，半角英数字，半角スペース，および次に示す記号で指定してください。
  「:」，「.」，「¥」，「#」，「@」，「(」，「)」，「「」，「」」
- /o
  実行結果を出力するファイル名をフルパスで指定します。

リターンコード

netmdb_reload.bat コマンド実行時のリターンコードを次の表に示します。

リターンコード	内容
0	正常終了
-1	異常終了

注意事項

- データベースをアップグレードする前に取得したバックアップファイルは，アップグレードが完了したあとはデータベースの構造が異なるため復元できません。データベースをアップグレードしたあと，再度バックアップを取得してください。
- netmdb_unload.bat コマンドおよび netmdb_reload.bat コマンドで設定する管理者ユーザ ID は，同じ管理者ユーザ ID を指定してください。
- netmdb_reload.bat コマンドのオプションは，形式で示した順序で設定してください。

実行例

netmdb_unload.bat コマンドで取得した移行用バックアップから Embedded RDB を復元する例を説明します。

この実行例では，各ディレクトリを次のように指定しています。

- JP1/NETM/DM Manager のインストールディレクトリ
  C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM
- 移行用バックアップファイル格納先ディレクトリ
  C:¥NETMDB
- 実行結果の出力先ファイル名
  C:¥NETMDB¥unload.txt

また，コマンドを実行する前に，実行結果の出力先ファイルの格納先ディレクトリを作成しておいてください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
netmdb_reload.bat ポート番号 管理者ユーザID パスワード /i "C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM" /b C:¥NETMDB /o C:¥NETMDB¥reload.txt
```

（5）Asset Information Manager Limited を使用している場合のデータ移行

「Asset Information Manager Limited」を使用している PC をリプレースする場合の移行手順を次に示します。

1. **リプレース前の PC でバックアップを取得する。**
   「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャで，「データベースの CSV バックアップ」メニューからバックアップを取得します。データベースマネージャでの操作方法については，「10.3.3　データベースを CSV 形式ファイルでバックアップする」を参照してください。
2. **リプレース後の PC に JP1/NETM/DM Manager をインストールする。**
   インストールするコンポーネントに「Asset Information Manager Limited」を選択して，JP1/NETM/DM Manager をインストールしてください。
3. **「Asset Information Manager Limited」のサーバセットアップで，「データベース情報」の「ログイン ID」および「サービス名」を設定する。**
4. **「Asset Information Manager Limited」のデータベースを新規に作成する。**
5. **バックアップを復元する。**
   「Asset Information Manager Limited」のデータベースマネージャで，「データベースの CSV リストア」メニューからバックアップを復元します。データベースマネージャでの操作方法については，「10.3.4　データベースを CSV 形式ファイルからリストアする」を参照してください。

「Asset Information Manager Limited」のバックアップの復元後，次に示す順でサービスを起動してください。

1. JP1/NETM/Client Security Control - Manager のサービス（JP1/NETM/Client Security Control と連携している場合）
2. 「Asset Information Manager Limited」のサービス，コマンドおよびタスク
3. World Wide Web Publishing Service または World Wide Web Publishing
4. IIS Admin Service または IIS Admin

付録 B　ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用

次に示すターミナルサービス環境に，JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールして運用できます。

1. ターミナルサーバが稼働している Windows Server 2008 および Windows Server 2003
2. アプリケーションサーバモードで構築したターミナルサービスが稼働している Windows 2000 Server，Windows 2000 Advanced Server，および Windows 2000 Datacenter Server

JP1/NETM/DM のインストールは，ターミナルサービス環境にアプリケーションをインストールする方法に従って実行してください。なお，ターミナルサービス環境に対応しているのは，JP1/NETM/DM Client（クライアント）だけです。JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）は対応していません。

JP1/NETM/DM はターミナルサービスに対応していないため，ローカルコンソールで使用する必要があります。ローカルコンソールで使用する場合，クライアントの機能の一部に制限があります。また，ソフトウェアのリモートインストール時には，ターミナルサービスのモードを変更する必要があります。

ここでは，1 および 2 で示した環境のローカルコンソールで JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合の制限，およびローカルコンソールで使用している JP1/NETM/DM Client（クライアント）にソフトウェアをリモートインストールする方法について説明します。

付録 B.1　ローカルコンソールで JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合の制限

ローカルコンソールで JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合は，次に示す制限があります。

- インストールセットを使用して JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールできません。
- 一般ユーザ権限でログオンした場合で，次に示すときには，パッケージをインストールできません。
  - クライアントマネージャでクライアントを停止したとき
  - ［クライアント常駐・ポーリング］パネルの「クライアントを常駐する」チェックボックス，および［権限］パネルの「非常駐でジョブ実行またはパッケージセットアップマネージャを使用する」チェックボックスの両方をオフにしたとき
- クライアントセットアップの［通知ダイアログ］パネルで，「NETM_DM_P スタート

アップから起動失敗したショートカットの削除確認ダイアログ」チェックボックスをオンにしても，実行できないアイコンやショートカットを削除するかどうかを確認するダイアログボックスは表示されません。

付録 B.2　ローカルコンソールで使用している JP1/NETM/DM Client（クライアント）にソフトウェアをリモートインストールする方法

ローカルコンソールで使用している JP1/NETM/DM Client にソフトウェアをリモートインストールする場合は，インストール前にターミナルサービスのモードを「アプリケーションインストールモード」に変更し，インストール後に「アプリケーション実行モード」に戻す必要があります。

注意事項

モードの変更はターミナルサービス全体に影響を与えるため，十分に注意してリモートインストールを実施してください。

リモートインストールする方法は，次に示すように，ソフトウェアのパッケージ種別またはインストール方法によって異なります。

- 他社ソフトウェア，または日立プログラムプロダクトをリモートインストールする場合
- JP1/NETM/DM Client（クライアント）をリモートインストールする場合
- パッケージセットアップマネージャからインストールする場合

それぞれの場合のインストール方法について説明します。

(1) 他社ソフトウェア，または日立プログラムプロダクトをリモートインストールする場合

他社ソフトウェア，または日立プログラムプロダクトをリモートインストールする場合は，パッケージング時に，インストール前後にターミナルサービスのモードが変更されるよう指定します。

他社ソフトウェア，または日立プログラムプロダクトのリモートインストール方法を次に示します。

1. **［JP1/NETM/DM パッケージング］ダイアログボックスの［外部プログラム］パネルで，コマンドを次のように指定する。**
   - インストール直前：「change user /install」
   - インストール直後：「change user /execute」
2. **［外部プログラム］パネルの［詳細］ボタンをクリックすると表示される［外部プログラム用詳細設定］ダイアログボックスで，次のように設定する。**

- 外部プログラム処理結果の取得方法：「外部プログラムの終了コードで通知」
- 処理結果エラー時の取り扱い：「エラーとせずに処理を続行する」

3. **そのほかの項目を任意に指定し，パッケージングを実行する。**
   ソフトウェアがパッケージングされます。

4. 3. **で作成したパッケージを** JP1/NETM/DM Client**（クライアント）にリモートインストールする。**
   インストール前にターミナルサービスがアプリケーションインストールモードに変更され，ソフトウェアがインストールされます。インストールが終わると，ターミナルサービスがアプリケーション実行モードに戻ります。

（2）JP1/NETM/DM Client（クライアント）をリモートインストールする場合

JP1/NETM/DM Client（クライアント）をリモートインストールする場合は，パッケージング時に，インストール前にターミナルサービスのモードが変更されるよう指定します。また，JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールするジョブとは別に，インストール後にモードを変更するジョブを実行します。その際，任意のファイルをインストールする必要があります。

JP1/NETM/DM Client（クライアント）のリモートインストール方法を次に示します。

1. **［**JP1/NETM/DM **パッケージング］ダイアログボックスの［外部プログラム］パネルで，コマンドを次のように指定する。**
   - インストール直前：「change user /install」

   JP1/NETM/DM Client（クライアント）をリモートインストールする場合は，インストール直後に実行するコマンドの指定は無効です。

2. **［外部プログラム］パネルの［詳細］ボタンをクリックすると表示される［外部プログラム用詳細設定］ダイアログボックスで，次のように設定する。**
   - 外部プログラム処理結果の取得方法：「外部プログラムの終了コードで通知」
   - 処理結果エラー時の取り扱い：「エラーとせずに処理を続行する」

3. **そのほかの項目を任意に指定し，パッケージングを実行する。**
   JP1/NETM/DM Client（クライアント）がパッケージングされます。

4. 3. **で作成したパッケージをリモートインストールする。**
   インストール前にターミナルサービスがアプリケーションインストールモードに変更され，JP1/NETM/DM Client（クライアント）がインストールされます。
   続けて，インストール後にターミナルサービスのモードを元に戻すためのジョブを作成します。

5. **［**JP1/NETM/DM **パッケージャ］ウィンドウで任意のファイルを選択し，［実行］メニューから［パッケージング］を選択する。**
   JP1/NETM/DM Client（クライアント）にインストールしても問題のないファイルを選択してください。［パッケージング］を選択すると，［JP1/NETM/DM パッケージ

ング］ダイアログボックスが表示されます。

6. **［JP1/NETM/DM パッケージング］ダイアログボックスの［外部プログラム］パネルで，コマンドを次のように指定する。**
   - インストール直後：「change user /execute」

7. **［外部プログラム］パネルの［詳細］ボタンをクリックすると表示される［外部プログラム用詳細設定］ダイアログボックスで，次のように設定する。**
   - 外部プログラム処理結果の取得方法：「外部プログラムの終了コードで通知」
   - 処理結果エラー時の取り扱い：「エラーとせずに処理を続行する」

8. **そのほかの項目を任意に指定し，パッケージングを実行する。**
   ファイルがパッケージングされます。

9. **4. のリモートインストールが終了したのを確認してから，8. で作成したパッケージをリモートインストールする。**
   ファイルがインストールされ，ターミナルサービスがアプリケーション実行モードに戻ります。

（3）パッケージセットアップマネージャからインストールする場合

パッケージセットアップマネージャからパッケージをインストールする場合は，インストールを実施する PC で，ターミナルサービスのモードを直接変更します。

パッケージセットアップマネージャからのインストール方法を次に示します。

1. **コマンドプロンプトで「change user /install」と入力し，実行する。**
   ターミナルサービスがアプリケーションインストールモードに変わります。

2. **パッケージセットアップマネージャでパッケージを選択し，インストールを実行する。**
   選択したソフトウェアがインストールされます。

3. **インストール完了後，コマンドプロンプトで「change user /execute」と入力し，実行する。**
   ターミナルサービスがアプリケーション実行モードに戻ります。

付録 C　JP1/NETM/DM のクラスタシステムの構築

JP1/NETM/DM Manager の「サーバ」および「Asset Information Manager Limited」はクラスタシステム環境で使用できます。ここでは，JP1/NETM/DM のクラスタシステムを構築する場合の環境構築手順および注意事項を説明します。

なお，リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用している場合，サーバ機能とデータベースサーバを別々の PC に配置できないため，サーバとデータベースを互いに監視させる構成はできません。

付録 C.1　クラスタシステムに必要なプログラム

クラスタシステムを構築する場合に必要なプログラムを次の表に示します。

表 C-1　クラスタシステムに必要なプログラム

項目	必要なプログラム
OS	Windows Server 2008 Enterprise，Windows Server 2008 Standard，Windows Server 2003, Enterprise Edition，Windows 2000 Datacenter Server，または Windows 2000 Advanced Server
クラスタソフトウェア	Microsoft Cluster Service
管理データベース	• Embedded RDB • Microsoft SQL Server Microsoft SQL Server 2005 Enterprise Edition， Microsoft SQL Server 2005 Enterprise x64 Edition， Microsoft SQL Server 2000 Enterprise Edition，または Microsoft SQL Server 7.0 Enterprise Edition • Oracle Oracle9i Enterprise Edition，または Oracle8i Enterprise Edition フェールオーバー機能を使用する場合は，Oracle Fail Safe が必要になります。バージョンは使用する Oracle のバージョンに合わせてください。
管理データベースに Solaris クラスタシステム環境上の Oracle を使用する場合	Solaris 7 ＋ VERITAS Cluster Server 1.1

付録 C.2　JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の環境構築

JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の環境構築手順を次に示します。

（1） Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによるグループ・リソース作成

JP1/NETM/DM 用のグループを作成し，IP アドレスリソース，ネットワーク名リソース，および共有ディスク（物理ディスク）リソースを登録します。

Microsoft Cluster Service 初期導入時には，あらかじめ「Cluster Group」というグループが作成されますが，これとは別に作成してください。また，実行系として動作させるサーバを優先サーバに設定します。

作成方法の詳細については，Microsoft Cluster Service のマニュアルを参照してください。

（2） データベースサーバにフェールオーバー機能を適用させるクラスタ環境の作成

Microsoft SQL Server 7.0 をクラスタシステム上で使用する場合

Microsoft SQL Server フェールオーバークラスタウィザードによるクラスタ化サービスのセットアップが必要です。
クラスタを構成する実行系サーバのローカルディスクに Microsoft SQL Server をインストール後，フェールオーバークラスタウィザードでクラスタ化サービスをセットアップしてください。Microsoft SQL Server のインストールおよびセットアップ方法の詳細については，Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

Microsoft SQL Server 2000 をクラスタシステム上で使用する場合

Microsoft SQL Server インストールウィザードによるフェールオーバークラスタのセットアップが必要です。
クラスタを構成する実行系サーバのローカルディスクに Microsoft SQL Server をインストールします。このとき，［仮想サーバ］を選択し，仮想サーバ名を入力することによって，フェールオーバークラスタのセットアップが実行されます。その後，待機系サーバのローカルディスクに Microsoft SQL Server を「ノードの追加」でインストールします。Microsoft SQL Server のインストールおよびセットアップ方法の詳細については，Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。
なお，Microsoft SQL Server をクラスタシステム環境で使用する場合，Microsoft SQL Server と Microsoft SQL Server クライアント間の通信には，TCP/IP を使用することをお勧めします。

Microsoft SQL Server 2005 をクラスタシステム上で使用する場合

Microsoft SQL Server インストールウィザードによるフェールオーバークラスタのセットアップが必要です。
クラスタを構成する実行系サーバのローカルディスクに Microsoft SQL Server をインストールします。このとき，［インストールするコンポーネント］ダイアログボックスで，「フェールオーバークラスタの作成」チェックボックスをオンにすることによって，フェールオーバークラスタのインストールが開始されます。その後，［クラ

スタノードの構成］ダイアログボックスで，待機系サーバを「選択したノード」に追加します。
Microsoft SQL Server のインストールおよびセットアップ方法の詳細については，Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

Oracle をクラスタシステム上で使用する場合

クラスタを構成する実行系サーバ，待機系サーバのそれぞれのローカルディスクに Oracle サーバを構成するソフトウェアおよび Oracle Fail Safe Server をインストールしてください。その後，Oracle Fail Safe Manager でクラスタ化サービスをセットアップします。また，Oracle データベース・インスタンスは，共有ディスク上に作成してください。Oracle クラスタ環境のセットアップ方法の詳細については，Oracle の Fail Safe についてのマニュアルを参照してください。

(3) フェールオーバー機能使用時の環境作成

JP1/NETM/DM のフェールオーバー機能を使用する環境の作成方法を，手順に沿って説明します。

(a) 実行系サーバに JP1/NETM/DM Manager をインストールする

インストール，セットアップ，データベースマネージャの順に設定してください。

なお，インストールするコンポーネントの設定によっては，表示されない設定項目があります。また，表に記載されていない項目については，通常どおりに設定してください。インストール，セットアップ，およびデータベースマネージャの設定の詳細については，次の個所を参照してください。

●「2.　JP1/NETM/DM Manager をインストールする」

●「4.　JP1/NETM/DM Manager をセットアップする」

●「7.　リレーショナルデータベースを設定する」

JP1/NETM/DM Manager の「サーバ」および「Asset Information Manager Limited」のインストール時に必要な設定を次の表に示します。

表 C-2　JP1/NETM/DM Manager の設定方法

プログラム	設定項目	設定内容	サーバ	AIM Limited ※
インストール	JP1/NETM/DM Manager の種別	「マネージャ」を選択する。	○	○
	インストールコンポーネントの選択	「サーバ」および「Asset Information Manager Limited」のうち，使用するコンポーネントを選択する。	○	○

プログラム	設定項目	設定内容	サーバ	AIM Limited ※
	インストールディレクトリの設定	ローカルディスクを指定する。	○	○
	データベースの設定（Microsoft SQL Server を使用する場合）	Microsoft SQL Server をクラスタシステム上に構築している場合は，データベースサーバのホスト名に，論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定する。	○	○
	データベースの設定（Oracle を使用する場合）	Oracle をフェールオーバークラスタシステム上に構築している場合は，データベースサーバのホスト名に，論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定する。	○	○
	パッケージ格納ディレクトリの設定	共有ディスクを指定する。	○	－
	ソフトウェア操作履歴格納ディレクトリの設定	共有ディスクまたはネットワークドライブを指定する。	○	－
	サービスの設定（新規インストールの場合だけ）	「スタートアップの種類」に「手動」を選択する。	○	－
	接続先の設定（リモートインストールマネージャ）	論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定する。	－	○
	Asset Information Manager Limited の仮想ディレクトリの設定	共有ディスクを指定する。	－	○
セットアップ	［クラスタ設定］パネル	• 「クラスタシステム環境で使用する」チェックボックスをオンにする。 • JP1/NETM/DM Manager の論理ホスト名を，ドメイン名付きで指定する。	○	－
	［稼働監視］パネル	「削除時に退避する」のチェックボックスをオンにする場合，「退避ディレクトリ」に共有ディスクまたはネットワークドライブを指定する。	○	－

プログラム	設定項目	設定内容	サーバ	AIM Limited ※
	［監査ログ］パネル	「監査ログを出力する」のチェックボックスをオンにする場合，「監査ログの出力ディレクトリ」にローカルディスクを指定する（ただし，JP1/NETM/Audit と連携する場合だけ）。	○	―
SQL Server クライアントネットワークユティリティ（Microsoft SQL Server を使用する場合）	使用するネットワークライブラリの設定	クラスタシステム上の Microsoft SQL Server に接続する場合，接続のネットワークライブラリに TCP/IP を使用する。SQL クライアント設定ユティリティで，Microsoft SQL Server の論理ホスト名を使用した設定を追加する。	○	○
Oracle Net8 Assistant または Net Manager（Oracle を使用する場合）	ネット・サービス名の作成	「NETM_ 論理ホスト名」で作成する。Oracle をフェールオーバークラスタシステム上に構築している場合，アドレスの構成で指定するホスト名に，接続先の Oracle の論理ホスト名を指定する。	○	―
データベースマネージャ（実行系だけ）	データベースの詳細設定（Microsoft SQL Server の場合）	すべてのデータベースファイルについて，共有ディスクを指定する。	○	―
	表領域の詳細設定（Oracle の場合）		○	―
データベースマネージャ（Embedded RDB の場合）	クラスタシステム環境の設定	「クラスタシステム環境で使用する」をチェックして，「実行系」または「待機系」を選択する。論理ホスト名と実行系ホスト名を指定する。	○	―
	管理データベースの設定	管理データベース領域パスに共有ディスクを指定する。作業表領域パスにローカルディスクを指定する。「自動増分を行う」チェックボックスは，実行系サーバと待機系サーバで同じ設定にする。	○	―

プログラム	設定項目	設定内容	サーバ	AIM Limited ※
	データベースの詳細設定	すべてのデータベースファイルに，共有ディスクを指定する。	○	－
Asset Information Manager Limited の環境設定（データソース / ネット・サービスの作成）（Oracle を使用する場合）	ネット・サービスの作成	Oracle をフェールオーバークラスタシステム上に構築している場合は，「サーバ」に接続先の Oracle の論理ホスト名を指定する。	－	○
Asset Information Manager Limited の環境設定（データベースマネージャ）（Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合，実行系だけ）	データベースの詳細設定	すべてのデータベースファイルについて，共有ディスクを指定する。	－	○
Asset Information Manager Limited の環境設定（データベースマネージャ）（Embedded RDB を使用する場合）	クラスタシステム設定	「クラスタシステム環境で使用する」をチェックして，「実行系」または「待機系」を選択する。論理ホスト名と実行系ホスト名を指定する。 実行系サーバと待機系サーバでは，同じポート番号を指定する。	－	○
	データベースの詳細設定	格納先フォルダ名に，共有ディスクを指定する。 実行系サーバと待機系サーバでは，同じ「格納先フォルダ名」および「サイズ」を指定する。	－	○

（凡例）
　○：コンポーネント選択時に設定が必要な項目
　－：コンポーネント選択時に設定が不要な項目
注※　AIM Limited：Asset Information Manager Limited

すでに JP1/NETM/DM Manager をフェールオーバーさせない構成で環境を構築済みで，JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールした場合，［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］から，「Remote Install Server」サービスをダブルクリックし，スタートアップの種類を「自動」から「手動」に変更してください。

JP1/NETM/DM Manager インストール完了時に再起動を要求された場合は，ここでコンピュータを再起動します。

(b) クラスタアドミニストレータでグループを移動する

これによって所有者が待機系サーバになります。

(c) 待機系サーバに JP1/NETM/DM Manager をインストールする

待機系サーバの環境を構築します。インストール手順および設定内容については，「(a) 実行系サーバに JP1/NETM/DM Manager をインストールする」を参照してください。

(d) クラスタアドミニストレータでグループを移動する

これによって所有者が実行系サーバになります。

(e) クラスタアドミニストレータで，JP1/NETM/DM Manager のリソースを新規作成する

設定内容を表 C-3 ～表 C-7 に示します。

表 C-3 「サーバ」を使用する場合のリソース設定内容

登録リソース	設定項目	設定内容
Remote Install Server	名前	任意の名称を指定する。
	リソースの種類	「汎用サービス」を設定する。
	グループ	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって作成したグループ名を設定する。
	実行可能な所有者	実行系および待機系の 2 台のノードを設定する。
	依存関係	• Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって登録したネットワーク名および物理ディスクを設定する。 • Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合に，RDBMS を同一グループに設定しているときは，RDBMS のリソースを設定する。 • Embedded RDB を使用する場合は，表 C-4 の「HiRDBClusterService_JN1」のリソースを設定する。
	汎用サービスパラメータ	Remote Install Server
	レジストリの複製	SOFTWARE¥HITACHI¥NETM/DM

表 C-4　Embedded RDB を使用する場合の「HiRDB/ClusterService_JN1」のリソース設定内容

登録リソース	設定項目	設定内容
HiRDBClusterService_JN1	名前	任意の名称を指定する。
	リソースの種類	「汎用サービス」を設定する。

登録リソース	設定項目	設定内容
	グループ	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって作成したグループ名を設定する。
	実行可能な所有者	実行系および待機系の 2 台のノードを設定する。
	依存関係	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって登録したネットワーク名および物理ディスクを設定する。
	汎用サービスパラメータ	HiRDBClusterService_JN1
	レジストリの複製	指定しない。

クラスタアドミニストレータで，汎用サービスリソース「Remote Install Server」をオンラインにします。以降，Remote Install Server サービスを停止・開始するときは，クラスタアドミニストレータを使用して状態をオフラインやオンラインにしてください。

表 C-5 「Asset Information Manager Limited」を使用する場合のリソース設定内容

登録リソース	設定項目	設定内容
Asset Information Synchronous Service	名前	任意の名称を指定する。
	リソースの種類	「汎用サービス」を設定する。
	グループ	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって作成したグループ名を設定する。
	実行可能な所有者	実行系および待機系の 2 台のノードを設定する。
	依存関係	• Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって登録したネットワーク名および物理ディスクを設定する。 • Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合に，RDBMS を同一グループに設定しているときは，RDBMS のリソースを設定する。 • Embedded RDB を使用する場合は，表 C-6 の「HiRDBClusterService_AM1」のリソースを設定する。
	汎用サービスパラメータ	AssetInformationSynchronousService
	レジストリの複製	指定しない。

表 C-6　Embedded RDB を使用する場合の「HiRDB/ClusterService_AM1」のリソース設定内容

登録リソース	設定項目	設定内容
HiRDBClusterService_AM1	名前	任意の名称を指定する。
	リソースの種類	「汎用サービス」を設定する。
	グループ	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって作成したグループ名を設定する。
	実行可能な所有者	実行系および待機系の 2 台のノードを設定する。
	依存関係	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって登録したネットワーク名および物理ディスクを設定する。
	汎用サービスパラメータ	HiRDBClusterService_AM1
	レジストリの複製	指定しない。

表 C-7 「Asset Information Manager Limited」を使用する場合の Microsoft Internet Information Services のリソース設定内容

登録リソース	設定項目	設定内容
Microsoft Internet Information Services	名前	任意の名称を指定する。
	リソースの種類	次の値を設定する。 Windows 2000 の場合 　IIS Server Instance Windows Server 2008 および Windows Server 2003 の場合 　汎用スクリプト
	グループ	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって作成したグループ名を設定する。
	実行可能な所有者	実行系および待機系の 2 台のノードを設定する。
	依存関係	Microsoft Cluster Service のクラスタアドミニストレータによって登録したネットワーク名および物理ディスクを設定する。
	パラメータ （Windows 2000 の場合）	フェールオーバーするサービスに設定する。「IIS」で「WWW」のラジオボタンを選択状態にし，「IIS サーバー」のコンボボックスで「既定の Web サイト」を選択する。

登録リソース	設定項目	設定内容
	スクリプトのファイルパス（Windows Server 2003 の場合）	次の値を設定する。 %systemroot%¥System32¥Inetsrv¥Clusweb.vbs

（4） JP1/NETM/DM Manager 直下のシステムの環境構築の手順

JP1/NETM/DM Manager 直下の中継システムまたはクライアントの環境構築手順を次に示します。

1. **TCP/IP の定義に，JP1/NETM/DM Manager の論理ホスト名と IP アドレスを設定する。**
2. **セットアップを設定する。**
   接続先上位サーバの設定に論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定してください。

（5） 各コンポーネントを使用する場合の接続先の指定

JP1/NETM/DM の各機能を使用する場合に，インストール時の接続先には論理ホスト名または論理 IP アドレスを使用してください。

各コンポーネントを使用する場合の接続先の指定方法を次の表に示します。

表 C-8　各コンポーネントを使用する場合の接続先の指定方法

コンポーネント	ダイアログボックス名	設定内容
サーバ本体機能	サーバセットアップ（［AIM 関連］パネル）	Asset Information Manager Limited をフェールオーバークラスタシステム上に構築している場合，「AIM の URL」に接続先の論理ホスト名または論理 IP アドレス指定する。
リモートインストールマネージャ	接続先の設定（インストーラ）	リモートインストールマネージャの接続先に，論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定する。
	JP1/NETM/DM ログオン（ログオン画面）	
パッケージャ	接続先の設定	パッケージャの接続先に論理ホスト名または論理 IP アドレスを指定する。

（6） ファイアウォールを使用した環境での設定

JP1/NETM/DM Manager をクラスタシステム構成，かつファイアウォールを使用した構成にする場合，通過アドレスには物理アドレスを設定してください。

（7） フェールオーバー発生後の対処

フェールオーバーが発生した場合のユーザの対処方法を次の表に示します。なお，リレーショナルデータベース環境に Oracle のクラスタ環境を使用する場合は，通信エラー

による再接続を行うことなく業務を続けることができます。

表 C-9　フェールオーバー後のユーザの対処内容

項番	フェールオーバー発生時に実行中の処理	フェールオーバー後の対処内容
1	リモートインストールマネージャ・インベントリビューア起動中	通信エラーまたはデータベースアクセスエラーのダイアログ出力後，JP1/NETM/DM サーバに再接続してください。
2	ジョブ登録中	通信エラーまたはデータベースアクセスエラーのダイアログ出力後，再度，ジョブを登録してください。
3	ジョブ実行待ち	ジョブを再実行してください。
4	ジョブ実行中（20%）	エラーとなったジョブだけ再実行してください。（実行待ち・起動失敗・中断中・インストール／収集待ち・インストール拒否・完了・正常終了状態のジョブは対処不要）
5	進行度 20% 以上のジョブに対するジョブ再実行中	ジョブ実行状況のフォルダ「中継下ノード再実行」下のジョブの状態について項番 3 および 4 を実行してください。
6	ID の編集（ID 管理中継，クライアントの追加削除，パスワード変更）後	ジョブ実行状況のフォルダ「ID グループの編集」下のジョブの状態について項番 3 および 4 を実行してください。
7	JP1/NETM/DM Manager の［サーバセットアップ］-［システム構成関連］パネルで「システム構成情報の自動反映」と「システム構成変更時の連携」の設定を有効にしている場合	ジョブ実行状況のフォルダ「システム構成情報の編集」下のジョブの状態について項番 3 および 4 を実行してください。
8	ジョブ定義編集中	通信エラーまたはデータベースアクセスエラーのダイアログ出力後，再度，ジョブ定義を新規作成してください。編集中のジョブ定義は，使用できなくなっているため削除してください。
9	CSV 出力ユティリティ実行中	通信エラーまたはデータベースアクセスエラーのダイアログ出力後，再実行してください。

項番	フェールオーバー発生時に実行中の処理	フェールオーバー後の対処内容
10	データベースマネージャ実行中	データベースアクセスエラーのダイアログ出力後，場合に応じて対処してください。 • 新規にデータベースを作成中の場合 データベースを削除後，再実行してください。 • 管理ファイルを移行中の場合 データベースを削除・新規作成後，再実行してください。 • データベース回復中の場合 バックアップからデータベースを復元し，再実行してください。 • データベースアップグレード中の場合 バックアップからデータベースを復元し，再実行してください。 • 資源をファイルシステムに移行中の場合 パッケージ格納先ディレクトリ上のファイルをすべて削除し，再実行してください。 • その他の場合 データベースマネージャを再起動してください。
11	コマンド実行中	通信エラーまたは接続エラーを返却したコマンドを再実行してください。
12	パッケージャでパッケージング中	通信エラーのダイアログ出力後，リモートインストールマネージャでパッケージングに失敗したパッケージを削除し，再度パッケージングしてください。
13	ID への登録・削除中	通信エラーのダイアログ出力後，再度 ID へ登録・削除してください。
14	パッケージセットアップマネージャでパッケージをインストール中	エラーの検知後，パッケージを再インストールしてください。
15	［操作ログ一覧］ウィンドウ表示中	［操作ログ一覧］ウィンドウを閉じてから，再度表示してください。
16	「データメンテナンス」および「操作履歴の取り込み」のタスク実行中	タスクが途中で停止した状態になります。タスクを再度実行してください。

付録 C.3　JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合の環境構築

JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合は，マネージャ，中継マネージャ，中継システム，およびクライアントを従来どおりの手順でインストール・セットアップしてください。

環境構築時の注意事項を次に示します。

● インストールディレクトリおよび各種セットアップで設定するディレクトリにはローカルディスクを指定してください。

● フェールオーバー機能を使用しない環境のマネージャ，中継マネージャ，中継システムが接続するシステムの接続先には，クラスタサーバの物理ホスト名または物理 IP ア

ドレスを指定してください。

付録 C.4　クラスタシステムを使用する場合の注意事項

フェールオーバー機能を使用した場合の注意事項を次に示します。

- JP1/Base と連携して JP1/NETM/DM のユーザを管理している場合，JP1/NETM/DM Manager は JP1/Base と同じクラスタグループに登録してください。JP1/NETM/DM Manager の論理ホスト名には，JP1/Base と同じ論理ホスト名を指定してください。
- アプリケーションエラー発生時に，「ワトソン博士」からエラーメッセージが通知されると，正常にフェールオーバーできないおそれがあります。そのため，エラーメッセージの通知を抑止する必要があります。エラーメッセージの通知を抑止する手順については，OS のマニュアルを参照してください。
  なお，エラーメッセージの通知を抑止すると，アプリケーションエラーが発生した際の情報取得に影響が出る場合があるので注意してください。
- OS が Windows Server 2003 の場合，アプリケーションエラーが発生すると，Microsoft へエラーを報告するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスが表示されると正常にフェールオーバーできないおそれがあります。そのため，エラーの報告を抑止する必要があります。エラーの報告を抑止する手順については，OS のマニュアルを参照してください。
- サービスを停止・開始する場合は，クラスタアドミニストレータで「Remote Install Server」の汎用サービスリソースをオフラインやオンラインにしてください。［コントロールパネル］の［管理ツール］－［サービス］から停止または開始すると，リソースの設定によってフェールオーバーが発生するおそれがあります。
- 「Remote Install Server」の汎用サービスリソースがオフライン状態の時は，レジストリ情報を変更しても変更内容が反映されないことがあります。このため，次の注意が必要です。

  JP1/NETM/DM Manager をインストールまたはアンインストールする場合（Embedded RDB のとき）

  「Remote Install Server」の汎用サービスリソースと「HiRDB/ClusterService_JN1」の汎用サービスリソースをオフライン状態にしておく必要があります。
  また，「Remote Install Server」の汎用サービスリソースの「レジストリの複製」の設定内容を削除してください。インストールまたはアンインストール完了後，再度「付録 C.2　JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の環境構築」の説明に従って入力してください。「レジストリの複製」の設定内容を削除しないでインストールすると，インストールコンポーネントが正常に動作しないことがあります。

  JP1/NETM/DM Manager をインストールまたはアンインストールする場合（Microsoft SQL Server または Oracle のとき）

「Remote Install Server」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする必要があります。オンライン状態の時にインストーラやアンインストーラを起動すると，リソースの設定によってフェールオーバーが発生したり，インストーラやアンインストーラがハングアップまたは異常終了したりすることがあります。
また，「Remote Install Server」の汎用サービスリソースの「レジストリの複製」の設定内容を削除してください。インストールまたはアンインストール完了後，再度「付録 C.2　JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の環境構築」に従って入力してください。「レジストリの複製」の設定内容を削除しないでインストールすると，インストールコンポーネントが正常に動作しないことがあります。

セットアップによって設定を変更する場合

「Remote Install Server」の汎用サービスリソースがオンライン状態のときに，セットアップを起動し，設定を変更します。オフライン状態の時にセットアップを起動し，設定を変更しても変更内容が反映されないことがあります。
このような場合は，「Remote Install Server」の汎用サービスリソースをオフライン状態にしたあと，再度オンライン状態にしてください。

- 実行系サーバのリモートインストールマネージャのウィンドウサイズ・整列パターンや各種表示情報は，クラスタアドミニストレータの設定による「レジストリの複製」の対象外のため，フェールオーバー後，待機系サーバのリモートインストールマネージャに引き継がれません。

- フェールオーバーが発生した場合，リレーショナルデータベースサーバが自動的にデータベースを回復します。回復中はデータベースに接続できませんので，しばらく待ってから再接続してください。

- クラスタシステムにリモートインストールマネージャだけをインストールして使用している場合，［ユーザインベントリの編集］または［レジストリ取得項目の編集］の実行中にフェールオーバーが発生したとき，実行系サーバ以外のマシンから［ユーザインベントリの編集］または［レジストリ取得項目の編集］が実行できなくなる場合があります。
このような場合は，復旧後，実行系サーバから［ユーザインベントリの編集］または［レジストリ取得項目の編集］を実行してください。または，リモートインストールマネージャが接続している JP1/NETM/DM Manager（Remote Install Server サービス）を再起動してください。

- クラスタシステムの直下のシステムをセットアップする際には，通信エラー発生時のリトライに掛かる時間の合計（リトライ間隔×リトライ回数）が，フェールオーバーに掛かる時間より長くなるように設定してください。
フェールオーバーに掛かる時間の方が長かった場合は，ジョブ実行中（実行状況：20%）にフェールオーバーが発生したとき，フェールオーバー中にリトライが終了してしまい，フェールオーバー後にジョブが再開されないおそれがあります。

- OS が Windows Server 2003 の環境で，Asset Information Manager Limited をフェールオーバークラスタシステム上に構築した場合，フェールオーバーで実行系から待機系に移動したあと，再度フェールオーバーによって待機系から実行系に移動し

たときは，「World Wide Web Publishing Service」サービスを再起動する必要があります。

付録 C.5　クラスタシステム環境を再構築する場合の手順

クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールおよび再インストールする場合の手順を，それぞれ示します。

（1）クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールする手順

クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager をアップグレードする場合，リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用しているときは，次に示す手順で，実行系サーバおよび待機系サーバの両方のデータベースを上書きする必要があります。

1. **「Remote Install Server」の汎用サービスリソースの「レジストリの複製」の設定内容を削除する。**
   「レジストリの複製」の設定内容を削除しないで上書きインストールすると，インストールコンポーネントが正常に動作しないことがあります。
2. **「Remote Install Server」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする。**
3. **「Asset Information Synchronous Service」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする。**※
4. **JP1/NETM/DM のインストールディレクトリ ¥BIN 下の** netmdb_stop.bat **コマンドを実行する。**
   Embedded RDB が停止したことをメッセージで確認してください。
5. **「HiRDB/ClusterService_JN1」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする。**
6. **JP1/NETM/DM のインストールディレクトリ** ¥jp1asset¥exe **下の** jamemb_dbstop.bat **コマンドを実行する。**※
   Embedded RDB が停止したことをメッセージで確認してください。
7. **「HiRDB/ClusterService_AM1」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする。**※
8. **実行系サーバに** JP1/NETM/DM Manager **を上書きインストールする。**
9. **「HiRDB/ClusterService_JN1」の汎用サービスリソースをオンライン状態にする。**
10. **データベースマネージャで，「データベースをアップグレードする」からデータベースのアップグレードを実行する。**
    ［クラスタシステム環境の設定］ダイアログボックスでは，新規作成のときと同じ設定にします。
11. **「HiRDB/ClusterService_AM1」の汎用サービスリソースをオンライン状態にする。**※
12. **スタートメニューから**［JP1_NETM_DM Manager］－［Asset Information Manager］

－［セットアップ］－［データベースマネージャ］を選択して「データベースのアップグレード」からデータベースのアップグレードを実行する。※

13.「HiRDB/ClusterService_JN1」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする。

14.「HiRDB/ClusterService_AM1」の汎用サービスリソースをオフライン状態にする。※

15.クラスタシステムアドミニストレータでグループを移動し，所有者を待機系サーバにする。

16.待機系サーバに JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールする。

17.待機系サーバで，手順 9. から手順 12. を実施する。

18.クラスタシステムアドミニストレータでグループを移動し，所有者を実行系サーバにする。

19.「Remote Install Server」の汎用サービスリソースの「レジストリの複製」の設定を入力する。
「付録 C.2　JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の環境構築」の説明に従って入力してください。

20.「Remote Install Server」の汎用サービスリソースをオンライン状態にする。

21.「Asset Information Synchronous Service」の汎用サービスリソースをオンライン状態にする。※

注※　Asset Information Manager Limited を使用している場合に必要な作業です。

(2) クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager を再インストールする手順

クラスタシステム環境を構築したあとで，実行系サーバおよび待機系サーバの JP1/NETM/DM Manager を再インストールする場合は，次に示す手順で実行する必要があります。

1. netmdb_unload.bat コマンドを使用して，データベースのバックアップを取得する。
2. JP1/NETM/DM Manager を実行系および待機系サーバからアンインストールする。
3. JP1/NETM/DM Manager をインストールして，クラスタシステム環境を構築する。
4. netmdb_reload.bat コマンドを使用して，バックアップしたデータベースを復元する。

付録 D　HP-UX JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストールとセットアップ

HP-UX 版 JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm と連携する場合，JP1/Cm2/NNM ネットワーク管理マネージャに JP1/NETM/DM NNM 連携機能が必要です。ここでは，JP1/NETM/DM NNM 連携機能をインストールおよびセットアップする方法について説明します。

付録 D.1　JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストール

JP1/NETM/DM NNM 連携機能は，「Hitachi PP Installer」を使用して実行してください。「Hitachi PP Installer」は，スーパーユーザ権限で実行してください。

(1)「Hitachi PP Installer」のインストール

「Hitachi PP Installer」がインストールされていない場合は，提供媒体をドライブにセットし，次のコマンドを実行してください。なお，すでにインストールされている場合は不要です。

tar xf **デバイスファイル名**

デバイスファイル名は，使用環境に合わせたファイル名を指定してください。また，デバイスファイル名は巻き戻し機能がないファイルを指定してください。

(2)「Hitachi PP Installer」の実行

ドライブに提供媒体がセットされた状態で，次のコマンドを実行してください。

インストールできる製品一覧が表示されたら，「JP1/NETM/DM NNM 連携機能」を選択してインストールしてください。

/etc/hitachi_setup -i **デバイスファイル名**

デバイスファイル名は，使用環境に合わせたファイル名を指定してください。また，デバイスファイル名は巻き戻し機能がないファイルを指定してください。

付録 D.2　JP1/NETM/DM NNM 連携機能のアンインストール

JP1/NETM/DM NNM 連携機能のアンインストールは，「Hitachi PP Installer」を使用して実行してください。「Hitachi PP Installer」はスーパーユーザ権限で実行してください。

なお，アンインストールする場合は，JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm のバックグラウンド・プロセスが起動されていることを確認してください。

付録 D.3　JP1/NETM/DM NNM 連携機能のセットアップ

セットアップの手順を次に示します。

1. **スーパーユーザでログインする。**
   JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm のバックグラウンド・プロセスが起動されていることを確認してください。
2. **/opt/NETMDM_NNM/bin/dmnnm_install コマンドを実行する。**
   JP1/NETM/DM のシンボル，およびメニューを JP1/Cm2/NNM または HP OpenView nnm に登録するために必要なファイルが登録されます。
3. **/opt/NETMDM_NNM/bin/dmnnm_setup -s コマンドを実行する。**
   次の画面が表示されます。「(2) 設定する」を選択してください。

```
$ /opt/NETMDM_NNM/bin/dmnnm_setup
** JP1/NETM/DM NNM 連携機能セットアップ **
接続する JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバのホスト名または IP アドレス
現在の設定値：
1) ＊次へ
2) 設定する
3) 中止
－＞
```

4. **JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバのホスト名または IP アドレスを指定する。**
   JP1/Cm2 または HP OpenView と接続する JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバのホスト名または IP アドレスを指定して，［Enter］キーを押してください。次の画面が表示されます。

```
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの通信で使用するポート番号
現在の設定値：
1) ＊次へ
2) 設定する
3) 中止
－＞
```

5. **JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの通信で使用するポート番号を指定する。**
   JP1/Cm2 または HP OpenView から，JP1/NETM/DM の管理情報へアクセスすると

きに使用されるポート番号を指定します。JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバのセットアップで設定するポート番号と同じ値を指定してください。［Enter］キーを押すと次の画面が表示されます。

```
* 次の項目が設定されました *
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバのホスト名または IP アドレス：
    ［ dmp195 ］
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの通信で使用するポート番号：
    ［ 20049 ］

1) ＊設定を有効にする
2) 中止
－＞
```

6. **設定した値を確認する。**

「設定を有効にする」を選択すると，設定した値が設定ファイルに反映されます。

付録 E　インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入

インターネットオプションは，JP1/NETM/DM 固有の通信プロトコルを HTTP に変換する機能で，インターネットを介したネットワーク環境への JP1/NETM/DM の導入を容易にします。インターネットオプションは，Internet Gateway と HTTP Gateway で構成される機能です。

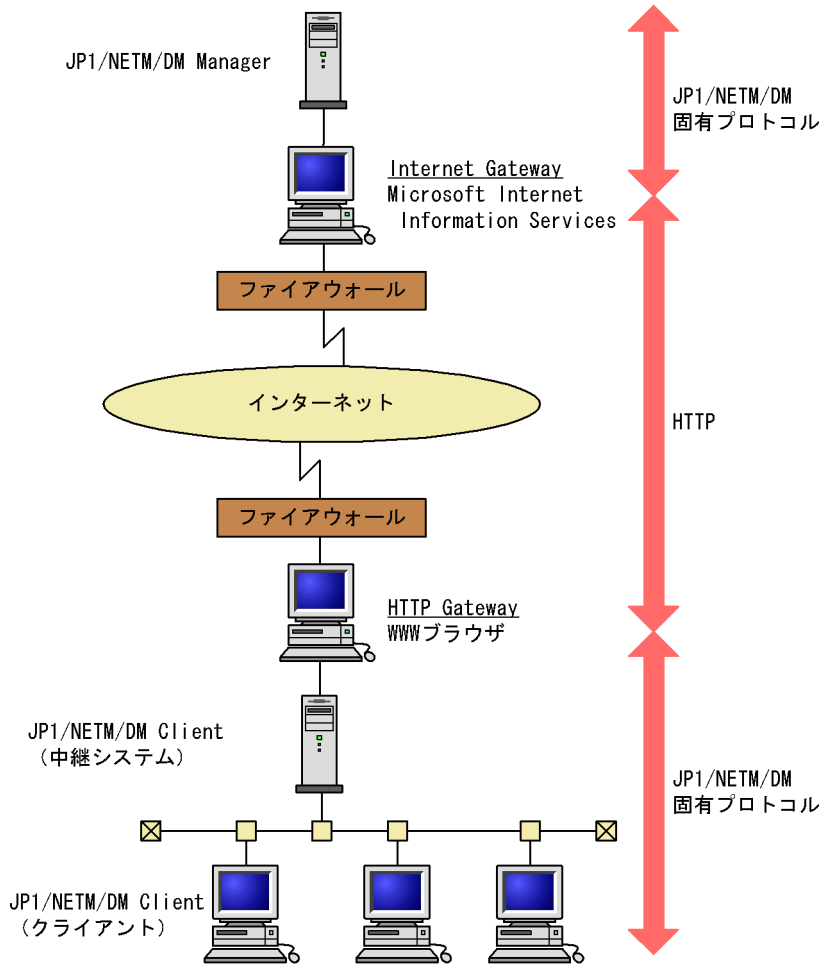
付録 E.1　インターネットオプションの機能

(1) HTTP ゲートウェイ

JP1/NETM/DM の任意のノード間に，Internet Gateway と HTTP Gateway を配置すると，その間の通信プロトコルが，JP1/NETM/DM 固有のプロトコルから HTTP に変換されます。そのため，Web が利用できる環境であれば，複雑な設定をしなくても，インターネットを介した JP1/NETM/DM の運用ができます。ファイアウォールで HTTP が使用できるように設定されている場合，インターネットオプションを使用すると，マニュアル「導入・設計ガイド」の「6.1.5　ファイアウォール環境での JP1/NETM/DM の運用」で説明しているファイアウォールの設定は不要になります。

インターネットオプションを介したプロトコルの変換を，次の図に示します。

図 E-1　インターネットオプションを介したプロトコルの変換



(2) SSL を利用したセキュア通信

SSL を用いた HTTPS 通信に対応していますので，セキュリティのレベルを下げません。

(3) 転送データの分割

ご使用になっているプロキシサーバや WWW サーバによっては，一度に転送できるデータサイズが制限されている場合があります。このような場合には，JP1/NETM/DM が転送するファイルデータを分割して転送できます。

(4) 自動ダイヤリング

ノートパソコンに HTTP Gateway とクライアントを導入し，ダイヤルアップでインターネットに接続するような場合，ダイヤルアップ接続を自動で行う機能を提供しています。

付録 E.2　インターネットオプションを介したジョブの流れ

通常，クライアントは，配布管理システムからのジョブの実行要求によって処理を実行します。しかし，インターネットを介したネットワーク環境では，セキュリティのために，内部ネットワークを隠していたり NAT 機能を用いてアドレス変換していたりするので，配布管理システムからクライアントにジョブの実行要求が届きません。そのため，インターネットオプションを介した通信は次の契機で行われます。

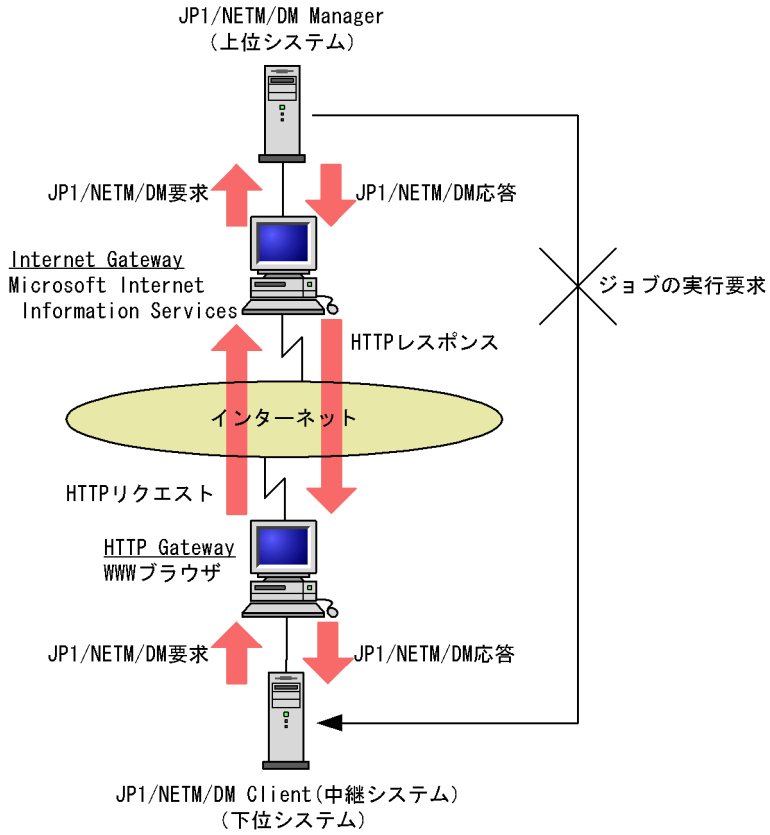
- 中継するシステムおよびクライアントからの定期ポーリング時
- クライアントの［パッケージセットアップマネージャ］実行時
- クライアントの［ジョブ実行］アイコン起動時

ジョブは，これら下位システムからの要求に対する応答として実行されます。

HTTP Gateway は下位システムからの JP1/NETM/DM 要求を HTTP に変換し，指定された Internet Gateway にリクエストを行います。Internet Gateway は HTTP リクエストから JP1/NETM/DM の電文を取り出して，上位システムに送信します。また，上位システムの応答を HTTP レスポンスに変換してリクエスト側に送信します。HTTP の処理には WWW サーバ（Microsoft Internet Information Services）が使用されます。

インターネットオプションを介したジョブの流れを，次の図に示します。

図 E-2　インターネットオプションを介したジョブの流れ



なお，上位システムからのジョブの実行要求は下位システムに届きませんので，上位システムのセットアップでは，「下位システムの同時実行要求数」を 0 に設定しておく必要があります。また，下位システムからの要求があったときだけジョブが実行されることを考慮して，下位システムのセットアップでポーリングの設定をする必要があります。

上位システムおよび下位システムの設定については，それぞれ「付録 E.5(5)　上位システムのセットアップ」，「付録 E.6(5)　下位システムのセットアップ」を参照してください。

付録 E.3　運用上の注意事項

インターネットオプションを使用するときの，JP1/NETM/DM の運用上の注意事項を，次に示します。

- HTTP Gateway を介したパッケージングはできません。
- JP1/NETM/DM では運用キー（ノードを識別するキー情報）にホスト名，IP アドレス，ホスト識別子を使用します。JP1/NETM/DM では，運用キーに対して作成した

ジョブを引き当てます。NAT 機能を使用した場合はアドレス変換されてしまうため，該当するクライアントに対してジョブが引き当てられなくなります。この現象は，JP1/NETM/DM Manager から見た JP1/NETM/DM Client（クライアント）の IP アドレスと実際の JP1/NETM/DM Client（クライアント）IP アドレスが NAT 機能によって異なってしまうことに原因があります。したがって，NAT 機能を使用した環境では，運用キーに IP アドレスを使用できません。ホスト識別子を使用する運用をお勧めします。

- IP アドレス運用では，プロトコルに IP アドレスが付与されます。このため，IP アドレス運用をすると，プロトコルに付与された IP アドレスが外部に漏れるおそれがあります。したがって，ファイアウォールを使用する場合は，IP アドレス運用をしないことをお勧めします。
- JP1/NETM/DM のシステム構成の自動登録機能は，運用キーに関係なく，プロトコルに IP アドレスを付与します。このため，システム構成の自動登録機能を使用すると，プロトコルに付与された IP アドレスが外部に漏れるおそれがあります。ファイアウォールを使用する場合は，システム構成の自動登録機能は使用しない運用をお勧めします。
- 基本的なファイアウォール構成では，セキュリティの向上のため，外部公開用のサーバを設置するセグメント（非武装セグメント）と，プライベートネットワークを分離するネットワーク構成が推奨されています。この構成では，多くの場合，非武装セグメントからプライベートネットワークへの通信を制限しています。このような場合には，WWW サーバと JP1/NETM/DM の通信ができるように，ファイアウォール製品のフィルタリングテーブルで，次の設定が必要です。
  送信側 IP アドレス：Microsoft Internet Information Services の IP アドレス
  送信側ポート：1024-65535
  受信側 IP アドレス：JP1/NETM/DM 上位システムの IP アドレス
  受信側ポート：NETMDM
  プロトコル：TCPEST
  向き：in
- インターネットオプションを介して，リモートコントロール機能は使用できません。

付録 E.4　システム構成

JP1/NETM/DM 固有のプロトコルを HTTP に変換するには，HTTP を使用したい JP1/NETM/DM の任意のノード間に，Internet Gateway と HTTP Gateway を配置します。HTTP を使用する経路上の上位システム側に Internet Gateway を，下位システム側に HTTP Gateway を配置します。

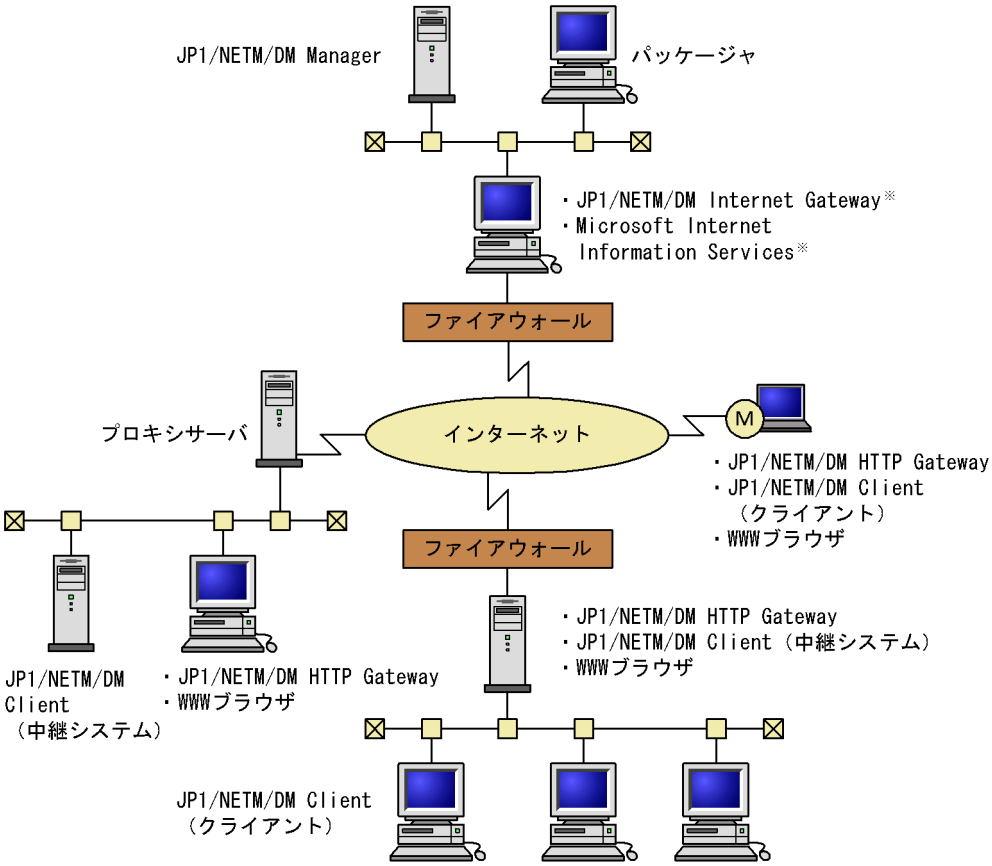
配置された Internet Gateway および HTTP Gateway は，配布管理システム上では階層として認識されないので，透過的に扱われます。

なお，Internet Gateway に直接接続する上位システムは，バージョン 06-71 以降の JP1/

NETM/DM を使用してください。同様に，HTTP Gateway に直接接続する下位システムは，バージョン 06-71 以降の JP1/NETM/DM を使用してください。

インターネットオプションを使用する場合のシステム構成を次の図に示します。

図 E-3　インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM のシステム構成



注※ JP1/NETM/DM Internet Gateway，および
Microsoft Internet Information Servicesは，
JP1/NETM/DM Managerと同一マシンにインストールできます。

（1） Internet Gateway

Internet Gateway に接続できる HTTP Gateway の数は，Internet Gateway が接続する上位システムによって異なります。上位システムがマネージャの場合は 50 ～ 100 台，サブマネージャの場合は 20 ～ 50 台を推奨します。

Internet Gateway は，上位システムと同一マシンにインストールできます。

(a) 必要な機器構成

リソース	所要量
CPU	Pentium II 300 メガヘルツ以上。 Pentium III 500 メガヘルツ以上を推奨します。
メモリ	1,000 ＋ 50 × HTTP Gateway の同時接続数（単位：キロバイト）
ディスク	5 メガバイト＋ HTTP Gateway の同時接続数×配布するパッケージのサイズ ただし，分割配布する場合は，次の式で計算してください。 5 メガバイト＋ HTTP Gateway の同時接続数×パッケージの分割サイズ

(b) 適用 OS

Windows Server 2003，Windows XP Professional，Windows 2000，または Windows NT Server 4.0 です。

(c) 前提プログラム

Microsoft Internet Information Services 5.0 以上，または Microsoft Internet Information Server 4.0 以上をインストールしておく必要があります。

この節では，以降，特に断らないかぎり，Microsoft Internet Information Services 5.0 以上または Microsoft Internet Information Server 4.0 以上を Microsoft Internet Information Services と呼びます。

(2) HTTP Gateway

直接接続する下位システムごとに HTTP Gateway が必要です。複数のクライアントが存在する場合は，HTTP Gateway 直下に中継システムを配置してください。

HTTP Gateway は，下位システムと同一マシンにインストールできます。

(a) 必要な機器構成

リソース	所要量
CPU	Pentium II 300 メガヘルツ以上。 Pentium III 500 メガヘルツ以上を推奨します。
メモリ	3000 キロバイト
ディスク	5 メガバイト＋配布するパッケージのサイズ ただし，分割配布する場合は，次の式で計算してください。 5 メガバイト＋パッケージの分割サイズ

(b) 適用 OS

Windows Server 2003，Windows XP，Windows 2000，Windows NT 4.0，Windows Me，または Windows 98 です。

(c) 前提プログラム

Microsoft Internet Explorer 5.01 以上をインストールしておく必要があります。

(3) プロキシおよびファイアウォール

HTTP 1.0 以降に対応する透過型プロキシが利用できます。透過型プロキシとは，プロキシへの認証やクライアント自身の証明を要求する以外にはリクエストおよびレスポンスを書き換えないものを示します。また，HTTP を透過するパケットフィルタリング方式およびアプリケーションゲートウェイ方式のファイアウォールが利用できます。

インターネットオプションは，クライアント側での設定が不要なプロキシやファイアウォールに対応しています。

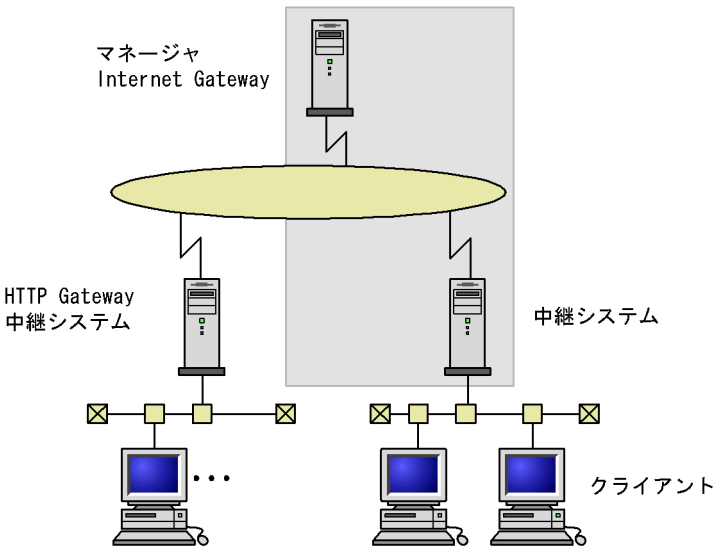
利用できる代表的なプロキシには，次の製品があります。

- Microsoft Proxy Server 2.0
- Sun ONE Web Proxy Server

(4) システム構成についての注意事項

インターネットオプションを使用すると，上位システムからのジョブの実行要求は下位システムに届きません。ジョブは，下位システムからの要求に対する応答としてだけ実行されます。したがって，次の図のように，一部の下位システムだけで HTTP Gateway を使用しているシステム構成の場合，HTTP Gateway を使用していない中継システムとマネージャ間（図中，四角で囲んだ部分）でも，ジョブは下位システムからの要求に対する応答としてだけ実行されます。

図 E-4　一部の下位システムだけで HTTP Gateway を使用しているシステム構成



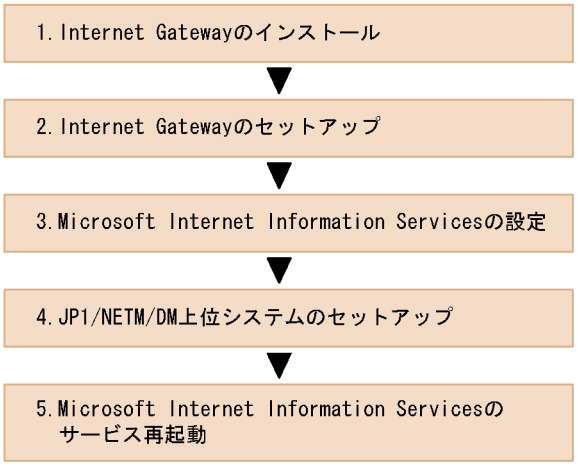
付録 E.5　Internet Gateway の設定

Internet Gateway 側の設定として，Internet Gateway のインストールとセットアップ，Microsoft Internet Information Services の設定，上位システムのセットアップを行います。

(1) 設定手順

Internet Gateway，Microsoft Internet Information Services，および上位システムの設定手順を次の図に示します。

図 E-5　Internet Gateway の設定手順



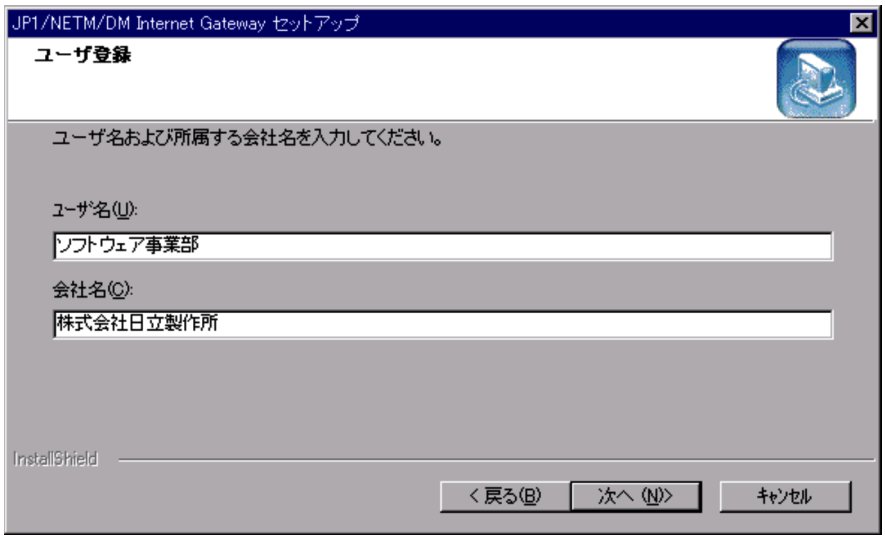
(2) Internet Gateway のインストール

インターネットオプションはプロトコルを変換するバックグラウンドサービスのため，Internet Gateway をインストールするとき，［スタート］メニューにアイコンを登録しません。インストールが完了したあと，必要な設定は［コントロールパネル］から行います。インストールが完了したあと，Internet Gateway は ISAPI 拡張として動作します。

Internet Gateway のインストール手順について説明します。

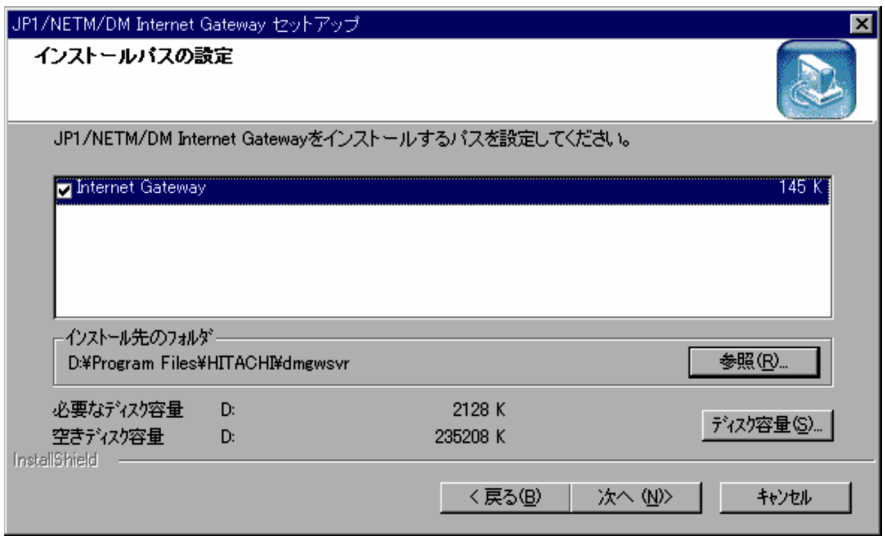
1. **Internet Gateway のインストール媒体を CD-ROM ドライブに挿入する。**
   ［JP1/NETM/DM Internet Gateway セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。
2. **［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［ユーザ登録］ダイアログボックスが表示されます。

図 E-6　［ユーザ登録］ダイアログボックス



3. **ユーザ名と会社名を入力し，［次へ］ボタンをクリックする。**
［インストールパスの設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 E-7　［インストールパスの設定］ダイアログボックス



4. Internet Gateway **をインストールするディレクトリを設定する。**
デフォルトでは，システムドライブ ¥Program Files¥HITACHI¥dmgwsvr にインストールされます（OS が Windows Server 2003 (x64) の場合は，システムドライブ ¥Program Files (x86)¥HITACHI¥dmgwsvr）。

5. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［インストールの確認］ダイアログボックスが表示されます。

6. **インストール内容を確認したあと，［次へ］ボタンをクリックする。**
   インストールが始まり，完了すると［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。

7. **［完了］をクリックする。**
   ［インストール終了］ダイアログボックスで「セットアップの起動」をチェックしていた場合，［JP1/NETM/DM Internet Gateway 設定］ダイアログボックスが表示され，引き続き，セットアップができる状態になります。

(3) Internet Gateway のセットアップ

Internet Gateway のセットアップは，［コントロールパネル］から行います。

［コントロールパネル］を開き，［JP1/NETM/DM Internet Gateway 設定］をダブルクリックすると，［JP1/NETM/DM Internet Gateway 設定］ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスで，Internet Gateway の上位接続先と，一度にダウンロードできる最大データサイズを設定します。

Internet Gateway のセットアップには，管理者権限が必要です。

(a) 接続先

Internet Gateway が接続する JP1/NETM/DM の上位システムとポート番号を設定します。

図 E-8　［接続先］パネル



接続先

Internet Gateway が接続する JP1/NETM/DM の上位システムが，マネージャであるかサブマネージャであるかを選択します。また，接続する上位システムのアドレスを，上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）で指定します。設定は必須です。

詳細設定

Internet Gateway が通信するときに使用するポート番号を設定できます。デフォルトでは，netmdm ポートに「30000」，netmdmw ポートに「30001」が使用されます。ほかのプログラムとの重複を避ける必要がある場合は，「詳細設定」をチェックし，ポート番号を変更してください。上位システムが JP1/NETM/DM Manager の場合は netmdm ポートの値，JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合は netmdmw ポートの値が使用されます。

(b) HTTP 設定

JP1/NETM/DM から送信するファイルデータの分割サイズを指定できます。

お使いになっているプロキシサーバや WWW サーバによっては，一度に送信（ダウンロード）できるデータサイズが制限されている場合があります。このような場合には，JP1/NETM/DM のファイルデータを分割して送信してください。デフォルトでは 1,024 キロバイトに分割して送信します。

なお，設定値は，Microsoft Internet Information Services のメモリ確保性能やファイル転送プロトコルでのフレームの転送数に影響を与えます。詳細については，Microsoft Internet Information Services のマニュアルを参照してください。

図 E-9　[HTTP 設定] パネル



(4) Microsoft Internet Information Services で設定する場合の注意事項

Microsoft Internet Information Services では，［インターネットサービスマネージャ］を使用して，Internet Gateway の仮想ディレクトリを作成し，アクセス権とログファイル出力の要否を設定しておく必要があります。また，必要に応じて SSL の設定も行います。

ここでは，設定する際の注意事項を説明します。［インターネットサービスマネージャ］

についての詳細は，Microsoft Internet Information Services のマニュアルを参照してください。

● Internet Gateway の仮想ディレクトリを作成する際，次のことに注意してください。
- 物理パスには Internet Gateway をインストールしたディレクトリ下の bin ディレクトリを指定します。
- Microsoft Internet Information Server 4.0 の場合は，「読み取りアクセスを許可する」，「スクリプトのアクセスを許可する」，および「実行アクセスを許可する（スクリプトのアクセスを含む）」をオンに設定します。Microsoft Internet Information Services 5.0 の場合は，「読み取り」，「ASP 等のスクリプトを実行する」，および「ISAPI アプリケーションや CGI 等を実行する」をオンに設定します。

● デフォルトのインストール先を変更して，wwwroot（デフォルトの Web ページ格納先）下に直接 Internet Gateway をインストールした場合は，log と work ディレクトリに読み書きの権限を与えておく必要があります。
Windows NT 4.0 の場合，log と work ディレクトリは，Internet Gateway のインストールディレクトリに作成されます。Windows Server 2003，Windows XP，および Windows 2000 の場合，log と work ディレクトリは，OS のインストールドライブ¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥hitachi¥dmgwsvr に作成されます。

● 通常，HTTP リクエストおよびレスポンスの状態がログファイルに出力されます。このログが不要な場合は，Internet Gateway の仮想ディレクトリの［プロパティ］ダイアログボックスで，「ログアクセス」のチェックを外しておきます。

● SSL を利用する場合は，［既定の Web サイトのプロパティ］ダイアログボックスを開き，［ディレクトリセキュリティ］タブで［セキュリティで保護された通信］を設定し，認証機関によって証明されたサーバ証明書のインストールを行う必要があります。そのあと，必要に応じて，［Web サイト］タブで「SSL ポート」の番号を設定してください。

● Microsoft Internet Information Services 6.0 を使用している場合，「WEB サービス拡張」でサーバ側インクルードの状態を許可に設定してください。また，「WEB サービス拡張」から新しい Web サービス拡張を，次の設定で追加してください。
- 拡張名
  任意の名称
- 必要なファイル
  C:¥Program Files¥HITACHI¥dmgwsvr¥BIN¥dmgwsvr.dll
  （Internet Gateway が C:¥Program Files¥HITACHI¥dmgwsvr にインストールされている場合）
- 拡張の状態を許可済みに設定する
  チェックする

(5) 上位システムのセットアップ

Internet Gateway が接続する上位システムのセットアップ項目のうち，インターネットオプションを使用する場合に注意が必要な項目について説明します。セットアップ方法およびセットアップ項目の詳細は，「4.　JP1/NETM/DM Manager をセットアップする」または「5.　JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする」を参照してください。

パネル名	項目名	設定値	説明
サーバカスタマイズオプション※1	下位システムの同時実行要求数※2	0	インターネットオプションを介したジョブは，下位システムからの要求に対する応答として実行されます。上位システムからのジョブの実行要求を通さないため，0 に設定してください。ジョブの流れについては，「付録 E.2　インターネットオプションを介したジョブの流れ」を参照してください。
	下位システムの起動を監視する	OFF	インターネットオプションは，上位システムからのジョブの実行要求を通さないため，監視は不要です。
運用キー	アドレス解決の方法	JP1/NETM/DM のシステム構成を使用する	インターネットを介したネットワーク環境では，アドレス解決できないおそれが高いので，JP1/NETM/DM のシステム構成の情報を使用してください。
	アドレス解決できないあて先へのジョブ	エラーとしない	インターネットを介したネットワーク環境では，アドレス解決できないおそれが高いので，アドレス解決に失敗しても，ジョブをエラーにしない設定にします。
	ホスト識別子の使用※3	する	ホスト識別子運用を推奨します。

注※ 1

中継システムのセットアップでは，「中継システムカスタマイズオプション」です。

注※ 2

中継システムのセットアップでは，「中継／クライアントの同時実行要求数」です。

注※ 3

中継システムのセットアップには，この項目はありません。

付録 E.6　HTTP Gateway の設定

HTTP Gateway 側の設定として，HTTP Gateway のインストールとセットアップ，下位システムのセットアップを行います。

Windows NT の場合，HTTP Gateway のインストールでは，HTTP Gateway を Windows のサービスとして登録するための設定も行います。HTTP Gateway サービスの設定は，インストール後，必要に応じて変更できます。

(1) 設定手順

HTTP Gateway，HTTP Gateway サービス，および下位システムの設定手順を次の図に示します。なお，HTTP Gateway サービスは，Windows NT の場合だけ設定します。

図 E-10　HTTPGateway の設定手順



注※1　HTTP Gatewayサービスがログオンするときに使用するユーザアカウントを新規に作成した場合，いったんデスクトップからログオフして，作成したユーザアカウントでログオンし直してください。

注※2　Windows NTの場合，HTTP Gatewayサービスを再起動してください。
Windows MeおよびWindows 98の場合，PCを再起動してください。

(2) HTTP Gateway のインストール

インターネットオプションはプロトコルを変換するバックグラウンドサービスのため，HTTP Gateway をインストールするとき，［スタート］メニューにアイコンを登録しません。インストール後，必要な設定は［コントロールパネル］から行います。

Windows NT の場合，HTTP Gateway のインストールでは，HTTP Gateway を Windows のサービスとして登録するための設定も行います。HTTP Gateway サービスの設定は，インストール後，必要に応じて変更できます。インストール後，HTTP Gateway は Windows のサービスとして動作します。サービス名は「JP1/NETM/DM HTTP Gateway Service」です。

Windows Me および Windows 98 の場合，HTTP Gateway は常駐プログラムになります。

なお，JP1/NETM/DM のリモートインストール機能を使用して，HTTP Gateway を新規インストールすることはできません。再インストールの場合は可能です。

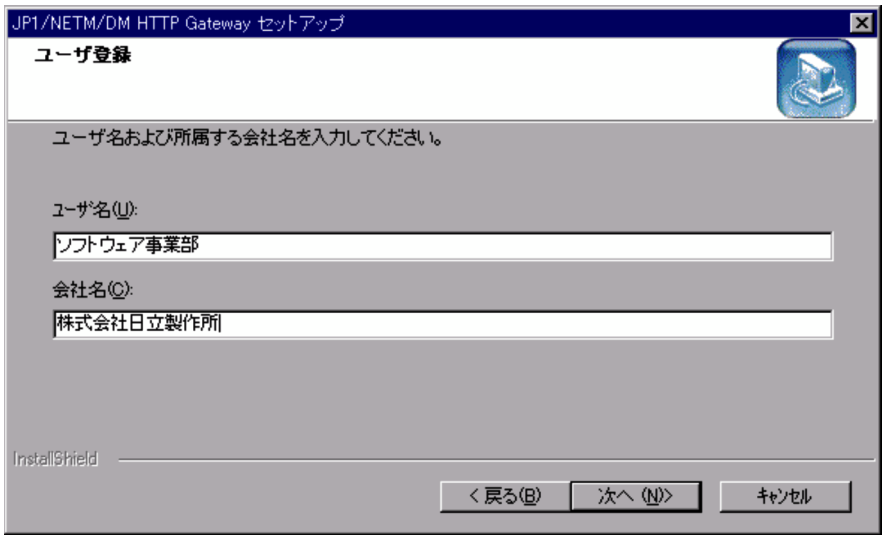
次に HTTP Gateway のインストール手順について説明します。

1. HTTP Gateway **のインストール媒体を** CD-ROM **ドライブに挿入する。**

［JP1/NETM/DM HTTP Gateway セットアップ］ダイアログボックスが表示されます。

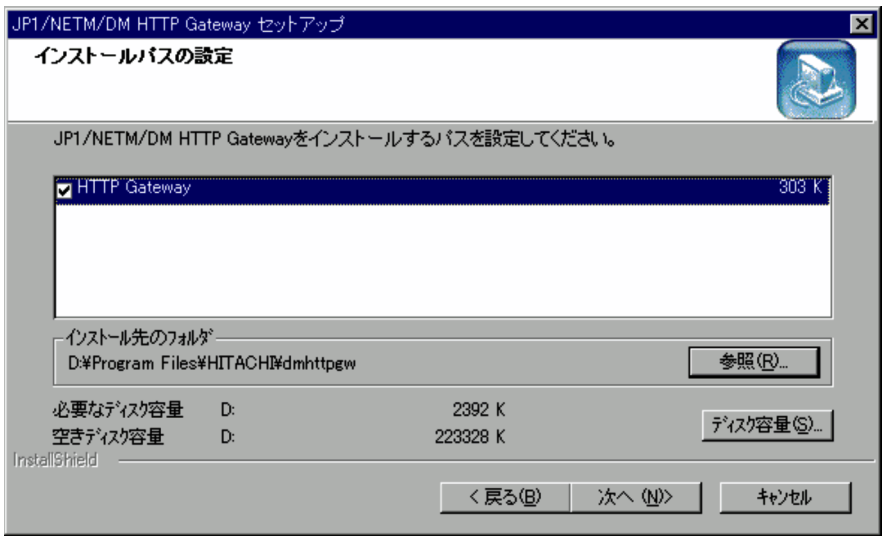
2. **［次へ］ボタンをクリックする。**
［ユーザ登録］ダイアログボックスが表示されます。

図 E-11　［ユーザ登録］ダイアログボックス



3. **ユーザ名と会社名を入力し，［次へ］ボタンをクリックする。**
［インストールパスの設定］ダイアログボックスが表示されます。

図 E-12　［インストールパスの設定］ダイアログボックス



4. **HTTP Gateway をインストールするディレクトリを設定する。**

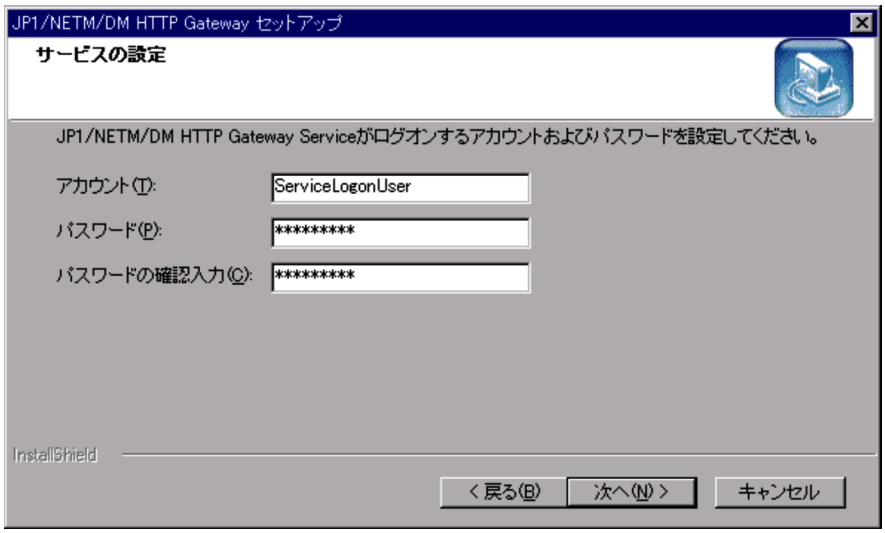
デフォルトでは，システムドライブ ¥Program Files¥HITACHI¥dmhttpgw にインストールされます（OS が Windows Server 2003 (x64) の場合は，システムドライブ ¥Program Files (x86)¥HITACHI¥dmhttpgw）。

5. **［次へ］ボタンをクリックする。**

Windows NT の場合で，新規インストールのときは，［サービスの設定］ダイアログボックスが表示されます。再インストールのとき，このダイアログボックスは表示されませんので，操作 8. に進んでください。

Windows Me および Windows 98 の場合も，このダイアログボックスは表示されませんので，操作 8. に進んでください。

図 E-13　［サービスの設定］ダイアログボックス



6. **HTTP Gateway を Windows のサービスとして登録するための設定をする。**

HTTP Gateway サービスがログオンするときに使用するユーザアカウントとパスワードを設定します。HTTP Gateway は，設定したアカウントユーザに対する Windows の［インターネットオプション］の設定を利用して動作します。

ユーザアカウントを設定するとき，次のことに注意してください。

- アカウントユーザには Users 権限が必要です。ただし，HTTP Gateway をインストールする PC に Secure Socket Client がインストールされている場合は，PowerUser 以上の権限が必要です。
- Windows NT 4.0 の場合，HTTP Gateway のインストールディレクトリに対して，アカウントユーザに読み書きの権限を与えておく必要があります。
- 新規のユーザアカウントを作成した場合は，インストール後，いったんデスクトップからログオフして，作成したユーザアカウントでログオンし直す必要があります。

なお，HTTP Gateway サービスの「スタートアップの種類」は，「自動」で登録されます。

7. **［次へ］ボタンをクリックする。**
   ［インストールの確認］ダイアログボックスが表示されます。
8. **インストール内容を確認したあと，［次へ］ボタンをクリックする。**
   インストールが始まり，完了すると［インストール終了］ダイアログボックスが表示されます。
9. **［完了］をクリックする。**
   ［インストール終了］ダイアログボックスで「セットアップの起動」をチェックしていた場合，［JP1/NETM/DM HTTP Gateway 設定］ダイアログボックスが表示され，引き続き，セットアップができる状態になります。

(3) HTTP Gateway のセットアップ

HTTP Gateway のセットアップは，［コントロールパネル］から行います。

［コントロールパネル］を開き，［JP1/NETM/DM HTTP Gateway 設定］をダブルクリックすると，［JP1/NETM/DM HTTP Gateway 設定］ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスで次の設定をしたあと，WWW サーバへのテスト接続を行います。

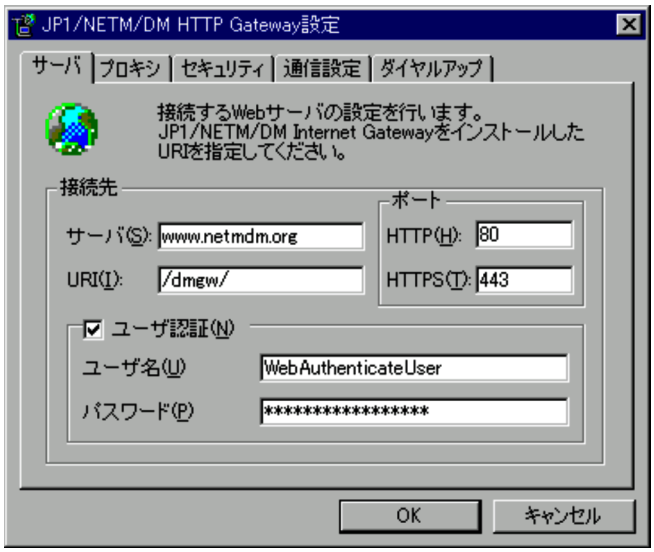
- サーバ
- プロキシ
- セキュリティ
- 通信設定
- ダイヤルアップ

なお，インターネットオプションの運用を開始したあと，セットアップ内容を変更した場合は，設定内容を反映させるために，HTTP Gateway サービスの再起動が必要です。Windows Me および Windows 98 の場合は，PC の再起動が必要です。

(a) サーバ

HTTP Gateway が接続する，WWW サーバと Internet Gateway を指定します。また，HTTP および HTTPS 通信のポート番号を指定することもできます。

図 E-14　［サーバ］パネル



サーバ

HTTP Gateway が接続する WWW サーバのアドレスを指定します。設定は必須です。

URI

Microsoft Internet Information Services で，Internet Gateway の仮想ディレクトリを作成する際に設定したエイリアス名を指定します。設定は必須です。

ポート

HTTP および HTTPS 通信で使用するポート番号を指定できます。デフォルトは，それぞれ 80，443 です。ほかのプログラムとの重複を避ける必要がある場合は，変更してください。

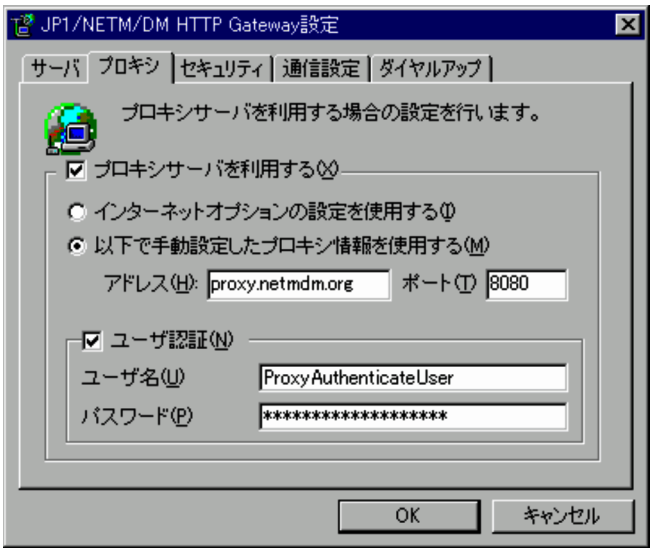
ユーザ認証

WWW サーバでユーザ認証が必要な場合は，ユーザ名およびパスワードを指定します。

(b) プロキシ

プロキシサーバを利用する場合は，「プロキシサーバを利用する」をチェックして，各種の設定を行います。

図 E-15　［プロキシ］パネル



インターネットオプションの設定を使用する

Windows の［インターネットオプション］で設定しているプロキシ関連の情報を使用する場合に選択します。Windows NT の場合は，HTTP Gateway サービスに登録したアカウントユーザに対する Windows の［インターネットオプション］の設定が使用されます。

以下で手動設定したプロキシ情報を使用する

「アドレス」と「ポート」で設定したプロキシ情報を使用する場合に選択します。

アドレス

プロキシサーバのアドレスを指定します。

ポート

プロキシサーバと通信するときに使用するポート番号を指定できます。デフォルトは 8080 です。ほかのプログラムとの重複を避ける必要がある場合は，変更してください。

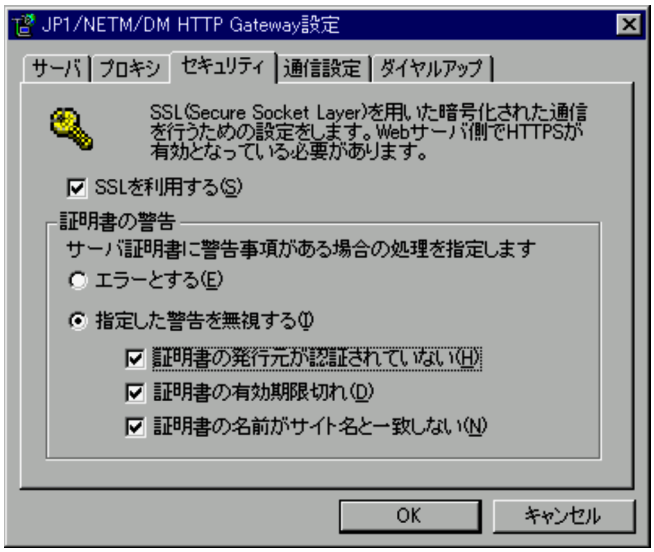
ユーザ認証

プロキシサーバでユーザ認証が必要な場合は，ユーザ名およびパスワードを指定します。

(c) セキュリティ

SSL を用いた HTTPS 通信を行うための設定をします。

図 E-16 ［セキュリティ］パネル



SSL を利用する

HTTPS 通信を行う場合にチェックします。この場合，あらかじめ WWW サーバに証明書をインストールしておく必要があります。

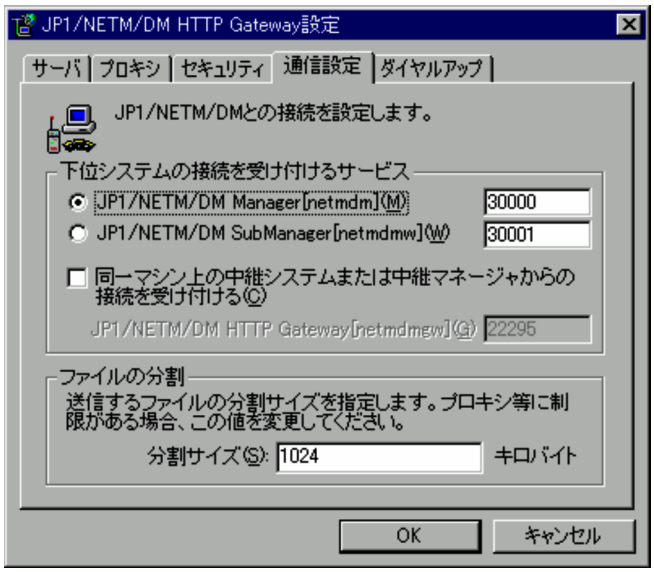
証明書の警告

証明書に関して警告があった場合，エラーにするか，警告を無視して HTTPS 通信を行うかを選択します。警告を無視する場合は，対象となる警告の種類も指定します。

(d) 通信設定

JP1/NETM/DM の下位システムの接続を受け付けるサービスと，一度にアップロードできる最大データサイズを指定します。

図 E-17　［通信設定］パネル



下位システムの接続を受け付けるサービス

JP1/NETM/DM の下位システムの接続を受け付けるサービスを選択します。下位システムが中継マネージャまたは中継システムで，同一マシンに HTTP Gateway をインストールした場合は，「同一マシン上の中継システムまたは中継マネージャからの接続を受け付ける」を選択します。別マシンにインストールした場合，接続する Internet Gateway の上位接続先がマネージャのときは「JP1/NETM/DM Manager」を，中継システムのときは「JP1/NETM/DM SubManager」を選択します。

また，各サービスが使用するポート番号を指定できます。デフォルトのポート番号は次のとおりです。ほかのプログラムとの重複を避ける必要がある場合は，変更してください。

- JP1/NETM/DM Manager：30000
- JP1/NETM/DM SubManager：30001
- JP1/NETM/DM HTTP Gateway：22295

ファイルの分割

JP1/NETM/DM から送信するファイルデータの分割サイズを指定できます。

お使いになっているプロキシサーバや WWW サーバによっては，一度に送信（アップロード）できるデータサイズが制限されている場合があります。このような場合には，JP1/NETM/DM のファイルデータを分割して送信してください。デフォルトでは 1,024 キロバイトに分割して送信します。

(e) ダイヤルアップ

ノートパソコンに HTTP Gateway とクライアントを導入し，ダイヤルアップでインターネットに接続するような場合，ダイヤルアップ接続を自動で行うことができます。これを自動ダイヤリング機能と呼び，［ダイヤルアップ］パネルで設定します。［ダイヤル

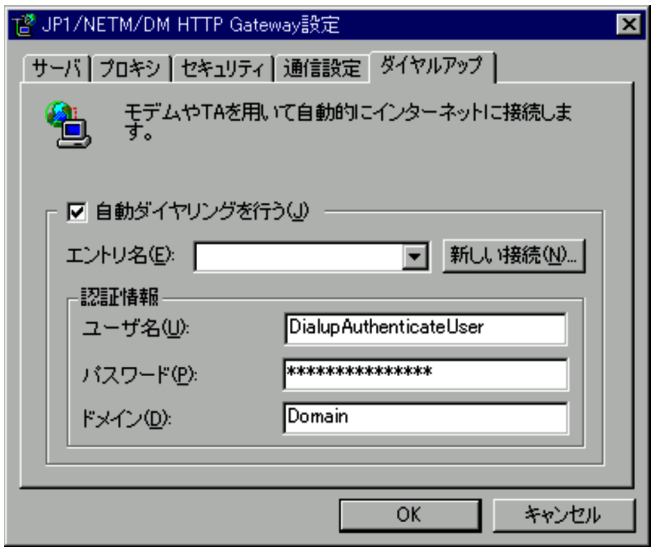
アップ］パネルは，リモートアクセスサービスがインストールされている場合だけ表示されます。

自動ダイヤリング機能は，次の契機で回線を接続または切断します。

- HTTP リクエスト生成時に，指定されたダイヤルアップエントリによる回線の接続を確認し，接続されていない場合だけ，自動ダイヤリングを行います。
- HTTP Gateway によって自動ダイヤリングを行った場合だけ，セッション終了時に，回線を切断します。
- 複数のセッションが同時実行される場合，すべてのセッションが終了するまで，回線を切断しません。

HTTP Gateway の自動ダイヤリング機能を使用する場合は，下位システムのセットアップで「ダイヤルアップ接続」をオフにしておく必要があります。ただし，HTTP Gateway が下位システムと同一マシンにインストールされている場合，下位システムの「ダイヤルアップ接続」をオンにし，HTTP Gateway の自動ダイヤリング機能をオフにしておくことでも，同様の機能を実現できます。

図 E-18　［ダイヤルアップ］パネル



自動ダイヤリングを行う

HTTP Gateway の自動ダイヤリング機能を使用する場合にチェックします。この場合，下位システムのセットアップで「ダイヤルアップ接続」をオフにしておく必要があります。

エントリ名

使用するダイヤルアップエントリを選択します。新規にダイヤルアップエントリを作成する場合は，［新しい接続］ボタンをクリックし，エントリを作成してください。

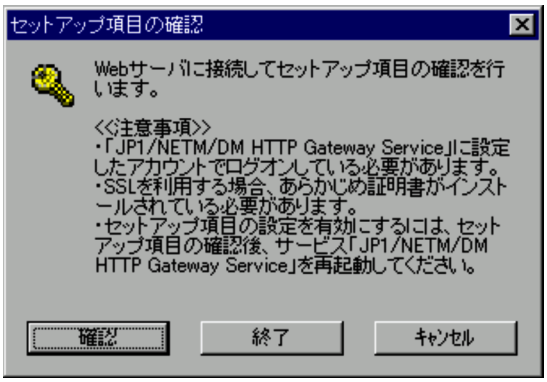
認証情報

ダイヤルアップ接続時に使用するユーザ名，パスワード，およびドメインを入力します。

(f)　セットアップ項目の確認

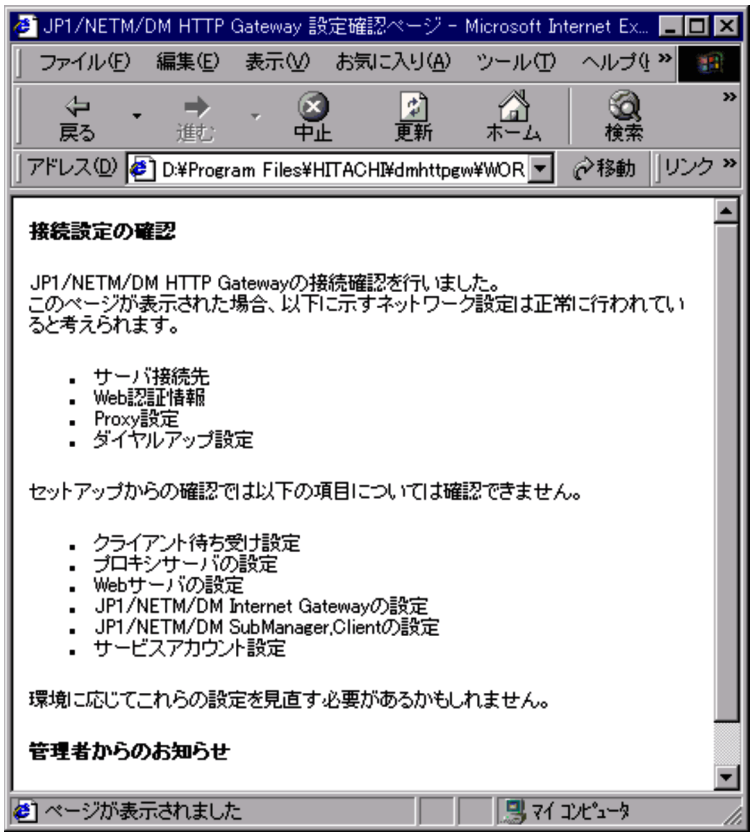
［JP1/NETM/DM HTTP Gateway 設定］ダイアログボックスで，すべてのセットアップが終わったら，［OK］ボタンをクリックします。次の確認ダイアログボックスが表示されますので，［確認］ボタンをクリックして，WWW サーバへのテスト接続を実行してください。

図 E-19　［セットアップ項目の確認］ダイアログボックス



正常に接続すると，［JP1/NETM/DM HTTP Gateway 設定確認ページ］が表示されます。

図 E-20　［JP1/NETM/DM HTTP Gateway 設定確認ページ］



この Web ページが表示されない場合は，正常に接続できていません。セットアップの設定を見直してください。また，SSL を利用する場合は，WWW サーバに証明書がインストールされていることを確認してください。

(4) サービスの設定

Windows NT の場合，HTTP Gateway のインストールが完了すると，HTTP Gateway は Windows のサービスとして自動的に登録されています。登録内容は次のとおりです。

- サービス名：JP1/NETM/DM HTTP Gateway Service
- スタートアップの種類：自動
- ログオン：HTTP Gateway のインストール時に指定したアカウント

HTTP Gateway サービスの設定は，必要に応じて変更できます。

アカウントには，HTTP Gateway サービスがログオンするときに使用するユーザアカウントとパスワードを設定してください。HTTP Gateway は，設定したアカウントユーザに対する Windows の［インターネットオプション］の設定を利用して動作します。

ユーザアカウントを設定するとき，次のことに注意してください。

- アカウントユーザには Users 権限が必要です。ただし，HTTP Gateway をインストールする PC に Secure Socket Client がインストールされている場合は，PowerUser 以上の権限が必要です。
- Windows NT 4.0 の場合，HTTP Gateway のインストールディレクトリに対して，アカウントユーザに読み書きの権限を与えておく必要があります。
- 新規のユーザアカウントを作成した場合は，インストール後，いったんデスクトップからログオフして，作成したユーザアカウントでログオンし直す必要があります。

サービスの設定を変更する方法は，次のとおりです。なお，サービスの詳細については，Windows のマニュアルまたはヘルプを参照してください。

● **Windows Server 2003，Windows XP，および Windows 2000 の場合**

1. **［プログラム］メニューから［設定］－［コントロールパネル］－［管理ツール］－［コンピュータの管理］を選択する。**
   ［コンピュータの管理］ウィンドウが表示されます。
2. **ウィンドウ左枠で「サービスとアプリケーション」下の「サービス」を選択する。**
3. **ウィンドウ右枠で「JP1/NETM/DM HTTP Gateway Service」を右クリックし，表示されたメニューから［プロパティ］を選択する。**
   ［JP1/NETM/DM HTTP Gateway Service のプロパティ］ダイアログボックスが表示されます。
4. **必要に応じて，HTTP Gateway サービスの設定を変更する。**

● **Windows NT 4.0 の場合**

1. **［コントロールパネル］の［サービス］を開く。**
   ［サービス］ダイアログボックスが表示されます。
2. **リストボックスから「JP1/NETM/DM HTTP Gateway Service」を選択し，［スタートアップ］ボタンをクリックする。**
   HTTP Gateway サービスの設定が表示されます。
3. **必要に応じて，HTTP Gateway サービスの設定を変更する。**

(5) 下位システムのセットアップ

HTTP Gateway に接続する下位システムのセットアップ項目のうち，インターネットオプションを使用する場合に注意が必要な項目について説明します。セットアップ方法およびセットアップ項目の詳細は，「4.　JP1/NETM/DM Manager をセットアップする」，「5.　JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする」，または「6.　JP1/NETM/DM Client（クライアント）をセットアップする」を参照してください。

(a) 中継マネージャの場合

パネル名	項目名	説明
接続先	上位接続先ホスト名又はIP アドレス	HTTP Gateway を中継マネージャと同一マシンにインストールしている場合，HTTP Gateway および Internet Gateway を介して接続している上位システムのホスト名または IP アドレスを設定します。 HTTP Gateway と中継マネージャを別マシンにインストールしている場合は，HTTP Gateway をインストールしたマシンのホスト名または IP アドレスを設定します。
	中継マネージャと同一マシン上の HTTP Gateway を使用して接続する	HTTP Gateway を中継マネージャと同一マシンにインストールしている場合，オンに設定します。
通信関連	ポート番号 JP1/NETM/DM HTTP Gateway [netmdmgw]	HTTP Gateway を中継マネージャと同一マシンにインストールしている場合，HTTP Gateway と通信するときに使用するポート番号を指定できます。デフォルトは 22295 です。ほかのプログラムとの重複を避ける必要がある場合は，変更してください。 なお，netmdmgw ポートは，［サーバセットアップ］の［通信関連］タブで設定することもできます。
	通信ソフトからの応答待ち時間	Internet Gateway，HTTP Gateway，およびインターネットを介した通信は，配布管理システムに直接接続する場合に比べて，通信時間が長くなります。特にインターネット回線が細い場合のファイル転送では，この傾向が顕著となり，下位システム側で応答がないと判断され，通信エラーとなるおそれがあります。したがって，システムの規模，回線，および転送するファイルサイズを考慮して，値を設定する必要があります。応答待ち時間は，次の計算式で概算してください。その後，動作確認をして設定値を調整してください。応答待ち時間＝ T1 × Sp ※
クライアント常駐・ポーリング	ポーリングする	インターネットオプションを使用する場合，上位システムからのジョブの実行要求は下位システムに届きません。ジョブは，下位システムからの要求に対する応答としてだけ実行されます。このようなジョブの流れを考慮して，「ポーリングする」をオンにし，利用環境や条件に合わせてポーリングのタイミングを設定してください。ジョブの流れについては，「付録 E.2　インターネットオプションを介したジョブの流れ」を参照してください。

注※

T1：1 メガバイトのファイルを FTP などで転送したときに要した時間（単位：秒）

Sp：配布が予定されているパッケージの最大サイズ，または収集が予定されているファイルの最大サイズ（単位：メガバイト）

(b) 中継システムの場合

パネル名	項目名	説明
接続先	上位システム	HTTP Gateway および Internet Gateway を介して接続している上位システムの製品種別（JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager）を選択します。

パネル名	項目名	説明
	ホスト名又は IP アドレス	HTTP Gateway を中継システムと同一マシンにインストールしている場合，HTTP Gateway および Internet Gateway を介して接続している上位システムのホスト名または IP アドレスを設定します。 HTTP Gateway と中継システムを別マシンにインストールしている場合は，HTTP Gateway をインストールしたマシンのホスト名または IP アドレスを設定します。
	複数の上位システムへポーリングする	この項目をオンに設定する場合，優先順位 1 位には，次のマシンを指定する必要があります。 • HTTP Gateway を中継システムと同一マシンにインストールしているときは，HTTP Gateway および Internet Gateway を介して接続している上位システム。 • HTTP Gateway と中継システムを別マシンにインストールしているときは，HTTP Gateway をインストールしたマシン。 なお，HTTP Gateway を中継システムと同一マシンにインストールしている場合，優先順位 2 位以降のマシンは設定しても無視されます。
	中継システムと同一マシン上の HTTP Gateway を使用して接続する	HTTP Gateway を中継システムと同一マシンにインストールしている場合，オンに設定します。
通信関連	ポート番号 JP1/NETM/DM HTTP Gateway [netmdmgw]	HTTP Gateway を中継システムと同一マシンにインストールしている場合，HTTP Gateway と通信するときに使用するポート番号を指定できます。デフォルトは 22295 です。ほかのプログラムとの重複を避ける必要がある場合は，変更してください。
	通信ソフトからの応答待ち時間	Internet Gateway，HTTP Gateway，およびインターネットを介した通信は，配布管理システムに直接接続する場合に比べて，通信時間が長くなります。特にインターネット回線が細い場合のファイル転送では，この傾向が顕著となり，下位システム側で応答がないと判断され，通信エラーとなるおそれがあります。したがって，システムの規模，回線，および転送するファイルサイズを考慮して，値を設定する必要があります。応答待ち時間は，次の計算式で概算してください。その後，動作確認をして設定値を調整してください。応答待ち時間＝ T1 × Sp ※
クライアント常駐・ポーリング	ポーリングする	インターネットオプションを使用する場合，上位システムからのジョブの実行要求は下位システムに届きません。ジョブは，下位システムからの要求に対する応答としてだけ実行されます。このようなジョブの流れを考慮して，「ポーリングする」をオンにし，利用環境や条件に合わせてポーリングのタイミングを設定してください。ジョブの流れについては，「付録 E.2　インターネットオプションを介したジョブの流れ」を参照してください。

注※

T1：1 メガバイトのファイルを FTP などで転送したときに要した時間（単位：秒）

Sp：配布が予定されているパッケージの最大サイズ，または収集が予定されているファイルの最大サイズ（単位：メガバイト）

(c) クライアントの場合

パネル名	項目名	説明
接続先	接続先	HTTP Gateway および Internet Gateway を介して接続している上位システムの製品種別（JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM SubManager）を選択します。
	ホスト名又は IP アドレス	HTTP Gateway をインストールしたマシンのホスト名または IP アドレスを設定します。
	システム構成を自動登録する	インターネットを介したネットワーク環境では，システム構成の自動登録をしない運用をお勧めします。詳細は，「付録 E.3　運用上の注意事項」を参照してください。
通信関連	通信ソフトからの応答待ち時間	Internet Gateway，HTTP Gateway，およびインターネットを介した通信は，配布管理システムに直接接続する場合に比べて，通信時間が長くなります。特にインターネット回線が細い場合のファイル転送では，この傾向が顕著となり，下位システム側で応答がないと判断され，通信エラーとなるおそれがあります。したがって，システムの規模，回線，および転送するファイルサイズを考慮して，値を設定する必要があります。応答待ち時間は，次の計算式で概算してください。その後，動作確認をして設定値を調整してください。応答待ち時間＝ T1 × Sp ※
クライアント常駐・ポーリング	クライアントを常駐する	インターネットオプションでは，ジョブの実行要求を通しませんので，クライアントの常駐は不要です。
	ポーリングする	インターネットオプションを使用する場合，上位システムからのジョブの実行要求は下位システムに届きません。ジョブは，下位システムからの要求に対する応答としてだけ実行されます。このようなジョブの流れを考慮して，「ポーリングする」をオンにし，利用環境や条件に合わせてポーリングのタイミングを設定してください。ダイヤルアップ接続する場合は，課金なども考慮して，「時刻指定によるポーリング」を有効に活用してください。また，「ポーリングする」をオフにして，クライアントの［パッケージセットアップマネージャ］実行時，または［ジョブ実行］アイコン起動時だけ，回線を接続することも有効です。ジョブの流れについては，「付録 E.2　インターネットオプションを介したジョブの流れ」を参照してください。
ダイヤルアップ	ダイヤルアップ接続	HTTP Gateway の自動ダイヤリング機能を使用する場合は，オフに設定します。ただし，HTTP Gateway がクライアントと同一マシンにインストールされている場合，HTTP Gateway の自動ダイヤリング機能をオフにし，クライアントの設定をオンに設定することもできます。

注※

T1：1 メガバイトのファイルを FTP などで転送したときに要した時間（単位：秒）

Sp：配布が予定されているパッケージの最大サイズ，または収集が予定されているファイルの最大サイズ（単位：メガバイト）

付録 E.7　Internet Gateway と HTTP Gateway の停止方法

(1) Internet Gateway の停止方法

Internet Gateway を停止するには，次の二つの方法があります。どちらも，Microsoft

Internet Information Services を使用する方法です。

● **Microsoft Internet Information Services のサービスを停止する**

［インターネットサービスマネージャ］を使用して，Microsoft Internet Information Services の Web サイト自体を停止します。Internet Gateway 以外にも仮想ディレクトリが存在する場合，それらもすべて停止します。

● **Internet Gateway の仮想ディレクトリのアクセス制限をする**

Internet Gateway の仮想ディレクトリの［プロパティ］ダイアログボックスで，次の操作を実行することによって，Internet Gateway を停止できます。この場合，ほかの仮想ディレクトリには影響を与えません。

1. **［ディレクトリセキュリティ］タブの「IP アドレスとドメイン名の制限」で［編集］ボタンをクリックする。**
   ［IP アドレスとドメイン名の制限］ダイアログボックスが表示されます。
2. **「既定では，すべてのコンピュータからのアクセスを」「拒否する」を選択する。**

（2） HTTP Gateway の停止方法

HTTP Gateway を停止する必要がある場合は，コマンドラインで，HTTP Gateway をインストールしたディレクトリに移動し，次のコマンドを入力します。「STOP」は大文字で入力する必要があります。

```
dmhttpgw.exe /STOP
```

付録Ｆ　各バージョンの変更内容

（1）08-50 の変更内容

- Active Directory の情報を配布管理システムに取り込んで，ジョブのあて先に指定したり，インベントリビューアから参照したりできるようにした。
- ソフトウェアの稼働情報として，Web アクセスログ，印刷操作および外部メディア操作の履歴を取得できるようにした。また，印刷操作および外部メディア操作を抑止できるようにした。
- AMT に対応したコンピュータをクライアントとして使用している場合に，クライアントの BIOS をリモートコントロールできるようにした。また，配布管理システムにセットされた FD から，クライアントに対して診断プログラムを実行できるようにした。
- 適用 OS に Windows Server 2008 を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- マネージャと中継マネージャで，下位システムから通知された稼働情報を保存するかどうかを選択できるようにした。また，中継マネージャに通知された稼働情報を，上位システムに通知するかどうかを選択できるようにした。
- 稼働監視ポリシーをファイルに出力できるようにした。また，出力したファイルを読み込んで，稼働監視ポリシーを追加できるようにした。
- OS が 64 ビット版の Windows Vista のクライアントに対して稼働監視機能を使えるようにした。
- WSUS 3.0 と連携できるようにした。また，階層化構成の WSUS と連携する場合に，最上位の WSUS と下位の WSUS の同期，および下位の WSUS コンピュータグループへのクライアント登録を実行できるようにした。
- Windows のリモートデスクトップでの操作をサポートした。
- ソフトウェアインベントリ情報の更新日時を協定世界時（UTC）で管理できるようにした。
- Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client を中継システムとしても運用できるようにした。

（2）08-12 の変更内容

- OS が Windows Vista のクライアントに対して秘文連携機能を使えるようにした。また，秘文連携機能を利用できる秘文製品のバージョンに 07-80，08-01 を追加した。

（3）08-11 の変更内容

- WUA 3.0 を利用して，クライアントのパッチ情報を取得できるようにした。

- 「Asset Information Manager Limited」から，業務目的に合わせてインベントリ情報を集計できるようにした。
- Microsoft .NET Framework 3.0 に対応し，無線 LAN 環境のクライアントに対して「AMT 連携機能」を使用できるようにした。
- 取得できるシステム情報に，セキュリティ関連の項目を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。また，各ウィルス対策製品で常駐 / 非常駐が判定される機能を記載した。
- ソフトウェア情報の取得時に，日立プログラムプロダクトの情報を「アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索」で取得できるようにした。
- OS が Windows Vista のクライアントから，ファイル操作の操作履歴を取得できるようにした。
- 操作履歴の格納先および退避先のディレクトリに，ネットワークドライブを使用できるようにした。
- 秘文で取得した操作ログを，［操作ログ一覧］ウィンドウで管理できない旨を削除した。
- パッチを取得する機能で使用するデータベースの領域を，データベースマネージャで作成できるようにした。また，パッチを取得できるプログラムの種類に，Windows Mail を追加した。
- Embedded RDB の，データベースの領域サイズのデフォルト値，最小値および最大値を変更した。また，データベースマネージャで，Embedded RDB の作業表領域のサイズを指定できるようにした。
- Embedded RDB のデータベース見積もり式に，稼働監視履歴の計算式を追加した。
- Microsoft SQL Server のデータベース見積もり式に，レジストリ取得項目の計算式を追加した。
- 対象製品にバンドル版の JP1/NETM/DM Client を追加した。
- インストール完了時に Readme を表示するチェックボックスを削除した。
- ログの世代管理数およびエントリ数を設定できないログファイルを記載した。
- 次に示す Embedded RDB 用のコマンドで，リターンコードが出力されるようにした。
  - netmdb_backup.bat
  - netmdb_reload.bat
  - netmdb_reorganization.bat
  - netmdb_unload.bat
- JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能で，VPN 環境などの探索経路上に SNMP に応答しないルータがある場合にも，ホストを探索できるようにした。
- 「Asset Information Manager Limited」のバックアップ手順を記載した。

- ソフトウェア情報の取得時に，［アプリケーションの追加と削除］または［プログラムの追加と削除］に登録されているソフトウェアについては，インストール日時を取得できるようにした。
- テキスト入力のユーザインベントリ項目の場合に，「'」を入力できるようにした。
- あて先グループの自動メンテナンスを使用して，ユーザインベントリ情報を基にあて先グループを作成する場合に，あて先グループ名として使用できる文字数の上限を，半角で 32 文字（全角 16 文字）に修正した。
- JP1/NETM/DM にトラブルが発生した場合に，コマンドでトラブル情報を取得できるようにした。
- 次に示すイベント ID のイベントログメッセージを追加した。
  - 11026
  - 11027
  - 11028
  - 16029
  - 16030

  また，監視をお勧めするイベントログメッセージに，イベント ID「16030」のイベントログメッセージを追加した。
- メッセージ ID「KDSF0098-W」の対処方法を変更した。

（4） 08-10 の変更内容

- JP1/Base と連携して，JP1/NETM/DM を使用するユーザを管理できる機能を追加した。
- ソフトウェアの稼働状況の監視機能で，クライアントでのソフトウェアの稼働時間を取得できるようにした。また，取得した稼働時間を［ソフトウェア稼働状況］ウィンドウで集計する機能を追加した。
- ［ファイル操作トレース］ウィンドウで，操作ログを追跡調査できるようにした。
- Microsoft 社から提供される更新プログラムや Service Pack などのパッチを取得できる機能を追加した。
- クライアントへ HTML 形式のメッセージを通知する機能を追加した。
- JP1/NETM/DM Manager の操作を監査ログとして出力できる機能を追加した。
- ［操作ログ集計］ウィンドウで，部署ごとに操作ログを集計できるようにした。
- Windows Vista に対応した次のプログラムを対象製品に追加した。
  - JP1/NETM/DM Client
  - JP1/NETM/DM Client - Base
  - JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature
  - JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature

- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- 稼働監視ポリシーにバージョンおよび世代番号を付けて，どのバージョンの稼働監視ポリシーが適用されているかがわかるようにした。
- 中継システムに直接接続できるクライアント数の説明を変更した。
- データベース容量を見積もるための算出式の説明を，計算対象が明確になるように改善した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0096-W」の内容を変更した。
- AIT ファイル作成時に，パッケージ情報ツールから PP 識別情報ファイルを生成できるようにした。
- AIT ファイル編集時のメッセージ「AITG123-E」「AITG124-E」「AITG125-E」を追加した。

(5) 08-02 の変更内容

- AMT に対応したコンピュータをクライアントとして使用している場合に，次の機能を利用できるようにした。
  - AMT の電源制御の機能を利用したクライアントの制御
  - AMT 不揮発性メモリへのホスト識別子の保管
- 秘文連携機能でサポートする秘文についての説明を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- ［操作ログ一覧］ウィンドウから JP1/ 秘文の操作ログを参照できる対象製品として，JP1/ 秘文 CG Pro を追加した。
- あて先グループおよび ID の自動メンテナンスのポリシー情報が記述されたテキスト形式ファイルを入出力できるようにした。
- ID の自動メンテナンスのポリシー種別に，ユーザインベントリ項目を追加した。
- 「Asset Information Manager Limited」のセットアップおよびデータベースの作成方法を変更した。
- Embedded RDB の一部のデータベース項目についてデータ型を変更し，作成されるデータベース容量を削減した。
- 運用キーにホスト名を使用したクライアントが接続先の上位システムを名前解決できない場合に，受信した実行要求情報の IP アドレスを基に上位システムを名前解決して接続できる機能を追加した。
- JP1/NETM/DM Client をリモートインストールするときに，インストール中のダイアログを表示しないようにする設定を追加した。

(6) 08-00 の変更内容

- リレーショナルデータベースのプログラムに Microsoft SQL Server 2005 を使用できるようにした。
- JP1/NETM/DM Manager が標準提供するリレーショナルデータベースとして，「Embedded RDB」を使用できるようにした。また，簡易データベースを未サポートとした。
- ［検索］ダイアログボックスで，ホスト名または IP アドレスをキーにホストを検索できるようにした。
- あて先グループの自動メンテナンス機能で，クライアントの OS のサブバージョンごとにグルーピングできるようにした。
- ソフトウェアの稼働監視機能で，指定したソフトウェアおよびパスの起動を許可するか抑止するかを選択できるようにした。また，指定した項目以外のすべてのソフトウェアの起動を許可するか抑止するかを選択できるようにした。
- ソフトウェアの稼働監視機能で，ファイル操作時の履歴を取得できるようにした。
- クライアントの稼働情報を［操作ログ一覧］ウィンドウで参照できるようにした。
- WUA 2.0 を使用して適用済みパッチ情報を取得できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。また，英語版のクライアントが混在する場合，英語版の Microsoft Office 製品およびウィルス対策製品の情報も同時に取得できるようにした。
- 秘文連携機能を使って JP1/ 秘文または秘文をリモートインストールしたり，インストール済みの JP1/ 秘文または秘文の詳細情報を取得したりできるようにした。
- ［あて先の追加］ダイアログボックス，［パッケージの追加］ダイアログボックス，および［ジョブの保存］ダイアログボックスのサイズを変更できるようにした。
- ユーザインベントリ項目の選択項目の上限を，255 個から合計サイズ 51,254 バイトへ変更した。また，階層化されたユーザインベントリ項目の場合は，上位の項目と合わせて 102,509 バイトの上限も追加した。
- パッケージの分割配布で，中継システムから下位のシステムへの実行状況を上位システムで確認できるようにした。
- クライアントの接続先を自動で変更するタイミングに，ポーリング時を追加した。
- JP1/NETM/Client Security Control との連携時にクライアントセキュリティ管理を設定する機能を追加した。
- WWW ブラウザからの JP1/NETM/DM の管理機能，および WWW ブラウザからのクライアントインストール機能を未サポートとした。
- 差分情報の配布機能を未サポートとした。

（7）07-53 の変更内容

- WUA 2.0 を使用して未適用パッチ情報を取得できるようにした。
- WSUS と連携して，更新プログラムを管理できるようにした。
- 適用 OS に Windows Server 2003 (x64) を追加した。
- インストールディレクトリおよびワークディレクトリに「(」および「)」を指定できるようにした。
- システム構成情報に重複して登録されているホストを検索して，更新日時が古いホストを削除できるようにした。
- クライアントがポーリングを開始するタイミングを遅延させるオプションを追加した。
- ファイアウォール環境で JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition を使用する設定についての説明を追加した。
- 取得できるシステム情報の CPU 種別を追加した。
- ソフトウェア情報の取得時に，標準検索リストを使用するかどうかを選択できるようにした。
- UNIX のクライアントにパッケージを配布した場合で，外部プログラムを起動させたときに，外部プログラムの終了コードをサーバで参照できるようにした。
- JP1/NETM/DM からセキュリティ PC に，セキュリティ PC 用のアップデートデータをインストールできるようにした。
- 情報を取得できるウィルス対策製品を追加した。
- ［ジョブの作成］ダイアログボックスの［オプション］パネルの「検索除外ディレクトリ」，および［コレクトファイル］パネルの「収集パス名」に指定できる環境変数の説明を追加した。
- リモートインストールマネージャでソフトウェア情報として表示されるときに，形式が変換されるホットフィックスの名称を追加した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0060-I」「KDSF0090-I」の内容を変更した。
- クライアントの基本ログメッセージに「KDSF0097-I」「KDSF0098-W」「KDSF0099-E」を追加した。
- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client Light Edition を追加した。

（8）07-52 の変更内容

- リモートインストールマネージャの［ジョブ実行状況］ウィンドウに，JP1/NETM/CSC から実行した「メッセージの通知」ジョブを格納するフォルダを作成するようにした。

- ホスト探索時にホスト名を取得するかどうかを選択できるようにした。また，ホストの情報を取得する範囲を選択できるようにした。
- オフラインマシンから Microsoft Office 製品およびウィルス対策製品のインベントリ情報を取得できるようにした。
- 抑止履歴および操作履歴のバックアップを取得する方法についての説明を追加した。
- イベント ID「19003」のイベントログメッセージを追加した。

（9）07-50 の変更内容

- JP1/NETM/Client Security Control と連携して，システムのセキュリティ対策を強化できるようにした。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブで，コンピュータに適用されていないパッチの情報を取得できるようにした。それに伴って，コンピュータに適用されていないパッチの情報をリモートインストールマネージャで表示できるようにした。
  また，保守コード「3000EF300000」のイベントログメッセージを追加した。
- クライアントのソフトウェアの稼働状況を監視して，ソフトウェアの起動を抑止したり，操作履歴を取得したりできるようにした。それに伴って，抑止履歴および操作履歴をリモートインストールマネージャで表示できるようにした。
  また，イベント ID「16016」～「16020」のメッセージを追加した。
- 管理者からクライアントへ，メッセージを通知できるようにした。
- クライアントで更新されたインベントリ情報が，自動的に上位システムへ通知されるようにした。
- ID にポリシーを設定することで，新規に追加されたクライアントを自動的に ID へ登録できる，ID の自動メンテナンス機能を追加した。
- JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition を追加した。
- ネットワーク上に存在するホストを探索して，JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出できるようにした。
- JP1/NETM/Asset Information Manager がインベントリ情報の更新を監視するための情報を，データベースのテーブルに追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。また，適用 OS が Linux でバージョンが 07-50 以降のクライアントから，ウィルス対策製品の情報を取得できるようにした。
- リモートインストールマネージャで，ソフトウェア情報として表示されるホットフィックスの形式を改善した。
- 監視をお勧めするイベントログメッセージの要因と対処を追加した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0103-I」を追加した。

- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0060-I」「KDSF0092-E」の内容を変更した。
- JP1/NETM/DM が提供する AIT ファイルを追加した。

（10）07-11 の変更内容

- JP1/NETM/DM Client がインストールされている PC に，ネットワークを介さないでソフトウェアをインストールできるようにした。
- インストールセットを使用して JP1/NETM/DM Client を上書きインストールできるようになったため，インストールセットを使用する場合と WWW ブラウザからインストールする場合の違いを示す表から，上書きインストールについての記述を削除した。また，JP1/NETM/DM Client のセットアップ情報の設定方法に，インストールセットを使用して上書きインストールする場合の記述を追加した。
- ネットワーク内に存在するホストの情報が記述された CSV 形式ファイルを読み込むことで，JP1/NETM/DM がインストールされていないホスト（JP1/NETM/DM 未導入ホスト）を検出できるようにした。
- 取得できるシステム情報の CPU タイプに，7 種類の CPU を追加した。
- ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用方法についての説明を追加した。
- JP1/NETM/DM のクラスタシステムの OS として，Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition が対応していることを追加した。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブで，コンピュータに適用されているパッチの情報を取得できるようにした。
  また，リモートインストールマネージャおよびパッケージセットアップマネージャで，取得したパッチの情報を表示できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- ユーザインベントリ項目の作成時に，コメント欄に指定できない半角記号を「;」（セミコロン）だけにした。
- 「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブ作成時に，クライアントでユーザインベントリを設定するダイアログボックスのキャンセルの可否，およびクライアントでユーザインベントリを設定したあとの動作を設定できるようにした。
- 取得した Microsoft Office 製品およびウィルス対策製品の情報を，CSV 形式ファイルに出力できるようにした。
- AIT ファイルを作成および使用する場合の注意事項を追加した。
- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client の機能についての説明を追加した。
- JP1/NETM/DM が提供する AIT ファイルを追加した。

(11) 07-10 の変更内容

- JP1/NETM/Asset Information Manager の操作画面から，ソフトウェアの配布および配布状況の確認ができることを追加した。
- 「クライアント Web インストール」および「スタートアップキット機能支援ツール」がインストールされた PC に対しては，JP1/NETM/DM Client をインストールできないようにした。
- Administrator 権限を持たないユーザがログインしている JP1/NETM/DM SubManager でもリモートインストールができるようにした。
- パッケージを上書きインストールしようとしてエラーが発生した場合に，上書きされる側のインストール済みパッケージの情報を保管できるようにした。
- ネットワークアダプタの優先順位の設定に従って，クライアントの IP アドレスを上位システムに通知できるようにした。
- システム構成に含まれていないホストのインベントリ情報を削除できるようにした。
- 取得できるシステム情報に，Intel IPF シリーズの「Intel IPF CPU」および「Intel Itanium 2」を追加した。
- 取得できるシステム情報に，Windows Installer のバージョン情報「Windows Installer」を追加した。また，インベントリビューアで「Windows Installer」を集計できるようにした。
- JP1/NETM/DM のクラスタシステムの OS として，Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition を追加した。
- リモートインストールマネージャから，登録したツールを起動できるようにした。
- Windows Installer を使用してインストールするプログラムをサイレントインストールできるようにした。
- UNIX 版 JP1/NETM/DM Client 07-10 以降に対して，パッケージのインストール後に，クライアントマシンを自動的に再起動するかどうか指定できるようにした。
- ［ジョブ定義］ウィンドウで，［F5］キーを押して選択したジョブを実行したとき，確認ダイアログボックスが表示されるようにした。
- CPU クロック数の取得方式を変更した。
- ソフトウェア情報として取得できる Microsoft Office 製品を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- リモートインストールマネージャで，ソフトウェア情報として表示されるホットフィックスの形式を改善した。
- インベントリビューアで，「OS の言語」を集計できるようにした。
- 次のコマンドを JP1/NETM/DM SubManager で実行できるようにした。

dcmcoll.exe，dcminst.exe，dcmjbrm.exe，dcmjexe.exe，dcmpkrm.exe，dcmrmgen.exe，dcmrtry.exe，dcmstat.exe，dcmstsw.exe

- 保守コード「300097140000」および「30009F070000」のイベントログメッセージの要因と対処を変更した。
- 監視をお勧めするイベントログメッセージの要因と対処を記載した。
- JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM SubManager の機能差異についての記述を追加した。
- Windows Installer のモジュールを配布するための AIT ファイルを提供した。

(12) 07-00 の変更内容

- Windows 95 を JP1/NETM/DM Client の適用 OS 外とした。ただし，07-00 より前のバージョンの JP1/NETM/DM Client もバージョン 07-00 の上位システムに接続できるため，OS が Windows 95 の場合の説明をマニュアルに記載している。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブの検索対象ソフトウェアに，「Microsoft Office 製品を検索」と「ウィルス対策製品を検索」が追加された。また，これらの製品名，ウィルス定義ファイルのバージョン，およびウィルス対策製品の常駐設定別に，ホストの台数を集計できるようにした。
- ソフトウェアのインストーラに自動応答するスクリプトファイル，AIT ファイルが作成できるようになった。AIT ファイルは，配布するソフトウェアとともにパッケージングしてリモートインストールすると，ソフトウェアを自動インストールできる。
- 差分情報の取得および差分情報のパッケージングは，07-00 以降の JP1/NETM/DM では未サポートとした（なお，07-00 より前のバージョンの JP1/NETM/DM で作成した差分パッケージを使用することはできる）。
- クライアントの情報をローカルシステムビューアで確認できるようにした。
- クライアントのシステム監視をして，異常発生時にアラートをローカル PC や上位システムへ通知できるようにした。
- クライアントから通知されたアラートを，上位システムのアラート情報ファイル，イベントビューア，JP1/IM で確認できるようにした。
- クライアントセットアップのデフォルト値を変更した。
- ［リモートインストール　クライアント］アイコンおよび［リモートインストール　ログオンマネージャ］アイコンを，Windows の［スタートアップ］グループに作成しないようにした。
- ［NETM_DM_P スタートアップ］フォルダの作成を選択できるようにした。
- 接続先が未定の場合も，「?」を設定することで JP1/NETM/DM Client が動作するようにした。

- ジョブの中断と再開について，以下のことをできるようにした。
  - ファイル転送の中断ジョブおよびファイル転送の再開ジョブのあて先に，中継マネージャを指定できるようにした。
  - JP1/NETM/DM Manager のリモートインストールマネージャで，自システムとその下位システムとのファイル転送を中断および再開できるようにした。
  - UNIX 版の下位システムとの間で中断および再開できるようにした。
  - ファイル転送を中断および再開する dcmsusp コマンドを追加した。
- ［ジョブの配布属性］パネルで，ファイル転送が中断中でもジョブを配布するかどうか設定できるようにした。
- クライアントが非常駐の場合でも，一般ユーザ権限でログオンしたときに，クライアントでインストールできなかったパッケージをインストールできるようにした。
- JP1/NETM/DM の Version 7i へのアップグレードと同時にリレーショナルデータベースをアップグレードする場合の手順を追加した。
- ソフトウェア検索リストにバージョンを設定しない場合で，検索対象ファイルのバージョンリソースからバージョンを取得できなかったときは，バージョンに「0000」が設定されるようにした。
- ソフトウェア検索リストを使用した検索時に，サイズが 0 バイトのファイルも検索できるようにした。
- ［ジョブ実行状況］ウィンドウからインベントリビューアを起動し，あて先の詳細情報を表示できるようにした。
- ［システム構成］および［あて先］ウィンドウから集計を実行したとき，ホストおよびあて先グループの選択状態が，インベントリビューアの［対象選択］ウィンドウに反映されるようにした。また，［システム構成］および［あて先］ウィンドウから，テンプレートを指定して集計を実行できるようにした。
- ［JP1/NETM/DM アンアーカイバ］，［JP1/NETM/DM パッケージャ］，および［Package Setup Manager］ウィンドウのフォントを設定できるようにした。
- Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client を，Windows CE .NET 4.1 で利用できるようにした。

付録 G　用語解説

（数字）

64 ビット版 JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムで，OS が Windows Server 2003 (IPF) のコンピュータを，クライアントとして管理するために必要なプログラムです。

64 ビット版 JP1/NETM/Remote Control Agent

OS が Windows Server 2003 (IPF) のコンピュータを使用する場合に，リモートコントロールされる側にインストールするプログラムです。JP1 Version 7i の JP1/NETM/DM Client のリモートコントロールエージェントと同等の機能を持っています。

（英字）

AIT ファイル

専用のインストーラなどを使用して対話形式でソフトウェアをインストールするときの手順を記録したファイルで，Automatic Installation Tool を使用して作成します。JP1/NETM/DM では，一部の他社ソフトウェア用の AIT ファイルを提供しています。また，ユーザが AIT ファイルを作成することもできます。

Asset Information Manager Limited

JP1/NETM/DM で取得したインベントリ情報および操作ログを，目的に合わせて集計，検索できる GUI を提供するコンポーネントです。

「Asset Information Manager Limited」をインストールすることで，リモートインストールマネージャからソフトウェアの稼働情報を管理するウィンドウを起動することもできます。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合の，クライアントセキュリティ管理用の GUI も提供します。

Embedded RDB

JP1/NETM/DM Manager が提供する，組み込み型のリレーショナルデータベースです。JP1/NETM/DM Manager のインストール時に Embedded RDB を使用するかどうか選択できます。

ID

複数のクライアントあてにリモートインストールをするために，クライアントをグルーピングする方法の一つです。ID に所属するクライアントは，クライアントまたは配布管理システムで登録します。

ID 管理中継

ID ジョブおよび ID に属するクライアントを管理する中継マネージャまたは中継システムです。ID ジョブが実行されると，ID 管理中継は ID ジョブを自システムに保管し，この ID に属するクライアントに対してジョブを実行します。

ID ジョブ

あて先に ID を指定して実行するジョブです。

InstallShield 環境削除ツール

インストール環境を初期化するツールです。JP1/NETM/DM Client のインストール中にエラーが発生しインストールが中止された場合，再インストールする前に実行します。

JP1/AJS2

JP1/AJS2 は，業務を自動的に運用するためのプログラムです。処理を順序付けて定期的に実行したり，特定の事象が発生したときに処理を開始したりできます。

JP1/Base

JP1/IM の基盤機能を提供するプログラムです。
JP1 イベントの送受信や，ユーザの管理，起動の制御などをします。また，JP1/IM システムのエージェントとしての役割も持ちます。
JP1/Base は，JP1/IM - Manager の前提プログラムです。

JP1/Cm2 または HP OpenView

ネットワークの障害管理，構成管理および性能管理を実現するプログラムの総称です。

JP1/IM

JP1/IM は，分散システムを集中的に監視するためのプログラムです。分散システム内での業務の実行状況や障害などの情報は，JP1 イベントとして，JP1/IM に送られます。JP1/IM は，JP1 イベントを登録，管理し，システム管理者の端末に表示します。

JP1/NetInsight II -PortDiscovery

ネットワークに接続している機器の情報を収集し，ネットワークの構成の一覧を作成するプログラムです。ネットワークに接続されている機器の種別や IP アドレスなどの情報を一覧形式で確認できます。また，定期的にネットワークの構成情報を収集したり，不正な接続を監視したりすることもできます。

JP1/NETM/Asset Information Manager

ネットワーク装置を含めたハードウェア情報，ソフトウェア情報，契約情報などをデータベースに一元管理することで，資産の導入，ソフトウェアのライセンス管理，機器の保守などに伴う IT 資産管理業務の合理化および管理コストの低減を支援するプログラムです。

JP1/NETM/Audit - Manager

内部統制の有効性を評価するために必要な証跡記録を一元管理し，内部統制の報告書作成や監査業務を支援するプログラムです。ユーザ情報やシステム構成の変更などの証跡記録を利用して，業務の正当性を確認したり，リソースへの操作やアクセス状況を監査したりできます。

JP1/NETM/DM システム

JP1/NETM/DM がインストールされたホストで構成されるネットワーク全体のことです。

JP1/NETM/DM 未導入ホスト

JP1/NETM/DM がインストールされていないホストです。

JP1/秘文 CG Pro

Microsoft Office 文書を暗号化して専用の USB メモリに格納し，持ち出した Microsoft Office 文書を USB メモリにインストールされた専用ツールでしか閲覧・編集できないようにする製品です。JP1/ 秘文 CG Pro を使用することで，外部に持ち出した USB メモリからの情報流出を防止できます。JP1/ 秘文と連携して操作ログを取得する場合，管理対象のクライアントにインストールします。

JP1/秘文 IC

データを暗号化する製品です。JP1/ 秘文の操作ログを取得する場合，管理対象のクライアントにインストールします。

JP1/秘文 IF

データを外部媒体に格納して持ち出すことを禁止（または許可）する製品です。JP1/ 秘文の操作ログを取得する場合，管理対象のクライアントにインストールします。

JP1/秘文 IS

ファイルサーバと連携して，ファイルサーバ上の共有機密フォルダに対するアクセスを制御する製品です。JP1/ 秘文の操作ログを取得する場合，管理対象のクライアントにインストールします。

JP1 イベント

システム内で何らかの事象が発生した際に，その事象に関して JP1/Base に通知される情報です。

JP1 ユーザ

JP1/Base と連携してユーザ管理をする場合に，JP1/NETM/DM のユーザ認証に使用するアカウントの名称です。JP1/Base がインストールされた認証サーバで設定します。JP1 ユーザは，JP1/IM や JP1/AJS2 でのユーザ認証にも使用されています。

Microsoft SQL Server

Windows NT 上で動作する，Microsoft 社のリレーショナルデータベース管理システムです。JP1/NETM/DM の情報を管理するリレーショナルデータベース管理システムとして，Microsoft SQL Server が使用できます。

SQL

リレーショナルデータベース用の言語の一種です。構造化照会言語とも呼ばれます。

Visual Test

Windows 環境で動作するアプリケーションプログラムのデバッグ作業を支援するプログラムです。

Wake on LAN

Wake on LAN は LAN で接続されたネットワーク上のマシンに対して，ネットワーク経由でほかのマシンからリモートで起動するための規格です。

Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムで，OS が Windows CE の PDA を，クライアントとして管理するために必要なプログラムです。

Windows Server 2008 • Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムで，OS が Windows Server 2008 および Windows Vista のコンピュータ

を，クライアントとして管理するために必要なプログラムです。また中継システムとしても使用できます。

（ア行）

アーカイブ

複数のファイルを一つにまとめることです。

あて先グループ

複数のクライアントあてにリモートインストールするためにクライアントをグルーピングする方法の一つです。業務や組織ごとなど配布目的に合わせ，配布管理システムからホストをグルーピングします。

アプリケーションゲートウェイ方式

ファイアウォール実現方式の一つです。パケットの中継を禁止して，アプリケーションゲートウェイでアクセスを制御します。外部から内部にアクセスする場合には，ゲートウェイのログインとパスワードを入力させ，内部に直接アクセスできないようにします。

アラート通知

「アラート」とは，プログラムから表示されるメッセージの一つです。ユーザの操作によって，何らかの問題や重大なエラーが発生するおそれのある場合，ユーザに対して注意を促したり警告を与えたりするために表示されます。

JP1/NETM/DM では，クライアントのシステム監視中にハードウェアの異常などを検知した場合に，ポップアップメッセージなどでユーザに通知することを「アラート通知」と呼びます。

アンアーカイバ

リモートコレクト時に，アーカイブされたファイルや，圧縮されたファイルを元の形式に復元するためのプログラムです。

インストールスクリプト

インストール処理の手順を記述したスクリプトで，クライアントで実行します。パッケージを作成するときに，自動的に生成されます。ユーザ独自のインストールスクリプトを作成してユーザ固有の処理をすることもできます。

インストールソフトウェア情報

「Asset Information Manager Limited」で，各機器にインストールされているソフトウェアを管理するための情報です。

インストールソフトウェア情報は，配布管理システムで管理しているインベントリ情報などを「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込んで利用するための情報です。

そのため，ソフトウェアの名称およびバージョンは，JP1/NETM/DM など，情報の取り込み先で管理されている内容となります。

インストールソフトウェアリスト

「Asset Information Manager Limited」で，各機器にインストールされているソフトウェアの名称を管理するための情報です。また，インストールソフトウェアに対する各種設定を管理するためにも使用します。

インストールタイミング

パッケージをクライアントにインストールするタイミングです。クライアントの起動時にインストールする「システム起動時インストール」，またはパッケージがクライアントに転送された時点でインストールする「通常インストール」を選択できます。

インストールモード

クライアントでのパッケージのインストール方法です。インストーラを使用する「GUI インストールモード」，インストーラを使用しないでファイルのコピーだけでインストールする「バックグラウンドインストールモード」の 2 種類があります。

インベントリ情報

クライアントでのハードウェアの使用状況やインストールされているソフトウェアの種類など，クライアントの管理に必要な情報です。インベントリ情報は，配布管理システムからジョブを実行して取得します。

インベントリビューア

クライアントから取得したインベントリ情報の表示や集計ができるウィンドウで，多様なレポート機能を持っています。JP1/NETM/DM Manager で使用できます。

オフラインインストール

インストール媒体を使用することで，ネットワークを介さないでソフトウェアをインストールする機能です。

オフラインフォルダ

オフラインマシンから取得したインベントリ情報および稼働情報を管理するフォルダです。［システム構成］ウィンドウおよび［あて先］ウィンドウに，「{OFFLINE}」という名称で表示されます。

オフラインマシン

JP1/NETM/DM のシステム構成情報に登録していない，Windows のクライアントです。例えば，次のような PC です。

- スタンドアロンで使用していて，JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールしている PC
- ネットワーク内で JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールしているが，JP1/NETM/DM のシステム構成情報に登録していない PC

なお，オフラインマシンからもインベントリ情報と稼働情報を取得できます。また，オフラインマシンにソフトウェアをインストールすることもできます。

オフラインマシン情報

オフラインマシンから取得したインベントリ情報と稼働情報のことです。

（カ行）

外部メディア操作

ソフトウェアの稼働状況の監視対象の一つです。USB 接続メディア，内蔵 CD/DVD ドライブ，内蔵 FD ドライブ，IEEE 1394 接続メディア，および内蔵 SD カードスロットを介した書き込みまたは読み出しを，外部メディア操作として抑止します。

また，これらの外部メディアの接続および切断（取り外し）を，外部メディア操作の履歴として取得します。ただし，内蔵 FD ドライブの操作は履歴取得の対象外となります。

稼働監視ポリシー

ソフトウェアの稼働状況を監視する場合に設定する条件です。起動を抑止するソフトウェアや，履歴を取得する操作を設定します。

監査ログ

JP1 製品が共通で出力するログです。「だれが」，「いつ」，「どのような操作を実行したか」を示します。出力された監査ログは JP1/NETM/Audit - Manager で管理され，システムの内部統制の評価と監査に利用されます。

キャビネット

配布管理システムにあるパッケージを保管するための領域です。

業務フィルター

「Asset Information Manager Limited」で，ユーザ権限に応じて，操作画面から実行できる処理を制限する機能です。
各操作画面の構成要素（ボタン，検索条件，編集項目など）を，ユーザ権限に応じて変更します。

クライアント

JP1/NETM/DM Client（クライアント）がインストールされたマシン，または JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能がインストールされたマシンのことです。配布管理システムから直接，または中継するシステムを介してリモートインストールされるソフトウェアを受信し，自システムにインストールしたり，インストール結果を配布管理システムへ通知したりできます。

クライアント制御

ネットワーク経由で，手元の PC から離れた場所にある PC を起動したり，シャットダウンしたりする機能です。この機能を使って，JP1/NETM/DM では，深夜や休日などの電源が入っていない状態の PC に対してソフトウェアをリモートインストールできます。クライアント制御を利用するには，PC が AMT または Wake on LAN に対応し，さらに自動シャットダウンに対応していることが必要です。

検索パターン

［操作ログ一覧］ウィンドウで操作ログを検索するための検索条件を保存したものです。主な検索目的に使用する検索パターンは，デフォルトで登録されています。また，デフォルトで登録されている検索パターンを編集したり，新規に登録したりすることもできます。

更新プログラム

Microsoft Update で提供される，OS や Microsoft Office 製品などの更新プログラムです。JP1/NETM/DM で適用情報を収集できる「パッチ」も，更新プログラムに含まれます。

コレクトスクリプト

クライアントが実行するリモートコレクト処理の手順を記述したスクリプトです。Windows の上位システムからリモートコレクトする場合は，ジョブ作成時に自動的に作成されます。UNIX の上位システムからリモートコレクトする場合は，クライアント側のユーザが独自にコレクトスクリプトを作成することによって，ユーザ固有の処理をさせることができます。

コレクトファイル

クライアントからリモートコレクトで収集したファイルです。

（サ行）

削除ソフトウェア管理テーブル

ソフトウェアインベントリ辞書から削除したソフトウェアの情報が登録される内部テーブルです。「ファイルを検索」を指定して「ソフトウェア情報の取得」ジョブを実行した場合，各ホストから通知されるソフトウェア情報が削除ソフトウェア管理テーブルに登録されているときは，ソフトウェアインベントリ辞書には追加されません。また，各ホストのソフトウェアインベントリ情報にも追加されません。

資源登録システム

リモートインストールするソフトウェアを配布管理システムに登録するプログラムです。Windows の JP1/NETM/DM システムのパッケージャに相当します。UNIX の JP1/NETM/DM の用語です。

資産情報

「Asset Information Manager Limited」で，ハードウェアおよびソフトウェアを管理するための情報です。

システム監視

あらかじめ設定した条件に従って，クライアントが特定のハードウェアの状態を監視する機能です。システム監視中は，ローカルシステムビューアの［システム監視の状態］パネルに監視対象の状態が表示されます。また，監視対象に異常が発生した場合は，アラートメッセージやアイコンの変化によってユーザにアラートを通知します。クライアントが上位システムに接続している場合は，上位システムへアラートを通知することもできます。

［システム監視］アイコン

タスクバーの通知領域に表示されるアイコンです。アイコンの状態から，システム監視機能の状態とアラート通知の有無が確認できます。また，［システム監視］アイコンをダブルクリックすると，ローカルシステムビューアを起動できます。

［システム監視］アイコンを表示するには，クライアントセットアップの［システム監視］パネルで，「システム監視アイコンをタスクバーの通知領域に表示する」を選択します。

システム情報

JP1/NETM/DM システムを構成するホストのハードウェアの情報です。配布管理システムからジョブを実行して取得します。

自動メンテナンスポリシーファイル

あて先グループおよび ID の自動メンテナンスのポリシーが記述されたテキスト形式ファイルです。

集計

JP1/NETM/DM Manager で管理している情報の種類ごとに，該当するホストの数を表示する機能です。リレーショナルデータベースで情報を管理しているときに使用できます。

上位システムアドレス格納ファイル

ホスト名と IP アドレスの対応が記述された設定ファイルです。ホスト名運用のクライアントが上位

システムを名前解決できないときに，上位システムの IP アドレスを認識するために使用されます。

ジョブ

JP1/NETM/DM の機能の実行単位です。ジョブには次の 21 種類があります。

- パッケージのインストール
- 中継システムまでのパッケージ転送
- 中継システムのパッケージ一括削除
- リモートコレクト
- 中継までのリモートコレクト
- 中継サーバからのコレクトファイル収集
- 中継サーバのコレクトファイル削除
- クライアントユーザによるインストール
- システム構成情報の取得
- システム情報の取得
- ソフトウェア情報の取得
- ユーザインベントリ情報の転送
- ユーザインベントリ情報の取得
- レジストリ取得項目の転送
- 中継サーバからの結果通知保留
- 中継サーバの結果通知の保留解除
- ファイル転送の中断
- ファイル転送の再開
- メッセージの通知
- ソフトウェア稼働監視の制御
- ソフトウェア稼働情報の取得

セキュリティ PC

ハードディスクや FD などの外部記憶装置を持たない，最低限の機能だけを備えた PC です。エージェントに接続してアプリケーションソフトやファイルをリモートコントロールできます。セキュリティ PC 用のアップデートデータは，JP1/NETM/DM を使ってリモートインストールできます。

全あて先

あて先の種類の一つです。マネージャから中継マネージャ配下のホストすべてに対してジョブを実行するときに指定します。

操作履歴

クライアントで操作されるソフトウェアおよびファイルの情報です。操作履歴には，次の種類があります。

- プロセスの起動
- プロセスの停止
- キャプションの変更
- アクティブウィンドウの変更
- マシンの起動 / 停止
- ログオン / ログオフ
- ファイル操作
- Web アクセス
- 印刷操作
- 外部メディア操作

操作ログ

JP1/NETM/DM で取得した抑止履歴，操作履歴，および JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに格納されているユーザ操作ログを，［操作ログ一覧］ウィンドウで確認する際，表示される情報をまとめて操作ログと呼びます。

［操作ログ一覧］ウィンドウ

配布管理システムで取得したクライアントの稼働情報のうち，ソフトウェアの起動や印刷操作の抑止履歴，およびソフトウェアやファイルの操作履歴を，さまざまな条件で抽出し，参照できる画面です。

ソフトウェアインベントリ辞書

JP1/NETM/DM で管理するソフトウェアを設定する辞書です。「ファイルの検索」で取得したソフトウェアの中から，管理対象とするソフトウェアを選択できます。また，インベントリビューアでライセンスを管理する場合に必要な，ライセンス情報を設定できます。

ソフトウェア検索リスト

ソフトウェア情報の取得に使用するリストです。JP1/NETM/DM が標準提供する「標準検索リスト」と，ユーザが任意に編集できる「ユーザ指定検索リスト」があります。

ソフトウェア情報

JP1/NETM/DM システムを構成するホストにインストールされているソフトウェアの情報です。配布管理システムからジョブを実行して取得します。

（タ行）

中継システム

配布管理システムとクライアントの間で，リモートインストールやインベントリ情報の収集などのジョブを中継する JP1/NETM/DM Client のことです。

中継するシステム

配布管理システムとクライアントの間で，リモートインストールやインベントリ情報の収集などのジョブを中継するプログラムの総称です。

中継マネージャ

配布管理システムを階層化したシステムで，最上位の配布管理システム（マネージャ）の配下に位置する JP1/NETM/DM Manager のことです。配布管理システムとクライアントの間で，リモートインストールやインベントリ情報の収集などのジョブを中継できます。

重複ホスト

ホスト識別子を使用して運用している場合に，ホスト識別子が再生成されたためにシステム構成情報に重複して登録された，同一のホストのことです。

ディレクトリ情報

Active Directory から取得するユーザ情報やコンピュータ情報のことです。取得したディレクトリ情報は，ジョブのあて先に指定したり，インベントリビューアでクライアントの情報を参照するために使用したりできます。

データベースマネージャ

データベースマネージャには，JP1/NETM/DM Manager 用と「Asset Information Manager Limited」コンポーネント用の 2 種類があります。

JP1/NETM/DM Manager 用のデータベースマネージャは，JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つで，JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースを作成したり，メンテナンスをしたりできます。

「Asset Information Manager Limited」コンポーネント用のデータベースマネージャは，「Asset Information Manager Limited」のサブコンポーネントで，「Asset Information Manager Limited」のリレーショナルデータベースを作成したり，メンテナンスをしたりできます。

ドメイン

ネットワーク内のホストおよびユーザを管理する単位です。

（ナ行）

認証サーバ

JP1/Base を使用した，JP1 ユーザのアクセス権限を管理するサーバです。一つのユーザ認証圏に 1 台設置する必要があります。このサーバを利用して JP1 ユーザを一括で管理します。JP1/Base と連携して JP1/NETM/DM のユーザを管理する場合，JP1 ユーザをこのサーバに登録する必要があります。

ネットワーク構成情報ファイル

ネットワークに接続されているホストの IP アドレス，MAC アドレス，サブネットマスクなどの情報を記述した CSV 形式ファイルです。

ネットワーク情報

「Asset Information Manager Limited」で，各機器のネットワーク上の位置を管理するための情報です。ネットワーク情報は，「IP アドレス」，「MAC アドレス」，「ノード名」，「コンピュータ名」などを表します。

（ハ行）

配布管理システム

リモートインストールするソフトウェアを保管し，リモートインストールの実行を指示するプログラムです。リモートインストールの状況や結果，各ホストにインストールしてあるソフトウェアなどを確認できます。

パケットフィルタリング方式

ファイアウォールを通過するパケットを制限する，ファイアウォール実現方式の一つです。内部から外部へのアクセスは許可して，外部から内部へのアクセスは禁止するといった運用ができます。また，インターネットにアクセスする端末を限定できます。

パッケージ

リモートインストールをするソフトウェアの単位です。パッケージは，配布管理システムのキャビネットに保管されます。

パッケージ種別

パッケージの種類を示します。「ユーザプログラム，データ」，「日立プログラムプロダクト」，および「他社ソフトウェア」の 3 種類があります。

パッケージセットアップマネージャ

配布管理システム，または中継システムから受け取ったソフトウェアを，クライアント側で任意に選択してインストールするための機能です。インストールを拒否したり，インストール先のディレクトリを変更したりできます。

パッケージャ

リモートインストールするソフトウェアを配布管理システムに登録するプログラムです。

パッケージング

パッケージャを使用して，パッケージを作成することです。

パッチ情報ファイル

Microsoft 社のサーバからパッチを取得するための情報が記載されたファイルです。JP1/NETM/DM でパッチを取得する場合に必要です。パッチ情報ファイルは，JP1/NETM/DM が日立 Web サーバに接続して取得します。Microsoft 社からのパッチの提供状況に応じて更新されます。

日立 Web サーバ

Microsoft 社からパッチを取得するために必要な，パッチ情報ファイルを提供するサーバです。日立 Web サーバは，弊社サポートサービスが提供しています。日立 Web サーバへの接続には，弊社サポートサービスの契約による認証情報が必要です。

秘文連携機能

AIT ファイルを使用して，インストール済み JP1/ 秘文および秘文の詳細情報を取得したり，JP1/ 秘文および秘文のインストール可否をチェックしたりする機能です。また，JP1/ 秘文および秘文関連のログも収集できます。

ファイアウォール

インターネットと内部システムの境界に設置して，外部からの不正なアクセスが内部システムへ侵入することを防ぐものです。

複数 LAN 接続

複数の LAN で構成されたシステムに対応する JP1 の機能です。この機能を使うと，複数の LAN に接続されたホスト上で，JP1 の通信に使う LAN を設定できます。システムやほかのアプリケーションとは別に JP1 独自に通信設定できるので，多様なネットワーク構成や運用方法に柔軟に対応できます。なお，複数の LAN に接続したホストを，マルチホームホストや複数 NIC のホストと呼ぶこともあります。

JP1/NETM/DM では，次の複数 LAN 接続の環境での運用をサポートしています。

- 複数のネットワークに分かれている環境
- ネットワークが多重化されている環境

部署情報

「Asset Information Manager Limited」で，資産管理システムを利用する部門など，組織を管理するための情報です。部署情報は，「部署名」，「部署コード」，「原価コード」などを表します。

分割配布

ネットワークに負荷を掛けないためにユーザが指定したサイズで分割して転送し，かつ転送と転送の間にインターバル（転送休止時間）を置きながら配布する方法です。サイズは，セットアップ時とジョブの作成時，さらにパッケージの転送途中の中継地点でも指定できます。大容量のパッケージを配布する場合に有効です。

変更履歴

「Asset Information Manager Limited」で，機器のメモリサイズやディスク容量の変更を管理するための情報です。CPU，メモリ，ディスクが物理的に不当に変更されていないかどうかを確認できます。

変更履歴は，「変更日付」，「ディスク容量」，「メモリサイズ」，「CPU」などを表します。

ホスト

JP1/NETM/DM での操作の対象となる，ネットワークを構成する PC または WS です。

ホスト識別子

システム内でホストを一意に識別できるキーです。ネットワーク構成に左右されないため，システム管理者がホストを管理する負担を軽減できます。ホスト識別子を利用するにはリレーショナルデータベースが必要です。

ホスト探索

指定したネットワークの範囲内に存在するホストを探索する機能です。JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出するときに実行します。

ポリシー

システム構成情報の自動反映機能によって新規にシステム構成に追加されたホストを，自動的にあて先グループまたは ID に振り分けるために，あらかじめ設定しておく条件です。

（マ行）

マネージャ

配布管理システムを階層化しているシステムで，システムの最上位に位置する JP1/NETM/DM Manager のことです。

マルチキャストアドレス

各マルチキャストグループに固有の IP アドレスです。マルチキャスト配布の送信側と受信側のセットアップで設定します。

マルチキャストグループ

マルチキャスト配布をするとき，ジョブの配布先となる概念上のグループです。マルチキャストアドレスというグループ固有の IP アドレスを持っています。上位システムがマルチキャストグループにジョブのパケットを送信すると，そのグループに所属している各クライアントに，パケットが配信されます。

マルチキャスト配布

ジョブの配布方式の一つです。IP マルチキャストプロトコルを利用して，上位システムから特定多

数のクライアントへパケットを送信します。クライアントの数に関係なく，上位システムはマルチキャストグループ 1 か所だけにジョブのパケットを送信すればよいため，通信量を削減できます。

未適用パッチ情報

クライアントに適用されていないパッチの情報です。JP1/NETM/DM では，次の情報を未適用パッチ情報として扱います。

- Microsoft Update によって提供されるセキュリティに関する更新プログラムのうち，クライアントに適用されていない更新プログラムの情報
- MBSA の mbsacli.exe コマンドを実行したスキャン結果のうち，最新のパッチが見つからなかった情報（スキャン結果で「NOT Found」と表示される情報）

（ヤ行）

ユーザインベントリ項目

ユーザインベントリ情報の入力項目です。配布管理システムで作成したユーザインベントリ項目は，ジョブを実行してクライアントに配布します。

ユーザインベントリ情報

クライアント独自の情報（氏名や PC の製造番号など）です。配布管理システムからジョブを実行して取得します。

ユニキャスト配布

ジョブの配布方式の一つです。上位システムからクライアントへ 1 対 1 でパケットを送信します。上位システムは，送信先のクライアントごとにジョブのパケットを送信する必要があるため，パケットの送信数は，クライアント数の増加に対応して増大します。

抑止履歴

クライアントで，ソフトウェアの起動，および印刷が抑止された履歴です。

（ラ行）

リモートインストール

パッケージングされたソフトウェアを，配布管理システムからクライアントシステムに転送し，インストールする機能です。

リモートインストールマネージャ

配布管理システムの GUI 部分のプログラムです。

リモートコレクト

クライアントにあるファイルを，配布管理システムに収集する機能です。配布管理システムから指示します。

リモートコントロール

配布管理システムから，クライアントを遠隔操作する機能です。

リモートコントロールエージェント

リモートコントロールで，リモートコントロールマネージャから遠隔操作される側の PC で実行させるプログラムです。

リモートコントロールマネージャ

リモートコントロールで，リモートコントロールエージェントの遠隔操作を指示する側のプログラムです。

リレーショナルデータベース

JP1/NETM/DM Manager の情報の管理に使用するデータベースです。Embedded RDB，Microsoft SQL Server，または Oracle を使用できます。

レコーダファイル

専用のインストーラなどを使用して対話形式でソフトウェアをインストールするときの手順を記録したファイルです。JP1/NETM/DM では，一部の他社ソフトウェア用のレコーダファイルを提供しています。また，ユーザがレコーダファイルを作成することもできます。

ローカルシステムビューア

クライアントのハードウェアやソフトウェアに関する情報が参照できるウィンドウで，システム監視の状態，アラート履歴，システム情報，およびインストールされたソフトウェアが表示されます。これらの情報は，クライアントが上位システムと接続していなくても閲覧できるため，クライアントユーザによるローカルなシステム管理に利用できます。

索引

数字

1 ページに表示する検索結果の件数 447
64 ビット版 JP1/NETM/DM Client（用語解説） 619
64 ビット版 JP1/NETM/Remote Control Agent（用語解説） 619

A

[AIM 関連] パネル 140
AIT ファイル（用語解説） 619
AMT 連携機能の設定 46,83
[AMT 連携] パネル 142
[AMT 連携] パネル（中継システムセットアップ） 177
Asset Information Manager Limited（用語解説） 619
Asset Information Manager Limited で表示できるインベントリ情報 526
Asset Information Manager Limited の仮想ディレクトリの設定 47
Asset Information Manager Limited のサーバをセットアップする 442
Asset Information Manager Limited のデータベースをセットアップする 465
Asset Information Manager Limited をインストールする 58
Asset Information Manager Limited を使用するための設定 437
Asset Information Manager Limited をセットアップする 438

D

[Directory 連携] パネル 139

E

Embedded RDB（用語解説） 619
Embedded RDB 環境でデータベースを再編成する（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合） 490
Embedded RDB 環境でデータベースをバックアップする（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合） 485
Embedded RDB 環境でデータベースをリストアする（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合） 489
Embedded RDB を使用している場合のデータ移行 549

H

HP-UX JP1/NETM/DM NNM 連携機能 575
HTTP Gateway 578,584
HTTP Gateway のインストール 592
HTTP Gateway の設定 591
HTTP Gateway のセットアップ 595
HTTP Gateway の停止方法 607
HTTP ゲートウェイ 578
HTTP 設定 589

I

ID（用語解説） 619
ID 管理中継 329
ID 管理中継（用語解説） 619
ID 管理中継およびパスワードの変更 340
ID 管理中継から ID を削除する 342
ID 管理中継からクライアントを ID に登録する 338
ID 管理中継として定義されている中継システムが削除された場合の例 345
ID 管理中継として定義されている中継システムの接続先を変更した場合の例 347
ID 管理中継として定義されている中継システムの名称を変更した場合の例 349
ID 管理中継へ ID を登録する 341
[ID 管理中継への ID の登録・削除] ダイアログボックス 341
[ID グループの編集] フォルダ 343

ID ジョブ 331
ID ジョブ（用語解説） 620
ID ジョブのクライアント実行結果の記録（サーバセットアップ） 121
ID ジョブのクライアントの実行結果を記録する（中継システムセットアップ） 167
ID 登録先（中継マネージャセットアップ） 146
ID 登録先システム（中継システムセットアップ） 162
ID に登録されたクライアントの接続先を変更した場合の例 348
ID に登録されたクライアントの名称を変更した場合の例 350
ID に登録されたクライアントを削除した場合の例 346
ID に登録したクライアントの削除 341
ID の運用手順 330
ID の運用方法 329
ID の削除 340
ID の作成 334
[ID の作成] ダイアログボックス 334
ID の自動メンテナンス 390
ID の自動メンテナンス運用時の注意事項 395
[ID の属性変更] ダイアログボックス 340
ID のポリシーを設定する 390
ID ファイルを作成する 337
[ID へホストを追加] ダイアログボックス 339
ID を作成する 329
ID を使用する場合の注意事項 342
ID をファイルに出力する 338
InstallShield 環境削除ツール 101
InstallShield 環境削除ツール（用語解説） 620
Internet Gateway 578,583
Internet Gateway のインストール 586
Internet Gateway の設定 586
Internet Gateway のセットアップ 588
Internet Gateway の停止方法 606
IP アドレスを利用する 523
ISAPI の制限の設定 511
ISAPI フィルタの設定 511

J

jamdbexport.bat 483
jamemb_backup.bat 488
jamemb_reorganization.bat 492
jamemb_workcomp.exe 493
JP1/AJS2（用語解説） 620
JP1/Base（用語解説） 620
JP1/Cm2 シンボル一括追加 128
JP1/Cm2 または HP OpenView（用語解説） 620
JP1/Cm2 連携機能との接続用ポート番号の設定 52
JP1/Cm2 連携機能のインストール手順 62
JP1/Cm2 連携機能の設定 50
JP1/Cm2 連携機能を使用する 128
JP1/Cm2 連携機能をセットアップする 154
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバとの接続用ポート番号の設定 51
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバの設定 52
[JP1/Cm2 連携] パネル 127
JP1/IM（用語解説） 620
JP1/NetInsight II -PortDiscovery（用語解説） 620
JP1/NETM/Asset Information Manager（用語解説） 620
JP1/NETM/Audit - Manager（用語解説） 620
[JP1/NETM/CSC 連携] パネル 136
JP1/NETM/DM Client（クライアント）および JP1/NETM/DM Client - Base（クライアント）のコンポーネント 6
JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップの流れ 182
JP1/NETM/DM Client（中継システム）および JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）のコンポーネント 5
JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップの流れ 158
JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする 157

JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品のコンポーネント 8
JP1/NETM/DM Client - Base のオプション製品をインストールする 89
JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature のインストール 93
JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature のインストール 90
JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature のインストール 96
JP1/NETM/DM Client のインストール 66
JP1/NETM/DM Client のインストール手順 67
JP1/NETM/DM Client のデータを移行する 548
JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）のデータを移行する 548
JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）のデータを移行する 548
JP1/NETM/DM Manager のコンポーネント 4
JP1/NETM/DM Manager のセットアップの流れ 104
JP1/NETM/DM Manager をセットアップする 103
JP1/NETM/DM NNM 連携機能のアンインストール 575
JP1/NETM/DM NNM 連携機能のインストール 575
JP1/NETM/DM NNM 連携機能のセットアップ 576
JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する 410
JP1/NETM/DM システム（用語解説） 620
JP1/NETM/DM 接続ホスト名の設定 50
JP1/NETM/DM データベース接続サービス名 452
JP1/NETM/DM データベースログイン ID 451
JP1/NETM/DM で削除された資産の機器状態 457
JP1/NETM/DM のインストールの概要 1
JP1/NETM/DM の上書きインストール 10
JP1/NETM/DM の適用 OS 2
JP1/NETM/DM のバージョンアップ 542
JP1/NETM/DM のバージョンアップと移行方法 542
JP1/NETM/DM 未導入機器の取り込み 452
JP1/NETM/DM 未導入ホスト（用語解説） 620
[JP1/NETM/DM 未導入ホスト検出] ダイアログボックスの操作 412
JP1/NETM/DM 未導入ホストとして検出される条件 410
JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出方法 411
JP1/NETM/DM 連携の設定（Asset Information Manager Limited のサーバセットアップの場合） 451
JP1/NETM/DM をアンインストールする 21
JP1/NETM/DM を新規にインストールする場合の手順 9
JP1/ 秘文 CG Pro（用語解説） 621
JP1/ 秘文 IC（用語解説） 621
JP1/ 秘文 IF（用語解説） 621
JP1/ 秘文 IS（用語解説） 621
JP1/ 秘文データベース接続サービス名 458
JP1/ 秘文データベースログイン ID 458
JP1/ 秘文との連携設定 457
JP1/ 秘文連携の設定（Asset Information Manager Limited のサーバセットアップの場合） 457
JP1 イベント（用語解説） 621
JP1 ユーザ（用語解説） 621

L

LIKE 検索時の大文字小文字の区別（Embedded RDB） 445

M

Microsoft Internet Information Services 6.0 以降を使用する場合の設定 506
Microsoft Internet Information Services で設定する場合の注意事項 589
Microsoft SQL Server（用語解説） 621

N

NETM_DM_P スタートアップ 82
NETM_DM_P スタートアップフォルダを作成する 224
NETM_DM_P スタートアップへの移行 224

O

OS バージョンアップ時のデータ移行 546

P

PC リプレース時のデータ移行 547

R

rimfindn.log 362

S

SQL（用語解説） 621

T

taskopt.ini 517

V

Visual Test（用語解説） 621

W

Wake on LAN（用語解説） 621
Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client（用語解説） 621
Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client（用語解説） 621
WSUS 連携機能のインストール手順 61
WSUS 連携機能の設定 48
[WSUS 連携] パネル 137

あ

アーカイブ（用語解説） 622
あて先グループ（用語解説） 622
あて先グループにポリシーを一括反映する 385
あて先グループの作成方法の種類 320
あて先グループの作成例 326
あて先グループの編集 326
あて先グループのポリシーを設定する 374
あて先グループファイル 321,328
あて先グループファイルを作成する 321
あて先グループ名の変更 326
あて先グループを [あて先] ウィンドウで作成する 323
あて先グループを作成する 320
あて先グループをファイルから作成する 321
あて先グループをファイルに出力する 323
あて先グループを変更する 325
[あて先の作成] ダイアログボックス 324
あて先を編集するときの注意事項 326
アドレス解決できないあて先へのジョブ（サーバセットアップ） 125
アドレス解決できないあて先へのジョブ（サーバのインストール） 43
アドレス解決できないあて先へのジョブ（中継システムセットアップ） 173
アドレス解決できないあて先へのジョブ（中継システムのインストール） 79
アドレス解決の方法（サーバセットアップ） 124
アドレス解決の方法（中継システムセットアップ） 172
アプリケーション（仮想ディレクトリ）の設定 510
アプリケーションゲートウェイ方式（用語解説） 622
アプリケーションプールの作成（Microsoft Internet Information Services 6.0 の場合） 506
アプリケーションプールの作成（Microsoft Internet Information Services 7.0 の場合） 509
アラート通知（用語解説） 622
アンアーカイバ（用語解説） 622
アンインストール 21
アンインストール結果受信による削除 408
アンインストール時の注意事項 21
アンインストール手順 21

い

以前の接続先システムに対応するパッケージ情報を削除する 218
一般ユーザ権限 82
一般ユーザ権限で使用する 227
[イベントサービス] パネル（サーバセットアップ） 128
[イベントサービス] パネル（中継システムセットアップ） 173
イベントビューアへ出力するメッセージ種別 208
インストール・収集 217
インストール・収集リトライ回数 217
インストール・収集リトライ間隔 217
[インストールオプション] パネル 216
インストールシールドからの応答待ち時間 220
インストールスクリプト（用語解説） 622
インストールセット 13
インストールソフトウェア情報（用語解説） 622
インストールソフトウェア情報として取得できるインベントリ情報 534
インストールソフトウェアリスト（用語解説） 622
インストールソフトウェアリストとして取得できるインベントリ情報 535
インストールタイミング（用語解説） 623
インストールモード（用語解説） 623
インターネットオプションの機能 578
インターネットオプションを介したジョブの流れ 580
インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM のシステム構成 583
インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入 578
インターバル転送をする（サーバセットアップ） 112
インターバル転送をする（中継システムセットアップ） 163
インベントリ情報（用語解説） 623
インベントリ情報の引き当て方法の設定 458
インベントリ情報も通知する 188,203
インベントリビューア（用語解説） 623

う

ウィルス定義情報として取得できるインベントリ情報 538
運用管理者からのシャットダウンまたは再起動許可 212
運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する 212
運用キー 453
運用キーの設定（サーバのインストール） 42
[運用キー] パネル（サーバセットアップ） 123
[運用キー] パネル（中継システムセットアップ） 171
運用キー別の資産情報の引き当て方法 462
運用規模ごとのデータ量の目安 251
運用上の注意事項 581

お

オプション製品のインストール手順 89
オプション製品の前提コンポーネント 89
オフラインインストール（用語解説） 623
オフラインフォルダ（用語解説） 623
オフラインマシン（用語解説） 623
オフラインマシン情報（用語解説） 623

か

下位クライアントの資源情報を記録する 166
下位システムの起動を監視する 116
下位システムのセットアップ 603
下位システムの同時実行要求数 115
下位システムのファイル転送エラーを監視する 116
外部メディア操作（用語解説） 623
確認ダイアログの表示時間 212
仮想ディレクトリを設定する（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合） 502
[稼働監視] パネル 133
稼働監視ポリシー（用語解説） 624
環境設定オプションのチューニング 238

監査ログ（用語解説） 624
[監査ログ] パネル 143
監視間隔 456
管理者による削除 408
管理ファイルのキャッシュ上限サイズ 166

き

キー項目（サーバセットアップ） 124
キー項目（中継システムセットアップ） 172
キー項目を変更する場合の注意事項 125
機器に部署名を設定する 524
起動失敗要因を細分化する 116
起動プロトコル（サーバセットアップ） 112
起動プロトコル（中継システムセットアップ） 163
基本情報の設定（Asset Information Manager Limited のサーバセットアップの場合） 446
キャビネット（用語解説） 624
業務フィルター（用語解説） 624

く

クライアント（用語解説） 624
[クライアントアラート] パネル（サーバセットアップ） 131
[クライアントアラート] パネル（中継システムセットアップ） 175
クライアントから ID に登録する 336
[クライアント常駐・ポーリング] パネル 193
クライアント制御（用語解説） 624
クライアントを削除する方法 361
クライアントを常駐する 194
クラスタシステム環境を再構築する場合の手順 573
クラスタシステムに必要なプログラム 559
クラスタシステムを使用する場合の注意事項 571
[クラスタ設定] パネル 127

け

[結果記録オプション] パネル 119
[権限] パネル 227
検索結果の一覧表示行数 447
検索したホストを [あて先] ウィンドウにコピーする 360
検索したホストをシステム構成情報から削除する 361
検索パターン（用語解説） 624
検索用接続コネクション数 445

こ

更新がないクライアントを自動的に削除する 369
更新プログラム（用語解説） 624
コレクトスクリプト（用語解説） 624
コレクトファイル（用語解説） 625
コンポーネント情報として取得できるインベントリ情報 536
コンポーネントの構成 4

さ

サーバ 595
[サーバカスタマイズオプション] パネル 113
[サーバセットアップ] ダイアログボックス 442
サーバ通知ファイルの送信タイミング 147
サーバをセットアップする 105
サービスの作成 240
サービスの設定 505
サービスの設定（HTTP Gateway） 602
サービスの設定（サーバのインストール） 42
[サービスの設定] ダイアログボックス 594
サービス名 444
サイトの追加（Microsoft Internet Information Services 6.0 の場合） 507
サイトの追加（Microsoft Internet Information Services 7.0 の場合） 512
削除したクライアントの情報を参照する 361
削除ソフトウェア管理テーブル（用語解説） 625
削除日時 408
削除要因 407

[削除履歴の CSV 出力] ダイアログボックス 408
作成日時 356

し

資源登録システム（用語解説） 625
資産情報（用語解説） 625
資産情報として取得できるインベントリ情報 527
資産情報の引き当て 1 454
資産情報の引き当て 2 455
資産情報の引き当てキー 453
システム監視（用語解説） 625
[システム監視] アイコン（用語解説） 625
[システム監視] パネル 208
システム構成から削除 361
[システム構成関連] パネル（サーバセットアップ） 122
[システム構成関連] パネル（中継システムセットアップ） 170
システム構成情報と ID の連携時の注意事項 350
システム構成情報と ID の連携例 344
システム構成情報と ID を連携させる運用 344
システム構成情報の削除履歴 123
[システム構成情報の削除履歴] ダイアログボックス 407
システム構成情報の削除履歴を管理する 407
システム構成情報の自動登録方法 303
システム構成情報の自動反映（サーバセットアップ） 122
システム構成情報の自動反映（中継システムセットアップ） 170
システム構成情報の自動メンテナンス 369
システム構成情報の自動メンテナンス運用時の注意事項 372
システム構成情報の自動メンテナンスのログファイル 372
システム構成情報の手動メンテナンス 354
システム構成情報の手動メンテナンスの例 362
「システム構成情報の取得」ジョブの実行方法 312
システム構成情報のバックアップ 307
システム構成情報のリストア 307
システム構成情報ファイル 327
システム構成情報ファイルを作成する 307
システム構成情報編集時の注意事項 306
システム構成情報を作成する 300
システム構成情報を [システム構成] ウィンドウで作成する 310
システム構成情報を自動的に作成する 303
システム構成情報を自動登録する場合に必要な TCP/IP 環境の設定 303
システム構成情報を自動登録する場合の注意事項 304
システム構成情報をファイルから作成する 307
システム構成情報をファイルに出力する 309
システム構成情報を変更する 314
システム構成情報を変更するときの注意事項 318
システム構成についての注意事項 585
システム構成の自動登録機能 303
システム構成の自動登録機能の設定 313
システム構成変更時の連携（サーバセットアップ） 122
システム構成変更時の連携（中継システムセットアップ） 171
システム構成を自動登録する 188,203
システム構築時の注意事項 306
システム情報（用語解説） 625
実行要求を送信した上位システムを接続先に自動設定する 187
自動メンテナンスポリシーファイル 397
自動メンテナンスポリシーファイル（用語解説） 625
自動メンテナンスポリシーファイルの入出力方法 397
自動メンテナンスポリシーファイルの編集方法 398
集計（用語解説） 625
上位システム 161

上位システムアドレス格納ファイル（用語解説）625
上位システムからの起動要求プロトコル 200
上位システムに送信していない通知ファイルをリトライ送信する 205
上位システムに対する，ジョブの受信とサーバ通知ファイルの送信を並行実行する 148
上位システムのセットアップ 591
上位システムへの未送信通知ファイル 205
上位接続先 146
[上位通知] パネル（中継システムセットアップ）167
[上位通知] パネル（中継マネージャセットアップ）146
上位マネージャの指示による削除 408
[障害関連] パネル（クライアントセットアップ）206
[障害関連] パネル（サーバセットアップ）130
初期化パラメタファイルのチューニング 241
ジョブ（用語解説）626
[ジョブオプション] パネル 210
ジョブのインストール / 収集待ち通知を抑止する 214
ジョブの実行結果の記録 120
ジョブ保留機能 211
ジョブを削除する時刻を指定する 115
ジョブを保留する 211
処理中ダイアログ（クライアントのインストール）82
[処理中ダイアログ] パネル（クライアントセットアップ）188
新規検出結果を保留にする 117
新規に追加されたクライアントを管理する例 362

す

[スタートアップ関連] パネル 223
スタートアッププログラムを移行する 224

せ

セキュリティ 597
セキュリティ PC（用語解説）626
セッション情報の設定（Asset Information Manager Limited のサーバセットアップの場合）446
接続先（Internet Gateway）588
接続先（クライアントセットアップ）186
接続先以外からファイル転送の中断・再開ジョブを受け付ける 116
接続先以外の定期実行ジョブを抑止する 213
接続先の設定（パッケージャ）49,84
接続先の設定（リモートインストールマネージャ）45
[接続先] パネル（クライアントセットアップ）185
[接続先] パネル（中継システムセットアップ）160
[接続先] パネル（中継マネージャセットアップ）145
[接続する JP1/NETM/DM Manager] パネル 154
設置場所削除用の「ゴミ箱」設置場所 ID 448
設置場所情報として取得できるインベントリ情報 539
設置場所別 IP グループを使用した設置場所の設定 449
セットアップ項目の確認 601
[セットアップ] ダイアログボックス 440
[セットアップの保護] パネル 225
全あて先（用語解説）626
全あて先ジョブのクライアント実行結果の記録 121

そ

操作履歴（用語解説）626
操作ログ（用語解説）627
[操作ログ一覧] ウィンドウ（用語解説）627
操作ログ一覧の検索期間の警告 450
操作ログの検索結果取得件数 450
[属性の変更] ダイアログボックス 316
ソケットコネクション 204
ソフトウェアインベントリ辞書（用語解説）627

ソフトウェア検索リスト（用語解説）627
ソフトウェア情報（用語解説）627
ソフトウェア操作履歴格納ディレクトリの設定 40

た

ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用 555
ダイアログ表示時間 211
ダイアログを表示するプログラム 190
ダイナミックインベントリを通知する 213
ダイヤルアップ（HTTP Gateway）599
ダイヤルアップ接続の MAC アドレス 455
[ダイヤルアップ] パネル（クライアントセットアップ）198
[ダイヤルアップ] パネル（サーバセットアップ）112
[ダイヤルアップ] パネル（中継システムセットアップ）164
ダウンロード時にサイズチェックする 218
多数のクライアントを削除する場合の注意事項 361
タスクスケジューラに登録されるタスクの設定 514
タスク「データメンテナンス」で実施する作業の指定 515
タスクの削除 521
タスクの実行結果 521
タスクの種類 514
タスクのスケジュールの変更 520
タスクの設定手順 519
タスクを有効にする 519

ち

中継 / クライアントの同時実行要求数 166
中継システム（用語解説）627
[中継システムカスタマイズオプション] パネル 165
中継システムであて先を誤って追加した場合の削除方法 306
中継システムでの ID の運用方法 334
中継するシステム（用語解説）627
中継マネージャ（用語解説）627
中継マネージャでの ID の管理 332
中継マネージャの基本設定をセットアップする 145
中継マネージャの詳細設定をセットアップする 151
中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する 311
中継マネージャ配下のシステム構成情報を変更する 317
重複しているクライアントを削除する例 367
重複しているクライアントを自動的に削除する 371
重複しているホストの検索方法 359
重複ホスト（用語解説）627

つ

通信エラー 205
通信エラー発生時のリトライ回数 205
通信エラー発生時のリトライ間隔 205
[通信関連] パネル（クライアントセットアップ）199
[通信関連] パネル（サーバセットアップ）111
[通信関連] パネル（中継システムセットアップ）162
通信設定 598
通信ソフトからの応答待ち時間 201
[通信リトライ] パネル 203
[通知ダイアログ] パネル 192

て

定期実行ジョブ 213
ディレクトリ情報（用語解説）627
ディレクトリの参照の設定 512
データキャッシュ 237
データソースまたはネット・サービスを作成する（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合）494
データベースインスタンスの作成 240
データベース環境のチューニング 237
[データベース環境] パネル 107

データベース上の不要なインベントリ情報を削除する 274
データベース情報の設定（Asset Information Manager Limited のサーバセットアップの場合）443
データベースの種類の変更 545
データベースの設定 35
データベースのパスワードを変更する（Embedded RDB）272
データベースの容量概算（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合）478
データベースマネージャ 243,277,465
データベースマネージャ（用語解説）628
データベースを CSV 形式ファイルからリストアする（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合）484
データベースを CSV 形式ファイルでバックアップする（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合）481
データベースをアップグレードする（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合）479
データベースをアップグレードする（Embedded RDB）255
データベースを再編成する（Embedded RDB）267
データベースを新規作成する（Asset Information Manager Limited のデータベースの場合）467
データベースを新規作成する（Embedded RDB）245
データベースを新規作成する（Microsoft SQL Server または Oracle の場合）279
データベースをバックアップから復元する（Embedded RDB）265
データベースをバックアップする（Embedded RDB）261
適用 OS 2
転送休止時間（クライアントセットアップ）218
転送休止時間（サーバセットアップ）112
転送休止時間（中継システムセットアップ）164

と

同時接続下位システム数の設定 44
同時接続コネクション数 445
同時に接続できる下位システム数 114
同時に接続できるクライアント数 165
同時利用ログイン数 446
ドメイン（用語解説）628
トランザクションログ 239
トランザクションログの設定（Microsoft SQL Server）239
取り込む情報の種別 456

な

[名前の変更] ダイアログボックス 316

に

認証サーバ（用語解説）628

ね

ネットワーク構成情報ファイル（用語解説）628
ネットワーク情報（用語解説）628
ネットワーク情報として取得できるインベントリ情報 533
[ネットワーク接続] パネル 135
ネットワークプロトコルの設定 236

は

ハードウェア資産情報として取得できるインベントリ情報 530
配布管理システム（用語解説）628
配布管理システムからファイルを使ってクライアントを ID に登録する 336
配布管理システムを階層化したシステムでの ID の運用方法 331
パケットサイズ（サーバセットアップ）119
パケットサイズ（中継システムセットアップ）170

パケットフィルタリング方式（用語解説） 628
パスワードを設定する 226
パッケージ（用語解説） 628
パッケージ種別（用語解説） 629
パッケージセットアップマネージャ（用語解説） 629
パッケージのインストールエラー時にインストール履歴を保管する 218
パッケージの分割配布（クライアントセットアップ） 217
パッケージャ（用語解説） 629
パッケージング（用語解説） 629
パッチ情報として取得できるインベントリ情報 537
パッチ情報ファイル（用語解説） 629
パッチリストとして取得できるインベントリ情報 537
ハンドラマッピングの設定 512

ひ

引き当たらなかった資産の新規登録 455
非常駐でジョブ実行またはパッケージセットアップマネージャを使用する 228
日立 PP インストールワークディレクトリをインストール時に作成・削除する 219
日立 Web サーバ（用語解説） 629
日付によるホストの検索方法 356
必要なプログラムとシステム構成（リレーショナルデータベース） 230
秘文連携機能（用語解説） 629
表示件数欄の表示 447

ふ

ファイアウォール（用語解説） 629
ファイルからあて先グループを作成する 322
ファイルからシステム構成情報を作成する 309
ファイル転送バッファサイズ 200
ファイルを使ってクライアントを ID に登録する 338
複数 LAN 接続（用語解説） 629
複数の上位システムへのポーリング形態 197
複数の上位システムへポーリングする 162, 187
複数のネットワークアダプタを設定する 201
複数の配布管理システムで同じ ID を管理する場合 332
部署削除用の「ゴミ箱」部署 ID 447
部署情報（用語解説） 629
部署情報として取得できるインベントリ情報 539
部署単位で操作ログを集計するための設定 523
部署別 IP グループを使用した部署の設定 448
不要なクライアントを削除する例 366
プロキシ 596
プロキシおよびファイアウォール 585
プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成 2
プロシージャキャッシュ 237
分割サイズ 218
分割配布（用語解説） 630

へ

変更履歴（用語解説） 630

ほ

ポート番号（クライアントセットアップ） 199, 222
ポート番号（サーバセットアップ） 111, 118
[ポート番号] パネル（JP1/Cm2 連携機能セットアップ） 154
ポーリング 194
ポーリングする 194
ポーリングのタイミング 195
保管期限 331
ホスト（用語解説） 630
ホスト識別子（用語解説） 630
ホスト識別子の使用 126
ホスト識別子を使用する場合の注意事項 126
ホスト探索（用語解説） 630
[ホストの作成] ダイアログボックス 310

ホストの属性を変更する 316
ホストの登録 324
ホストの編集 326
ホスト名が重複した場合 305
ホスト名の付け方 302
ホスト名または IP アドレスを変更する 316
ホスト名を 64 バイトまで設定できない NETM/DM システム 302
ホスト名を 64 バイトまで設定できないシステムが混在する場合 303
ホストを移動する 314
ホストを削除する 315
ホットスタンバイ 197
ポリシー（用語解説） 630
ポリシーの作成例 406
ポリシーをファイルから作成する 397

ま

マネージャ（用語解説） 630
マネージャでの ID の作成 331
マルチキャストアドレス（クライアントセットアップ） 223
マルチキャストアドレス（サーバセットアップ） 119
マルチキャストアドレス（中継システムセットアップ） 169
マルチキャストアドレス（用語解説） 630
マルチキャストグループ（用語解説） 630
マルチキャスト配布（用語解説） 630
マルチキャスト配布のジョブを受信する 222
マルチキャスト配布のジョブを送信する（サーバセットアップ） 118
マルチキャスト配布のジョブを送信する（中継システムセットアップ） 169
[マルチキャスト配布] パネル（クライアントセットアップ） 221
[マルチキャスト配布] パネル（サーバセットアップ） 117
[マルチキャスト配布] パネル（中継システムセットアップ） 168
マルチホスト 198

み

未適用パッチ情報（用語解説） 631

む

無通信監視時間 446

め

名称によるホストの検索方法 354
メッセージダイアログの表示 192
メモリ割り当ての設定 237
メンテナンスウィザード 19

や

役割サービスのインストール 508

ゆ

ユーザインベントリ項目（用語解説） 631
ユーザインベントリ項目によるグルーピング例（あて先グループの自動メンテナンス） 387
ユーザインベントリ情報（用語解説） 631
ユーザインベントリ情報を利用する 524
ユーザ管理の設定 45
ユーザ情報設定ダイアログの表示 193
ユニキャスト配布（用語解説） 631

よ

用語解説 619
抑止履歴（用語解説） 631

り

リトライ回数 205
リトライ間隔 205
リモートインストール（用語解説） 631
リモートインストール機能を使用して JP1/NETM/DM を配布する場合の注意事項 15
リモートインストールマネージャ（用語解説） 631
リモートインストールマネージャ機能のインストール手順 57

[リモートインストールマネージャ] パネル 174
リモートインストールマネージャをインストールする 56
リモートコレクト（用語解説） 631
[リモートコレクトオプション] パネル 220
リモートコレクトのジョブ 220
リモートコントロール（用語解説） 631
リモートコントロールエージェント（用語解説） 632
リモートコントロールエージェントの注意事項の確認（クライアントのインストール） 85
リモートコントロールエージェントの注意事項の確認（サーバのインストール） 53
リモートコントロールマネージャ（用語解説） 632
リレーショナルデータベース（用語解説） 632
リレーショナルデータベース使用時の注意事項 234
リレーショナルデータベースのクライアント 233
リレーショナルデータベースのサーバ 233
リレーショナルデータベースの新規作成（Microsoft SQL Server の場合） 279
リレーショナルデータベースの新規作成（Oracle の場合） 283
リレーショナルデータベースへ移行するときの制限 254
リレーショナルデータベースへの移行方法 254
リレーショナルデータベースを設定する 229

れ

レコーダファイル（用語解説） 632
連続転送バッファ数（サーバセットアップ） 112
連続転送バッファ数（中継システムセットアップ） 163

ろ

ローカルコンソールで JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合の制限 555
ローカルコンソールで使用している JP1/NETM/DM Client（クライアント）にソフトウェアをリモートインストールする方法 556
ローカルシステムビューア（用語解説） 632
ログイン ID 444
ログエントリ数 206
ログ情報 206
ログ世代管理数 206

わ

ワークディレクトリの設定（クライアントのインストール） 75
ワークディレクトリの設定（サーバのインストール） 32

ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内

１．マニュアル情報ホームページ

ソフトウェアマニュアルの情報をインターネットで公開しています。

URL　http://www.hitachi.co.jp/soft/manual/

ホームページのメニューは次のとおりです。

■マニュアル一覧	日立コンピュータ製品マニュアルを製品カテゴリ，マニュアル名称，資料番号のいずれかから検索できます。
■CD-ROMマニュアル	日立ソフトウェアマニュアルと製品群別CD-ROMマニュアルの仕様について記載しています。
■マニュアルのご購入	マニュアルご購入時のお申し込み方法を記載しています。
■オンラインマニュアル	一部製品のマニュアルをインターネットで公開しています。
■サポートサービス	ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開サービスを記載しています。
■ご意見・お問い合わせ	マニュアルに関するご意見，ご要望をお寄せください。

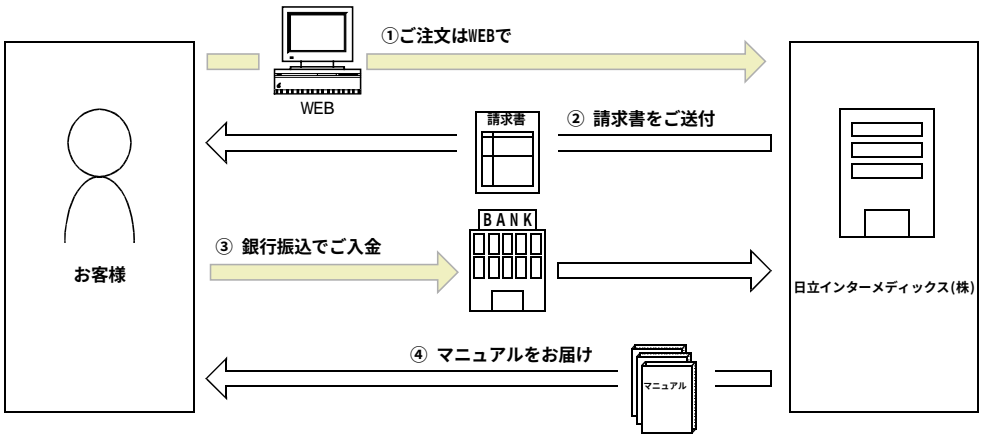
２．インターネットでのマニュアル公開

2 種類のマニュアル公開サービスを実施しています。

(1) マニュアル情報ホームページ「オンラインマニュアル」での公開
　製品をよりご理解いただくためのご参考として，一部製品のマニュアルを公開しています。

(2) ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開
　ソフトウェアサポートサービスご契約のお客様向けにマニュアルを公開しています。公開しているマニュアルの一覧，本サービスの対象となる契約の種別などはマニュアル情報ホームページの「サポートサービス」をご参照ください。

３．マニュアルのご注文



① マニュアル情報ホームページの「マニュアルのご購入」にアクセスし，お申し込み方法をご確認のうえ WEB からご注文ください。ご注文先は日立インターメディックス(株)となります。

② ご注文いただいたマニュアルについて請求書をお送りします。

③ 請求書の金額を指定銀行へ振り込んでください。

④ 入金確認後 7 日以内にお届けします。在庫切れの場合は，納期を別途ご案内いたします。